公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（11）

東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平良上（てらかみ）Ｃ遺跡

（曽於郡大崎町）

2017年3月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（鹿屋方面を望む）



縄文時代の土器

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）の建設に伴って，平成26年度と平成27年度に実施した曽於郡大崎町に所在する平良上Ｃ遺跡の発掘調査の記録です。

平良上Ｃ遺跡は曽於郡大崎町に所在し，縄文時代を中心に調査を行いました。なかでも，縄文時代早期の住居跡・集石・土坑・連穴土坑や遺構内外から出土した遺物は，遺跡の周辺や大隅半島における当時の人々の生活を解明する手がかりとなるものと期待されます。

本報告書が県民の皆様や研究者をはじめとした多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心と御理解をいただくとともに，文化財保護の普及啓発の一助となれば幸いです。

最後に，発掘調査から報告書刊行まで御協力頂きました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，大崎町教育委員会等の関係各機関並びに発掘調査や報告書作成においてご指導を頂きました方々に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成29年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　　堂込秀人

報 告 書 抄 録

ふ り が な	てらかみしーいせき
書　　名	平良上Ｃ遺跡
副　書　名	東九州自動車道建設（志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シ リ ー ズ 名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 11 集
編 集 者 名	倉元良文　　稲垣友裕　　樋口めぐみ　　森えりこ
編 集 機 関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所　在　地	〒 899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号 TEL 0995-70-0574　　FAX 0995-70-0576
発 行 年 月	西暦 2017 年３月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 （㎡）	調査起因
てらかみしーいせき 平良上Ｃ遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曽於郡 おおさきちょう 大崎町	46468	468-70	31° 27′ 03″	131° 00′ 30″	試掘調査 2013.01.08 2013.12.12 2014.01.23 本調査 ①2014.11.04～ 2015.03.10 ②2015.07.13～ 2015.08.21	5,905	東九州自動車道建設（志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間）に伴う発掘調査

所収遺跡名	種　別	時　代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平良上Ｃ遺跡	集落	縄文時代 早期	竪穴住居跡６軒 竪穴遺構　２基 連穴土坑　３基 土坑　15 基 集石　34 基 土器集中　１か所 チップ集中１か所	岩本式土器，加栗山式土器，吉田式土器，石坂式土器，中原式土器，下剥峯式土器，桑ノ丸式土器，押型文土器，平栫式土器，塞ノ神式土器，苦浜式土器，石鏃，石斧，石核，石匙，削器，掻器，石錐，楔形石器，凹石，砥石，石錘，磨石，敲石，剥片，線刻礫等	

遺跡の概要	本遺跡は縄文時代早期を主体とし，多くの遺構・遺物が調査区全体から確認された。 遺跡のほぼ中央に位置する丘を取り囲むように 30 基以上の集石が検出され，周辺からは遺物が多量に出土した。また，丘から東側へ緩やかに下るやや離れた平坦面からは竪穴住居跡や連穴土坑などが検出されたが，遺物の出土は少ない状況であった。このことから，当時の集落構造を紐解く上で良好な資料である。 出土した土器は下剥峯式土器が圧倒的に多く，円筒形以外の器形の存在を窺わせる屈曲部を持つ土器片，上面観が直線的に伸びる口唇部を持つ土器片等が 20 点以上確認された。



平良上Ｃ遺跡位置図（1：25,000）

例　言

1　本書は，東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う平良上Ｃ遺跡発掘調査報告書である。

2　平良上Ｃ遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町井俣 2521 番地に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）へ調査委託し，埋文調査センターが実施した。

4　発掘調査事業は，平成 26 年度から平成 27 年度まで埋文調査センターが実施し，すべてを完了した。

5　整理・報告書作成事業は，平成 27 年度から平成 28 年度まで埋文調査センター第一整理作業所で実施した。

6　掲載遺物番号は通し番号であり，本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。掲載遺構番号は，遺構の種類ごとに番号を付し，本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。

7　遺物注記等で用いた遺跡記号は「TRC」である。

8　挿図の縮尺は，挿図ごとに示した。

9　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

10　本書で使用した方位はすべて磁北である。

11　発掘調査における実測図作成及び写真撮影は，主として調査担当者が行った。また，空中写真の撮影は，ふじた航空写真に委託した。

12　本書に係る遺構実測図の作成及びトレースは平木場秀男及び稲垣友裕が，遺物出土状況図の作成は，森えりこ及び倉元良文が整理作業員とともに行った。

13　本書に係る出土遺物の実測・トレースは，土器を倉元が，石器を樋口めぐみが担当し，整理作業員とともに行った。

　また，遺物実測〈石器〉の一部を（株）パスコ及び大福コンサルタント（株）に委託し，平木場及び樋口が監修した。

14　出土遺物の写真撮影は，吉岡康弘及び辻明啓が行った。

15　本報告に係る自然科学分析は，放射性炭素年代測定・種実同定を（株）加速器分析研究所に，テフラ分析をパリノ・サーヴェイ（株）に委託した。

16　本書の執筆は次のように分担し，編集は倉元・樋口・森が行った。

第Ⅰ章～第Ⅲ章　平木場

第Ⅳ章

第１節		倉元
第２節		稲垣
第３節	土器	倉元
	石器	樋口

第Ⅴ章　森

第Ⅵ章

第１節	稲垣
第２節	倉元
第３節	樋口
第４節	森

写真図版

遺構	稲垣
遺物	倉元　樋口

17　本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という。）で保管し，展示・活用を図ることにしている。

凡　例

1　本報告書掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は，１グリッド（１マス）が 10 ｍ四方であり，各図に縮尺を提示してある。

2　遺　構

⑴　遺構図の縮尺は，竪穴住居跡，竪穴遺構，連穴土坑，土坑，集石，土器集中などを１/20 を基本としたが，大型の遺構についてはこの限りではない。

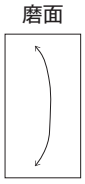
⑵　遺構図の断面については，平面図と同縮尺とした。

⑶　遺構図中の炭化物の集中域は，スクリーントーンで表現している。

⑷　遺構番号については，調査時に付されたものから，報告書掲載順に付け替えた。

3　掲載遺物の縮尺は，土器が１/３，石器は石鏃などの小型のものを１/１，石斧など中型のものを１/２，礫石器など大型のものを１/３を基本としたが，詳細は各図に提示してある縮尺を参照していただきたい。

4　石器の実測表現について，以下のような補助的な表現を行った。



本文目次

巻頭図版１　遺跡遠景（鹿屋方面を望む）
巻頭図版２　縄文時代の土器
序文
報告書抄録
平良上Ｃ遺跡位置図
例言・凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過…… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯…… 1
　第２節　事前調査…… 2
　　１　分布調査…… 2
　　２　試掘調査…… 2
　第３節　本調査…… 2
　第４節　整理・報告書作成作業…… 4
　　１　整理作業…… 4
　　２　報告書作成作業…… 5
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境…… 7
　第１節　地理的環境…… 7
　第２節　歴史的環境…… 7
　第３節　志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡 …… 13
第Ⅲ章　調査の方法と層序…… 16
　第１節　調査の方法…… 16
　　１　発掘調査の方法…… 16
　　２　遺構の認定と検出方法…… 18
　　３　整理・報告書作成作業の方法及び内容…… 18
　第２節　層序…… 19
第Ⅳ章　発掘調査の成果…… 26
　第１節　縄文時代早期の調査…… 26
　第２節　検出遺構…… 26
　　１　竪穴住居跡…… 26
　　２　竪穴遺構…… 36
　　３　連穴土坑…… 38
　　４　土坑…… 40
　　５　集石…… 48
　　６　土器集中・チップ集中…… 73
　第３節　遺物…… 78
　　１　土器…… 78
　　２　石器…… 149
第Ⅴ章　自然科学分析…… 187
　第１節　自然科学分析の概要…… 187
　第２節　放射性炭素年代…… 187
　第３節　種実同定…… 190
　第４節　テフラ分析…… 193
第Ⅵ章　総括…… 199
　第１節　遺構について…… 199
　第２節　土器について…… 199
　第３節　石器について…… 204
　第４節　噴砂について…… 204
写真図版…… 205

挿図目次

第１図　年度別調査範囲図…… 5
第２図　調査範囲図及び試掘トレンチ配置図…… 6
第３図　遺跡近景（H 26 年度撮影） …… 8
第４図　周辺地形図…… 9
第５図　周辺遺跡位置図…… 11
第６図　東九州自動車道関連遺跡位置図…… 15
第７図　グリッド配置図…… 17
第８図　土層断面図１…… 20
第９図　土層断面図２…… 21
第 10 図　土層断面図３…… 21
第 11 図　土層断面図４…… 22
第 12 図　土層断面図５…… 23
第 13 図　土層断面図６…… 23
第 14 図　土層断面図７…… 24
第 15 図　土層断面図８…… 25
第 16 図　遺構配置図…… 27
第 17 図　竪穴住居跡・竪穴遺構・連穴土坑配置図…… 28
第 18 図　竪穴住居跡１号及び出土遺物１ …… 30
第 19 図　竪穴住居跡１号出土遺物２ …… 31
第 20 図　竪穴住居跡２号…… 33
第 21 図　竪穴住居跡２号出土遺物…… 34
第 22 図　竪穴住居跡３号及び出土遺物…… 34
第 23 図　竪穴住居跡４号…… 35
第 24 図　竪穴住居跡５号及び出土遺物…… 36
第 25 図　竪穴住居跡６号及び出土遺物…… 37
第 26 図　竪穴遺構１号…… 38
第 27 図　竪穴遺構２号及び出土遺物…… 39
第 28 図　連穴土坑１号及び出土遺物…… 40
第 29 図　連穴土坑２号・３号…… 41
第 30 図　土坑配置図…… 43
第 31 図　土坑１（Ⅰ類）及び出土遺物…… 44
第 32 図　土坑２（Ⅰ類）及び出土遺物…… 46
第 33 図　土坑３（Ⅱ類①）及び出土遺物…… 47
第 34 図　土坑４（Ⅱ類②）及び出土遺物…… 48

第 35 図　土坑５（Ⅲ類）及び出土遺物 …… 49
第 36 図　集石配置図 …… 50
第 37 図　集石Ⅰ-a 類①及び出土遺物 …… 52
第 38 図　集石Ⅰ-a 類②及び出土遺物 …… 53
第 39 図　集石Ⅰ-a 類③及び出土遺物 …… 55
第 40 図　集石Ⅰ-a 類④及び出土遺物 …… 56
第 41 図　集石Ⅰ-b 類①及び出土遺物 …… 57
第 42 図　集石Ⅰ-b 類②及び出土遺物 …… 58
第 43 図　集石Ⅰ-b 類③及び出土遺物 …… 60
第 44 図　集石Ⅱ-a 類① …… 61
第 45 図　集石Ⅱ-a 類②及び出土遺物 …… 62
第 46 図　集石Ⅱ-b 類①及び出土遺物 …… 63
第 47 図　集石Ⅱ-b 類②及び出土遺物 …… 64
第 48 図　集石Ⅱ-b 類③及び出土遺物 …… 65
第 49 図　集石Ⅱ-b 類④及び出土遺物 …… 66
第 50 図　集石Ⅱ-c 類① …… 67
第 51 図　集石 27 号出土遺物 …… 70
第 52 図　集石Ⅱ-c 類②及び出土遺物 …… 71
第 53 図　集石Ⅱ-c 類③及び出土遺物 …… 72
第 54 図　集石Ⅱ-c 類④及び出土遺物 …… 73
第 55 図　土器集中及び出土遺物 …… 74
第 56 図　チップ集中及び位置図 …… 75
第 57 図　全土器出土分布図 …… 79
第 58 図　Ⅰ・Ⅱ類土器出土分布図 …… 80
第 59 図　Ⅰ・Ⅱ類土器 …… 81
第 60 図　Ⅱ類土器１ …… 82
第 61 図　Ⅱ類土器２ …… 83
第 62 図　Ⅲ類土器出土分布図 …… 84
第 63 図　Ⅲ類土器 …… 85
第 64 図　Ⅳ類土器出土分布図 …… 88
第 65 図　Ⅳ類土器１ …… 89
第 66 図　Ⅳ類土器２ …… 90
第 67 図　Ⅳ類土器３ …… 91
第 68 図　Ⅳ類土器４ …… 92
第 69 図　Ⅳ類土器５ …… 93
第 70 図　Ⅳ類土器６ …… 94
第 71 図　Ⅴ類土器出土分布図 …… 95
第 72 図　Ⅴ類土器 …… 96
第 73 図　Ⅵ類土器出土分布図 …… 97
第 74 図　Ⅵ類土器出土分布図（掲載分） …… 98
第 75 図　Ⅵ類土器１ …… 99
第 76 図　Ⅵ類土器２ …… 100
第 77 図　Ⅵ類土器３ …… 101
第 78 図　Ⅵ類土器４ …… 102
第 79 図　Ⅵ類土器５ …… 103
第 80 図　Ⅵ類土器６ …… 104
第 81 図　Ⅵ類土器７ …… 105
第 82 図　Ⅵ類土器８ …… 106
第 83 図　Ⅵ類土器９ …… 107
第 84 図　Ⅵ類土器 10 …… 108
第 85 図　Ⅵ類土器 11 …… 109
第 86 図　Ⅵ類土器 12 …… 110
第 87 図　Ⅵ類土器 13 …… 111
第 88 図　Ⅵ類土器 14 …… 112
第 89 図　Ⅶ類土器出土分布図 …… 114
第 90 図　Ⅶ類土器１ …… 115
第 91 図　Ⅶ類土器２ …… 116
第 92 図　Ⅶ類土器３ …… 117
第 93 図　Ⅷ類土器出土分布図 …… 118
第 94 図　Ⅷ類土器１ …… 119
第 95 図　Ⅷ類土器２ …… 120
第 96 図　Ⅸ類土器出土分布図 …… 121
第 97 図　Ⅸ類土器 …… 122
第 98 図　Ⅹ類土器出土分布図 …… 124
第 99 図　Ⅹ類土器１ …… 125
第 100 図　Ⅹ類土器２ …… 126
第 101 図　Ⅹ類土器３ …… 127
第 102 図　Ⅹ類土器４ …… 128
第 103 図　Ⅹ類土器５ …… 129
第 104 図　Ⅺ・Ⅻ類土器出土分布図 …… 130
第 105 図　Ⅺ・Ⅻ類土器 …… 131
第 106 図　ⅩⅢ類土器出土分布図 …… 132
第 107 図　ⅩⅣ類土器出土分布図 …… 133
第 108 図　ⅩⅢ類土器 …… 134
第 109 図　ⅩⅢ・ⅩⅣ類土器 …… 135
第 110 図　ⅩⅤ類土器出土分布図 …… 136
第 111 図　ⅩⅤ類土器１ …… 137
第 112 図　ⅩⅤ類土器２ …… 138
第 113 図　縄文時代早期の剥片石器出土分布図 …… 148
第 114 図　縄文時代の石器１ …… 149
第 115 図　黒曜石（桑ノ木津留）出土分布図 …… 150
第 116 図　黒曜石（針尾）出土分布図 …… 151
第 117 図　黒曜石（日東）出土分布図 …… 152
第 118 図　黒曜石（腰岳）出土分布図 …… 152
第 119 図　黒曜石（三船）出土分布図 …… 152
第 120 図　縄文時代の石器２ …… 153
第 121 図　縄文時代の石器３ …… 154
第 122 図　縄文時代の石器４ …… 155
第 123 図　縄文時代の石器５ …… 156
第 124 図　縄文時代の石器６ …… 157
第 125 図　縄文時代の石器７ …… 158
第 126 図　縄文時代の石器８ …… 159
第 127 図　縄文時代の石器９ …… 160
第 128 図　縄文時代の石器 10 …… 161
第 129 図　縄文時代の石器 11 …… 162
第 130 図　縄文時代の石器 12 …… 163

第 131 図　縄文時代の石器 13…… 164
第 132 図　縄文時代の石器 14…… 165
第 133 図　縄文時代の石器 15…… 166
第 134 図　縄文時代早期の礫石器出土分布図…… 167
第 135 図　縄文時代の石器 16…… 168
第 136 図　縄文時代の石器 17…… 169
第 137 図　縄文時代の石器 18…… 170
第 138 図　縄文時代の石器 19…… 171
第 139 図　縄文時代の石器 20…… 172
第 140 図　縄文時代の石器 21…… 173
第 141 図　縄文時代の石器 22…… 174
第 142 図　縄文時代の石器 23…… 175
第 143 図　縄文時代の石器 24…… 176
第 144 図　縄文時代の石器 25…… 177
第 145 図　縄文時代の石器 26…… 178
第 146 図　縄文時代の石器 27…… 179
第 147 図　縄文時代の石器 28…… 180
第 148 図　縄文時代の石器 29…… 181
第 149 図　縄文時代の石器 30…… 182
第 150 図　炭化鱗茎…… 192
第 151 図　重鉱物組成および火山ガラス比…… 194
第 152 図　火山ガラスの屈折率…… 195
第 153 図　斜方輝石の屈折率１…… 196
第 154 図　斜方輝石の屈折率２…… 197
第 155 図　重鉱物・火山ガラス…… 198
第 156 図　Ⅳ類土器接合状況図…… 201
第 157 図　Ⅵ類土器接合状況図…… 202
第 158 図　Ⅵ類土器接合状況図（断面）…… 202
第 159 図　Ⅶ類土器接合状況図…… 203
第 160 図　Ⅵ・Ⅶ類土器出土状況図…… 203

表目次

第１表　周辺遺跡一覧表…… 12
第２表　志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡 …… 13
第３表　平良上Ｃ遺跡の基本土層…… 19
第４表　遺構内出土土器観察表１…… 75
第５表　遺構内出土土器観察表２…… 76
第６表　遺構内出土土器観察表３…… 77
第７表　遺構内出土石器観察表…… 77
第８表　Ⅰ・Ⅱ類土器観察表…… 139
第９表　Ⅲ類土器観察表…… 140
第 10 表　Ⅳ類土器観察表１…… 140
第 11 表　Ⅳ類土器観察表２…… 141
第 12 表　Ⅴ類土器観察表…… 141
第 13 表　Ⅵ類土器観察表１…… 141
第 14 表　Ⅵ類土器観察表２…… 142
第 15 表　Ⅵ類土器観察表３…… 143
第 16 表　Ⅵ類土器観察表４…… 144
第 17 表　Ⅶ類土器観察表１…… 144
第 18 表　Ⅶ類土器観察表２…… 145
第 19 表　Ⅷ類土器観察表…… 145
第 20 表　Ⅸ類土器観察表１…… 145
第 21 表　Ⅸ類土器観察表２…… 146
第 22 表　Ⅹ類土器観察表…… 146
第 23 表　Ⅺ・Ⅻ類土器観察表…… 146
第 24 表　ⅩⅢ類土器観察表１…… 146
第 25 表　ⅩⅢ類土器観察表２…… 147
第 26 表　ⅩⅣ類土器観察表…… 147
第 27 表　ⅩⅤ類土器観察表…… 147
第 28 表　縄文時代の石器観察表１…… 183
第 29 表　縄文時代の石器観察表２…… 184
第 30 表　縄文時代の石器観察表３…… 185
第 31 表　縄文時代の石器観察表４…… 186
第 32 表　放射性炭素年代測定結果…… 188
第 33 表　放射性炭素年代測定結果（１）…… 188
第 34 表　放射性炭素年代測定結果（２）…… 189
第 35 表　炭化種実同定結果…… 191
第 36 表　テフラ組成分析試料一覧…… 193
第 37 表　テフラ組成分析結果…… 194
第 38 表　土器出土割合…… 200

図版目次

巻頭図版

巻頭図版１　遺跡遠景（鹿屋方面を望む）

巻頭図版２　縄文時代の土器

巻末図版

図版１　遺跡遠景（志布志方面を望む）…… 205

図版２　土層断面ほか…… 206

①～③土層断面　④遺物出土状況

⑤遺構検出状況　⑥作業風景

⑦現地指導

図版３　竪穴住居跡１号…… 207

①遺物出土状況　②検出状況

③埋土状況　④⑤完掘状況

図版４　竪穴住居跡２号…… 208

①検出状況　②埋土状況（全体）

③作業風景　④埋土状況

⑤完掘状況　⑥遺跡遠景

図版５　竪穴住居跡３号・４号…… 209

①検出状況　②埋土状況

③３号遺物出土状況

④４号遺物出土状況　⑤完掘状況

図版６　竪穴住居跡５号・６号…… 210

①５号検出状況　②５号埋土状況

③５号完掘状況　④６号検出状況

⑤６号埋土状況　⑥６号完掘状況

図版７　竪穴遺構１号・２号…… 211

①１号・２号検出状況　②１号検出状況

③１号埋土状況　④１号完掘状況

⑤２号検出状況　⑥⑦２号埋土状況

⑧２号完掘状況

図版８　連穴土坑１号…… 212

①検出状況　②埋土状況　③④完掘状況

図版９　連穴土坑２号・３号…… 213

①２号・３号検出状況

②２号・３号埋土状況

③２号・３号完掘状況

④１～３号（手前２号・３号，奥１号）

図版 10　土坑検出状況…… 214

①１号土坑埋土状況

②２号土坑検出状況

③④３号土坑埋土・完掘状況

⑤⑥８号土坑埋土・完掘状況

⑦⑧ 13 号土坑埋土・完掘状況

図版 11　集石（１）…… 215

①②集石２号検出状況

③集石２号埋土状況

④集石２号完掘状況

⑤集石１号検出状況

図版 12　集石（２）…… 216

①集石３号　②集石４号

③集石５号　④集石６号

⑤⑥⑦集石９号検出・埋土状況

⑧集石 11 号

図版 13　集石（３）…… 217

①②集石 14 号　③集石 15 号

④集石 16 号　⑤集石 17 号

⑥集石 18 号

図版 14　集石（４）…… 218

①集石 19 号　②集石 20 号　③集石 21 号

④集石 22 号　⑤集石 23 号　⑥集石 24 号

⑦集石 25 号　⑧集石 26 号

図版 15　集石（５）…… 219

①集石 27 号　②集石 28 号　③集石 29 号

④集石 30 号　⑤集石 31 号　⑥集石 32 号

⑦集石 33 号　⑧集石 34 号

図版 16　遺構内出土遺物（１）…… 220

図版 17　遺構内出土遺物（２）…… 221

図版 18　Ⅰ・Ⅱ類土器…… 222

図版 19　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器…… 223

図版 20　Ⅳ類土器…… 224

図版 21　Ⅵ類土器（１）…… 225

図版 22　Ⅵ類土器（２）…… 226

図版 23　Ⅵ類土器（３）…… 227

図版 24　Ⅵ類土器（４）…… 228

図版 25　Ⅵ類土器（５）…… 229

図版 26　Ⅶ類土器…… 230

図版 27　Ⅷ・Ⅸ類土器…… 231

図版 28　Ⅹ類土器（１）…… 232

図版 29　Ⅹ類土器（２）…… 233

図版 30　Ⅺ・Ⅻ類土器…… 234

図版 31　ⅩⅢ・ⅩⅣ類土器…… 235

図版 32　ⅩⅤ類土器…… 236

図版 33　縄文時代の石器１…… 237

図版 34　縄文時代の石器２…… 238

図版 35　縄文時代の石器３…… 239

図版 36　縄文時代の石器４…… 240

図版 37　縄文時代の石器５…… 241

図版 38　縄文時代の石器６…… 242

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

県教委は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志 IC～末吉財部 IC 区間の事業の実施に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この照会に伴い文化財課は，平成 11 年１月に鹿屋串良 JCT～末吉財部 IC 間を，平成 12 年２月には志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50 か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，県埋文センターの４者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の緻密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委は，平成 13 年１月 29 日から平成 13 年２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石縊遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成 13 年７月 10 日から７月 26 日に鹿屋串良 JCT～末吉財部 IC 間の工事計画図をもとに 33 の遺跡について詳細分布調査と，平成 13 年９月 17 日～10 月 26 日，平成 13 年 12 月３日～12 月 25 日の２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成 13 年 10 月１日から平成 14 年３月 22 日にかけて確認調査を実施した。

平成 14 年４月には，志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡について再度分布調査を実施した。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成 15 年 11 月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年 12 月に大隅 IC（平成 21 年４月 28 日，「曽於弥五郎 IC」へ名称変更）から末吉財部 IC 間の発掘調査協定書締結，平成 16 年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が行われ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり，これまでの確認書，協定書はそのまま継続するということになった。ただし，日本道路公団からの委託は曽於弥五郎 IC までで終了し，曽於弥五郎 IC からの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

平成 24 年度，国土交通省は，平成 25 年度から東九州自動車道（志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間）の建設工事をさらに推進する意向を示し，発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため，県は関係機関で協議を重ね，職員確保や予算運用が柔軟にでき，発掘調査を円滑的かつ効率的に実施できる財団の設置を決定した。

これを受けて，平成 25 年４月，公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋文調査センターを設置し，国事業に関する業務を県文化振興財団へ委託し，県埋文センターから業務を引き継ぎ実施することとなった。

平良上Ｃ遺跡の調査は，試掘調査を文化財課・県埋文センターが，大崎町教育委員会の協力，国土交通省九州地方整備局の立ち会いのもと行った。本調査については，埋文調査センターが行った。

調査経過は，以下のとおりである。

発掘調査

（1）分布調査：平成 14 年４月

（2）試掘調査

第１回　平成 25 年１月８日

第２回　平成 25 年 12 月 12 日

第３回　平成 26 年１月 23 日

（3）本調査

第１回　平成 26 年 11 月４日～平成 27 年３月 10 日

第２回　平成 27 年７月 13 日～平成 27 年８月 21 日

整理・報告書作成作業

（1）整理作業

平成 27 年４月 13 日～平成 28 年３月４日

（2）整理・報告書作成

平成 28 年４月 14 日～平成 29 年３月３日

なお，各調査の調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

第２節　事前調査

１　分布調査

平良上Ｃ遺跡の分布調査は，日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡について依頼を受け，平成14年４月に実施した。

２　試掘調査

試掘調査は，平成14年度の分布調査の結果を受けて，より詳細な包含層等の状況を確認するため，平成25年１月８日に用地解決済箇所の試掘調査を行った。その後，用地問題が解決し，条件の整った箇所について，同年12月12日及び翌年１月23日に再度試掘調査を行った。

調査方法は，遺跡内にトレンチを設定し，重機を使用しながら掘り下げを行った。地層，遺構や遺物の有無の確認を行いながら掘り下げた。調査の結果，２～４・８・９トレンチでは良好な縄文時代早期の遺物包含層が確認された。当初，弥生・古墳時代の遺跡として周知されていたため，古墳時代の遺物包含層の有無も確認したが，明確な層は確認できなかった。

試掘調査の調査体制は次のとおりである。

調査体制（平成24年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査担当　〃　文化財主事　中村和美
立会者　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所調査第三課
専門職　杢田正文
大崎町教育委員会社会教育課
主査　内村憲和

調査体制（平成25年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査担当　〃　文化財主事　中村和美
鹿児島県立埋蔵文化財センター
文化財主事　岡本貢一
文化財研究員　今村結記
立会者　国土交通省九州地方整備局
大隅河川国道事務所調査第三課
係長　弓削琢郎
大崎町教育委員会社会教育課
係長　内村憲和

第３節　本調査

本調査は平成26，27年度の２か年にわたり実施した。各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

調査体制（平成26年度）

事業主体　国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長　堂込秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　山方直幸
〃　調査課長　八木澤一郎
〃　調査第一係長　中村和美
調査担当　〃　文化財専門員　平木場秀男
〃　〃　大岩本博之
〃　文化財調査員　下田代清海
〃　〃　稲垣友裕
〃　〃　勝田裕介
事務担当　〃　主査　岡村信吾
現地指導　鹿児島県立武岡台高等学校教諭　成尾英仁

調査の詳細（日誌抄より）

【10月】

調査区伐採作業，進入路整備，営繕用地・駐車場整地作業，電気・水道引き込みなどの環境整備。

B～F－11～13区，B～F－15～19区，重機による表土剥ぎ及びⅡ～Ⅵ層の掘り下げ。

【11月】

環境整備，グリッドベルト設定，調査範囲図作成

B～F－11～13区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石，土器集中の調査）。

調査区西側の斜面から大量の遺物が出土し，調査区外へ遺跡の範囲が広がる可能性が出てきたため，C～E－９・10区まで調査範囲を拡張し表土剥ぎを行った。

D・E－14～19区，B～D－15～18区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石，土器集中の調査）。

E・F－14・15区の一部は，現代の畑造成のため削平されており，遺物包含層が無いところも見られた。下層確認のため掘り下げを行ったが，遺構・遺物とも確認されなかった。

大量の遺物の取り上げを迅速に行い，速やかに遺構検出作業に移行するため，遺構実測支援システムを導入した。これにより遺物取り上げの迅速化を図った。



【12月】

遺構実測を円滑に進め調査の効率を高めるため，集石の遺構実測を一部委託した。

C～F －９～11区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石の調査）。

B～F －12・13区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石の調査）。

遺構配置図作成，土層断面実測，コンタ図作成

調査区西側の拡張部の掘り下げを行ったが，包含層が厚く堆積し，遺物が大量に出土した。台地の尾根に近い11・12・13区では，谷を取り巻くように多くの集石が検出され，集石に伴う散礫が全体に出土した。斜面の傾斜が大きくなったので，通路の確保などの安全対策を入念に行った。

B～F －13・14区表土剥ぎ，Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石の調査）。

C～F －14～19区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石，土器集中の調査）。遺構配置図作成，コンタ図作成

【１月】

試掘調査の結果よりも包含層が厚く堆積し，想定よりも遺構・遺物が大量に確認され，調査区が広がったため，発掘作業員を増員し調査を進めた。

B・C －９～11区表土剥ぎ，Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出）。

C～F －９～11区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，土層断面実測，集石の調査）。

B～F －12・13区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，写真撮影，集石の調査）。

遺構配置図作成，土層断面実測，コンタ図作成

調査区西側の掘り下げを引き続き行ったが，包含層が厚く堆積し，一部に層位の逆転が見られるほどⅥ層・Ⅶ層が混在していた。遺物は引き続き大量に出土していたが，Ⅷ層上面まで掘り下げを進め遺構検出を行った。土層断面観察用のベルトを設定できなかったので，西側へ向かって徐々に狭くなり深くなる斜面の南北壁面を実測した。最深部の地表からの深さは，３ｍを超えた。

B～F －13～19区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石，土坑，土器集中の調査）。

B～F －20・21区表土剥ぎ，Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。

遺構配置図作成，コンタ図作成

15・16区付近からは，多くの集石が尾根を囲むように検出された。E・F －15・16区では，緩やかに東側へ下る平坦面から土坑（径１～1.5ｍ）が10基程度まとまって見つかった。また，D －21区には電柱が残っており，電柱に影響のある部分以外の表土剥ぎを行った。電柱下の未調査部分については，撤去後改めて調査を実施することとした。

【２月】

B・C －９～11区Ⅵ層・Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，集石の調査）。

C～F －９～13区Ⅶ層の調査（遺構検出，写真撮影，集石の調査）。

B～F －13区下層確認トレンチ設定及び掘り下げ

遺構配置図作成，土層断面実測，全体コンタ図作成

調査区西側については，一部の遺構実測，土層断面実測を残して，Ⅷ層上面までの調査が終了した。旧石器時代の包含層の有無を確認するため，南北方向にトレンチを設定し掘り下げを行ったが，遺構・遺物は確認されなかった。

C・D －15・16区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上）。

C～F －17～20区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，写真撮影，土坑，竪穴住居跡，連穴土坑の調査）。

E・F －15～20区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，集石，土坑，土器集中の調査）。

遺構配置図作成，土層断面実測

調査区東側の平坦面では，尾根に近い15・16区付近で多かった集石はほぼ見られなくなり，遺物の出土量もかなり少なくなってきた。代わりに18～20区にかけて隅丸方形を呈した竪穴住居跡や連穴土坑などの集落を連想させる遺構が検出された。

本遺跡では，遺跡全体に鬼界カルデラの噴火の際の地震による液状化現象で生じた噴砂が見つかっており，噴砂の確認や遺構・遺物に与えた影響などを検討するため，成尾英仁氏（県立武岡台高等学校教諭）に現地指導を依頼した。

【３月】

B・C －10～13区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，

遺構検出，集石の調査)。

遺構配置図作成，土層断面実測，コンタ図作成

残っていた遺構実測が終わり調査が終了した。土層断面実測後，西端の谷部については安全対策及び排土仮置き場として活用するため一部埋め戻しを行った。

B・C－19・20区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出)。

C・D－17～20区Ⅶ層の調査（住居跡，土坑の調査)。

E・F－17～20区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，連穴土坑の調査)。

遺構配置図作成，土層断面実測，全体コンタ図作成

東側の調査区外に試掘トレンチを設定（11・12トレンチ)。重機を使用しながら掘り下げを行ったが，遺構・遺物は確認されなかった。

緩やかに東側へ下る平坦面では，調査区東端付近でも竪穴住居跡などの遺構が見つかり，東側の調査区外へ広がる可能性が大きくなってきた。電柱下の未調査部分を含め拡張した調査範囲を設定し，来年度発掘調査を実施することとして本年度の調査を終了した。その際，埋め戻しは行わず立ち入り禁止看板，丸太杭，ロープなどを使って安全対策を施した。

最後に周辺地形を取り入れた本遺跡の全景を上空から撮影するため，空中写真撮影を実施した。

調査体制（平成27年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター	
	センター長	堂込秀人
調査企画	〃 総務課長兼総務係長	有村　貢
	〃 調査課長	八木澤一郎
	〃 調査第一係長	中村和美
調査担当	〃 文化財専門員	平木場秀男
	〃 文化財調査員	稲垣友裕
事務担当	〃 主査	荒瀬勝己

調査の詳細（日誌抄より）

【7月】

調査区・進入路・営繕用地・駐車場除草作業，電気・水道引き込みなどの環境整備。

B～F－20・21区の未調査部分及び拡張部について，重機による表土剥ぎ及びⅡ～Ⅵ層の掘り下げ。

環境整備，調査範囲図作成

B～E－20・21区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，遺構検出，写真撮影，竪穴住居跡，土坑の調査)。

遺構配置図作成，土層断面実測，全体コンタ図作成

昨年度の調査区に隣接した電柱，道路下部分の狭い調査区であり，加えて地形全体が東側へ緩やかに傾斜した平坦面のため，大雨のたびに調査区が水没するなど難しい調査となった。排水ポンプの活用や重機による無遺物層の掘り下げなど，工夫しながら調査を実施した。

遺物の出土は少なかったが，新たな竪穴住居跡や土坑が検出された。特に竪穴住居跡4号は，調査区境からの発見であったので，B～D－21・22区の隣接地をさらに拡張し遺跡の広がりを確認することとなった。調査期間も7月の1ヶ月間の予定であったが，8月初旬まで延長して対応した。調査の結果，竪穴住居跡2～4号より東側に新たな遺構・遺物は発見されなかった。

【8月】

B～D－21区Ⅶ層の調査（掘り下げ，遺物取上，写真撮影，竪穴住居跡，土坑，集石の調査)。

遺構配置図作成，土層断面実測，全体コンタ図作成

今年度の調査では，拡張部分の遺構・遺物の他にも，安全対策上掘り下げを行わなかった南北の調査区境や階段下など再度遺構検出を行い，H26年度調査区内で新たに発見された遺構についても調査を行った。

調査終了後，安全対策上必要と思われる東端の段差について一部埋め戻しを行い国土交通省へ引き渡した。

第4節　整理・報告書作成作業

報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成27年度から発掘調査作業と並行して実施した。

平成27年度は整理作業を，平成28年度は報告書刊行へ向けた作業を公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。

作業内容は，以下のとおりである。

1　整理作業

(1) 遺構

実測図と図面台帳との照合，遺構別に実測図の仕分け，注記の確認，トレースへ向けての下図面作成等

(2) 遺物

ア　土器・石器共通

水洗い，遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合

イ　土器

注記，分類，接合，実測する土器の選別

ウ　石器

石器と一般礫の仕分け，分類，実測する石器の選別

作成体制（平成 27 年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター	
	センター長	堂込秀人
調査企画	〃 総務課長兼総務係長	有村　貢
	〃 調査課長	八木澤一郎
	〃 調査第一係長	中村和美
調査担当	〃 文化財専門員	平木場秀男
	〃 〃	真方敏行
	〃 文化財調査員	森えりこ
事務担当	〃 主査	荒瀬勝己
遺物指導	南九州縄文研究会	新東晃一

2　報告書作成作業

(1) 遺構図のペントレースやデジタルトレース，遺構配置図の作成，報告書掲載用写真選別，原稿執筆

(2) 土器の実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，遺物分布図作成，報告書掲載用写真撮影

(3) 石器の実測及び実測委託，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，遺物分布図作成，報告書掲載用写真撮影

縄文時代早期の土器については南九州縄文研究会の新東晃一氏に，石器については長野眞一氏に指導をいただいた。

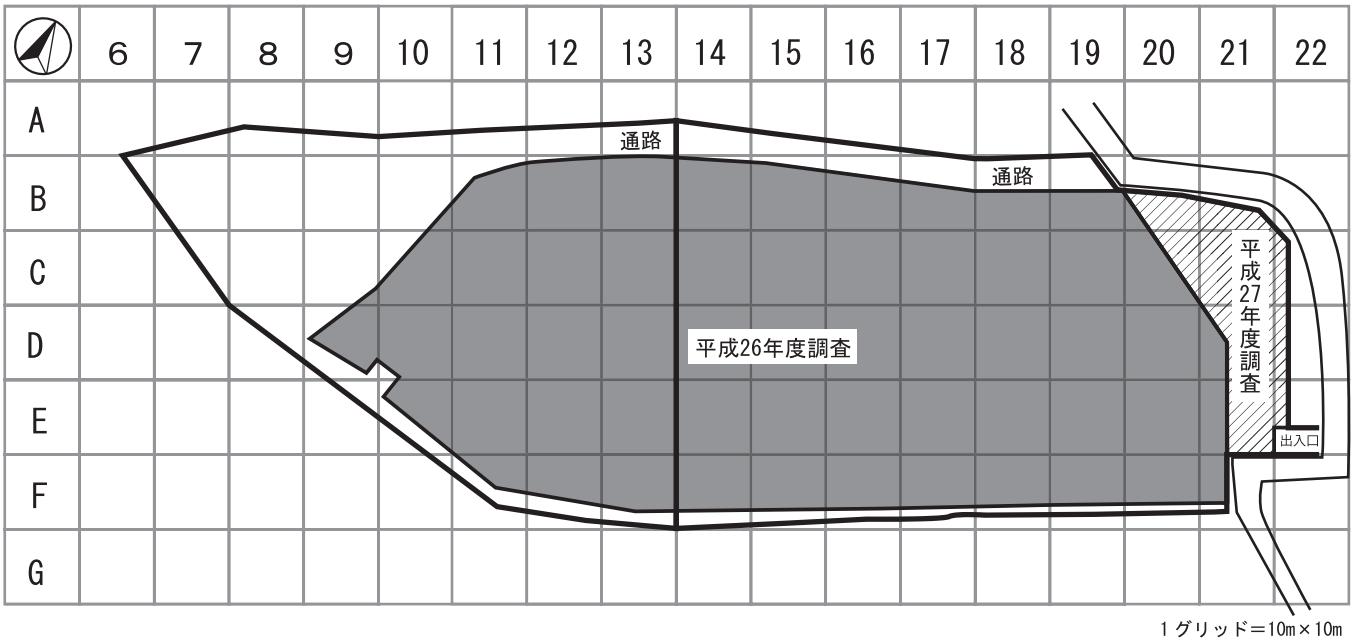
整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制（平成 28 年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター	
	センター長	堂込秀人
調査企画	〃 総務課長兼総務係長	有村　貢
	〃 調査課長	八木澤一郎
	〃 調査第一係長	中村和美
調査担当	〃 文化財専門員	倉元良文
	〃 文化財調査員	稲垣友裕
	〃 〃	樋口めぐみ
	〃 〃	森えりこ
事務担当	〃 主査	荒瀬勝己
遺物指導		長野眞一

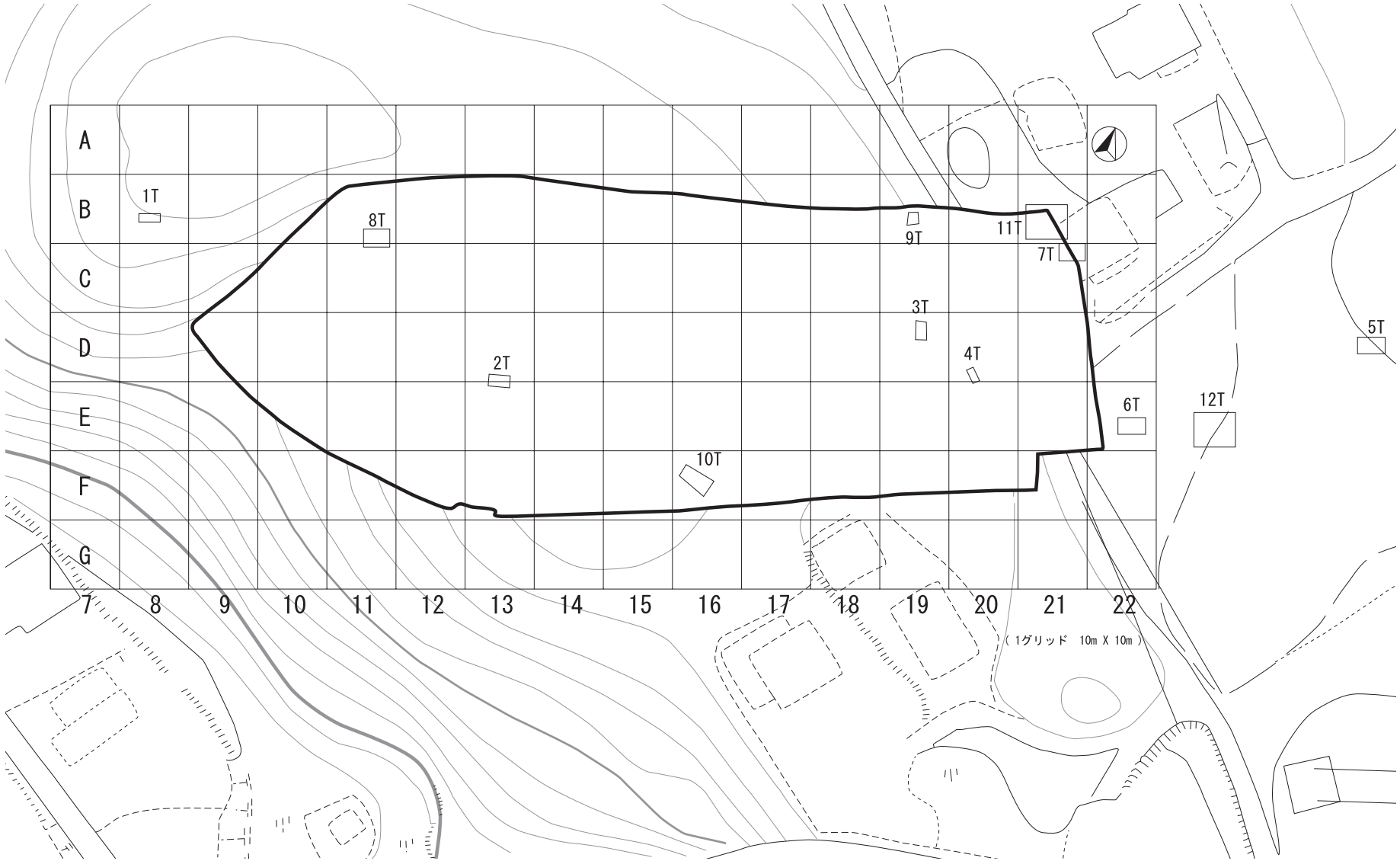
報告書作成指導委員会　平成 28 年 11 月 25 日実施
八木澤課長ほか 7 名

報告書作成指導委員会　平成 28 年 11 月 28 日実施
堂込センター長ほか 6 名



1 グリッド＝10m×10m

第 1 図　年度別調査範囲図



第２図　調査範囲図及び試掘トレンチ配置図

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

平良上Ｃ遺跡は，曽於郡大崎町井俣に所在する。大崎町は鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し，東西に約８㎞，南北に約 18㎞の範囲にあり，総面積は 100.82㎢である。東側に志布志市，西側に鹿屋市，南側に肝属郡東串良町，北側に曽於市と接し，南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は九州山地の延長をなす東西の山地と，その間の丘陵，台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地層からなっている。西側の山地は，北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は北部の白尾岳・荒磯岳など 500～600m 級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など 1,000m 級の山から成る山地で，山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は，高隈山周辺に分布している新生代古第３紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山地間を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や，湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は，堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析されている。大隅半島中央部の地形は，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地で形成されている。一方，低地は高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾などに注いでいる。この河川は上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町の地形は志布志湾に面した大崎地区と，内陸部に位置する野方地区の二つの地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は，海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏が少ない平坦な地形である。北部は標高 150m から 200m の丘陵地帯であり，北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川，田原川，持留川の三つの川が南流し，志布志湾に注いでいる。南部は，この３河川によってシラス台地が開析された水田地帯がひらけている。北部は，台地上に畑地が形成されている。地質はシラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く，低地部に位置する水田の一部では泥炭層をなしているところがある。

平良上Ｃ遺跡は南部に広がる平坦なシラス台地を南北に開析する田原川左岸の台地上に位置し，田原川と志布志市有明町を流れる菱田川に挟まれたシラス台地の最西端にあたる。田原川と菱田川の間は「菱田原」と称され，標高は約 40m である。遺跡は小高い丘を境に東側は緩やかに下る平坦面，西側は田原川周辺の低地へ向かって急激に下る谷地形を呈し，段丘の崖へと続いている。台地と田原川周辺の低地との標高差は，約 25m である。

周辺には，同じ台地上の西側に平良上Ａ遺跡，北側に平良上Ｂ遺跡，田原川を挟んだ対岸の台地上に坂上遺跡・柿木遺跡，同じ東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施した宮脇遺跡・荒園遺跡などの遺跡が点在する。

第２節　歴史的環境

平良上Ｃ遺跡の所在する大崎町では，主に田原川，持留川，菱田川，大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。また近年，大崎町や東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果などから，次第にその様相が明らかになりつつある。東九州自動車道建設に伴う発掘調査の成果は次節で記載し，ここではそれ以外の成果をまとめることとする。

旧石器時代

天神段遺跡から，ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器作製跡及び石器類が検出・出土している。

縄文時代

近年，町内において，縄文時代の遺跡の発掘調査が増えつつある。金丸城跡から石坂式土器・石鏃・凹石，二子塚Ａ遺跡から塞ノ神式土器・落とし穴状遺構２基，下堀遺跡からは前平式土器・石坂式土器・下剥峯式土器・手向山式土器・平栫式土器・集石 13 基が発見され，遺構は確認されていないが指宿式土器を中心とする後期土器も出土している。立山Ｂ遺跡から曽畑式土器・阿高式土器・黒川式土器，大崎細山田段遺跡から西平式土器が出土している。

弥生時代

名勝「くにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は，砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成 11 年の町教育委員会による発掘調査では，住居跡 53 軒・約 20 基の土坑・約 180 基の柱穴が発見されており，入来Ⅰ式土器・入来Ⅱ式土器・山ノ口Ⅰ式土器・山ノ口Ⅱ式土器・須玖式土器・鉄製品・軽石製加工品が出土している。下堀遺跡からは山ノ口Ⅱ式土器のほか，



第３図　遺跡近景（H26 年度撮影）



第４図　周辺地形図

須玖式土器を伴う直径８ｍの円形大型住居跡２軒・掘立柱建物跡５棟が検出されている。麦田下遺跡からは土器溜りが検出されており，高付式土器・西南四国系土器・瀬戸内系土器など，搬入品や模倣品を含む外来系の土器が多く出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し，特に河口付近に近い横瀬地域では甕棺破片が採集されている。

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは，南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し，畿内との関連をうかがわせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（５世紀前半）の前方後円墳で，隣接する肝属郡東串良町の唐仁大塚古墳に次いで県内第二の規模を誇る。平成２年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では，全長 160m，墳長 132m，前方部幅 72m，前方部長 68m，後円部径 64m，くびれ部幅 48m を測る。なお，周溝の幅は 12～23m，深さは 1.5m である。墳丘の高さについては，後円部が 10.5m，前方部が 11.5m であるが，後円部の墳上部に石室が露呈していることから，もともとの後円部は現在より高かったと考えられる。平成 22～23 年に町が行った範囲確認調査では，これまで確認されていた周溝の北側と南側の外側にさらに廻らされている幅約４ｍの周溝が確認された。新たに発見された外溝までを範囲とすれば，全長は約 180m に及ぶ。昭和 53 年に県が行った範囲確認調査では，周溝から伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器が出土し，墳丘からは円筒埴輪片，形象埴輪片が出土している。被葬者については明らかにされていないが，明治 35 年に盗掘を受け，その際に腐食した直刀や甲冑，勾玉類が出土し，竪穴式石室内は朱塗りであったと伝えられ，被葬者の実力をうかがわせる。

神領古墳群は前方後円墳４基・円墳９基で構成され，地下式横穴墓８基の存在も知られている。前方後円墳の６号墳（天子ヶ丘古墳）は昭和 37 年に日光鏡・彷製獣帯鏡（各１面）が採集され，昭和 43 年の発掘調査では，石室は花崗岩質板石６枚を使用した箱式石棺で，鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が確認された。また，平成 18～20 年にかけて鹿児島大学総合研究博物館による前方後円墳 10 号墳の調査が行われ，全長約 50m，周溝に４基の地下式横穴墓が存在することが判明した。また，周溝からは盾持人埴輪，くびれ部からは初期須恵器を大量に含む祭祀土器群が出土した。後円部墳頂で溶結凝灰岩製の刳抜式舟形石棺や鉄剣・甲冑・鉄鏃束などが発見された。昭和 35 年に調査された地下式横穴墓１号は，長方形で家形の玄室，妻入りの羨道部取り付け，鉄剣・イモガイ製貝釧・内向花文鏡などの副葬品が確認され，昭和 62 年に調査された地下式横穴墓５号からも，イモガイ製貝釧が確認された。平成２年に調査された地下式横穴墓６号は，玄室内には南側に歯が数本，北側に大腿骨が残存していたが，副葬品は確認できなかった。

町内では他に，高塚古墳として飯隈古墳群・田中古墳群・後迫古墳群が知られ，地下式横穴墓として飯隈地下式横穴墓群・鷲塚地下式横穴墓群が知られている。

この他にも，二子塚遺跡Ａで住居跡・土師器・成川式土器，沢目遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鏃が確認されている。

古代・中世

古代の遺跡としては，天神段遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されている。また，下堀遺跡では土師器と土坑が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり，大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・椈谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡からは溝状遺構・土坑・龍泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前焼擂鉢・天目碗などが確認されている。下堀遺跡からは溝状遺構・畝跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡からは掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砥石・滑石製石鍋片などが確認されている。中でも土坑墓１号からは，同安窯系青磁６点・青磁１点・青白磁１点・銅鏡１点・滑石製石鍋２点・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

近世

金丸城跡からは環状に配列する掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積区・肥前系染付・龍門司窯及び苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。天神段遺跡からは安永ボラ（1779 年）を埋土とする畝状遺構や薩摩焼などが確認されている。

－引用参考文献－

大崎町　1975『大崎町史（明治百年）』

大崎町教育委員会　2005『金丸城跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（４）

大崎町教育委員会　2005『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（５）

大崎町教育委員会　2014『麦田下遺跡』大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）

鹿児島大学総合研究博物館　2007『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter　№15』

鹿児島大学総合研究博物館　2008『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter　№19』

鹿児島大学総合研究博物館　2009『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter　№22』



第５図　周辺遺跡位置図（1：25,000）

第１表　周辺遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	時代	地形	遺物等	備考
1	平良上Ｃ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣平良上	縄文	台地		本報告書
2	平良上Ａ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣平良上平田	縄文，古墳	台地	土器片	Ｈ９農政分布
3	平良上Ｂ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣平良上	古墳	台地	土器片	Ｈ９農政分布
4	平良宇都Ａ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	古墳	平地		
5	平良宇都Ｂ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	弥生，古墳	平地		
6	井俣和田遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	古墳	平地		
7	井俣牧遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	弥生，古墳	台地	土器片	H11 農政分布
8	中沖Ｂ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町菱田	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
9	中沖Ａ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町菱田	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
10	久木野堀遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町菱田	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
11	稲荷堀Ａ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町菱田	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
12	稲荷堀Ｂ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町菱田	古代	台地	土師器	H11 農政分布
13	牧ノ上Ｂ遺跡	鹿児島県志布志市有明町蓬原字牧ノ上	古墳	台地		
14	牛ヶ迫遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町飯隈	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
15	飯隈遺跡群	鹿児島県曽於郡大崎町飯隈	弥生，古墳	台地		
16	別府下遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	古墳	平地		H18 確認調査（町）
17	田中古墳群	鹿児島県曽於郡大崎町井俣・神領	古墳	台地		
18	柿木遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
19	坂上遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	弥生，古墳	台地		H11 農政分布
20	宮脇遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	古墳、古代	台地	土器・土師器	H11 農政分布， H27･28 発掘調査（県）
21	堂園堀遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布， H23 確認調査（県）
22	荒園遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町仮宿	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布， H24～26 発掘調査（県）
23	干浅遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	弥生，古墳	台地	土器	H11 農政分布
24	金丸城跡	鹿児島県曽於郡大崎町井俣	縄文，古墳，古代， 中世，近世	台地	青磁・白磁・古伊万里・炉跡 16 基	H10～12 発掘調査（町）
25	大園・浜牧・蓼池遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町益丸・神領	弥生，古墳，古代， 平安	台地		Ｈ８農政分布
26	沢目遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町益丸松原	縄文，弥生，古墳	海岸	入来式・山ノ口式・須玖式・成川式	H11 発掘調査（町）
27	王子脇遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町益丸王子脇	古墳	台地		
28	田原Ａ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町神領西神領	弥生	平地		
29	田原Ｂ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町益丸	古墳	海岸	須恵器片	
30	神領遺跡群	鹿児島県曽於郡大崎町神領	弥生，古墳，中世	台地	前方後円墳４基･円墳９基・地下式横穴墓８基	S43 発掘調査（町）他
31	大崎城跡	鹿児島県曽於郡大崎町仮宿	中世，室町	台地	掘割３ヶ所	
32	胡摩ヶ崎城	鹿児島県曽於郡大崎町仮宿	中世，室町	台地	掘割４ヶ所	
33	美堂Ａ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町仮宿	古墳，中世，近世	台地	成川式	Ｈ７農政分布， H14 発掘調査（町）
34	美堂Ｂ遺跡	鹿児島県曽於郡大崎町仮宿	古墳	台地		Ｈ７農政分布
35	長田遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字長田・牧・春日免	縄文，弥生，古墳， 中世	台地	山ノ口式･成川式･棟持柱建物跡・白磁碗	H10 確認調査， H11 本調査
36	坂ノ上遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字坂ノ上・前田・西原	弥生，古墳	台地		H11 農政分布
37	清水遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字清水	弥生	台地	打製石斧・磨製石斧	
38	原田古墳群	鹿児島県志布志市有明町原田字大塚・竹塚	古墳	台地	円墳５基・方墳１基	
39	大塚遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字大塚・出口・有本・竹塚	縄文，古墳	台地		H10 農政分布
40	東中原遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字東中原・大塚・藤原・中須	古墳	台地		H10 農政分布

第３節　志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡

東九州自動車道建設（志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間）に伴う発掘調査等を実施した遺跡は第２表に示すとおりである。ここでは，各遺跡の概要だけを記載する。詳細については報告書を参照していただきたい。

なお，平成 29 年度以降の発掘調査及び報告書刊行計画については，平成 28 年 10 月時点の予定である。

第２表　志布志 IC～鹿屋串良 JCT 間の遺跡

	遺跡名	発掘調査年度	報告書刊行年度
1	見帰遺跡	H28	H29 以降
2	安良遺跡	H28～29	H30 以降
3	小牧古墳群	H27～28	H29 以降
4	次五遺跡	H26～27	H29 以降
5	木森遺跡	H26～	H29 以降
6	春日堀遺跡	H26～	H29 以降
7	平良上 C 遺跡	H26～27	H28
8	宮脇遺跡	H27～28	H29 以降
9	堂園堀遺跡	H23（確認）	－
10	荒園遺跡	H24～	H28（一部）
11	永吉天神段遺跡	H24～27	H27・28（一部）
12	京の塚遺跡	H25～27	H29 以降
13	小牧遺跡	H27～	H29 以降
14	川久保遺跡	H26～	H29 以降
15	町田堀遺跡	H25～28	H27（一部）
16	牧山遺跡	H25～	H28（一部）
17	田原迫ノ上遺跡	H22～	H27･28（一部）
18	立小野堀遺跡	H22～	H28（一部）

１　見帰遺跡（志布志市志布志町北大原）

安楽川の左岸，標高約 70 ｍの台地上に位置している。調査の結果，旧石器時代の細石刃，ナイフ形石器，縄文時代早期や後期の土器が出土した。平成 28 年度で発掘調査が終了した。

２　安良遺跡（志布志市志布志町安楽）

安楽川の左岸，見帰遺跡と同じ台地上に立地する古墳時代の遺跡である。平成 25 年度に確認調査を実施し，発掘調査は平成 28 年度から実施する。

３　小牧古墳群（志布志市志布志町安楽）

安楽川の右岸，標高約 50 ｍの台地の縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石・土坑，近世の溝状遺構・古道跡が検出された。遺物は，縄文時代草創期の土器片や剥片，縄文時代早期の土器や耳栓・石鏃・磨石・異形石器，弥生時代の土器などが出土した。平成 28 年度で発掘調査が終了した。

４　次五遺跡（志布志市有明町野井倉）

標高約 40 ｍの台地東端の縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石，落とし穴，連穴土坑，土坑，縄文時代前期以降の落とし穴などが検出された。遺物は旧石器時代の細石刃核･細石刃･剥片･チップ，縄文時代早期の土器や石器が出土した。石器にはトロトロ石器や異形石器などの独特な資料も含まれる。

なお，本遺跡の発掘調査は，志布志市教育委員会が実施した。

５　木森遺跡（志布志市有明町野井倉）

菱田川の左岸，標高約 30 ｍの第二段丘面の西端に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石，中世の堀立柱建物跡・ピットなどを検出した。遺物は縄文時代早期の土器や石器，中世の須恵器・土師器・青磁・白磁・滑石製石鍋片・鉄製品などが出土した。特に，径が 1.5 ｍ前後の浅い円形を呈した掘り込みを伴う集石が集中して検出された。

６　春日堀遺跡（志布志市有明町蓬原）

菱田川の右岸，標高約 40 ｍの台地の縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石・落とし穴，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡・溝状遺構・土坑・棒状礫集積遺構，古代～中世の焼土跡・竪穴建物跡・掘立柱建物跡・柵跡・土坑・ピット，近世の古道跡・溝状遺構・土坑などが検出された。遺物は縄文時代早期の土器や石器，弥生時代の土器，古墳時代の土器・石器，古代の土師器が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂）も確認された。

７　平良上 C 遺跡（曽於郡大崎町井俣）

本遺跡報告書を参照

８　宮脇遺跡（曽於郡大崎町井俣）

田原川の右岸，標高約 50 ｍの台地の縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石，土器集中などが検出された。遺物は旧石器時代の石核・磨石・フレーク・チップ，縄文時代早期の土器や石器などが出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂）の痕跡が確認された。

９　堂園堀遺跡（曽於郡大崎町井俣）

標高約 50 ｍの台地の中央部に立地している。調査を平成 23 年度に実施したが，遺物包含層，遺構ともに確認されなかった。

10　荒園遺跡（曽於郡大崎町仮宿）

標高約 50 ｍの台地の縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石，弥生時代中期の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡，中世の溝状遺構，時期不明の片薬研堀などが検出された。遺物は旧石器時代の細石刃核・細石刃・剥片・チップ，縄文時代早期の土器や石器，弥生時代中期の土器・鉄鏃，古墳時代の土器，中世の東播系須恵器・備前焼などが出土した。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂）も確認された。

11　永吉天神段遺跡（曽於郡大崎町永吉）

標高約 30 mの河岸段丘と標高約 50 mの台地の縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は旧石器時代の石器製作跡，礫群，縄文時代早期の集石・埋設土器，縄文時代晩期の竪穴住居跡・落とし穴・土坑，弥生時代中期の竪穴住居跡・円形周溝墓を中心とした土坑墓群・掘立柱建物跡，古墳時代の竪穴住居跡・埋設土器，古代の掘立柱建物跡・土坑，中世の掘立柱建物跡・土坑墓・大型土坑・土坑・溝状遺構，近世の土坑墓などが検出された。遺物は旧石器時代の尖頭器・ナイフ形石器等，縄文時代早期・前期・晩期の土器や石器，弥生時代中期の土器・鉄鏃・磨製石鏃・石斧等，古代の須恵器・土師器，中世の土師器・白磁・青磁・東播系須恵器・瓦質土器・備前焼・滑石製石鍋，近世の陶磁器・寛永通宝などが出土している。また，液状化現象（噴砂）も確認された。特に中世の大型土坑は，貴重な発見である。

12　京の塚遺跡（曽於郡大崎町西持留・鹿屋市串良町細山田）

串良川左岸に位置する標高約 100 mの台地上に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石，縄文時代前期末から中期前半の土坑，近世～近代の溝状遺構，古道などが検出された。遺物は縄文時代早期・前期・中期・後晩期の土器や石器などが出土しているが，深浦式土器が大量に出土していることが特徴である。特に約 150 基ほど見つかっている縄文時代前期末から中期前半の土坑群は南九州でも極めて珍しく，また近畿地方や瀬戸内地方の土器と在地の土器が共伴しており，広域な交流を示す貴重な資料である。

13　小牧遺跡（鹿屋市串良町細山田）

串良川左岸に位置する標高約 60 mの台地上に立地している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡・集石・連穴土坑・土坑，縄文時代後期の土坑，古墳時代の竪穴住居跡・土器溜，中世以降の掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ピット等が検出された。遺物は旧石器時代の細石刃・フレーク，縄文時代早期・前期・後期・晩期の土器や石器，弥生時代の土器や石器，古墳時代の土器・須恵器・磨製石鏃・鉄鏃・勾玉，中世以降の土師器・青磁・白磁等が出土している。

14　川久保遺跡（鹿屋市串良町細山田）

串良川右岸に位置する標高約 30～40 mの台地縁辺部に立地している。調査の結果，遺構は旧石器時代から縄文時代草創期にかけての礫群，縄文時代早期の連穴土坑・集石等，弥生時代の竪穴住居跡，古墳時代の竪穴住居跡・鍛冶関連遺構・古道等，古代の掘立柱建物跡，中世の掘立柱建物跡・竪穴建物跡・土坑墓等，近世の掘立柱建物跡等が検出された。遺物は旧石器時代の細石刃核・細石刃等，縄文時代早期・前期・晩期の土器や石器，弥生時代の土器，古墳時代の土器・勾玉・垂飾品・管玉・金床石・鞴の羽口・鉄滓・鍛造剥片，古代の土師器や須恵器，中世の土師器・白磁・青磁・瓦器埦・東播番系須恵器，近世の薩摩焼・寛永通宝などが出土している。

15　町田堀遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 90 mの台地に立地し，笠野原台地の北東縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石，縄文時代後期の竪穴住居跡・埋設土器・落とし穴等，弥生時代の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑，古墳時代の地下式横穴墓・円形周溝墓等が検出された。地下式横穴墓からは，副葬品とともに人骨も発見された。遺物は縄文時代早期の土器や石器，縄文時代後期の土器・勾玉・垂飾品・石刀・石斧・磨石，弥生時代の土器や石器，古墳時代の土器・剣や鏃などの鉄器類，古代の土師器や墨書土器などが出土している。約 90 基もの地下式横穴墓が発見されており，隣接する川久保遺跡の集落跡との関連が注目される貴重な遺跡である。平成 28 年度で発掘調査が終了する予定である。

16　牧山遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 130 mの台地上に立地し，笠野原台地の北縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の集石・石器製作跡・石器集中部，縄文時代前期の埋設土器，縄文時代後期の環状にめぐる埋設土器群や柱穴群・土器・石器等，縄文時代晩期の土坑・柱穴，弥生時代の土坑・柱穴，中世の古道跡などが検出された。遺物は旧石器時代の剥片，縄文時代早期・後期・晩期の土器や石器，弥生時代の土器や石器，中世の青磁などが出土している。特に縄文時代後期の柱穴群や弥生時代中期の集落跡は注目される。

17　田原迫ノ上遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 130 mの台地上に立地し，笠野原台地の北縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡・連穴土坑・落とし穴・土坑・集石・石器製作跡，弥生時代中期の竪穴住居跡・大型建物跡・掘立柱建物跡・円形周溝，古墳時代以降の溝状遺構・畝状遺構群・近世の溝状遺構が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器や石器，弥生時代中期の土器・石器・土製勾玉・鉄器片等が出土した。

18　立小野堀遺跡（鹿屋市串良町細山田）

標高約 130 mの台地上に立地し，笠野原台地の北縁辺部に位置している。調査の結果，遺構は古墳時代の地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構等が検出された。地下式横穴墓からは，初期須恵器・剣・刀・刀子・鏃などの鉄器や国内最古級の青銅鈴などが出土している。また，副葬品とともに人骨も発見されている。190 基もの地下式横穴墓が一度に発見された例は無く，南九州地方の当時の墓制を考える上で，町田堀遺跡とともに良好な資料となった。



第６図　東九州自動車道関連遺跡位置図（1：25,000）

第Ⅲ章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

平良上Ｃ遺跡の発掘調査は，平成 26 年度（約５か月間），平成 27 年度（約２か月間）の２年にわたり実施した。調査対象表面積は 5,905㎡，調査対象延面積も同じく 5,905㎡である。

調査区割り（グリッド）は，計画された道路のセンターライン上の「STA81」と「STA82」の延長線を中心に，西側から東側に向かって 10 ｍ間隔に，１，２，３…，北側から南側に向かって A，B，C…と設定した。

このグリッドを基にして，遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また，トータルステーションで測量作業を行う場合，測量座標は G － 21 区の右下を原点（０，０）とし，縦軸を X，横軸を Y とした。

調査は調査区全体を覆う雑木や雑草の伐採を行った後，試掘調査の結果に基づき，重機で表土から遺物包含層上面まで除去した後，遺物包含層は人力で掘り下げを行った。しかし，遺物包含層であるⅦ層の下位はほぼ無遺物層であるため，一部重機を用いて慎重に掘り下げを行った。

検出遺構については，移植ごて等の遺構の検出に適した道具を用いて慎重に調査し，写真撮影を行った後，平板実測等による記録保存を行った。出土遺物については，平板実測またはトータルステーションで取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要（詳細は第Ⅰ章に掲載）は，以下のとおりである。

平成 26 年度

試掘調査の結果を受け，本調査は，平成 26 年 11 月４日から平成 27 年３月 10 日までの約５か月間，調査対象面積は 5,680㎡で行った。

当初計画では，平成 26 年 11 月４日から平成 27 年２月 25 日の間，表面積 4,500㎡，延面積 4,500㎡を対象に調査を行う予定であったが，西側斜面より大量の土器片や火熱を受けた礫が斜面全体から出土したため，調査区西側の最深部付近を拡張し（1,180㎡）調査を実施した。拡張分の作業量は，作業員の増員，遺構実測委託費の増額，調査期間の延長などで対応した。

調査開始に当たり，B 区の東西方向に延びる重機進入路を設置した。調査は当初の調査範囲西端に当たる B～F － 11～13 区の表土～Ⅴ層の無遺物層を重機で剥ぎ，尾根に当たる B～F － 13・14 区に土層観察用のベルトを設定した。その後，B～F － 15～19 区の表土剥ぎを行った。

B～F － 11～13 区のⅥ・Ⅶ層の調査を開始した直後から，大量の土器・礫が出土したことから，隣接する C～F － ９～11 区の表土剥ぎを行い調査区を拡張し調査を行った。Ⅶ層掘り下げ後，Ⅷ層上面で遺構の検出を行い調査を終了した。B～F － 15～19 区では，未調査部分の表土剥ぎを行った後，D － 20・21 区の電柱下部分を除いて，Ⅷ層上面まで掘り下げ調査を終了した。調査区東端の平坦面から竪穴住居跡が発見されたことから，東側に隣接した道路下まで調査区を拡張することとなり，電柱下の未調査部分と合わせた 125㎡が平成 27 年度の調査範囲となった。

なお，遺物包含層までの深さが 1.5 ｍ以上あり，安全確保のため南北壁面に沿って段差を設け調査を進めた。



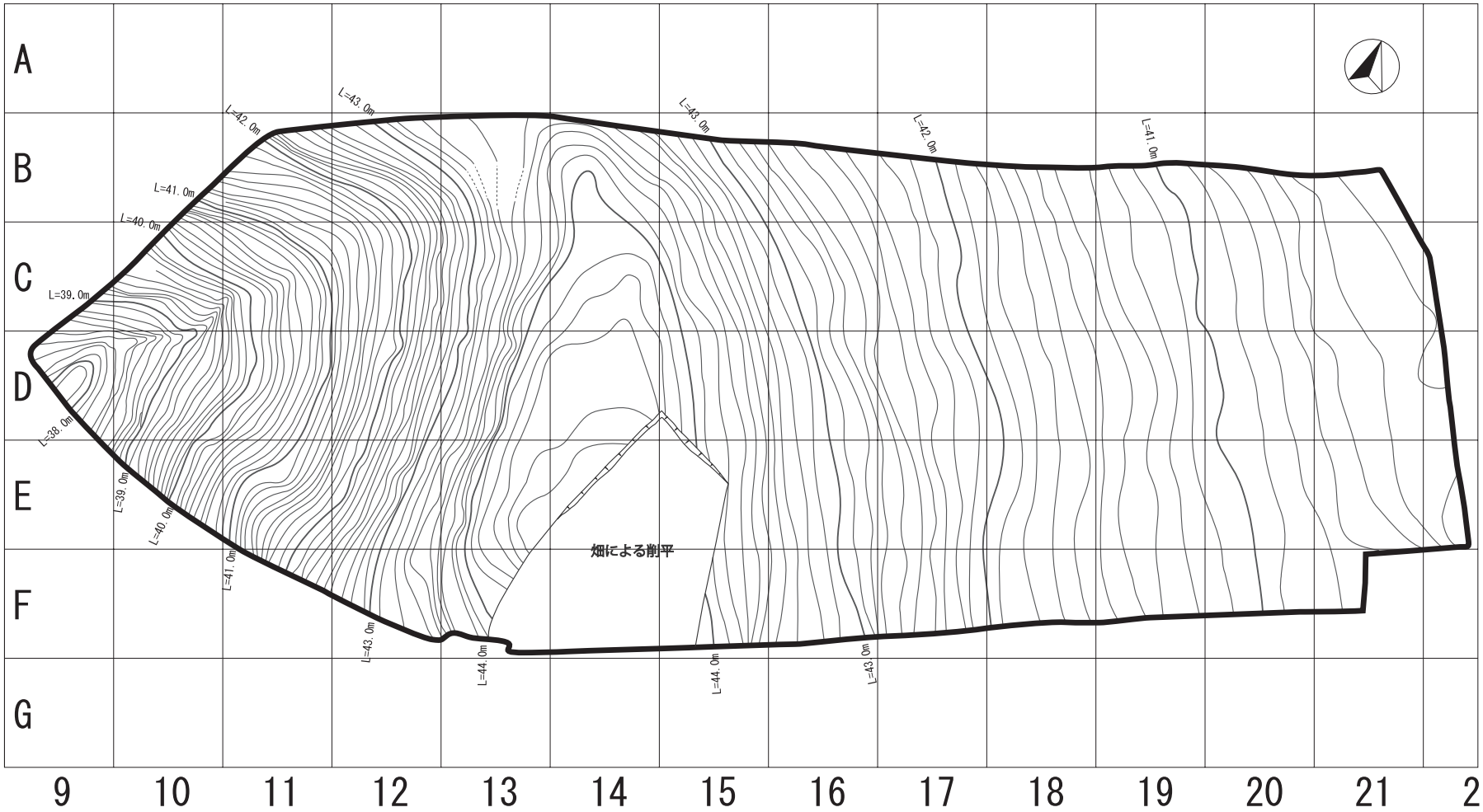
平成 27 年度

調査期間は，平成 27 年７月 13 日から平成 27 年８月 21 日までの約２か月間であった。

当初計画では，平成 27 年７月 13 日から８月７日の間，表面積 125㎡，延面積 125㎡を対象に調査を行う予定であったが，道路下から竪穴住居跡が発見されたことに伴い，遺跡の広がりを確認し，集落の様相を明らかにするため，隣接する部分を再度拡張し（100㎡）調査を実施した。拡張分の作業量は，調査期間の延長，支援体制の強化で対応した。最終的な調査実施面積は，225㎡であった。

調査は重機で表土剥ぎを行った後，遺物包含層をⅧ層上面まで掘り下げ，遺構検出を重点的に行った。遺物の出土量が極めて少なかったので，一部重機を使って慎重に調査を進めた。

その後，危険箇所の一部埋め戻しを行ってから引き渡しを行い，本遺跡の本調査のすべてを終了した。



（ 1グリッド　10m X 10m ）

第７図　グリッド配置図

2　遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本書掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡及び竪穴遺構は人為的に掘り込まれた大型の竪穴遺構で，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土など総合的に判断した。

土坑及びピットは人為的に掘り込まれたやや小型の竪穴遺構で，径 50㎝以下のほぼ円形のものをピット，それ以上のものを土坑とした。方形，円形，楕円形などタイプが異なるものが多いが，検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し区別した。

連穴土坑は二つの土坑がトンネルで繋がっているもので，楕円形と円形の組合わせが多い。中にはブリッジ部分が崩落したものも含む。大部分が埋土中や壁面に焼土や炭化物を伴うので判断の材料とした。

集石は，本遺跡で 34 基検出した。また，集中しないものの被熱し一般礫が数多く出土している。認定の基準としては，ある程度の数量の拳大以上の礫が集中して検出されたもので，礫の密集度，検出状況，掘り込みの有無，周辺環境など，全てを総合的に判断した。やや散礫状に広がるものや，当初は土坑と判断して調査したものなども含まれる。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出は各年度とも共通の調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，遺物包含層の主体となるⅦ層の色調が黒褐色土であり，掘り込み面，埋土ともに黒褐色土であるという難しさがあった。出土遺物の集中や鍵となるパミスの集中などの特徴的な検出状況がない限り，やや判断が難しいのが現実であった。そこで，判別のしやすい地層（Ⅷ層）上面での検出が多くなってしまった。調査区外へ延びる遺構を，調査区拡張後，やや上位で検出できたので，これまで以上に調査のあり方を再検討し，今後の調査に活かしたい。

3　整理・報告書作成作業の方法及び内容

平良上 C 遺跡の整理・報告書作成作業は，平成 27・28 年度の２年にわたり実施した。平成 27 年度は発掘調査作業と同時並行で行われていた時期があるが，基本的には整理作業の方法及び内容は変わらない。そのため，本項では整理・報告書作成作業が開始された平成 27 年度の作業方法及び内容を中心に述べる。

平成 27 年度

平成 26・27 年度の発掘調査成果品の整理を行った。

図面整理は遺構実測図・遺物出土分布図・土層断面図・地形図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは，未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際，遺物に付着している重要な情報を除去することがないように洗い，微細な剥片石器については，超音波洗浄機も使用した。

注記は，水洗いと並行して順次行った。注記を行う際，薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している県埋文センター南の縄文調査室に確認し，遺跡名を表す記号を「TRC」とした。

土器の分類・接合は遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については土器の胎土や文様等で分類し，調査区東側と西側で接合を行い，その後両者を接合する方法をとった。

石器については再度石器と一般礫との選別を行い，剥片石器と礫石器に分けた後，器種ごとに分類した。石器実測については，作業の効率化を図るため石器実測委託を行った。

遺物出土分布図は平板実測で取り上げた情報はデジタイザーを用いてデータ化し，トータルステーションで取り上げたデータと統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は基本的に発掘調査の現場で行ったものを実測図や写真等を用いて，各年度の発掘担当者を含めた職員で再検討し，確定した。掲載スケール決定後，それにあった下図面を鉛筆トレースで作成し，点検・修正後，ペントレースを行った。トレースは基本的にペントレースで行ったが，一部の遺構ではデジタルトレースを使用した。

遺構配置図・土層断面・地形図は，鉛筆トレースで下図面を作り，点検・修正後，デジタルトレースを行った。

８月に全ての発掘調査が終了した関係で整理作業だけでなく，報告書作成作業も同時に行った。一部原稿執筆も開始した。

平成 28 年度

土器については接合した中から報告書掲載遺物を選別し，部分的な補強・復元を行った後，実測，拓本，トレース，レイアウトを行った。

石器については一部実測委託を行い，実測委託遺物以外で実測が必要なものを選別し，実測，トレース，レイアウトを行った。

文章執筆，観察表作成，写真撮影等終了後，印刷・製本を行った。

第２節　層序

本遺跡はＤ・Ｅ－14区付近の尾根部南側に一部畑造成による削平が認められるが，全体として自然地形が概ね良好に残存していた。

しかし，丘を中心に東西方向へ下っていく地形であるため，尾根部では上位の層の堆積が悪く，下位の層も部分的に欠落するなど乱れていた。反対に，谷底に向かう急斜面では，谷筋に沿って層が乱れ，最深部近くでは，上位から流された土砂が一部ブロック状に厚く堆積しているのが確認された。

また，遺跡全体で樹木の根による撹乱が見られ，樹痕の最深部は遺物包含層を貫いており，遺構・遺物に影響を及ぼしていた。

本遺跡では，標高の高い尾根部以外の全域に，鬼界カルデラ噴火時の地震による液状化現象で生じた噴砂が確認された。特異な地形での噴砂の堆積状況が見られ，貴重な資料となった。

包含層や遺構・遺物の年代を把握する手掛かりの１つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

Ⅰ層：表土，遺跡を覆っていた堆積土で樹木等を含む。

Ⅱ層：黒色系の色調をもつ層である。色調や火山灰の有無の違いで４層に分層した。

Ⅱ０層：砂質が強く，谷底にのみ見られるⅡ層の二次堆積土。

Ⅱａ層：砂質で厚く堆積している。

Ⅱｂ層：細粒な黄白色パミス（御池火山灰，約4,600年前の噴出物）混じり。

Ⅱｃ層：砂質でやや粘性を持つ。

Ⅲ層：軽石（池田降下軽石，約5,700年前の噴出物）混じりの黒褐色土，全体に安定して堆積している。

Ⅳ層：硬質な暗黄褐色土。

Ⅴ層：アカホヤ火山灰（約7,300年前，鬼界カルデラ起源の噴出物）関連の層であるが，噴砂の層を含めて，特徴の違いで３層に分層した。

Ⅴａ層：赤褐色土で，アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。

Ⅴｂ層：鬼界カルデラ噴火時の地震による液状化現象で生じた噴砂の層で，堆積の特徴から新たに３層に分層した。

Ⅴｂ-a層：軽石主体で，シラス，アカホヤ火山灰の混在土。主に谷部を中心に堆積。

Ⅴｂ-b層：噴出したシラス，丘以外に広く堆積。

Ⅴｂ-c層：細粒な白色パミスを含む砂質土。

Ⅴｃ層：アカホヤ火山灰一次の軽石層。

Ⅵ層：やや粘性のある砂質土で，縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅶ層：黄白色パミス（P12，約9,000年前の桜島起源の噴出物）を含む硬質土で，縄文時代早期の遺物包含層である。

Ⅷ層：薩摩火山灰層である。硬質でブロック状に堆積するが，丘部は不明瞭な部分が多い。

Ⅸ層：粘質の強い暗褐色粘質土である。

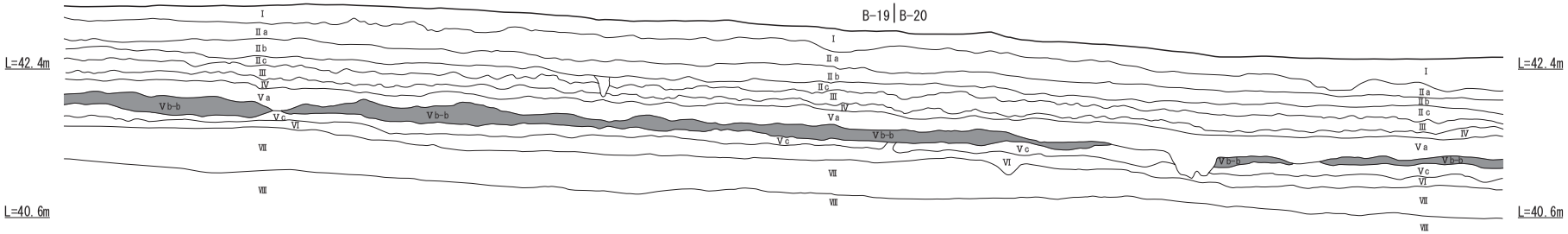
Ｘａ層：明黄白色砂質土である。シラスの二次堆積土で，堆積状況により細分化される。

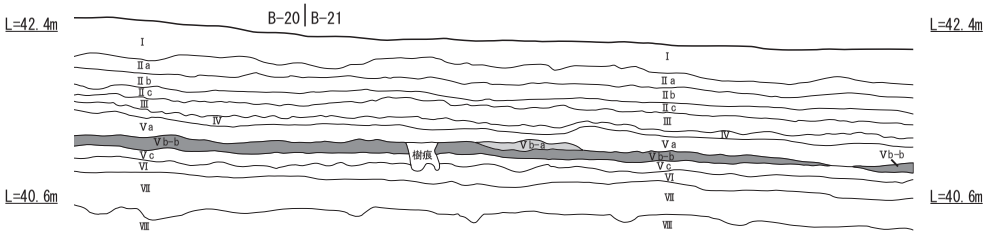
Ｘｂ層：この層からＡＴ（シラス）と呼ばれる約26,000～29,000年前の姶良カルデラ起源の火山灰層となる。この層は無遺物層で，南九州本土では厚く堆積している。

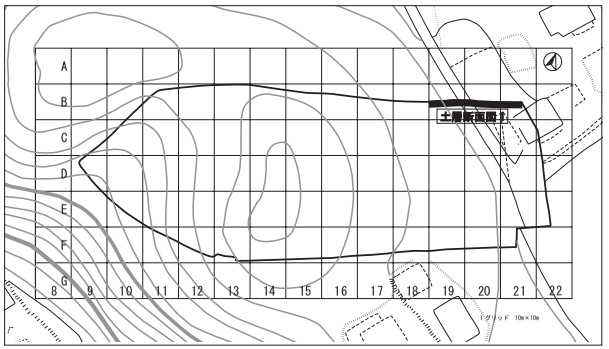
※火山灰の年代については，2003　町田洋　新井房夫著　東京大学出版会『新編火山灰アトラス－日本列島とその周辺－』（P108～110）から引用した。なお，年代は放射性炭素年代測定法で算出され，暦年較正した年代である。

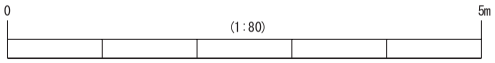
第３表　平良上Ｃ遺跡の基本土層

層		色　調　な　ど	層厚
Ⅰ　層		表土	30cm
Ⅱ層	Ⅱ０	黒色土	50cm
	Ⅱａ	黒色砂質土	30cm
	Ⅱｂ	黒褐色土（御池火山灰）	10cm
	Ⅱｃ	黒色土	15cm
Ⅲ　層		黒褐色土（池田降下軽石）	10cm
Ⅳ　層		暗黄褐色土	10cm
Ⅴ層	Ⅴａ	赤褐色土	40cm
	Ⅴｂ－ａ	黄橙色砂礫土	10cm
	Ⅴｂ－ｂ	乳茶褐色砂質土	20cm
	Ⅴｂ－ｃ	淡黄褐色砂質土	２cm
	Ⅴｃ	黄褐色軽石	10cm
Ⅵ　層		暗茶褐色砂質土	15cm
Ⅶ　層		黒褐色土（P12）	40cm
Ⅷ　層		淡黄褐色硬質土（薩摩火山灰）	25cm
Ⅸ　層		暗褐色粘質土	20cm
Ⅹ層	Ⅹａ	明黄白色砂質土	－
	Ⅹｂ	黄褐色砂質土（シラス）	－

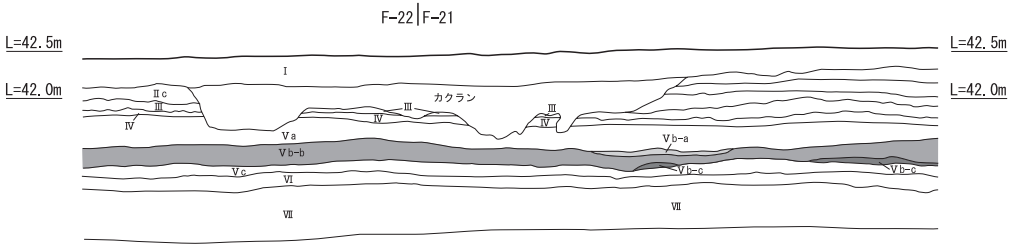


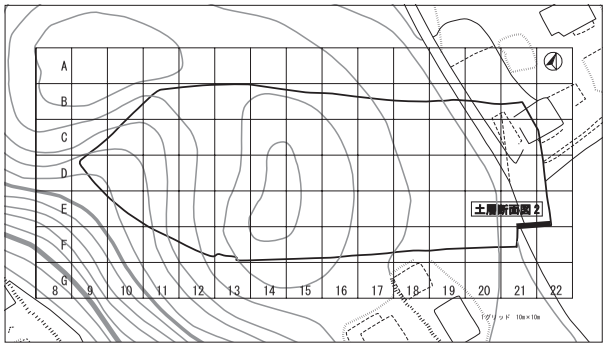




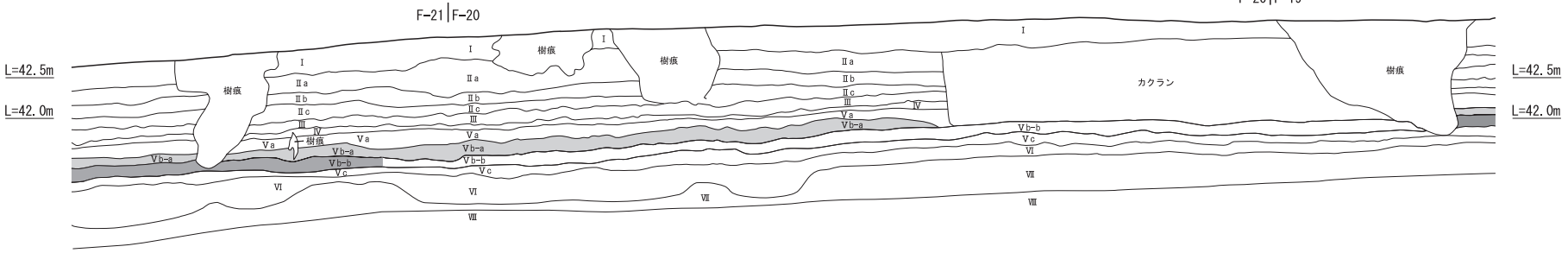


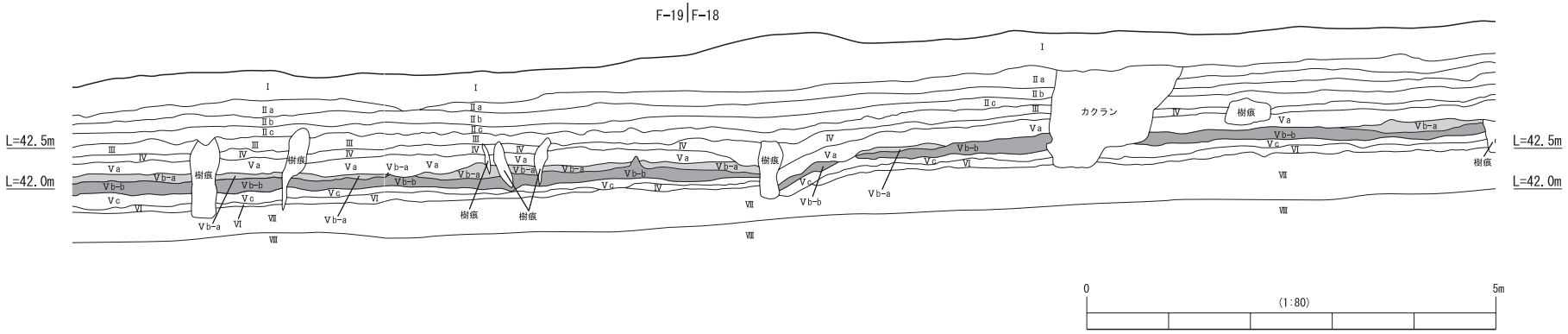
第８図　土層断面図１（Ｂ－19～21区）



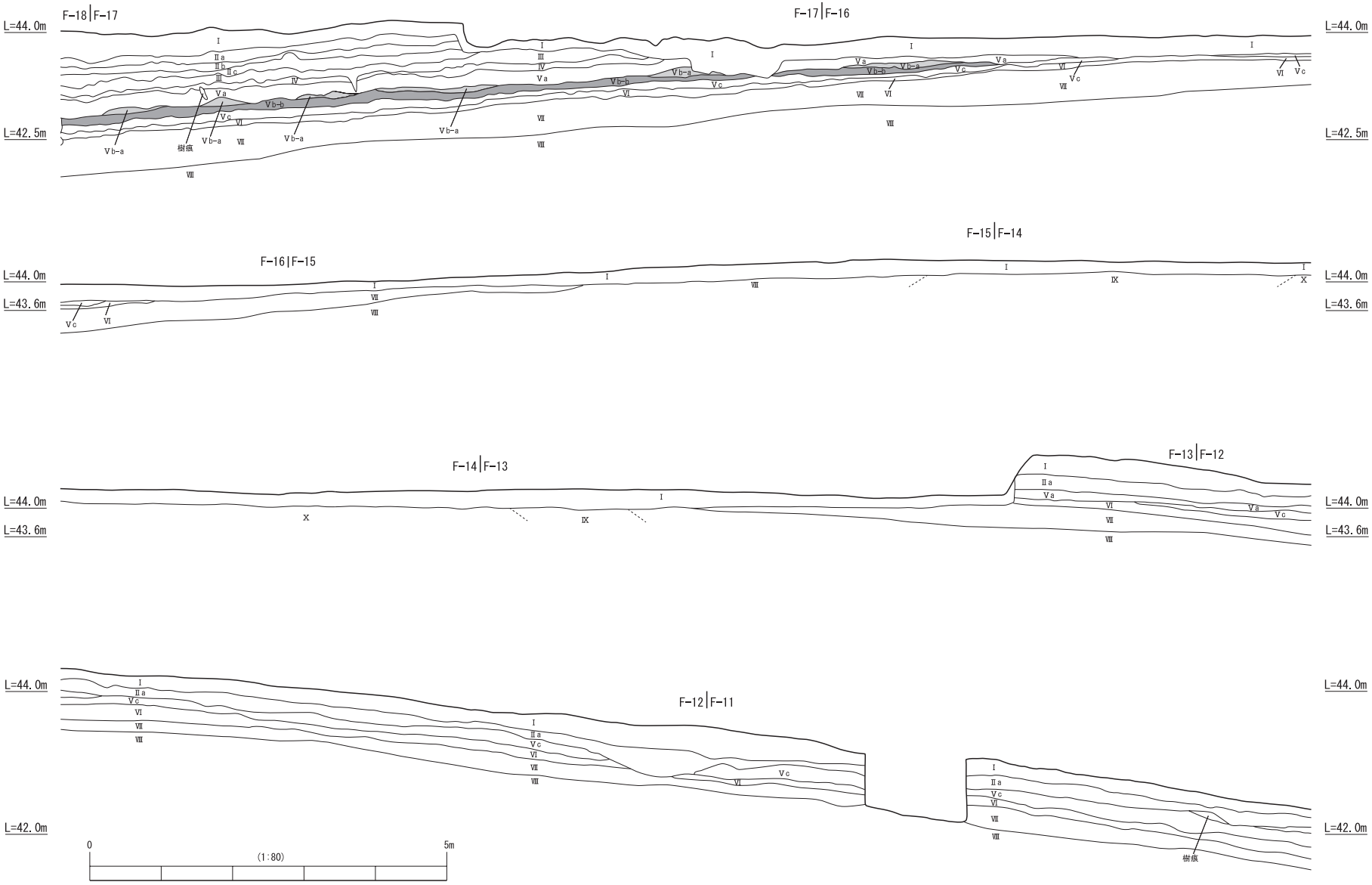


第９図　土層断面図２（F － 22～21 区）

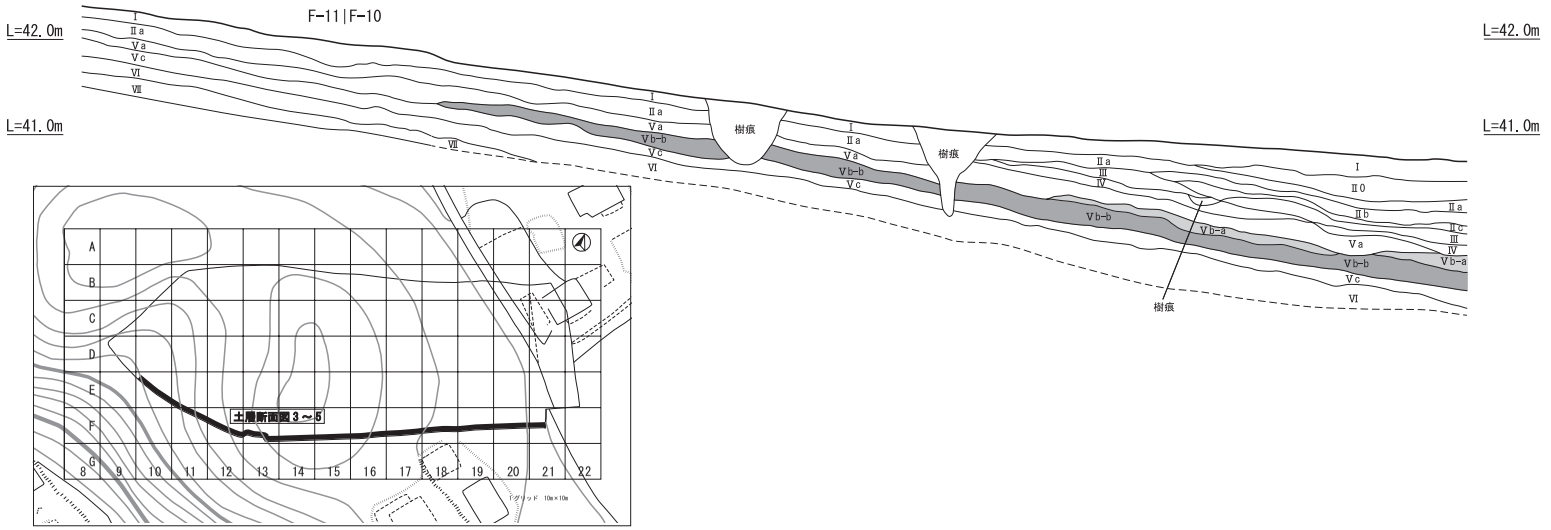




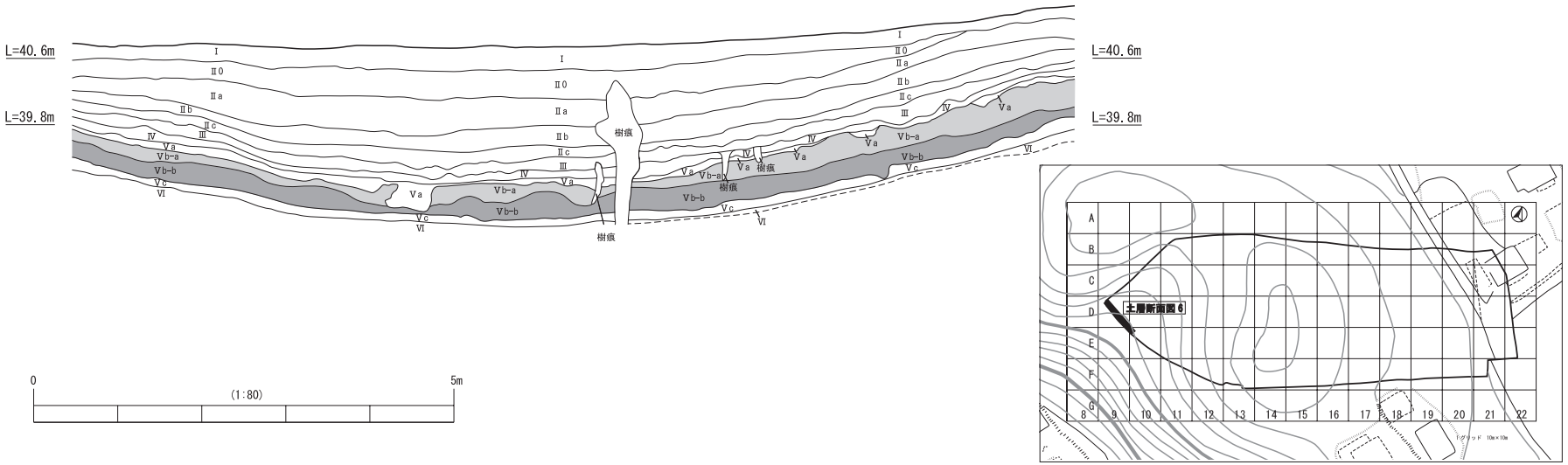
第 10 図　土層断面図３（F － 21～18 区）



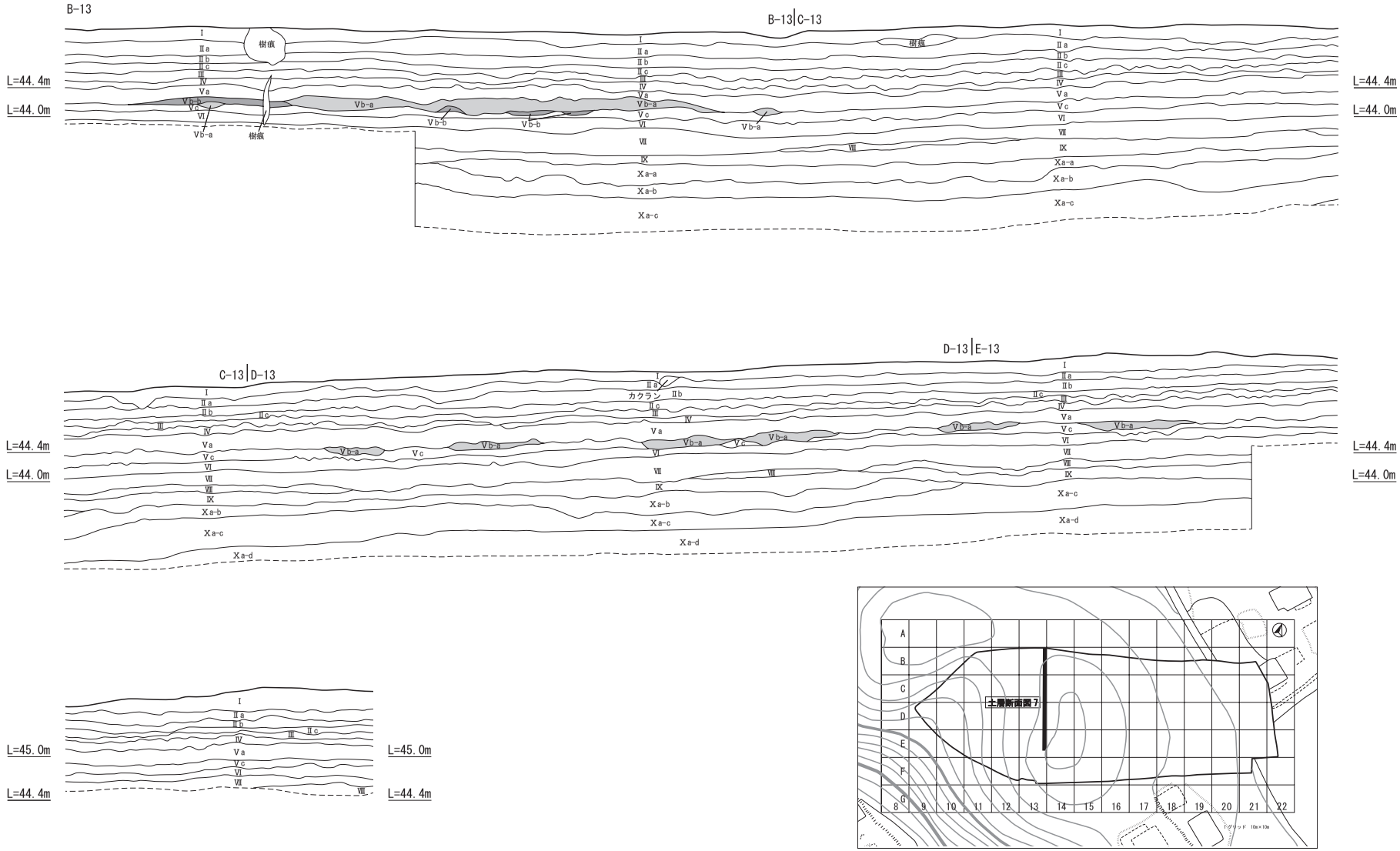
第11図　土層断面図4（F－18～11区）



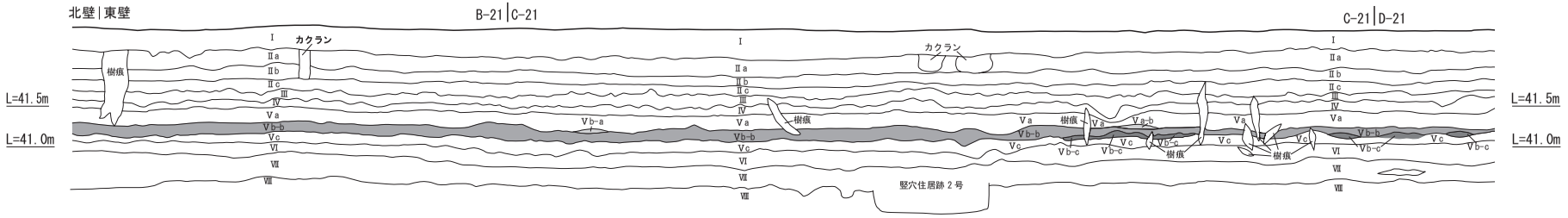
第 12 図　土層断面図５（F－11～10 区）

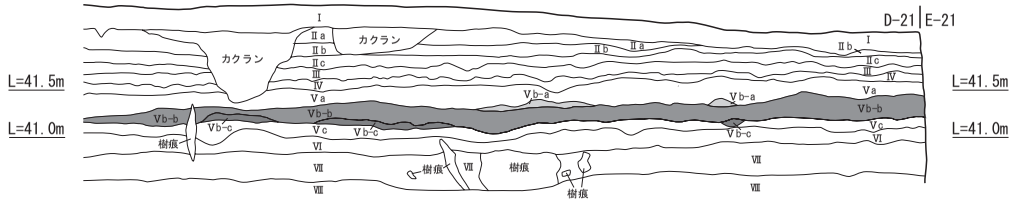


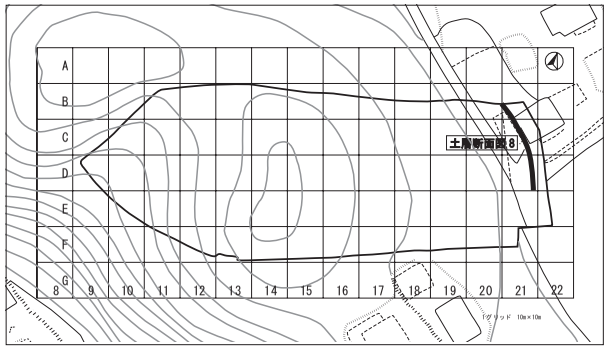
第 13 図　土層断面図６（D・E－９区）

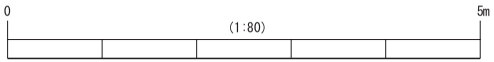


第14図　土層断面図7（B～E－13区）









第15図　土層断面図８（B～E－21区）

第Ⅳ章　発掘調査の成果

第１節　縄文時代早期の調査

調査の概要

本遺跡は縄文時代早期を主体とする遺跡である。縄文時代早期の該当層は，Ⅵ層及びⅦ層で平坦面では地表から1.5～２ｍの下位に広がる。

一部Ⅶ層まで削平された箇所，急斜面で堆積が不安定な箇所があったが，全体的には安定した土層であった。表層から薩摩焼，古墳時代と思われる土器片が数点出土したが，掲載していない。Ⅱ～Ⅵ層では遺構遺物は確認されなかった。

縄文時代早期の地形はＥ－14区付近が標高44ｍ強で調査区内では一番高く，ここからほぼ北西に向かって尾根が走る。この尾根の東側にはなだらかに下る緩斜面が続く地形で，西側は急斜面となる。この急斜面の土層は深くなるにつれて粘質も強くなり，不安定な堆積状況となる。調査区内におけるⅧ層上面の標高は約38ｍから42ｍを測り，その差は６～７ｍである。なお，地形図は，遺物包含層であるⅥ・Ⅶ層を掘削した後のⅧ層上面を測量した。

調査区東側の緩斜面には竪穴住居跡６軒，竪穴遺構２基，連穴土坑３基，主に調査区中央付近から東側では土坑15基，Ｅ－14区付近の小高い部分を取り囲むように集石34基が検出された。これらの遺構内から遺物が出土しているが，遺構の時期を裏付けるような出土状況ではなかった。検出状況からすると，竪穴住居跡と連穴土坑の検出エリアは重なり，集石の検出エリアとは距離をおくという特徴がある。また，調査区内からは集石としてのまとまりはないが，被熱し変色，劣化，破砕した礫が多く見られた。集石として利用された後に廃棄された礫の可能性もある。さらに，土器やチップが集中して確認された箇所もあった。

Ｅ－14区付近から伸びる尾根筋の東側の16区から18区では多くの遺物が出土した。そして，調査区の東端に向かう19区から徐々に出土が少なくなり，22区付近では遺物の出土は確認できなかった。また，尾根筋の西側の急斜面では，標高が低くなるにつれて遺物の出土が多くなる傾向があった。特に，11区から９区では谷筋に沿って多量の遺物が出土した。尾根筋の東側の緩斜面から出土した遺物と比較すると急斜面から出土した遺物は摩耗したものが多く見受けられる。これらのことから急斜面で確認された遺物の多くは原位置を保っていないと考えられる。今回の発掘調査において土器では下剥峯式土器の出土が圧倒的に多く，次いで石坂式土器，桑ノ丸式土器であった。石器では磨製・打製を含め石斧の出土が多かった。

第２節　検出遺構

縄文時代早期の遺構は，竪穴住居跡６軒，竪穴遺構２基，連穴土坑３基，土坑15基，集石遺構34基が検出された。集石遺構は，遺物包含層であるⅦ層及びⅧ層上面より検出された。竪穴住居跡，竪穴遺構，連穴土坑，土坑はほぼⅧ層上面の検出であるが，状況により検出面が異なるものも含まれる。

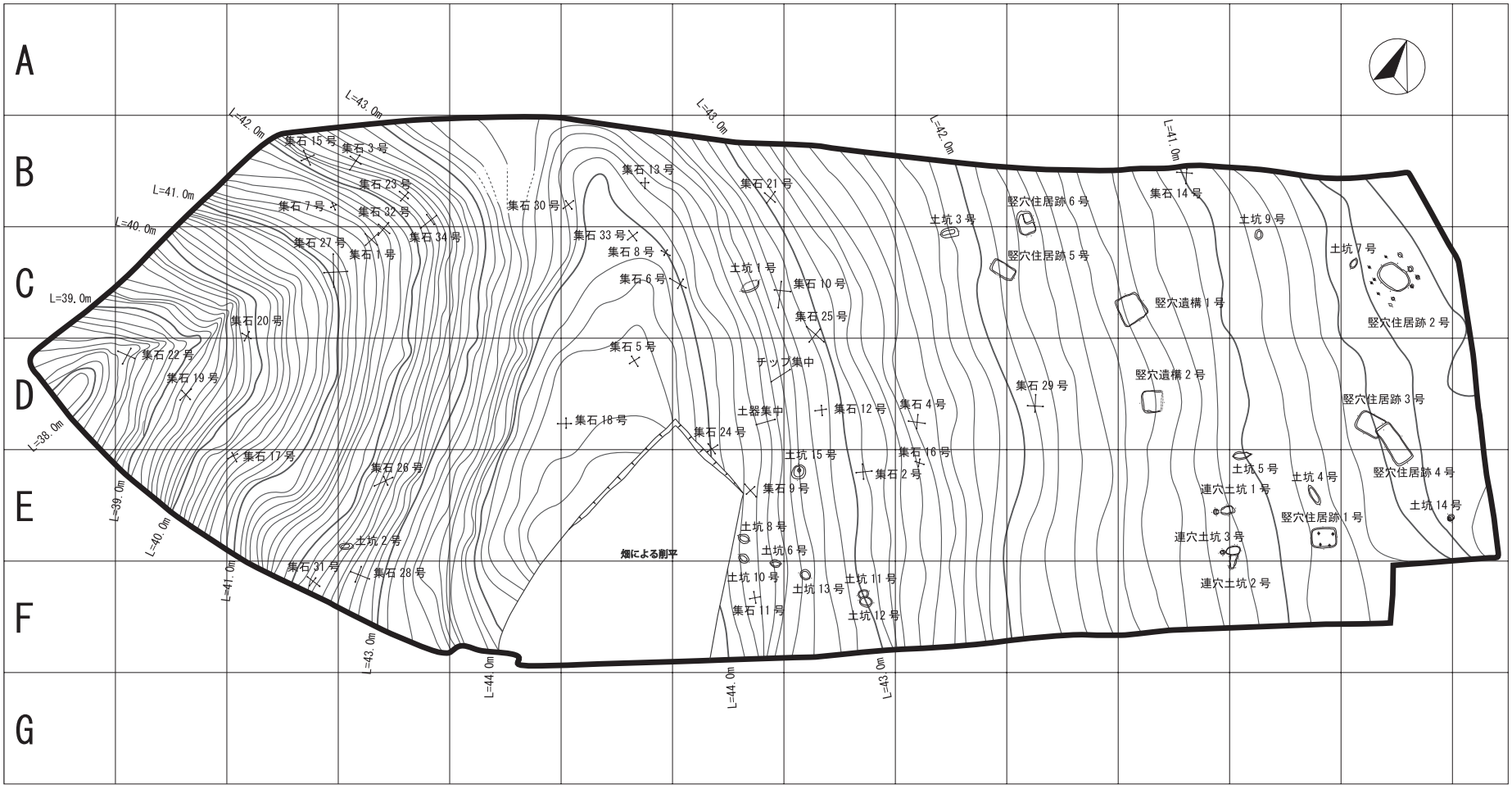
遺構内からは多くの遺物が出土しており，埋土中からの出土を含めた遺構内遺物の総数は，土器233点，石器57点，計290点である。遺構内出土遺物については，比較的に残存状況が良いものを実測し掲載した。土器は完形での出土がなかったため，できるだけ型式分類が可能なものを掲載したが，文様が施文されていないものが数点ある。なお，土器型式の分類は後述する遺物包含層出土土器の分類に即す。文中に分類の記述がないものに関しては，遺構内遺物観察表に記載してある。

１　竪穴住居跡（第16～25図）

竪穴住居跡は，遺跡全体で６軒検出された。検出面はいずれもⅧ層上面であるが，掘り込み面は検出面より上位のⅦ層中にあると思われる。埋土はⅦ層に該当する細かい黄色及び白色パミスを含む黒褐色土が主体であるが，暗茶褐色土や粘性のある茶褐色土がブロック状に混在するものも見られる。竪穴住居跡は，13・14区周辺の尾根から東側へやや離れた17～21区の標高41ｍ前後のほぼ平坦面に全て立地している。竪穴住居跡３・４号に切り合いが見られる以外は，５～20ｍ程度の間隔を空けて位置しており，ほぼ同時期の可能性が考えられる。

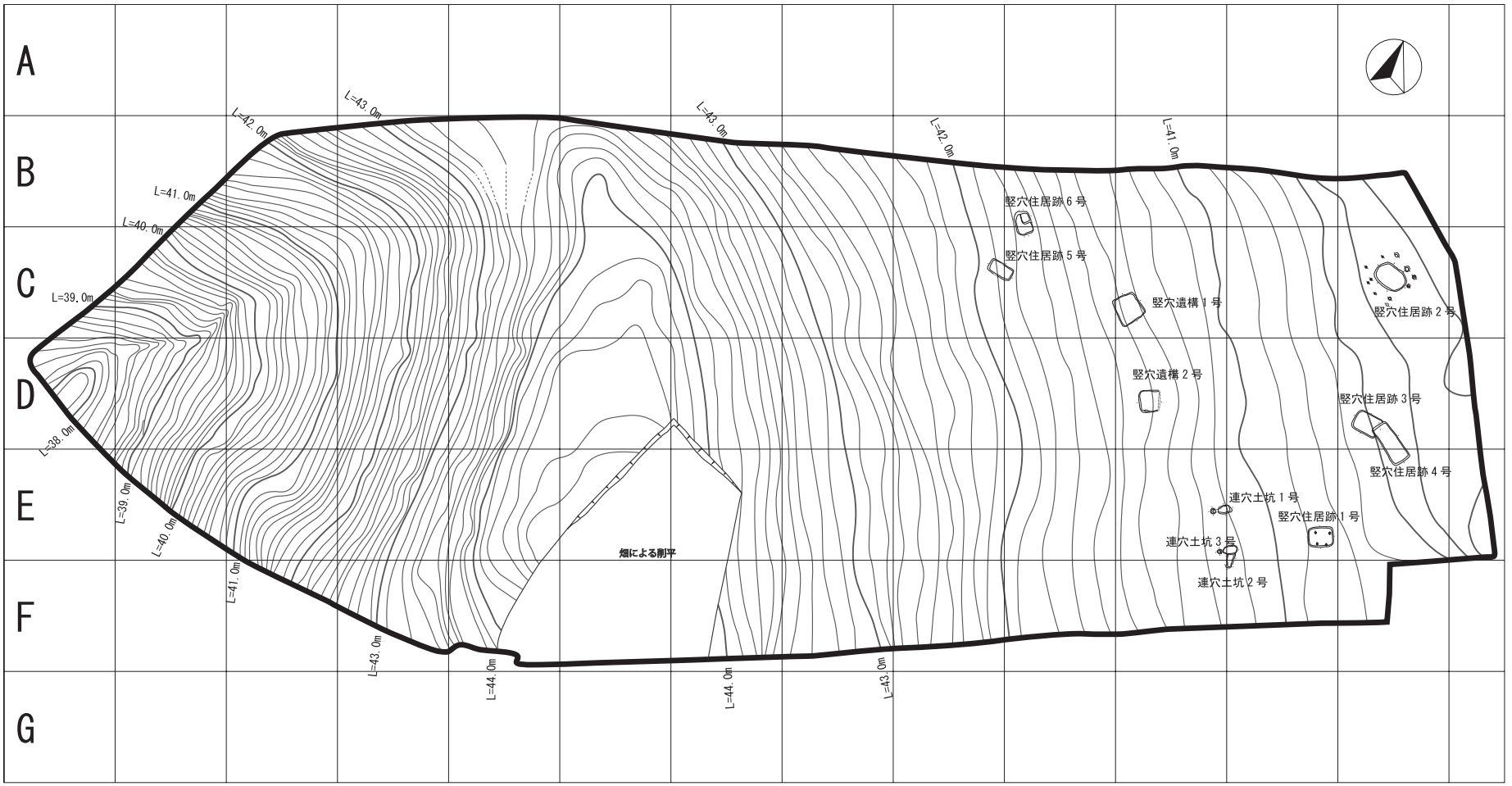
竪穴住居跡１号（第18・19図）

Ｅ－20区，東側へ緩やかに下っていくほぼ平坦面で検出された。周辺には多くの遺構があり，北側３ｍに土坑４号，西側７～８ｍには連穴土坑１～３号が位置している。形状は231×184㎝の隅丸方形を呈し，床面積は3.14㎡である。検出面からの深さは26㎝で，主軸は略東西方向である。掘り込みのプランは明瞭であり，壁際の埋土は粒状の黄色・白色パミスを含むやや硬質の黒褐色土であるが，中央部の上位には大部分暗茶褐色土が混入していた。この土は均一でなく黒色土と茶褐色土の混在土であり，部分によって大きなブロック状に見える。遺物の大部分は③の暗茶褐色土からの出土である。土器の多くは床面からやや浮いた状態で出土し，遺物表面は摩耗しており，残存状態が悪い。流れ込みの可能性もある



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第16図　遺構配置図



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第17図　竪穴住居跡・竪穴遺構・連穴土坑配置図

が，周辺からは遺物の出土がほとんど無いことから，住居内遺物が砂質土の大量流入により浮き上がった可能性が考えられる。床面と判断した面も多少安定さに欠ける。原因としては噴砂の影響や大木の樹痕とも考えられるが，詳細は不明である。床面には柱穴と思われる小ピットが４基確認された。検出面付近から炭化物が出土し，C14 年代測定の結果は，8,860 ± 40yrBP であった。

遺物は全体的に大きな土器片が多く，同一個体のものも混ざる。遺構内の北側に集中して総計 85 個の遺物が出土しており，その中から小片のものを除いた土器 16 点について実測し，掲載した。

１～11 は円筒形を呈し，外面に貝殻腹縁による刺突文を斜位または横位に施すⅥ類の下剥峯式土器に相当する深鉢である。１，２は口縁部である。１の口縁部断面は方形に近く，口唇部を肥厚させ，緩やかに内湾する。口縁部に横位，胴部に斜位の貝殻刺突文を施している。２は直線的に立ち上がる口縁部で，貝殻刺突文は口縁部から約５ cm のところまで横位に，それより下の胴部には斜位に施されている。また，口縁直下には長さ約 3.5㎝，幅約１㎝の瘤状突起を縦位に貼り付けている。内面は丁寧なナデ調整が施される。３～７・９は胴部片である。３は貝殻腹縁部による刺突文をやや広めの間隔で羽状に施している。胎土に砂粒が多く混ざる。４は貝殻刺突文を胴部上位と下位には斜位，中位には横位に施している。横位の刺突文が斜位の刺突文に切られている痕跡が確認できることから，横位に刺突した後に斜位の刺突文を施している可能性が考えられる。５は斜位の貝殻刺突文を密に施しているが，中位より下部には横位に施文している。また，刺突文は，４と同様に横位に施文後，斜位に施している。内面は丁寧なナデ調整が施される。６は上位に横位，胴部に２条単位の刺突文を鋸歯状に施し，文様を構成している。７は外面に斜位の貝殻刺突文を施し，内面は丁寧なナデ調整を施している。９はやや縦位気味の刺突文を施す胴部であり，底部近くに施文は無く，丁寧なナデ調整痕が残る。８，10，11 は底部である。８は残存状況が悪いが，胴部に貝殻腹縁部による刺突文が観察できる。10 は，胴部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。計７片の接合資料であり，復元底径は 11.0㎝であるが，全体的に摩滅が見られ残存状態は不良である。11 は包含層遺物と接合しており，接合距離は約 30 ｍである。胴部下端部の器壁は薄く，外面は貝殻刺突文を施文し，内面は丁寧なナデで調整されている。肥厚な底部はやや上げ底気味であり，胴部との接合は外縁上である。底部外面はナデ調整で丁寧に仕上げている。復元底径は 12.4㎝を測る。

12～16 は，短条痕文で鋸歯状の文様を施す特徴をもつ土器である。12，14，15 は口縁部，13 は胴部，16 は底部である。口唇部断面は方形を呈し，平坦面をもつ。いずれも口縁部側面に突帯が１条巡り，口縁端部から突帯下位まで横位の貝殻刺突文を数条施す。胴部には，３本一組もしくは４本一組の短い条痕文を鋸歯状に施す点は一緒である。ただ，突帯下位に施され横位の貝殻刺突文が，12 が４条，14 が１条，15 が２条と異なる。内面調整はいずれも丁寧なナデ調整が施される。また，口唇部や胴部は直線的で，湾曲の度合いが小さく，円筒形以外の器形の可能性がある。口唇部が途中で湾曲する点を除けば，12 とⅩⅤ類の 534 は類似する。16 は丁寧なナデ調整により内部が仕上げられた底部片である。底径は 9.1㎝を測る。胴部下位には 12～15 に見られる鋸歯状の短条痕文の折り返し部分がわずかに確認できる。12～16 は外面の文様形態から，Ⅷ類に相当すると考えられる。

竪穴住居跡２号（第 20・21 図）

Ｃ－21 区，東側へ緩やかに下っていくほぼ平坦面で検出された。調査区の東端にあたり，一部分の検出であったため調査区を，拡張して全体像を確認してから調査を行った。大部分はⅧ層上面での検出であるが，拡張した部分についてはⅦ層下位にてプランを検出した。

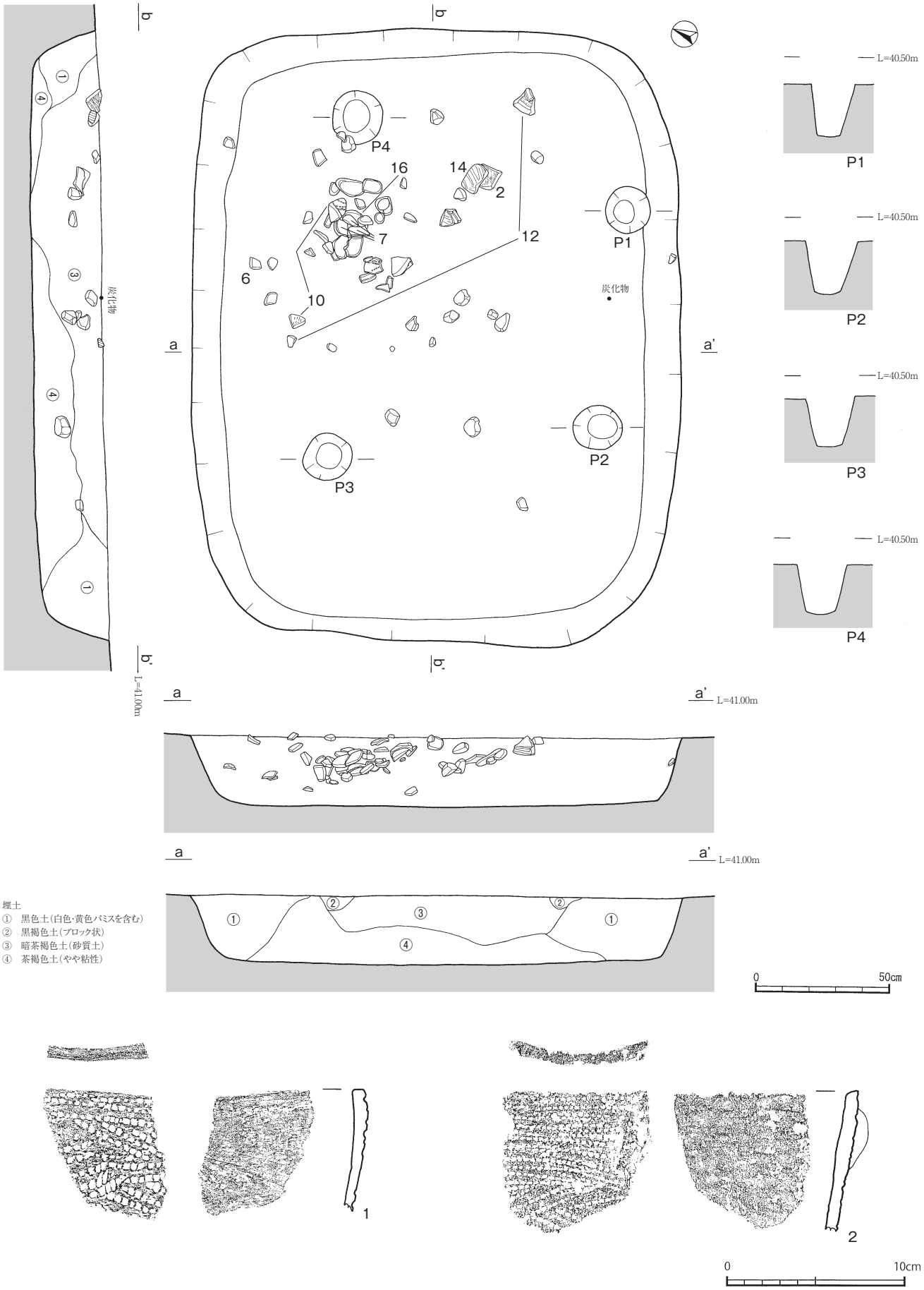
平面形状は 291 × 212㎝の楕円形に近い隅丸長方形を呈し，床面積は 3.99㎡である。主軸は略東西方向である。検出面からの深さは 30㎝であり，埋土は粒状の白色，黄色パミスを含む硬質の黒色土及び黒褐色土で，下位の床面近くは茶褐色粘質土が不規則に混在し安定していない。床面に硬化面はなかった。住居の埋土中から炭化物が検出され，C14 年代測定結果は，8,850 ± 40yrBP であった。竪穴住居跡２号の周辺から小ピットが多く検出され，竪穴住居跡を取り囲むような配置であることから，住居を支える柱穴の可能性がある。

埋土中より土器片３点，石斧１点，チップ１点総計５点の遺物が出土しており，その中から実測可能な土器片２点，石斧１点の計３点について実測し掲載した。17・18 は，外開きに直線的に立ち上がる円筒形の土器である。17 は口縁部で口唇部に平坦面を持つ。外面には，幅約３㎜で浅い凹線に近い文様が縦位に施されている。18 は胴部片であり，外面に斜位の貝殻刺突文を羽状に施す。Ⅵ類の下剥峯式土器に有する特徴である。内面は丁寧なナデ調整である。19 は石斧の刃部先端部分である。ホルンフェルス製の磨製石斧で，その大きさや厚さから小型の石斧であったと考えられる。刃部は鋭く丁寧に研磨されている。

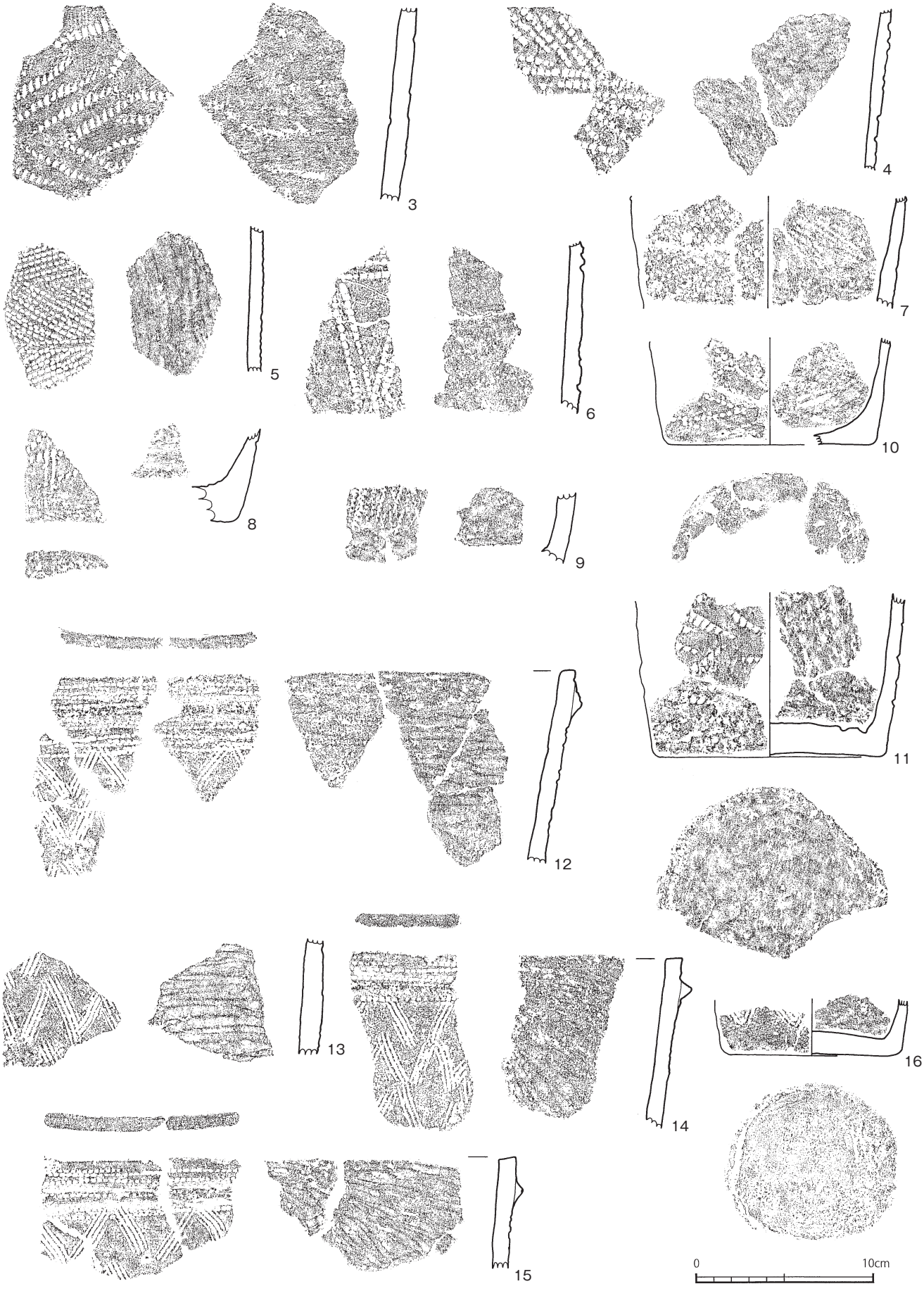
竪穴住居跡３号（第 22 図）

Ｄ－21 区，東側へ緩やかに下っていくほぼ平坦面で，Ⅷ層上面から検出された。東側の一部が竪穴住居跡４号と重複している。周囲に他の遺構は見られず，南西側約５～６ｍ先に竪穴住居跡１号が位置する。

検出面からの深さは 25㎝であり竪穴住居跡４号の床面よりやや深いことから，床面を明確に判断することが



第 18 図　竪穴住居跡 1 号及び出土遺物 1



第 19 図　竪穴住居跡 1 号出土遺物 2

できた。住居跡の規模及び形状は完掘状況からの推定になるが，250 × 186㎝の隅丸方形を呈すると思われ，床面積は 3.62㎡である。床面はⅧ層を掘り抜いてⅨ層に達している。主軸は竪穴住居跡２号とほぼ同じ略東西方向である。埋土は粒状の黄色，白色パミスをやや多く含む硬質の黒色土である。同じ黒色土・黒褐色土の４号の埋土よりもやや明るくパミスの含量が多いことから，３号と４号の関係を確認することができた。４号が３号を切っている状況から，３号を廃棄後しばらくの期間を経過してから４号が掘られたと考えられる。床面からの出土ではないが埋土中から炭化物が出土し，C14 年代測定の結果は，8,810 ± 30yrBP である。床面から柱穴や硬化面は確認されなかった。

埋土中からは土器 10 点，磨石２点の総計 12 点の遺物が出土した。その中から，小片で残存状況が悪いものを除き，接合資料を含む土器２点を実測し，掲載した。20・21 は胴部片である。20 はやや外反して直線的に立ち上がり，胴部上位はやや内湾する。外面は貝殻刺突文を横位に３条，その下に斜位の貝殻刺突を施している。貝殻刺突文のみの施文であることからⅥ類の下剥峯式土器に相当する。21 は直線的に立ち上がり，胴部下位の器壁が厚くなっていることから底部付近の部分であると思われる。やや赤い橙色の外面は丁寧なナデ調整の後，貝殻刺突文を斜位に施す。内面も丁寧なナデ調整で，胎土に金雲母を含む。20 と同様に貝殻刺突文のみが施文されることからⅥ類の下剥峯式土器に相当する。20 と 21 は文様や調整，胎土なども類似していることから，両者は同一個体の可能性が考えられる。

竪穴住居跡４号（第 23 図）

Ｄ － 21 区，Ⅷ層上面で，西側の一部が竪穴住居跡３号と重複し検出された。前述したように，重複した床面には若干のレベル差があることからそれぞれの床面を明確に判断できた。

住居跡の形状は 401 × 170㎝の隅丸長方形を呈し，床面積は 4.58㎡で，本遺跡で最大の竪穴住居跡である。検出当初は連なった２基の遺構として取り扱ったが，切り合い関係が見られず，遺構の連続性が確認されたので，１つの竪穴住居跡として判断し調査を行った。検出面からの深さは 26㎝であり，床面は小さな凸凹が見られるが，ほぼ平坦である。主軸は３号と同じ略東西方向であるが，３号よりも南東方向へ約 30° ほど傾いている。埋土は粒状の黄色・白色パミスをやや多く含む硬質の黒色土・黒褐色土である。３号の埋土よりもやや暗く，黒色の割合が多い。柱穴や硬化面，炭化物は確認されなかった。

埋土中からは，外面に斜位の貝殻刺突文を施す土器小片１点と，安山岩製の磨面が残る石皿縁辺部片１点の総計２点が出土したが，２点とも残存状況が悪いため掲載には至らなかった。

竪穴住居跡５号（第 24 図）

Ｃ － 17・18 区，東側へ緩やかに下っていく緩斜面のⅧ層上面より検出された。北側約４ｍに竪穴住居跡６号が，北西側約５ｍに土坑３号が位置している。

平面形状は 230 × 125㎝の隅丸長方形を呈し，床面積は 2.01㎡である。主軸は略東西方向で，竪穴住居跡２号・３号とほぼ同じ方向である。検出面からの深さは 24㎝であった。埋土は細粒な黄色，白色パミスを含む硬質の暗褐色土で，床面近くの一部に明黄褐色土がブロック状に混在する。床面に硬化面は見られず，茶褐色土が筋状に入り安定した平坦面とはいえない。また地形の傾斜に合わせてやや東側に傾く。

埋土中からは，土器片が２点出土し，その内１点について実測し掲載したが，もう１点については小片のため図化しなかった。22 は胴部片で，外開きに直線的に立ち上がるが，胴部上位はやや外反する。包含層遺物と接合しており，その接合距離は約２～23.5 ｍである。外面に上位・中位・下位に２条単位の貝殻刺突文を横位に巡らせることで区画し，その間に斜位の刺突文を密に施していることからⅥ類の下剥峯式土器と思われる。

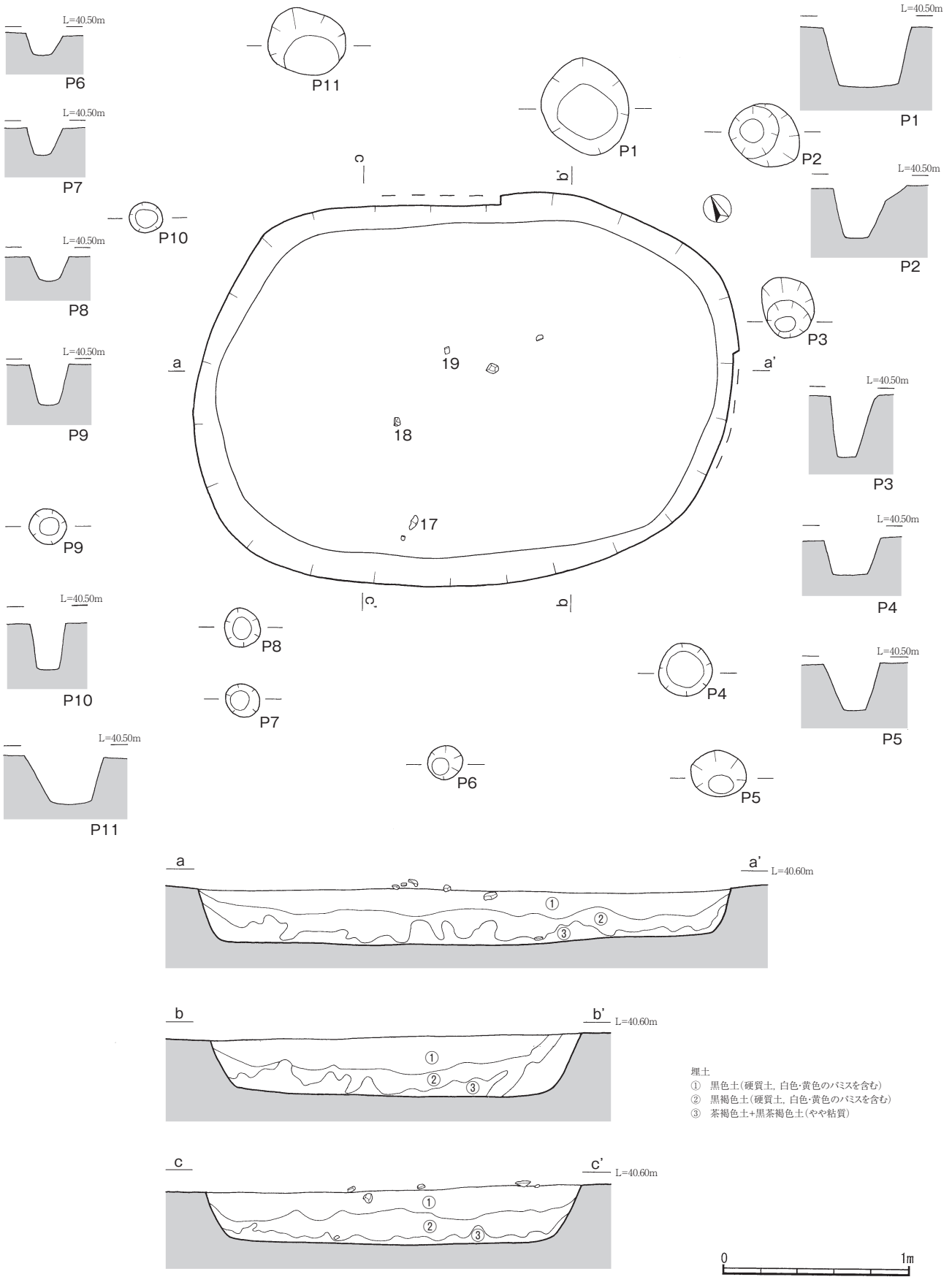
竪穴住居跡６号（第 25 図）

Ｂ・Ｃ － 18 区，東側へ緩やかに下っていく緩斜面で，Ⅷ層上面から検出された。南側約４ｍに竪穴住居跡５号が，西側約６ｍに土坑３号が位置している。その他周辺には遺構は検出されなかったが，北側の調査区外には類似した遺構が存在する可能性がある。

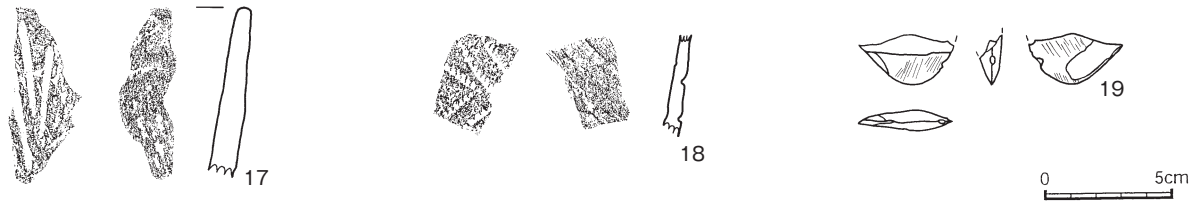
平面形状は 220 × 148㎝の隅丸長方形を呈し，床面積は 1.82㎡である。主軸は略南北方向から約 30° 西へ傾いており，主軸が斜面に対して平行である。検出面からの深さは 32㎝であるが，北東側の隅が深く段を成しており，深さは 35㎝となる。埋土は白色パミスを含む硬質の黒褐色土で，床面近くは黄褐色土や茶褐色粘質土が混在しており安定していない。

竪穴住居跡５号・６号は竪穴住居跡１号～４号の住居跡群と距離があり，やや高台に位置している。また，形状もやや小さめでコンパクトであるという特徴がある。

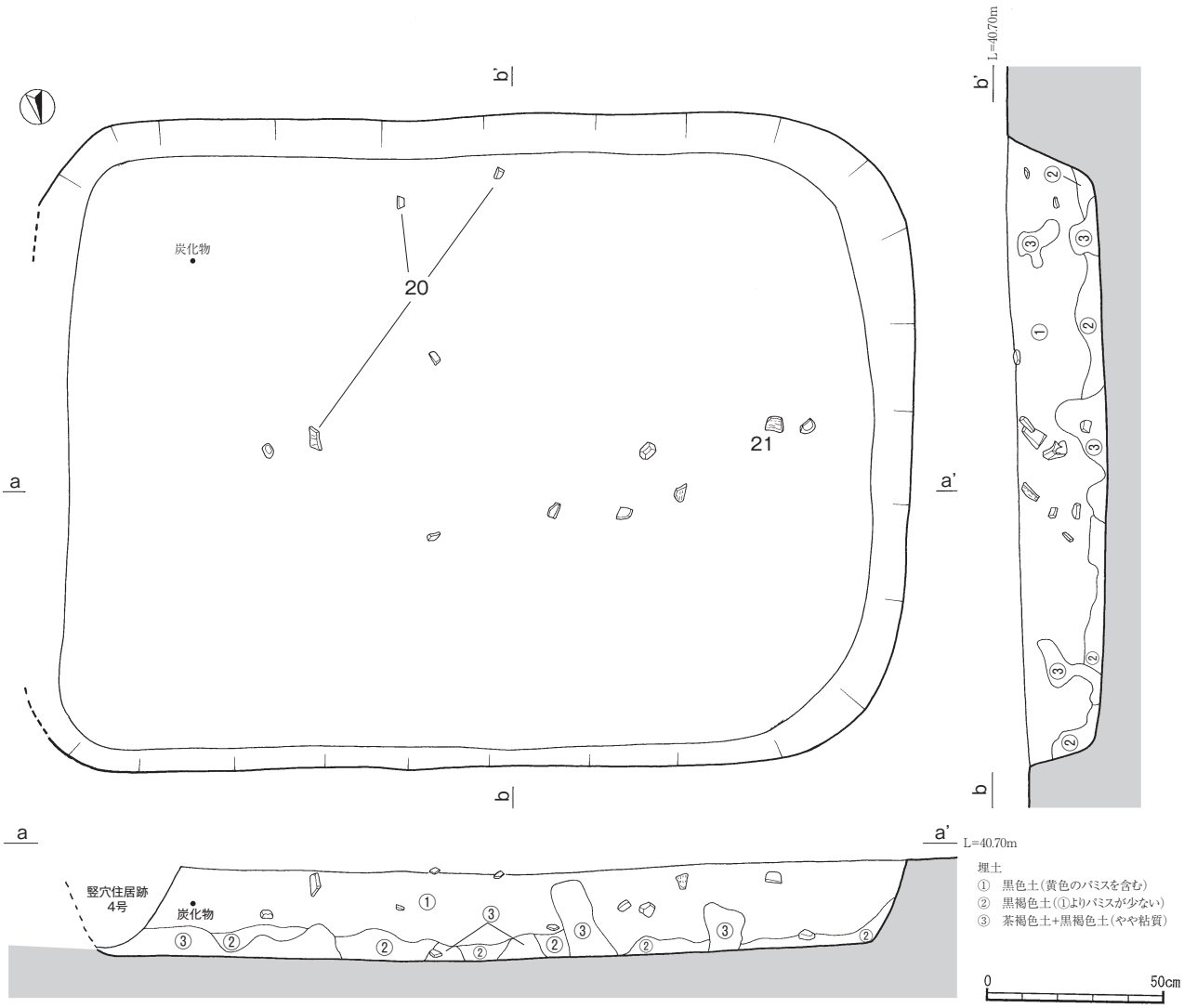
埋土中から遺物が６点出土した。このうち土器１点を実測・掲載し，残りの５点は小片であったため図化しなかった。23 は，やや外反しながら直線的に立ち上がる土器の胴部である。外面はにぶい橙色で，横位と斜位の貝殻刺突文が交わるように施されているが，内面は剥落により欠損している。胎土には細粒な金雲母が混ざる。貝殻刺突文のみが施された胴部片であることから，Ⅵ類の下剥峯式土器に相当する。

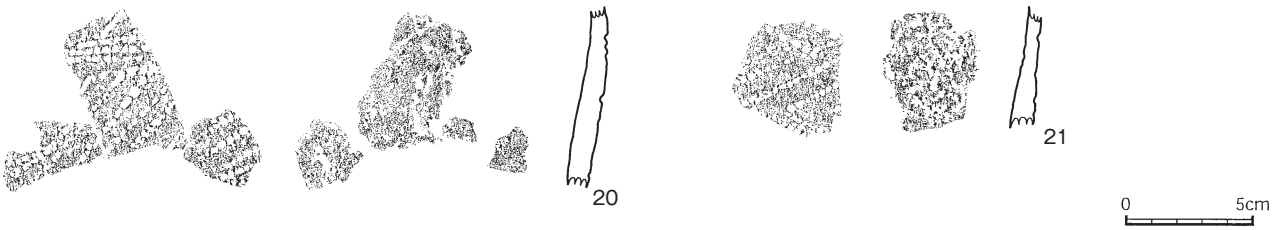


第 20 図　竪穴住居跡２号

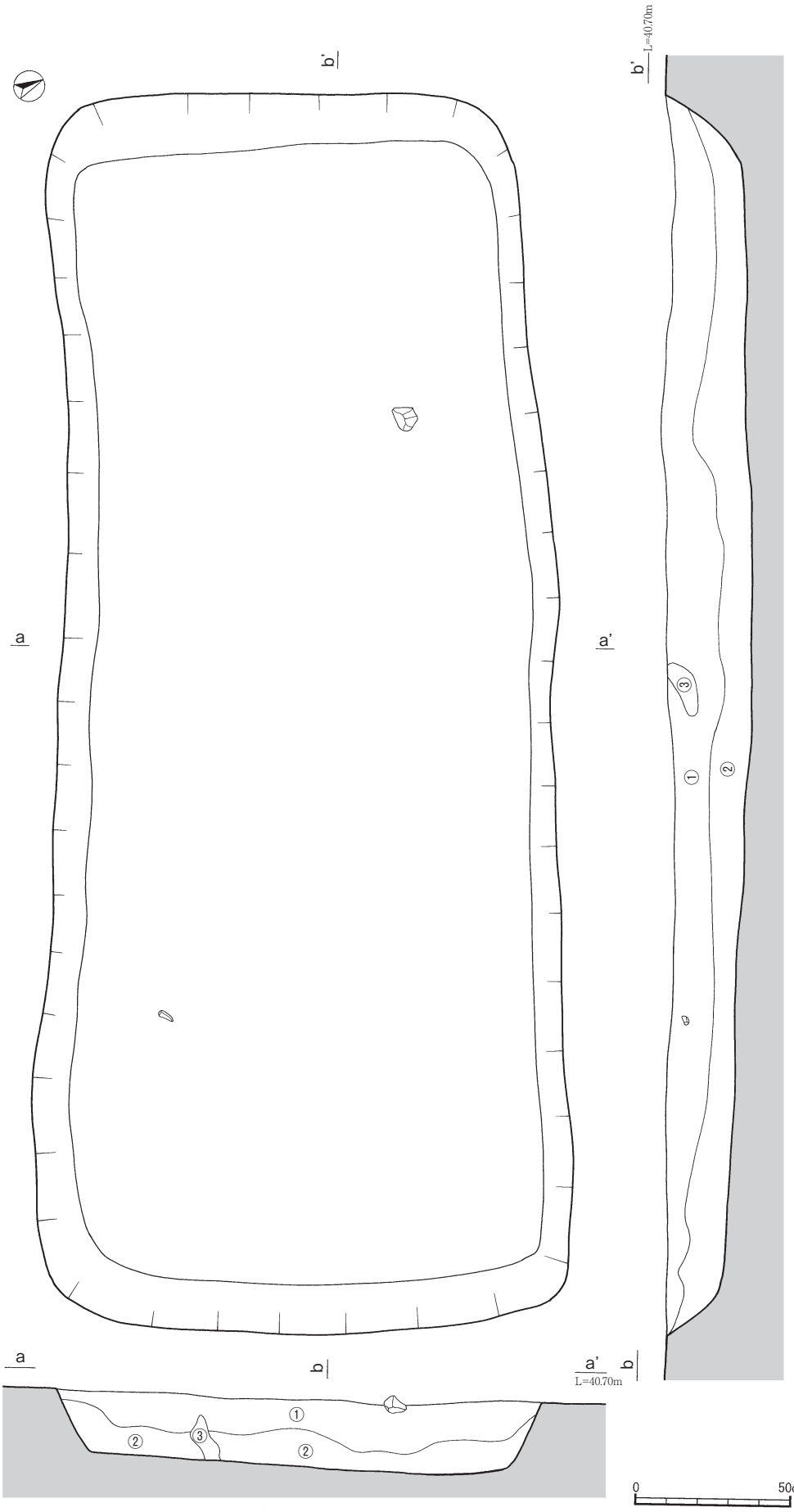


第 21 図　竪穴住居跡２号出土遺物





第 22 図　竪穴住居跡３号及び出土遺物



埋土
① 黒色土（白色パミスを多く含む）
② 黒褐色土（①よりやや明るく，軟質）
③ 茶褐色土+黒褐色土（やや粘質）

第 23 図　竪穴住居跡４号

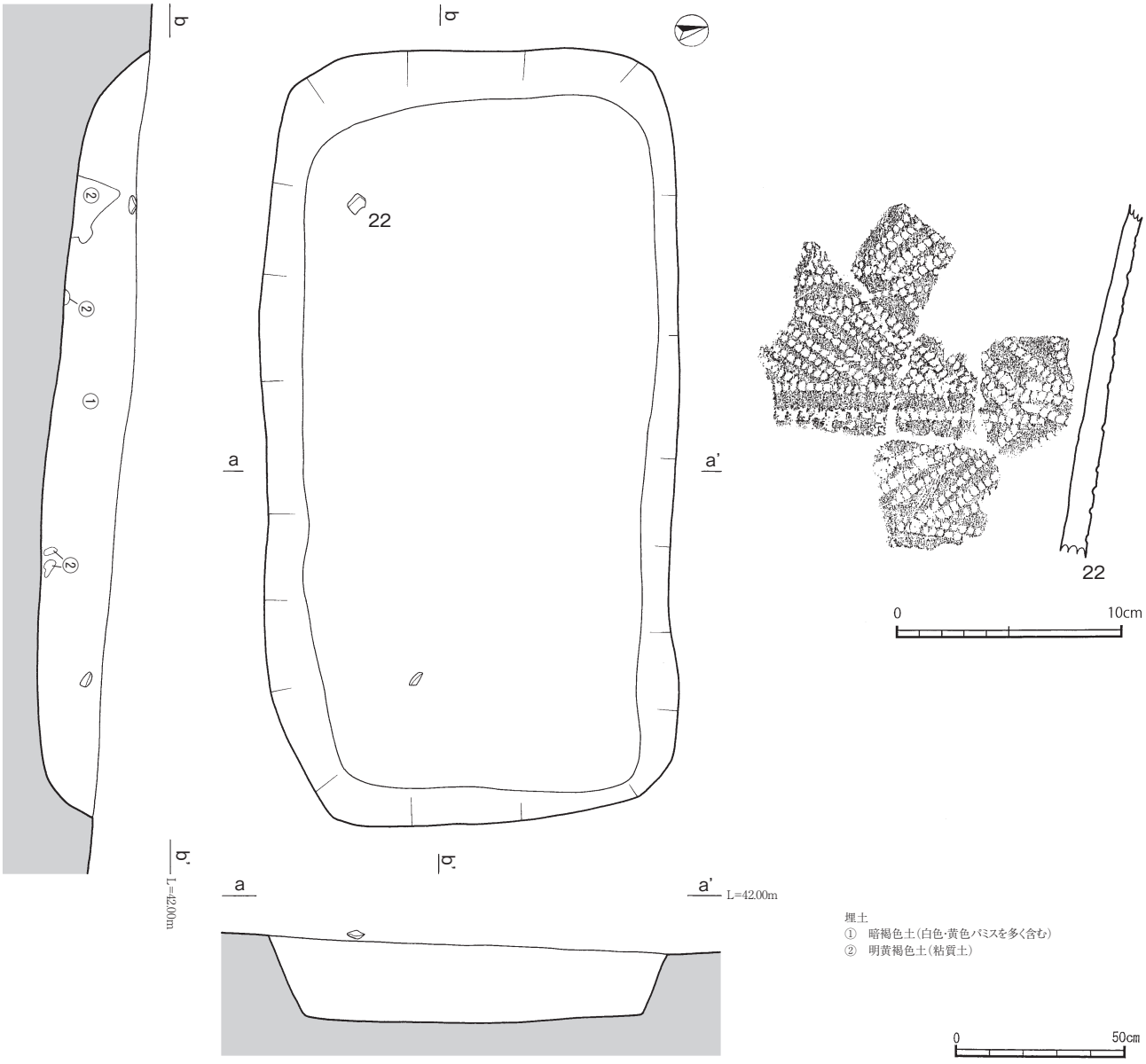
2　竪穴遺構（第 26～27 図）

竪穴遺構は２基検出された。検出面は前述の竪穴住居跡と同じⅧ層上面であり，両者とも平面形は隅丸方形を呈している。検出当初は竪穴住居跡として調査していた。しかし，床面が黒褐色土と茶褐色土が入り交じり凸凹した不安定な状態であったことから住居跡とは判断しなかった。しかし，平面形が隅丸方形を呈すること，竪穴住居跡と埋土堆積の様相と似ていること，遺物や炭化物がわずかながら検出されていること，竪穴住居跡が検出されたエリアに位置することなどから，竪穴住居跡との関連性のある竪穴遺構とした。埋土はⅦ層に相当する１～２㎜の白色パミス，１～５㎜の黄色パミスを含んだ黒褐色土が主体であり，その直下にやや硬い暗黒褐色土層が見られる。２基は，調査区東側の緩やかな平坦面の 19 区に位置する。周囲には竪穴住居跡･連穴土坑･土坑･集石が見られ，他遺構に取り囲まれている状況である。

竪穴遺構１号（第 26 図）

Ｃ－ 18･19 区，東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された。西側に竪穴住居跡５号，南東側に竪穴住居跡２号が位置し，これらの遺構とは，７～10 ｍ程度離れて位置している。

竪穴遺構１号は 262 × 245㎝のほぼ方形を呈し，床面積は 5.56㎡である。主軸は略東西方向であり，検出面からの深さは 28㎝である。埋土は粒状の黄色，白色パミスを含むやや硬質の黒褐色土で，下位は黄色パミスを多く含み，さらに硬質の黒褐色土である。床面に硬化面は見られず，黒褐色土と暗褐色粘質土等が入り混ざり凸凹した状態である。



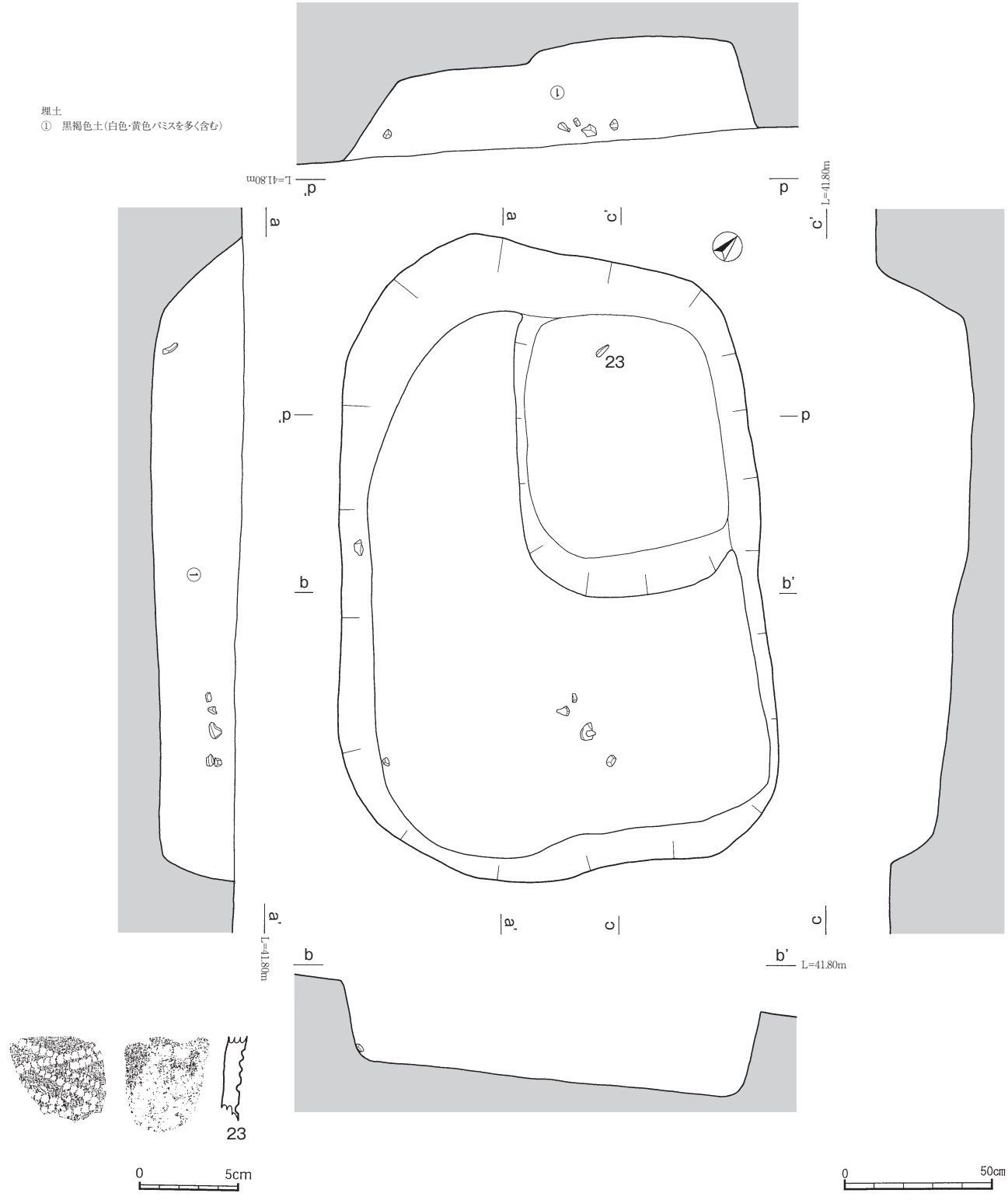
第 24 図　竪穴住居跡５号及び出土遺物

埋土中から遺物の出土は確認されなかったが，炭化物がわずかに出土し，C14 年代測定を行った結果，8,820 ± 30yrBP であった。

竪穴遺構２号（第 27 図）

D － 19 区，竪穴遺構 1 号の南東約 10 mの，東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された。隣接した遺構はなく，南方向６～15 mには竪穴住居跡，連穴土坑，土坑などの遺構が位置している。

竪穴遺構の形状は 177 × 185cmのほぼ隅丸方形を呈し，床面積は 3.27㎡である。主軸は略東西方向であり，検出面からの深さは 33cmである。埋土は粒状の黄色，白色パミスを含む黒褐色土で，下位の床面近くは，白色・



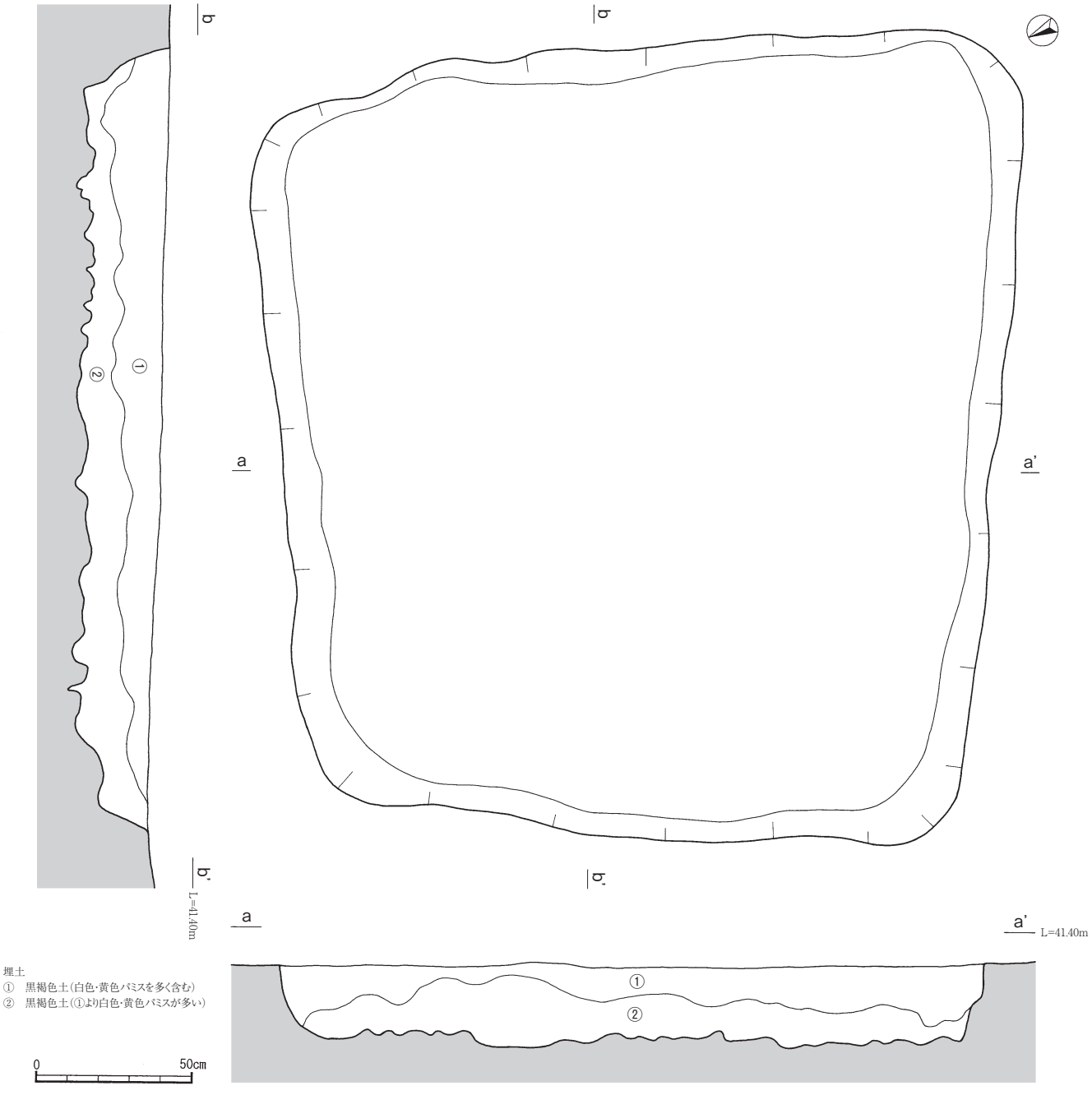
第 25 図　竪穴住居跡６号及び出土遺物

黄色パミスを多く含む暗褐色土である。当遺構の東側は，樹痕，地層の横転，壁面の崩壊などが部分的に見られる状況であったため，その部分については，推定線で示している。炭化物も埋土中より出土し，C14 年代測定の結果は 8,950 ± 40yrBP である。

埋土中からは土器片３点が出土しており，その中から土器片１点を実測し掲載した。残りの土器片２点は小片であったため図化できなかった。24 はやや広がりながら直線的に立ち上がり，口縁部は端部で器壁が薄くなる。口唇部は水平な平坦面を持ち，断面方形を呈す。口縁部外面に横位の刺突文が４条巡り，胴部には１単位３条の短い貝殻条痕を鋸歯状に施す。内面調整は，丁寧なナデ調整が施される。胎土に金雲母が多く混ざる。貝殻刺突文と短い貝殻条痕文を組み合わせて文様を構成することから，Ⅷ類土器に分類できる。

３　連穴土坑（第 28～29 図）

連穴土坑は，３基検出された。いずれも 19・20 区のほぼ平坦面で検出された。検出面はいずれもⅧ層上面で，埋土はⅦ層に該当する細かい黄色及び白色パミスを含む



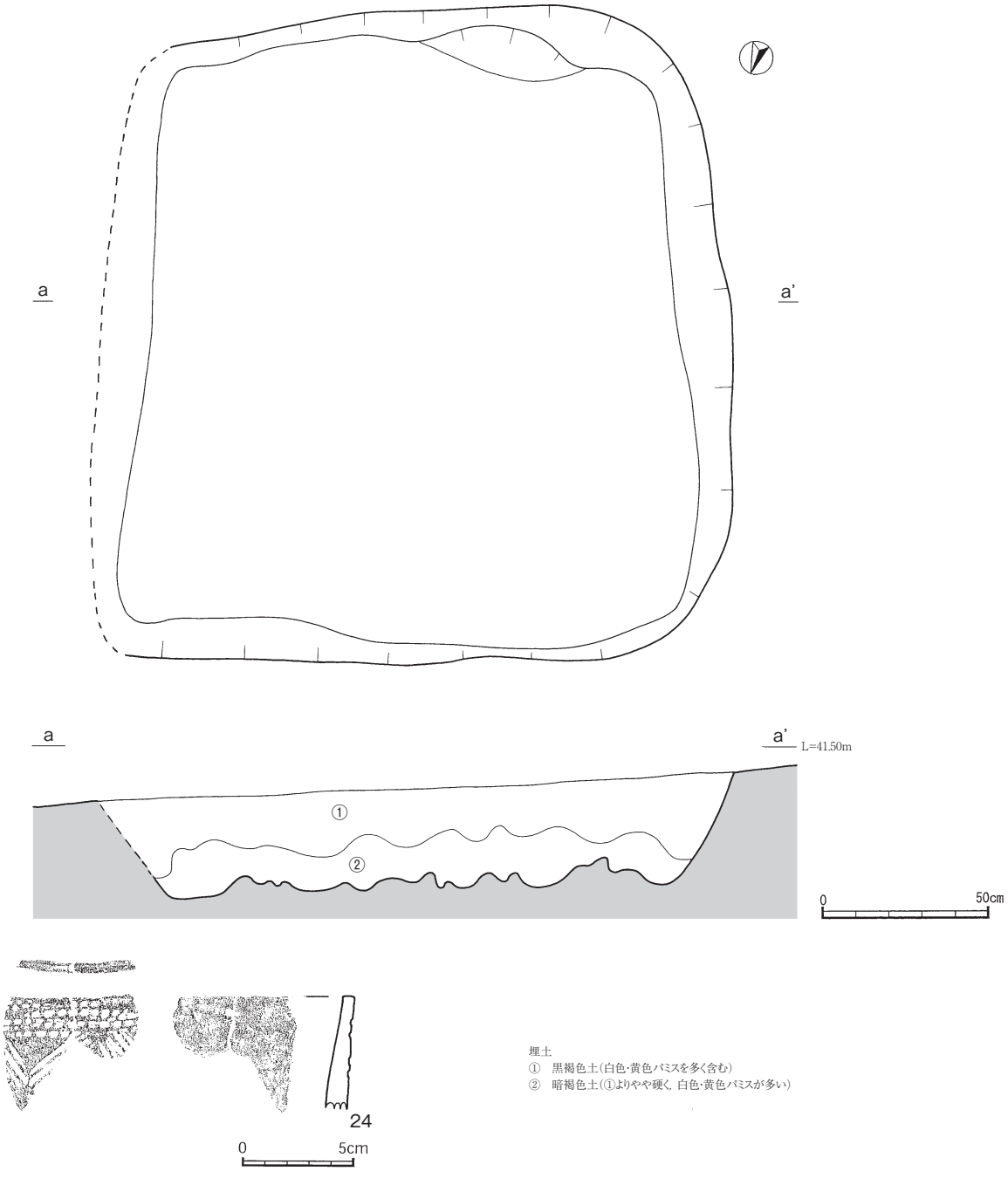
第 26 図　竪穴遺構１号

黒色土及び黒褐色土が主体であり，下位に黒色土の小ブロックを含むやや粘性のある黒褐色土が堆積している。周囲には土坑・竪穴住居跡・竪穴遺構等の遺構が集中しているエリアに位置している。当初土坑として取り扱ったものの中で，平面形状やブリッジ部分の存在，崩落の痕跡などを総合的に判断し，連穴土坑として取り扱った。

連穴土坑１号（第 28 図）

Ｅ－ 20 区，わずかに東側へ下っていく緩斜面で検出された。北方向に土坑５号，東方向に竪穴住居跡１号，南東方向に連穴土坑２号が隣接する。平面形の全長は193cmで，円形の煙出部と楕円形の開口部から構成されている。

煙出部が 52 × 46cm，深さ 36cm，開口部が 126 × 76cm，深さ 46cmを測る。硬質な薩摩火山灰層を利用したブリッジが残っており，煙道部は約 18 × 20cmであった。床面に平坦面を持ち，煙道部の下が一番深く，煙出部，開口部両方向へわずかに傾斜している。主軸は略東西方向で，標高の高い西側に煙出部が位置している。明確な焼土痕は確認されなかったが，煙出部側の埋土中より炭化物が出土し，C14 年代測定の結果は，8,920 ± 40yrBP



第 27 図　竪穴遺構２号及び出土遺物

である。

煙道から土器底部片１点が出土した。25 は内外面とも工具ナデによる調整が施されているが，内面の調整は粗い。土器型式に関しては，判断できる胴部や文様が残っていないため不明である。

連穴土坑２号（第 29 図）

E・F － 20 区，わずかに東側へ下っていくほぼ平坦面で検出された。連穴土坑１号から南へ約３m，竪穴住居跡１号から西へ８mの位置に検出された。主軸は略南北方向であり，連穴土坑１号とほぼ 90° ずれる。ブリッジ部分は崩壊しており原型を留めていないが，平面形がこけし型を呈しており，くびれている部分はブリッジの名残と考えられることから，南端部分が煙出部と思われる。開口部の北端は連穴土坑３号に切られており，ブリッジも崩落していることから全体像は不明であるが，検出状況から全長約 210cm程度，煙出部の径は 50cm，深さ 24cm，開口部の横幅は 64cm，深さ 26cmと推測される。開口部の断面形は深皿形を呈し，床面は平坦面を形成する。くびれ部の埋土④にはⅧ層の小ブロックが混ざり，ブリッジ部分の崩落痕と思われる。

埋土中より遺物の出土は無かったが，床面近くの埋土中から炭化物が出土しており，C14 年代測定の結果は，8,850 ± 40yrBP である。

連穴土坑３号（第 29 図）

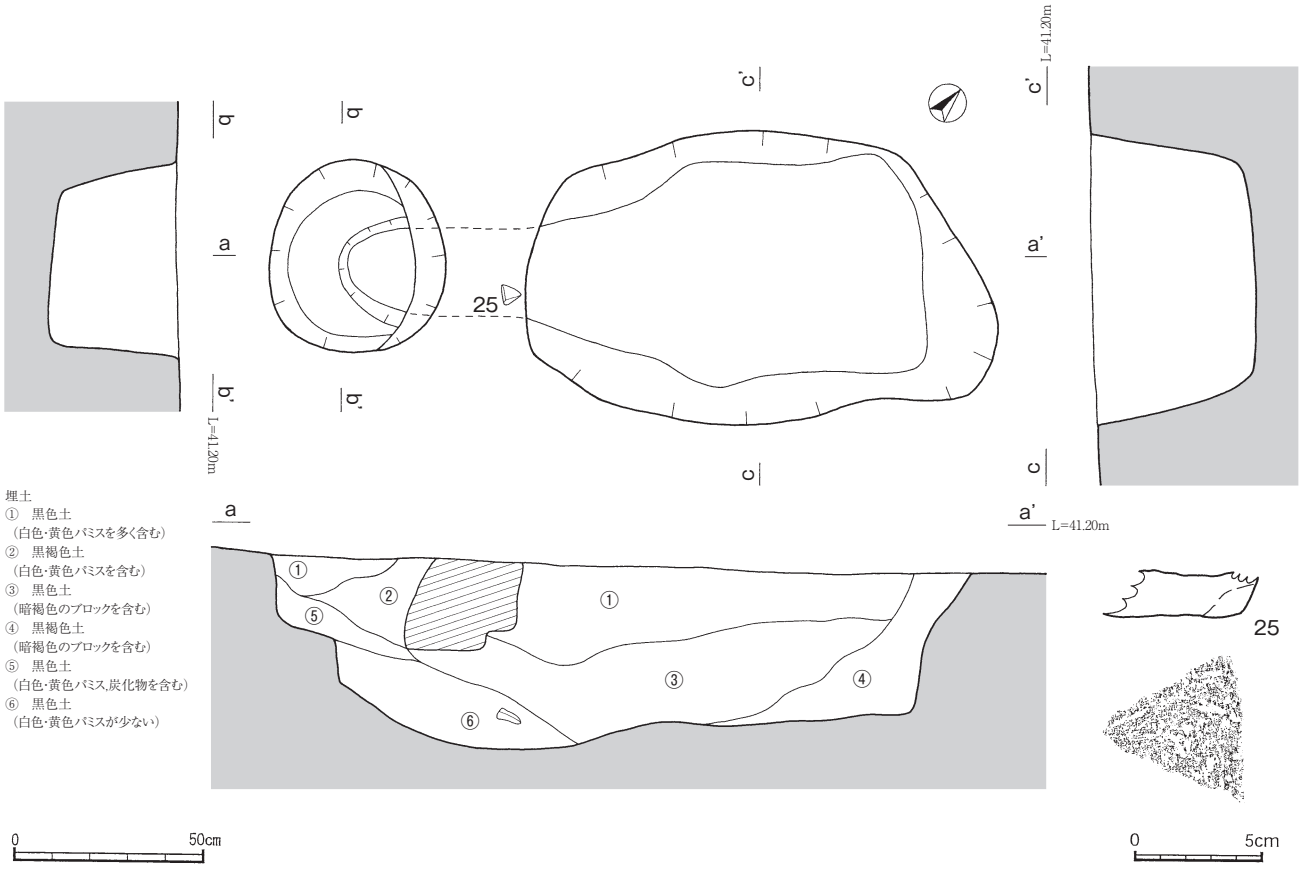
E － 19・20 区，連穴土坑２号の北端を切るように検出された。主軸は略東西方向であり，北方向約３mに連穴土坑１号が位置しており，主軸も同じ略東西方向である。

平面形の全長は 184cmで，円形の煙出部と楕円形の開口部から構成されている。煙出部が 42 × 40cm，深さ 28cm，開口部が 132 × 76cm，深さ 28cmを測る。ブリッジ部分が残っており，煙道部は約 12 × 10cmであった。開口部の床面は平坦面を形成するが，煙道部分がやや高くなり，また幾分狭くなっている。煙出部後方の床面には段があり，階段状を呈する。

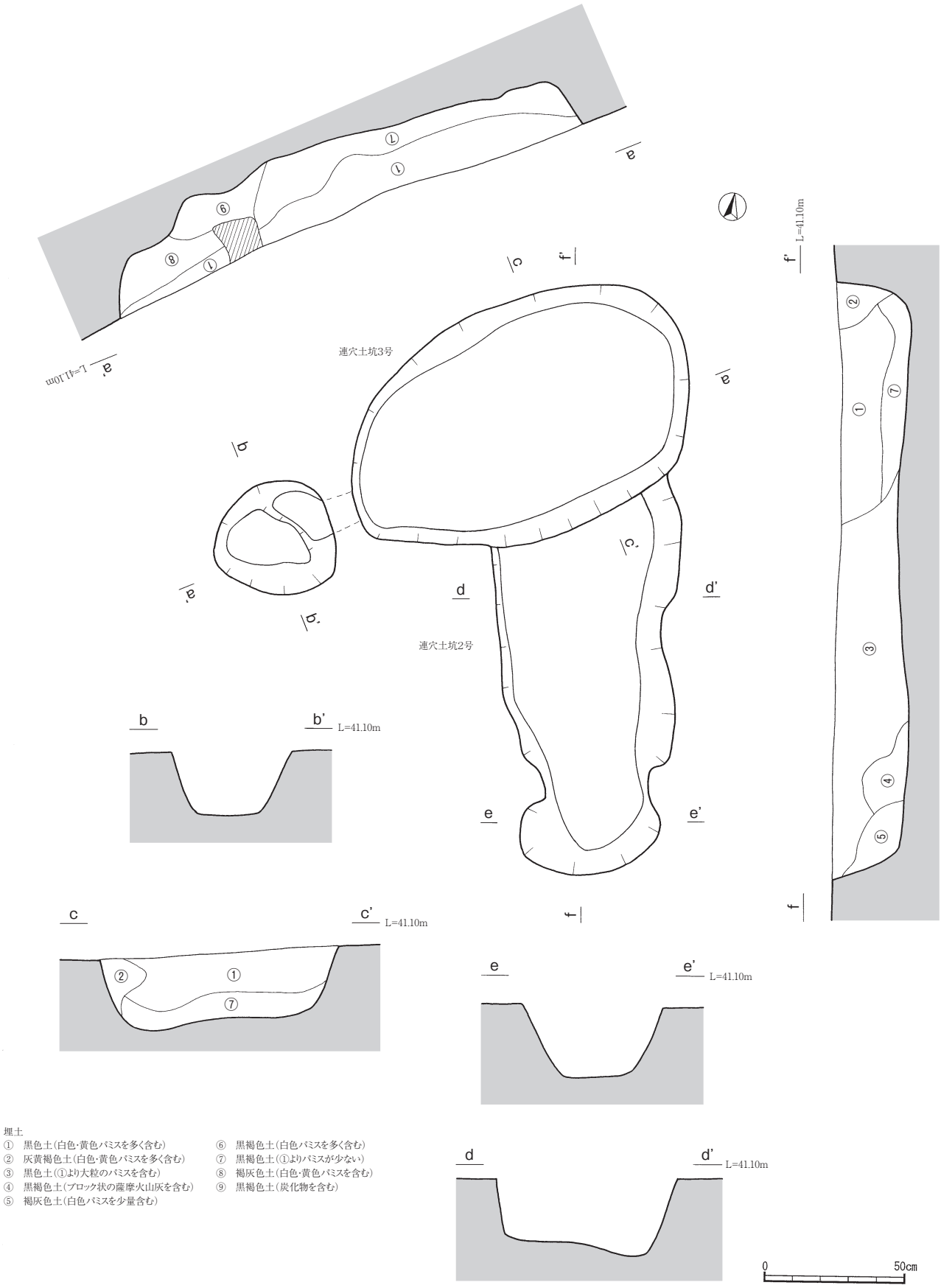
埋土中から遺物の出土は無かったが，開口部の煙道部側で焚口と思われる付近から炭化物が出土し，床面には硬化面が広がっていた。炭化物の C14 年代測定の結果は，8,890 ± 30yrBP である。炭化物の測定結果より，連穴土坑２号と３号は時代的にほとんど差がないが，２号の方が若干古い結果であること，また３号が２号を切っている状況からも２号より３号が新しい時期のものと考えられる。

４　土坑（第 30～35 図）

土坑は，調査区内から 15 基検出された。検出面はいずれもⅧ層上面で，埋土はⅦ層の黒褐色土が主体である。



第 28 図　連穴土坑１号及び出土遺物



第 29 図　連穴土坑２号・３号

本遺跡の尾根部に当たる 14 区を境に，緩やかに下っていく東側では 14 基が検出されているが，地形が急斜面の西側では土坑２号の１基のみが検出された。尾根に近いＥ･Ｆ － 15･16 区に集中域が見られる。埋土中に被熱により赤化した破砕礫が含まれ，周辺には掘り込み内に大量の礫を伴う集石が位置していることから，土坑の上面に礫の集中等は確認されていなくても，集石の掘り込みであった可能性が考えられる。

検出された土坑は，平面形の形状により次のように，長楕円形・楕円形・円形の３タイプに分けた。以下，分類に従い記述する。

Ⅰ類……長楕円形を呈するもの
（１～５号）
Ⅱ類……楕円形を呈するもの
（６～12 号）
Ⅲ類……円形を呈するもの
（13～15 号）

【Ⅰ類】

土坑１号（第 31 図）

Ｃ － 15 区，東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出されたⅠ類の土坑である。北側は断面が崩落等のためか平面プランが不明確であった。北東－南西軸で 184㎝を測る。検出面からの深さは 12㎝で，断面は浅い皿形を呈している。埋土は細かいパミスを含む黒色土であり，多くの遺物が出土した。他の土坑とは離れた場所にあり，東隣に集石 10 号が近接する。

一般礫を含め計 20 点の遺物等が埋土中から出土している。土器は無文のものが２点，斜位の貝殻条痕文を施すものが１点，石器が３点であった。土器についてはいずれも小片であったため図化し得なった。石器１点については実測し掲載した。26 は全体の 1/2 以上を欠損する磨石の破損品である。上面に磨痕がわずかに残る。

土坑２号（第 31 図）

Ｅ － 12 区，西側の谷へ下っていく斜面で検出された。平面規模が 124 × 55㎝，略東西方向に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 13㎝で，断面は皿形を呈し，埋土は細かいパミスを含むやや硬質な黒色土である。西側の斜面で検出された唯一の土坑であり，周辺には集石 28 号・31 号が検出されていることから，集石の掘り込みの可能性も考えられる。

埋土中から 10 点の遺物が出土し，その中から石器１点を実測し掲載し，それ以外の遺物については小片で残存状況が悪かったため図化しなかった。27 はホルンフェルス製の石斧の刃部である。上下両面を丁寧に研磨し，鋭利な刃部を作り出している。

土坑３号（第 32 図）

Ｃ － 17 区，東側へ下っていく緩斜面で検出された。平面規模が 159 × 87㎝，略東西方向に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 42㎝で，断面は幅広い逆台形を呈しており，Ⅰ類の他の土坑とはやや異なる断面形状である。埋土は細かいパミスを含む黒色土で，硬くしまり，わずかにⅦ層のパミスが混ざる。東側へ約４～５ｍ離れたところに竪穴住居跡５号・６号が位置している。

遺物は埋土中より５点出土した。その中から土器１点について実測し掲載した。残りの４点については小片のため図化していない。28 は直線的に立ち上がる円筒形を呈した土器の底部である。復元底径は 19.0㎝で，外面には斜位の短い貝殻刺突文を鋸歯状に施し，底面近くには横位に施す。Ⅵ類の下剥峯式土器に相当する。

底面近くの埋土中から炭化物が出土しており，C14 年代測定の結果は 8,840 ± 40yrBP である。

土坑４号（第 32 図）

Ｅ － 20 区，ほぼ平坦面で検出された。平面規模は 196 × 60㎝であり，略南北に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 17㎝で，断面は皿形を呈している。埋土は細かいパミスを含む黒色土の単一土である。周辺は遺構が多く点在しているエリアで，約２ｍ南に竪穴住居跡１号，約６ｍ西側に連穴土坑１号，やや南西側に連穴土坑２号・３号が位置する。その他にも竪穴住居跡３号・４号，土坑５号などもあり，それらとの関連性も考えられる。

遺物は土器２点が出土したが，小片のため図化しなかった。土器はいずれも胴部片であり，外面に貝殻刺突文を施すことからⅥ類の下剥峯式土器に相当する。

土坑５号（第 32 図）

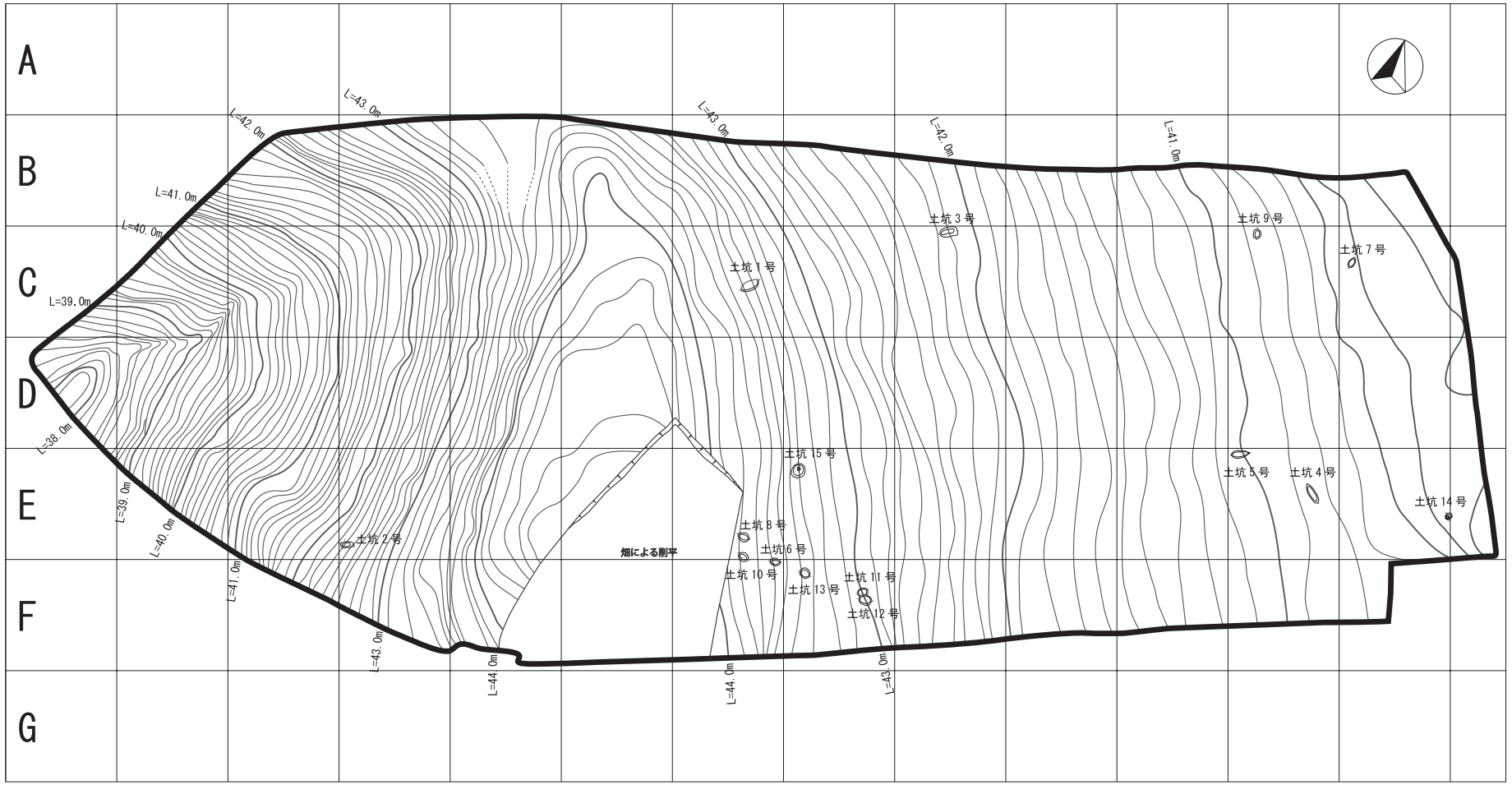
Ｅ － 20 区，東に向かってわずかに下っていくほぼ平坦面で検出された。平面規模が 166 × 73㎝，略東西方向に細長い長楕円形を呈している。検出面からの深さは 19㎝で，断面は皿形を呈し，埋土は細かいパミスを含む黒色土である。土坑４号と同じく周辺には竪穴住居跡や連穴土坑などが点在しており，それらの遺構に関連した施設の可能性がある。

埋土中から砥石の破片と思われるものが１点出土したが，小片のため掲載には至らなかった。

【Ⅱ類】

土坑６号（第 33 図）

Ｆ － 15 区，土坑８号の南東方向約３ｍのほぼ平坦な面で検出された。西隣に土坑 10 号，東隣に土坑 13 号があり，同タイプの土坑が集中する中に位置している。平面規模が 97 × 70㎝で，略東西方向が長い楕円形を呈しており，検出面からの深さは 22㎝で，断面は皿形を呈している。埋土は細かいパミスを含む黒色土である。



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

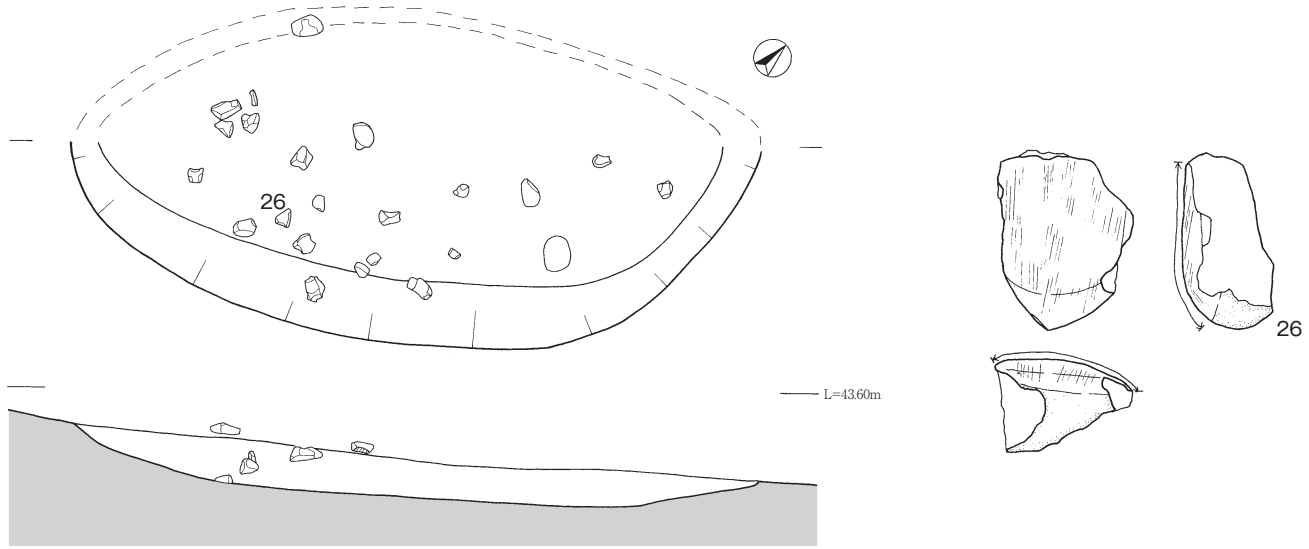
第30図　土坑配置図

遺物は計８点が埋土中より出土している。その中から土器３点，石器１点の計４点について実測し，掲載した。

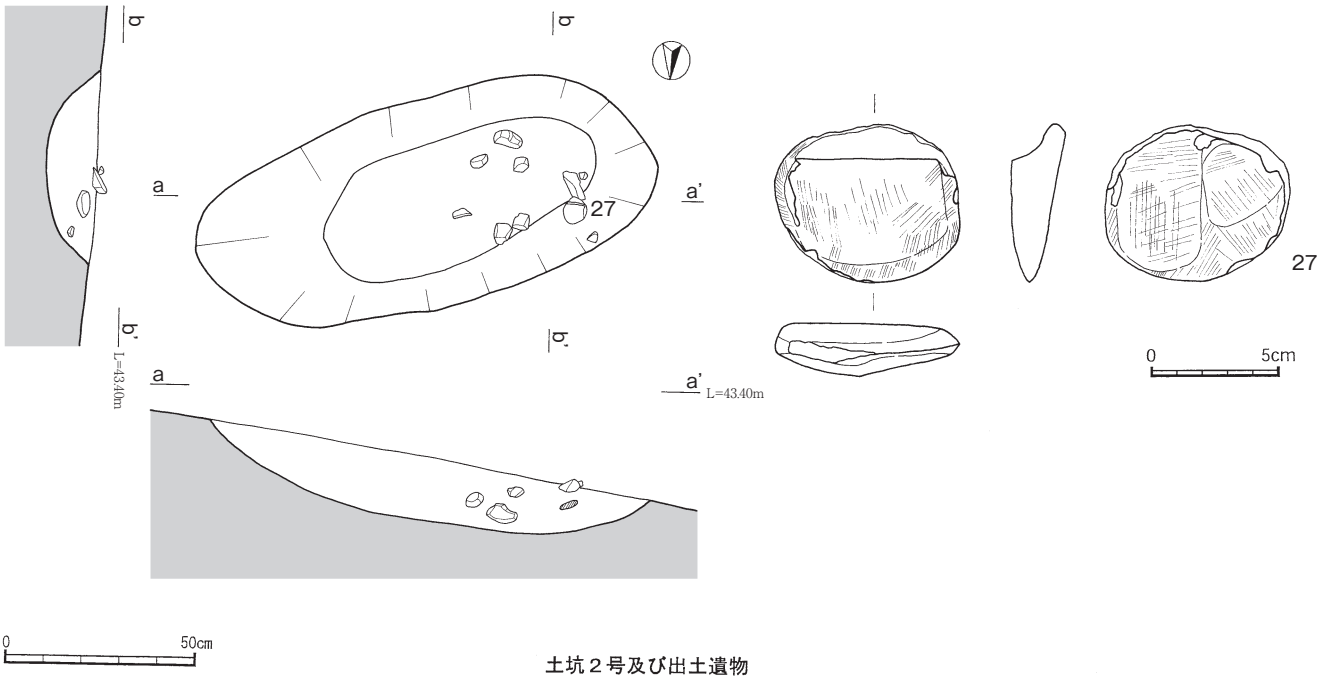
29 は直線的に立ち上がる土器の胴部である。浅い斜位の貝殻条痕文を施した後，縦位の貝殻刺突文を施す。刺突文の間隔は不規則である。文様形態・内面のケズリ痕・器壁の薄さからⅡ類に相当し，加栗山式土器と思われる。30 は胴部片で，外面に貝殻腹縁部を用いた斜位の刺突文を施し，内面調整はナデが施される。Ⅵ類の下剥峯式土器に相当する。31 は底面の破片であり，内面は横位のナデ調整を施し，外面にはミガキ痕が直線的に残る。型式は不明である。32 は砂岩製の砥石の剥離片である。

土坑７号（第 33 図）

Ｃ－ 21 区，竪穴住居跡２号の西隣の平坦面で検出された。周辺には竪穴住居跡２号とそれに伴うピットが点在しているが，近辺にその他の遺構は確認されない。土坑の時期は特定できないが，竪穴住居跡２号と何らかの関係が考えられる。土坑の平面規模は 98 × 58㎝，略南北方向に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは 20㎝で，底面に平坦面を形成し，断面は深皿形を呈している。埋土は細かいパミスを多く含む黒褐色土で，下位



土坑１号及び出土遺物



土坑２号及び出土遺物

第 31 図　土坑１（Ⅰ類）及び出土遺物

にわずかに細粒な黄色パミスが混じる。土器・石器等の遺物は検出されなかった。

土坑８号（第 33 図）

Ｅ－15 区，東側へ下っていくほぼ平坦面で検出された。平面規模が 108 × 83cm，略東西方向に長い楕円形を呈している。検出面からの深さは 23cmで，断面は底面に丸味を持った深皿形を呈している。埋土は細かいパミスを含む黒褐色土で，底面付近には下層の土を含んだ暗茶褐色土が堆積している。Ｅ・Ｆ－15・16 区は特に土坑が集中しているエリアであり，北側に土坑 15 号，集石９号，南側に土坑６号，10 号が近接している。

遺物及び一般礫計 26 点が，土坑の埋土から出土している。一般礫が大部分を占めるため，集石の掘り込みの可能性も考えられるが，当遺跡で検出された他の集石よりも礫の密集がみられず，また，礫の出土したレベル差もあり，全体的にまとまりもないことから土坑として掲載した。その中から土器１点を実測し掲載した。33 は土器の胴部片であり，外面に細かい押型文を横位に施すことからⅨ類に分類される。

土坑９号（第 33 図）

Ｃ－20 区，東側の平坦面で検出された。周辺に遺構はほとんど無く，出土遺物も少ない。付近で検出された集石 14 号も約７ｍ以上離れている。土坑の平面規模は 87 × 71cmの楕円形を呈しており，検出面からの深さは 48cmとやや深く，断面は逆台形である。埋土は細かいパミスを多く含む黒色土が主体となり，下位に茶褐色粘質土が小ブロック状に混ざる。

遺物は実測・掲載した土器片１点が出土した。34 は横位と斜位の貝殻刺突文を組み合わせて施文している胴部片である。小片のため判定はできないが，Ⅵ類の下剥峯式土器に相当すると思われる。

土坑 10 号（第 33 図）

Ｅ・Ｆ－15 区の全体的に東側へ下っていく緩斜面で検出された。周辺には土坑・集石が多く検出されており，北側に土坑８号，東側に土坑６号が位置しており，どちらも約２ｍ程度と近接している。平面規模が 97 × 70cm，土坑８号と同じく略東西方向が長い楕円形を呈している。検出面からの深さは 22cmで，断面は深皿形を呈し，底面に多少凹凸が見られる。埋土は粘性のある暗茶褐色土が大部分をしめ，上位に細かいパミスを含む黒褐色土が堆積している。

埋土中からは，土器１点，石器１点を含む計 40 点の遺物・自然礫が出土している。大部分が一般礫であり，被熱を受けた破砕礫であることから，集石の掘り込み部の可能性も考えられるが，礫の密集がみられないこと，それぞれに出土した礫のレベル差があることから，土坑として取り扱った。埋土から出土した土器・石器はいずれも掲載していないが，土器は外面に貝殻条痕文を施す。小片のため全体像は不明であるが，Ⅳ類の石坂式土器に相当すると思われる。石器は砂岩製の礫器で，刃部に敲打痕が残る。

土坑 11 号（第 34 図）

Ｆ－16 区，東側に下っていく緩斜面で土坑 12 号に切られた状態で検出された。土坑が集中して検出されたＥ・Ｆ－15・16 区の東端に位置する。長径が 96cmの楕円形を呈している。検出面からの深さは 10cmで，断面は浅い皿形を呈している。埋土は細かいパミスを含む黒色土で，部分的に暗茶褐色土が混ざる。

埋土中に遺物は確認されなかった。

土坑 12 号（第 34 図）

Ｆ－16 区，土坑 11 号の南東の一部を切るように検出された。新旧関係では，11 号よりも新しいものである。平面規模が 105 × 98cmの楕円形を呈しており，検出面からの深さは 10cmである。断面は皿形を呈しており，埋土は土坑 11 号と同じ黒色土であるが，土坑 11 号よりもパミスの量が多く色調も若干暗い。

埋土中より土器２点，石器２点の計４点の遺物が出土しており，小片で残存状況が悪いものを除き，土器１点，石器１点の計２点を実測し掲載した。35 は胴部片で，外面に条痕文がわずかに確認できる。砂粒を多く含む胎土で内面はナデが施される。Ⅶ類の桑ノ丸式土器に相当すると思われる。36 は花崗岩製の磨石であり，下面は凹んで左側面に変色が見られる。

【Ⅲ類】

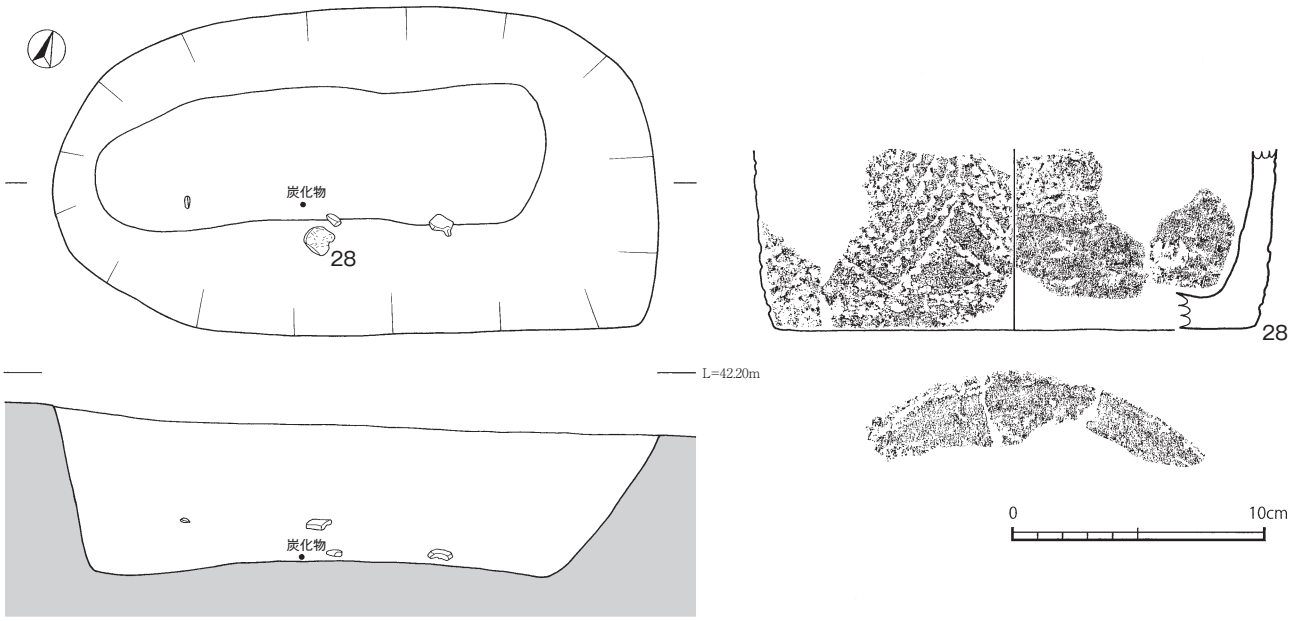
土坑 13 号（第 35 図）

Ｆ－16 区，東側に下っていく緩斜面で土坑６号と土坑 11 号・12 号に挟まれるように検出された。土坑が集中しているエリアに位置している。平面規模が 96 × 90cmのほぼ円形を呈し，検出面からの深さは 21cmで，断面は逆台形を呈している。埋土は細かいパミスを含む硬質な黒色土である。

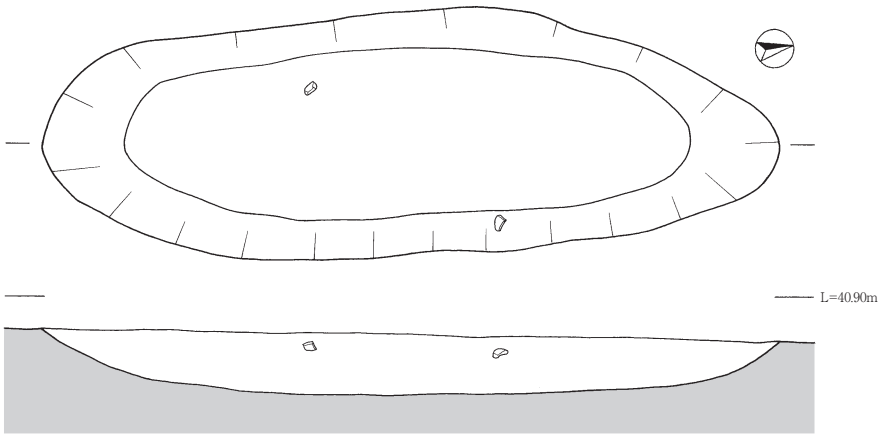
遺物は埋土中から土器片５点が出土した。その中から小片のものを除き，土器２点について実測し掲載した。37・38 はいずれも胴部片である。37 は，斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に組み合わせて施文する。38 は横位の貝殻刺突文を横位に強く施文する。いずれもⅥ類土器の下剥峯式土器に相当する。

土坑 14 号（第 35 図）

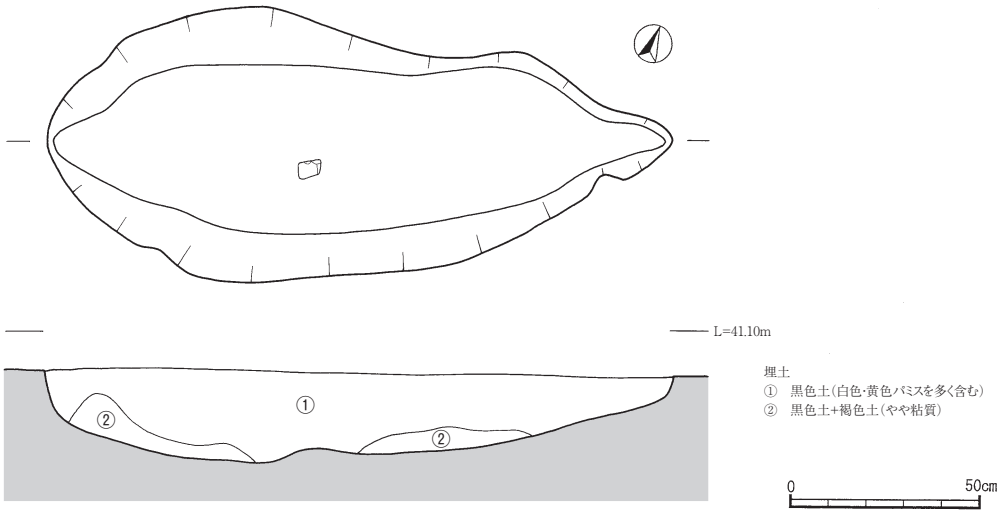
Ｅ－21 区，本遺跡の東端のほぼ平坦面で検出された。竪穴住居跡４号の南東約６ｍに位置し，それ以外の遺構は周辺にはみられない。土坑 14 号より東側に確認トレンチを数カ所入れたが遺構・遺物は検出されなかったことから，本遺跡の東端に当たると考えられる。平面規模が 66 × 57cmのほぼ円形を呈し，検出面からの深さは 12cmである。底面の南側に平面規模が 26 × 22cm，断面



土坑３号及び出土遺物

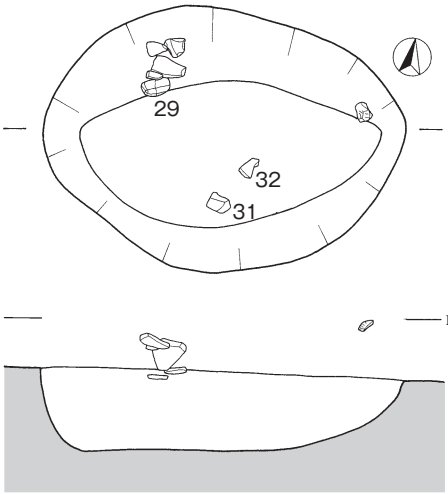


土坑４号

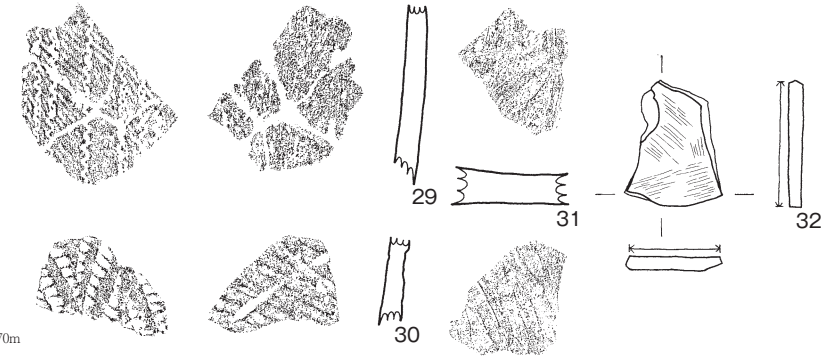


土坑５号

第 32 図　土坑２（Ⅰ類）及び出土遺物



土坑６号



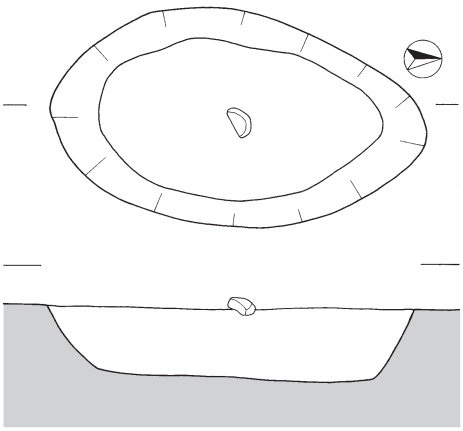
土坑６号出土遺物



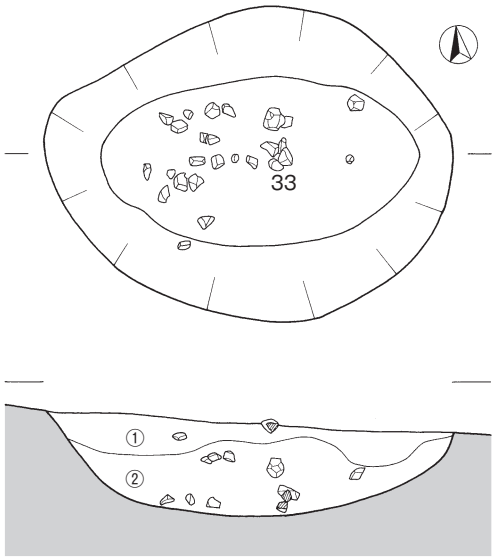
土坑８号出土遺物



土坑９号出土遺物

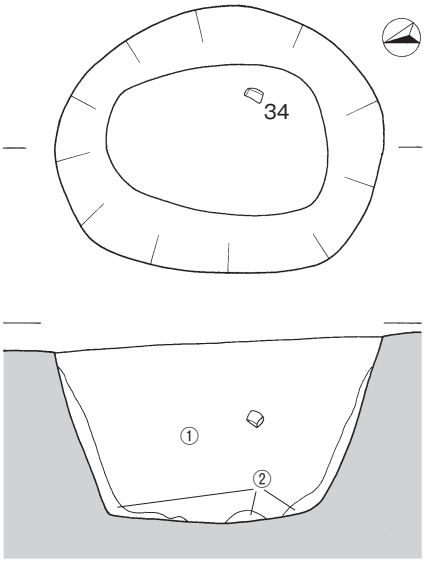


土坑７号



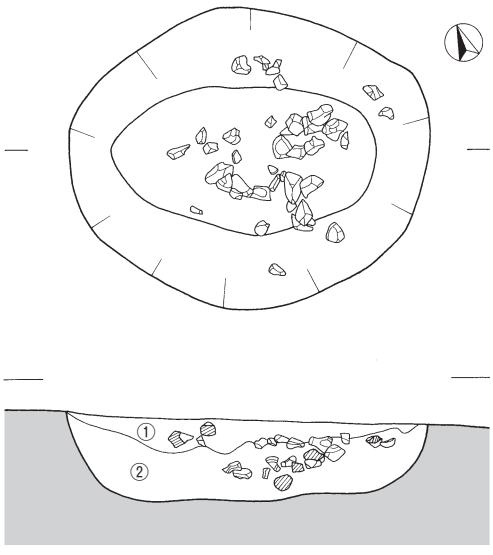
埋土
① 黒褐色土(硬質土)
② 暗茶褐色土(やや粘質)

土坑８号



埋土
① 黒色土
(白色パミスを多く含む)
② 黒色土
(茶褐色のブロックが混ざる)

土坑９号



埋土
① 黒褐色土
② 暗茶褐色土

土坑 10 号

0 5cm

0 50cm

第 33 図　土坑３（Ⅱ類①）及び出土遺物

が深皿形の掘り込みがあり，二段底となっている。この掘り込みの検出面からの深さは約 23cmである。埋土は上位が白色と黄色の細かいパミスを含む黒色土であり，下位は白色と黄色パミスを多く含む黒褐色土であった。

埋土中に遺物は確認されなかった。

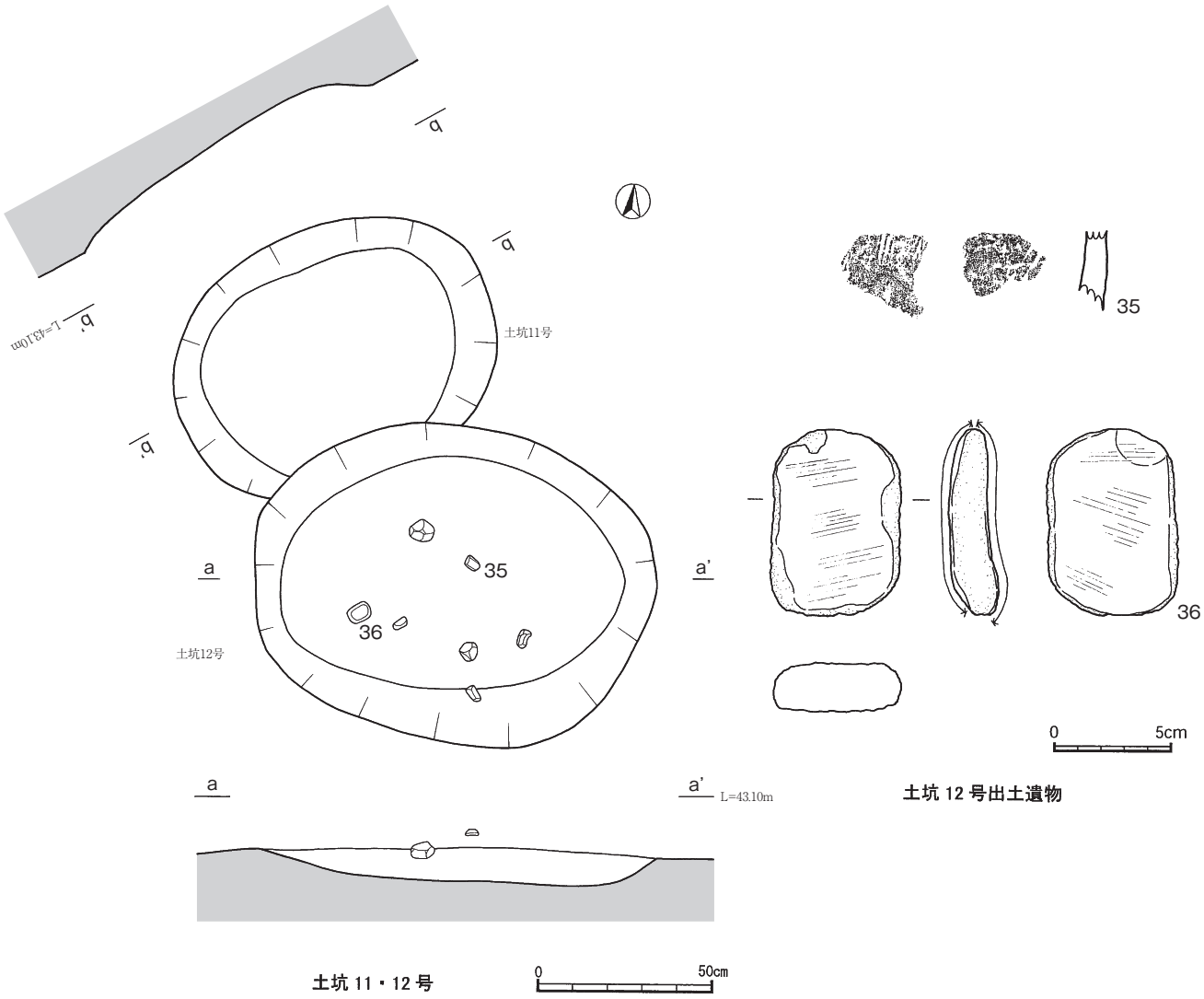
土坑 15 号（第 35 図）

Ｅ － 16 区，東側へ緩やかに下っていく緩斜面で検出された。周辺は土坑や集石などが多く検出されており，近接している遺構群の中心付近に位置している。平面規模が 126 × 125cmのほぼ円形を呈している。検出面からの深さは 20cmで，断面は深皿形を呈する。底面北側に直径 30cm程度の断面レンズ状を呈した浅い掘り込みがあり，二段底となっている。この掘り込みの検出面からの深さは 29cmである。埋土はパミスを含むやや硬質な黒色土であり，多くの遺物が掘り込みの中央付近より検出された浅い掘り込み周辺から出土した。掘り込みを持つ集石２号と集石９号に挟まれており，出土した礫は被熱を受けた破砕礫が中心であることから，掘り込みを持つ集石であった可能性がある。

遺物は計 44 点が土坑全体から出土し，土器片１点を除きほとんどが被熱を受けた破砕礫であった。土器については，小片のため掲載には至らなかった。土坑８号・10 号と同様に集石の掘り込みである可能性が考えられるが，礫それぞれにはレベル差があり，あまり密集もしていないことから土坑として取り扱った。

５　集石（第 36～54 図）

集石は竪穴住居跡や竪穴遺構が検出された遺跡東側平坦部を除いて，調査範囲の尾根部を中心にほぼ全域から 34 基検出された。出土した大量の礫の中で，ある程度の礫の集中が確認されたもの，狭い範囲に散礫状に検出されたもの，礫がやや密集しているもの，掘り込み内から礫



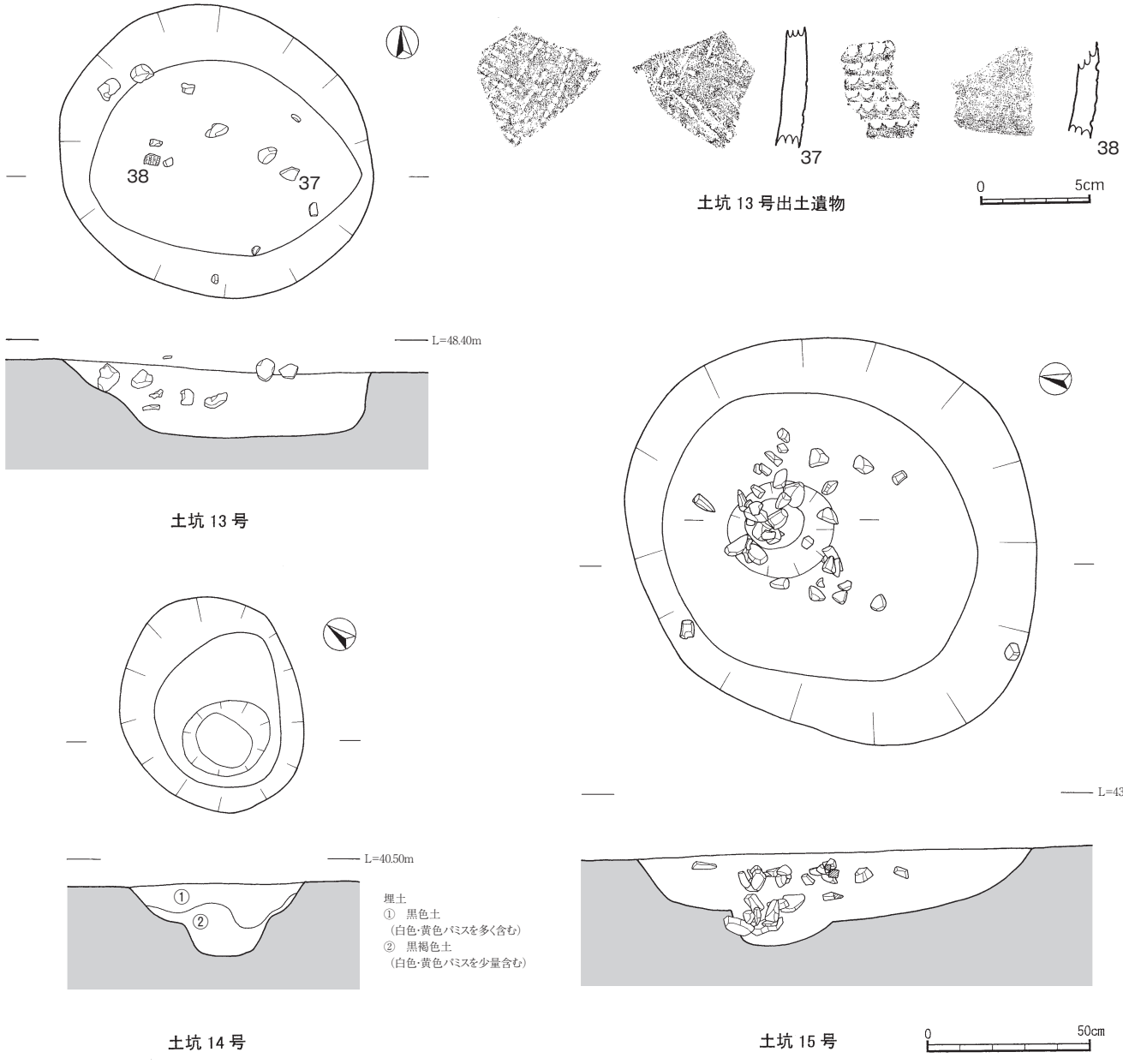
第 34 図　土坑４（Ⅱ類②）及び出土遺物

が密集して検出されたものなどを集石として判断した。

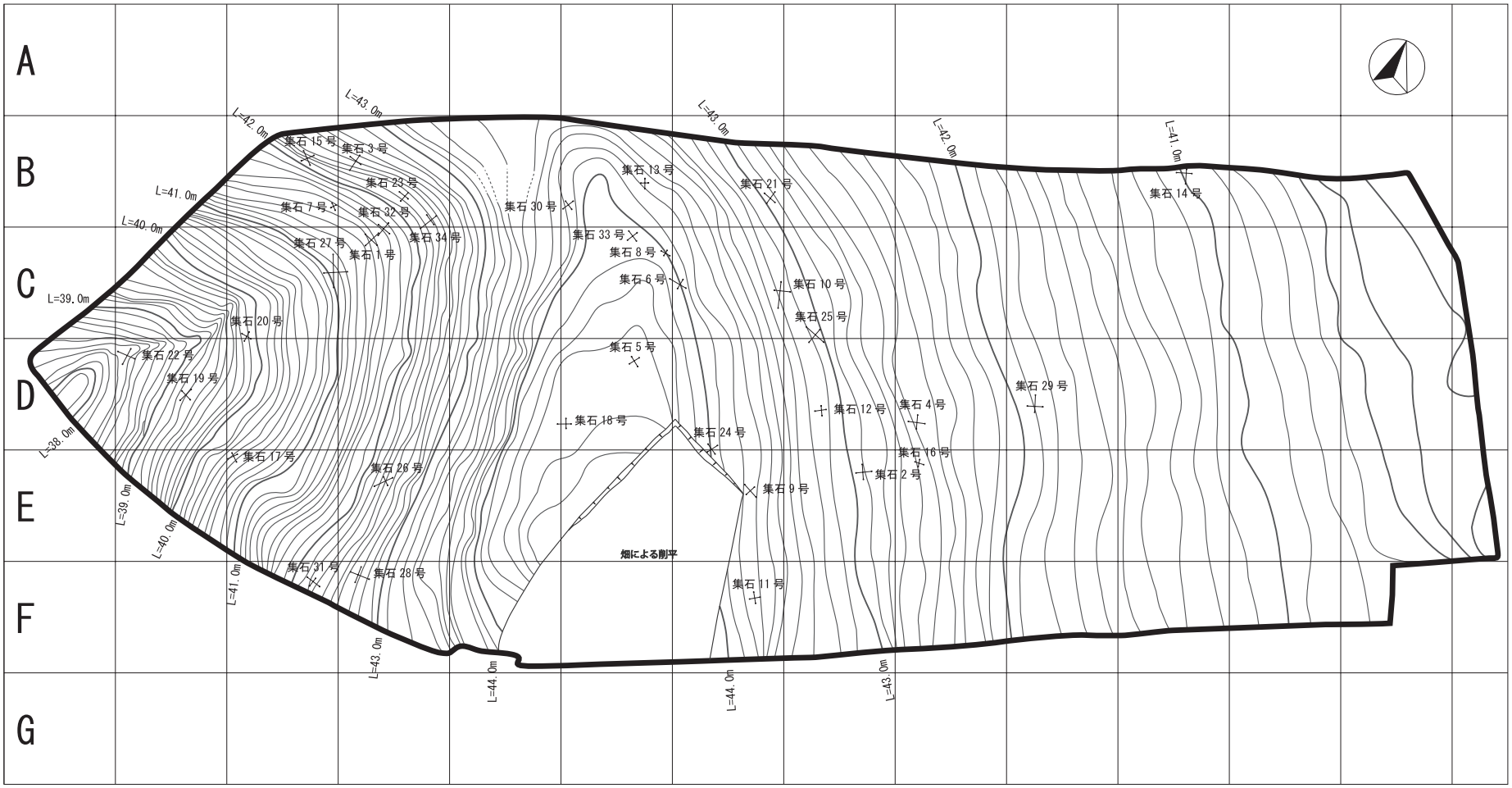
本遺跡で検出した 34 基の集石を構成する総礫数は 2441 点であった。その中から石器として確認したものが 44 点で，23 点を掲載した。また，集石内から 124 点の土器を確認し，その中から 51 点を掲載した。

本遺跡内では集石としてのまとまりのない礫が多数出土している。その特徴としては，ほとんどのものに被熱の痕跡が見られ，表面の変色や劣化，破砕などが確認される。特に被熱による破砕礫が多くみられ，使用後に廃棄または放棄されたものと考えられる。出土状況の特徴としては，調査区内で一番標高の高い尾根部（14 区付近）では少なく，そこから東西両方向へ下るにつれて出土量が増大している。東側の緩斜面では 16～18 区でピークを迎え，東側へ進むにつれて礫の出土量が徐々に少なくなっていく。20～22 区では検出されなかった。反対に谷地形で急斜面である西側では，下り始めた直後の 13・14 区付近から出土量が増え始め，12 区から西へ向かって包含層の厚みも増し，遺物量も膨大な出土状況となっていく。出土レベルが安定せず，高低差があることから尾根から谷底へ向かって移動したものも多数存在すると思われる。

集石は礫の出土分布と同じように 20～22 区では検出されず，東側の緩斜面では 14～17 区にかけて尾根を取り巻くような位置で集中して確認された。その他に，西側の谷筋へ下っていく B・C － 11・12 区の急斜面上にも集石の集中が見られる。一部を除き，竪穴住居跡や竪穴



第 35 図　土坑５（Ⅲ類）及び出土遺物



（1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第 36 図　集石配置図

遺構が検出された東側の平坦面から集石が検出されないことから，東側の緩斜面や西側の急斜面の礫のほとんどは，集石での使用を目的として持ち込まれたものであると考える。なお，礫の大きさは最大長を記載してある。

検出された集石は，掘り込みの有無，礫の出土状況，礫数の違いなどで以下のように分類した。

Ⅰ類……掘り込みを持つもの
　aタイプ…浅い円形の掘り込み
　　（1号～8号）
　bタイプ…深い円形の掘り込み
　　（9号～13号）
Ⅱ類……掘り込みを持たないもの
　aタイプ…礫が密集しているもの
　　（14号～18号）
　bタイプ…礫がやや密集しているもの
　　（19号～26号）
　cタイプ…散礫状に広がっているもの
　　（27号～34号）

【Ⅰ－a類】

集石1号（第37図）

C－12区，南西方向へ下っていく斜面のⅦ層中より検出された。周辺には北側に礫数20～50個程度の集石が5基，南側に礫数141個の集石27号が隣接する集石群の中心に位置する。

144×115cmの範囲内に，礫が重なり合いながら密集して出土した。下位には，平面径1×1m程度，検出面からの深さ約20cmの円形を呈した掘り込みがある。礫は底面近くまで隙間なく詰まっており，総数は598個である。この掘り込みは地形に沿って掘られたと思われ，底面も南側へ傾斜している。礫は5cm前後の砂岩質の破砕礫がほとんどを占め，7～8cmを超えるものも混ざるが非常に少ない。

礫間から土器片6点が出土し，実測可能であった2点を実測・掲載した。39はやや外反し直線的に立ち上がる胴部片である。外面に斜位の貝殻条痕を施した後，縦位の貝殻刺突文を施している。Ⅱ類土器の加栗山式土器に相当する。40は底部片で，復元底径は9.6cmである。わずかに残る胴部には，横位の貝殻条痕文が確認できるが，型式については不明である。

集石2号（第37図）

E－16区，東へ下っていく緩斜面のⅦ層中で検出された。下位に平面径が115×103cm，検出面からの深さ約20cmの円形を呈した掘り込みがあり，総数143個の礫の全てが掘り込み中からの出土である。南西方向のE・F－15・16区には同様の形態をした土坑が集中するエリアがあり，当初は土坑として調査していたが，残存する礫が大量であり，かつ集中していたため，集石として取り扱った。

礫は10cm以上のものはほとんど見られず，大部分が被熱した5cm前後の角張った破砕礫である。石材は安山岩，凝灰岩が主流で砂岩，泥岩も混ざる。礫は掘り込み全体に広がっているが，底面からわずかに浮き気味で，各々にレベル差があることから，廃棄礫を集めて投げ込んだ可能性が考えられる。

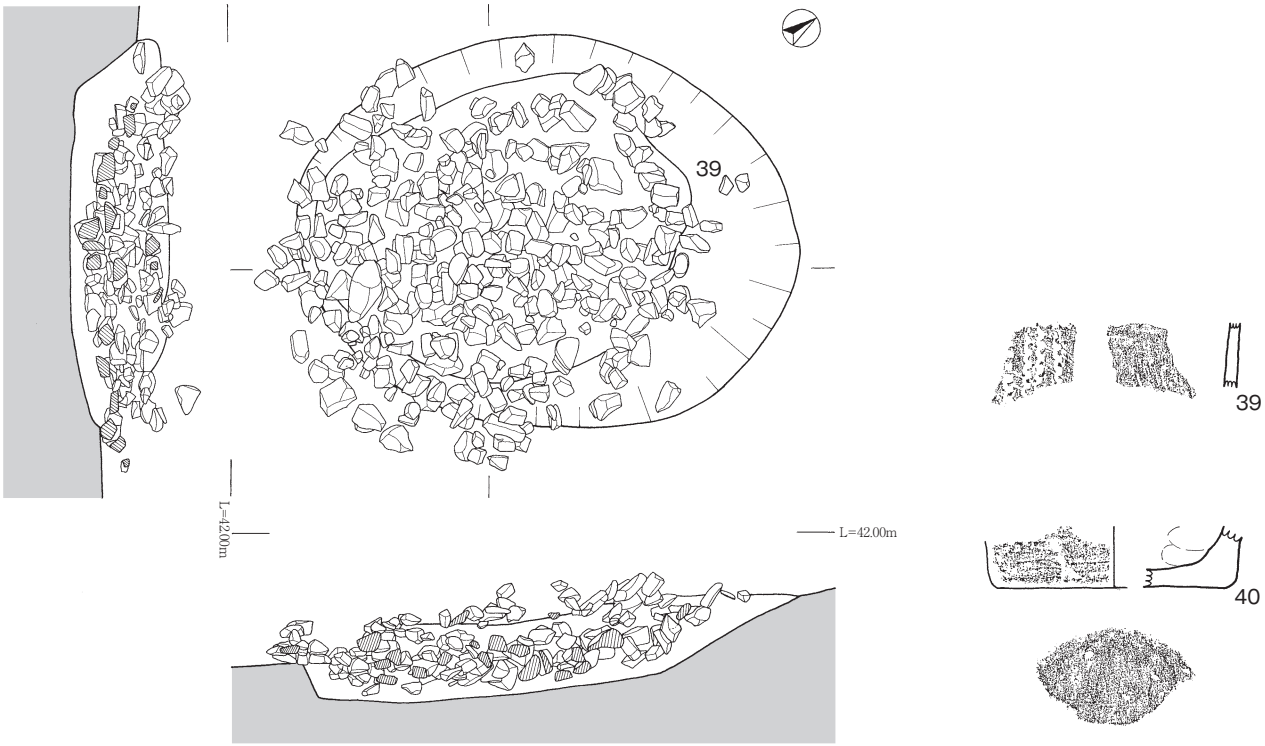
礫間から土器片1点と石器2点が出土し，実測可能であった土器片1点と石器転用品1点の計2点について実測し掲載した。41はやや内湾する胴部片である。外面には斜位の楕円押型文を施す。内面はナデ調整されているが粗い。42は凝灰岩製の磨石である。表面に明確な磨面が確認できるが，平坦面は形成されていない。全面に煤が付着し暗褐色を呈す。煤が厚く付着している部分は実測図に破線で示した。被熱による赤化は内部にまでみられ，内部には剥離やひびが入り脆くなっている状態である。

集石3号（第38図）

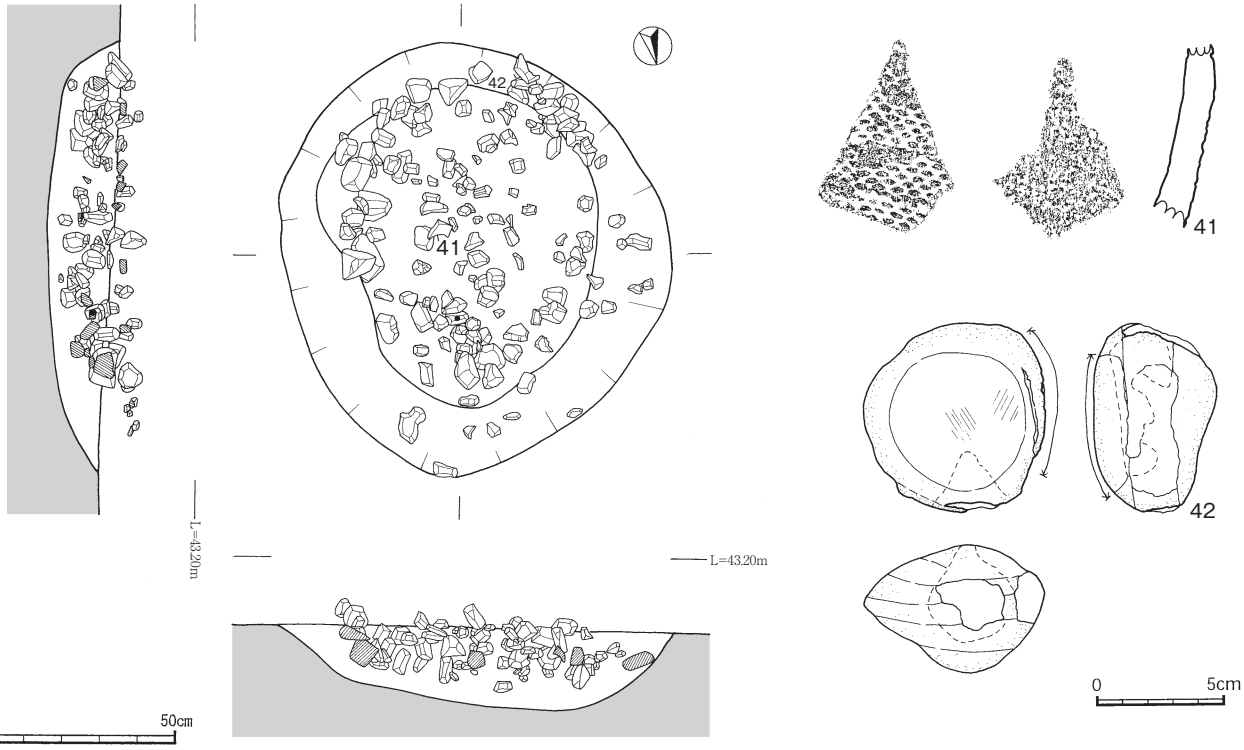
B－12区，南西方向へ下る急斜面のⅦ層中より検出された。総礫数は54個を数え，そのほとんどが67×52cmの狭い範囲内に密集し，南側には礫集中部分から転がったと思われる小礫が数個検出された。集中部の直下には平面径52×40cm，検出面から深さ10cmの円形の浅い掘り込みがある。

礫は10cm前後，300～500g程度の安山岩が主流で，丸みを帯びた自然礫である。大きさにほとんど差はなく，被熱しているが劣化が少ないことから再利用のため集められたものと想定される。

総礫数54個の中から石器の転用品6点，礫を混在して出土した土器1点の計8点を実測・掲載した。43は胴部小片で，外面に浅い貝殻条痕が横位に施される。外面は灰白色，内面・断面は灰黄色を呈す。文様の全体像は不明であるが，Ⅳ類土器の石坂式土器相当の土器であると考えられる。44･47は，砂岩製の破砕した磨石である。部分的に被熱の痕跡が残る。44は，表面に平坦な磨面が形成されている。47は，表面と裏面に磨面が残る。また部分的ではあるが煤の付着がわずかに見られる。45・46は安山岩を素材とした磨石・敲石である。45は，2分の1以上を欠損した破損品である。小さな敲打痕が全面に見られ，周縁部には連続した敲打痕も残る。また表面には平坦な磨面を持つ。46は長径13.8cm，短径10.4cm，最大厚5.4cmの扁平な完形品で，連続した敲打によると思われる大きな敲打痕が周縁部に形成されている。磨面は表面・裏面に確認でき，裏面はやや平坦になっている。48は破砕した石皿の一部で，46･47と同じ砂岩製である。破砕部に被熱による赤化が確認され，二次利用された可能性が高い。49は，表面と右側面に線刻が残る礫であ



集石１号及び出土遺物



集石２号及び出土遺物

第 37 図　集石Ⅰ－ａ類①及び出土遺物



集石３号及び出土遺物

第 38 図　集石Ⅰ－ａ類②及び出土遺物

る。凝灰岩を用いており，やや凹みのある平坦面に数本の浅い線刻が施されている。被熱により赤化がみられる。

集石４号（第 39 図）

Ｄ － 17 区，東方向へ緩やかに下っていく緩斜面のⅦ層上面で検出された。尾根部を取り巻く集石群の東端にあたり，これより東側の平坦面では集石の検出は少なく，礫の出土数も少なくなる。

平面径 112 × 102㎝程度，検出面からの深さ約 20㎝の楕円形を呈した掘り込みがあり，埋土は黒色土である。総数 64 個の礫は掘り込みの中心部にほぼ密集しており，一部は底面付近にまで達している。礫は 10㎝前後の砂岩の角礫が主体であり，被熱による破砕のため，表面が赤橙色に変色したり劣化したりしたものも多く混じる。石材や破砕面から同一個体のものが数多く混在していると思われ，出土状況から選別された後に投げ入れられたものと推測される。

礫間から出土した土器２点について実測し掲載した。50 は口縁部，51 は胴部であるが，小片で全体像は不明である。外面に斜位の貝殻刺突文が施されていることからⅥ類土器の下剥峯式土器と思われる。

集石５号（第 39 図）

Ｄ － 14 区，集石６号から南へ約８ｍ離れた尾根部の平坦面，Ⅷ層上面で検出された。尾根沿いに並んだ集石の一つである。71 × 59.4㎝の掘り込み内から，礫が密集して出土し，その周辺に関連すると思われる礫が数個出土した。礫総数は 42 個で，石材は凝灰岩の割合が高い。密集した礫の直下には平面径 42 × 40㎝，検出面からの深さ 11㎝の円形を呈した浅い掘り込みがある。

礫は５～７㎝の丸みを帯びた自然礫が大部分で，重さ 150 ｇ前後が主流であり，尾根部の他の集石と同じように礫が密に出土している。

石器３点とチップ１点が出土し，残存状況の良かった石器１点を実測し掲載した。52 は，最大厚 2.4㎝の扁平な敲石の破砕品である。素材は砂岩を用いている。周縁部右下側と裏面に敲打痕が残る。

集石６号（第 40 図）

Ｃ － 15 区，集石８号と同じ尾根部の平坦面，Ⅷ層上面で検出された。147 × 137㎝の範囲に，礫の集中とその周辺に散礫状の広がりが見られた。礫の集中部の直下から平面径 82 × 78㎝，検出面からの深さ 12㎝の円形を呈した浅い掘り込みが検出された。密集している礫と周辺の礫のレベルから，実際の掘り込み面は検出面よりやや上層であったと考えられる。礫は掘り込みの中央付近に不規則に積み重ねられて出土した。

礫は 10㎝前後，重さ 300～500 ｇの安山岩の自然礫が約半数以上を占め，被熱し変色している。ほとんど破砕は無く，大きさが揃っているが，10㎝を超えるものも含まれる。散礫は破砕された割合が高い。７～８㎝の角礫がほとんどであり，重量 100～150 ｇとほぼ同規模で揃っている。被熱による破砕礫もあり，同一個体のものも含まれる。

総礫数が 50 個で，同時に出土した土器２点を実測し掲載した。53 は斜位の貝殻条痕を施した後に縦位の貝殻刺突文を上書きする胴部片である。胴部は直線的に立ち上がり，内面はケズリ痕が残る。Ⅱ類土器の加栗山式土器と思われる。54 は斜位の貝殻刺突文のみを持つ胴部片で，Ⅵ類の下剥峯式土器と思われる。

集石７号（第 40 図）

Ｂ － 11 区，南西方向に下っていく斜面のⅦ層上面で検出された。礫が谷へ向かって数多く出土し，周辺には集石群が検出されている。

68 × 57㎝程度の狭い範囲内に，礫が密集して出土した。平面径 30 × 30㎝，検出面からの深さ約 13㎝の円形を呈した掘り込みがあり，底面近くまで礫が隙間無く密集していた。中心部の礫は 10㎝前後のものが多く，200～300 ｇの砂岩の角礫が主流であり，500 ｇを超えるものも含まれる。被熱により破砕し，表面が変色したものも多く混じり，同一個体のものが数多く混在していると思われる。

土器などの遺物は検出されなかった。

集石８号（第 40 図）

Ｃ － 14 区，北へわずかに下っていく尾根部の平坦面のⅧ層上面で検出された。近接する集石６号，33 号と共に尾根上に位置し，東西の両方向へ下ると礫が多く出土している。50 × 40㎝の範囲に礫の集中が見られる。礫総数は 16 個と少ないが，下位に 97 × 75㎝，検出面からの深さ約 19㎝の楕円形を呈した掘り込みがある。底面から浮いた状態での出土である。礫は検出面付近からの出土で，埋土からの出土はなかった。集石と堀り込みは，時期差があると考えられる。

礫は径が７～８㎝の砂岩の角礫がほとんどであり，重量 100～150 ｇとほぼ同規模で揃っている。被熱による破砕礫もあり，同一個体のものも含まれる。

土器などの遺物は検出されなかった。

【Ⅰ－ｂ類】

集石９号（第 41 図）

Ｅ － 15 区，尾根の頂上部から東方向へ下り始める緩斜面のⅧ層上面より検出された。周辺の北側には多数の集石があり，南側には数基の土坑が位置している，尾根を取り囲む遺構のひとつである。

Ⅷ層上面での検出時は礫が多少集まっている程度であったが，直下の掘り込みから大量の破砕礫が底面近くまで出土したことから，当初土坑で調査していたものを集石として取り扱った。掘り込みの平面径は 106 × 83㎝でほぼ円形を呈し，検出面からの深さは 37㎝と深

く，中位に段を持ち，断面は逆台形を呈す。底面付近には炭化物の集中が見られた。礫総数は 362 個で，砂岩の細かい破砕礫が大部分を占める。礫重量の内訳は，99 g 以下 269 個，100～199 g 63 個，200 g 以上 30 個である。敷き詰められた形跡が見られないことから，投げ込まれ廃棄されたと思われる。

遺物については礫間から土器片 2 点が出土し，その内 1 点を実測・掲載した。55 は最大厚 1.69cmの底部片であり，内面･底面ともに丁寧なナデ調整が施され，底面は若干の光沢を持つ。型式は不明である。

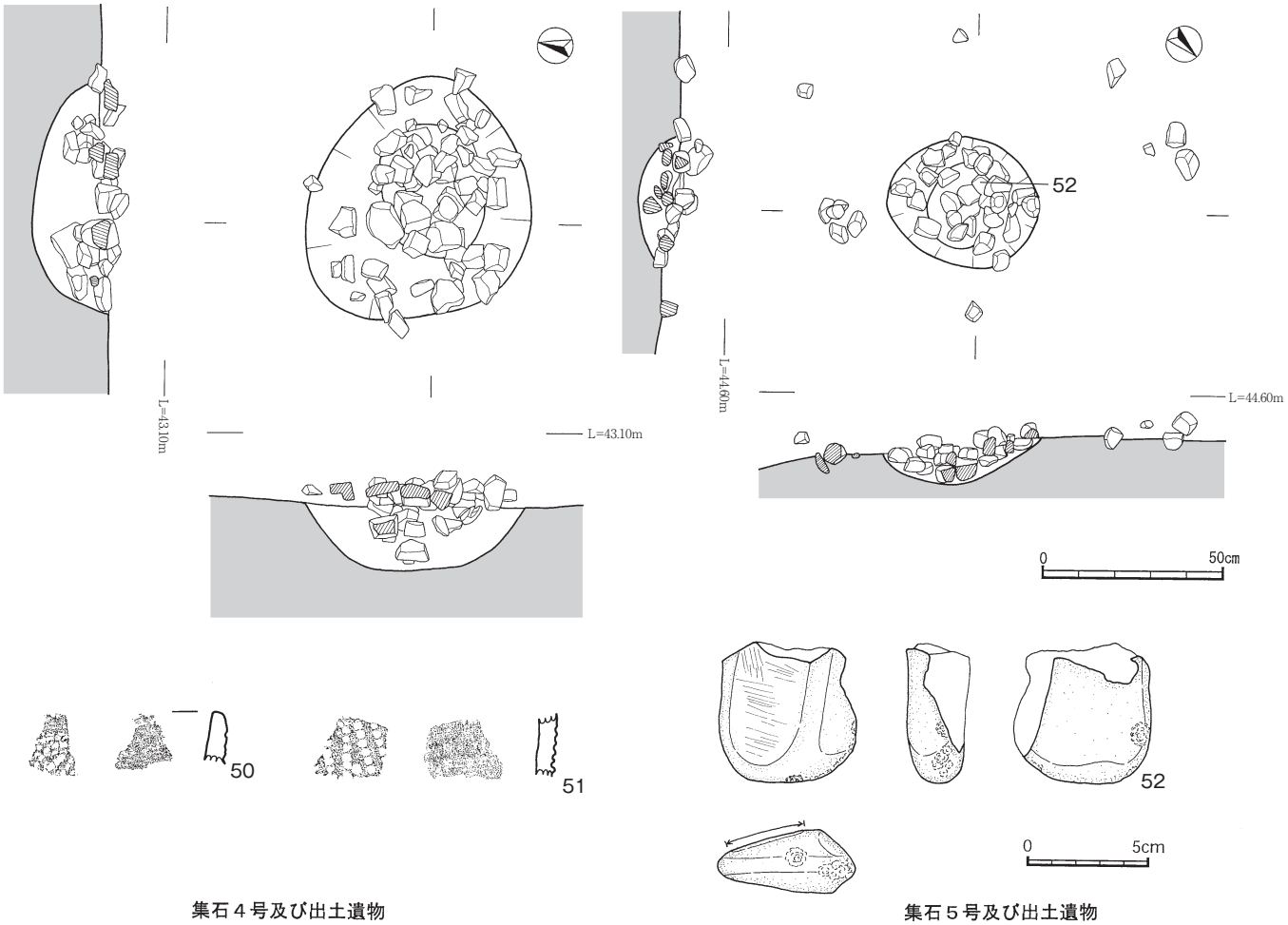
集石 10 号（第 42 図）

C － 15 区，東方向へ下る斜面のⅦ層中より検出し，172 × 84cmの範囲に礫の集中域と散礫状の広がりが確認された。礫集中部の直下に平面径 44 × 45cmの円形，検出面からの深さ 28cm，断面はU字形を呈した掘り込みがあり，総礫数 89 個中 69 個はこの掘り込みからの出土である。礫は凝灰岩の 200～300 g の自然礫が大部分であり，被熱による変色が見られるが，破砕した礫はない。底面付近には礫が敷き詰められており，大きさが 10cm以上，重さ 400 g を超えるものも混ざる。これら下位の礫は原位置で使用されたものと思われる。

礫間から一括取上げの 1 点を含む土器片 6 点，石器 5 点が出土した。その中から小片を除いた土器片 3 点と石器 1 点の計 4 点を実測し，掲載した。56 は口縁部，57 は胴部，58 は底部である。56 はやや内湾し，断面方形で口唇部がやや内傾する。平坦面を持つ外面には口唇直下に横位，その下位に斜位の貝殻刺突文が施される。復元口径は 22.4cmを測る。刺突の形状が半円状であることから，胴部に対しほぼ垂直に貝殻を立てて施文したと思われる。57 は直線的に外傾する胴部で，斜位の貝殻条痕と縦位の貝殻刺突文，内面には明瞭なケズリ痕が残る。58 の復元底径は 14.2cmである。外面に施されている貝殻刺突文は斜位の刺突を組み合わせて羽状を呈し，底面付近には横位に巡らす。文様形態や器形などから 56・58 はⅥ類土器の下剥峯式土器，57 はⅡ類土器の加栗山式土器に相当する。59 は 4 分の 3 以上を欠損する安山岩製の磨石で，全面に磨痕が残る。表面及び裏面は緩やかな平坦面を呈する。一部に被熱による赤化がみられる。

集石 11 号（第 43 図）

F － 15 区，東へ下っていく緩斜面のⅦ層中で検出さ



集石 4 号及び出土遺物　　集石 5 号及び出土遺物

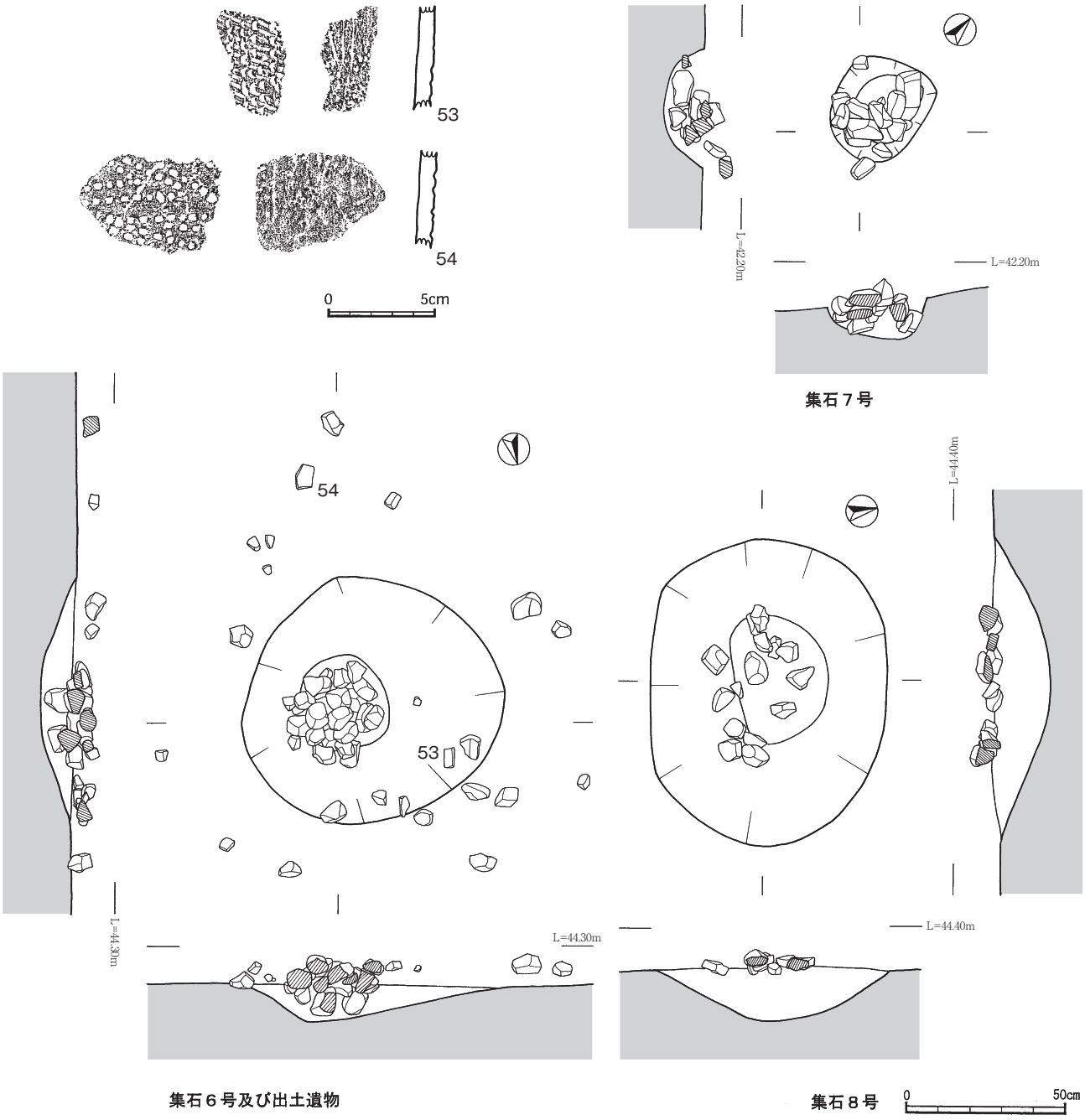
第 39 図　集石Ⅰ－ａ類③及び出土遺物

れた。北側及び北東側には６基の土坑が位置しており，土坑の可能性もあるが，礫の密集状態から集石として取り扱った。下位に径が 66 × 56cm，検出面からの深さ 24cmの楕円形を呈した掘り込みがあり，断面は逆台形を呈する。礫総数 58 個の特徴としては，全てに被熱を受けた痕跡が見られるが，大きさが不揃いであり，100 g 以下 13 個，101～200 g 18 個，201～300 g 12 個，301～600 g ９個，１kgを超えるものも４個含まれる。様々な大きさの礫で構成されるのがこの集石の特徴である。石材も安山岩，凝灰岩，砂岩などが混在している。

土器片２点と石器４点が出土し，小片を除いた石器転用品１点と土器片１点の計２点について実測し掲載した。60 は明瞭な貝殻刺突文が斜位に施され，Ⅵ類土器の下剥峯式土器と思われる。61 の最大厚は 5.1cmの凝灰岩を素材とした石皿の破砕片である。表面には微細な磨痕が観察できる。

集石 12 号（第 43 図）

Ｄ－16 区，東へ下っていく緩斜面のⅦ層で検出された。検出場所は集石や土坑，土器集中，チップ集中などが隣接している遺構集中エリアである。104 × 87cmの範



第 40 図　集石Ⅰ－ａ類④及び出土遺物

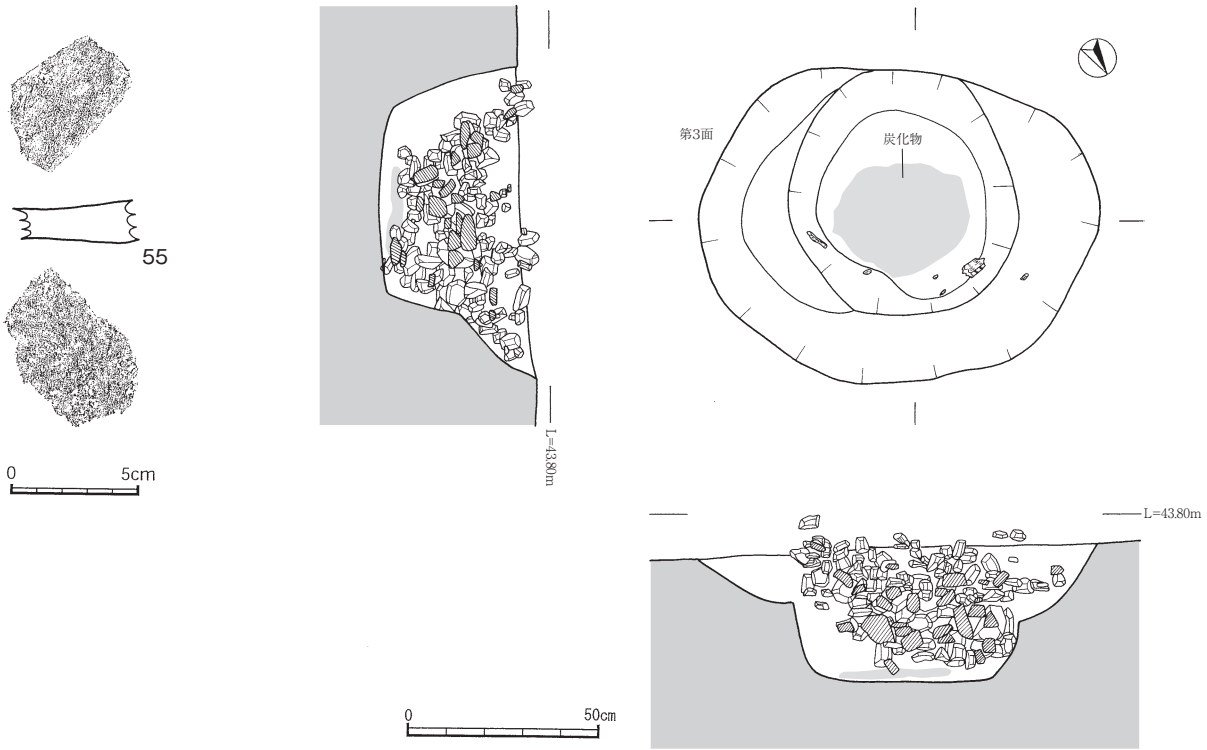
囲に礫の集中が見られた。礫は７～８㎝の砂岩の自然礫が中心で，大きさが揃っており破砕礫は少ない。礫集中域の南西側に，平面径 40 × 39㎝の円形を呈し，検出面からの深さ 24㎝，断面形Ｕ字形を呈した掘り込みが確認された。埋土中から礫の出土は見られないが，集石の形態と掘り込みの位置関係から，使用後に礫が掻き出され，再利用品以外は放置されたものではないかと推測される。礫総数は 32 個である。

礫間から出土した土器片７点中，残存状況の良い４点について掲載した。62 は胴部に楕円押型文を密に施すもので，内外面は橙色を呈し，内面の上位部分には煤が付着している。63 は器壁が 0.5㎝の胴部片である。外面には押引状の浅い条痕と，縦位の貝殻刺突文が施される。文様形態と器壁の薄さからⅢ類土器の吉田式土器に相当すると思われる。64・65 は底部片である。64 は胴部に斜位の貝殻刺突文が施され，65 は，一部剥落した胴部に貝殻による刺突の痕跡がわずかに確認できることからⅥ類土器の下剥峯式土器と思われる。

集石 13 号（第 43 図）

Ｂ－ 14 区，北方向に下り始める緩斜面のⅧ層上面で，礫の集中が見られた。尾根部を取り巻くように検出された集石群の北端に位置している。標高 43～44 ｍ付近に集石が多数検出されていることから，集石 13 号より北側の調査区外にかけても集石が存在する可能性がある。

35 × 27㎝の狭い範囲に総礫数 11 個の礫が密集してお

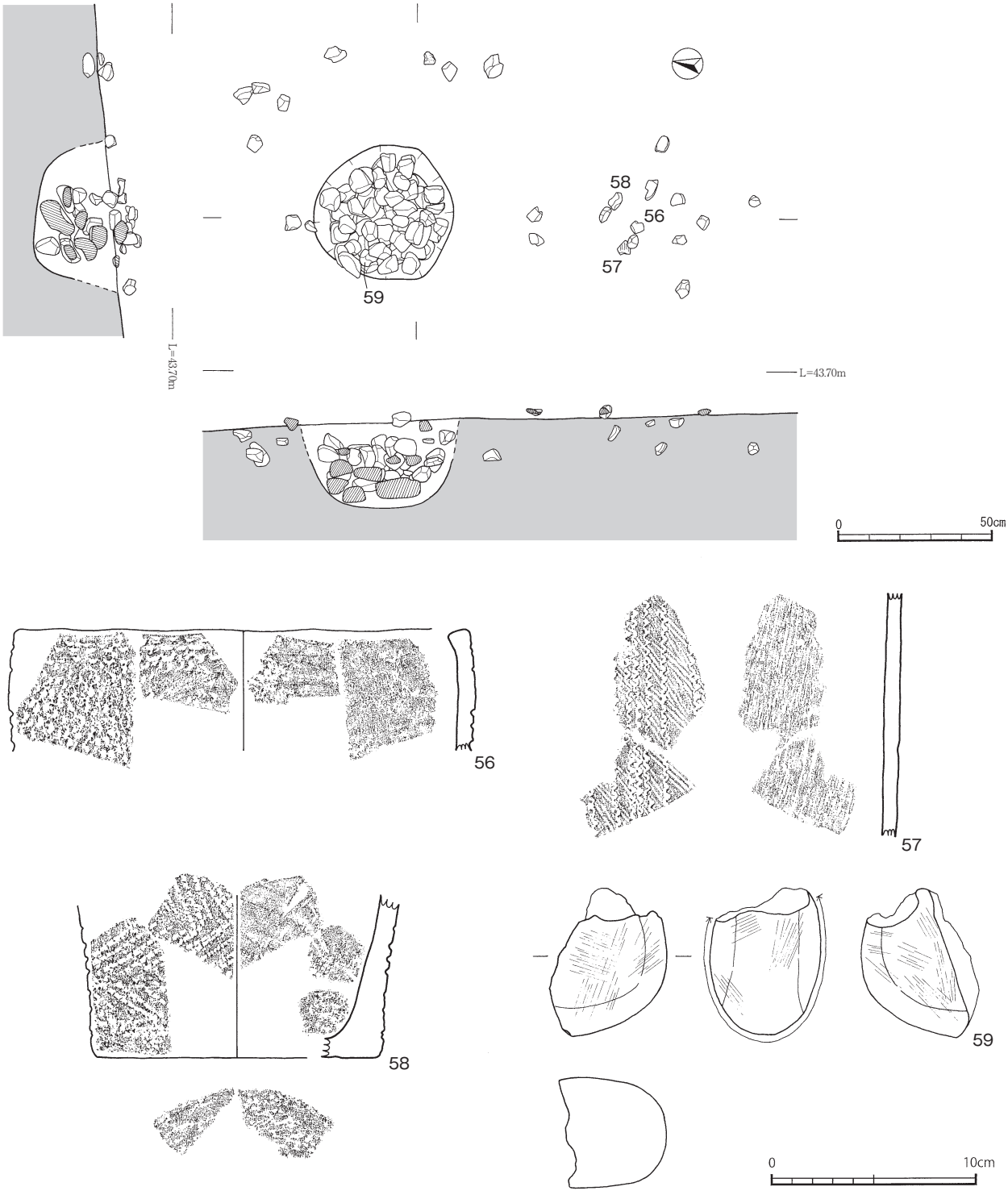


集石９号及び出土遺物

第 41 図　集石Ⅰ－ｂ類①及び出土遺物

り，平面径 26 × 24cm，検出面からの深さ 10cmの円形を呈した掘り込みの底面近くまで埋まっていた。礫は熱を受けた 300 g 前後の安山岩が半数を占めるが，全体としてはその大きさは揃っておらず，重量が 190～770 g の角の取れた自然礫である。

石器４点が出土し，石器転用品２点を実測し掲載した。66・67 は石皿で，どちらも凝灰岩を素材としている。66 は，表面に敲打痕が数箇所みられる。また表面は被熱により赤化しており，二次使用された可能性が高い。67 の表面は磨痕により滑らかな平坦面になっている。石材の凝灰岩は白色で，集石 11 号の遺物番号 61 と残存状況や表面の滑らかさが非常に酷似しているため，同一個体で



集石 10 号及び出土遺物

第 42 図　集石Ⅰ－ｂ類②及び出土遺物

ある可能性が高い。

【Ⅱ－a類】

集石 14 号（第 44 図）

Ｂ－19 区，わずかに東へ下っていく緩斜面で検出された。検出面はⅦ層である。北側の調査区境に位置し，周辺に他の集石やその他の遺構などは検出されなかったエリアである。集石 14 号の北側には類似の集石が存在すると予想されるが，調査区外であるため不明である。187 × 81cmの範囲内に礫の集中と散在が見られた。礫は被熱の痕跡のある砂岩の破砕礫であり，７～８cmの角張った小礫が大部分を占める。総礫数は 126 個とやや多いが，50 g以下の小礫も多く，同一個体のものが多く含まれている。遺物の出土はない。

集石 15 号（第 44 図）

Ｂ－11 区，南側へ急激に下っていく斜面のⅦ層中で検出された。102 × 94cmの範囲内に，礫の集中部と散礫状に広がる部分が見られた。東側約２mに集石３号が隣接する。集中部と散礫部では礫の特徴が異なり，集中部には砂岩の 100 g以下の細かい破砕礫がほとんどであるのに対して，散礫部は角の取れた凝灰岩の 150 g前後の自然礫が主流である。２つの集まりは同一の集石とは考えられない。周辺の土層は，南側の谷へ向かって大きなブロック状に流れ出す部分もあるなど安定しないため，上位から流れ込んだ可能性がある。

礫中からは石皿の破損品が検出されたが，残存状況が悪く掲載には至らなかった。

集石 16 号（第 44 図）

Ｅ－17 区，東方向へ緩やかに下っていく緩斜面のⅦ層上面で検出された。尾根部を取り巻く集石群の東端にあたり，これより東側の平坦面では集石の検出は少なく，礫の出土数も少なくなる。41 × 25cmの範囲内に，やや大きめの礫が集中して出土した。総礫数は９個で，ほとんどが 10cm前後，重さ 200～300 gの丸みを帯びた安山岩の自然礫である。表面に変色や劣化が多少見られるが状態は良好で，並べられたような検出状況や掘り込みが確認されていないことなどから，再利用のために集められたものと思われる。

台石転用品と思われるものが１点出土したが，摩耗が激しく磨痕等が確認できなかったため，図化していない。

集石 17 号（第 45 図）

Ｅ－11 区，Ⅶ層下位から検出された。西方向の谷底へ向かって急激に下る斜面である。周辺には礫や土器片が多く出土しているが，土塊なども出土しており，層位が安定しない場所であるため，上位から移動し検出された位置に溜まった可能性もある。68 × 37cmの狭い範囲に礫の集中と約 30cm離れて磨石があり，一連のものとして取り扱った。礫総数は 22 個，安山岩の自然礫が主体で，100～150 g程度のものと 50 g以下の小礫が半数ずつで構成される。熱により破砕された礫は少ないが，表面は赤化や劣化が見られる。

遺物は，土器片２点と石器２点が出土した。その内，残存状況の良い土器１点と石器転用品１点の計２点について実測し，掲載した。貝殻刺突文が施文される 68 は胴部片で，横位の貝殻刺突の間に斜位の刺突を施すものと思われ，Ⅵ類土器の下剥峯式土器に相当する。69 は砂岩製の磨痕と敲打痕がある石器で，破砕した２片を接合したものである。磨痕は表面・裏面，敲打痕は周縁部にみられる。

集石 18 号（第 45 図）

Ｄ－13・14 区の尾根部の平坦面，Ⅷ層上面で検出された。74 × 52cmの範囲内に総数 43 個の礫が略東西方向に細長く密集して出土した。礫は丸みを帯びた安山岩の自然礫が大部分で，ほとんどが７～８cm，重さ 150 g前後でほぼ大きさが揃っている。掘り込みは確認されなかったが，略東西方向に自然的なくぼみがわずかに見られ，そこに沿って集めた可能性がある。

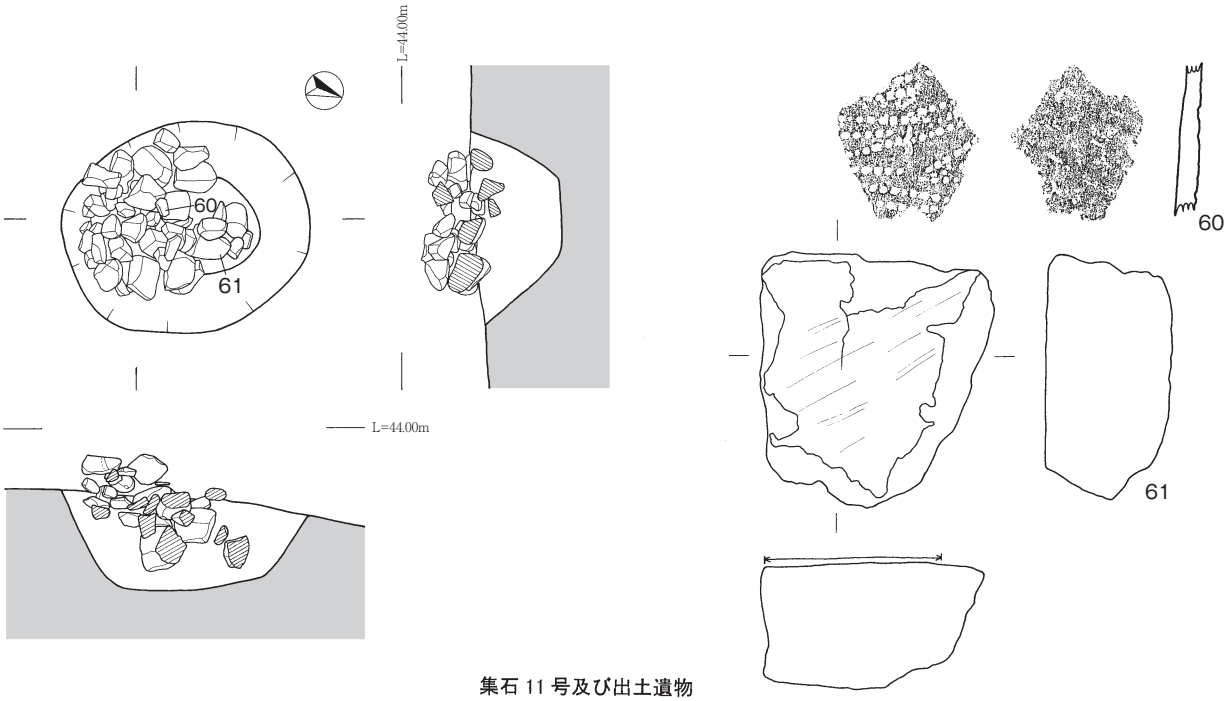
出土した石器転用品２点を実測・掲載した。70 は砥石で，素材に砂岩を用いている。表面と裏面に使用痕が残る。安山岩製の磨石である 71 は，表面が滑らかな平坦面で，磨った痕跡が明瞭に残る。周縁部に敲打痕が数箇所観察できることから，敲石として使用していた可能性も考えられる。

【Ⅱ－b類】

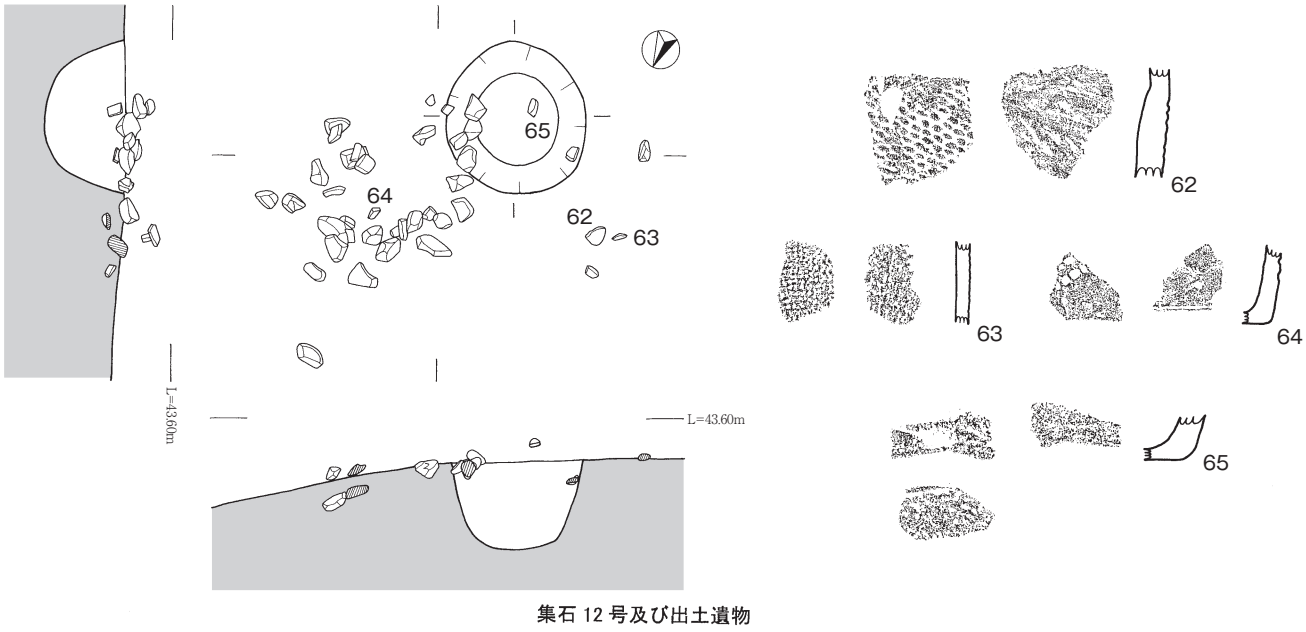
集石 19 号（第 46 図）

Ｄ－10 区，西側へ下る急斜面のⅥ層とⅦ層が混在し合う斜面上で検出された。周辺にはレベル差を持った礫が広がっており，ブロック状の土塊が多く見られることから尾根部付近からの急傾斜により上位から流されて堆積した可能性も考えられる。検出位置と尾根部との標高差は約５mである。172 × 124cmの範囲内に，総数 66 個の礫がやや集中して出土した。礫は 10cmのものもわずかに混ざるが，約７割が５cm以下，50 g以下という被熱により破砕された小片であり，表面の変色や摩耗が激しい。

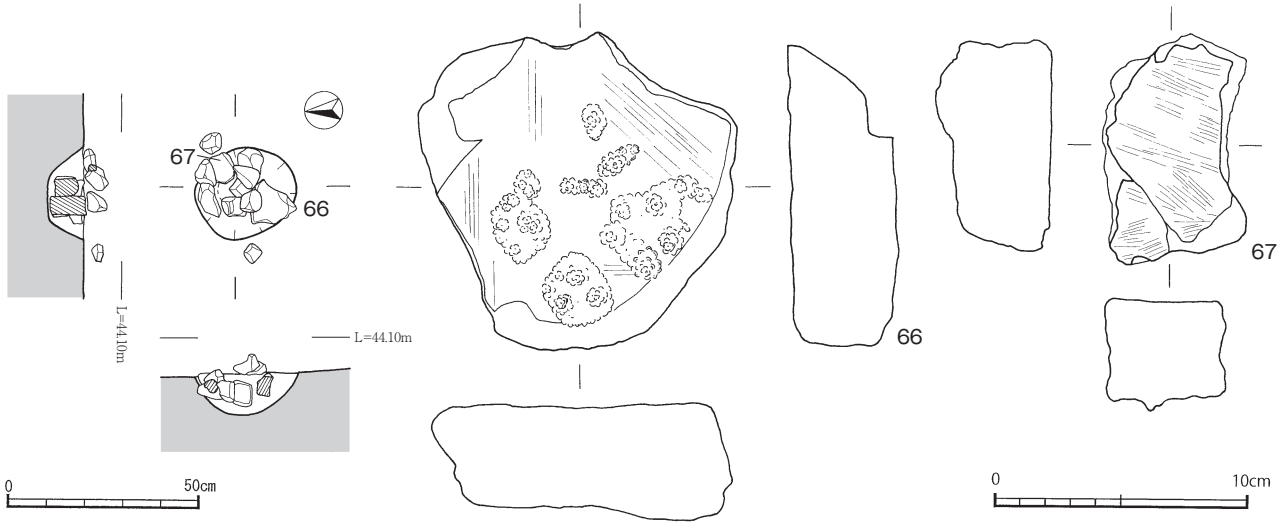
礫間からは計 11 点の土器片と砥石１点が出土し，その中から小片を除いた土器片４点を実測・掲載した。72・73 の外面には貝殻刺突が施文され，Ⅵ類土器の下剥峯式土器に相当する。74 はやや外反して立ち上がる胴部片で，４条単位の浅い貝殻条痕が縦位に施される。下端の器壁が厚いことから底部付近の胴部であると考えられる。文様形態からⅦ類土器の桑ノ丸式土器と思われる。75 は底部片で包含層出土の遺物３点と接合した。底部付近は摩耗している。胴部の上位には鋸歯状の貝殻刺突文，下位には斜位の短い貝殻条痕文が施文されている。復元底径は 18.6cmである。貝殻刺突文と短条痕文で文様を構成する特徴からⅧ類土器に該当する。内外面



集石 11 号及び出土遺物



集石 12 号及び出土遺物



集石 13 号及び出土遺物

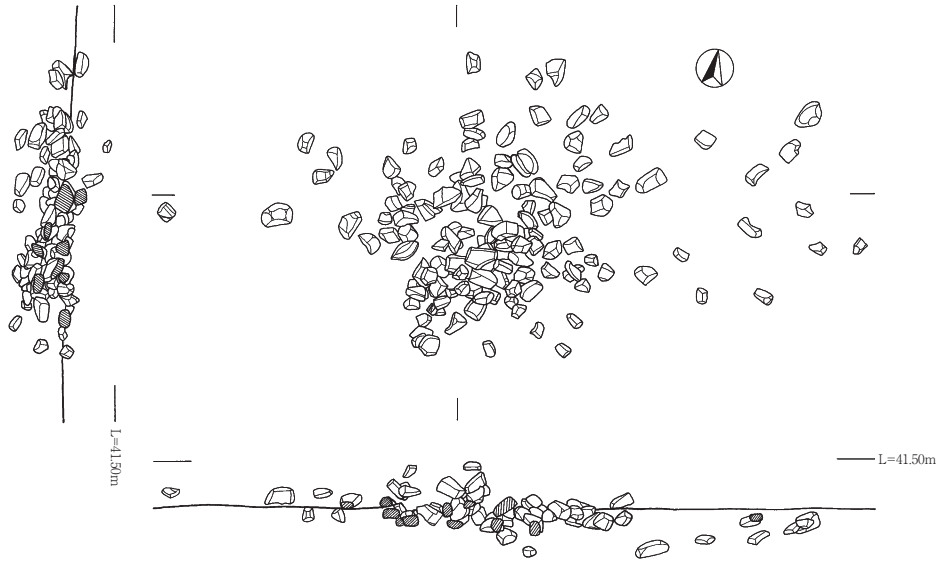
第 43 図　集石Ⅰ－ｂ類③及び出土遺物

は橙色を帯び，胴部内面には煤の付着が見られる。

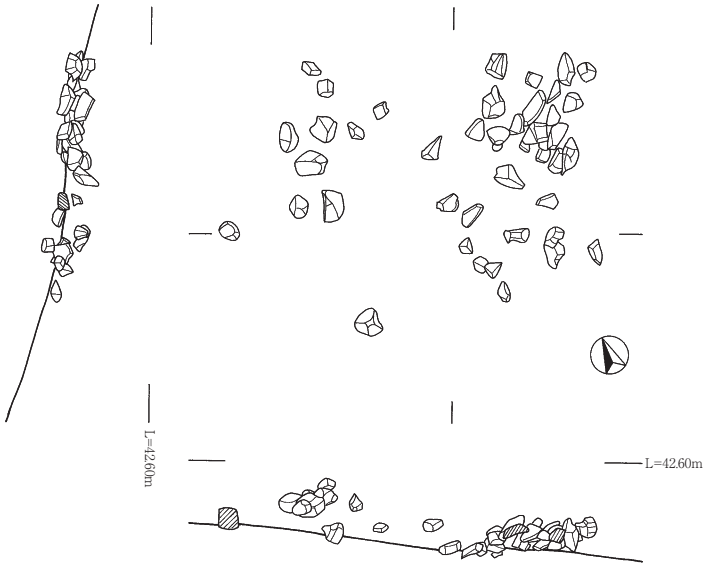
集石 20 号（第 46 図）

Ｃ－ 11 区，西側へ下る急斜面のⅥ層とⅦ層が混在し合う斜面上で検出された。集石 22 号・19 号と同様に，土砂が流れ込む谷部に位置していることから，尾根部から流されて堆積した可能性も十分に考えられる。尾根部との標高差は約４ｍである。約１ｍ四方の範囲内に，礫がやや集中して出土した。礫の約８割は５～７㎝，重量 50 ｇ前後の自然礫で，凝灰岩の割合が多く，中には砂岩や安山岩も含まれる。多くの礫は被熱により変色し，表面の劣化が激しい。

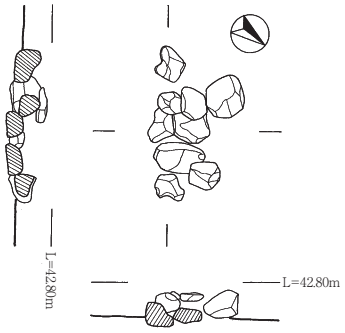
礫間からは 10 点の土器片が出土したが，その中から状態の良い１点と磨石の完形品１点の計２点について実測･掲載した。76 は，集石 19 号の遺物番号 75 と同様に，斜位の貝殻刺突文と短条痕文で文様を構成する胴部片でⅧ類に分類される。77 の表面及び裏面には明瞭な磨痕が残る。表面は滑らかであるが，裏面に平坦面は形成されていない。また，どちらの面にも１箇所ずつ敲打痕が



集石 14 号



集石 15 号



集石 16 号



第 44 図　集石Ⅱ－ａ類①

残る。石材には砂岩を用いている。

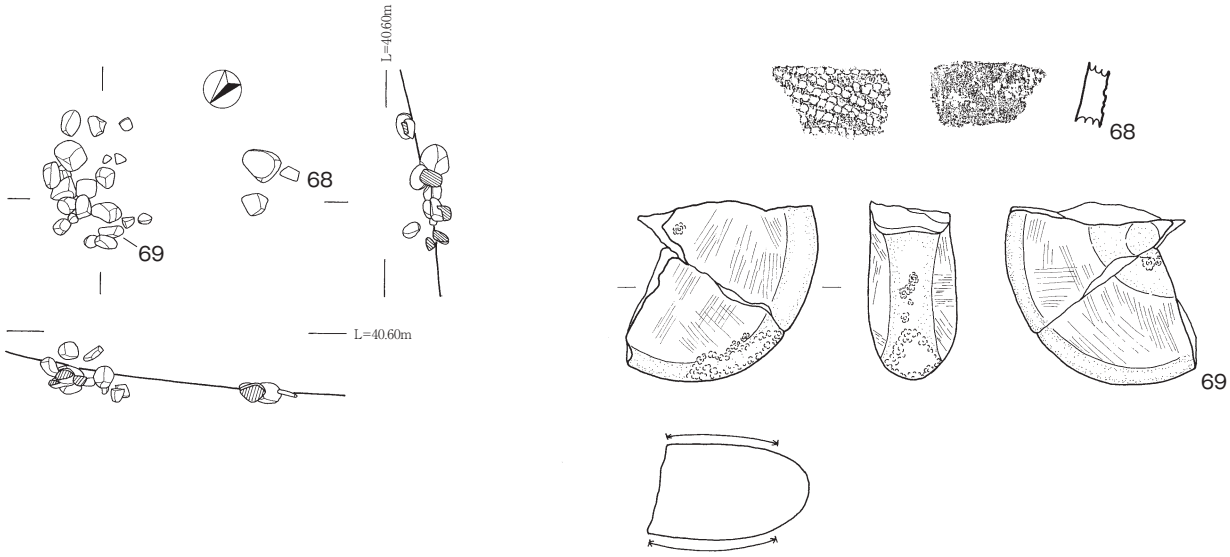
集石 21 号（第 47 図）

Ｂ － 15 区，東側へ緩やかに下る緩斜面のⅦ層中で検出された。周辺に遺構は無く，遺物や礫の出土量は少ないエリアである。総数 31 個の礫が 122 × 104㎝範囲内に，中央にやや集中している箇所が見られるが，全体として散礫状に広がっていた。礫は安山岩と砂岩が大部分を占め，7 ～ 8㎝で重さ 100 ｇ程度のものが中心である。全ての自然礫や破砕礫が被熱し，表面が変色している。

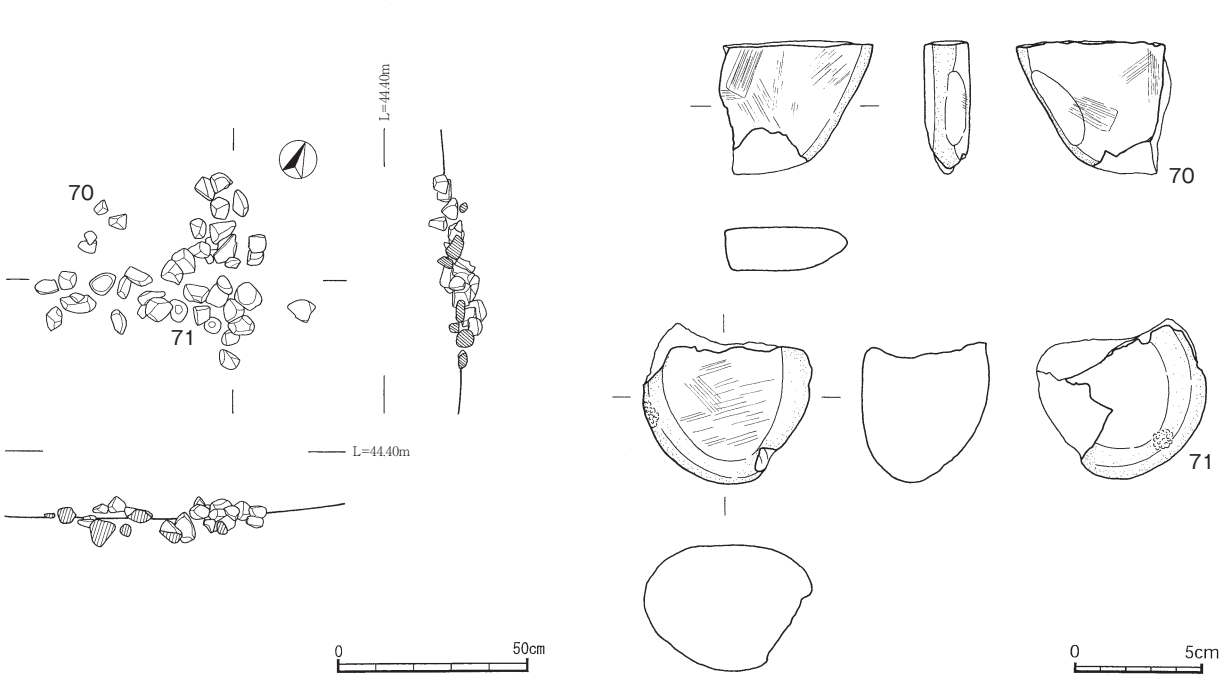
礫間からは土器片２点が出土したが，その内でも状態の良い１点と石器の転用品１点の計２点について実測・掲載した。78 は直立気味に立ち上がる胴部で，内面は丁寧に調整されている。外面に文様は施文されておらず，無文土器である可能性が考えられる。79 の砥石は砂岩製で，表面は平坦面を有する。また，表面は被熱により変色し褐色を有する。さらに，下面にも微弱な磨痕が確認できる。

集石 22 号（第 47 図）

Ｄ － 10 区，西側へ下る急斜面のⅥ層とⅦ層が混在し

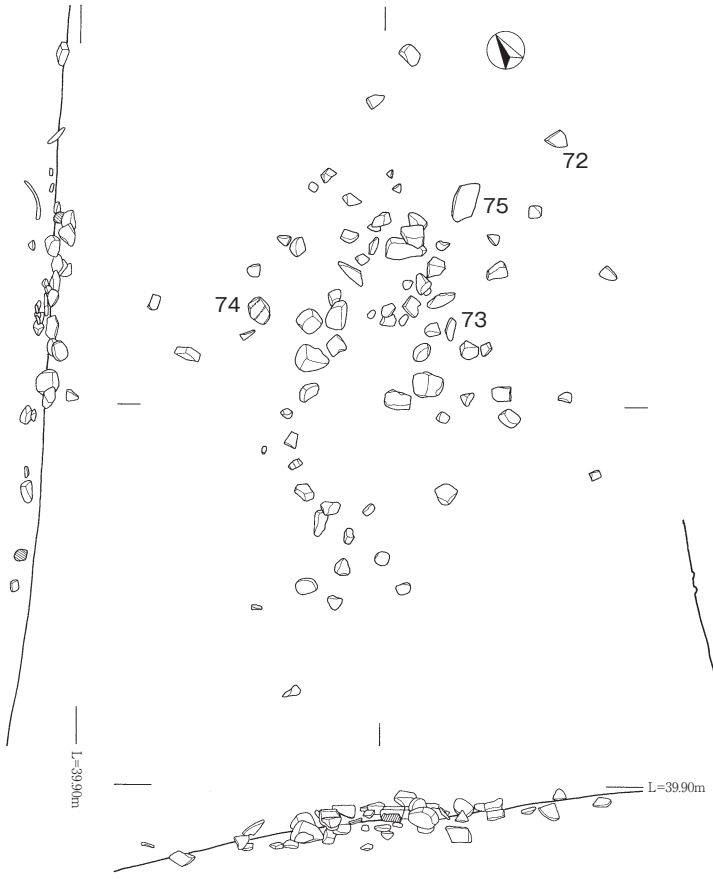


集石 17 号及び出土遺物

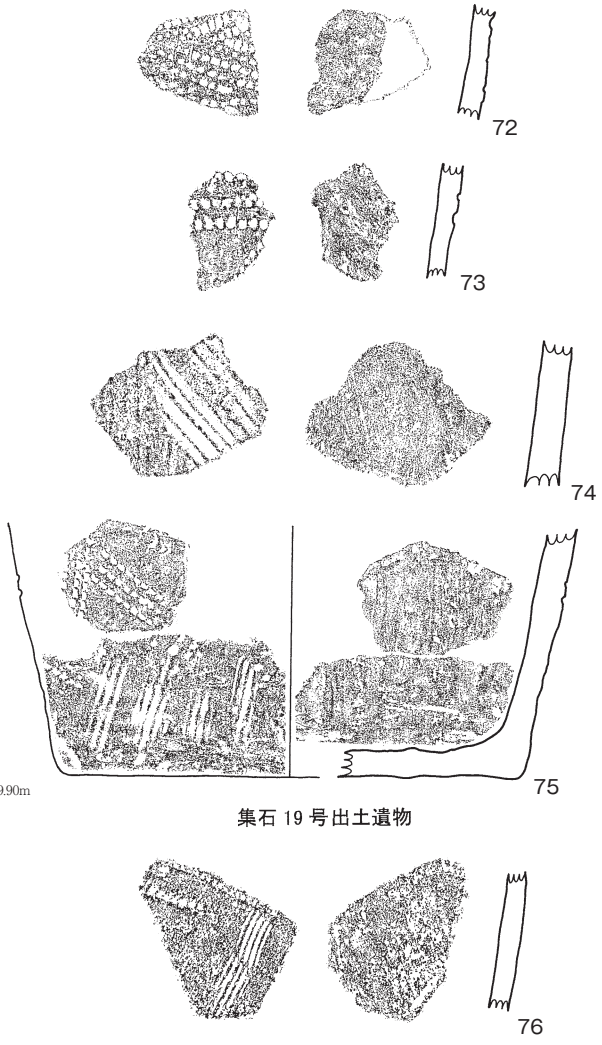


集石 18 号及び出土遺物

第 45 図　集石Ⅱ－ａ類②及び出土遺物

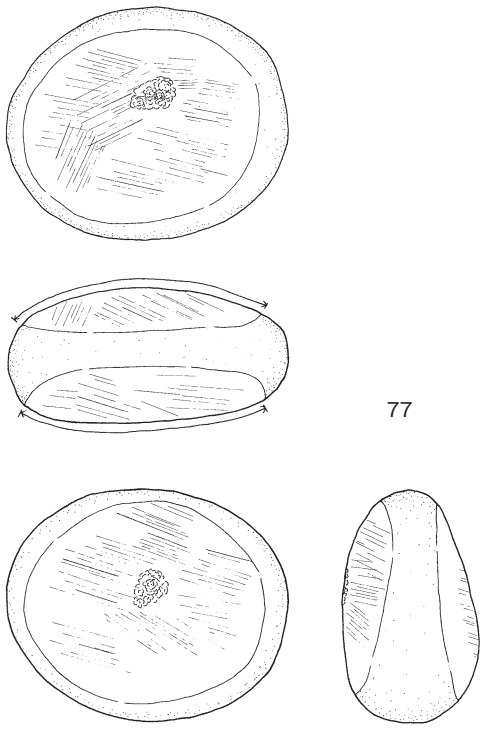


集石 19 号



集石 19 号出土遺物



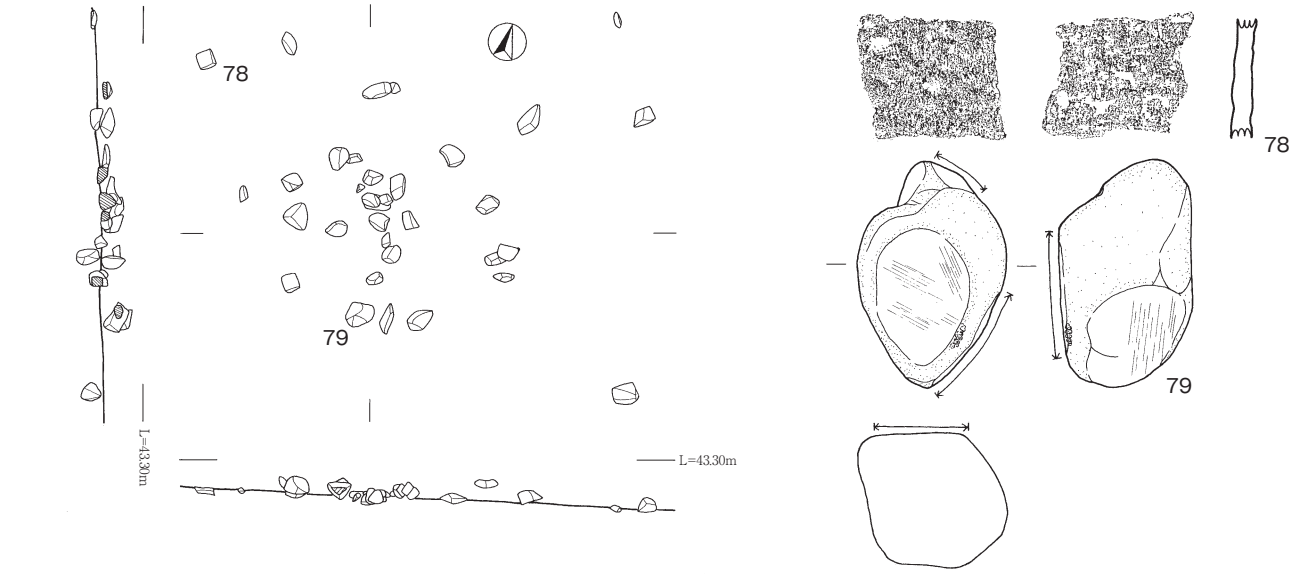


0 50cm

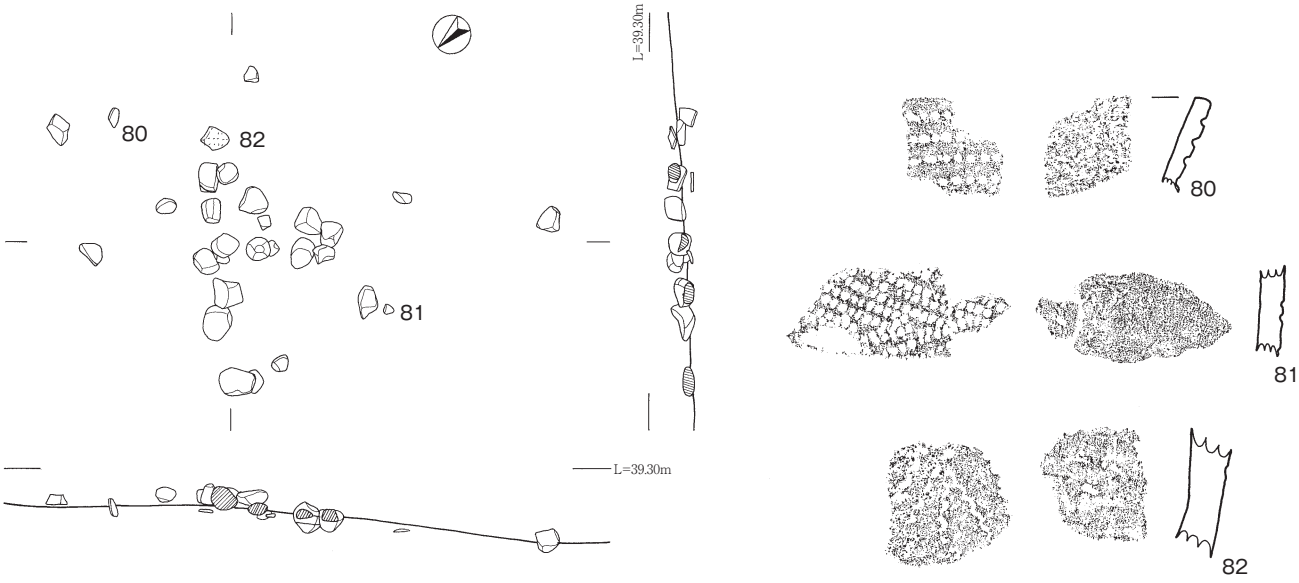
集石 20 号及び出土遺物

0 5cm

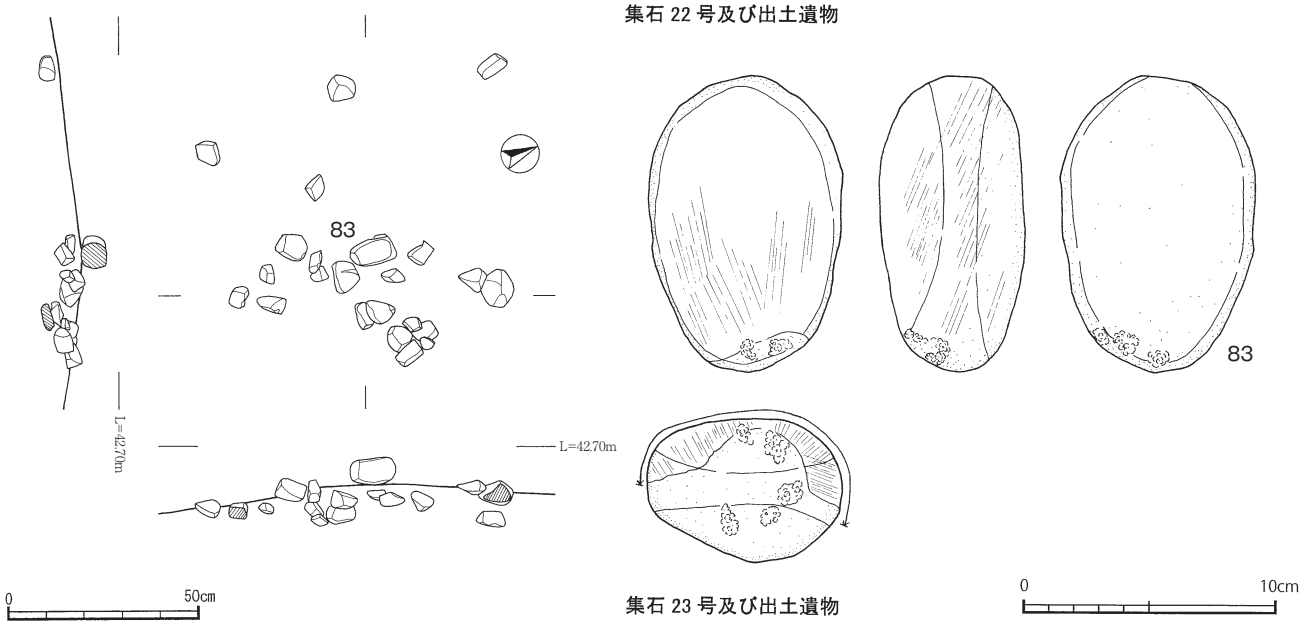
第 46 図　集石Ⅱ－ｂ類①及び出土遺物



集石 21 号及び出土遺物

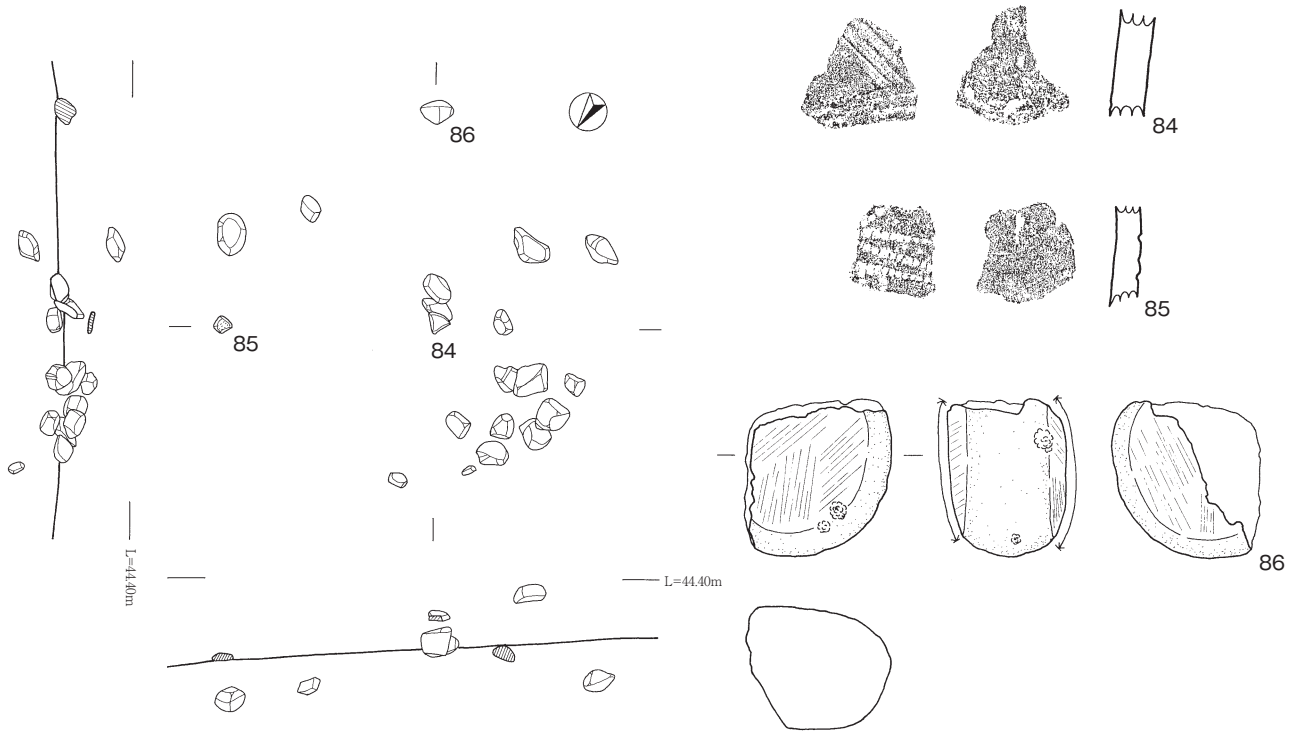


集石 22 号及び出土遺物



集石 23 号及び出土遺物

第 47 図　集石Ⅱ－ｂ類②及び出土遺物



集石 24 号及び出土遺物



集石 25 号及び出土遺物

0 5cm

第 48 図　集石Ⅱ－ｂ類③及び出土遺物

合う斜面上で検出された。東側約５ｍに集石 19 号があるが，地形的には西側へ急激に下る谷地形の底に近く，本遺跡の遺構の中で最も低い標高 38.4 ｍに位置している。周辺に出土する土器片や礫にはレベル差があり，またブロック状の土塊も多く見られることから，標高差約６ｍある急斜面を流されて，谷底に堆積したものである可能性も考えられる。136 × 87㎝の範囲内に，総数 22 個の礫がやや集中して出土した。大きさは７～８㎝で重さ 150 ｇ前後の角の取れた自然礫が大部分であり，破砕礫はほとんど見られず，大きさも揃っている。

礫間からは８点の土器片が出土し，その中から実測可能な３点について掲載した。80 はやや外傾気味に立ち上がる口縁部で，Ⅳ類土器の石坂式土器と思われる。81 の外面には斜位の貝殻刺突が羽状に施されており，内面は丁寧なナデ調整により仕上げられている。直線的に立ち上がる胴部であると推定される。82 は全体的に器壁が厚く，底部付近の胴部片であると思われる。斜位の貝殻刺突文を施す。内外面ともに丁寧な仕上がりであり，胎土には１～２㎜大の白色・黄色粒を多く含む。内面全体と外面の一部に被熱による赤化がみられる。81・82 ともⅥ類土器の下剥峯式土器に該当する。

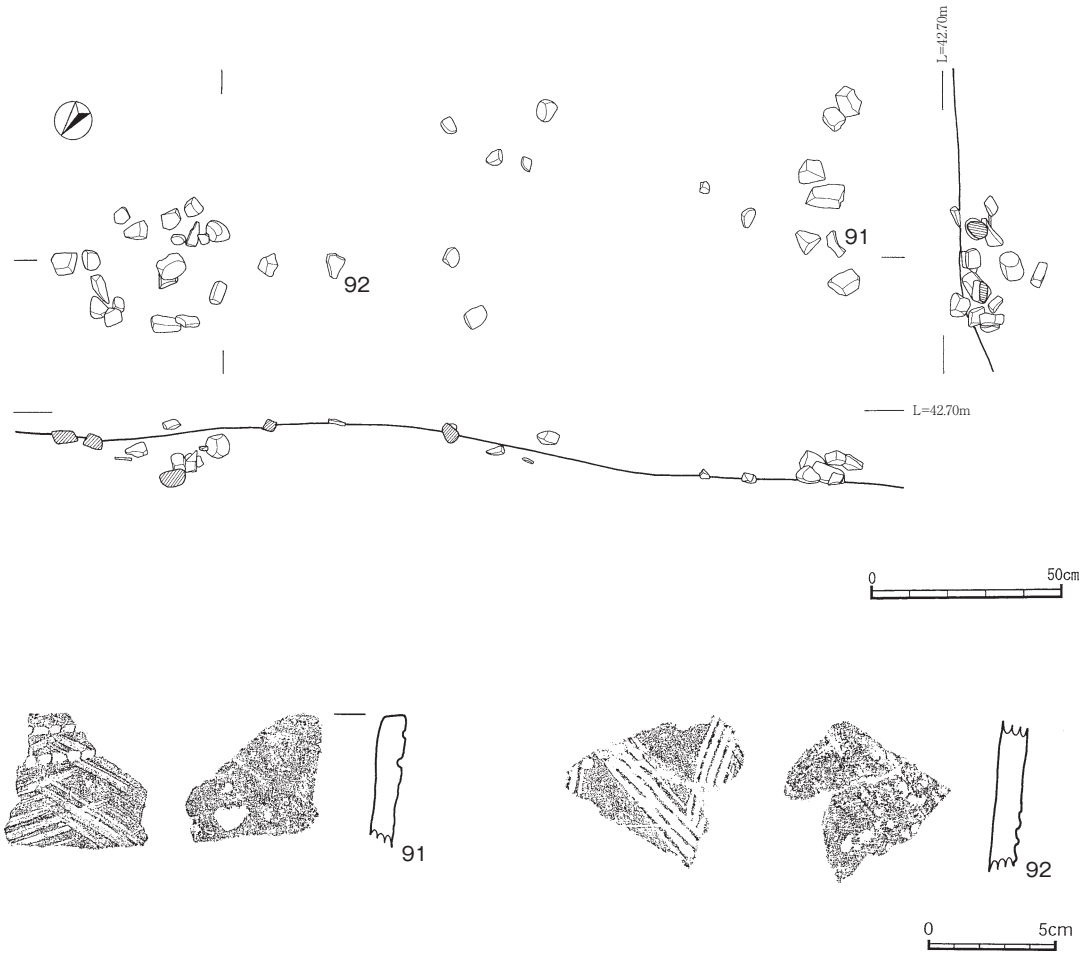
集石 23 号（第 47 図）

Ｂ－ 12 区，南側へ下る斜面のⅦ層上面で検出された。東側に集石 34 号があり，ほぼ同じような立地状況である。周辺はⅥ層とⅦ層が混在しており，遺物や自然礫などの移動があった可能性が考えられる。84 × 83㎝の範囲内に，総数 24 個の礫がやや集中して略南北方向へ細長く集まって出土した。礫の半数以上は７～８㎝の凝灰岩の自然礫であるが，安山岩の破砕礫も３割ほど混ざり破砕面が鋭利なものも見られた。

石器の転用品２点が出土し，その内ほぼ完形品である１点について実測し掲載した。83 は磨石・敲石である。表面から側縁部左右に磨痕がある。側縁部下側には敲打痕が数箇所残る。

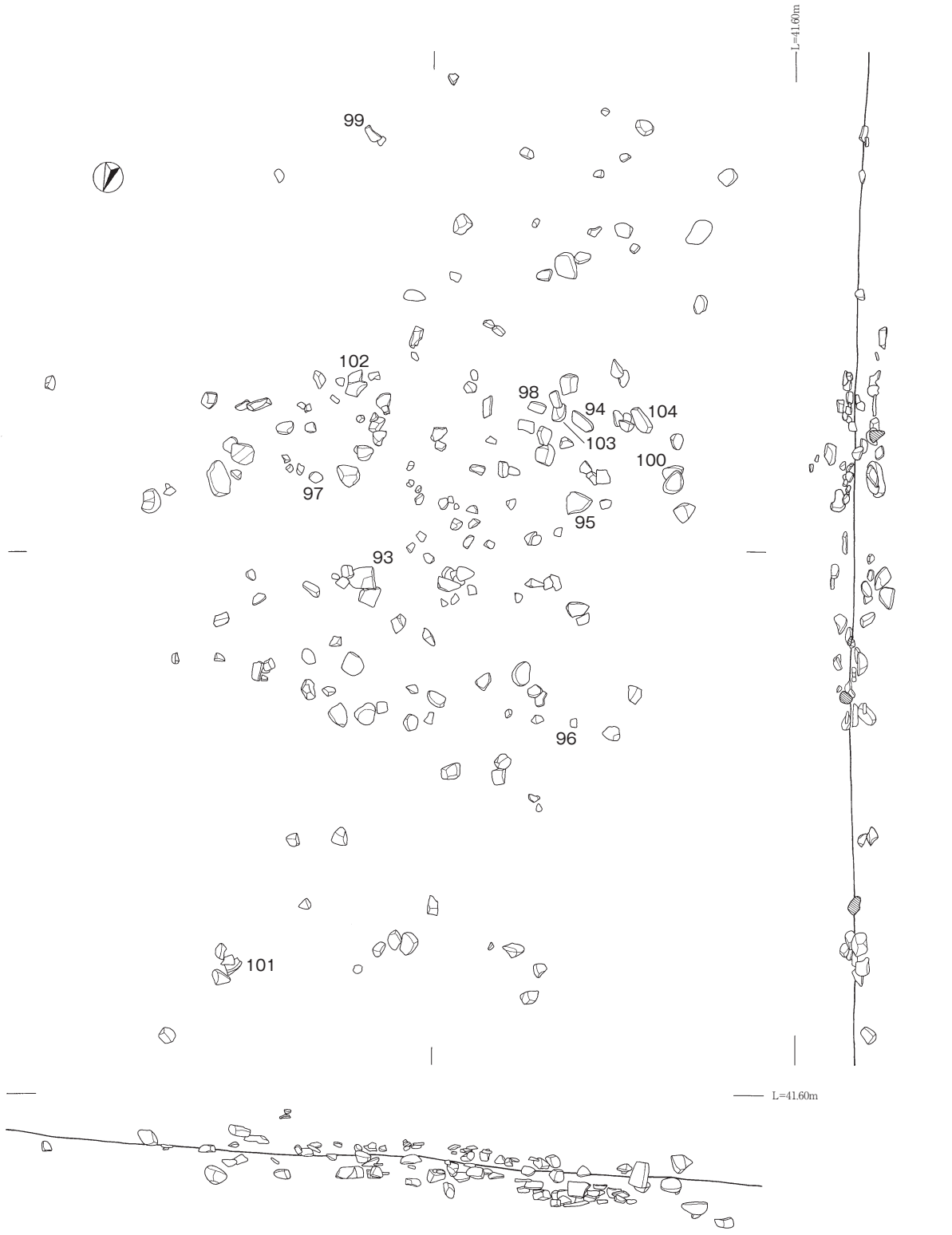
集石 24 号（第 48 図）

Ｄ・Ｅ－ 15 区，東側へ下り始める緩斜面のⅦ層中で検出された。やや下った東側には集石５基や土坑など，南東側には土坑６基などの遺構が集中して検出された。106 × 103㎝の範囲内に，総礫数 18 個，礫の集中と散礫状の広がりが見られた。礫は石材では凝灰岩，重さは



集石 26 号及び出土遺物

第 49 図　集石Ⅱ－ｂ類④及び出土遺物


L=41.60m
99
102
98
94
104
103
100
97
95
93
96
101
L=41.60m
集石 27 号
0
50cm

第 50 図　集石Ⅱ－ｃ類①

100～200 ｇのものが約半数であるが，大きさや石材は揃っていない。

石器２点と礫間から土器片２点が出土し，実測可能な土器片２点と石器の転用品１点を合わせた計３点について実測・掲載した。84 は直行する胴部で，外面に幅広の条痕を斜位に施す。外面の下端は横方向の粗いナデ調整により条痕が消され，胎土には雲母を多く含む。Ⅳ類土器の石坂式土器であると思われる。85 は胴部片で，やや内湾する。外面には斜位の貝殻刺突文が施される。内外面に煤の付着がみられる。Ⅵ類土器の下剥峯式土器に相当する。86 は半分以上を欠損する磨石で，石材は凝灰岩である。磨面は平坦で，周縁に微細な敲打の痕跡もみられる。

集石 25 号（第 48 図）

Ｃ・Ｄ － 16 区，東側へ緩やかに下る緩斜面のⅦ層上面で検出された。北西側に集石 10 号，南東側に集石４号・12 号があり，尾根を取り巻く多くの遺構のひとつである。158 × 79㎝の範囲内に，礫がやや集中して出土した。総礫数は 22 個で，安山岩と砂岩が約半分ずつを占める。礫は５㎝前後で重さ 50 ｇ程度のもの約４割，７～８㎝で重さ 100～200 ｇ程度の礫約６割と大きく２つに分けられ，破砕されたものは少なく，被熱した自然礫が多い。

礫間からは６点の土器片が出土し，その中の４点について実測・掲載した。87 は両面暗黄色の口縁部で，わずかに光沢を持つほど丁寧に仕上げられた土器である。口唇部は平坦で密なキザミ目を有する。外面にはクサビ形貼付文を施した後，口縁部には横位に貝殻刺突を，胴部には押引文を施す。Ⅲ類の土器の吉田式土器と思われる。88･89 はⅡ類土器の加栗山式土器の諸特徴を有した胴部片であり，斜位の条痕の後に縦位の刺突を施す。89 にはクサビ形貼付文が施される。88･89 とも橙色を帯びる。90 は綾杉状の貝殻条痕文が施文される胴部であり，Ⅳ類土器の石坂式土器に相当する。

集石 26 号（第 49 図）

Ｅ － 12 区，西側へ急激に下っていく斜面のⅦ層上面で検出された。急激な斜面地形の検出地点では，周辺に遺構は少ない。214 × 64cm の細長い範囲に礫が集中していた。総礫数は 35 個で，安山岩の割合が多い。大きさ５～10㎝程度で重さ 100～250 ｇ程度の自然礫が主流であるが，５㎝以下，50 ｇ以下の破砕礫も約３割程度占める。多くの礫に，被熱による礫表面の変色が見られる。

礫間から出土した土器２点を実測・掲載した。91 は綾杉状の貝殻条痕を密に施した後，口縁部に貝殻刺突文を横位に２条巡らしている。Ⅳ類土器の石坂式土器に相当する。92 には貝殻条痕が鋸歯状に施されており，Ⅶ類土器の桑ノ丸式土器と思われる。

【Ⅱ－ｃ類】

集石 27 号（第 50・51 図）

Ｃ － 11･12 区，南西方向へ下っていく斜面のⅦ層中で検出された。礫が散礫状に広がり，掘り込みを持たないⅡ － ｃ類の集石である。321 × 230㎝の広範囲内に礫総数 141 個が出土した。谷筋に当たるため土層が入り乱れており，上位から流れてきた礫が現位置に溜まった可能性も十分に考えられる。礫は５㎝以下，重さ 50 ｇ以下のものが大部分で，総礫数の約３分の２を占める。被熱した砂岩の破砕礫である。

礫間からは多くの土器片が出土したが，摩滅が激しいものが多い。土器 40 点が出土し，その中から残存状況の良い 10 点と，礫中の石器破損品２点の，計 12 点を実測・掲載した。93 はやや波状を呈した口縁部片で，頂部外面には瘤状突起が縦に付く。外面には櫛状工具によるものと思われる浅めの条痕が口縁部には横位，胴部には斜位に施される。やや内湾気味の器形であり，口唇部に平坦な面を持つ。瘤状突起の部分は角張っており，胴部は角筒形のように直線的であることから，円筒形以外の器形を想起する土器である。94～100 は胴部片である。94・95・97～99 は，下剥峯式土器にみられる貝殻刺突文を横位と斜位に施す。96 は，クサビ形貼付文と縦位の貝殻刺突が施されている。Ⅱ類土器の加栗山式土器に相当する。100 は底部付近の胴部であり，外面は直線的に立ち上がる。鋸歯状に施されたと思われる条痕の一部と短条痕が確認できることから，Ⅶ類土器の桑ノ丸式土器であると思われる。101・102 は底部である。101 は，包含層出土の遺物との接合資料である。ほぼ垂直に立ち上がる胴部で，復元底径 7.0㎝と小さな土器である。斜位の浅い条痕が部分的にみられ，その後に縦位の貝殻刺突文が施される。底面付近にはキザミ目が巡る。赤色粒を含み，内外面橙色を帯びる。外面には被熱による赤化，内面には胴部中位に煤の付着が見られる。器壁はやや厚いが，文様形態からⅡ類土器の加栗山式土器であると考えられる。102 は復元底径 7.0㎝であり，101 と同様に小型の土器である。全面の摩耗が激しく，外面に文様は確認できないため，型式は不明である。103 は磨石の破損品である。104 は砥石の破損品で，石材に砂岩を用いている。104 は表面・裏面を使用しており，非常に滑らかな平坦面を呈している。裏面右下と破砕面に被熱による赤化がみられ，二次的な使用があった可能性が考えられる。

集石 28 号（第 52 図）

Ｆ － 12 区，西方向へ下り始める緩斜面でⅦ層中より検出された。総礫数は 37 個と多くはないが，191 × 122㎝の範囲内にまとまっていた。周辺には約２ｍほど斜面を西方向へ下がった地点に集石 31 号，北西方向に土坑２号が位置する。礫は７～８㎝，重さ 180 ｇ前後の自然礫と５㎝前後，重さ 100 ｇ以下の破砕礫が混在して

おり，どちらも被熱を受けた変色が見られる。石材のほとんどが安山岩であり，砂岩がわずかに混ざる。

礫中から破損した磨石１点が出土したが，残存状況が悪かったため掲載には至らなかった。礫間からは土器２点が出土し，この２点を実測・掲載した。105 は口唇部に平坦面を持ち，やや外傾する口縁部である。円筒形の胴部には，Ⅳ類土器の石坂式土器によくみられる横位の貝殻刺突文と綾杉状の貝殻条痕文が施されている。106 は扁平な胴部片でその上下は不明であるが，外面には貝殻刺突が密に施されており，Ⅵ類土器の下剥峯式土器の特徴を有する。

集石 29 号（第 52 図）

Ｄ － 18 区，東側へ緩やかに下るほぼ平坦面のⅦ層上面で検出された。周辺に遺構は検出されなかった。約１ｍ四方の範囲内に総数 47 個の礫がやや集中して出土した。ほとんどの礫が重さ 100 ｇ以下の被熱を受けた破砕礫であり，角張っている。石材は大部分が砂岩であるが，10㎝を超える軽石も出土している。

礫間からは３点の土器片が出土した。密な押引文を施すもの，斜位の貝殻刺突を施すもの，無文のものであったが，いずれも小片であったため図化には至らなかった。

集石 30 号（第 52 図）

Ｂ － 14 区，西方向に下り始めるほぼ平坦面のⅧ層上面で，礫の集中が見られた。標高 44 ｍ付近の尾根部を取り囲むように巡る集石の北端から，西側谷へ急激に下り始める位置である。北側には同じ尾根の縁辺に集石 13 号が位置する。67 × 55㎝の狭い範囲に総数 24 個の礫がやや集中する場所が見られたが，重なり合うほどの密集は見られない。礫は被熱した砂岩の角礫が中心で，部分的な破砕も確認される。大きさは揃っておらず，25 ｇ～378 ｇの範囲で幅広い。その中でも５～７㎝，重さ 100 ｇ前後のものが約半分を占める。

遺物の出土はなかった。

集石 31 号（第 53 図）

Ｆ － 11 区，西方向へ下り始める急斜面でⅦ層中より検出された。総礫数は 32 個である。東側に集石 28 号が位置するが，尾根を取り囲む遺構群からは離れている。礫は５～７㎝の凝灰岩の自然礫が大部分で，被熱しているが変色はあまりなく，破砕礫は少ない。

礫中には土器や石器が数点混在していたが，その中から実測可能な土器片１点と石器２点を実測・掲載した。107 は断面方形の口縁部である。横位と鋸歯状の頂部と思われる貝殻刺突文が施される。Ⅵ類土器の下剥峯式土器に相当する。108 は，凝灰岩製の磨石で最大長 3.5㎝，最大幅 3.6㎝，最大厚 3.7㎝，重量 22.5 ｇの小さな製品である。109 は半分以上を欠損する磨石で，砂岩を用いており，表裏には磨痕が残る。

集石 32 号（第 53 図）

Ｂ・Ｃ － 12 区，南側へ下る斜面のⅦ層上面で検出された。周辺はⅥ層とⅦ層が混在しており，礫が上位から流れ込んだ可能性も十分考えられる。集石 32 号を取り囲むように５基の集石があり集石群の中央に位置している。144 × 112㎝の範囲内に，総数 55 個の礫がやや集中して出土した。礫の大部分が砂岩の破砕礫で，被熱による赤化が表面に見られる。重さ 50 ｇ以下の小礫が７割近くを占め，重さ 100 ｇ超えるものは１割程度である。

礫間から２点の土器片が出土し，このうち状態の良い１点について実測・掲載した。110 は縦位と斜位の貝殻刺突文が施されるが，刺突は細くて浅く一見条痕のようにも見える。型式については不明である。

集石 33 号（第 53 図）

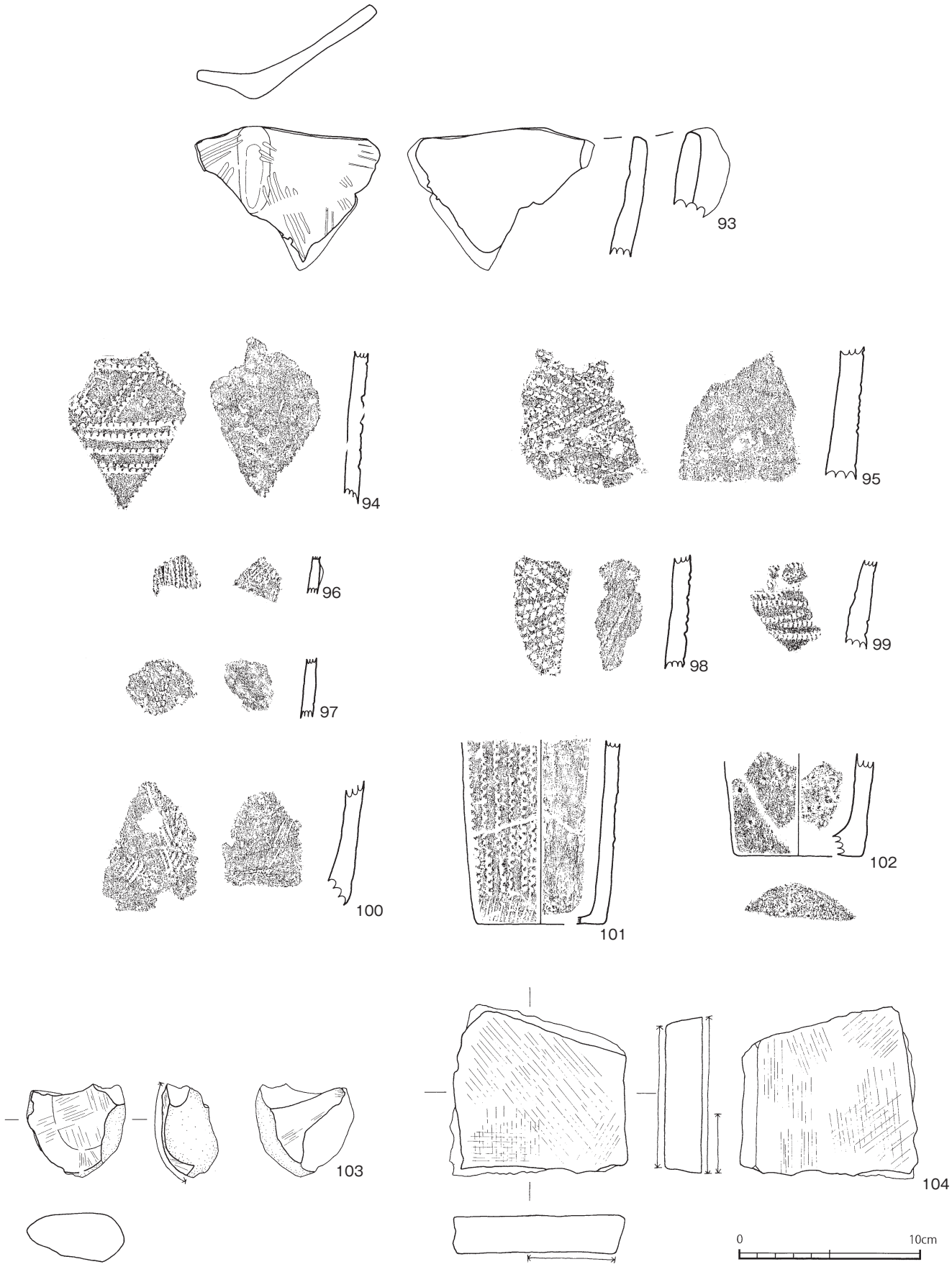
Ｃ － 14 区，北へわずかに下っていく緩斜面のⅧ層上面で検出された。近接する集石６号・８号と共に尾根上に位置し，東西両方向へ下ると集石群が位置している。88㎝四方の範囲に礫が散礫状に広がっている。礫総数は 24 個と少ないが，その内 10 個が 10㎝前後，重さ 100～400 ｇ程度の砂岩の自然礫であり，変色はあるが破砕はほとんど見られないので，再利用のために集められた可能性がある。

土器が１点と磨石の転用品１点が出土しており，このうち土器１点について実測・掲載した。磨石は破損が激しいため図化していない。111 は直線的にやや傾く胴部には，横位・鋸歯状の貝殻刺突文を施し，内湾する口縁部付近には鋸歯状の短条痕文が施される。Ⅷ類土器に該当すると思われる。

集石 34 号（第 54 図）

Ｂ・Ｃ － 12 区，南側へ下る斜面のⅦ層上面で検出された。集石 32 号と隣り合っており，同じように谷底へ向かって礫が出土している。周辺はⅥ層とⅦ層が混在しており，上位からの流れ込みの可能性も考えられる。140 × 73㎝の範囲内に総数 40 個の礫がやや集中して出土した。礫の大部分が安山岩の自然礫で，破砕は少なく，７～８㎝，重さ 150 ｇのものと，５㎝以下，重さ 50 ｇ以下のものが混在している。

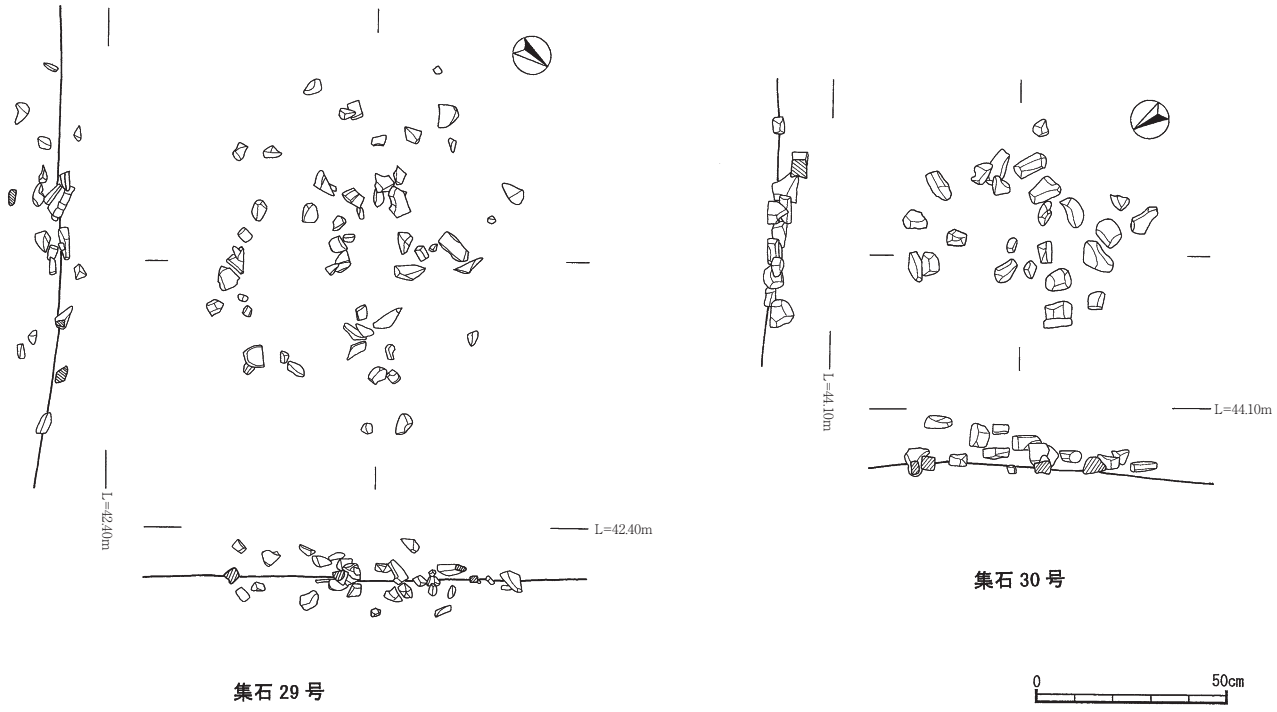
遺構内から出土した１点の土器片について実測・掲載した。112 は胴部小片であり，外面に浅いナデ状の条痕が施文される。内外面浅黄色を呈し，白色粒を多く含む。Ⅶ類土器の桑ノ丸式土器であると思われる。



第 51 図　集石 27 号出土遺物



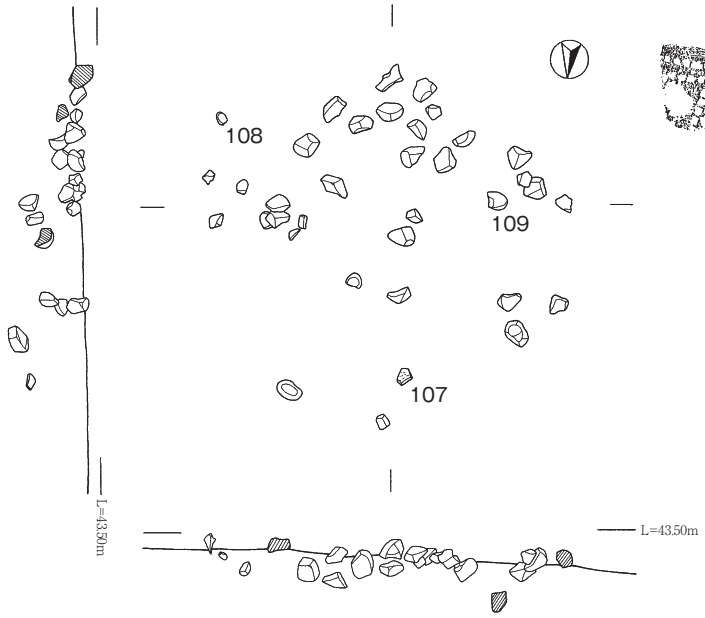
集石 28 号及び出土遺物



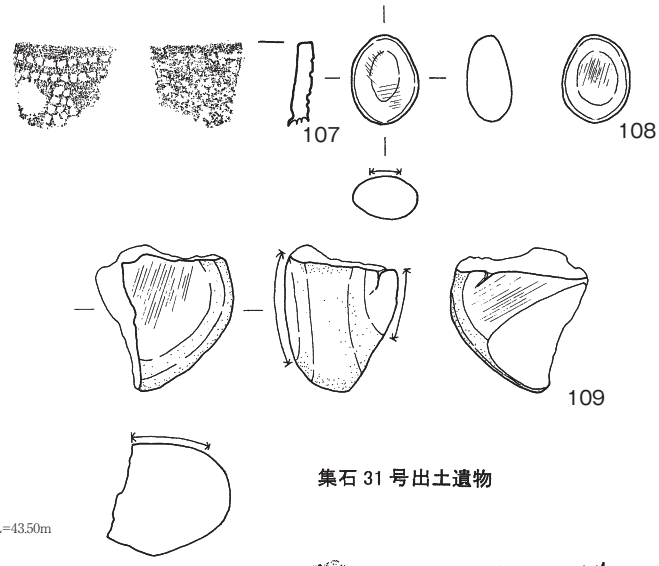
集石 29 号

集石 30 号

第 52 図　集石Ⅱ－ｃ類②及び出土遺物



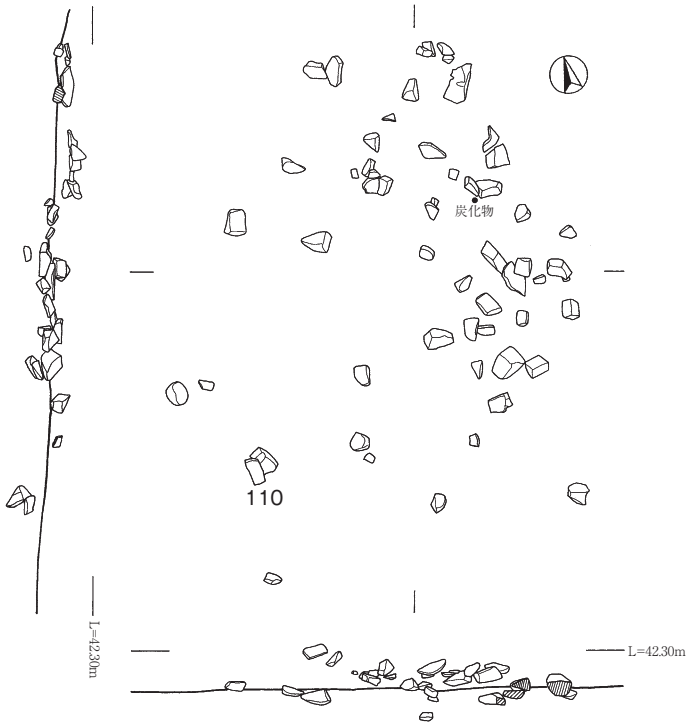
集石 31 号



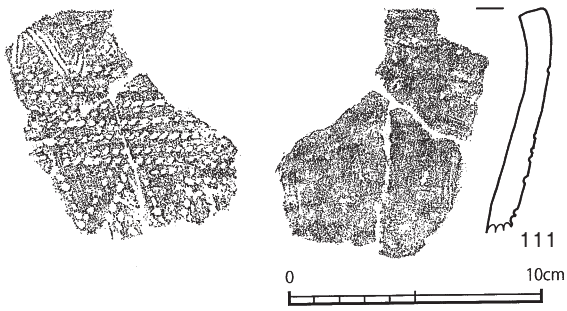
集石 31 号出土遺物

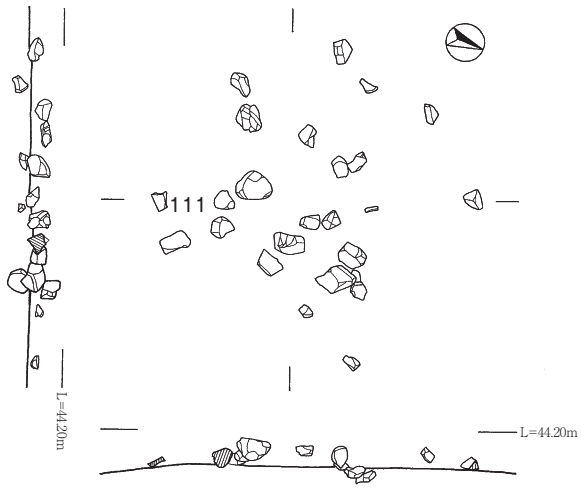


集石 32 号出土遺物



集石 32 号

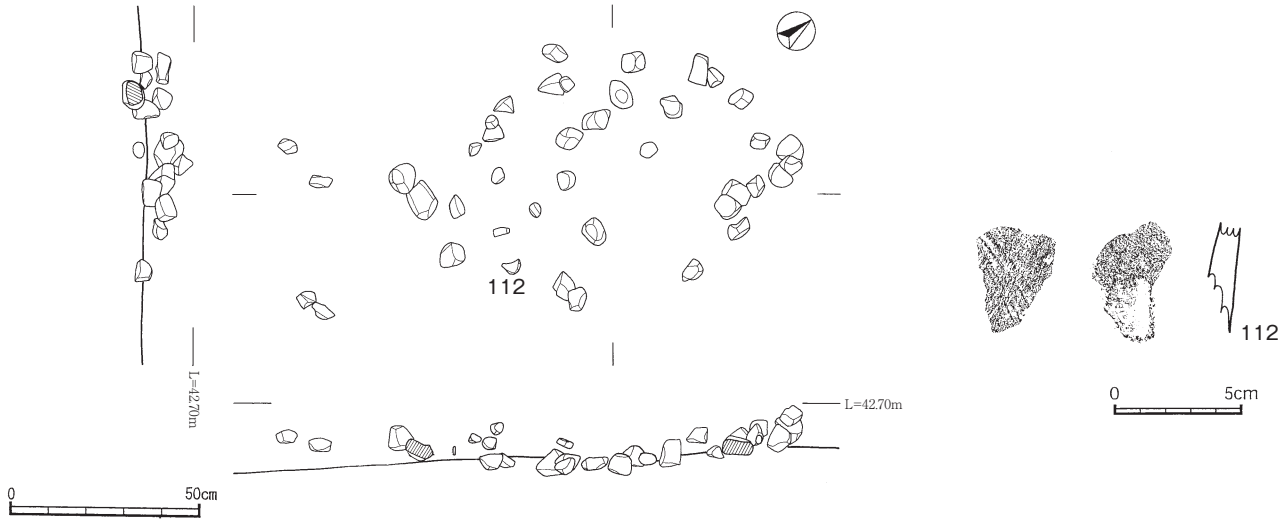




集石 33 号及び出土遺物



第 53 図　集石Ⅱ－ｃ類③及び出土遺物



集石 34 号及び出土遺物

第 54 図　集石Ⅱ－ c 類④及び出土遺物

6　土器集中・チップ集中（第 55～56 図）

狭い範囲内で土器片やチップが集中して出土し，明瞭な作業の痕跡や掘り込み等が確認されないものについては，遺物集中域として取り上げた。土器集中に関しては，土器 1 個体の破片の集中ではなく，土器型式の異なる数個体の破片が集中して出土したものである。チップ集中とは，黒曜石やチャート等のチップが集中して検出されたものである。この土器集中・チップ集中は遺構であるかは不明であるが，特異な出土状況であったため出土状況図と遺物図を掲載することとした。

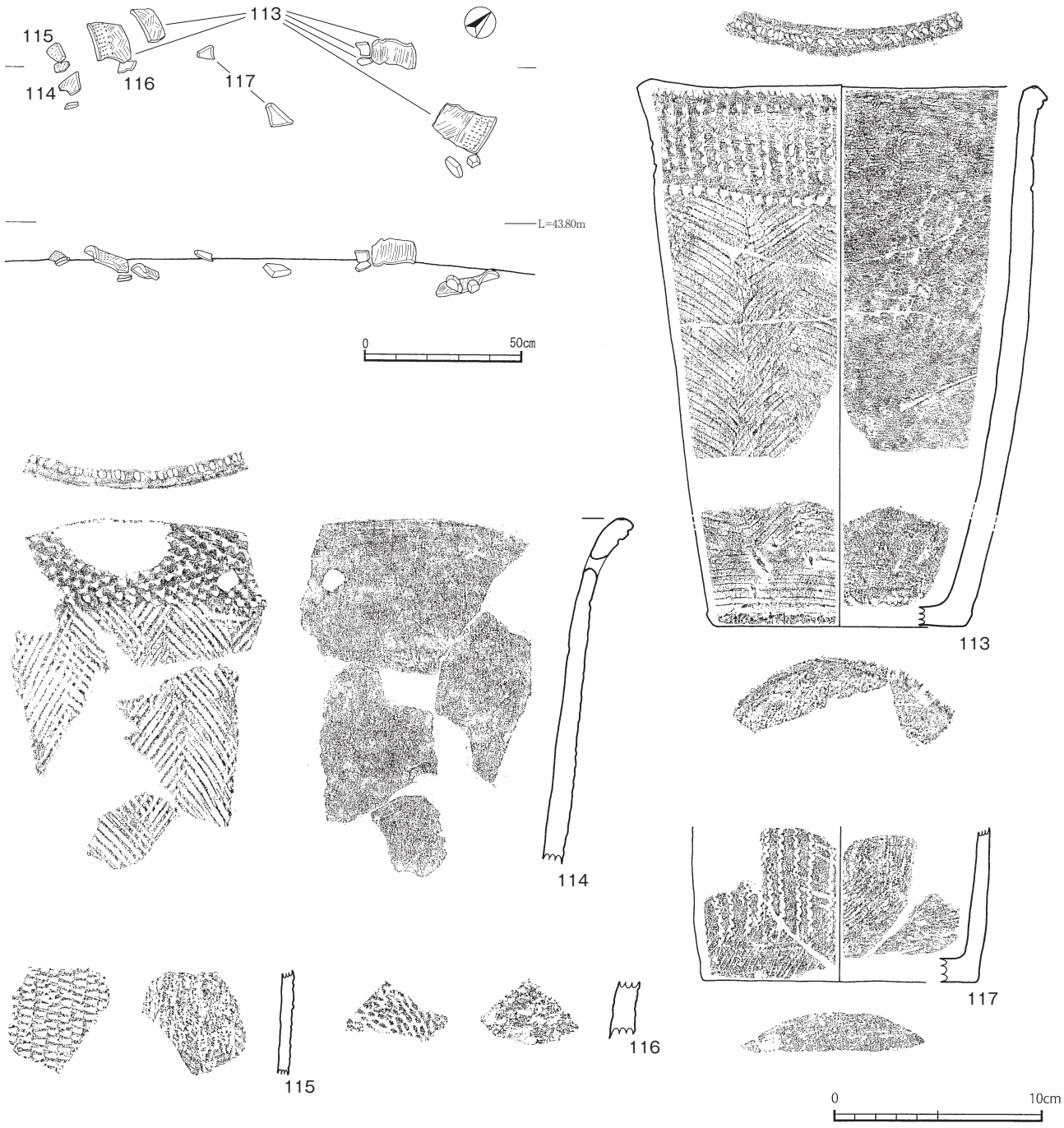
土器集中（第 55 図）

D － 15 区，東側へ向かって緩やかに下っていく緩斜面のⅦ層で検出された。約 4 m北側にチップ集中があり，その他多くの遺構が集まる尾根を取り巻く遺構のひとつである。145 × 53cmの範囲に，土器片 13 点，石器 1 点，破砕礫 1 点の計 15 個の遺物が略東西方向に並ぶようにして出土した。土器片は大きいもので全長約 16cmを測る。２つの塊が確認され，２個体以上が残存すると考えられ，レベルの低い東方向へ押し流されている。下位からは炭化物の出土や，明確な掘り込み等は確認されなかった。遺物に関しては，実測可能なものは掲載したが，残存状況が悪いものは図化していない。

113 はやや膨らみを持つ胴部が直線的に立ち上がり，口縁部が緩やかに外反する円筒形を呈する深鉢である。口縁部は平縁でやや肥厚しており口唇に細かいキザミ目を施す。外面は口縁部下に貝殻刺突文を縦位に施し，胴部に浅めの貝殻条痕文を綾杉状に施すが，底部付近では横位に施している。底部は平底で，端部に粗いキザミ目が施される。口径は 19.2cm，底径は 12.7cmである。114 はバケツ状に直線的に立ち上がり，口縁部が緩やかに外反する。口縁部は平縁で，口唇に浅いキザミ目が施される。口縁部外面には貝殻刺突文が鋸歯状に巡り，胴部は綾杉状の貝殻条痕文が施される。内面は丁寧なナデ調整であり，屈曲部付近に円形の補修孔を持つ。113・114 はⅣ類土器の石坂式土器である。115・116 は直線的に立ち上がる胴部片で，115 は器壁が薄く外面に貝殻腹縁を用いた縦位の押圧状の刺突文を密に施し，内面はケズリ調整で仕上げている。Ⅲ類土器の吉田式土器であると思われる。116 は器壁がやや厚く，外面に小粒な楕円押型文を密に施す押型文土器である。117 は，明瞭な平底を持つ底部片である。復元底径は 13.0cmを測り，端部に極めて薄い斜位のキザミ目が施される。胴部には縦位の貝殻刺突文が底面近くまで施される。Ⅱ類土器の加栗山式土器の特徴を有する土器である。

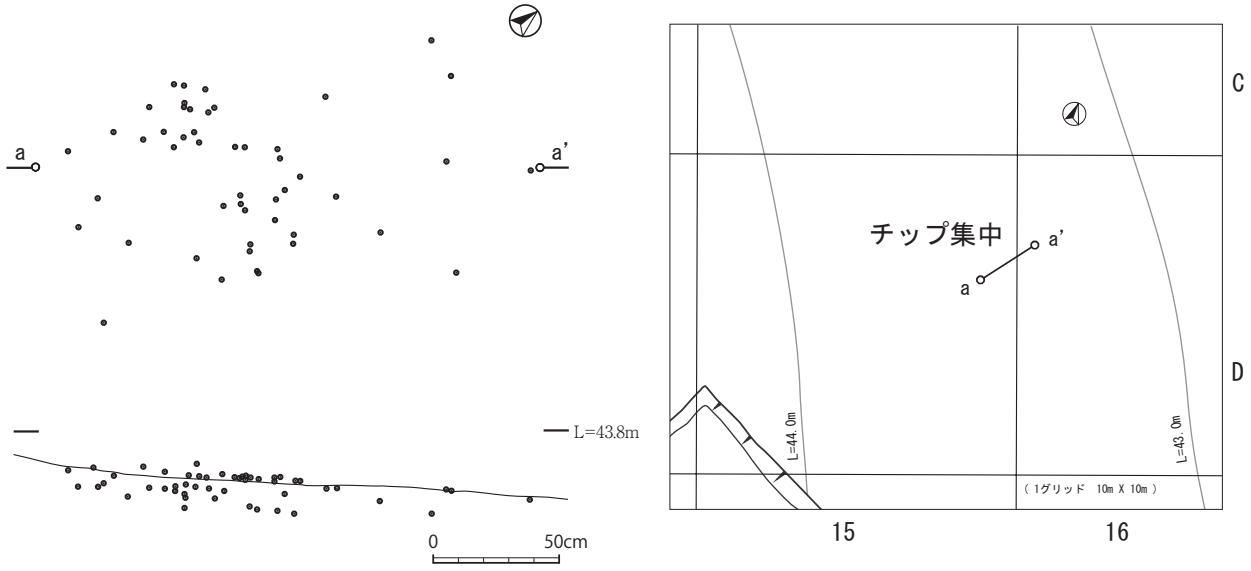
チップ集中（第 56 図）

D － 15・16 区，東側へ向かって緩やかに下っていく平坦面のⅦ層で検出され，尾根を取り巻く遺構群のひとつである。検出地点には破砕礫も数点が散礫状に出土した。礫の出土レベルよりチップの出土レベルのほうが下位であったが，破砕礫とチップに関係性はないと判断しチップのみを実測した。195 × 122cmの範囲に総数 48 点のチップが出土し，チャート 29 点，黒曜石８点（姫島４点，腰岳３点，桑ノ木津留１点），水晶７点，頁岩・ホルンフェルス３点，玉髄１点であった。検出範囲の中央西寄りに集中が見られ，その周辺に散在している。検出レベルは標高 43.5～43.7 mの範囲に収まる。調査区内か



第 55 図　土器集中及び出土遺物

らは黒曜石を原材料とした石器も多く出土していることから，石器加工の痕跡の可能性が考えられるが，製品の出土に比べ，チップ・剥片の出土数が少ないため，出土した全ての製品をここで加工したとは考え難く，調査区域外における加工場所の存在や他地域からの搬入が想定される。



第 56 図　チップ集中及び位置図

第４表　遺構内出土土器観察表１

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	類	型式	出土区	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎　土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	蟬石		
18	1	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	口縁部				貝殻刺突文	ナデ	○	○	○	○	○			13617	
	2	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	口縁部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○	○		竪穴３土-４	
19	3	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		13605	
	4	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		13607 他	
	5	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○				○	○	○	13613	
	6	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		竪穴３土-12 他	
	7	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	胴部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○			竪穴３土-25 他	
	8	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	底部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○	○		13610	砂粒
	9	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-21	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		13622	
	10	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	底部		12.0		貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		竪穴３土-18 他	
	11	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-20	胴～底部		13.2		貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		12344 他	砂粒
	12	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅷ	－	E-20	口縁～胴部				貝殻刺突文･条痕文	ナデ	○		○		○	○		竪穴３土-６他	砂粒
	13	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅷ	－	E-20	胴部				貝殻刺突文･条痕文	ナデ	○		○		○	○		13606	
	14	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅷ	－	E-20	口縁～胴部				貝殻刺突文･条痕文	ナデ	○		○		○	○		竪穴３土-３	砂粒
	15	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅷ	－	E-20	口縁部				貝殻刺突文･条痕文	ナデ	○		○		○	○		13604 他	砂粒
	16	竪穴住居跡１号	深鉢	Ⅷ	－	E-20	底部		10.0		条痕文	ナデ	○				○	○	○	竪穴３土-29	
21	17	竪穴住居跡２号	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-21	口縁部				条痕文	ナデ			○	○	○			竪穴４土-１	
	18	竪穴住居跡２号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-21	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		竪穴４土-２	煤付着
22	20	竪穴住居跡３号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-21	胴部				貝殻刺突文	ナデ		○	○	○	○			竪穴５土-６他	
	21	竪穴住居跡３号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-21	胴部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○	○		竪穴５土-４	
24	22	竪穴住居跡５号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-17･18	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○			竪穴７土-１他	煤付着
25	23	竪穴住居跡６号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B･C-18	胴部				貝殻刺突文	－(剥落)			○	○	○	○		竪穴８土-５	
27	24	竪穴遺構２号	深鉢	Ⅳ	石坂	D-19	口縁～胴部				貝殻刺突文･条痕文	ナデ	○		○	○	○			竪穴２一括他	

第５表　遺構内出土土器観察表２

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	類	型式	出土区	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎　土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
28	25	連穴土坑１号	深鉢	Ⅻ	－	E-19･20	底部				ナデ	ナデ	○				○	○		連穴１	砂粒
32	28	土坑３号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-17	底～胴部		19.0		貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		土坑 21 土-１他	
33	29	土坑６号	深鉢	Ⅱ	加栗山	F-15	胴部				貝殻刺突文・条痕文	ケズリ		○	○		○	○		土坑５土-１	
	30	土坑６号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-15	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		土坑５土-３	
	31	土坑６号	深鉢	Ⅻ	－	F-15	底部				ナデ	ナデ	○			○	○	○		土坑５土-２	
	33	土坑８号	深鉢	Ⅸ	押型文	E-15	胴部				楕円押型文	ナデ	○			○	○	○		土坑７号土-３	
	34	土坑９号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-20	胴部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○			土坑 19 土-１	
34	35	土坑 12 号	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	F-16	胴部				条痕文	ナデ	○		○	○	○			土坑９土-１	
35	37	土坑 13 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-16	胴部				貝殻刺突文	ナデ		○			○	○		土坑４土-１	
	38	土坑 13 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-16	胴部				貝殻刺突文	ナデ		○	○		○			土坑４土-５	
37	39	集石１号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-12	胴部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ					○	○		集石 39 土-６	
	40	集石１号	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	底部		9.6		条痕文	ナデ・指圧痕			○	○	○	○		集石 39 土-４	
	41	集石２号	深鉢	Ⅸ	押型文	E-16	胴部				楕円押型文	ナデ	○		○		○	○		集石 53 土-１	
38	43	集石３号	深鉢	Ⅳ	石坂	B-12	胴部				条痕文	ナデ					○	○		集石 48 土-１	
39	50	集石４号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	口縁部				貝殻刺突文	ナデ			○		○	○		集石 22 一括	
	51	集石４号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 22 土-２	
40	53	集石６号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-15	胴部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ			○		○	○		集石 30 土-２	
	54	集石６号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-15	胴部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○	○		集石 30 土-１	
41	55	集石９号	深鉢	Ⅻ	－	E-15	底部				ナデ	ナデ	○		○		○	○		集石 52 土-１	
42	56	集石 10 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-15	口縁部	22.4			貝殻刺突文	ナデ		○			○	○		集石 20 土-１他	
	57	集石 10 号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-15	胴部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ		○			○	○		集石 20 土-２他	
	58	集石 10 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-15	胴～底部		14.2		貝殻刺突文	ナデ	○			○	○	○		集石 20 土-４他	砂粒
43	60	集石 11 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-15	胴部				貝殻刺突文	ナデ			○	○	○	○		集石 38 土-１	
	62	集石 12 号	深鉢	Ⅸ	押型文	D-16	胴部				楕円押型文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 21 土-１	煤付着・砂粒
	63	集石 12 号	深鉢	Ⅲ	吉田	D-16	胴部				押引文	ナデ	○				○	○		集石 21 土-２	
	64	集石 12 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	底部				貝殻刺突文	ナデ	○				○	○		集石 21 土-４	
	65	集石 12 号	深鉢	Ⅻ	－	D-16	底部				ナデ	ナデ			○	○	○	○		集石 21 土-７	
45	68	集石 17 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 35 土-２	
46	72	集石 19 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		集石 10 土-９	
	73	集石 19 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 10 土-７	
	74	集石 19 号	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-10	胴部				条痕文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 10 土-１	砂粒
	75	集石 19 号	深鉢	Ⅷ	－	D-10	胴～底部		18.6		貝殻刺突文・条痕文	ナデ		○			○	○		集石 10 土-10 他	煤付着
	76	集石 20 号	深鉢	Ⅷ	－	C･D-11	胴部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ	○		○		○	○		集石９土-７	
47	78	集石 21 号	深鉢	Ⅻ	－	B-15	胴部				ナデ	ナデ			○	○	○	○		集石 51 土-２	
	80	集石 22 号	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	口縁部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		集石 26 土-３	砂粒
	81	集石 22 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		集石 26 土-５他	
	82	集石 22 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 26 土-４	砂粒
48	84	集石 24 号	深鉢	Ⅳ	石坂	D･E-15	胴部				条痕文	ナデ				○	○	○		集石 44 土-１	
	85	集石 24 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D･E-15	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○			○	○	○		集石 44 土-２	煤付着
	87	集石 25 号	深鉢	Ⅲ	吉田	C･D-16	口縁部				押引文・キザミ	ナデ	○		○	○	○	○		集石 36 土-５	
	88	集石 25 号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C･D-16	胴部				貝殻刺突文	ナデ		○			○	○		集石 36 土-２	
	89	集石 25 号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C･D-16	胴部				貝殻刺突文	ナデ		○			○	○		集石 36 土-１	
	90	集石 25 号	深鉢	Ⅳ	石坂	C･D-16	胴部				条痕文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 36 土-４	
49	91	集石 26 号	深鉢	Ⅳ	石坂	E-12	口縁部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ		○	○		○	○		集石２土-２	
	92	集石 26 号	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	E-12	胴部				条痕文	ナデ	○				○	○		集石２土-１他	
51	93	集石 27 号	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11･12	口縁～胴部				条痕文	ナデ	○		○		○	○		集石 27 土-41	
	94	集石 27 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11･12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 27 土-12	

第６表　遺構内出土土器観察表３

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	類	型式	出土区	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎　土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒子	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
51	95	集石 27 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11･12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○	○		集石 27 土-32	
	96	集石 27 号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11･12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○	○						集石 27 土-1	
	97	集石 27 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11･12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○	○	○			集石 27 土-17	
	98	集石 27 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11･12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		集石 27 土-13	
	99	集石 27 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11･12	胴部				貝殻刺突文	－（剥落）	○		○		○	○		集石 27 土-21	
	100	集石 27 号	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-11･12	胴～底部				条痕文	ナデ	○				○	○		集石 27 土-31	
	101	集石 27 号	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11･12	胴～底部		7.0		貝殻刺突文	ナデ		○			○	○		集石 27 土-6 他	煤付着
	102	集石 27 号	深鉢	Ⅺ	－	C-11･12	胴～底部		7.0		－（摩耗）	ナデ	○				○	○	○	集石 27 土-35	
52	105	集石 28 号	深鉢	Ⅳ	石坂	F-12	口縁部	15.6			貝殻刺突文・条痕文	ナデ	○			○	○	○		集石 1 土-2 他	
	106	集石 28 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○			○	○	○		集石 1 土-1	
53	107	集石 31 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-11	口縁部				貝殻刺突文	ナデ	○				○	○		集石 18 土-3	
	110	集石 32 号	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B･C-12	胴部				貝殻刺突文	ナデ	○		○		○	○		集石 11 土-1	
	111	集石 33 号	深鉢	Ⅷ	－	C-14	口縁～胴部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ	○		○		○	○		集石 45 土-1 他	
54	112	集石 34 号	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	B･C-12	胴部				条痕文	ナデ	○				○	○		集石 5 土-1	
55	113	土器集中	深鉢	Ⅳ	石坂	D-15	完形品	19.2	12.7	26.0	貝殻刺突文・条痕文	ナデ		○	○		○	○		土集 4－4 他	
	114	土器集中	深鉢	Ⅳ	石坂	D-15	口縁～胴部				貝殻刺突文・条痕文	ナデ	○		○		○	○		土集 4－2 他	補修孔
	115	土器集中	深鉢	Ⅲ	吉田	D-15	胴部				押引文	ケズリ	○		○	○	○	○		土集 4－10	
	116	土器集中	深鉢	Ⅸ	押型文	D-15	胴部				楕円押型文	ナデ	○	○		○	○	○		土集 4－11	砂粒
	117	土器集中	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-15	胴～底部		13.0		貝殻刺突文・条痕文	ナデ	○	○			○	○		土集 4－3 他	

第７表　遺構内出土石器観察表

※（　）は推定

挿図番号	掲載番号	遺構名	器種	石材	出土区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号	備考
							(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
21	19	竪穴住居跡２号	石斧	ホルンフェルス	C-21	Ⅷ	(2.0)	(3.7)	0.8	4.5	4	
31	26	土坑１号	磨石	凝灰岩	C-15	Ⅶ	7.0	5.4	3.6	122.0	15	
	27	土坑２号	石斧	ホルンフェルス	E-12	Ⅶ	6.2	7.2	2.1	112.0	5	
33	32	土坑６号	砥石	砂岩	F-15	Ⅶ	5.0	3.8	0.5	14.0	1	
34	36	土坑 12 号	磨石	花崗岩	F-16	Ⅶ	8.0	5.6	2.2	141.0	1	
37	42	集石２号	磨石	凝灰岩	E-16	Ⅶ	7.5	7.2	5.0	225.5	87	煤付着
38	44	集石３号	磨石	砂岩	B-12	Ⅶ	7.3	6.2	4.4	248.0	44	
	45	集石３号	磨石・敲石	安山岩	B-12	Ⅶ	6.1	9.6	6.0	394.5	35	
	46	集石３号	磨石・敲石	安山岩	B-12	Ⅶ	13.8	10.4	5.4	986.5	4	
	47	集石３号	磨石	砂岩	B-12	Ⅶ	6.3	8.7	4.5	288.0	12	
	48	集石３号	石皿	砂岩	B-12	Ⅶ	7.3	6.4	5.2	315.0	49	
	49	集石３号	線刻	凝灰岩	B-12	Ⅶ	7.8	6.7	7.3	529.5	16	
39	52	集石５号	敲石	砂岩	D-14	Ⅶ上	5.9	5.7	2.6	109.5	39	
42	59	集石 10 号	磨石	安山岩	C-15	Ⅶ上	7.2	5.8	5.3	237.0	25	
43	61	集石 11 号	石皿	凝灰岩	F-15	Ⅶ中	10.0	9.3	5.0	598.0	24	
	66	集石 13 号	石皿	凝灰岩	B-14	Ⅶ	12.5	12.5	4.7	710.5	5	
	67	集石 13 号	石皿	凝灰岩	B-14	Ⅶ	5.7	9.1	4.6	292.0	9	
45	69	集石 17 号	磨石	砂岩	E-11	Ⅶ上	7.2	7.6	3.5	258.0	4	
	70	集石 18 号	砥石	砂岩	D-14	Ⅶ上	5.2	6.0	1.8	83.0	43	
	71	集石 18 号	磨石	安山岩	D-14	Ⅶ上	6.4	6.6	5.0	241.0	12	
46	77	集石 20 号	磨石	砂岩	C-11	Ⅶ上	11.1	9.2	5.4	772.5	32	
47	79	集石 21 号	砥石	砂岩	B-15	Ⅶ	8.9	6.0	5.3	297.0	32	
	83	集石 23 号	磨石・敲石	凝灰岩	B-12	Ⅶ上	11.7	7.7	5.7	608.5	17	
48	86	集石 24 号	磨石	凝灰岩	D・E-15	Ⅶ中	6.2	5.9	4.8	240.5	1	
51	103	集石 27 号	磨石	砂岩	C-11	Ⅶ中	5.2	5.4	3.1	88.5	65	
	104	集石 27 号	砥石	砂岩	C-11	Ⅶ中	9.4	9.7	2.2	334.0	62	
53	108	集石 31 号	磨石	凝灰岩	F-11	Ⅶ中	3.5	2.7	1.7	22.5	24	
	109	集石 31 号	磨石	砂岩	F-11	Ⅶ中	5.7	5.4	4.5	133.5	22	

第３節　遺物

１　土器

縄文時代早期の土器はⅥ及びⅦ層から出土している。それぞれの土器の特徴から以下のⅠからXVに分類した。それぞれの分類に該当する土器型式等は次のとおりである。

Ⅰ　類　　口縁部が小波状を呈し，口唇部内面に段を有する土器である。岩本式土器に該当する。

Ⅱ　類　　口縁部は直行かやや外反し，口唇部は平坦となり，器壁は全体的に薄い。口縁部には横位の貝殻刺突文を数条巡らし，胴部には斜位の貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる土器である。器形的特徴から円筒形と角筒形に二分した。加栗山式土器に該当する。

Ⅲ　類　　口縁部がやや外反し，胴部に貝殻押引文を施す点が特徴である一群である。吉田式土器に該当する。

Ⅳ　類　　僅かに膨らむ胴部に口縁部は外反もしくは直行する器形となる。口縁部に貝殻刺突文を横位・斜位・羽状に施し，胴部の横位，斜位の条痕を特徴とする一群である。倉園Ｂ式土器，石坂式土器，石坂系の土器を想定している。口縁部は形状から細分した。

Ⅴ　類　　口縁部から胴部にかけて横方向の貝殻腹縁による条痕文が施される土器である。中原式土器に該当する。

Ⅵ　類　　口縁部は直線的に外傾，直行，内湾する器形で，口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで構成する土器群である。下剥峯式土器に該当する。

Ⅶ　類　　口縁部は直行，やや外傾もしくは内湾する器形となる。短い貝殻条痕や沈線により施文する。波状口縁の波頂部下に瘤状突起を貼付するものもある。桑ノ丸式土器に該当する。

Ⅷ　類　　口縁部は直行，やや外傾および内湾する器形で，短い条痕文や沈線文と貝殻刺突文で文様を構成する。下剥峯式土器と桑ノ丸式土器の要素を併せ持つ土器群である。

Ⅸ　類　　回転施文具により施文する土器群である。押型文土器様式に属するものである。

Ⅹ　類　　外反する口縁部に胴部は張るものが多い。文様は沈線文，刺突連点文，刻目突帯文，縄文，結節縄文で構成される一群である。妙見・天道ヶ尾式土器，平栫式土器を想定している。

Ⅺ　類　　口縁部がラッパ状に開く器形となる。胴部に網目撚糸文やヘラによる平行沈線文を施すものである。塞ノ神式土器に比定できる。

Ⅻ　類　　胴部に条線文や貝殻腹縁による押引文等を施す土器である。苦浜式土器に該当する。

XIII　類　　文様の施されない土器の一群である。

XIV　類　　上記のⅠ類からXIII類に分類できなかった土器を本類とした。

XV　類　　次の出土品を本類とした。
1　下剥峯式土器等で円筒形以外の器形の土器片をまとめた。
2　土器の底部を再加工した土製品をまとめた。
3　圧痕のある土器の底部をまとめた。

(1) Ⅰ類土器（第 58・59 図　118）

Ｃ－10 区から１点のみの出土である。118 は，口唇部外端に貝殻刺突文を押圧気味に施すことにより小波状を呈する口縁部となる。口縁部外面にも同様の刺突が施される。口唇部内面には段を有する。胴部には幅の広い横位の条痕が残る。これらの特徴から岩本式土器に該当するものと思われる。また，胴部には縦長の補修孔が残る。

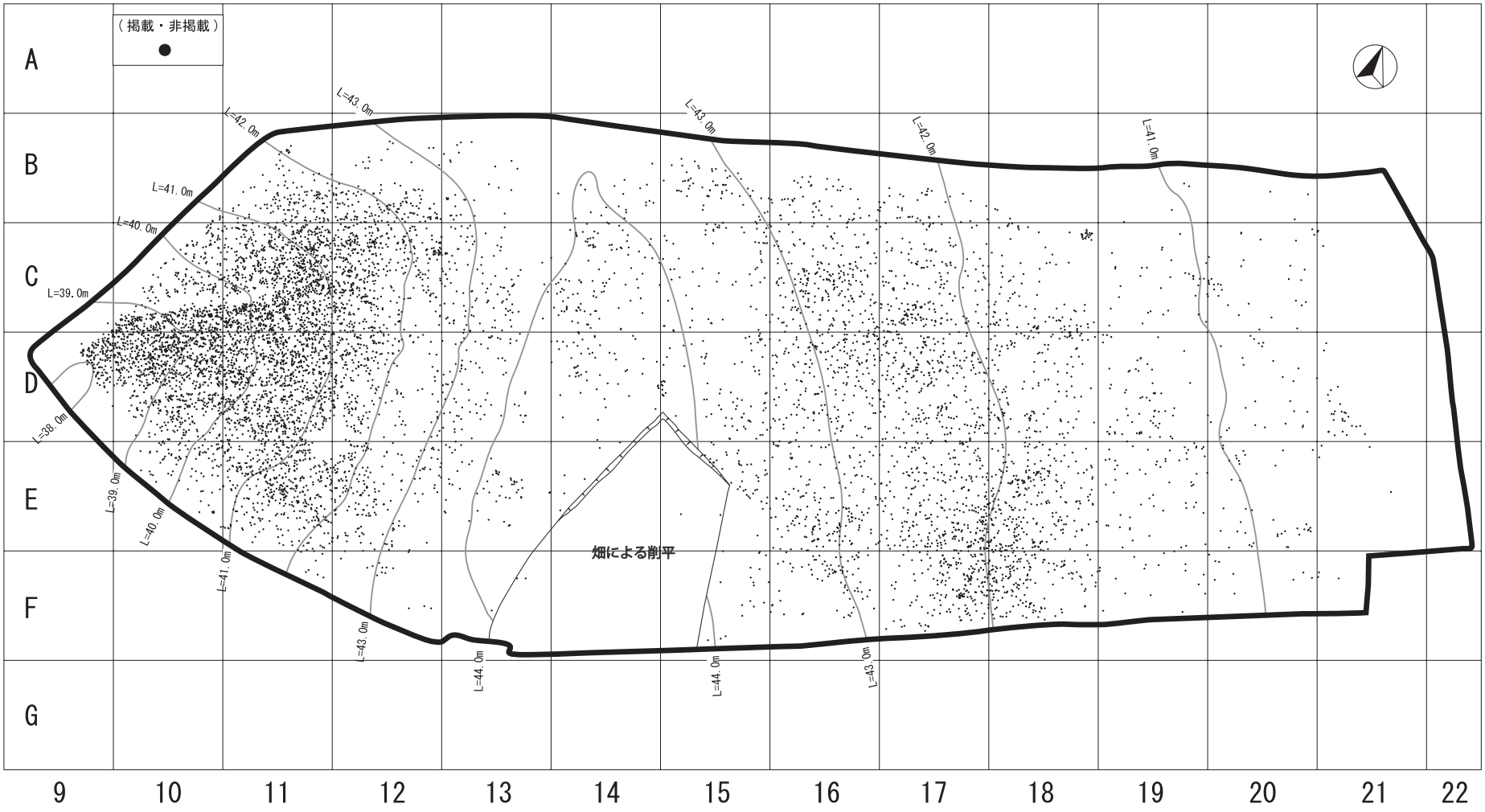
(2) Ⅱ類土器（第 58～61 図）

Ⅱ類土器は加栗山式土器に該当し，出土状況は第 58 図に示した。調査区の西側の斜面に多く出土し，東に行くに従って出土量が減少しながら 21 区及び 22 区では皆無となる。加栗山式土器は円筒形・角筒形・上面観がレモン形を呈する３種類の器形があるとされるが，本遺跡出土の土器のほとんどは円筒形で，角筒形は極めて少なく，上面観がレモン形を呈するものは確認できなかった。ここでは，その器形で円筒形と角筒形に二分した。

Ⅱ－１類（第 59～61 図　119～148）

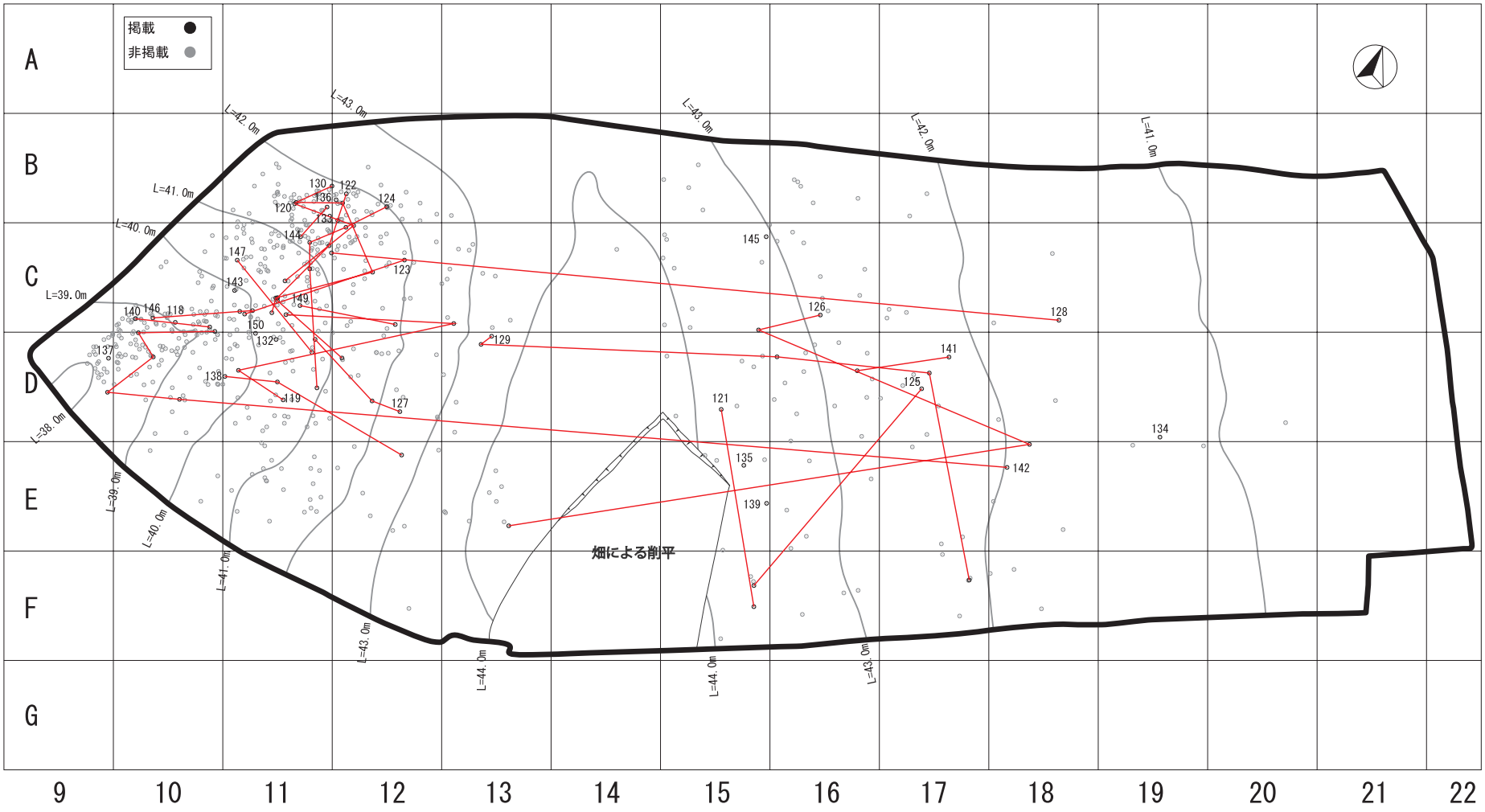
Ⅱ類の中でも円筒形の器形をもつものである。119～125 は口縁部片である。クサビ形貼付文をもつ 121～125 と貼付しない 119・120 に大別できる。

119～125 はいずれも直行もしくは直線的に若干開く



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第57図　全土器出土分布図



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第58図　Ⅰ・Ⅱ類土器出土分布図

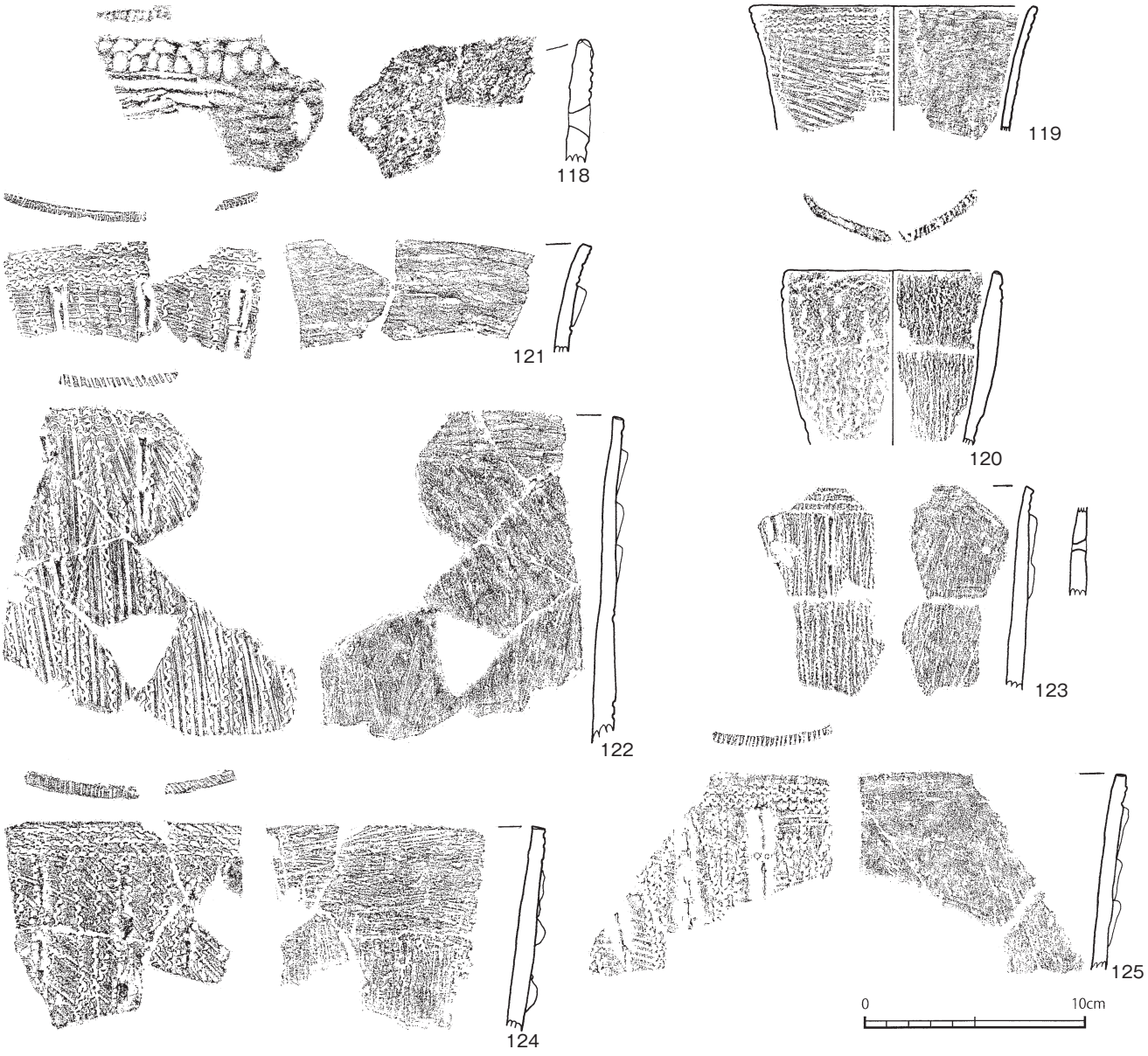
口縁部で，口唇部は平坦でキザミが施される。口縁部には横位の貝殻刺突文が３～４条巡り，口縁部文様帯の直下にはクサビ形の突起が２～３段貼付される。胴部には縦位もしくは斜位の貝殻刺突文が施される。内面調整は口縁部が横方向のナデで，胴部は縦方向のナデとなる。119 は口径 13.0㎝で，直線的に開く器形となる。口縁部には３条の貝殻刺突文を施し，胴部には貝殻条痕に縦位の貝殻刺突文が上書される。120 は口径 10.0㎝を測る小形の土器である。胴部が若干膨らみ，口縁部は直線的に開く器形を呈する。口唇部にはキザミが施され，横位の貝殻刺突文が２条口縁部を巡り，胴部は全面に縦位の貝殻刺突文が施される。

126・127 は胴部片で，直線的に開く器形となる。126 は縦位に貝殻刺突文が３条・１条のパターンで施される。127 は，縦位の貝殻刺突文が密に施される。

128～148 は平底を呈する。底部から胴部にかけての器形は直接的にいくらか開きながら立ち上がるか直立するものである。128 の大半は胴部であるが底部との境付近が残る。その中で 144 は膨らみをもって立ち上がる器形である。胴部には斜位の条痕文に縦位もしくは斜位の密な貝殻刺突文が二重に施され，底面境には縦位もしくは斜位のキザミが施される。145～148 は底面境のキザミのみが残る。

Ⅱ－２類（第 61 図　149・150）

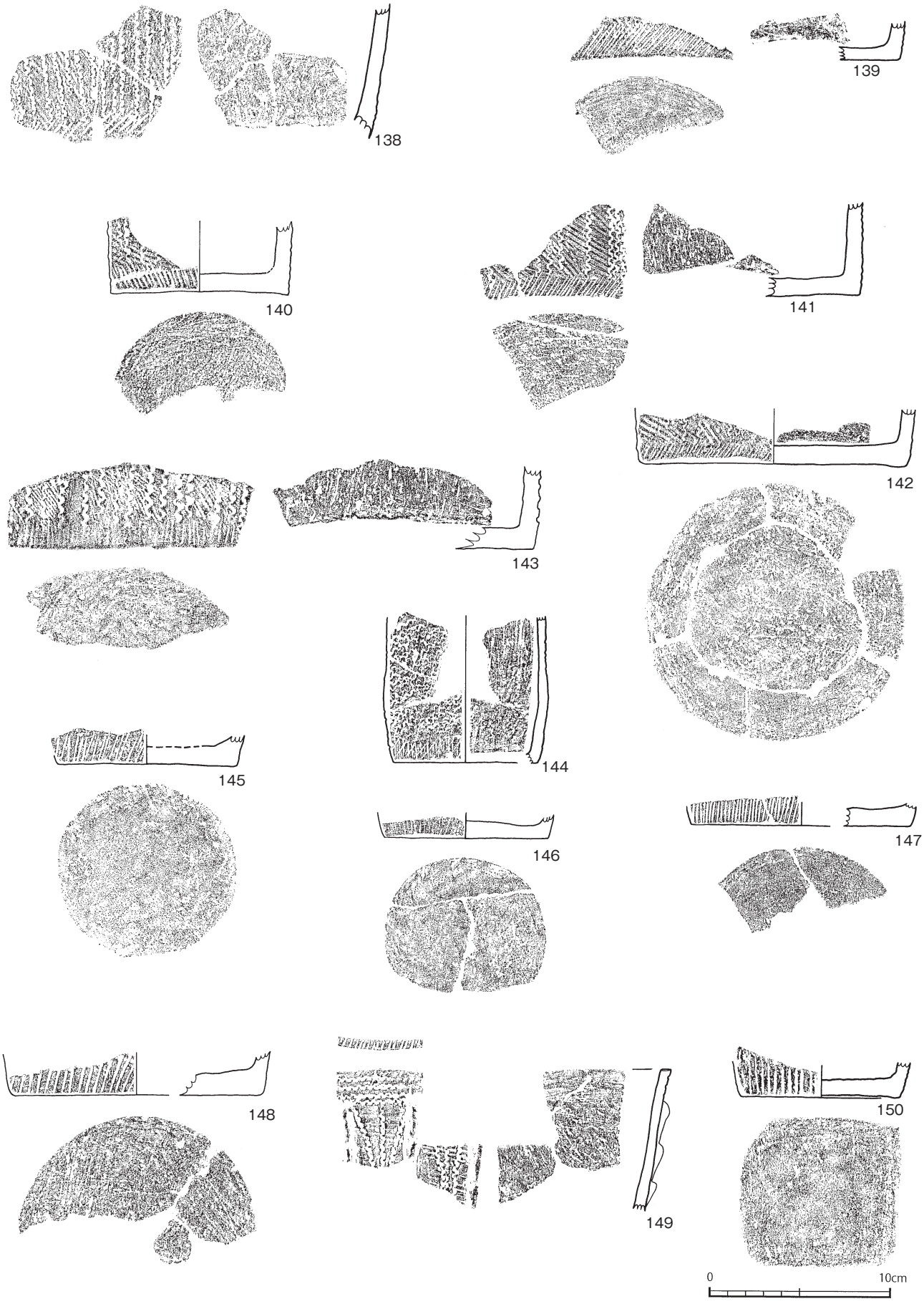
Ⅱ－２類は角筒形の器形をもつもので，２点を掲載した。149 は直線的に開く器形で，平坦面をもつ口唇部にはキザミが施される。口縁部には３条の貝殻刺突文が巡り，その下位にクサビ形の粘土が貼付される。胴部には



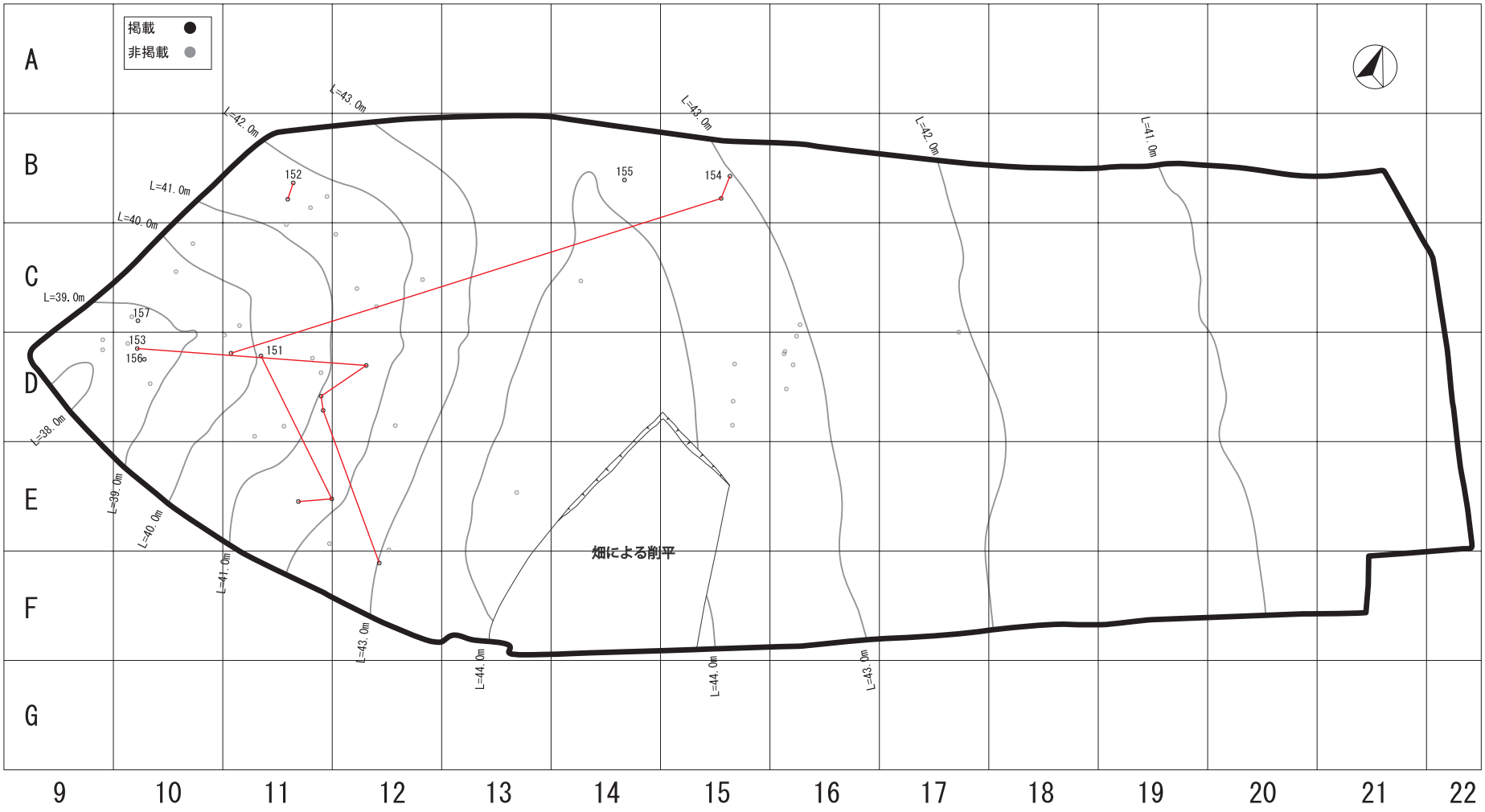
第 59 図　Ⅰ・Ⅱ類土器



第 60 図　Ⅱ類土器 1



第 61 図　Ⅱ類土器２



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第62図　Ⅲ類土器出土分布図



第 63 図　Ⅲ類土器

斜位の貝殻条痕に斜位・縦位の貝殻刺突文が施される。本土器とクサビ形貼付文をもつ円筒形土器の文様構成は同じである。150は角筒形土器の底部である。底面境に縦位のキザミが残る。

(3) Ⅲ類土器（第62・63図　151～157）

全体的にはまばらな出土状況ではあるが，そのほとんどは調査区西側の斜面からの出土である。18区から東への平坦面での出土は確認されなかった。出土状況は第62図に示した。Ⅲ類土器は，吉田式土器である。掲載点数が少ないことから一括して記述する。

胴部に貝殻押引文を施す点が特徴である。加栗山式土器と同様に３種類の器形をもつとされているが，本遺跡からは円筒形のみが確認された。口縁部は外反もしくはやや外反する器形となる。

151は胴部から口縁部にかけて直立し，口縁端部でやや外反する。口唇部にはキザミが，口縁部上部には斜位の貝殻刺突文が巡り，その下位には１段の押しつぶされたクサビ形貼付文が，胴部には斜位の条痕文が施される。クサビ形貼付文の間にも縦位の貝殻刺突文が施文される。内面調整は，口縁部付近で特に丁寧にナデている。152は外反する器形に，口唇部にはキザミが施される。口縁部は横位の貝殻刺突文が３条巡る。胴部には押引文が施され，クサビ形貼付文が１段残る。153は151と同一個体と思われる。胴部から口縁部にかけての器形に若干の違いはあるものの，施文・胎土・調整等は類似する。154は，幾分厚い器壁をもつ。口縁部はやや外反する器形に，口唇部にキザミが入る。口縁部には貝殻刺突文が３条横位に巡り，胴部には横位の押引文が施される。口縁部に縦長の補修孔が穿たれている。155は，外反する口縁部に，横位の刺突文とその下位に押引文で文様を構成する。156は器壁が1.5cmと厚い。口縁部は外反し，口唇部にキザミはない。口縁部から胴部にかけて横位の押引文が施される。内面は丁寧なナデ調整である。157も器壁が1.5cmと厚い胴部片である。外面は多少摩耗しているが，横位の押引文は刺突による施文にも見える。

(4) Ⅳ類土器（第64～70図）

Ⅳ類土器は石坂式土器に該当すると思われ，その出土状況は第64図に示した。調査区内の西側にある斜面から多く出土し，14区付近の尾根部分の出土は少なくなる。15区から18区にかけ出土量がやや増加し，19区から東側へかけての出土は確認できなかった。

石坂式土器は，僅かに膨らむ胴部に口縁部は外反もしくは直行する器形が多い。口縁部に貝殻刺突文を横位・斜位・羽状に施し，胴部には条痕文を主に斜位に施す土器である。ここでは，口縁部と胴部以下に大別し，口縁部についてはその器形で次のように細分した。

【口縁部】

Ⅳ－１類　外反するもの
Ⅳ－２類　直線的に外傾するもの
Ⅳ－３類　直立するもの
Ⅳ－４類　内湾，内湾気味のもの

Ⅳ－１類（第65・66図　158～176）

口縁部が大きく外反するものからやや外反するものの一群である。その中でも口縁部の文様でさらに分けた。

158～169は口縁部が外反する器形で，口縁部文様帯に斜位の刺突文を施すものである。158～160は特に外反が強く，160は内面に稜をもつ。161と165は波状口縁でそれ以外は平口縁となる。本類の土器は，基本的に口縁部には斜位もしくは羽状の刺突文，胴部には斜位もしくは綾杉状の条痕文が施されるが，161の胴部には縦位の条痕文と横位の刺突文が施される。158・159・162・163・168の口唇部には刺突文が施されるが，162は２列の刺突が巡る。161・164・166・169の口唇部にはキザミが施されるが，161は羽状の施文となる。内面調整はいずれも丁寧なナデが施されている。169の復元口径は13.8cmで，口縁部に斜位の刺突文，胴部に綾杉状の条痕文が施される。165・167・168も同様な文様構成となる。

170～176は口縁部が外反する器形で，口縁部文様帯に横位の刺突文が施されるものである。口縁部が外反するものと口縁端部のみが外反するものがあるが，171と175は内面に稜をもつ。口縁部文様帯に横位の刺突を施し，胴部には綾杉状の条痕文を施す文様構成となっている。170・172・176の口唇部にはキザミが施される。170は器高29.3cm，口径24.0cm，底径13.0cmを測る。口縁部には６条の貝殻刺突文を横位に巡らせ，胴部には縦に引いた条痕文に沿って斜位の条痕文を施す規格性をもった文様構成である。胴部最下位には横位の条痕文を巡らせ，底部境には縦のキザミが施される。173には補修孔が穿たれる。174の口径は18.0cmを測る。本類の土器の内面調整はいずれも丁寧なナデである。Ⅳ－１類は，器形的な特徴から石坂Ⅰ式土器に該当する。

Ⅳ－２類（第66・67図　177～191）

口縁部が，直線的に外傾するものである。その中でも口縁部文様が刺突文か条痕文で更に分けられる。胴部は，基本的に綾杉状の条痕文が施文される。

177～187は口縁部が外傾する器形を呈し，口縁部文様帯に刺突文を施すものである。183は波状口縁となり，それ以外は平口縁である。さらに，口唇部断面が方形を呈するものが多く，180・185・186の口唇部には刺突が施される。ただ，186の刺突は一部分のみの施文である。177～184の口縁部文様帯には，横位の刺突文が２～３条巡る。185と186は，口縁部文様帯に斜位の刺突文が施される。183・184は瘤状突起が貼付される。183は，波

頂部に瘤状突起が貼付される。184は口径18.2cmで，瘤状突起は1対が想定される。182には補修孔が穿たれる。187の口縁部には鋸歯状と横位の刺突文が施される。胴部には，浅い条痕文の上に格子目状の沈線が部分的に施される。

188～191は，直線的に外傾する器形に口縁部から胴部にかけて条痕文が施されるが，口縁部は横位の条痕文である。189は口唇部平坦面が内傾し，口縁部直下の器壁が薄くなる。191は波状口縁となり，波頂部外面に瘤状突起が貼付けられる。Ⅳ－２類は，石坂Ⅱ式土器に該当する。

Ⅳ－３類（第68図　192～199）

口縁部が直立するもので，口縁部文様帯に刺突もしくは条痕文を施文し，口縁部断面はほぼ方形となる。

192～196は口縁部に斜位もしくは縦位の刺突文，胴部に斜位や横位の条痕文が施される。192は，胴部から直線的に立ち上がり，口縁部の器壁を薄くすることで外反するように見える。口唇部には刺突文が施される。193の口唇部には，２列の刺突文が施される。194の器壁は1.3cmと他のものと比べて厚く，口唇部外端のキザミが特徴的である。195の口唇部には刺突文，196の口唇部にはキザミが施される。197･198は口縁部に横位の刺突文を２条巡らせ，胴部に綾杉状の条痕を施す。199は口縁部に横位の条痕文，胴部に横位･縦位の条痕文を施す。Ⅳ－３類は，石坂Ⅱ式土器に該当する。

Ⅳ－４類（第68図　200～205）

口縁部が内湾もしくは内湾気味のものである。

200～204は，口縁部には数条の刺突文を横位に巡らせ，胴部には条痕文等を施す土器である。203のみが波状口縁となり，他は平口縁である。201は口唇部外端にキザミを施し，口縁部には横位の３条の刺突文が巡り，胴部は綾杉状の条痕で施文する。胎土には雲母を含む。なお，口唇部外端のキザミを施すのは194と同じである。202と203は口縁部に横位の刺突文を施すが，胴部文様は明瞭な条痕文である。203は胴部に屈曲部をもち，205は摩耗のため明確ではないが，短い沈線による横位の羽状文を施す。Ⅳ－４類に分類した土器は石坂式土器の器形や文様とは異なるが，文様構成には類似点もあることから石坂系の土器としておきたい。

【胴部・底部】（第69・70図　206～235）

胴部と底部については文様により分類し，一括して記述する。総じて底部から胴部にかけて直線的に外傾する器形のものが多い。

206～214は，斜位もしくは横位の条痕文を施すものである。206は外面が摩耗し，胴部下端の文様は確認できないが，胴部には斜位の条痕文が施される。207～212は胴部下端まで横位もしくは斜位の条痕文が施され，213と214は胴部下端に施文はない。

215～222は胴部から底部にかけて綾杉状の条痕文が施されるものである。216の器壁の厚さは不安定で器面調整も粗く，補修孔が穿たれる。217～220・222は胴部から胴部下端まで綾杉状の条痕で施文されるが，221はヘラ状と思われる工具で施文している。

223～230は胴部に綾杉状もしくは斜位の条痕，胴部下端には横位の条痕が施されるものである。223の底径は10.6cmで，底部から胴部にかけて幾分膨らみをもって立ち上がる。224の底部境には部分的に横位の条痕文が観察される。上げ底気味の底部で，底径は14.5cmを測る。225は底部から胴部にかけて直線的にやや外傾する器形である。胴部と底部境付近は摩耗しているが，一部横位の条痕文が残る。底径13.0cmを測る。229･230は，外傾の度合いが強い。

231・232は，胴部に綾杉状の条痕文が施される。231は胴部がやや膨らみ，底面境には縦位の条痕を施す。底径は8.4cmを測る。232は，底部から胴部にかけて直線的にやや外傾する器形を呈する。胴部には綾杉状の条痕文，底面境には横位の刺突文が巡り，底径は8.8cmを測る。

233と234の胴部下半には縦位の条痕文が施されるが，その上位の文様は不明である。

235の胴部には綾杉状の条痕文に縦位の刺突文が上書きされる。底面境には施文されない。底面に厚みがあり，底径は7.0cmを測る。

（5）Ⅴ類土器（第71・72図　236～241）

本類は，中原式土器に該当する。出土量が少ないこともあってまばらな出土状況であるが，出土状況は第71図に示した。

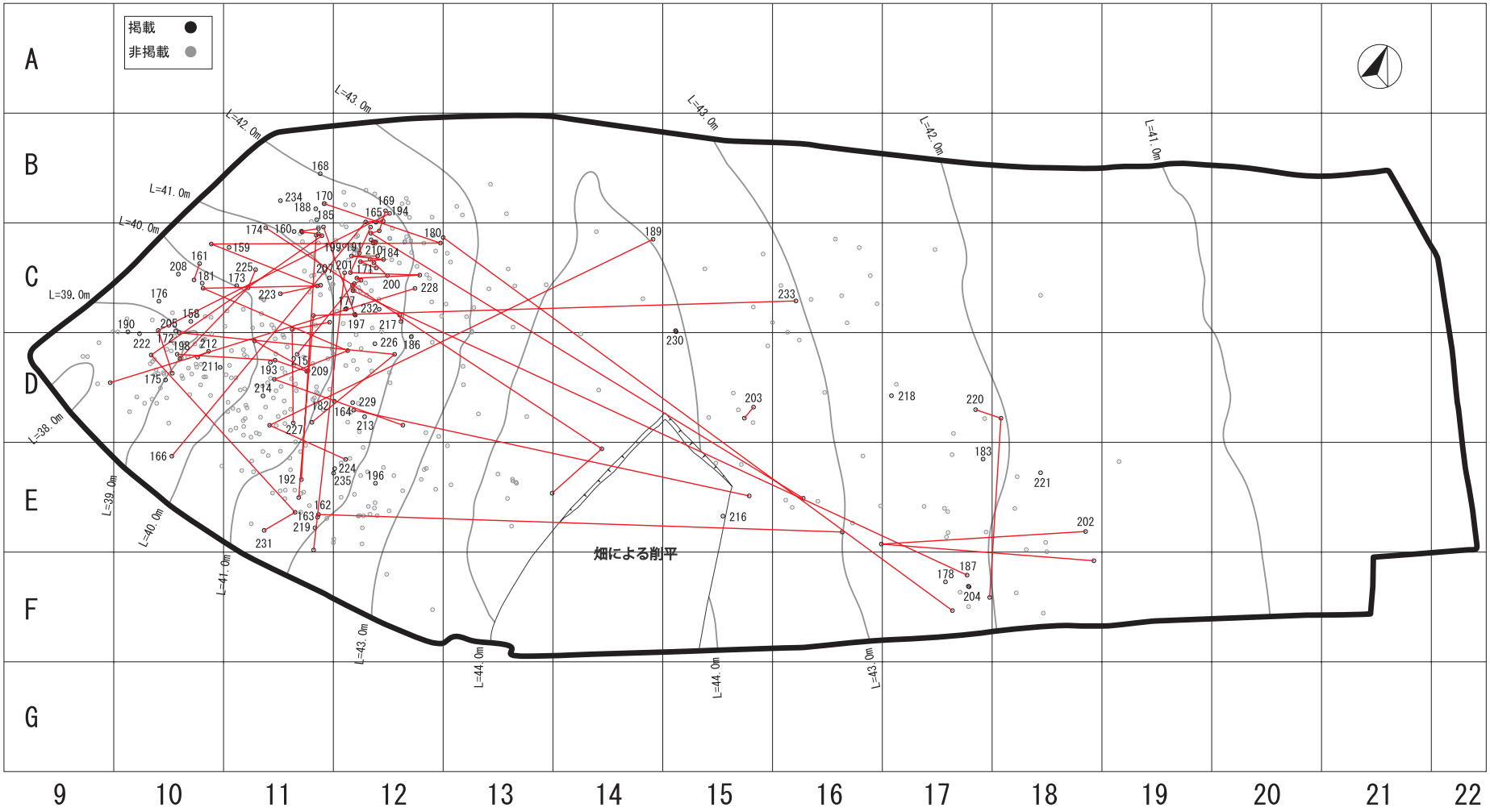
いずれもほぼ直立する口縁部片で口唇部は丸く収める。器壁は1.0cm以上1.5cm未満と総じて厚い。出土した土器には，貝殻腹縁による横位の押引文が口縁部に施される。内面調整は丁寧なナデ，特に236はミガキがかかる。

（6）Ⅵ類土器（第73～88図）

本遺跡において遺物量が一番多く，10区から12区，16区から18区に特に多く出土した。尾根状の地形となる14区，調査区の東端となる21区・22区の出土量は少ない。その出土状況は，第73・74図に示した。

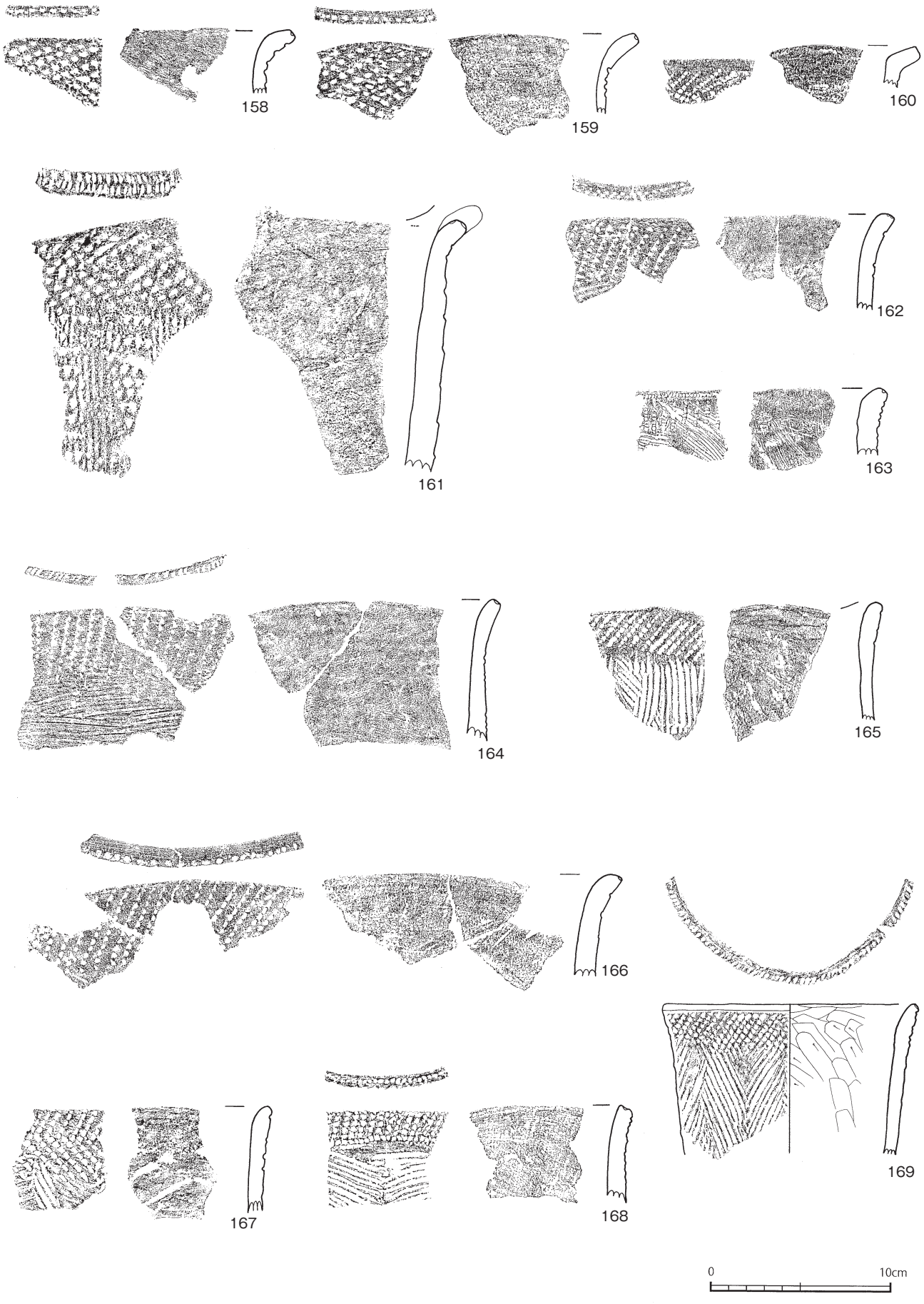
口縁部が僅かに内湾あるいは直行する器形で，口縁部から底部まで貝殻刺突文のみで構成する土器である。口縁部あるいは胴部に瘤状突起がつくものがある。下剥峯式土器に該当する。

口縁部については器形によって細分し，胴部，底部は一括して記述する。

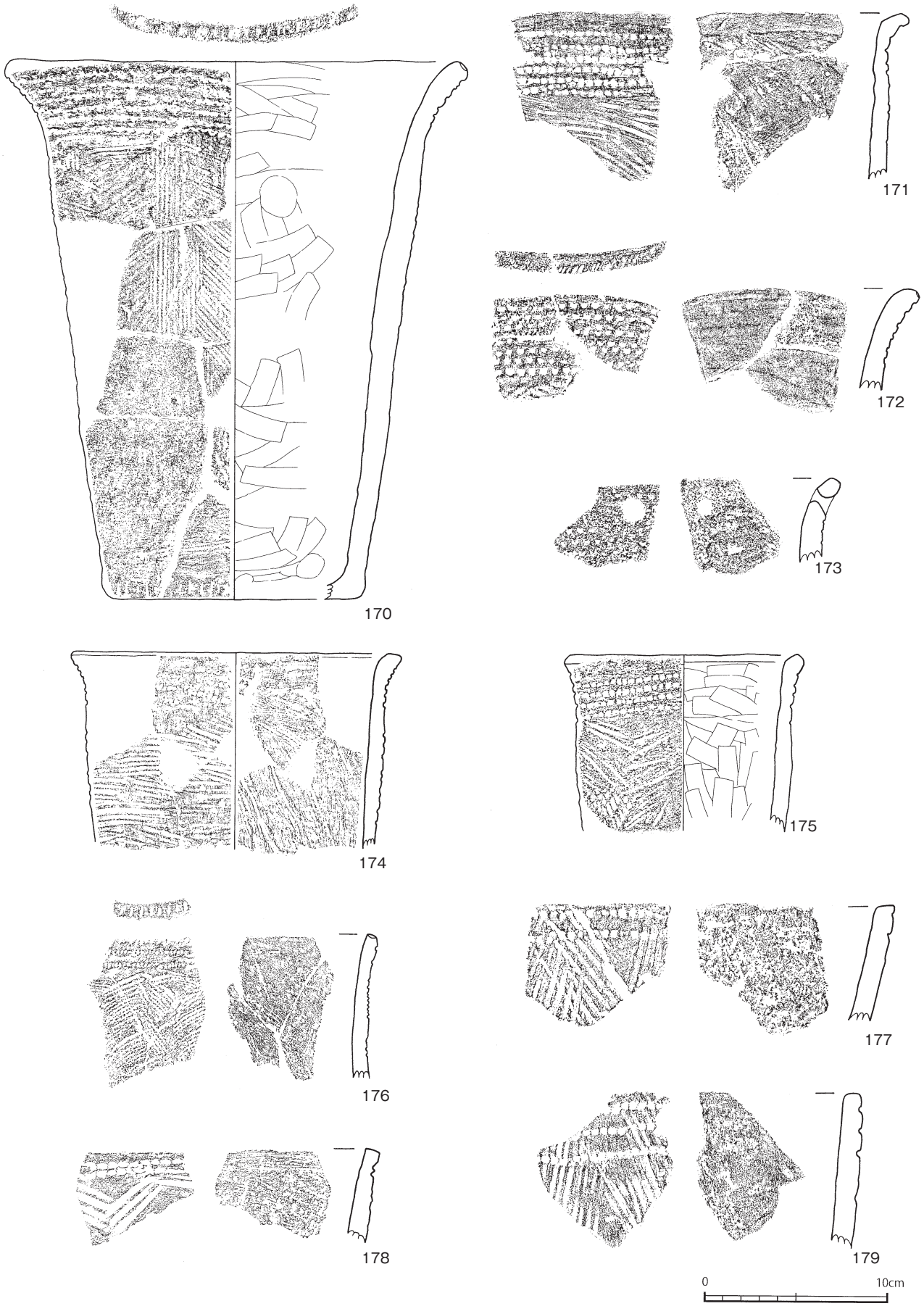


（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

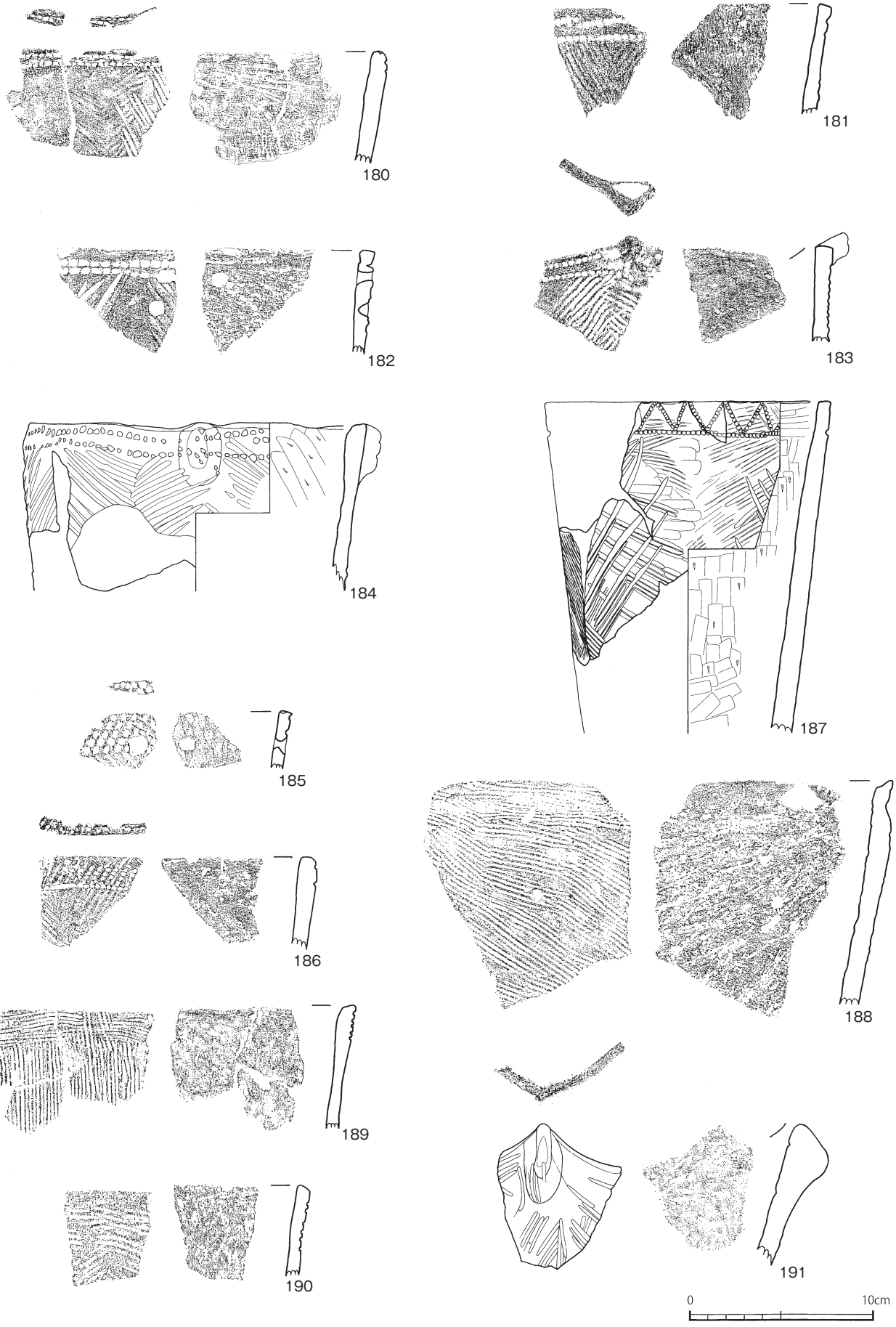
第64図　Ⅳ類土器出土分布図



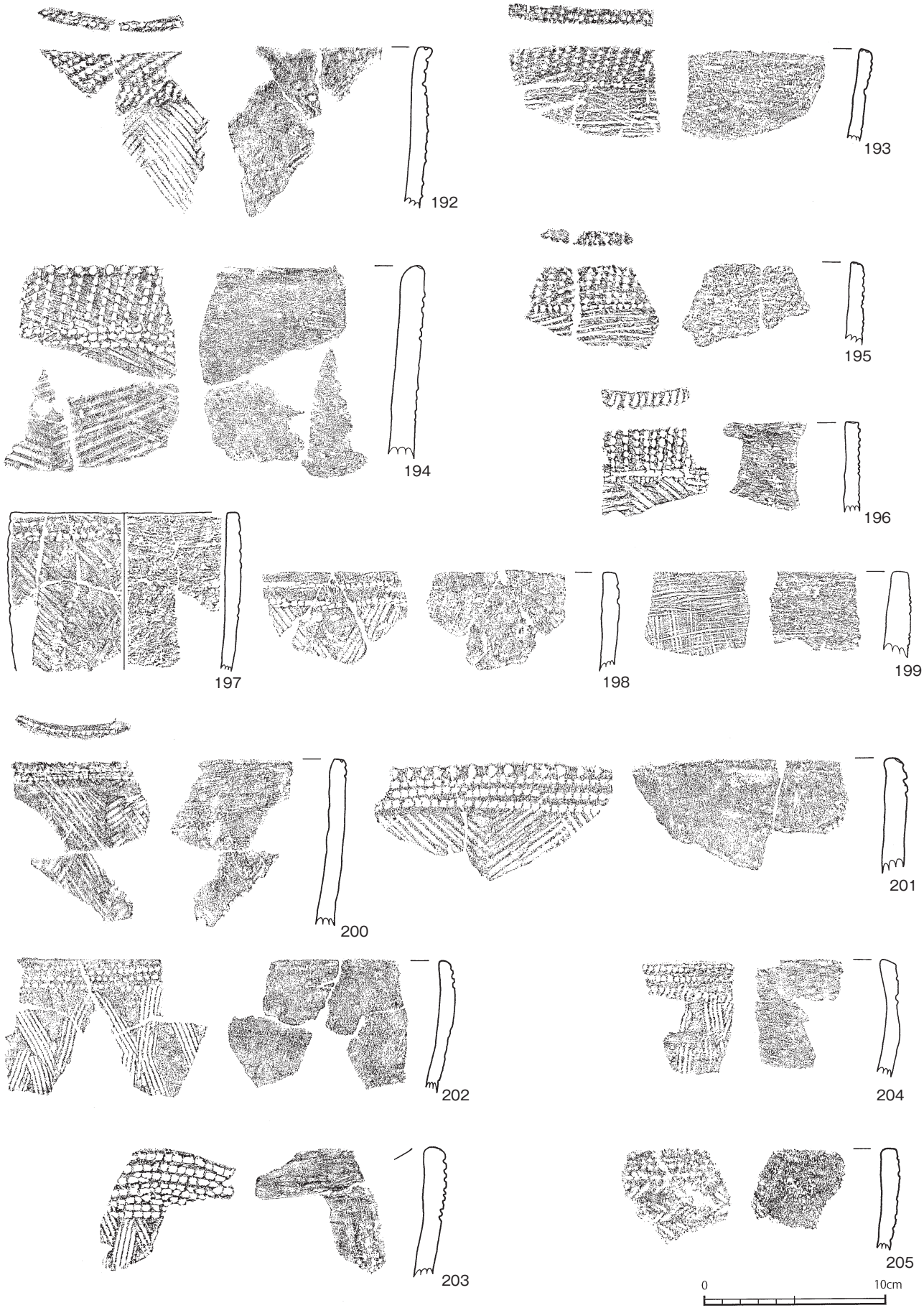
第 65 図　Ⅳ類土器 1



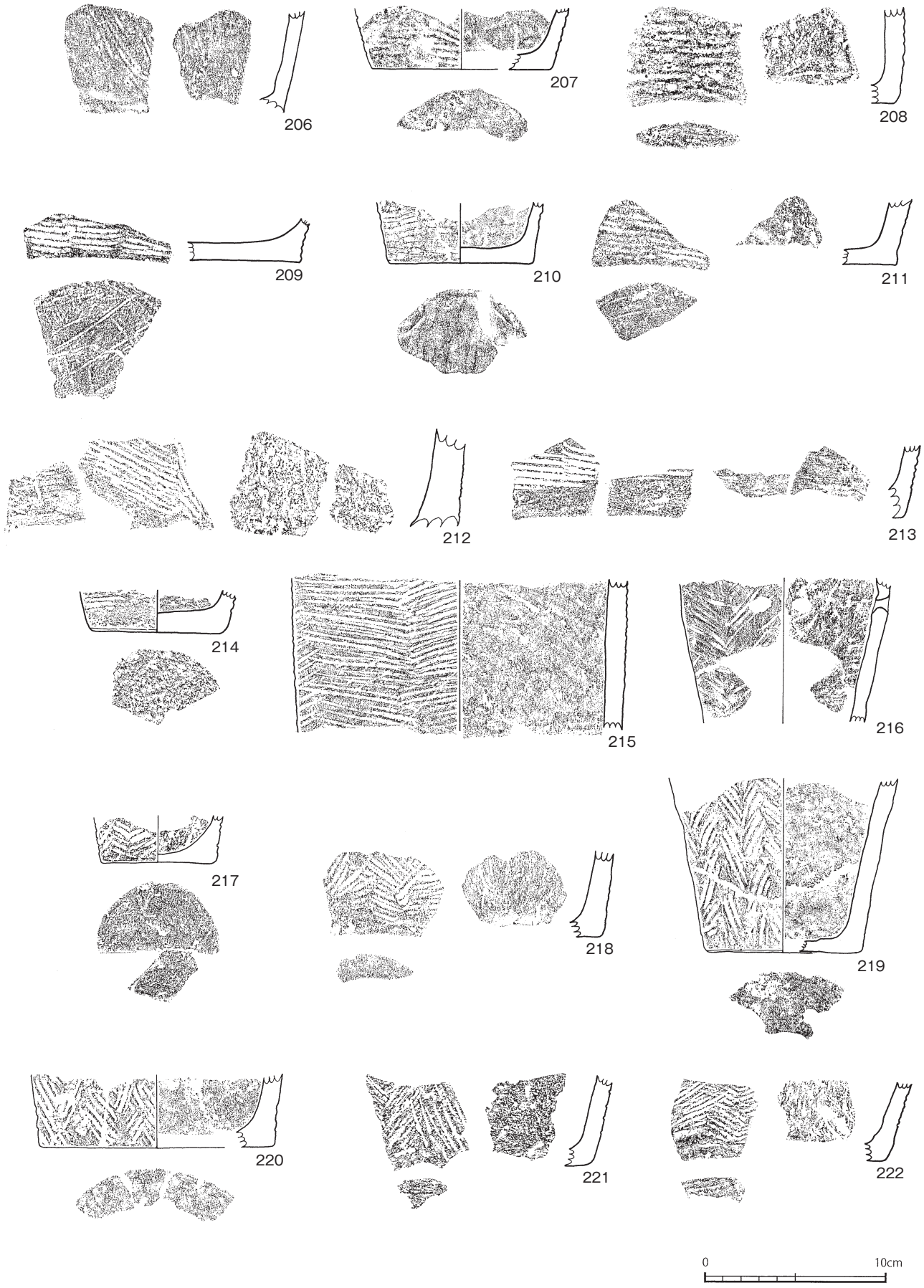
第 66 図　Ⅳ類土器２



第 67 図　Ⅳ類土器３



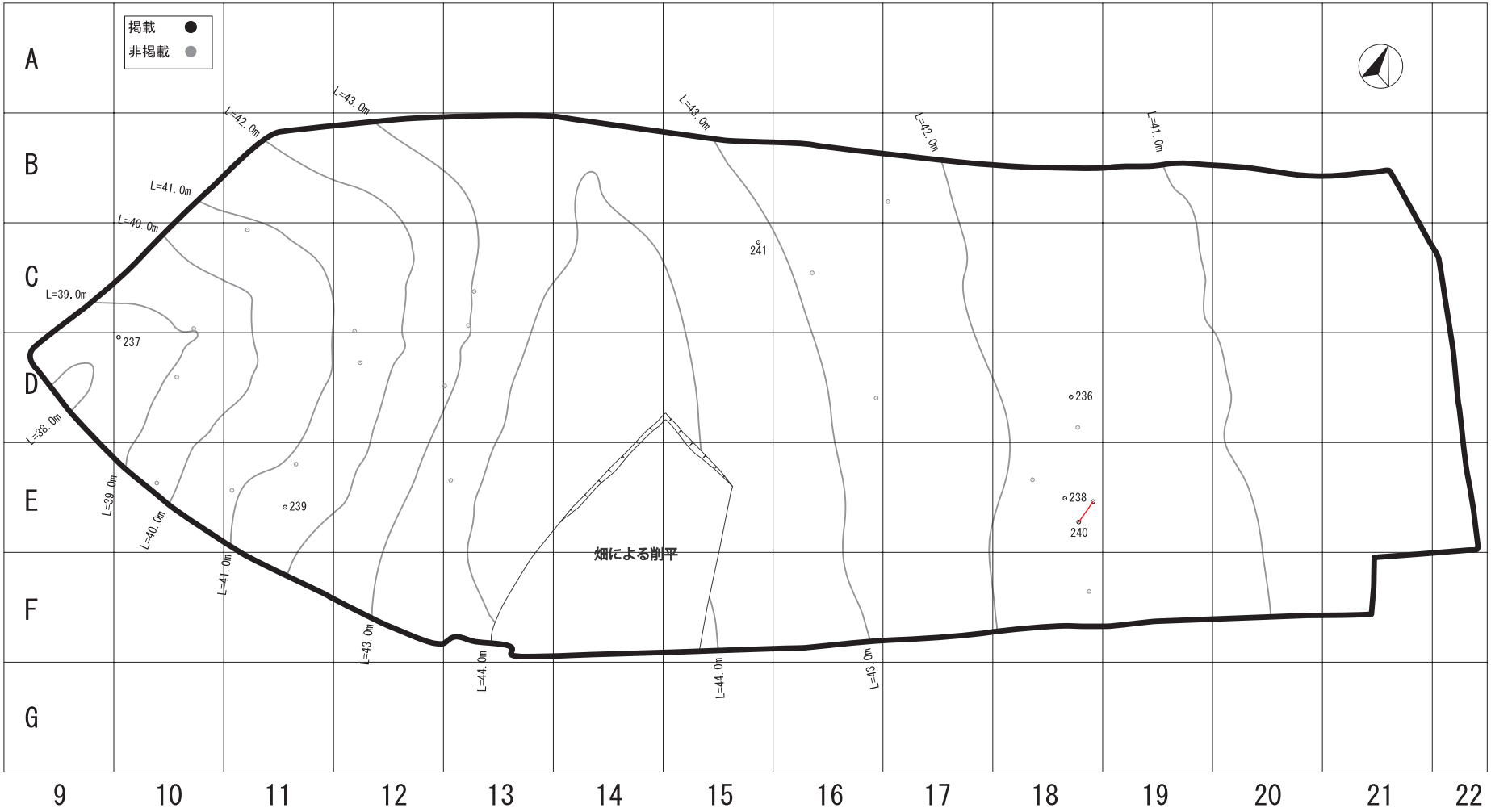
第 68 図　Ⅳ類土器 4


206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
0
10cm

第 69 図　Ⅳ類土器５

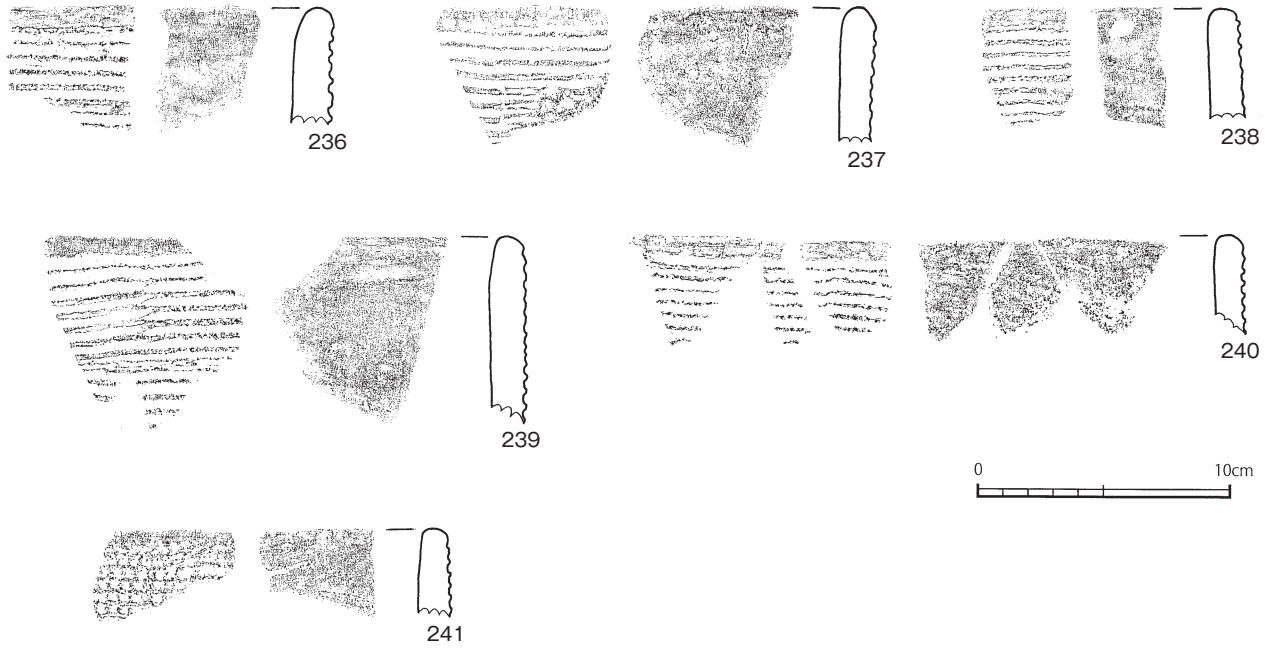


第 70 図　Ⅳ類土器 6



（1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面 ）

第 71 図　Ⅴ類土器出土分布図



第 72 図　Ⅴ類土器

【口縁部】

口縁部は，大まかに直線的に開くもの，直立するもの，内湾するものに分類した。

Ⅵ－１類　口縁部が直線的に開くもの

Ⅵ－２類　口縁部が直立するもの

Ⅵ－３類　口縁部が内湾するもの

Ⅵ－１類（第 75～78 図　242～289）

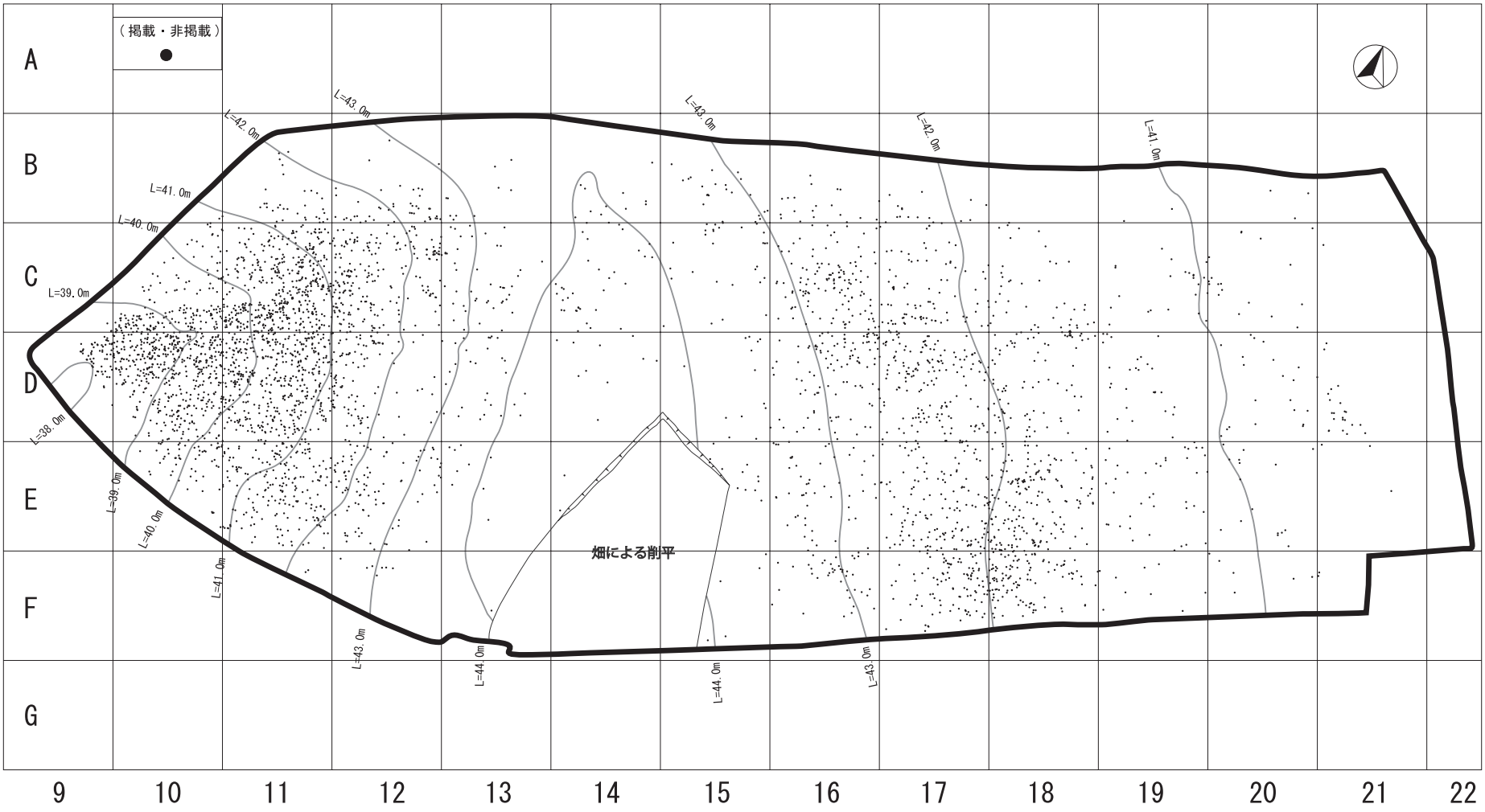
口縁部が直線的に開く土器群である。この中でも平口縁と波状口縁があり，さらに瘤状突起の付くものがある。

242～271 は口縁部が直線的に開き，平口縁のものであるが，253 は胴部に若干の膨らみをもつ。口唇部の断面は方形，平坦面はほぼ水平となるものが多い。文様構成は，口縁部から胴部にかけて同じ文様を施すもの（242・243・252・260），口縁部文様帯をもつもの（244～251・253～259・261・264～270）に大別できる。242 と 243 は器形に多少の違いはあるが，間隔を置いて横位に施す刺突文，ケズリの内面調整・砂粒を多く含む胎土等から同一個体の可能性もある。244 は口縁部に横位の刺突文，胴部に羽状の刺突文を施すもので，本類の中で最も多い文様構成である。246・247 の胴部文様は不規則に施されるが，248 は羽状に近い。249 は横位の刺突文を口縁部に巡らせ，胴部には鋸歯状の刺突文を施す。250 の外面が摩耗しているため明確ではないが，口縁部には羽状の刺突文を横位に，胴部には鋸歯状の刺突文を施す。252 は，羽状の刺突文を口縁部から胴部にかけて施す。254 の口縁部の施文は部分的である。261・263・266 には円形の補修孔が穿たれる。262 は口縁部文様帯に鋸歯状の刺突文が施される。265・267・268 は口縁部に横位の刺突文を施すが，その下位には施文されない。269 は口縁部に横位の刺突文を施すが，その口縁部文様帯は幅広い。270 は口縁部と胴部に横位の刺突文，その間を斜位の刺突文で充填する。

272～277 は口縁部が直線的に開き，平口縁で瘤状突起を貼付する一群である。いずれも口唇部は水平な平坦面となり，横位の刺突文を施す口縁部文様帯をもつ。272～274 は縦長，275～277 は横長の瘤状突起を貼付する。272 の口唇部はしっかりとした面取りを行っている。口縁部に横位の刺突文を３条巡らせ，胴部には横位の羽状文を刺突で施文する。さらに，口縁下部に穿孔された縦長の瘤状突起が貼付される。273・274 は口縁部に横位の刺突文，胴部に斜位の刺突文で文様を構成し，縦長の瘤状突起が貼付される。

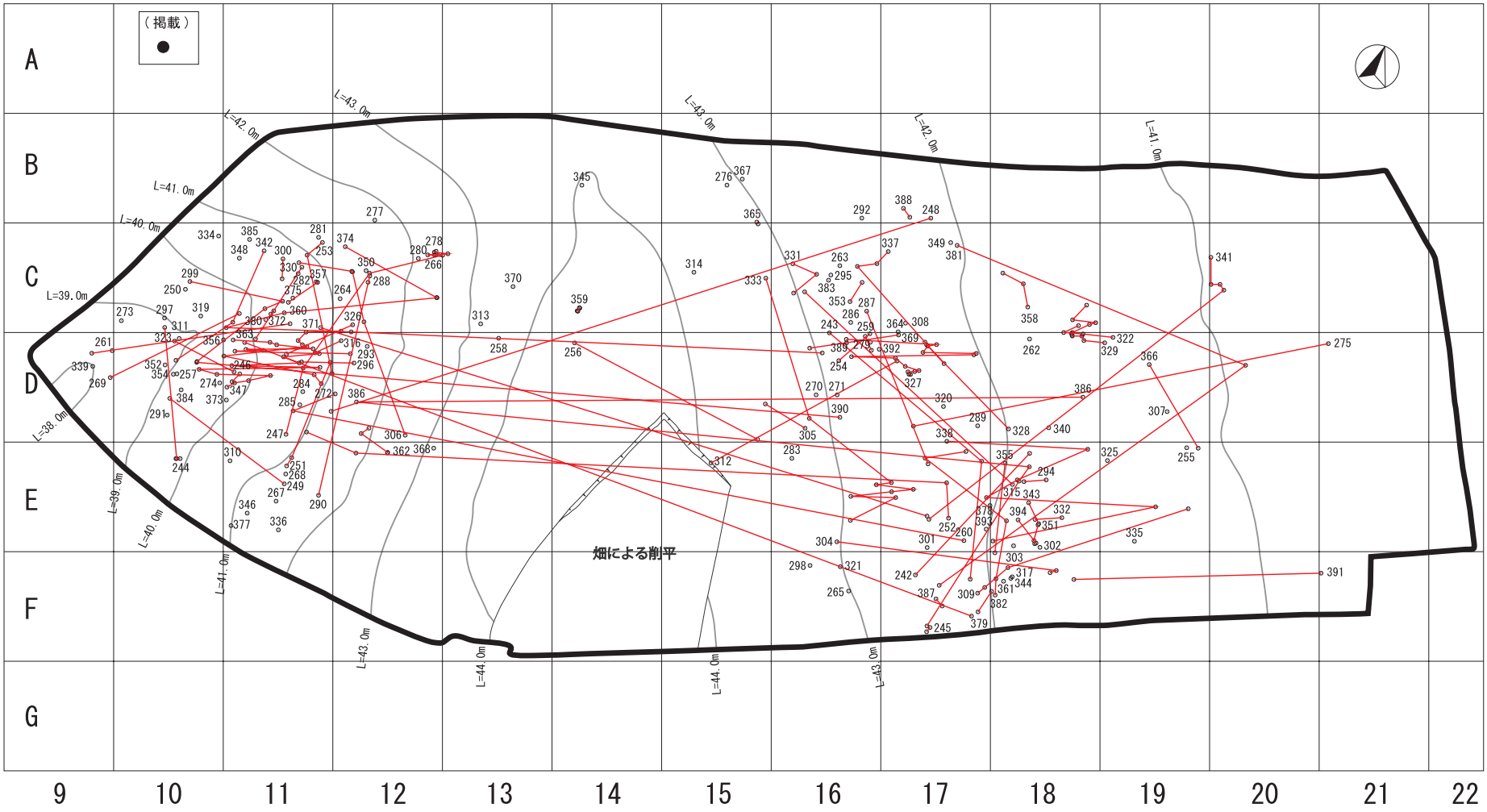
278～282 は直線的に開く口縁部で，波状口縁となるものである。278 は，口縁部に沿って刺突文，胴部には刺突による横位の羽状文が施される。波頂部は二対を想定して実測してある。282 は波頂部のみが部分的に突起し，外反が強くなる。

283～289 は口縁部が直線的に開き，波状口縁で瘤状突起を有するものである。283～288 は波頂部に合わせ縦長の瘤状突起を口縁部上端から貼付するが，289 は波頂部からやや下方に瘤状突起を貼付している。いずれも，口縁に沿って横位の刺突文が施される。285 は瘤状突起の下方に補修孔が穿たれている。



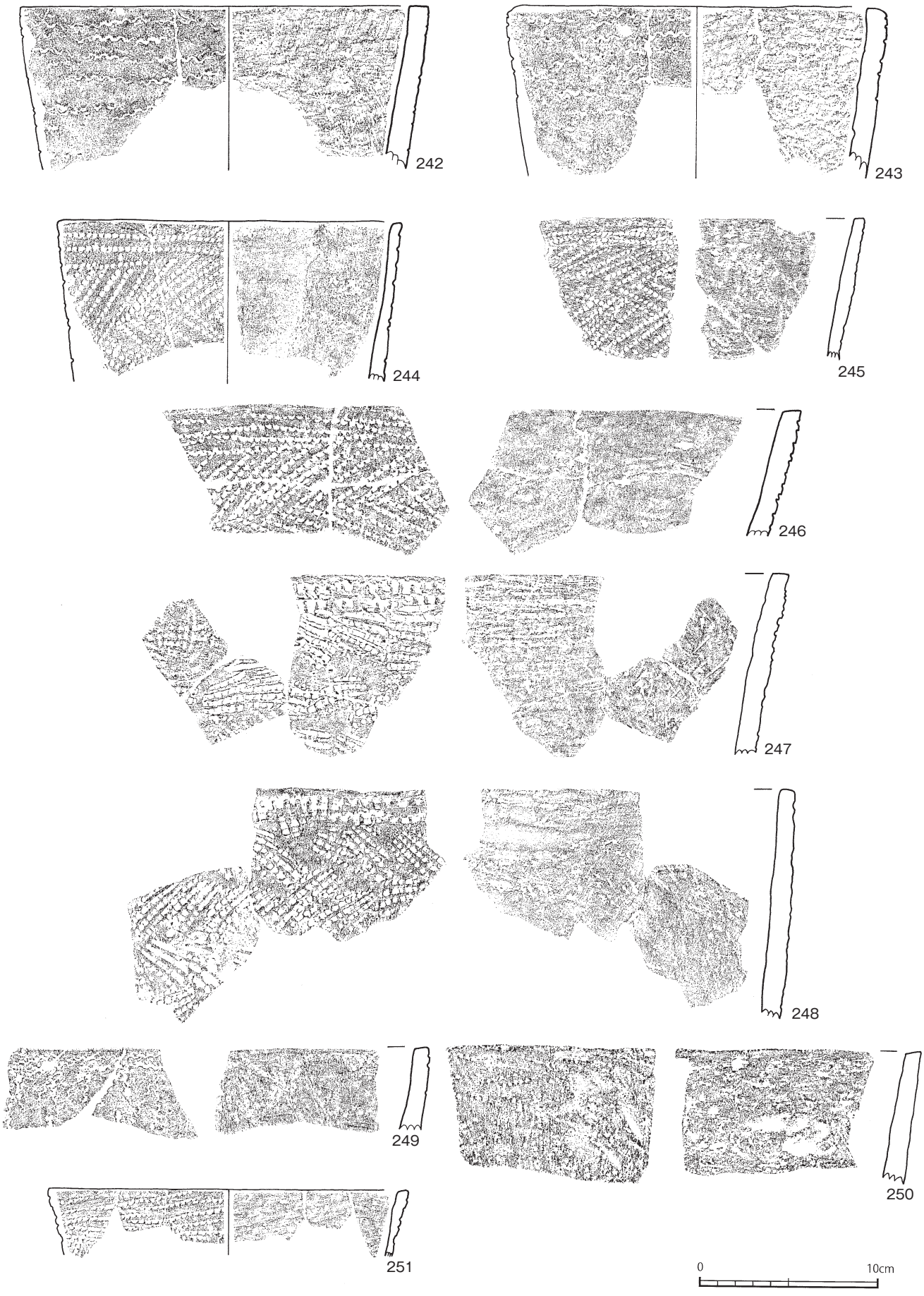
（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第73図　Ⅵ類土器出土分布図

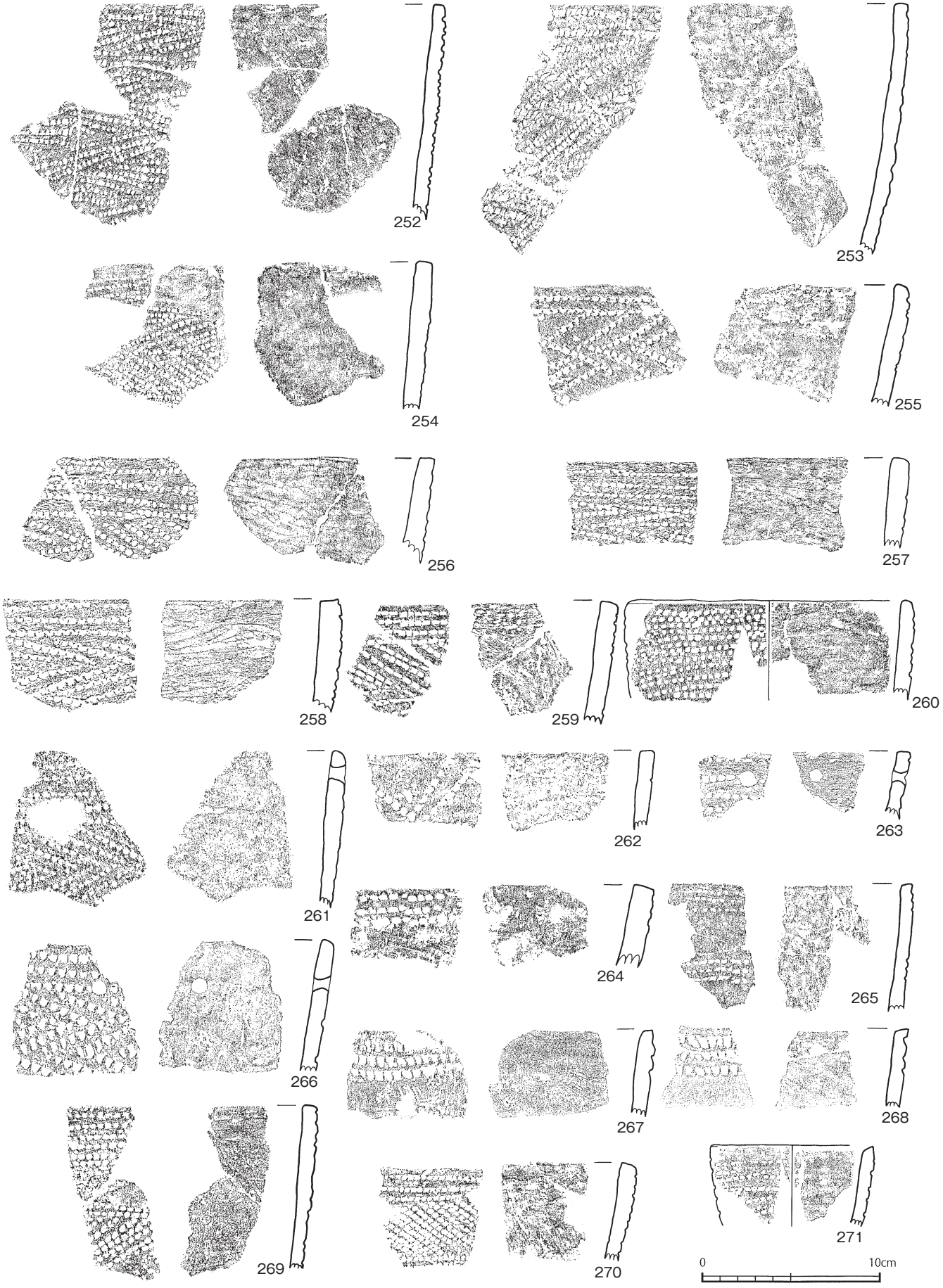


（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

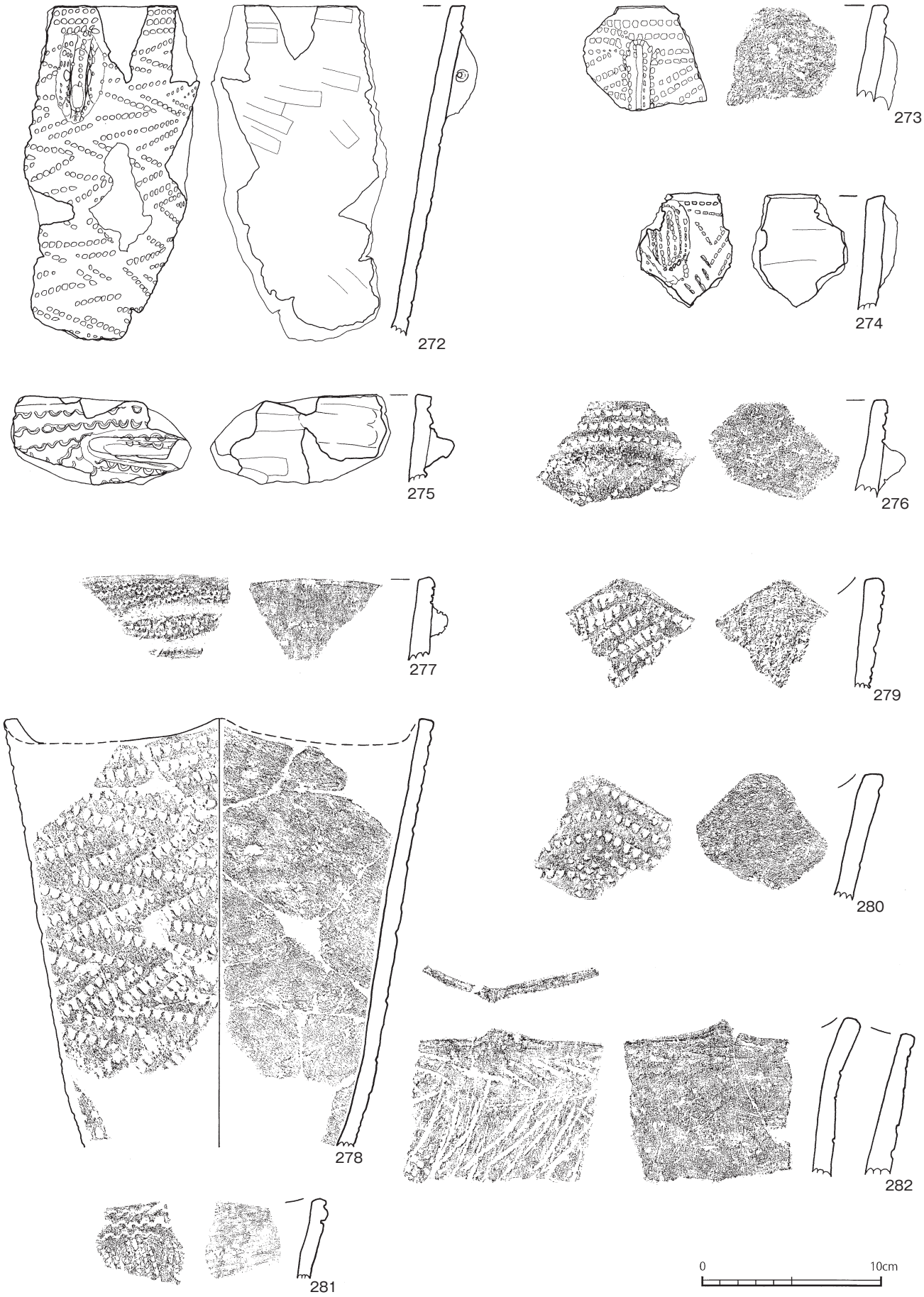
第74図　Ⅵ類土器出土分布図（掲載分）



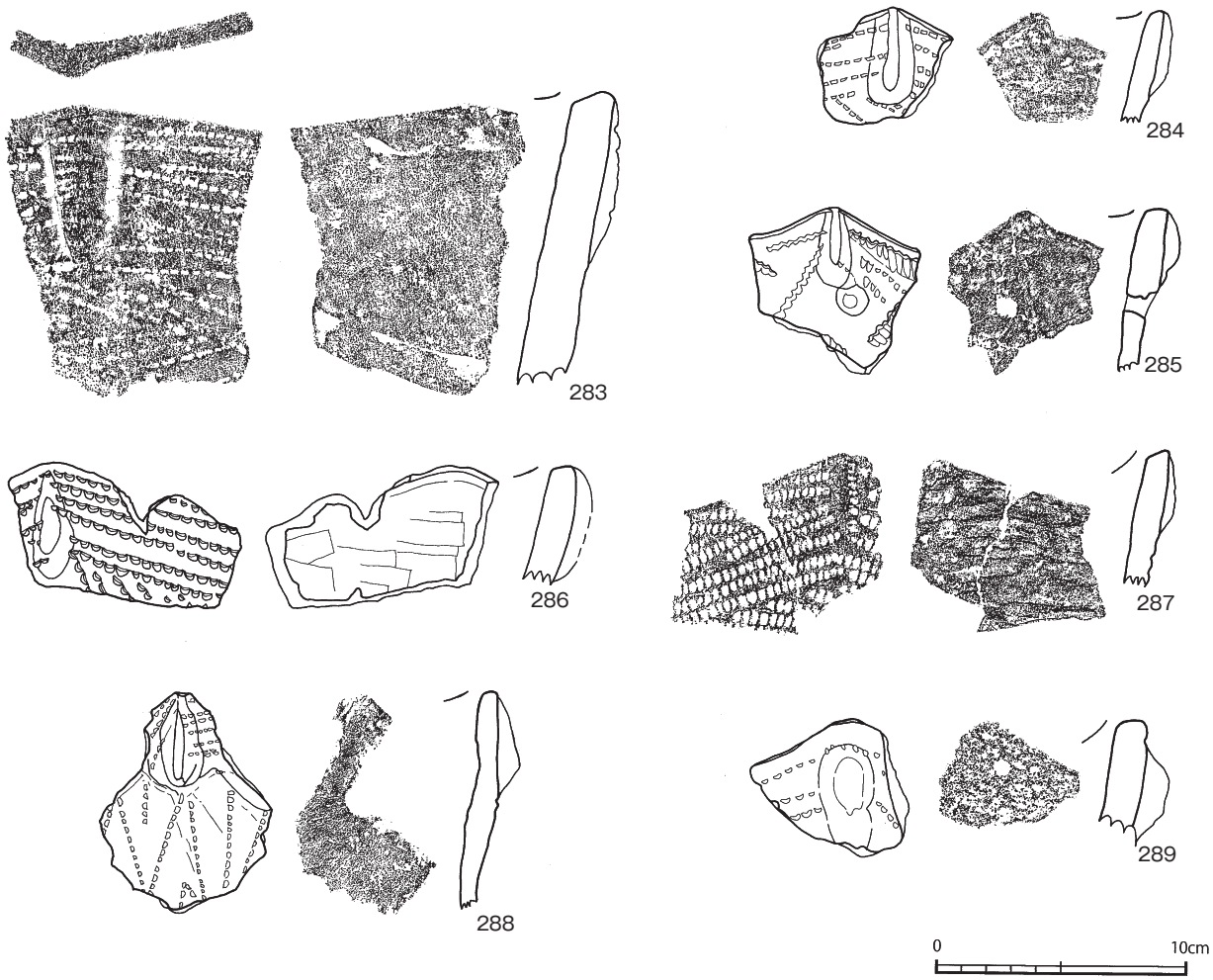
第 75 図　Ⅵ類土器 1


252
253
254
255
256
257
258
259
260
261
262
263
264
265
266
267
268
269
270
271
0
10cm

第 76 図　Ⅵ類土器２



第 77 図　Ⅵ類土器３



第 78 図　Ⅵ類土器４

Ⅵ－２類（第 79 図　290～304）

口縁部が直立する土器群である。この中でも，平口縁と波状口縁があり，さらに瘤状突起が貼付されるものもある。本類はⅣ－１類，Ⅳ－３類と比較して出土点数が少ない。

290～297 は口縁部が直立し，平口縁となるものである。口縁部断面はほぼ方形で，口唇部の平坦面は水平となる。

290・294・296・297 は，口縁部文様帯に斜位もしくは横位の刺突を施すものである。291～293・295 は口縁部に横位の刺突を施す文様帯をもち，胴部には斜位の刺突で施文する。295 は補修孔が途中まで穿たれている。

298～301 は口縁部が直立し，平口縁となり，瘤状の突起が貼付されるものである。298 は穿孔のある瘤状突起が縦長に，299 は縦長の瘤状突起が平行に二つ貼付される。300・301 は瘤状突起が横方向に貼付される。

302～304 は波状口縁となるもので，303・304 には瘤状突起が貼付され，文様構成や胎土等から同一個体の可能性もある。

本類の瘤状突起は口縁端部からやや下方に貼付されるという特徴をもつ。

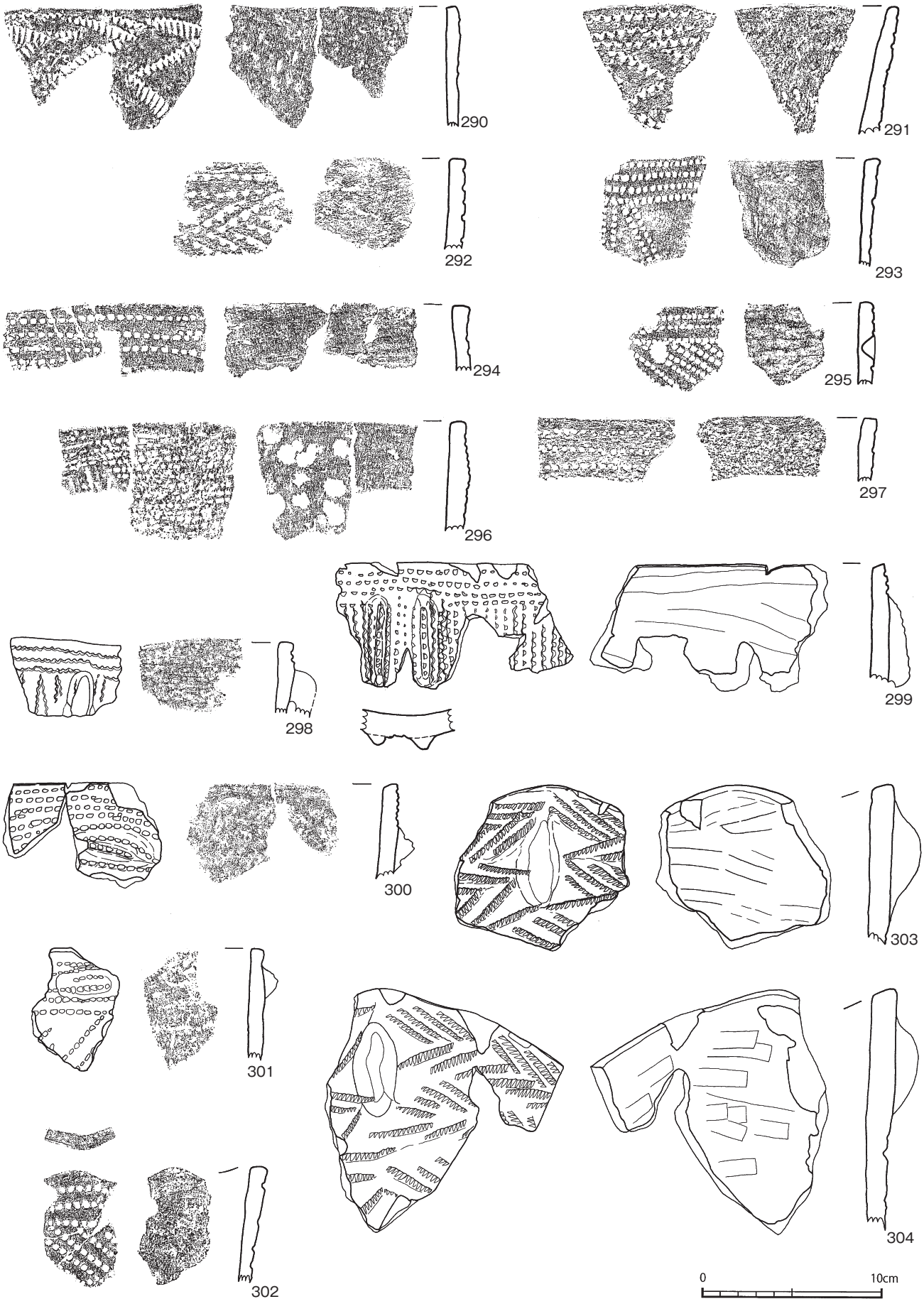
Ⅵ－３類（第 80・81 図　305～326）

口縁部が内湾する器形を呈するもので，平口縁が多いが波状口縁もあり，瘤状突起を貼付するものもある。

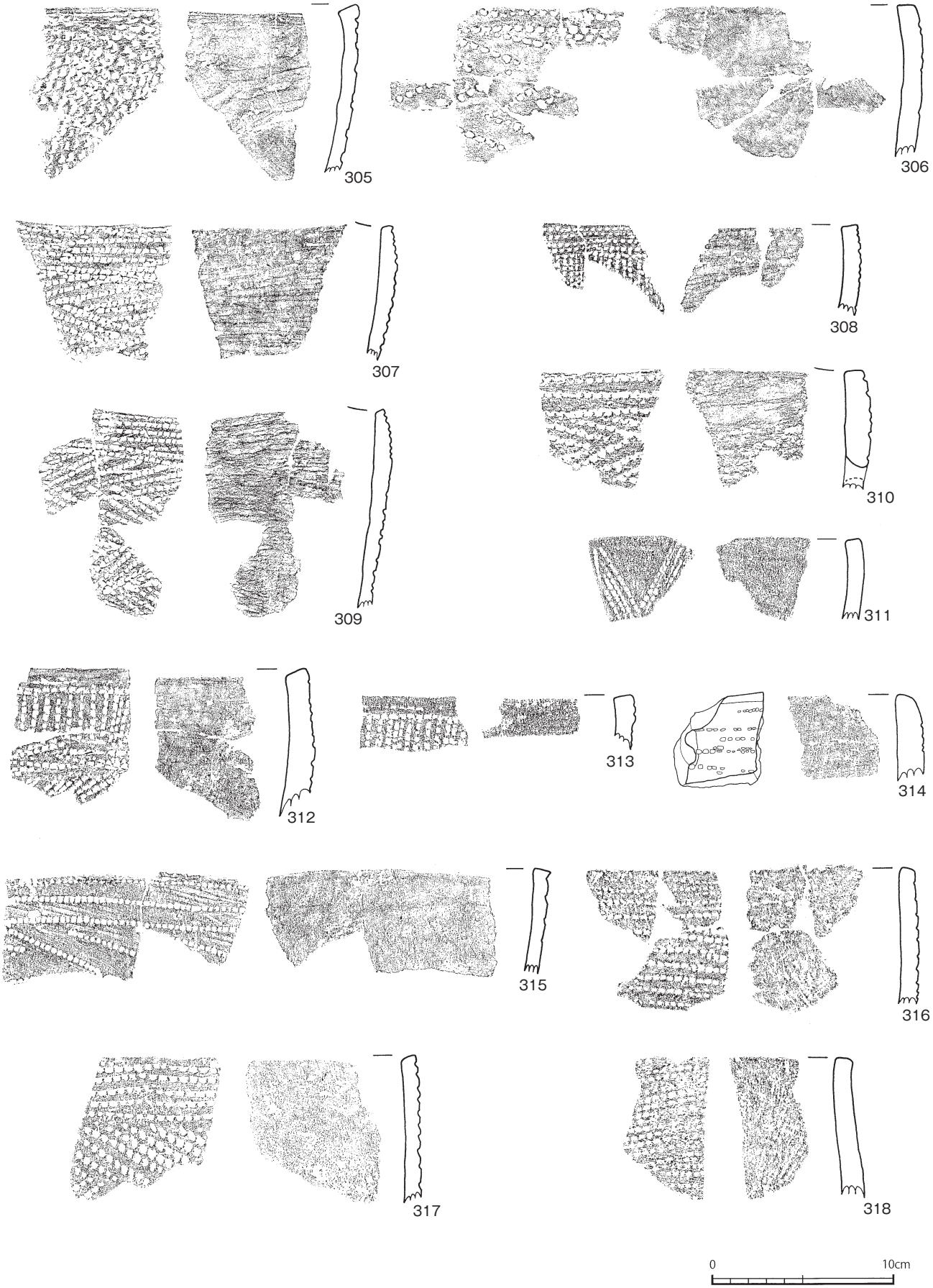
305～318 は，口縁部が内湾，やや内湾，内傾気味のものである。そのほとんどの土器が口唇部が平坦で口縁部断面が方形となる。口縁部文様帯に横位の刺突文を巡らせ，胴部に斜位の刺突文を施すものが多い。口縁部文様帯には 311 は鋸歯状の刺突文，312・313 は縦位の刺突文を施す。314 の口唇部外端は丸みを帯びるのが特徴で，胴部に一部盛り上がりがあることから瘤状の突起が貼付されていた可能性もある。318 は，直線的に延びる口縁部は内傾に近い器形となる。

319～322 は，平口縁に瘤状突起が貼付されるものである。319・320 は口唇外端から，321 は口唇外端からやや下方に縦長の瘤状突起を貼付する。322 は，口縁部文様帯と胴部文様帯の境付近に瘤状突起が横位に貼付される。

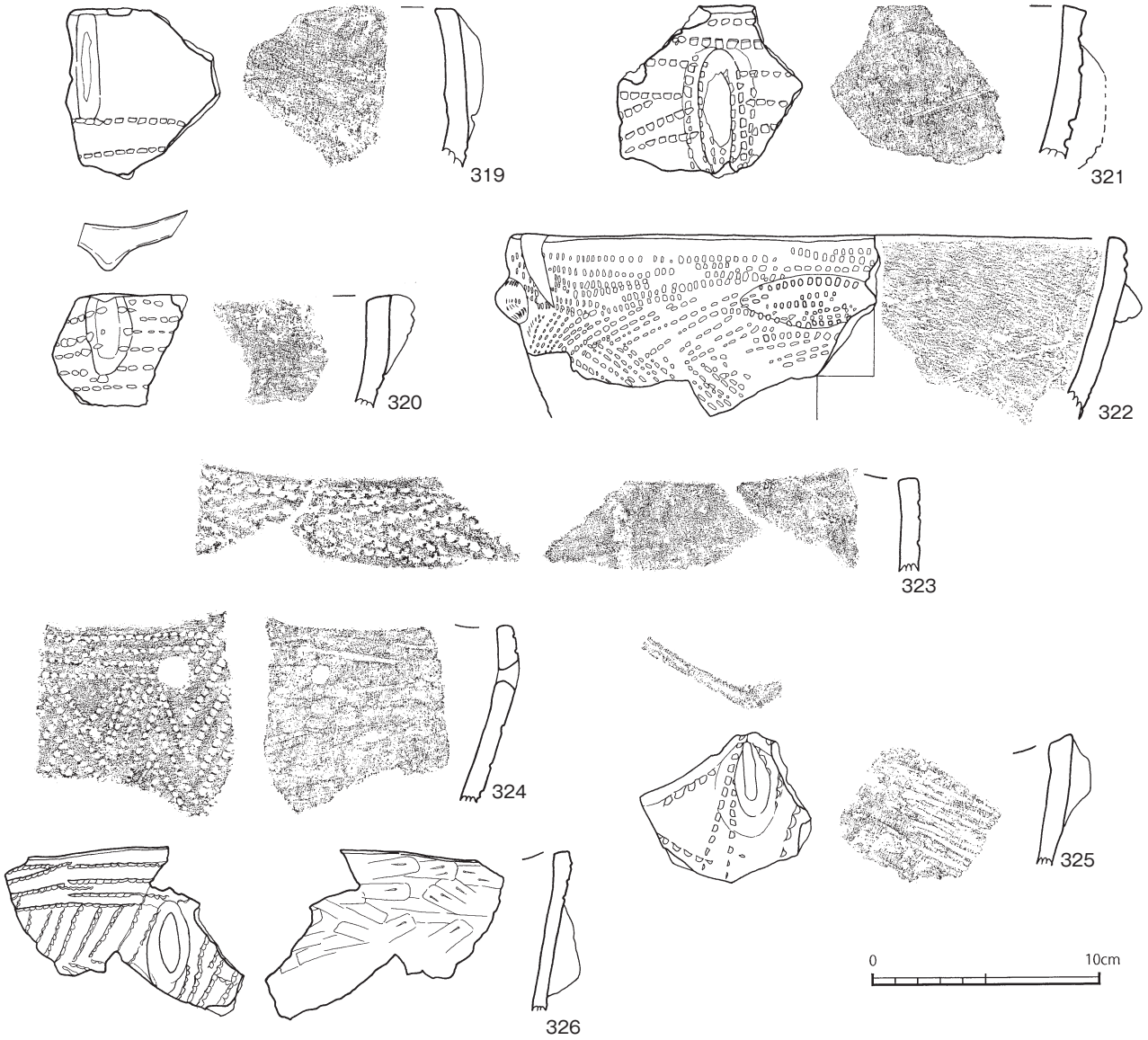
323～326 は波状口縁となるものである。324 は山形の


290
291
292
293
294
295
296
297
298
299
300
301
302
303
304
0
10cm

第 79 図　Ⅵ類土器５



第 80 図　Ⅵ類土器 6



第 81 図　Ⅵ類土器 7

突起が付き，円形の補修孔が穿たれる。325 は波頂部外面に，326 は口縁部文様帯と胴部文様帯の境から縦長の瘤状突起が貼付される。

【胴部】（第 82～84 図　327～341）

胴部は一括して記述する。

327～338 は，総じて胴部が直線的に開く器形のものである。斜位の刺突文を組み合わせて，横位か縦位の羽状の文様を施すものが多い。330 は，文様を区画する横位の刺突文を施す。331・332 の胎土には金雲母を含む。336 は横位の刺突文が間隔をおいて施され，その間には施文されない。333・337 の胎土には金雲母を含む。

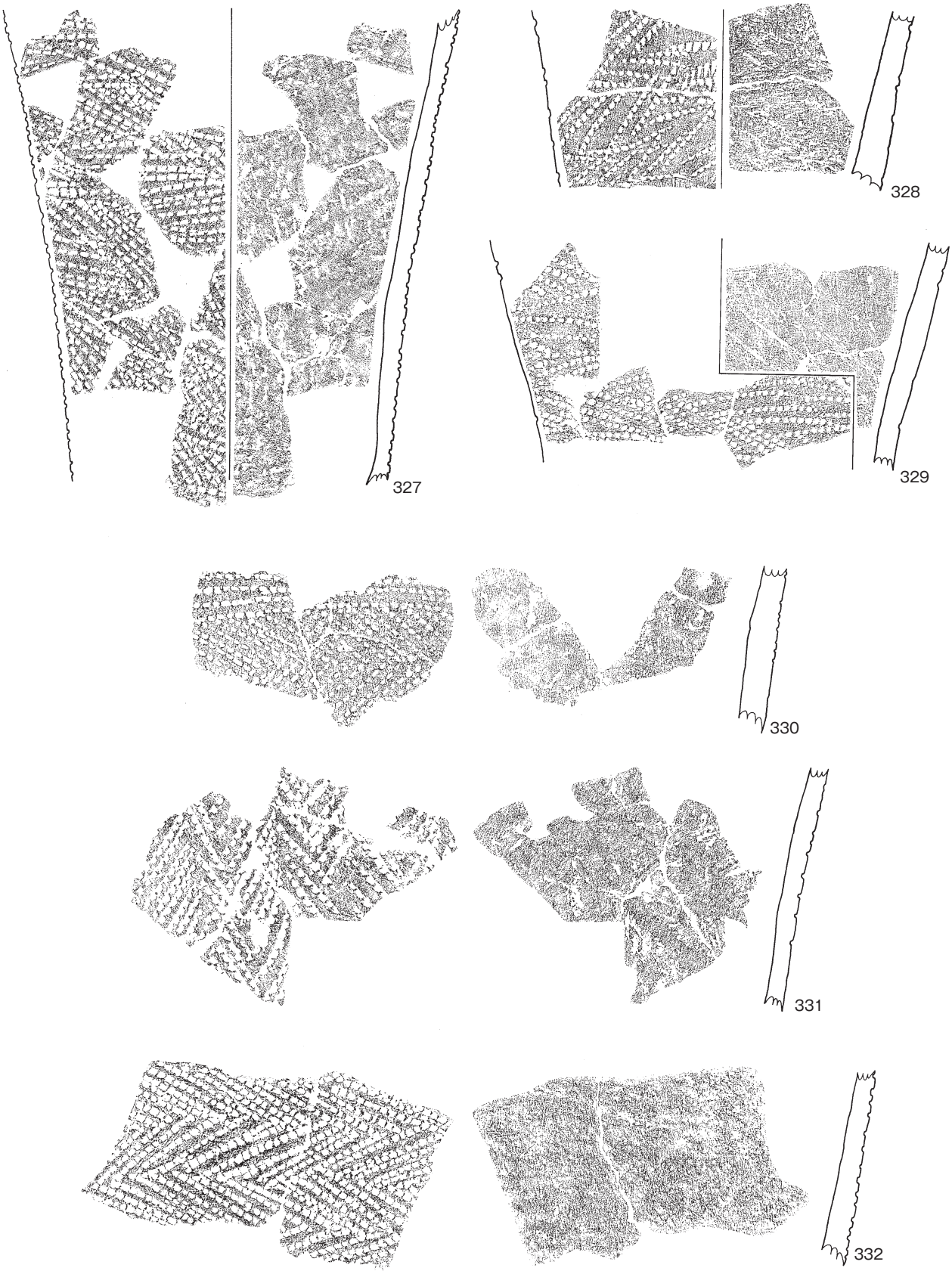
339～341 は瘤状突起が貼付される。339・340 の瘤状突起には穿孔がある。341 は胴部に横位の刺突文を間隔をおいて巡らせ，その間を斜位の刺突文で充填するものである。瘤状突起を縦長に貼付した後に，突起の上まで丁寧に施文される。

【底部】（第 85～88 図　342～394）

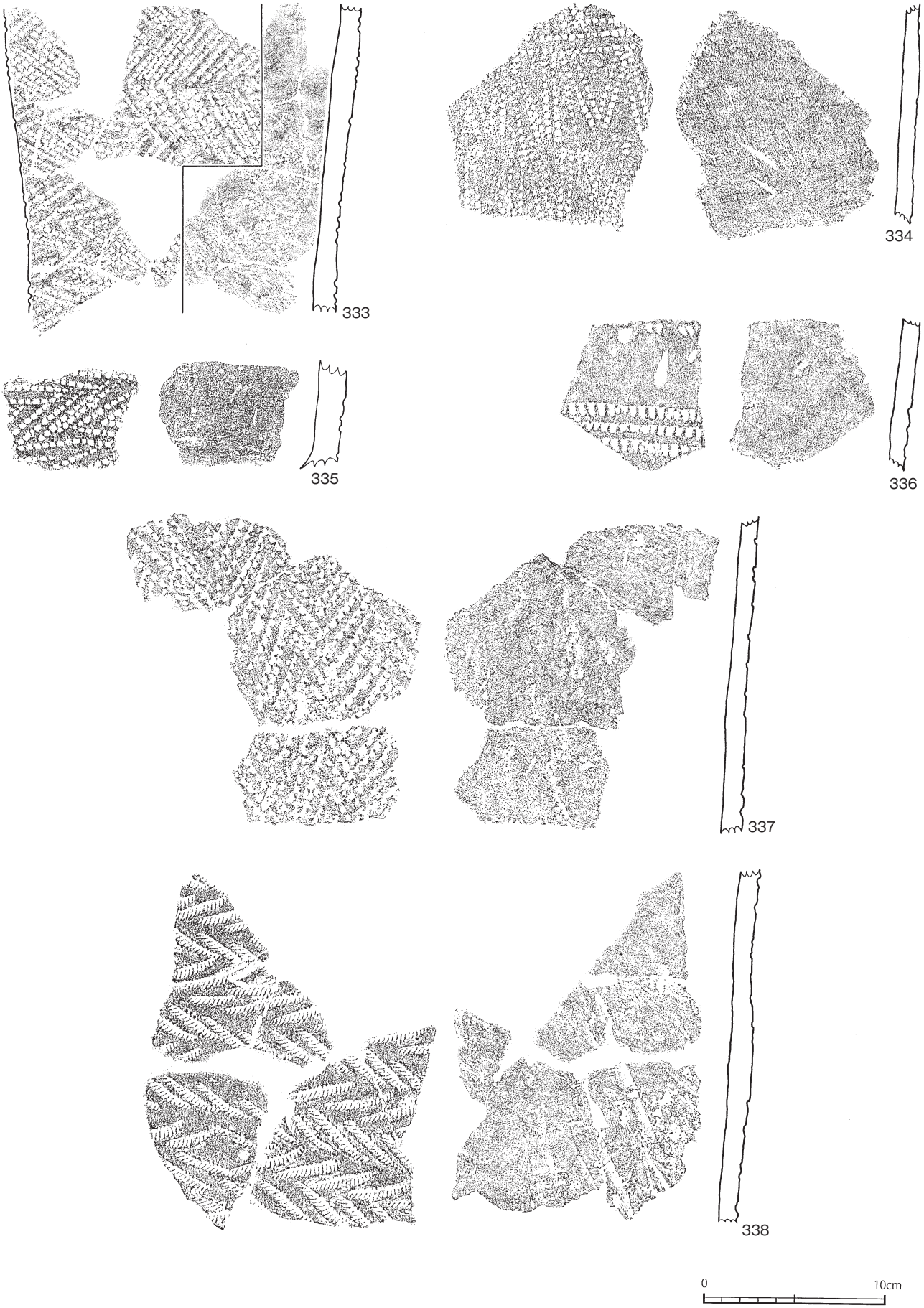
底部については，底部から胴部にかけて直線的に開くものと直立及び直立気味のものに大別した。

342～380 は，底部から胴部にかけての器形が直線的に開くものである。文様は斜位の刺突文もしくは斜位の刺突を組み合わせて羽状に構成するものがほとんどで，規格性を持って密に施文されるものは少ない。また，胴部下端まで施文されないものが掲載点数の 3 割程度ある。底部外面の調整は，総じて丁寧なナデが行われている。

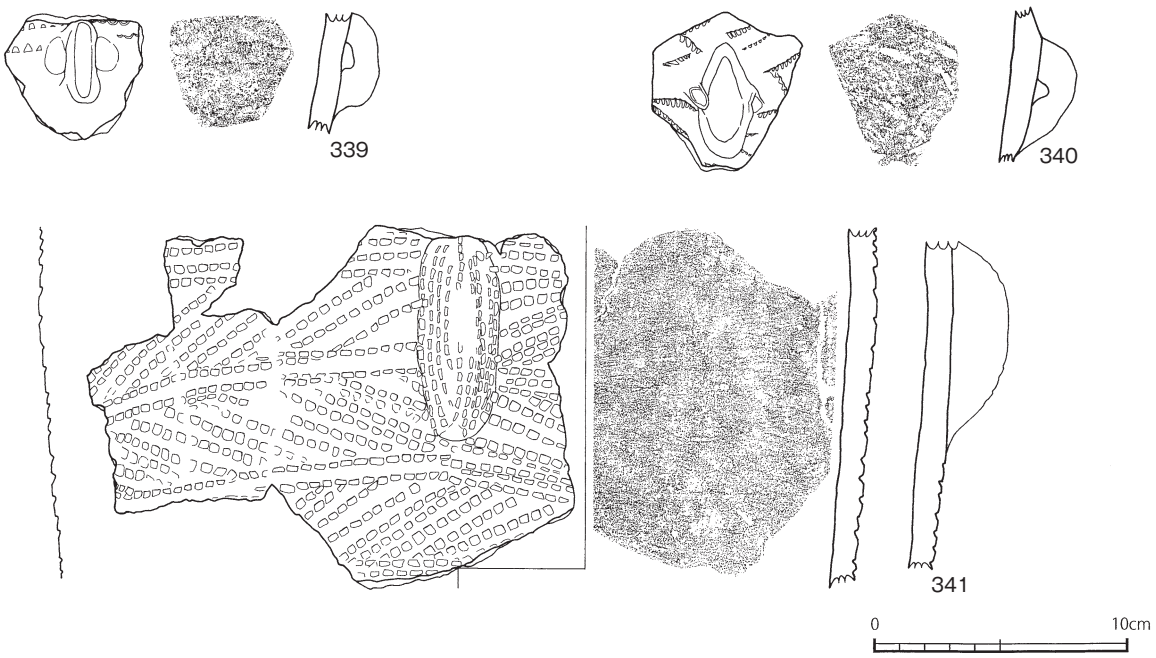
342 は外傾の度合いが強く，胎土には多くの砂粒と金雲母を含む。底径 16.0㎝を測る。344 は表面が摩耗しているが，縦位の羽状刺突文が観察できる。また，344・348・352 の胎土は精選され，砂粒が目立たない。344 の底径は 7.0㎝，345 の底径は 9.0㎝であった。345 の文様



第 82 図　Ⅵ類土器 8



第 83 図　Ⅵ類土器 9



第 84 図　Ⅵ類土器 10

は，貝殻背面を使った押圧に近い。347 は，底部から直線的に開き，胴上部から口縁部に向かって直立する器形となる。文様は横位の羽状刺突文を施す。内面調整は，本類の他の土器と比べ，丁寧なナデを行い，胎土には金雲母が含まれる。底径は 15.0cmを測る。355 は斜位の刺突文が観察でき，底径は 15.8cmであった。357 は斜位の刺突を羽状に組み合わせて施文し，底径は 18.8cmと大きい。358 は他の土器より薄手で，内面も胴下部まで丁寧にナデによる調整が行われている。366 は底径 10.8cmを測り，底部から胴部にかけての内面調整はケズリが施される。胴部下半の文様は，斜位の刺突文のみで構成される。367 と 368 の底径は小さく，それぞれ 8.0cmと 6.6cmである。369 と 371 は斜位の刺突で文様を構成し，底径はそれぞれ 12.0cmと 9.7cmである。372 は横位に近い刺突文を施し，底径は 11.4cmである。374 は底部から胴上部にかけて器壁が薄くなり，底径 10.4cmを測る。

381～394 は，底部から胴部にかけて直立もしくは直立気味の器形をもつものである。文様は，斜位の刺突文もしくは斜位の刺突を組み合わせて羽状の刺突文を構成するものがほとんどである。381 は，底径 22.4cmで掲載遺物中で最も大きい。382 は間隔を置いて羽状に刺突文を施し，底径は 383 と同じく 18.0cmと大きい。384 の胴下半には，横位の刺突文が施され，底径は 15.0cmである。385 は刺突を羽状に施し，底径は 11.2cmであった。386 は斜位の浅い刺突で施文するが，その間隔は広い。底径は 14.0cmである。387 の底面の器壁は割と薄く作られており，底径は 14.0cmである。また，391・394 は底面境までは施文されない。

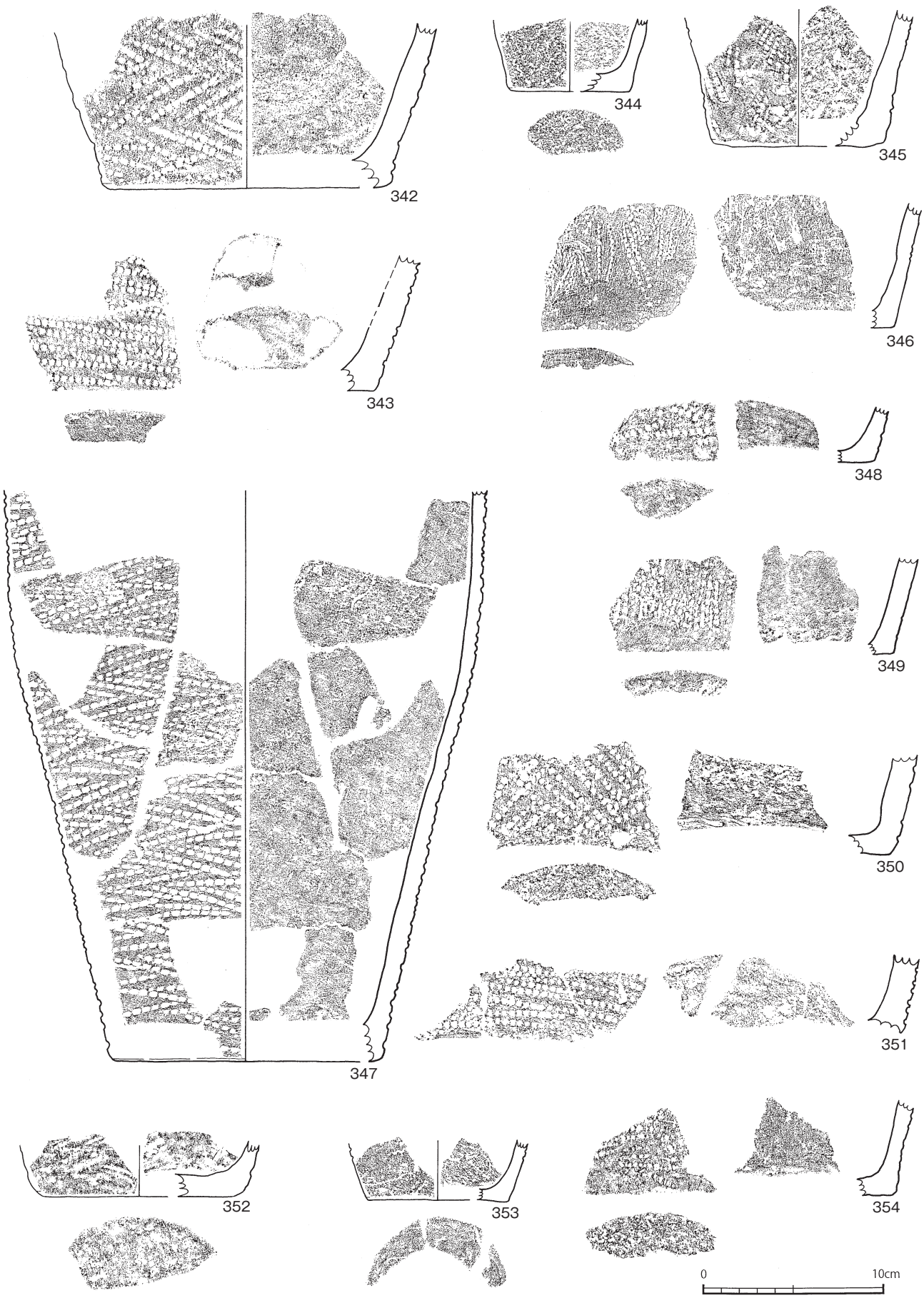
（7）Ⅶ類土器（第 89～92 図）

本類は 10 区から 12 区にかけての斜面部分と 15 区から 18 区にかけての緩斜面部分に多くが出土し，調査区の東端に行くに従って出土はまばらとなる。出土量の違いはあるが，Ⅵ類土器の出土状況とほぼ重なる。短い貝殻条痕や沈線により施文する土器である。ここでは部位毎に記述する。なお，本類の出土状況については第 89 図に示した。

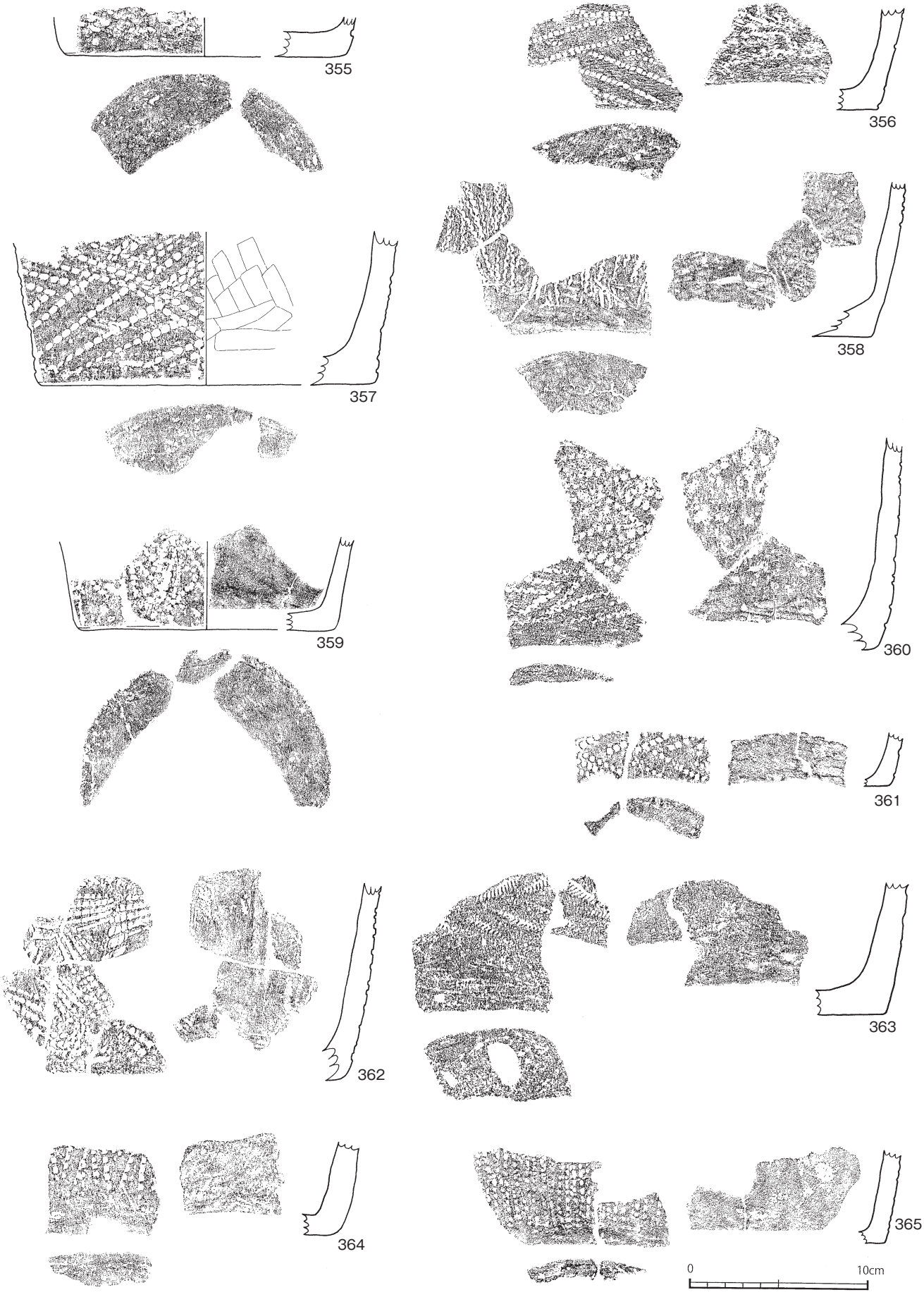
【口縁部】（第 90・91 図　395～409）

口縁部は直線的に立ち上がるもの（395～404）と内湾するもの（405～409）とに大別できる。いずれにも平口縁と波状口縁がある。また，直線的に立ち上がる器形のものには瘤状突起を貼付するものもある。文様は，口縁部に横位の条痕文を巡らすものが掲載遺物の半数以上ある。

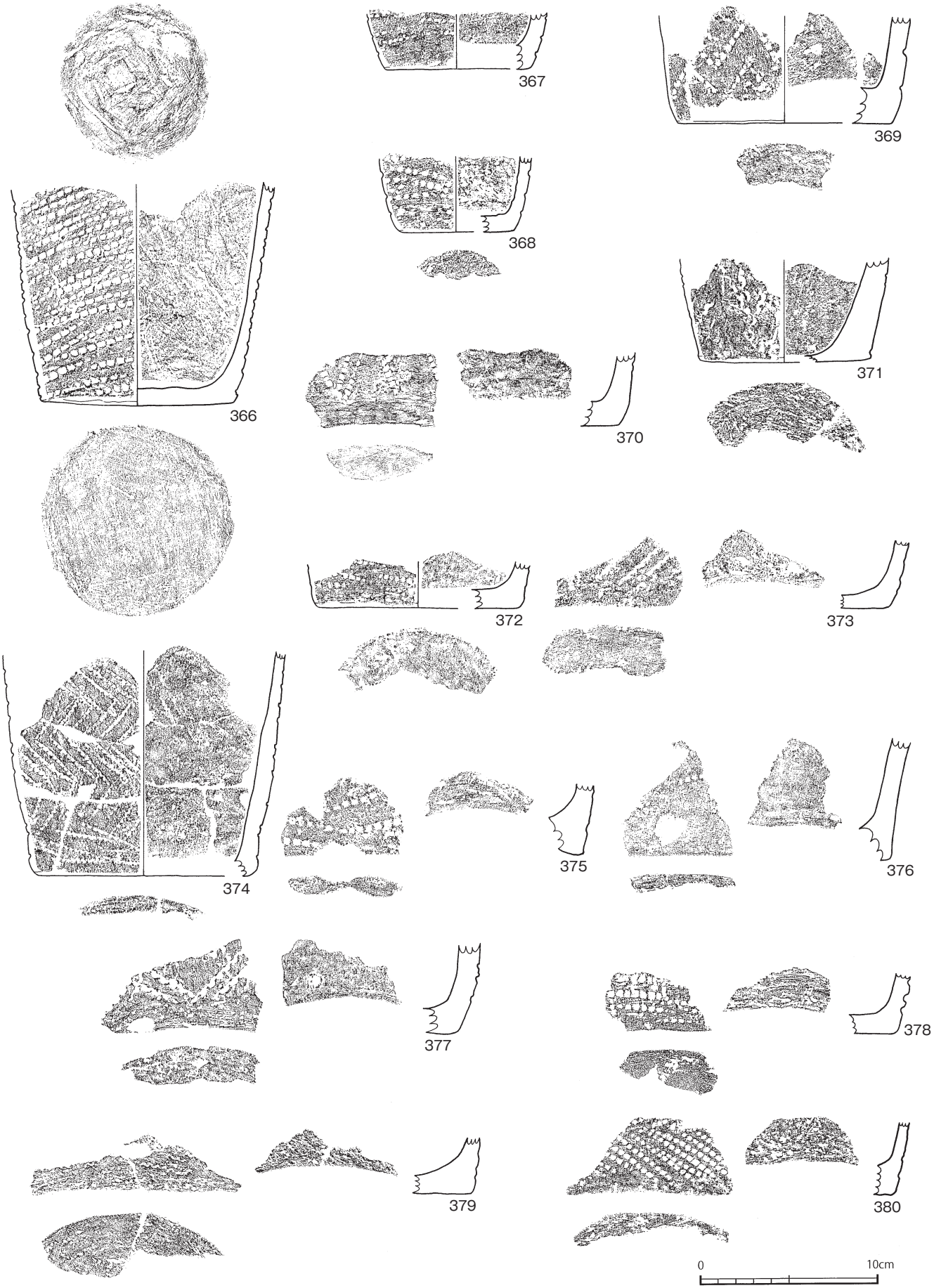
395～404 は，口縁部が直線的に立ち上がるものである。平口縁（395～401）と波状口縁（402～404）があり，波状口縁には瘤状突起が貼付されるものがある。395 は直線的に開く器形で復元口径 12.0cmを測る。口唇部は平坦面をもつが，やや丸みを帯びる。内面調整は，胴部付近に条痕が明瞭に観察できる。396～400 は直線的にやや開く器形をもち，口縁部断面は方形となり，口唇部に平坦面をもつ。396 は口縁部に条痕文を施し，ほぼ円形の補修孔が穿たれる。397 は口縁部に沿って条痕文を巡らし，胴部には 4 本一組の短い条痕文を施す。399 も 397 と同様の文様構成である。400 は縦方向に 2 本一組の条痕文が施される。401 は直立する口縁部に鋸歯状の条痕文が施される。402 は波状口縁を呈し，櫛歯状の工



第 85 図　Ⅵ類土器 11



第 86 図　Ⅵ類土器 12


367
369
368
366
371
370
372
373
374
375
376
377
378
379
380
0
10cm

第 87 図　Ⅵ類土器 13



第 88 図　Ⅵ類土器 14

具による細い条痕文で施文される。403・404は，直線的に開く口縁部で波状口縁を呈し，波頂部外面に瘤状突起が貼付される。いずれも，口縁部に沿って条痕文を施す。404の胴部には４～５本一組の短い条痕文を施す。

405～409は，口縁部が内湾もしくは内湾気味のものである。平口縁と波状口縁があり，瘤状突起の貼付されるものは確認されていない。405・406は平口縁，407・408・409は波状口縁となる。405は口唇部に平坦面を作るが，部分的に不安定となる。406・407の口唇部平坦面は内傾する。408の波頂部は断定できないが，２対を想定している。409は直線的に開く胴部に，口縁部が内湾する器形となる。口縁部に沿って４～５本一組の条痕文，胴部には同じ条痕文を鋸歯状に胴下部まで施す。

【胴部】（第91図　410～412）

410～412は胴部片で，直線的に開く器形を呈す。いずれも２本一組の工具で短沈線を施し，内面は丁寧なナデ調整である。

【底部】（第91・92図　413～428）

413～428は底部ないしは胴部から底部付近の土器である。底部から胴部にかけて直線的に開く器形のものが大部分を占め，直立する器形のものは少ない。胎土は砂粒を多く含むものが多いが，417・425・426は胎土に砂粒を少し含む土器である。底部調整は，内面より外面のほうが丁寧である。胴部下端の文様は，短い条痕で鋸歯状の条痕文を胴部から連続的に施すものが多い。415と416には斜位の条痕文が施され，底径はそれぞれ8.0cmと12.6cmである。419には鋸歯状の条痕文が施され，底径は21.6cmを測る。421の胴部には鋸歯状の条痕文，底面境には横位の条痕文が施される。424は僅かに条痕文が覗き，底径は10.6cmである。425の底径は9.0cmで，底面境まで施文されないのは423と同じである。428は小型の土器で，胴部には４本一組の短い条痕文が施されるが，底部形状については不明である。

（8）Ⅷ類土器（第93～95図　429～448）

Ⅷ類土器は胴部から口縁部にかけて直線的に開くか，やや内湾する器形をもち，貝殻腹縁による刺突文と条痕文もしくは沈線文で文様を構成する一群である。本遺跡からは58点出土したが，小片のため本類の文様を確認できない可能性も考えれば，本来はもう少し出土点数が多いと思われる。出土状況は第93図に示した。ここでは，文様に着目し，記述する。

429～433は口縁部に刺突文，胴部に条痕文を施し，器形は直線的に開くものである。433は波状口縁となる。429～431は口縁部に横位の刺突文，胴部に鋸歯状の刺突文を施す。432は口縁部に横位の刺突文を巡らし，胴部には部分的な縦位の条痕文に斜位の刺突文を上書きする。433は口縁部に鋸歯状の刺突文を，胴部には斜位の条痕文を施す。

434～436は口縁部に条痕文を，胴部に刺突文を施すものである。434の器形は外傾し，波頂部外面には縦長の瘤状突起が貼付される。435・436は内湾する器形に，口縁部には鋸歯状の条痕文を巡らせ，胴部には横位や斜位の刺突文が施される。435は口唇端部が少し欠けるが，器形や文様等から436と同一個体の可能性もある。437～439の胴部には，明瞭な縦位の条痕文と鋸歯状の刺突文が施される。また，胎土に雲母，１～２㎜程度の小礫が多く含まれ，土器の色調も類似することから同一個体と思われる。さらに，437と438の口唇部には刺突が施される。439の内面には縦方向のケズリ痕が観察できる。440・441は，いずれも胴部片で刺突文と条痕文で文様を構成する。442～448は３条程度の沈線を横位に巡らすことにより区画し，その間を斜位の刺突文で充填する文様構成となっている。底部から胴部にかけて外傾する器形は，口縁部ではその度合いが小さくなる。口唇部には平坦面をもち，その断面は方形となる。口縁部外面には，穿孔された瘤状突起が貼付される。内面調整は丁寧なナデが施される。442～447は同一個体と思われるが，胴部に施す斜位の刺突文から448は別個体と思われる。

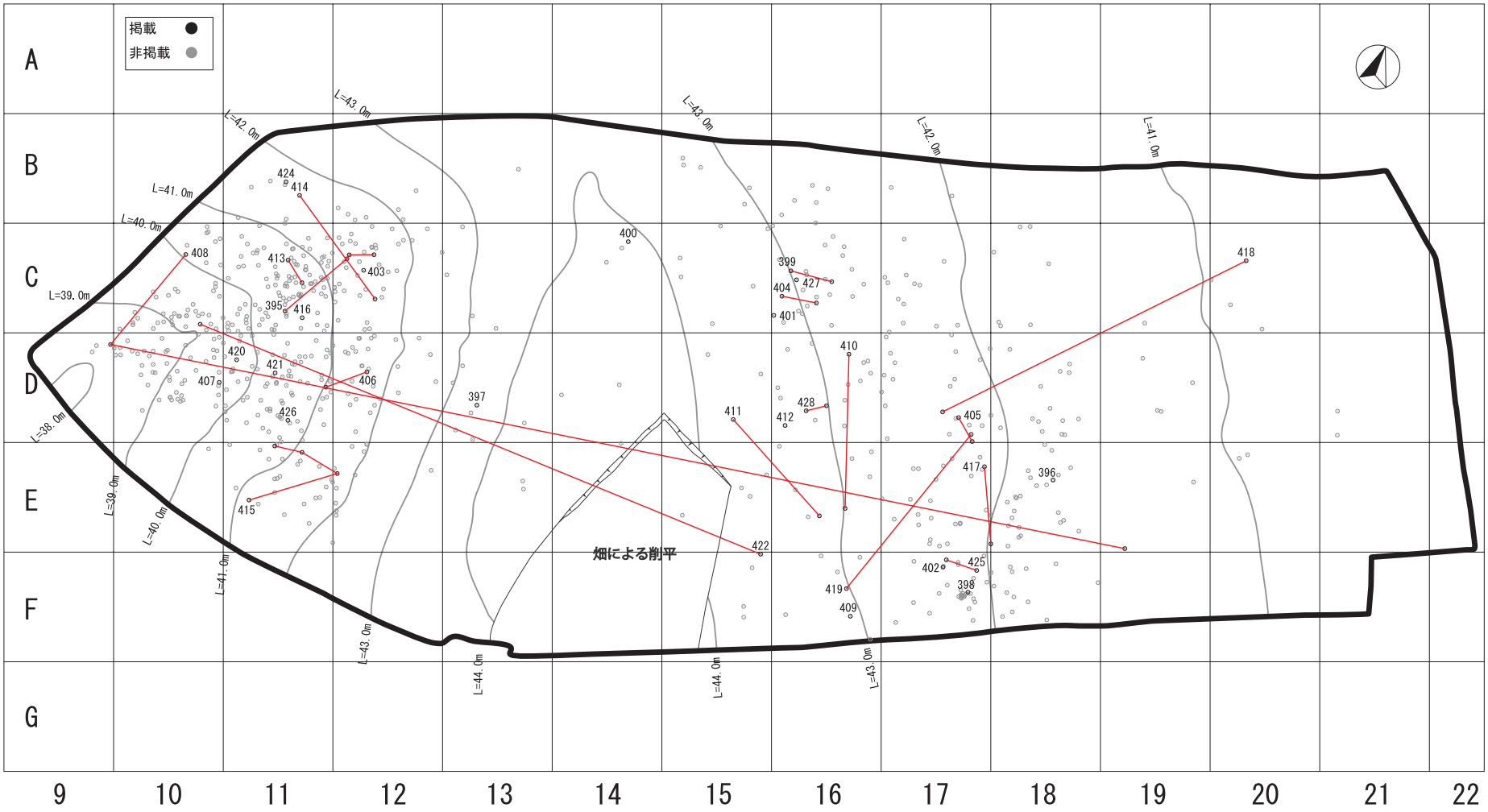
（9）Ⅸ類土器（第96・97図　449～461）

本類の土器は点数的には少ないが，調査区内でも標高の高い14区を中心に出土した。その出土状況は第96図に示した。

本類土器は出土量も少ないこともあり，その文様で楕円押型文を施すもの，山形押型文を施すもの，原体が不明なものに３分類した。

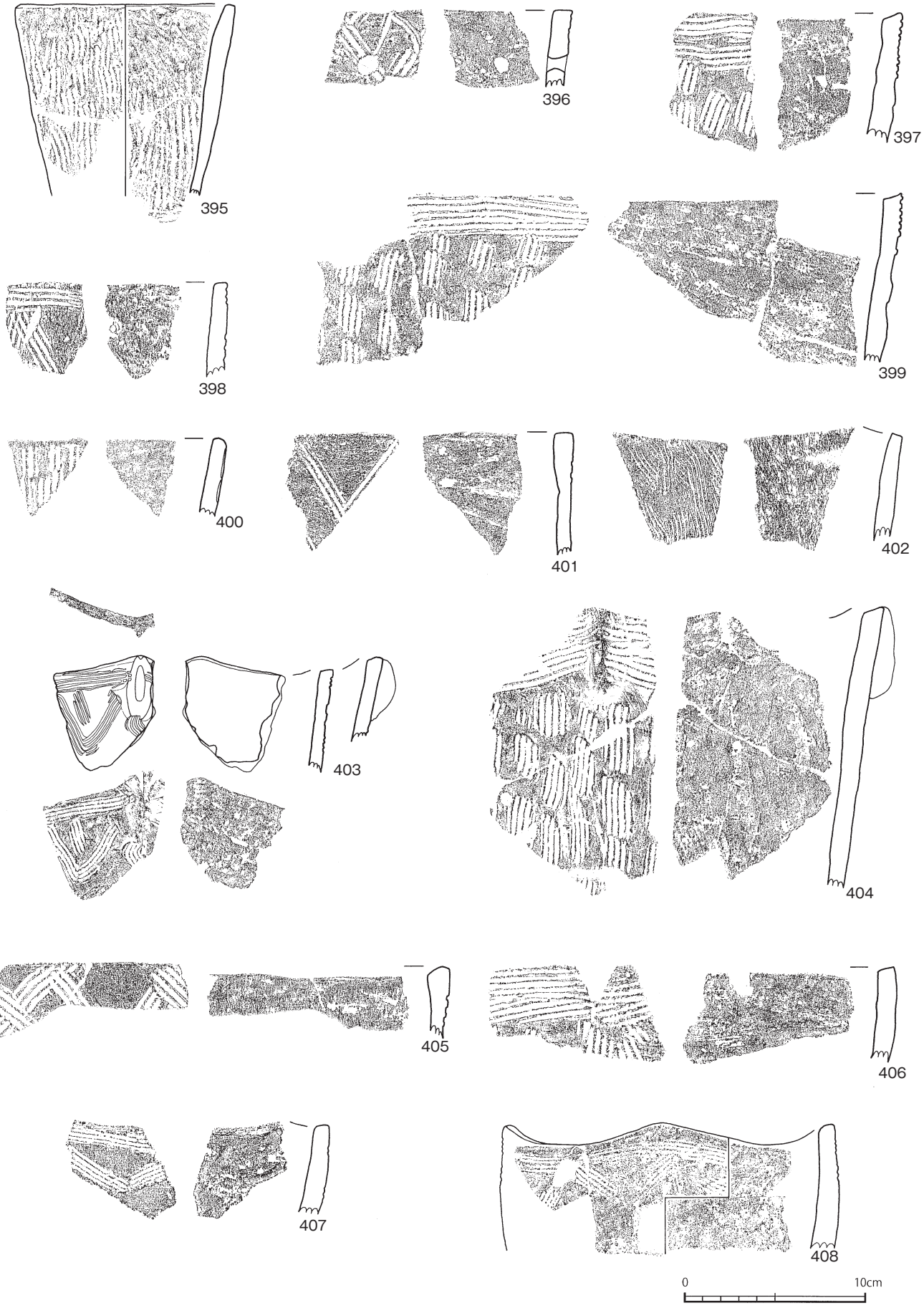
449～454は楕円押型文を施す土器である。449・450は口縁端部が外反し，口縁部内面には稜をもち，口唇部には平坦面を作る。文様は原体を斜めに転がし施文するが，原体の転がし方により部分的に無文となる箇所もある。また，口唇部や口縁部内面にも楕円押型文が施される。451はやや外反する器形で，内面に浅い稜をもつ。口縁部外面に斜位の楕円押型文，胴部は横位に，内面及び口唇部にも施文する。452は内面に稜をもち，施文は口縁部外面のみである。453と454は底部から直線的に大きく開く器形で，453は横位と斜位の楕円押型文が施される。453及び454は白色の砂粒を多く含み，内面調整は粗い。

455～459は山形押型文を施す土器である。455はやや外反する口縁部の内面と口唇部に山形押型文を施す。口縁部外面には施文されない。456・457は直線的に伸びる口縁端部が若干外反し，口唇部は丸みを帯びる。口縁部には縦位の，胴部には横位の山形押型文を施文するが，部分的に縦位と横位の押型文が重なり，格子目状となる



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

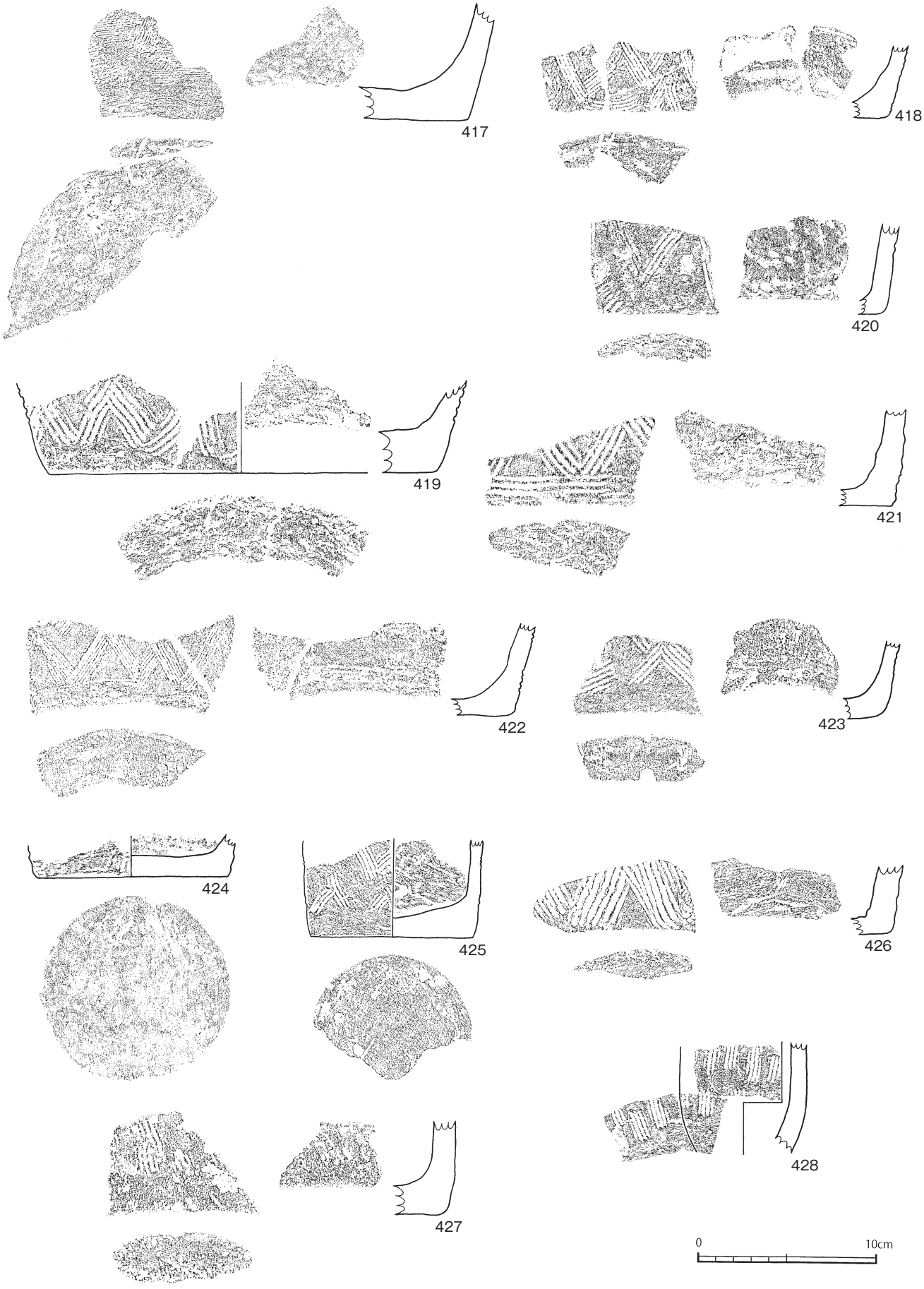
第89図　Ⅶ類土器出土分布図



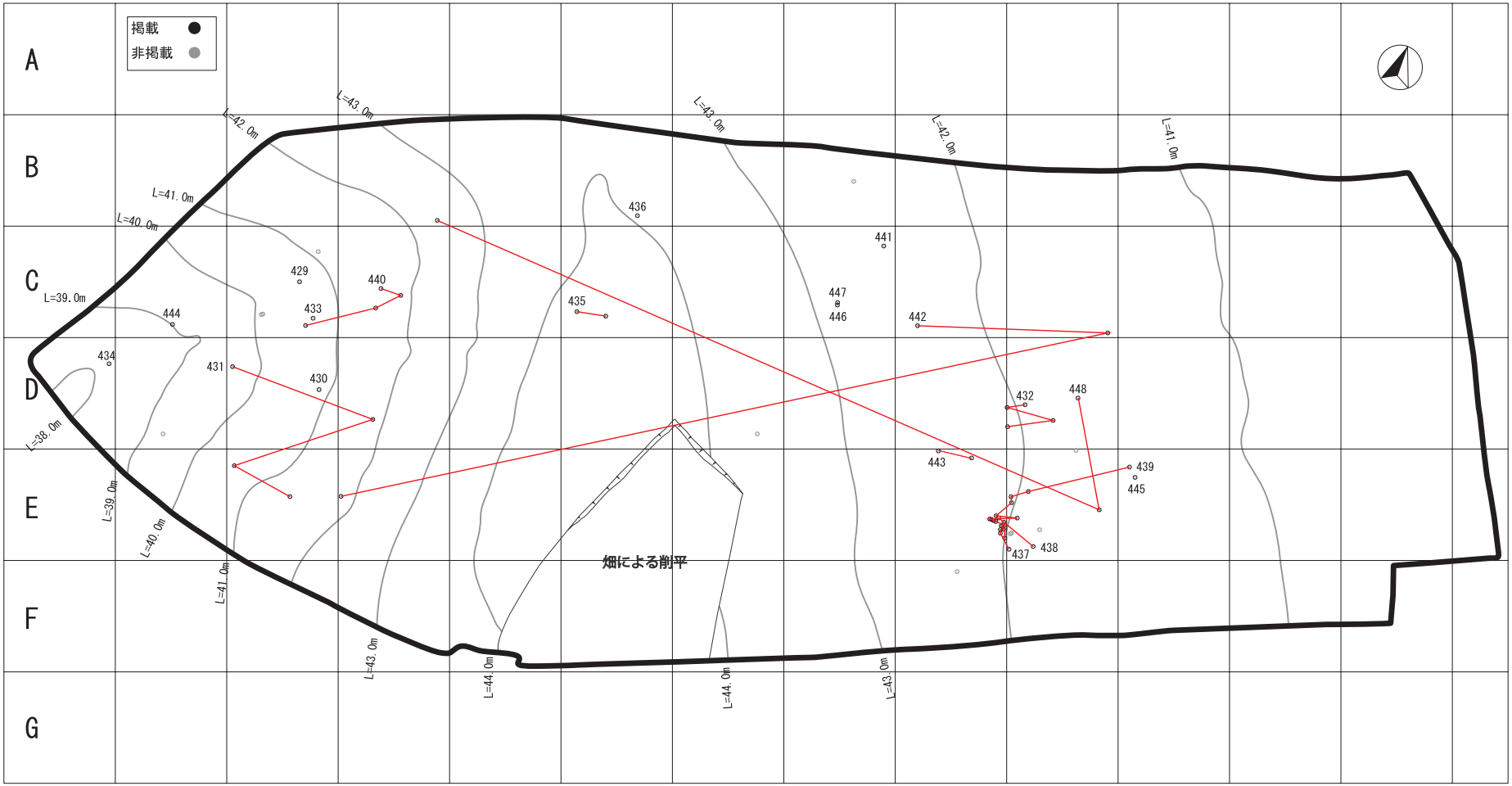
第 90 図　Ⅶ類土器 1



第 91 図　Ⅶ類土器２

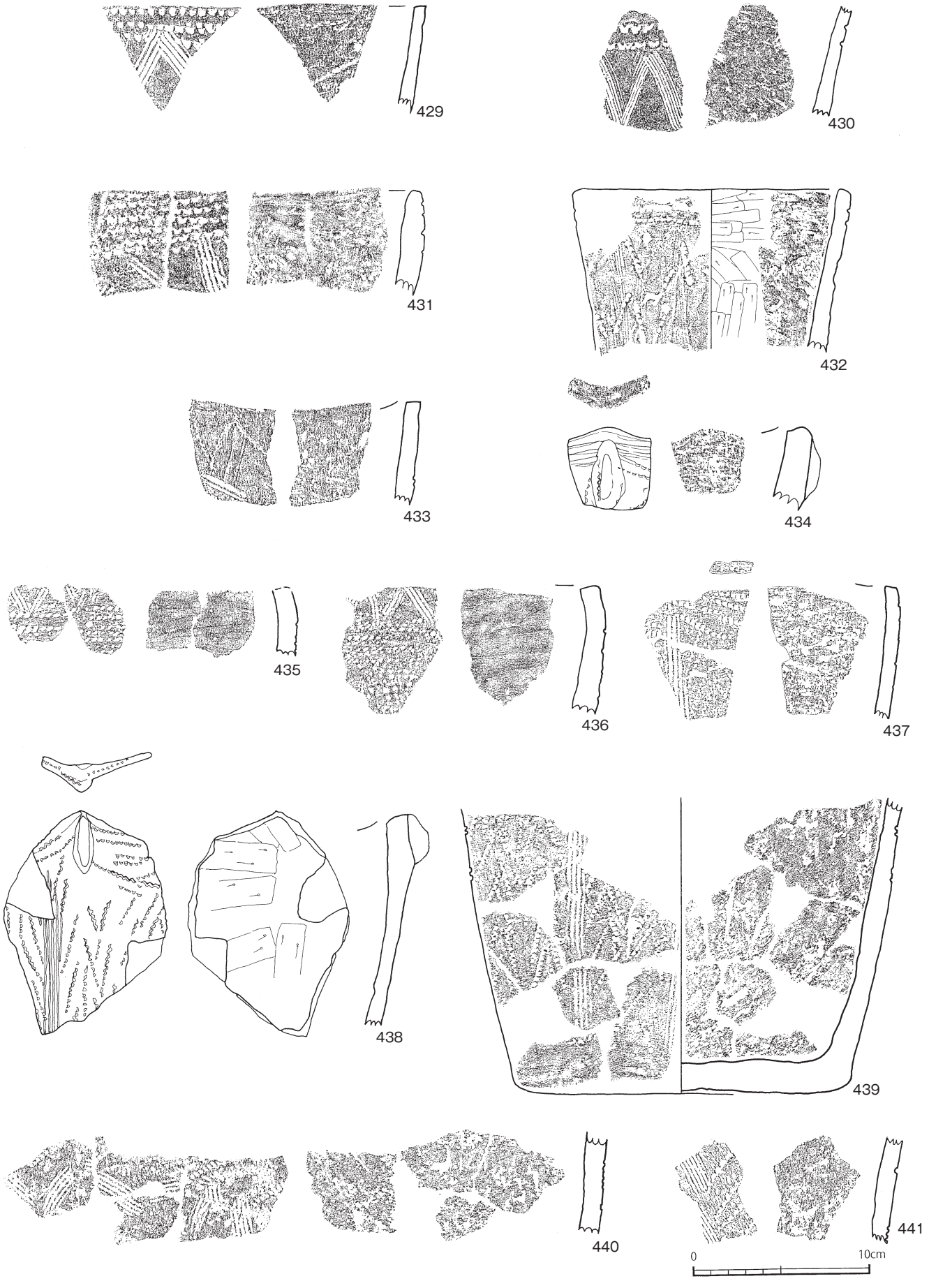


第 92 図　Ⅶ類土器 3

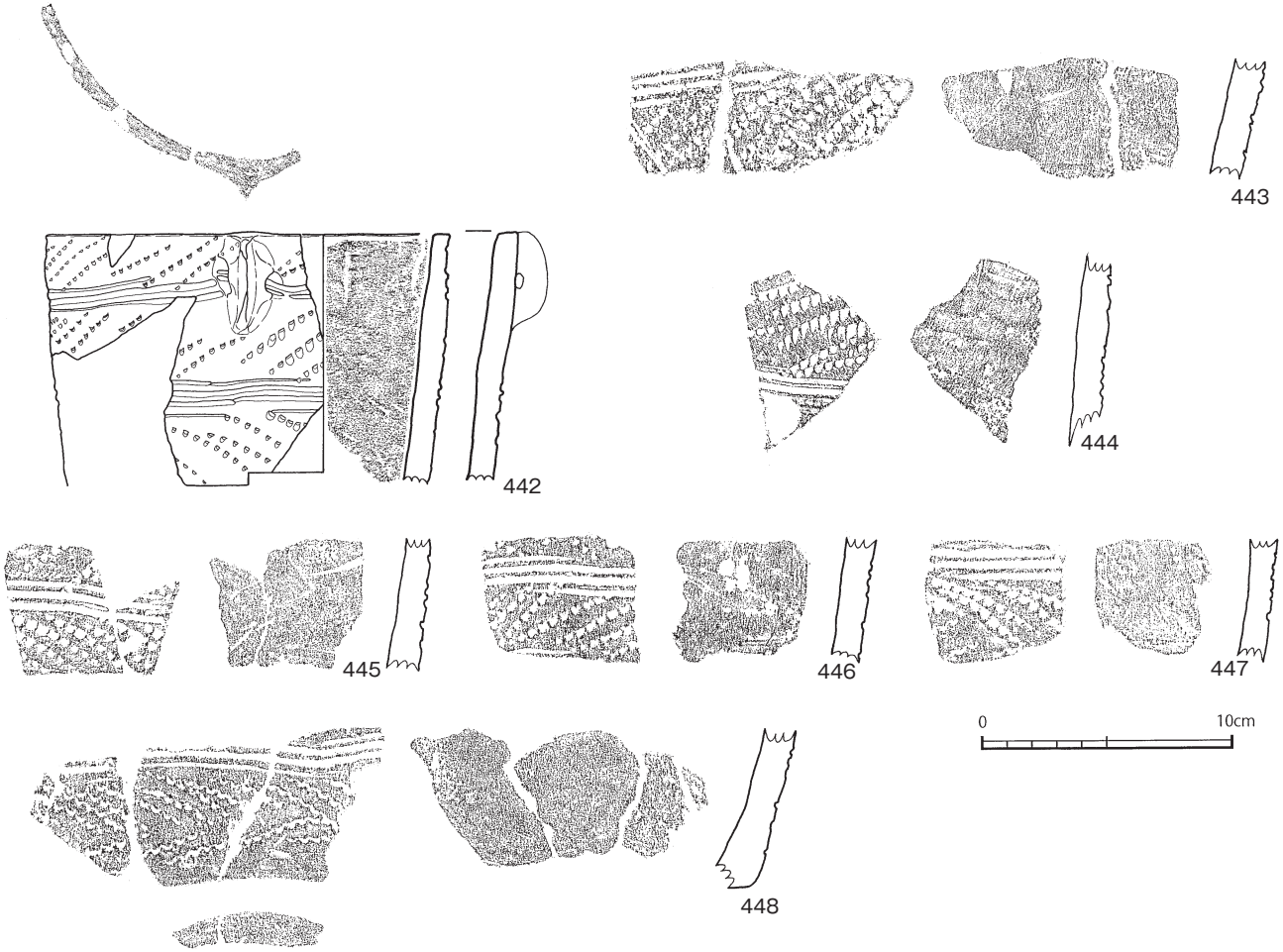


（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第93図　Ⅷ類土器出土分布図



第 94 図　Ⅷ類土器 1



第 95 図　Ⅷ類土器２

箇所もある。

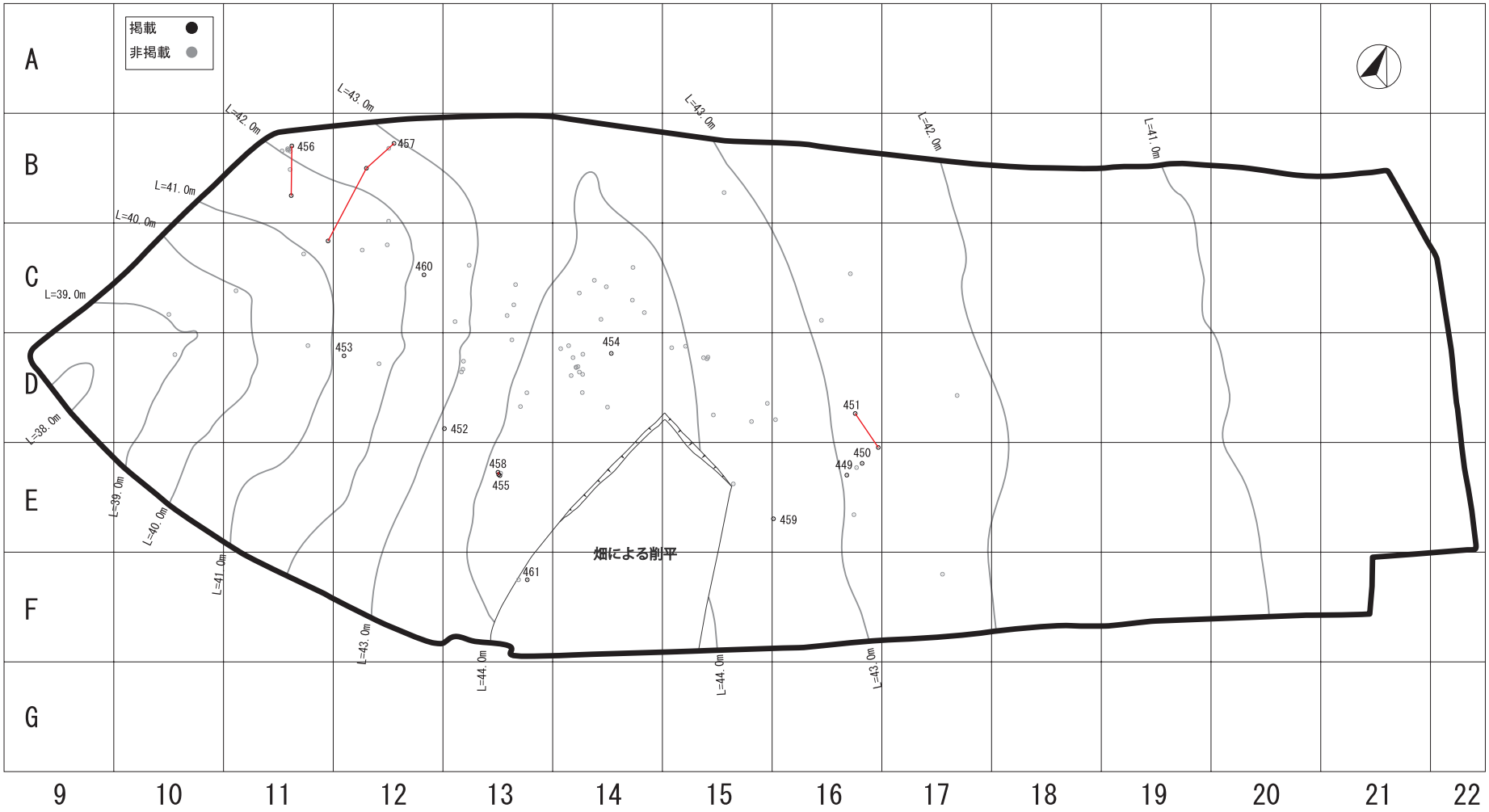
458 はやや膨らみを持ちながら外に開く器形で，平底である。山形の押型文が全面に施される。胎土に白色の砂粒を多く含み，内面は粗いナデ調整が施される。459 は斜位の山形押型文で，白色の砂粒を含む。

460・461 は施文原体が不明な土器である。460 は薄手の器壁に上げ底気味の底部から手向山式土器に該当すると思われる。白色砂粒を多く含み，内面は丁寧なナデ調整が施されている。461 は底部から胴部にかけて大きく開く器形で，平底となる。一部には楕円押型文も施される。

（10）X類土器（第 98～103 図　462～488）

調査区の 14 区から 19 区にかけて主に出土し，西側斜面での出土量は少ない。その出土状況は第 98 図に示した。本類の土器は外反する口縁部に胴部は膨らみ，文様は沈線文・刺突連点文・刻目突帯文・縄文・結節縄文で構成される一群である。本類の土器は，分類上は一括して平栫様式として扱う。

462～482 は口縁部が残るものである。462 は波状となる口縁部は外反する器形である。口唇部にキザミを施し，口縁部には刻目突帯が巡る。刻目突帯間には地文としての単節縄文が部分的に観察できる。胎土には多くの金雲母が入り，内面はナデ調整が施される。463 は胴部が膨らみ，頸部から口縁部にかけて外反し，波状口縁を呈する器形となる。口唇部にはキザミを，口縁上端に刺突を，その下位には数条の沈線で波状に文様を施す。口縁部から頸部にかけて刻目突帯を４条巡らすが，最上位の刻目突帯に沿うように，その上位に刺突を施す。刻目突帯間にも１条の沈線を波状に施す。胴部には単節縄文を施す。464 の外反する口縁部は波状を呈す。波頂部外面にはキザミを施した粘土紐が頸部に向かって貼付される。口唇部にもキザミが施され，口縁部下位には刻目突帯が巡る。さらに，口縁部には刺突文と沈線が斜位に施される。465 は，口径 27.0㎝を測る。直線的に外反する口縁部は波状となる。口唇部外端にキザミを，口縁部には刺突と沈線で文様を構成する。波頂部外端から頸部には刻目突帯が垂下する。頸部にも刻目突帯が巡り，胴部には結節縄文が施される。466 は復元口径 35.0㎝である。口唇部にキザミ，見かけの肥厚帯をもつ口縁部は刺



（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第96図　Ⅸ類土器出土分布図



第 97 図　Ⅸ類土器

突文と沈線で施文される。頸部には刻目突帯が巡る。467は波状口縁を呈し，口唇部にはキザミを施す。口縁部には沈線で文様を構成し，頸部には突帯が巡る。468は，口唇部にキザミ，肥厚する口縁部には刺突と沈線で施文される。469は口縁部を断面三角形に肥厚させ，沈線で施文する。頸部以下が不明のため判断はできないが，壺形土器の可能性も否定できない。470は，口唇部にキザミを施す。口縁部には刺突と沈線で，その下位に刻目突帯が巡る。471は復元口径25.0cm，残存器高32.0cmを測る。口縁部は刺突と沈線で施文し，頸部には刻目突帯が巡る。波状口縁で，口唇部にキザミを施す。胴部は上半が膨らみ，結節縄文が見られる。472・473・475～477は口縁部に沈線と刺突で施文する。474は沈線のみ，478は刺突のみの施文である。476は，波状口縁の口唇部にキザミ，頸部に刻目突帯が巡り，胴部には結節縄文を施す。479･480は口縁部を肥厚させ，縄文を施す。481・482は口縁部に見かけの肥厚帯を作り，単節及び結節縄文を施す。462と463は，文様構成から妙見･天道ヶ尾式土器の範疇に入り，それ以外の土器は平栫式土器と思われる。

483～488は頸部･胴部及び底部である。483･484は頸部片で，沈線と刺突で文様を構成する。484には刻目突帯が巡る。485の胴部には単節及び結節縄文が，486には頸部に刻目突帯と胴部に結節縄文が施される。487は尖底で，刻目突帯を螺旋状に貼付する。突帯間には刺突と沈線で施文されるが，その器形の全体像については不明である。488は，頸部から底部まで残存する。底径は，12.6cmを測る。頸部には刻目突帯が巡り，胴部には地紋として単節縄文を施す。横位の刻目突帯を頸部に巡らせ，縦位の刻目突帯を頸部から胴下部まで９本垂下させる。487については平栫様式の範疇ではあると思われるが，詳細は不明である。488は妙見・天道ヶ尾式土器でそれ以外は平栫式土器と思われる。

（11）Ⅺ類土器（第104・105図　489～492）

調査区のＥ－17・18・20区から少量出土した。その状況については，第104図に示した。本類の土器は口縁部がラッパ状に開く器形で，胴部に網目撚糸文や沈線文を施すものである。本類の掲載遺物は４点である。

489～491の口縁部は外反し，内面には稜をもち，舌状の口唇部となる。口縁部に施文はない。489･490は網目撚糸文を縦位に施した後に，横位の沈線を頸部，胴中央部に巡らす。491は，胴上部に施された網目撚糸文の端部が残る。489～490は塞ノ神Aa式土器に該当する。492は上げ底気味で，底部内面の中央部が盛り上がる。底部から胴部にかけては直線的に開く器形となる。胴部下部に条痕文と思われる文様が一部残る。器形及び文様から塞ノ神Ｂ式土器と思われる。

（12）Ⅻ類土器（第104・105図　493～495）

調査区の東側緩斜面のＣ－18・19区から僅かに出土し，その状況は第104図に示した。本類の土器は，微隆突帯を巡らせ，条線文と刺突文で文様を構成するものである。

本類は３点を掲載したが，同一個体と思われる。493は直線的に開く口縁部を呈し，内傾する口唇部の外端にはキザミを施す。口縁部外面にはキザミを施した２条の微隆突帯を巡らせる。さらに，条線文と鋸歯状の刺突文も施し，文様を構成する。494・495も直線的な条線文と鋸歯状の刺突文で文様を構成するが，494の条線文は直線的な条線文の交点に楕円形に近い曲線を配する。これらは苦浜式土器と思われる。

（13）ⅩⅢ類土器（第106・108・109図　496～510）

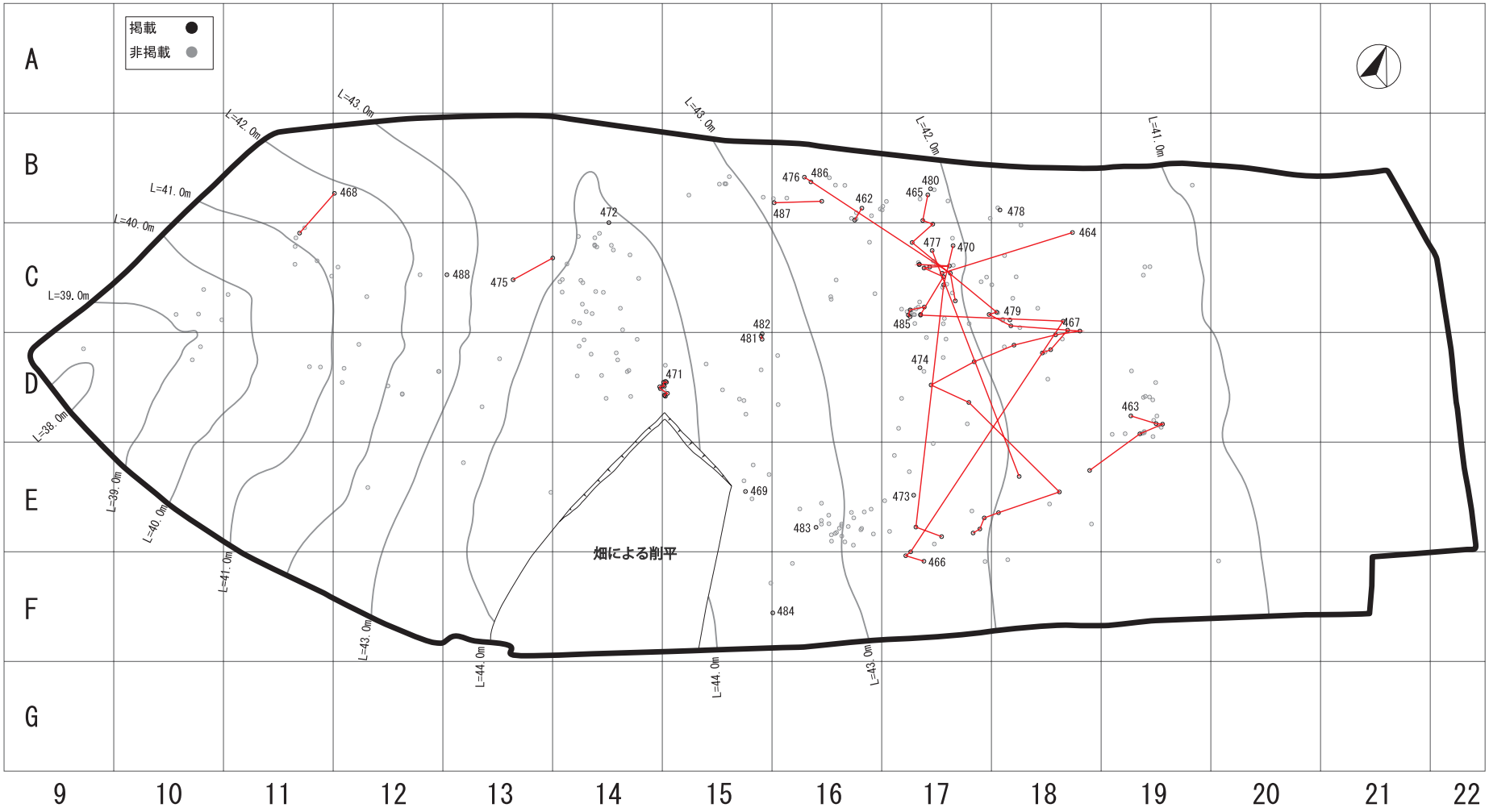
本類は，文様の施されない土器片の一群である。11区から18区にかけてまばらな出土である。出土状況は第106図に示した。なお，部分的に文様が施されない土器の一部である可能性は否定できない。

496は口縁部が外反し，口唇部は舌状となる。平口縁ではあるが，口縁端部の高さに違いができるくらいいびつな口縁となる。頸部がやや締まり，胴部が幾分膨らむ平底の器形となる。内外ともナデ調整が施され，外面には煤が付着する。復元口径29.7cm，復元底径10.5cmを測る。497～502は外傾，もしくはやや外傾する口縁部である。497･498･500は波状口縁となる。499は三角状に肥厚する口縁部の形状から，無文の平栫様式の土器と思われる。500には瘤状突起が見られ，その形状からⅥ類，Ⅶ類との関連が考えられる。501の口径は7.2cm，503の口径は8.0cmを測る小型土器である。503～505の口縁部は内湾する。506は底部から胴部にかけて大きく外に開く器形で，底部が上げ底となる。507～509は底部から胴部にかけてやや外傾する器形となる。507～509の底径は11.0cm，5.8cm，8.6cmである。510は底部から胴中央部にかけて外傾し，口縁部にかけては内傾する。

（14）ⅩⅣ類土器（第107・109図　511～517）

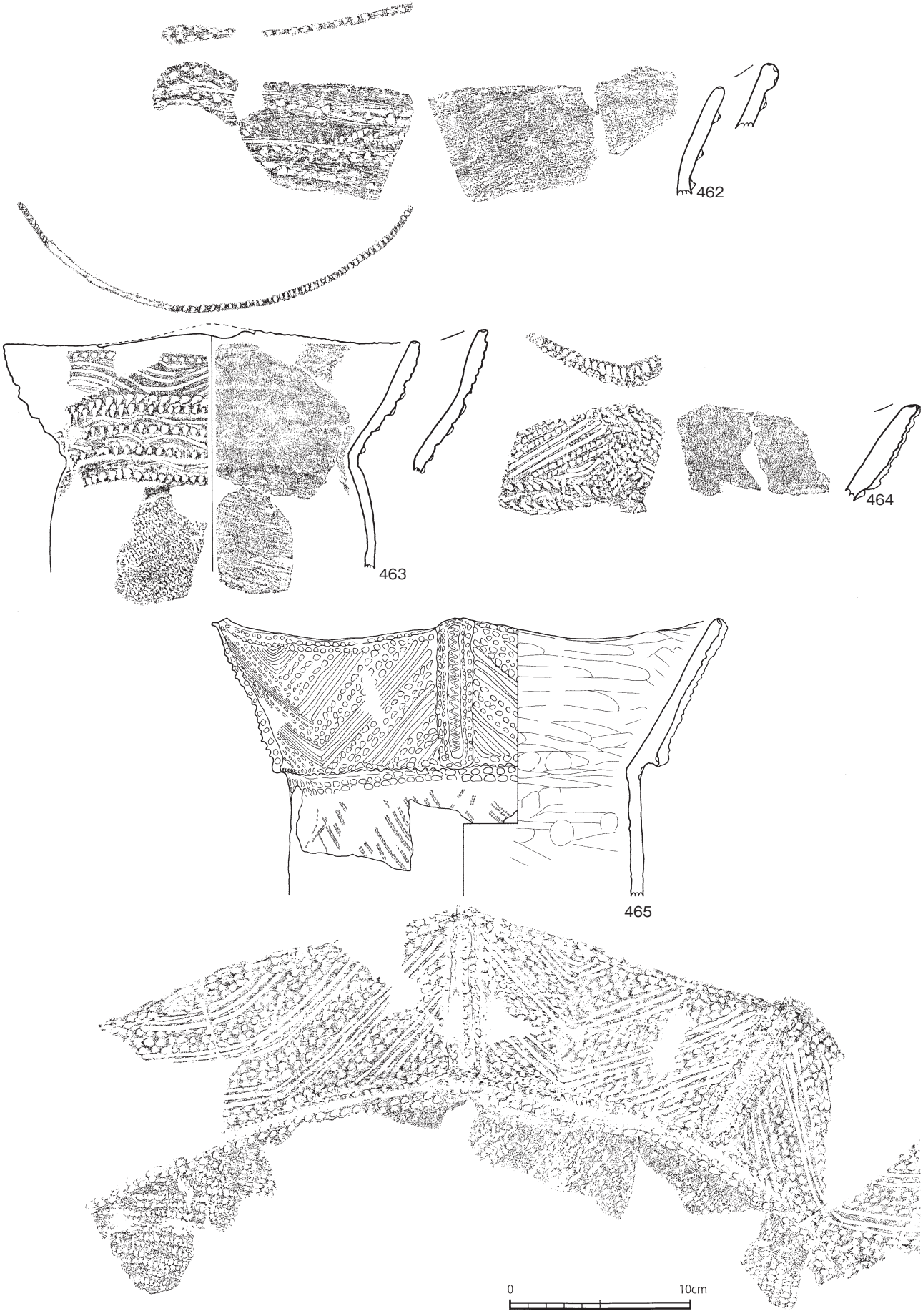
本類はⅠ～ⅩⅢ類に分類できなかった土器である。

511は器高17.5cm，口径15.6cm，底径10.0cmを測る。底部接地面で少し張り出す器形は，胴部から口縁部にかけて直線的に開き，口縁端部で若干内湾する。内面調整は底部内面まで丁寧なナデが施される。口縁部上端に縦位のキザミ，その下位から底部境まで棒状工具によるとみられる密な刺突文が斜位に施される。同一個体の土器片に円形の補修孔が残されていたことから，実測図の断面に示した。512～514は薄手の土器片である。512は開き気味の器形で，口唇部と口縁部上端付近に刺突文が施される。口唇部は強い刺突のために凹む。部分的に斜位

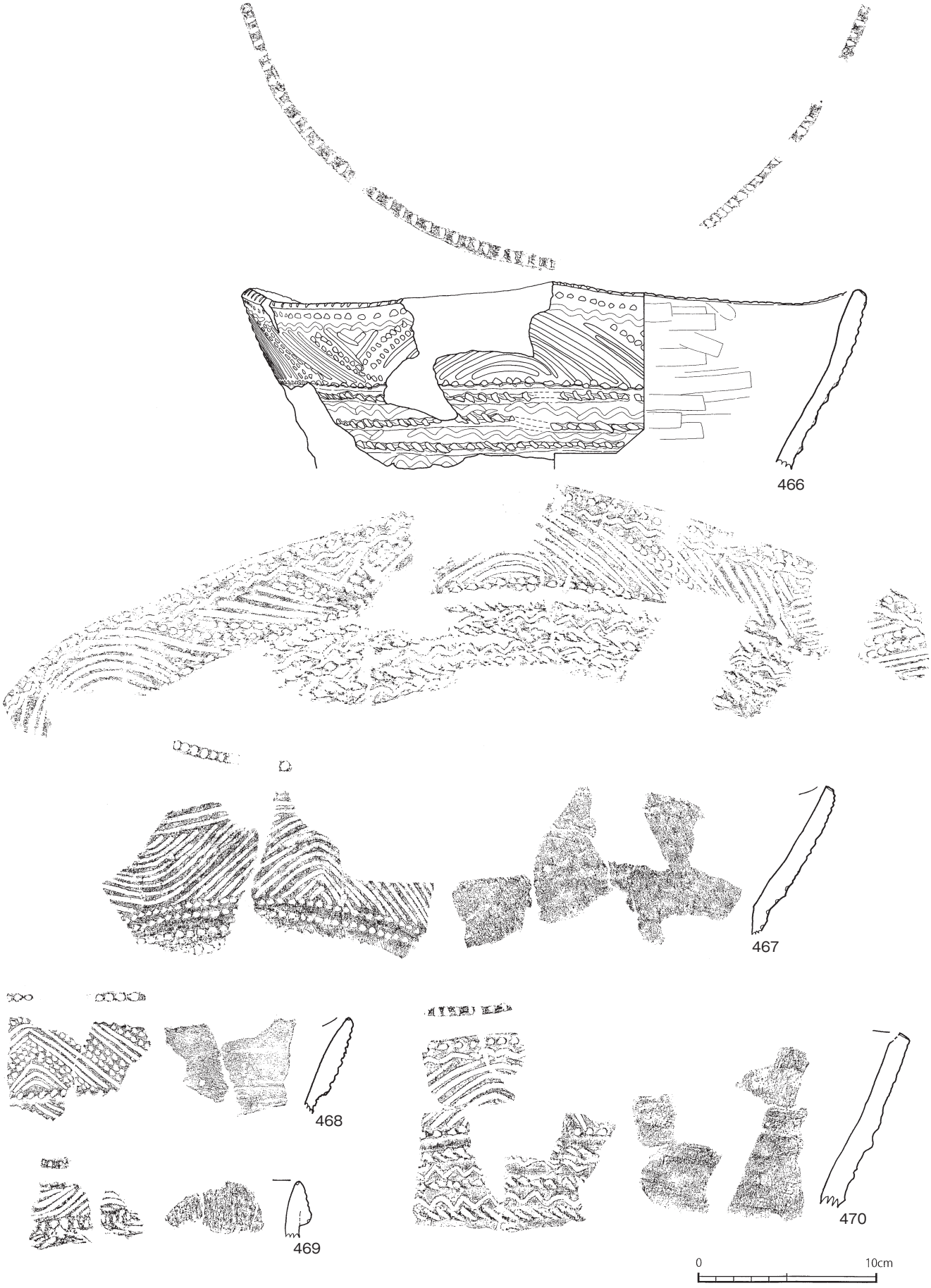


（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

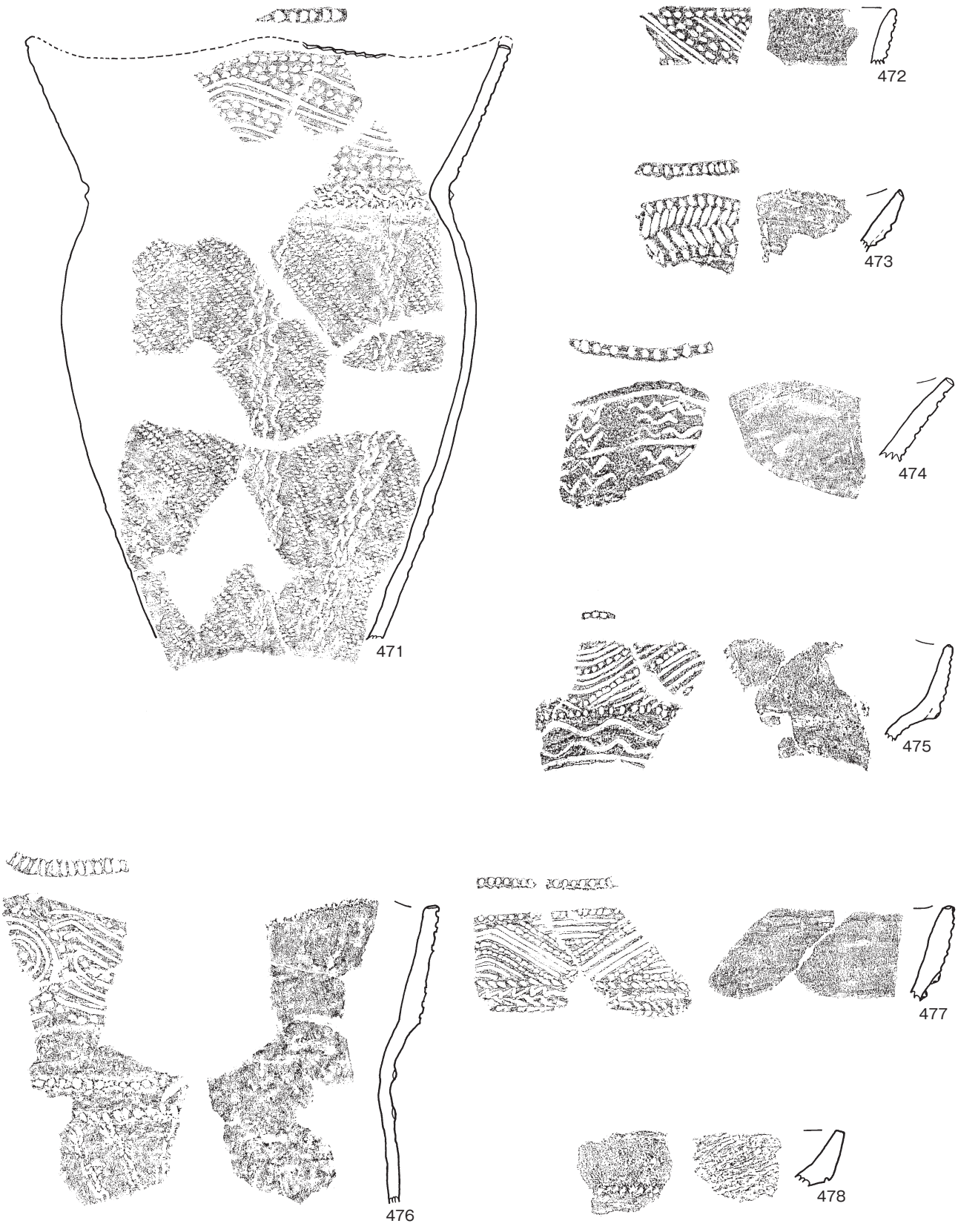
第98図　X類土器出土分布図



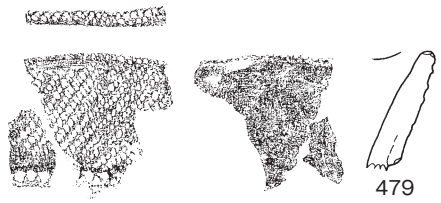
第 99 図　X類土器 1

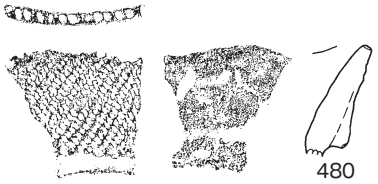


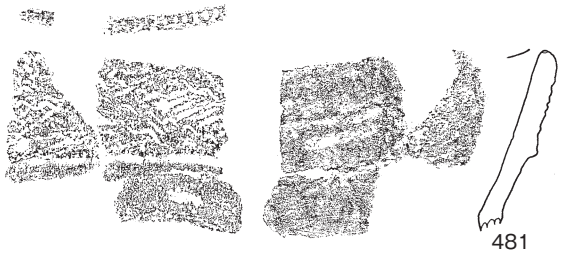
第 100 図　X類土器２

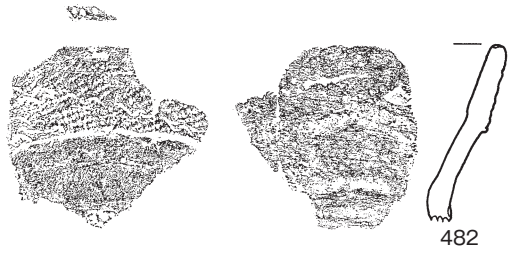


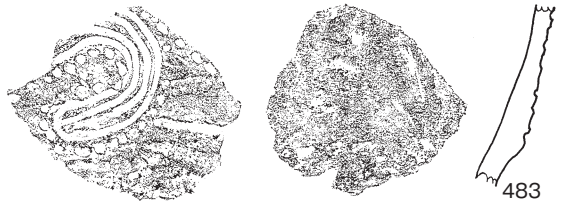
第 101 図　X類土器３





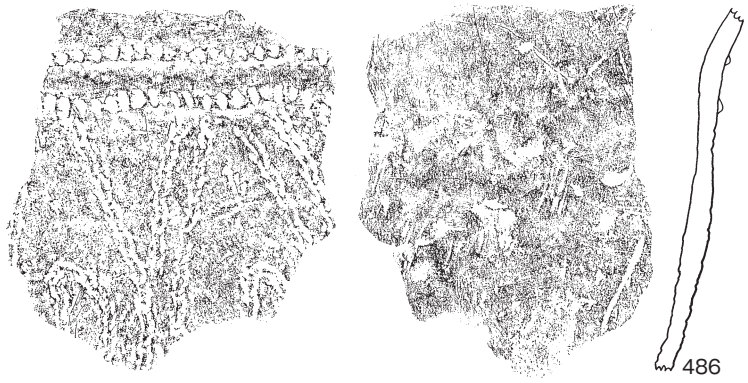


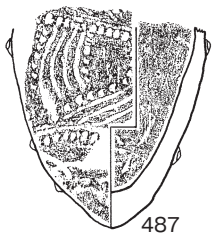


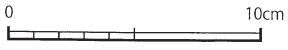




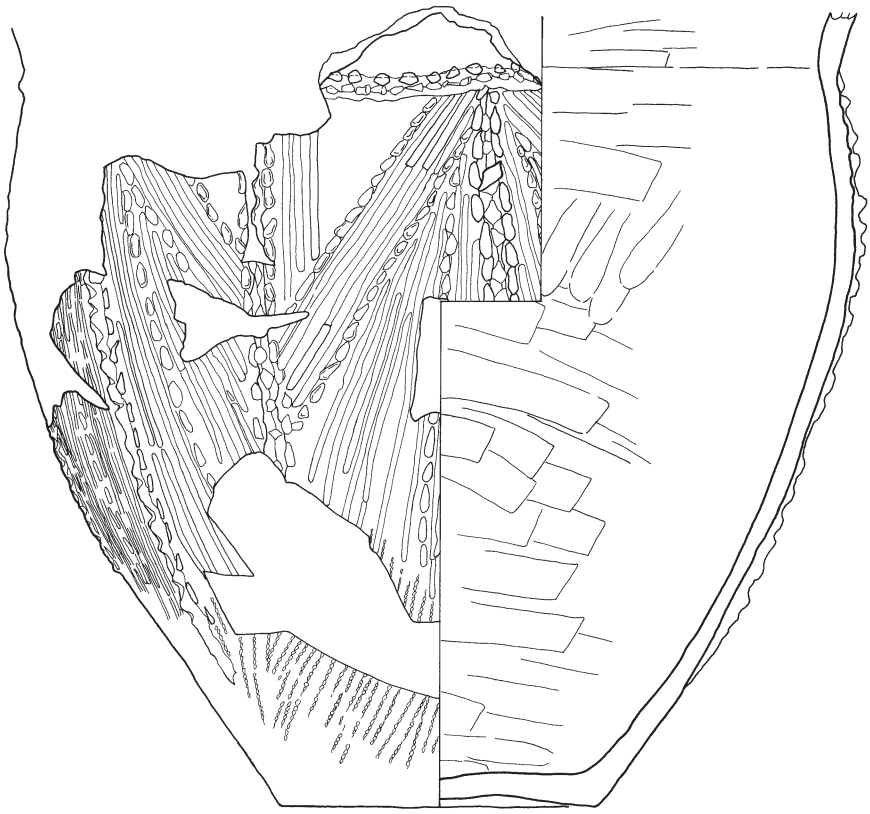








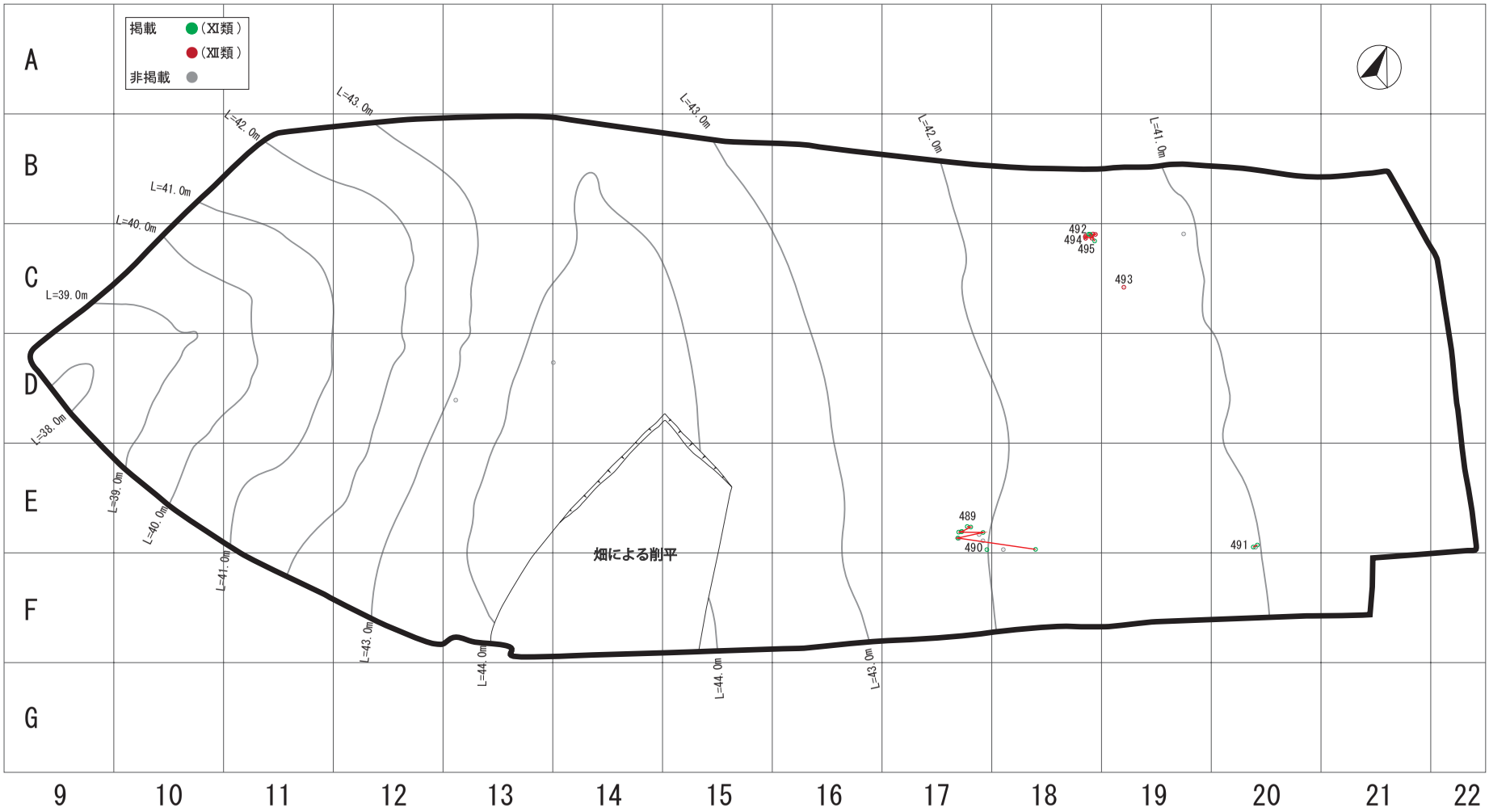
第 102 図　X類土器４



488

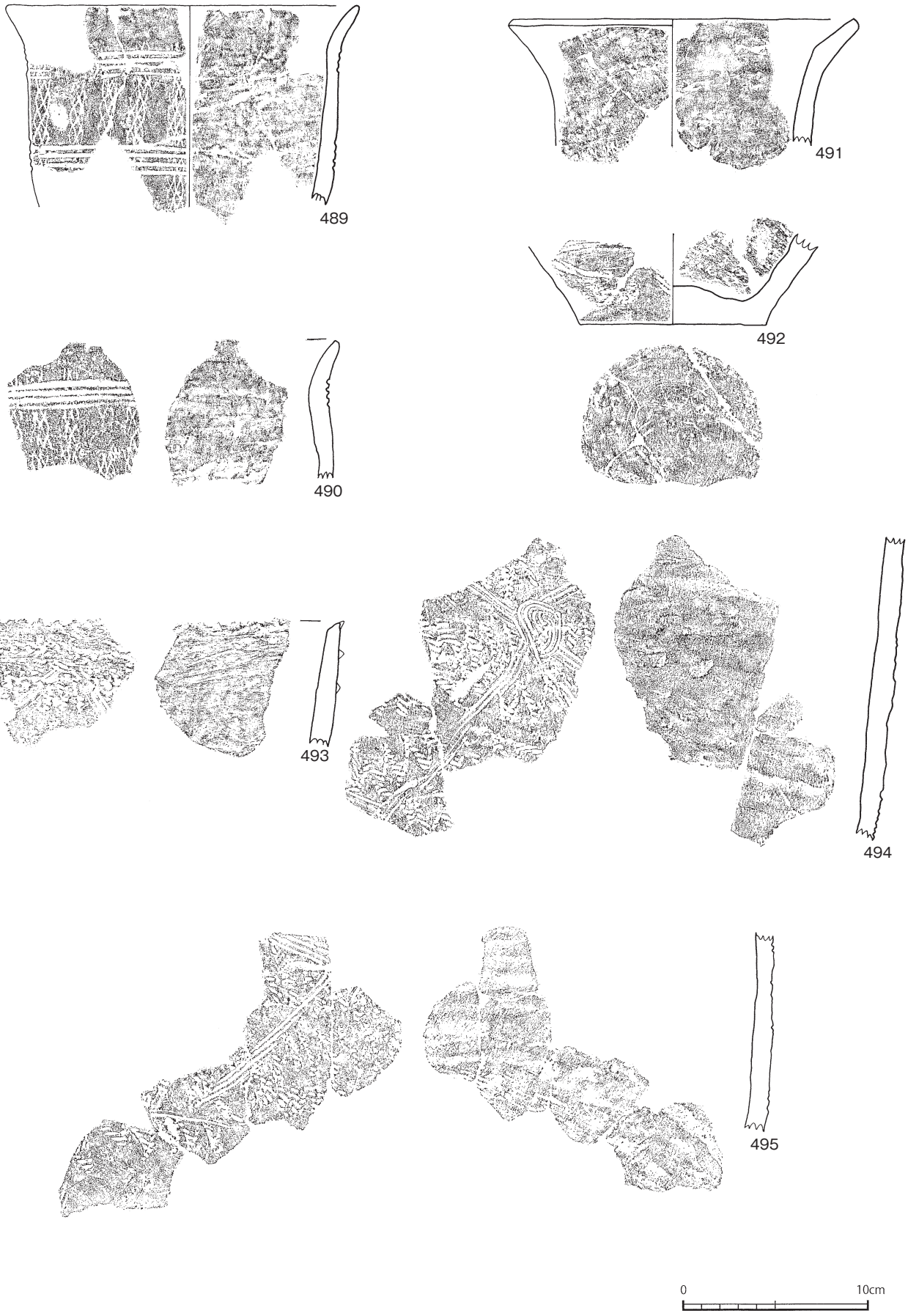


第 103 図　X類土器５

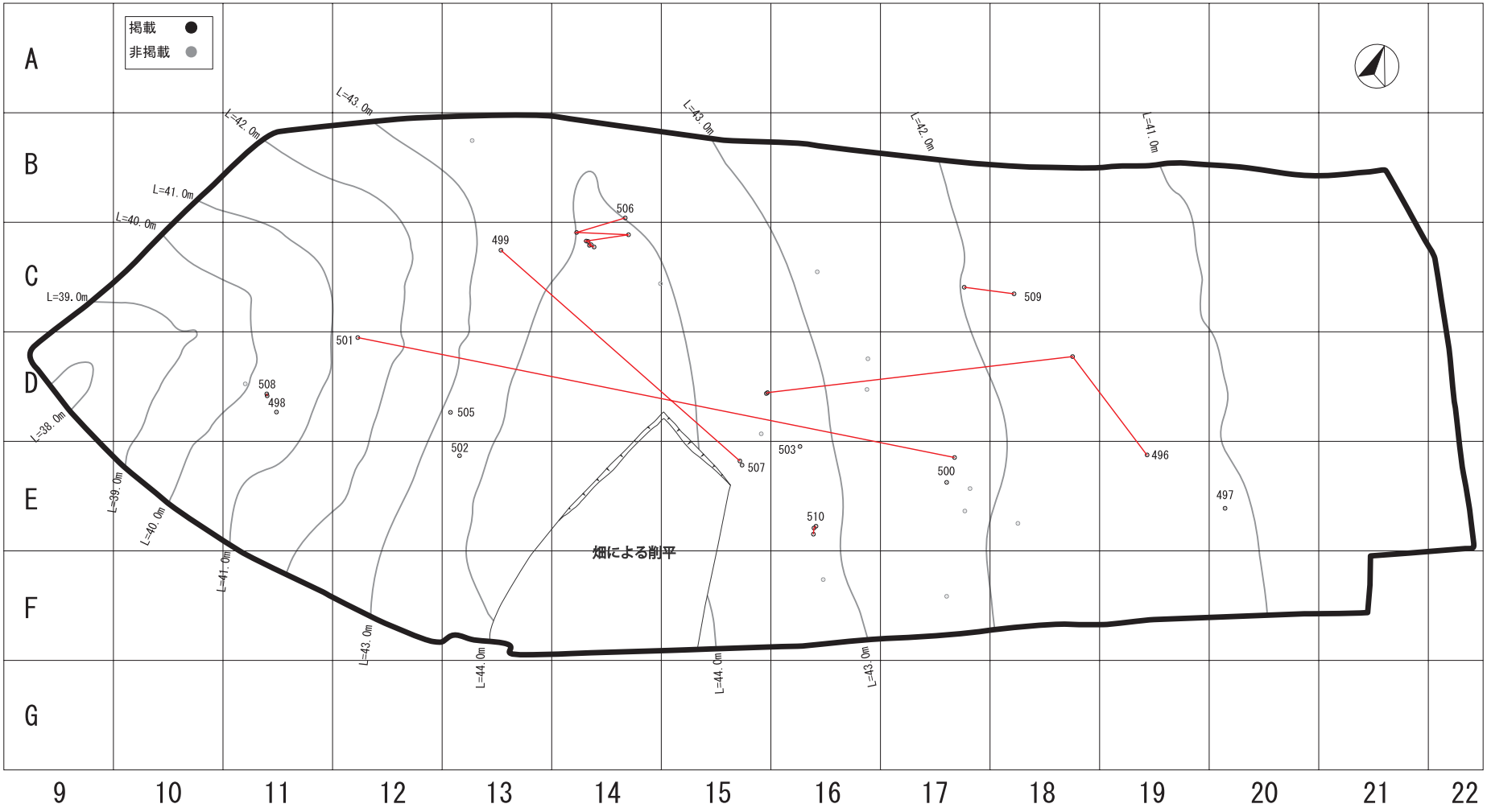


(1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面)

第 104 図　XI・XII類土器出土分布図

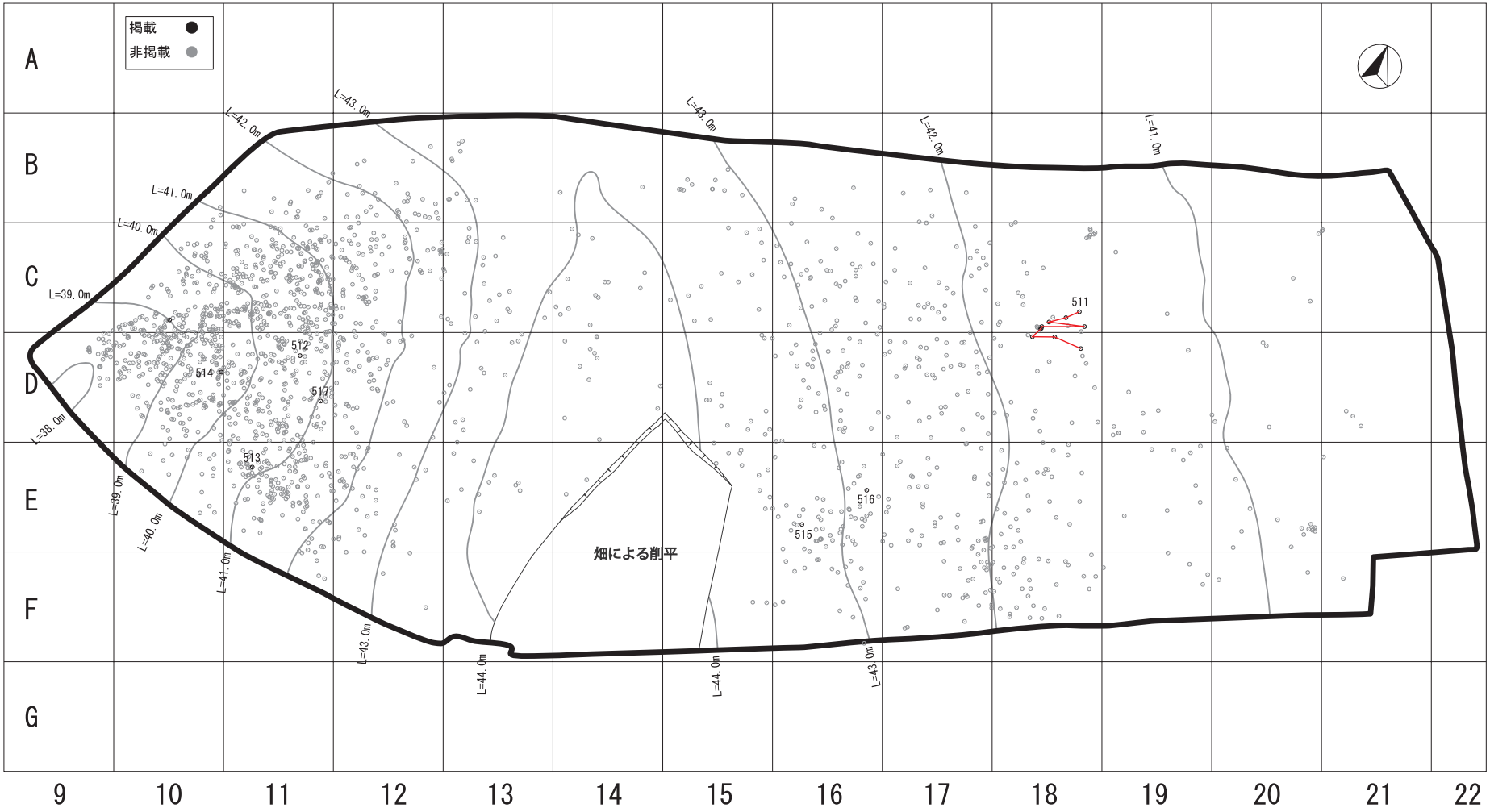


第 105 図　Ⅺ・Ⅻ類土器



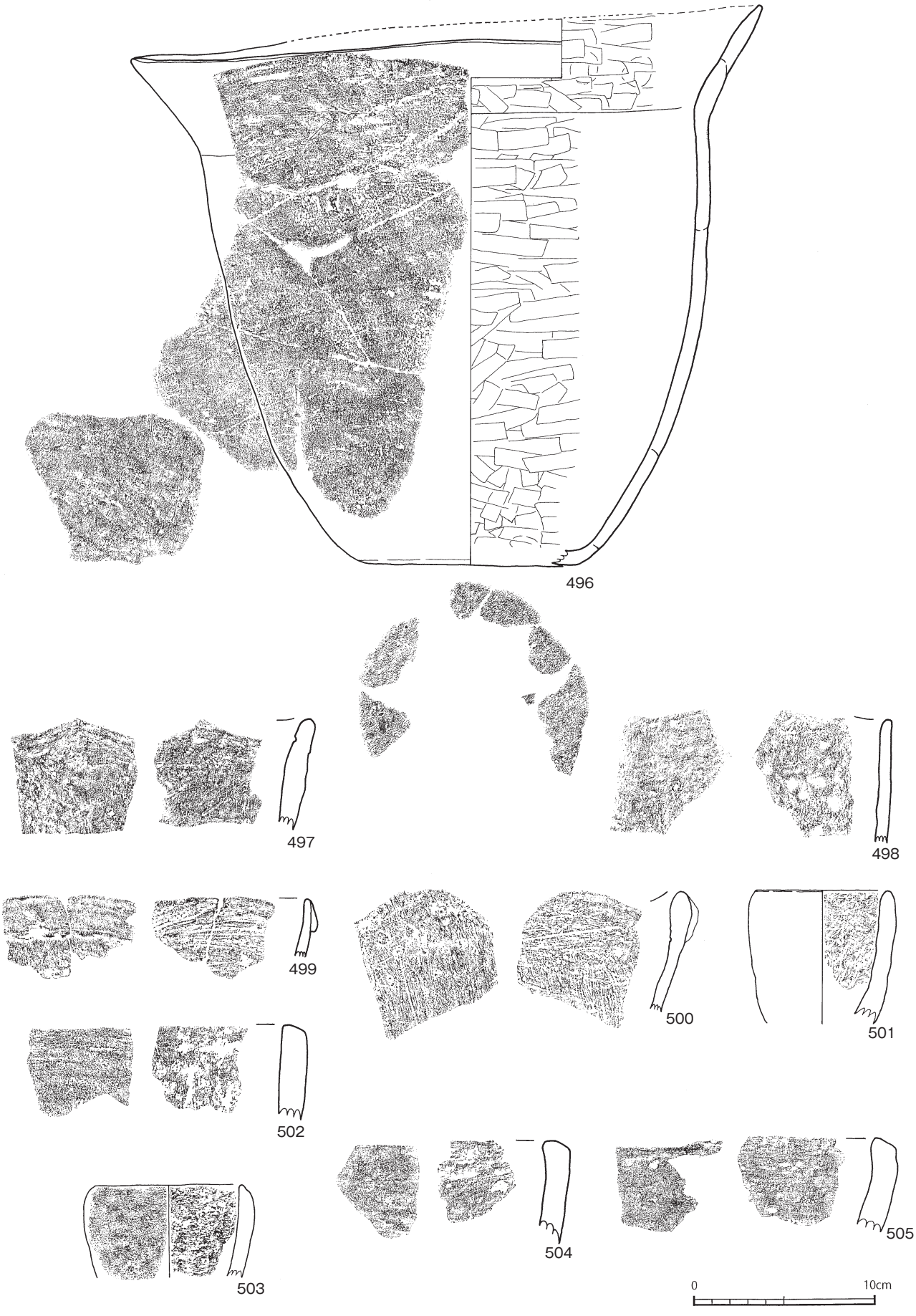
（1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第 106 図　Ⅻ類土器出土分布図

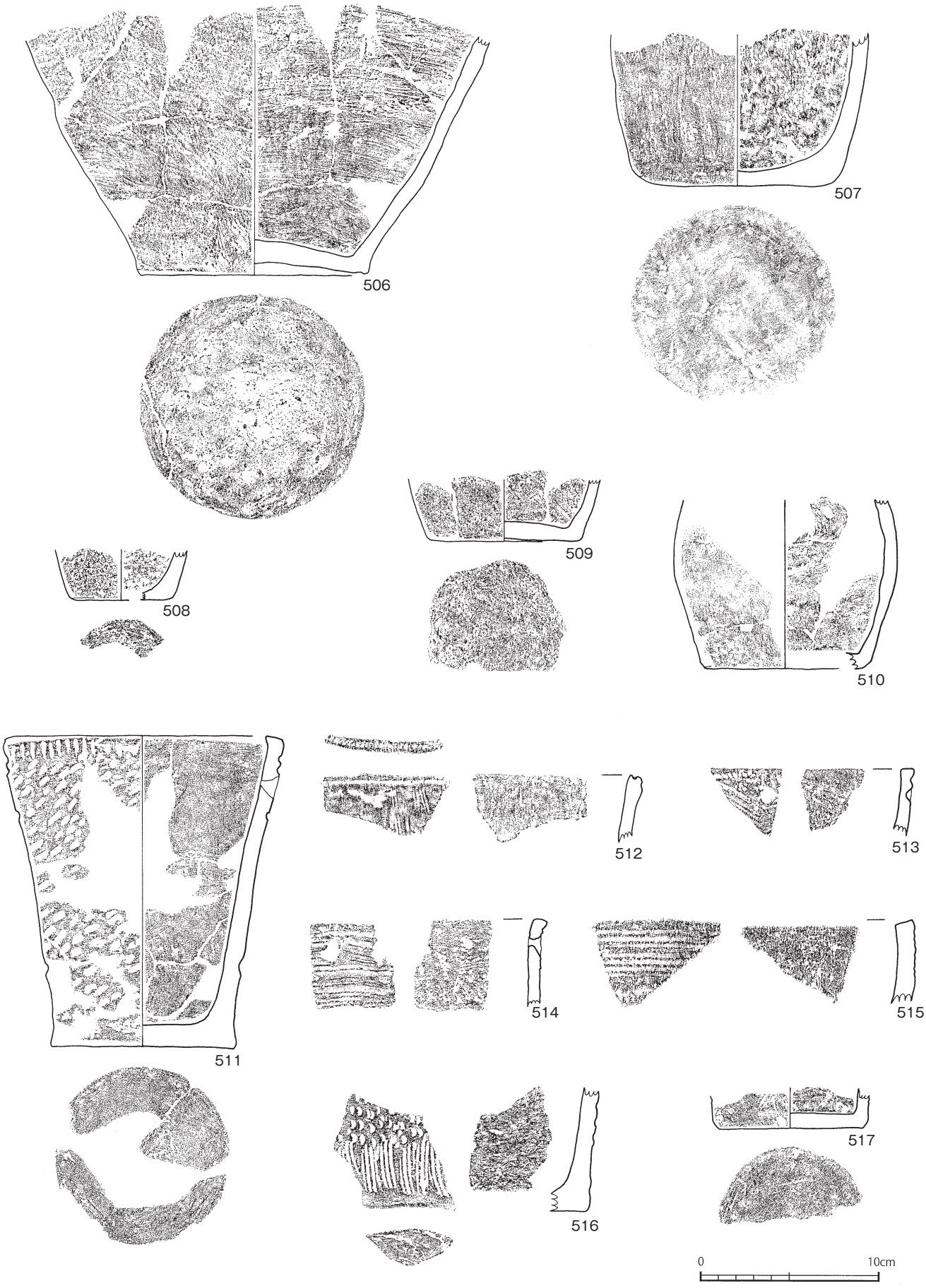


（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

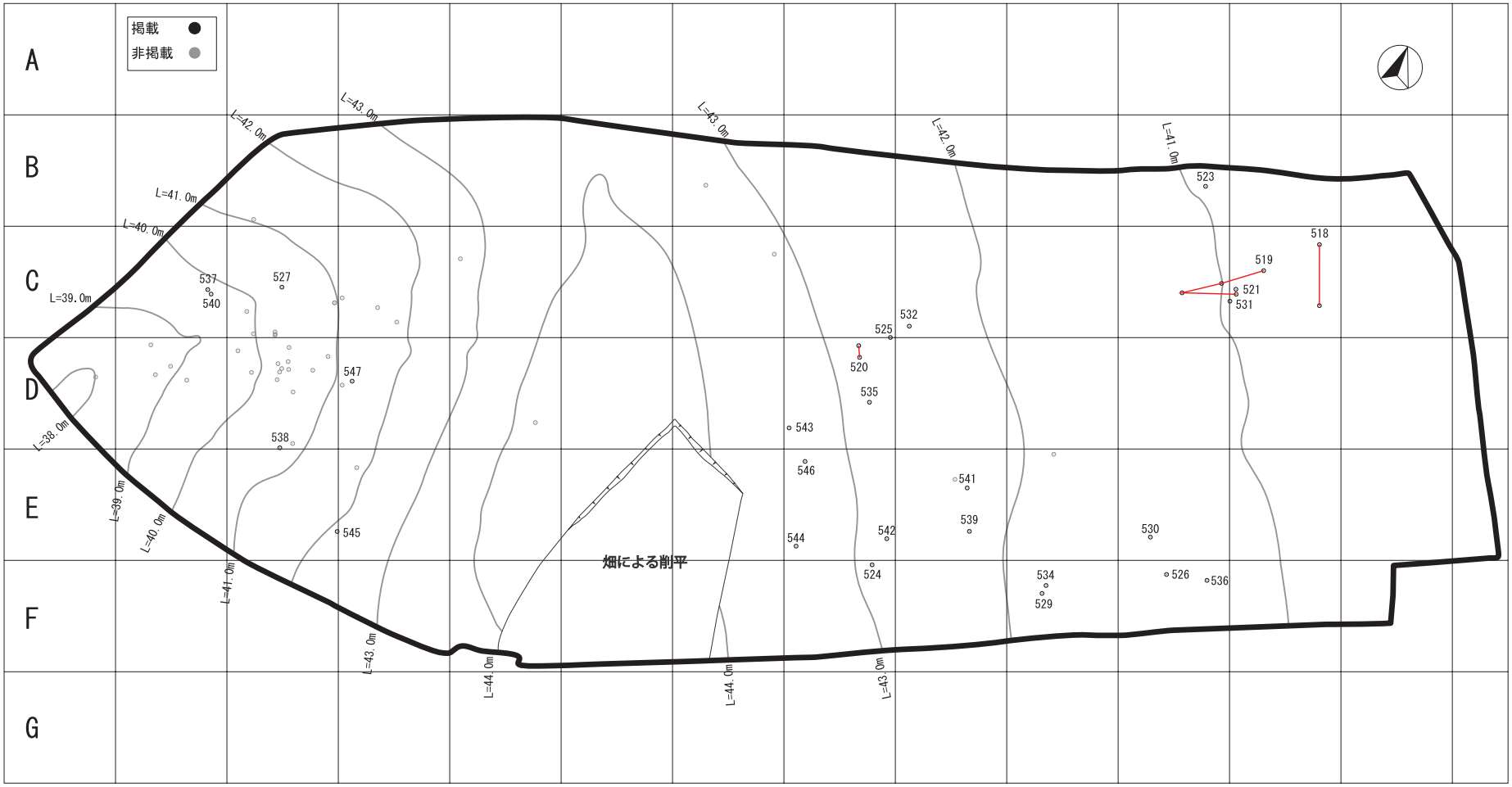
第107図　ⅩⅣ類土器出土分布図



第 108 図　Ⅷ類土器



第 109 図　Ⅻ・ⅩⅣ類土器

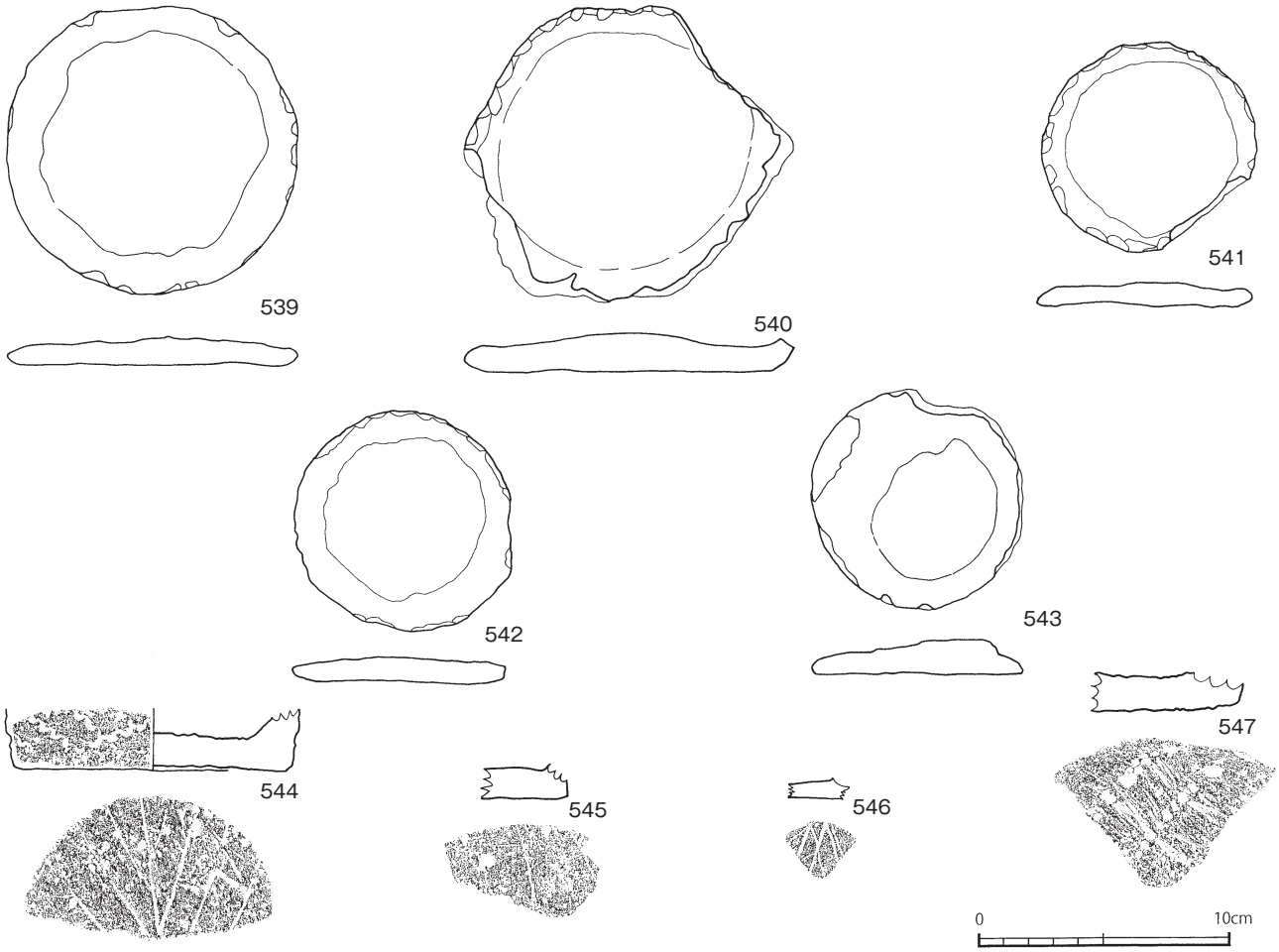


（1グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第110図　XV類土器出土分布図



第 111 図　XV類土器 1



第 112 図　XV類土器２

の条痕文が残る。513 は開き気味の口縁部の上端付近に刺突文を 1 条巡らす。斜位の条痕文が見られる器面には，補修孔が途中まで穿たれている。514 の直立する口縁部は端部で外反する。口縁上部に横位の刺突文を 1 条巡らせ，その下位には横位の条痕文が施される。口縁部に楕円形の補修孔が残るが，外面からの穿孔である。515 は幾分厚みのある器壁で，内湾する口縁部に口唇部平坦面が内傾する。外面が若干摩耗しているため明確ではないが，口縁部には横位の沈線が施される。516 は底部片で，外傾する器形を呈し，胴下部に長めの条痕文を縦位に，その上位には爪形風の文様を施す。517 は薄い器壁で，底部から直線的に立ちあがる器形である。胴下部に条痕文らしきものも残るが詳細は不明である。

（15）XV類土器（第 110～112 図）

本類は器形に特徴のある土器，土製品と思われるもの，木葉圧痕の残る底部について記述する。

1　器形に特徴のある土器（第 111 図　518～538）

518～534 は円筒形土器と比べ，不自然な屈曲部をもつ土器である。

518～521 は，口縁部片である。518 と 519 は同一個体と思われる。波状を呈す口縁部は外傾する。口縁部に沿って横位の刺突文，胴部には斜位の刺突文，そして口縁部文様帯と胴部文様帯の境には横に長い瘤状突起が貼付される。518 の口唇部は波頂部で 130 度程度屈曲し，519 の僅かに湾曲する口唇部は途中で 120 度程度に屈曲する。520・521 は波頂部で屈曲する。ただ，掲載はしていないが，波頂部外面に少量の粘土を貼り付け，部分的に角部を作るものもある。522～532 は胴部・底部片で，その屈曲の角度はほぼ 90 度から 150 度程度と様々である。ただし，上下や傾きについては不明なものもあった。522・524 の屈曲はほぼ直角に近く，530 の屈曲は 150 度程度開く。533 は条痕文が施された胴部片で，文様から桑ノ丸式土器との関連が考えられる。534 は口縁部に横位の刺突文とその下位に鋸歯状の条痕文で文様が構成される。直線的に伸びる口唇部は途中で湾曲する。口縁部の下位に横長の瘤状突帯が貼付される。

535～538 は口唇部の上面観が直線的になるものである。535 と 536 は直線的に立ちあがる口縁部は端部で多

少内湾し，横位の刺突文を施す。口縁部に横長の瘤状突起が貼付されるが，他の土器と比較して長く，突帯が巡る可能性もある。両者は器壁の厚さに違いはあるが，同一個体と思われる。538 の口唇部は直線的に延び，胴部も湾曲をもたない。

518～532・535～538 は下剥峯式土器，533 は桑ノ丸式，534 はⅧ類土器と思われる。

2　土製品（第 112 図　539～543）

底部を再利用した土製品の可能性も考えられることから掲載したが，詳細については不明である。本遺跡から５点出土したが，底部のみで端部は舌状に成形されている。型式等については不明である。

540 は成形途中で 539 が完成形と想定する。539 は底部と胴部を切り離し，周辺を部分的に打ち欠いて成形している。540 には底部と胴部を切り離すために使用した工具痕と思われるものが残る。切り離しが不十分で放棄した可能性も考えられる。

3　底部圧痕（第 112 図　544～547）

底面に圧痕の残るものが，４点出土した。544～546 が木葉圧痕で，547 が席目圧痕である。546 は推定 5.0cm程度の底径をもつ小型土器である。544 は底径 10.6cm程度で，胴下部に斜位の刺突文を施すことから下剥峯式土器と思われる。他の底部は型式不明である。

第８表　Ⅰ・Ⅱ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石	
59	118	深鉢	Ⅰ	岩本	C-10	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ	○		○				○		10453 他	補修孔･砂粒
	119	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅶ	口縁部	13.0			刺突・条痕	ナデ						○			9300 他	
	120	深鉢	Ⅱ	加栗山	B-11	Ⅶ	口縁部	10.0			キザミ・刺突	ナデ						○			8581 他	
	121	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-15	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突・条痕	ナデ						○	○		3987 他	
	122	深鉢	Ⅱ	加栗山	B-12	Ⅶ	口縁～胴部				キザミ・刺突・条痕	ケズリ						○			7888 他	
	123	深鉢	Ⅱ	加栗山	F-11	Ⅶ	口縁～胴部				刺突・条痕	ナデ						○			7288 他	補修孔
	124	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突・条痕	ナデ						○	○		7005 他	
	125	深鉢	Ⅱ	加栗山	F-15	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突・条痕	ナデ						○	○		110502 他	
60	126	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-15	Ⅶ	胴部				刺突・条痕	ナデ						○	○		7588 他	
	127	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-12	Ⅶ	胴部				刺突・条痕	ナデ						○	○		6136 他	
	128	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅶ	胴～底部				キザミ・刺突	ナデ			○			○			6022 他	
	129	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-13	Ⅶ	胴～底部		11.6		キザミ・条痕・刺突	ケズリ			○			○	○		5119 他	
	130	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅶ	胴～底部		12.0		キザミ・刺突・条痕	ナデ							○		9880 他	
	131	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-9	Ⅵ･Ⅶ	底部				キザミ・条痕・刺突	ナデ			○			○	○		トレンチ一括	
	132	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-11	Ⅵ	底部				キザミ・条痕・刺突	ナデ			○			○	○		8382	
	133	深鉢	Ⅱ	加栗山	B-12	Ⅶ	底部				キザミ・刺突・条痕	ナデ			○			○	○		7887	
	134	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-19	Ⅶ	底部				キザミ・刺突・条痕	ケズリ			○			○	○		12654	
	135	深鉢	Ⅱ	加栗山	E-15	Ⅶ	底部				キザミ・刺突・条痕	ナデ			○			○	○		埋設１土-２	
	136	深鉢	Ⅱ	加栗山	B-12	Ⅶ	底部				キザミ・刺突	ナデ						○	○		10986	
	137	深鉢	Ⅱ	加栗山	C･D-19	Ⅵ	底部				キザミ・刺突	ナデ			○			○	○		9209	
61	138	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-11	Ⅶ	胴～底部				刺突・条痕	ナデ			○			○	○		8265 他	
	139	深鉢	Ⅱ	加栗山	E-15	Ⅵ	底部				キザミ・刺突	ナデ			○			○	○		4067	
	140	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-10	Ⅵ	底部		9.5		キザミ・刺突	ナデ						○	○		10741 他	
	141	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-17	Ⅶ	底部				キザミ・刺突・条痕	ケズリ						○	○		3673 他	
	142	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-10	Ⅵ	底部		14.8		キザミ・刺突・条痕	ナデ				○		○	○		4906 他	
	143	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅵ	底部				キザミ・刺突・条痕	ナデ			○			○			14068	
	144	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅵ	胴～底部		8.0		キザミ・刺突・条痕	ケズリ				○		○	○		2277 他	
	145	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-15	Ⅶ	底部		10.0		キザミ	不明			○			○	○		2866	
	146	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅵ	底部		9.0		キザミ	ナデ			○			○	○		9911 他	
	147	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-11	Ⅶ	底部		12.2		キザミ	ナデ			○			○	○		7962 他	
	148	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-9	Ⅵ･Ⅶ	底部		13.6		キザミ	ナデ				○		○	○		トレンチ一括	
	149	深鉢	Ⅱ	加栗山	C-11	Ⅶ	口縁部				キザミ刺突・条痕	ケズリ						○	○		6009 他	角筒
	150	深鉢	Ⅱ	加栗山	D-11	Ⅵ	底部		8.8		キザミ	ナデ						○	○		9076	角筒

第９表　Ⅲ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石	
63	151	深鉢	Ⅲ	吉田	E-11	Ⅶ	口縁～胴部				キザミ・押引・刺突	ナデ			○	○		○	○		7307 他	
	152	深鉢	Ⅲ	吉田	B-11	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突・押引	ナデ						○	○		12897 他	
	153	深鉢	Ⅲ	吉田	D-12	Ⅶ	口縁～胴部				キザミ・刺突・押引	ナデ	○					○	○		6824 他	
	154	深鉢	Ⅲ	吉田	B-15	Ⅶ	口縁部	20.0			キザミ・刺突・押引	ナデ	○					○	○		13468 他	補修孔
	155	深鉢	Ⅲ	吉田	B-14	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突・押引	ナデ	○					○	○		13860	
	156	深鉢	Ⅲ	吉田	D-10	Ⅶ	口縁部				押引	ナデ	○				○		○		10391	
	157	深鉢	Ⅲ	吉田	C-10	Ⅵ	胴部				押引	ナデ	○	○		○	○		○		10440	砂粒

第 10 表　Ⅳ類土器観察表 1

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石	
65	158	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		6780	
	159	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		13917	
	160	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ・ケズリ						○	○		7021	
	161	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅶ	口縁～胴部				刺突・条痕	ナデ						○	○		11605 他	
	162	深鉢	Ⅳ	石坂	E-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		6562 他	
	163	深鉢	Ⅳ	石坂	E-11	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ		○		○		○			6561	
	164	深鉢	Ⅳ	石坂	D-12	Ⅶ	口縁～胴部				キザミ・刺突・条痕	ナデ	○			○		○	○		6244 他	
	165	深鉢	Ⅳ	石坂	B-12	Ⅶ	口縁～胴部				刺突・条痕	ナデ				○					11595	
	166	深鉢	Ⅳ	石坂	B-12	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突	ナデ				○		○	○		2594 他	
	167	深鉢	Ⅳ	石坂	D-9	Ⅵ·Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ			○	○		○	○		トレンチ一括	
	168	深鉢	Ⅳ	石坂	B-11	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ						○	○		13018	
	169	深鉢	Ⅳ	石坂	B-12	Ⅶ	口縁～胴部	13.8			キザミ・刺突・条痕	ナデ・ケズリ				○	○	○	○		11745 他	
66	170	深鉢	Ⅳ	石坂	B-11	Ⅶ	口縁～底部	24.0	13.0	29.3	キザミ・刺突・条痕	ナデ				○		○	○	○	11713 他	
	171	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	口縁～胴部				刺突・条痕	ナデ・ケズリ				○	○	○	○		5192	
	172	深鉢	Ⅳ	石坂	D-11	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突	ナデ			○	○		○	○		8795 他	
	173	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		14067	補修孔
	174	深鉢	Ⅳ	石坂	E-16	Ⅵ	口縁～胴部	18.0			刺突・条痕	ケズリ	○			○	○	○	○		6366 他	
	175	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	Ⅵ	口縁～胴部	12.4			条痕・刺突	ナデ				○		○			10744	
	176	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅶ	口縁～胴部				キザミ・刺突・条痕	ナデ				○		○	○		13792	
	177	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	口縁部				条痕・刺突	ケズリ	○		○	○	○	○			6258 他	
	178	深鉢	Ⅳ	石坂	F-17	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ケズリ	○		○		○	○	○		11913	
	179	深鉢	Ⅳ	石坂	D-9	Ⅵ·Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ				○		○	○		一括	砂粒
67	180	深鉢	Ⅳ	石坂	C-13	Ⅵ	口縁部				条痕・刺突	ナデ			○			○			1774 他	
	181	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ	○			○	○	○	○		12731	
	182	深鉢	Ⅳ	石坂	D-12	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ケズリ	○			○		○			9379	補修孔
	183	深鉢	Ⅳ	石坂	E-17	Ⅶ	口縁部				条痕・刺突	ナデ			○			○	○		4222	瘤状突起
	184	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	口縁～胴部	18.2			条痕・刺突	ケズリ				○	○	○	○		2712 他	瘤状突起
	185	深鉢	Ⅳ	石坂	B-11	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ						○	○		7295	補修孔
	186	深鉢	Ⅳ	石坂	D-12	Ⅵ	口縁部				条痕・刺突	ナデ				○	○	○	○		2734	
	187	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	口縁～胴部	15.6			刺突・格子目状沈線	ナデ			○			○	○		6931 他	
	188	深鉢	Ⅳ	石坂	B-11	Ⅵ	口縁～胴部				条痕	ケズリ	○		○			○	○		2187	
	189	深鉢	Ⅳ	石坂	E-12	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ				○	○	○	○		6572 他	
	190	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅵ	口縁部				条痕	ナデ				○	○	○			10432	砂粒
	191	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	口縁部				条痕	ケズリ				○	○	○	○		2690	瘤状突起
68	192	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅵ	口縁～胴部				刺突・条痕	ナデ									6035 他	
	193	深鉢	Ⅳ	石坂	D-11	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ			○	○		○			8957	
	194	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅶ	口縁～胴部				キザミ・刺突・条痕	ナデ			○			○	○		10660 他	
	195	深鉢	Ⅳ	石坂	C·D-10·11	Ⅵ·Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ						○	○	○	一括	
	196	深鉢	Ⅳ	石坂	E-12	Ⅶ	口縁部				キザミ・条痕・刺突	ナデ			○	○		○			11736	
	197	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅶ	口縁～胴部	12.4			条痕・刺突	ナデ						○			6033 他	
	198	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	Ⅶ	口縁部				条痕・刺突	ナデ					○	○			8308 他	砂粒
	199	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ			○			○			5909	

第 11 表　Ⅳ類土器観察表２

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
68	200	深鉢	Ⅳ	石坂系	C-12	Ⅶ	口縁～胴部				条痕・刺突	ナデ	○		○	○					1285 他	
	201	深鉢	Ⅳ	石坂系	C-12	Ⅵ	口縁部				キザミ・刺突・条痕	ナデ				○		○			1483 他	砂粒
	202	深鉢	Ⅳ	石坂系	F-18	Ⅶ	口縁部				条痕・刺突	ナデ	○				○	○	○		12360 他	
	203	深鉢	Ⅳ	石坂系	D-15	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ	○				○	○	○		3943 他	
	204	深鉢	Ⅳ	石坂系	F-17	Ⅶ	口縁部				条痕・刺突	ナデ	○			○		○			11362 他	砂粒
	205	深鉢	Ⅳ	石坂系	D-10	Ⅵ	口縁部				刺突・羽状文	ナデ			○			○			9164	
69	206	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅶ	底部				条痕	ナデ						○	○		トレンチ一括	
	207	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅶ	底部		9.8		条痕	ナデ			○			○	○		11732	
	208	深鉢	Ⅳ	石坂	C-10	Ⅶ	底部				条痕	ナデ	○		○			○			12722	
	209	深鉢	Ⅳ	石坂	D-11	Ⅵ	底部				条痕	ナデ						○	○		9071 他	
	210	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	底部		8.0		条痕	ナデ						○	○		5891 他	
	211	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	Ⅵ	底部				条痕	ナデ	○				○	○	○		6645	
	212	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	Ⅵ	底部				条痕	ナデ	○								8987 他	
	213	深鉢	Ⅳ	石坂	D-12	Ⅶ	底部				条痕	ナデ									633 他	
	214	深鉢	Ⅳ	石坂	D-11	Ⅶ	底部		7.5		条痕	ナデ	○			○		○			7370	
	215	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅵ	胴部				条痕	ナデ						○	○		6927 他	
	216	深鉢	Ⅳ	石坂	E-15	Ⅵ	胴部				条痕	ナデ	○			○	○	○			4451	補修孔
	217	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	底部		6.3		条痕	ケズリ						○	○		1051 他	
	218	深鉢	Ⅳ	石坂	D-17	Ⅶ	底部				条痕	ナデ			○			○			3780	
	219	深鉢	Ⅳ	石坂	E-11	Ⅶ	胴～底部		8.2		条痕	ナデ	○				○	○			6355	砂粒
	220	深鉢	Ⅳ	石坂	D-17	Ⅶ	底部		12.4		条痕	ナデ					○	○	○		3752 他	砂粒
	221	深鉢	Ⅳ	石坂	E-18	Ⅶ	底部				条痕	ナデ	○		○			○			5286	
	222	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	Ⅶ	底部				条痕	ナデ			○			○			10396	
70	223	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅶ	底部		10.6		条痕	ナデ			○			○	○		10634 他	
	224	深鉢	Ⅳ	石坂	E-12	Ⅶ	底部		14.5		条痕	ナデ			○	○		○	○		8043	
	225	深鉢	Ⅳ	石坂	D-10	Ⅶ	胴～底部		13.0		条痕	ナデ			○	○		○	○		7490 他	
	226	深鉢	Ⅳ	石坂	D-12	Ⅶ	底部				条痕	ナデ			○			○			5227	
	227	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅶ	底部				条痕	ナデ					○	○	○		9832 他	砂粒
	228	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	底部				条痕	ナデ			○			○	○		1119 他	
	229	深鉢	Ⅳ	石坂	E-11	Ⅶ	底部				条痕	ケズリ					○	○	○		7198	砂粒
	230	深鉢	Ⅳ	石坂	C-15	Ⅶ	底部				条痕	ナデ						○	○		10903 他	
	231	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅵ	胴～底部		8.4		条痕	ナデ			○	○		○	○		7024 他	
	232	深鉢	Ⅳ	石坂	C-12	Ⅶ	胴～底部		8.8		条痕・刺突	ナデ						○	○		5217	
	233	深鉢	Ⅳ	石坂	C-11	Ⅶ	底部		17.6		条痕	ケズリ						○	○		9852 他	砂粒
	234	深鉢	Ⅳ	石坂	B-11	Ⅶ	底部		8.0		条痕	ナデ			○			○	○		12887	
	235	深鉢	Ⅳ	石坂	E-11	Ⅶ	胴～底部		7.0		条痕・刺突	ナデ			○	○		○			8864	

第 12 表　Ⅴ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
72	236	深鉢	Ⅴ	中原	D-18	Ⅶ	口縁部				条線	ナデ・ミガキ				○		○			13129	
	237	深鉢	Ⅴ	中原	D-10	Ⅵ	口縁部				条線	ナデ・ミガキ			○	○		○			10363	
	238	深鉢	Ⅴ	中原	E-18	Ⅶ	口縁部				条線	ナデ・ミガキ			○			○			5277	
	239	深鉢	Ⅴ	中原	E-11	Ⅶ	口縁部				条線	ナデ・ミガキ			○			○			7320	
	240	深鉢	Ⅴ	中原	E-18	Ⅶ	口縁部				条線	ナデ・ミガキ	○			○		○	○		12381 他	
	241	深鉢	Ⅴ	中原	C-15	Ⅶ	口縁部				条線	ナデ・ミガキ			○			○	○		2860	

第 13 表　Ⅵ類土器観察表１

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
75	242	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	口縁部	22.4			刺突	ケズリ	○			○	○	○	○		11907 他	砂粒
	243	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	口縁部	21.2			刺突	ケズリ	○			○	○	○	○		12342 他	砂粒
	244	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅶ	口縁部	19.4			刺突	ナデ				○	○	○	○		9543 他	
	245	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		14299 他	
	246	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		7431 他	
	247	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-13	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		1186 他	
	248	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅵ	口縁～胴部				刺突	ケズリ	○		○	○		○			2435 他	

第 14 表　Ⅵ類土器観察表２

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
75	249	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ･ミガキ	○				○	○	○		10749 他	
	250	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		12713	砂粒
	251	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅵ	口縁部	20.2			刺突	ナデ						○	○		5511 他	
76	252	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁～胴部				刺突	ナデ	○				○	○			8809 他	砂粒
	253	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁～胴部				刺突	ナデ	○				○	○			6082 他	砂粒
	254	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		11864 他	
	255	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-19	Ⅶ	口縁部				刺突	ケズリ	○			○	○	○			11093	砂粒
	256	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-15	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		12450 他	砂粒
	257	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		9694	砂粒
	258	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-13	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		5430	砂粒
	259	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ			○	○		○	○		3161 他	砂粒
	260	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-17	Ⅶ	口縁部	16.0			刺突	ナデ	○			○	○	○	○		11411 他	砂粒
	261	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-9	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○			10360	砂粒・補修孔
	262	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○			10073	砂粒
	263	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		11792	補修孔
	264	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○	○		○	○		6911	
	265	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○			○	○		10804	
	266	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		5173	砂粒・補修孔
	267	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○		○	○		7324	
	268	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		8076 他	
	269	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-9	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		7517 他	砂粒
	270	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		12483	砂粒
	271	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	口縁部	9.0			刺突	ナデ	○					○	○		3821 他	
77	272	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁～胴部				刺突	ナデ	○			○	○		○		8715 他	縦長瘤状突起・砂粒
	273	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		7526	縦長瘤状突起・砂粒
	274	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		8270	縦長瘤状突起
	275	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		3774 他	横長瘤状突起・砂粒
	276	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-15	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○		○	○		13463	横長瘤状突起・砂粒
	277	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-12	Ⅷ	口縁部				刺突	ナデ	○		○			○			2587	横長瘤状突起
	278	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-13	Ⅶ	口縁～胴部	24.0			刺突	ナデ				○	○	○	○		1698 他	
	279	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		12505	
	280	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ					○	○	○		1246	砂粒
	281	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ミガキ					○	○	○		7897	砂粒
	282	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○			11725	砂粒
78	283	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		10843	縦長瘤状突起・砂粒
	284	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		9354	縦長瘤状突起・砂粒
	285	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○			8783	縦長瘤状突起・補修孔
	286	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ						○	○		11838	縦長瘤状突起
	287	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		12289 他	縦長瘤状突起
	288	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○			1314	縦長瘤状突起・砂粒
	289	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○			○	○		14561	縦長瘤状突起・砂粒
79	290	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		5198 他	
	291	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-13	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○		○				8899	
	292	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		13382	砂粒
	293	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		5239	砂粒
	294	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		13321 他	
	295	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○		○	○			3386	補修孔
	296	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○				○		7965 他	
	297	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○			8453	砂粒
	298	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-16	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ					○	○	○		11470	縦長瘤状突起(穿孔)
	299	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		9321 他	縦長瘤状突起(２列)
	300	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		13765 他	横長瘤状突起
	301	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		12304	横長瘤状突起・砂粒

第 15 表　Ⅵ類土器観察表３

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土							取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石	
79	302	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○			○		○			13151	
	303	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		13222	縦長瘤状突起
	304	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ						○	○		13252 他	縦長瘤状突起
80	305	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○			○	○		3913 他	
	306	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ		○				○	○		2330 他	
	307	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-19	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		12655	砂粒
	308	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ			○			○	○		11168 他	
	309	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	口縁～胴部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		11354 他	砂粒
	310	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		4571	砂粒・補修孔
	311	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ			○	○		○	○		10731	
	312	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		11243 他	砂粒
	313	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-13	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○		○		○	○	○		6211	砂粒
	314	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-15	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		2993	
	315	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		11130 他	
	316	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ						○	○		6054 他	
	317	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-18	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ						○	○		12169	砂粒
	318	深鉢	Ⅵ	下剥峯	－	－	口縁部				刺突	ナデ						○	○		トレンチ一括	
81	319	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		9147	縦長瘤状突起
	320	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○			9962	縦長瘤状突起
	321	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-16	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○					○	○		10817	縦長瘤状突起・砂粒
	322	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-18	Ⅶ	口縁部	27.0			刺突	ナデ			○			○	○		12637 他	横長瘤状突起
	323	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅵ	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		8942 他	砂粒
	324	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-14	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ	○				○	○	○		一括	砂粒・補修孔
	325	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-19	Ⅶ	口縁部				刺突	ケズリ	○			○	○	○			12082	縦長瘤状突起・砂粒
	326	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	口縁部				刺突	ナデ						○	○		5957 他	縦長瘤状突起
82	327	深鉢（円筒）	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		11265 他	砂粒
	328	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○			○		○	○		11637 他	
	329	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-18	Ⅶ	胴部				刺突	ケズリ	○			○		○	○		12638 他	
	330	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅵ	胴部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		9072 他	砂粒
	331	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		3250 他	砂粒
	332	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		13163 他	砂粒
83	333	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-16	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○				○	○	○		12436 他	砂粒
	334	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-10	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○					○	○		12776	砂粒
	335	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-19	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○				○	○	○		11613	
	336	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅵ	胴部				刺突	ナデ	○		○			○	○		5485	
	337	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		3355 他	砂粒
	338	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ						○	○		13142 他	
84	339	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-9	Ⅵ	胴部				刺突	ナデ	○		○		○	○			10674	縦長瘤状突起（穿孔）
	340	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-18	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ						○	○	○	11978	縦長瘤状突起（穿孔）
	341	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-17	Ⅶ	胴部				刺突	ナデ					○	○	○		12301 他	縦長瘤状突起・砂粒
85	342	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅵ	底部		16.0		刺突	ナデ				○	○	○	○		6656 他	砂粒
	343	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		13162 他	砂粒
	344	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-18	Ⅶ	底部		7.0		刺突	ナデ	○		○	○		○			12170	
	345	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-14	Ⅵ	底部		9.0		刺突	ナデ				○		○	○		13065	砂粒
	346	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅵ	底部				刺突	ナデ				○		○	○		5561	砂粒
	347	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅵ	胴～底部		15.0		刺突	ナデ	○			○	○	○	○		5717 他	
	348	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-21	Ⅶ	底部				刺突	ナデ			○	○		○	○		13970	
	349	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○				○	○	○		10034	
	350	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-12	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		1452	砂粒
	351	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-18	Ⅶ	底部				刺突	ナデ					○	○	○		13154 他	砂粒
	352	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅵ	底部		10.4		刺突	ナデ						○	○		8321	
	353	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅶ	底部		8.0		刺突	ナデ				○		○	○		11835 他	
	354	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		8326	砂粒
86	355	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-18	Ⅶ	底部		15.8		刺突	ナデ						○	○		13226 他	
	356	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅵ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		9066	砂粒

第 16 表　Ⅵ類土器観察表 4

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
86	357	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	底部		18.8		刺突	ナデ	○			○	○	○	○		8638 他	
	358	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-18	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○		○			○	○		10052 他	
	359	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-14	Ⅶ	底部		14.0		刺突	ナデ				○	○	○	○		10478 他	砂粒
	360	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○		○	○		10335 他	砂粒
	361	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-18	Ⅶ	底部				刺突	ナデ						○	○		4322 他	
	362	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-12	Ⅶ	底部				刺突	ナデ			○	○		○	○		418 他	
	363	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ			○			○	○		14254 他	
	364	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		3648	砂粒
	365	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-15	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○				○	○	○		13485 他	
87	366	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-19	Ⅶ	胴～底部		10.8		刺突	ナデ				○		○	○		12672 他	
	367	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-15	Ⅵ	底部		8.0		刺突	ナデ	○				○	○	○		13457	砂粒
	368	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-12	Ⅶ	底部		6.6		刺突	ナデ	○			○	○	○			501	砂粒
	369	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	底部		12.0		刺突	ナデ	○			○		○	○		10608 他	砂粒
	370	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-13	Ⅶ	底部				刺突	ナデ				○		○	○		6230	
	371	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	底部		9.7		刺突	ナデ				○		○	○		5984 他	
	372	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅵ	底部		11.4		刺突	ナデ	○			○	○	○	○		5824 他	
	373	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-11	Ⅶ	底部				刺突	ナデ			○			○	○		7399	
	374	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	胴～底部		10.4		刺突	ナデ						○	○		11529 他	
	375	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○					○	○		9314	砂粒
	376	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-15	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○					○	○		一括	砂粒
	377	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-11	Ⅵ	底部				刺突	ナデ			○			○	○		5874	
	378	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○				○	○	○		10135	砂粒
	379	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○					○	○		14253	砂粒
	380	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅵ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		9093	砂粒
88	381	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-17	Ⅶ	底部		22.4		刺突	ナデ	○			○		○	○		7700 他	砂粒
	382	深鉢	Ⅵ	下剥峯	E-17	Ⅶ	胴～底部		18.0		刺突	ナデ	○			○		○	○		12434 他	
	383	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-16	Ⅵ	底部		18.0		刺突	ナデ				○		○	○		3390	砂粒
	384	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-10	Ⅶ	底部		15.0		刺突	ナデ	○					○	○		9697 他	砂粒
	385	深鉢	Ⅵ	下剥峯	C-11	Ⅵ	底部		11.2		刺突	ナデ				○	○	○			13540	砂粒
	386	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-18	Ⅶ	胴～底部		14.0		刺突	ナデ	○			○		○	○		12622 他	砂粒
	387	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-17	Ⅶ	底部		14.0		刺突	ナデ				○	○	○	○		14294 他	砂粒
	388	深鉢	Ⅵ	下剥峯	B-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ						○	○		12560 他	
	389	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○		○	○		10605	砂粒
	390	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		3840 他	砂粒
	391	深鉢	Ⅵ	下剥峯	F-21	Ⅶ	胴～底部				刺突	ナデ			○	○		○	○		14115	砂粒
	392	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-16	Ⅶ	胴～底部				刺突	ナデ	○					○	○		12512 他	砂粒
	393	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-17	Ⅶ	底部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		11433	砂粒
	394	深鉢	Ⅵ	下剥峯	D-18	Ⅶ	底部				刺突	ナデ						○	○		12215 他	砂粒

第 17 表　Ⅶ類土器観察表 1

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
90	395	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-11	Ⅶ	口縁～胴部	12.0			条痕	条痕	○			○	○	○			8667 他	
	396	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	E-18	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ			○	○		○			集石 42 土-1	補修孔
	397	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-15	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ						○	○		5415	砂粒
	398	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	F-17	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ	○				○	○	○		10202	砂粒
	399	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-16	Ⅵ	口縁部				条痕	ケズリ			○			○	○		11132 他	
	400	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-14	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ			○	○		○			8537	
	401	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-16	Ⅵ	口縁部				条痕	ナデ	○		○		○	○			3221	砂粒
	402	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	F-17	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ				○		○	○		11917	
	403	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-12	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ			○			○	○		1454	縦長瘤状突起
	404	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-16	Ⅶ	口縁～胴部				条痕	ナデ	○			○		○	○		3273 他	縦長瘤状突起
	405	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-17	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ			○			○			7804 他	
	406	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-11	Ⅵ	口縁部				条痕	ナデ						○	○		8763 他	
	407	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-10	Ⅶ	口縁部				条痕	ナデ	○			○	○	○	○		8965	

第 18 表　Ⅶ類土器観察表２

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
90	408	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-9	Ⅵ	口縁部	18.2			条痕	ナデ	○				○	○	○		9592 他	砂粒
91	409	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	F-16	Ⅶ	口縁～底部				条痕	ケズリ					○	○	○		11900	砂粒
	410	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	E-16	Ⅶ	胴部				短沈線	ナデ	○			○	○	○			10862 他	
	411	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	E-18	Ⅶ	底部				短沈線	ナデ	○			○		○	○		9412 他	
	412	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-16	Ⅶ	胴部				短沈線	ナデ	○			○		○	○		3916	
	413	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-11	Ⅶ	底部				条痕	ケズリ	○					○	○		13876 他	砂粒
	414	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	B-11	Ⅵ	底部				条痕	ナデ	○			○	○	○	○		6045 他	砂粒
	415	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	E-11	Ⅵ	底部		8.0		条痕	ナデ				○	○		○		6276 他	砂粒
	416	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-11	Ⅶ	底部		12.6		条痕	ナデ	○					○	○		6973	砂粒
92	417	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	E-17	Ⅶ	底部				条痕	ナデ			○			○	○		10105 他	
	418	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-20	Ⅶ	底部				条痕	ナデ	○					○	○		13121 他	
	419	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	F-16	Ⅶ	底部		21.6		条痕	ナデ	○				○	○	○		10807 他	砂粒
	420	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-11	Ⅶ	底部				条痕	ナデ						○	○		8240	砂粒
	421	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-11	Ⅶ	底部				条痕	ナデ				○		○	○		8222	
	422	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-19	Ⅶ	底部				条痕	ナデ						○	○		11508 他	
	423	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-10	Ⅵ·Ⅶ	底部				条痕	ナデ						○	○		トレンチ一括	砂粒
	424	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	B-11	Ⅶ	底部		10.6		条痕	ナデ				○		○	○		13012	砂粒
	425	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	F-17	Ⅶ	底部		9.0		条痕	ナデ	○					○	○		4359 他	
	426	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-11	Ⅶ	底部				条痕	ナデ			○	○		○			8788	
	427	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	C-16	Ⅶ	底部				条痕	ナデ	○			○	○	○	○		7608	砂粒
	428	深鉢	Ⅶ	桑ノ丸	D-16	Ⅶ	胴部				条痕	ナデ	○			○	○	○	○		10575 他	

第 19 表　Ⅷ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
94	429	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ				○		○	○		11584	砂粒
	430	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	D-11	Ⅶ	口縁部				刺突・沈線	ナデ				○		○	○		6075	砂粒
	431	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	D-12	Ⅵ	口縁部				刺突・条痕	ナデ					○	○	○		2455 他	砂粒
	432	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	D-18	Ⅶ	口縁～胴部	14.4			刺突・条痕	ケズリ					○	○	○		7815 他	砂粒
	433	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-11	Ⅶ	口縁部				刺突・条痕	ナデ	○			○	○	○	○		9283	
	434	深鉢	Ⅷ	下剥峰＋桑ノ丸	D-9	Ⅵ	口縁部				刺突・条痕	ケズリ					○	○			9208	縦長瘤状突起
	435	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-14	Ⅵ	胴部				刺突・条痕	ナデ	○			○		○	○		7114 他	砂粒
	436	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	B-14	Ⅵ	口縁部				刺突・条痕	ナデ	○					○	○		13070	砂粒
	437	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	E-17	Ⅶ	口縁部				条痕・刺突	ケズリ				○		○	○		12260 他	
	438	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	E-17	Ⅵ	口縁部				条痕・刺突	ナデ	○			○		○	○		13274 他	縦長瘤状突起
	439	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	E-17	Ⅶ	胴～底部		17.6		条痕・刺突	ケズリ				○		○	○		11431 他	砂粒
	440	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-11	Ⅶ	胴部				条痕・刺突	ケズリ						○	○		9292 他	砂粒
	441	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-16	Ⅶ	胴部				刺突・条痕	ナデ				○		○	○		11785	砂粒
95	442	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-18	Ⅶ	口縁～胴部	16.0			刺突・沈線	ナデ			○			○	○		11295 他	縦長瘤状突起(穿孔)
	443	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	E-17	Ⅶ	胴部				刺突・沈線	ナデ				○		○	○		10100 他	
	444	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-10	Ⅶ	胴部				刺突・沈線	ナデ			○			○			10451	
	445	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	E-19	Ⅶ	胴部				沈線・条痕	ナデ			○			○	○		12084	
	446	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-16	Ⅶ	胴部				刺突・沈線	ナデ						○	○		11124	
	447	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	C-16	Ⅶ	胴部				刺突・沈線	ナデ						○	○		11125	
	448	深鉢	Ⅷ	下剥峯＋桑ノ丸	E-18	Ⅶ	底部				刺突・沈線	ナデ			○				○		12187 他	

第 20 表　Ⅸ類土器観察表１

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
97	449	深鉢	Ⅸ	押型文	E-16	Ⅶ	口縁部				楕円文	楕円文・ケズリ				○		○	○		9428	砂粒
	450	深鉢	Ⅸ	押型文	E-16	Ⅶ	口縁部				楕円文	楕円文・ケズリ	○				○	○	○		10859	
	451	深鉢	Ⅸ	押型文	E-16	Ⅶ	口縁部				楕円文	楕円文・ケズリ	○				○	○	○		13282 他	
	452	深鉢	Ⅸ	押型文	D-13	Ⅶ	口縁部				楕円文	ケズリ	○				○	○	○		1509	砂粒
	453	深鉢	Ⅸ	押型文	D-12	Ⅶ	底部				楕円文	ケズリ	○				○	○	○		7987	砂粒
	454	深鉢	Ⅸ	押型文	D-14	Ⅵ	底部				楕円文	ケズリ	○				○	○	○		8479	砂粒
	455	深鉢	Ⅸ	押型文	E-13	Ⅶ	口縁部				－	山形文・ケズリ	○				○	○	○		6176	

第 21 表　Ⅸ類土器観察表２

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
97	456	深鉢	Ⅸ	押型文	B-11	Ⅶ	口縁～胴部				山形文	ナデ	○		○		○	○			13805 他	
	457	深鉢	Ⅸ	押型文	B-12	Ⅶ	口縁～胴部				山形文	ナデ	○					○	○	○	13514 他	砂粒
	458	深鉢	Ⅸ	押型文	E-13	Ⅶ	胴～底部		10.0		山形文	ケズリ	○				○	○	○		6176 他	砂粒
	459	深鉢	Ⅸ	押型文	E-16	Ⅶ	底部				山形文	ナデ	○				○	○	○		14640	砂粒
	460	深鉢	Ⅸ	手向山式	C-12	Ⅶ	底部		7.6		（原体不明）	ナデ	○				○	○	○		1160	砂粒
	461	深鉢	Ⅸ	押型文	F-13	Ⅶ	底部		7.0		（原体不明）	ナデ	○				○	○	○		6206	

第 22 表　Ｘ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
99	462	深鉢	X	平椿	B-16	Ⅶ	口縁部				刻目突帯・単節縄文	ナデ	○				○	○	○		13816 他	
	463	深鉢	X	平椿	E-19	Ⅶ	口縁～胴部	23.0			刻目突帯・沈線	ナデ			○	○		○	○		土-21 他	
	464	深鉢	X	平椿	C-17	Ⅶ	口縁部				刻目突帯・沈線	ナデ	○					○	○		11188 他	
	465	深鉢	X	平椿	C-18	Ⅶ	口縁～胴部	27.0			刻目突帯・沈線	ナデ						○	○		7711 他	
100	466	深鉢	X	平椿	C-18	Ⅵ	口縁部	35.0			刻目突帯・沈線	ナデ	○		○	○	○	○	○		7727 他	
	467	深鉢	X	平椿	D-18	Ⅶ	口縁部				キザミ・刺突・沈線	ナデ					○	○	○		11289 他	
	468	深鉢	X	平椿	C-11	Ⅵ	口縁部				キザミ・刺突・沈線	ナデ					○	○			6037 他	
	469	深鉢	X	平椿	E-15	Ⅶ	口縁部				キザミ・沈線	ナデ						○	○		9385	
	470	深鉢	X	平椿	E-17	Ⅶ	口縁部				刻目突帯・沈線	ナデ	○			○	○	○	○		5342 他	
101	471	深鉢	X	平椿	D-14	Ⅵ	口縁～胴部	25.0		32.0	刻目突帯・結節縄文	ナデ					○	○	○		7147 他	
	472	深鉢	X	平椿	B-14	Ⅶ	口縁部				沈線・刺突	ナデ					○	○	○		13077	
	473	深鉢	X	平椿	E-17	Ⅶ	口縁部				キザミ・沈線	ナデ	○			○	○	○	○		7852	
	474	深鉢	X	平椿	D-17	Ⅶ	口縁部				キザミ・沈線	ナデ						○	○		9471	
	475	深鉢	X	平椿	C-13	Ⅵ	口縁部				刺突・沈線	ナデ					○	○	○		5145 他	砂粒
	476	深鉢	X	平椿	C-17	Ⅶ	口縁～胴部				刻目突帯・結節縄文	ナデ	○			○	○	○	○		3518 他	砂粒
	477	深鉢	X	平椿	E-18	Ⅶ	口縁部				刺突・沈線・刻目突帯	ナデ						○	○		12219 他	
	478	深鉢	X	平椿	B-18	Ⅶ	口縁部				刺突	条痕	○			○	○	○	○		13986	
102	479	深鉢	X	平椿	C-18	Ⅶ	口縁部				キザミ・縄文	ナデ					○	○	○		7712 他	
	480	深鉢	X	平椿	B-17	Ⅶ	口縁部				キザミ・縄文	ナデ					○	○	○		13678	
	481	深鉢	X	平椿	D-15	Ⅶ	口縁部				キザミ・縄文	ナデ						○	○		3065 他	
	482	深鉢	X	平椿	D-15	Ⅶ	口縁部				キザミ・縄文	ナデ						○	○		3063	
	483	深鉢	X	平椿	E-16	Ⅶ	胴部				沈線・刺突	ナデ	○			○	○	○	○		10879	
	484	深鉢	X	平椿	F-16	Ⅶ	胴部				刻目突帯・沈線・刺突	ナデ						○	○		10785	
	485	深鉢	X	平椿	C-17	Ⅶ	胴部				縄文	ケズリ	○				○	○	○		3578 他	砂粒
	486	深鉢	X	平椿	B-16	Ⅶ	胴部				刻目突帯・結節縄文	ナデ	○				○	○	○		14096	砂粒
	487	－	X	平椿	B-16	Ⅶ	底部				刻目突帯・沈線・刺突	ナデ					○	○	○		13997 他	小型土器
103	488	深鉢	X	平椿	C-13	Ⅵ	頚～底部		12.6		刻目突帯・単節縄文	ナデ	○			○	○	○			土集1-3他	砂粒

第 23 表　Ⅺ・Ⅻ類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
105	489	深鉢	Ⅺ	塞ノ神	E-17	Ⅶ	口縁～胴部	19.6			撚糸・沈線・ナデ	ナデ						○	○		5337 他	
	490	深鉢	Ⅺ	塞ノ神	E-17	Ⅶ	口縁部				撚糸・沈線・ナデ	ナデ						○	○		7862	
	491	深鉢	Ⅺ	塞ノ神	E-20	Ⅶ	口縁部	18.3			撚糸・ナデ	ナデ					○				11086 他	
	492	深鉢	Ⅺ	塞ノ神	C-18	Ⅵ	底部		10.0		条痕・ナデ	ナデ						○	○		12000 他	
	493	深鉢	Ⅻ	苦浜	C-19	Ⅵ	口縁部				突帯・条線・刺突	ナデ						○	○		11010	
	494	深鉢	Ⅻ	苦浜	C-18	Ⅵ	胴部				条線・刺突・ナデ	ナデ						○	○		12003 他	
	495	深鉢	Ⅻ	苦浜	C-18	Ⅵ	胴部				条線・刺突・ナデ	ナデ						○	○		12004 他	

第 24 表　ⅩⅢ類土器観察表１

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
108	496	深鉢	ⅩⅢ	－	E-19	Ⅶ	口縁～底部	29.7	10.5	31.0	ナデ	ナデ			○	○		○	○		土集2-1他	
	497	深鉢	ⅩⅢ	－	E-20	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ				○		○	○		11090	
	498	深鉢	ⅩⅢ	－	D-11	Ⅶ	口縁部				ナデ	ナデ			○	○		○	○		7361	
	499	深鉢	ⅩⅢ	－	C-13	Ⅶ	口縁部				ナデ	ケズリ						○	○		10920 他	砂粒
	500	深鉢	ⅩⅢ	－	E-17	Ⅶ	口縁部				ナデ	ケズリ			○	○		○	○		10109	瘤状突起

第 25 表　XIII類土器観察表２

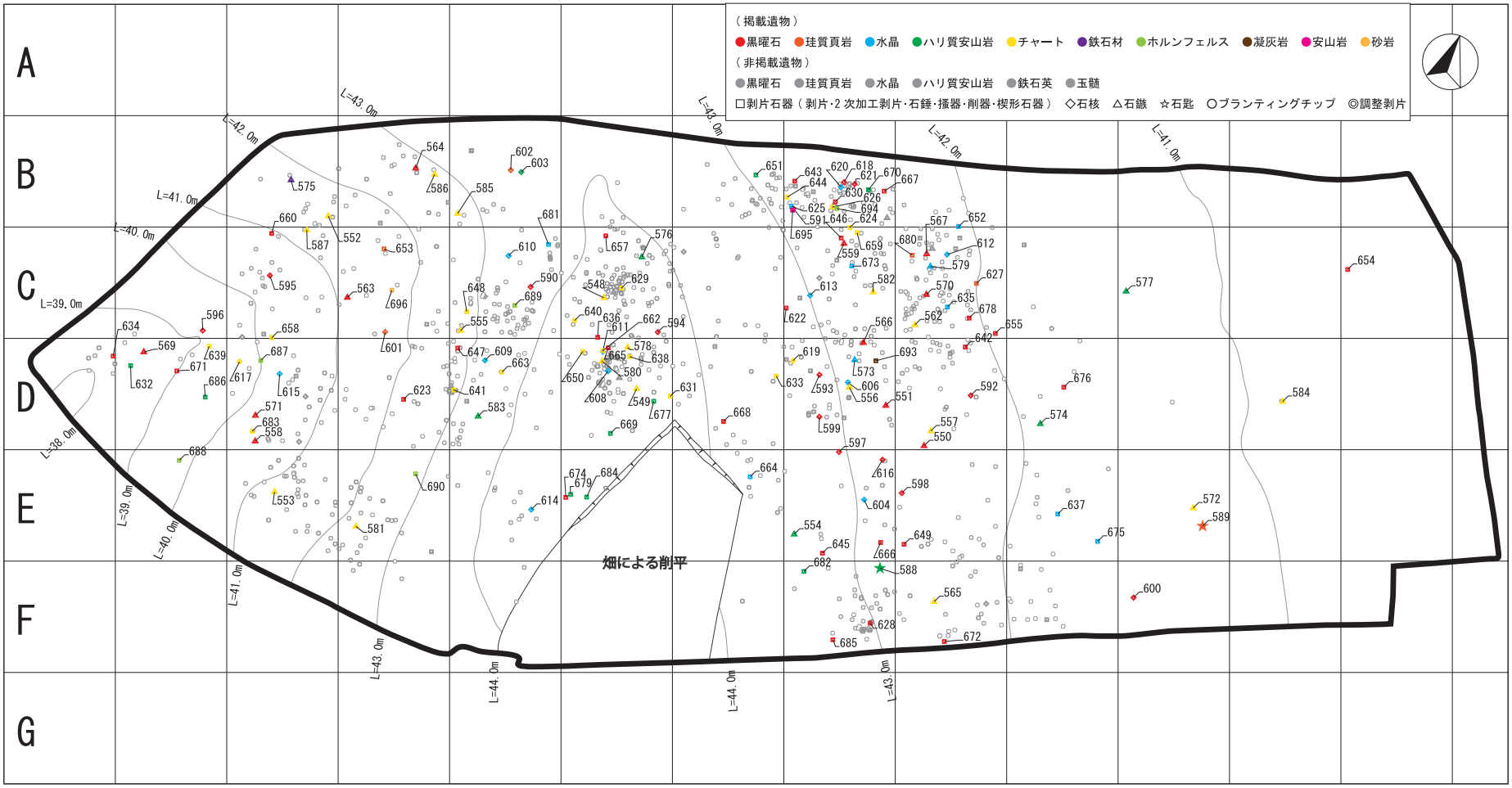
挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
108	501	深鉢	XIII	－	D-12	VII	口縁～胴部	7.2			ナデ	ナデ						○	○		6132 他	
	502	深鉢	XIII	－	D･E-13	VII	口縁部				ナデ	ナデ	○			○	○	○	○		集石 34 土-4	砂粒
	503	深鉢	XIII	－	E-16	VII	口縁部	8.0			ナデ	ナデ	○			○	○	○	○		12445	
	504	深鉢	XIII	－	D-13	VII	口縁部				ナデ	ミガキ				○	○	○	○		一括	
	505	深鉢	XIII	－	D-13	VII	口縁部				ナデ	ミガキ				○	○	○	○		1519	
109	506	深鉢	XIII	－	C-13	VI	胴～底部		12.6		ナデ	ナデ	○			○	○	○	○		土集 3－1 他	
	507	深鉢	XIII	－	E-15	VII	胴～底部		11.0		ナデ	ナデ	○			○	○	○	○		埋設 1 -9392	砂粒
	508	深鉢	XIII	－	D-11	VI	底部		5.8		ナデ	ナデ	○			○		○	○		5656 他	砂粒
	509	深鉢	XIII	－	C-18	VII	底部		8.6		ナデ	ナデ					○	○	○		3631 他	
	510	深鉢	XIII	－	E-16	VII	胴～底部		9.0		ナデ	ナデ					○	○			9402 他	

第 26 表　XIV類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
109	511	深鉢	XIV	－	C-18	VII	口縁～底部	15.6	10.0	17.5	キザミ・短沈線	ナデ			○			○	○		11665 他	補修孔
	512	深鉢	XIV	－	D-11	VII	口縁部				刺突・条痕	ナデ			○			○	○		7963	
	513	深鉢	XIV	－	E-11	VI	口縁部				刺突・条痕	ナデ			○			○			5576	補修孔
	514	深鉢	XIV	－	D-10	VII	口縁部				刺突・条痕	ナデ						○	○		7493	補修孔
	515	深鉢	XIV	－	E-16	VII	口縁部				沈線	ナデ	○		○			○			10883	
	516	深鉢	XIV	－	E-16	VII	底部				刺突・条痕	ナデ						○	○		10860	
	517	深鉢	XIV	－	D-11	VII	底部		8.0		条痕	ナデ					○	○	○		6086	砂粒

第 27 表　XV類土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	類	型式	出土区	層位	部位	法量（cm）			主文様・調整		胎土								取上番号	備考
								口径	底径	器高	外面	内面	白色粒	黒色粒	角閃石	雲母	金雲母	石英	長石	輝石		
111	518	－	XV	下剥峯	C-20	VII	口縁部				刺突	ナデ	○			○	○	○	○		13974 他	横長瘤状突起
	519	－	XV	下剥峯	C-20	VII	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		13629 他	横長瘤状突起
	520	－	XV	下剥峯	D-16	VII	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		7754 他	砂粒
	521	－	XV	下剥峯	C-20	VII	口縁部				刺突	ナデ	○			○		○	○		11076	
	522	－	XV	下剥峯	D-20	VII	胴部				刺突	ナデ	○					○	○		一括	
	523	－	XV	下剥峯	B-19	VII	胴部				刺突	ナデ				○		○	○		14206	
	524	－	XV	下剥峯	F-16	VII	胴部				刺突	ナデ			○			○	○		10822	
	525	－	XV	下剥峯	C-16	VI	胴部				刺突	ナデ	○			○		○	○		13304	
	526	－	XV	下剥峯	F-19	VII	胴部				刺突	ナデ						○	○		11098	
	527	－	XV	下剥峯	C-11	VII	胴部				刺突	ナデ	○			○		○	○		12987	
	528	－	XV	下剥峯	D-17	VII	胴部				刺突	ナデ	○				○	○	○		一括	
	529	－	XV	下剥峯	F-18	VII	胴部				刺突	ナデ	○								12175	
	530	－	XV	下剥峯	E-19	VII	胴部				刺突	ナデ				○		○	○		12091	
	531	－	XV	下剥峯	C-20	VII	底部				刺突	ナデ					○	○	○		12678	
	532	－	XV	下剥峯	C-17	VII	底部				刺突	ナデ	○			○		○	○		10006	
	533	－	XV	桑ノ丸	－	－	胴部				条痕	ナデ						○	○		トレンチ一括	
	534	－	XV	－	F-18	VII	口縁部				刺突・条痕	ナデ	○					○	○		13251	横長瘤状突起
	535	－	XV	下剥峯	D-16	VII	口縁部				刺突	ナデ	○		○			○	○		3814 他	横長瘤状突起
	536	－	XV	下剥峯	F-19	VII	口縁部				刺突	ナデ				○		○	○		12053 他	横長瘤状突起
	537	－	XV	下剥峯	C-10	VI	口縁部				刺突	ナデ				○	○	○	○		13587	
	538	－	XV	下剥峯	D-11	VII	口縁部				刺突	ナデ						○	○		9805	
112	539	－	XV	－	E-17	VII	底部		12.0		ナデ	ナデ	○				○	○	○		10137	土製品
	540	－	XV	－	C-10	VI	底部		12.0		ナデ	ナデ	○			○		○	○		12917	土製品
	541	－	XV	－	E-17	VII	底部		8.6		ナデ	ナデ			○						4195	土製品
	542	－	XV	－	E-16	VII	底部		9.0		ナデ	ナデ					○	○	○		9423	土製品
	543	－	XV	－	D-16	VI	底部		8.6		ナデ	ナデ	○					○	○		11513	土製品
	544	深鉢	XV	下剥峯	E-16	VII	底部		10.6		木葉圧痕	ナデ					○				10889	
	545	深鉢	XV	－	E-11	VII	底部				木葉圧痕	ナデ	○			○	○	○	○		4462	
	546	深鉢	XV	－	E-16	VI	底部				木葉圧痕	ナデ	○					○	○		4075	
	547	深鉢	XV	－	D-12	VII	底部				蕗目圧痕	ナデ					○	○	○		9380	



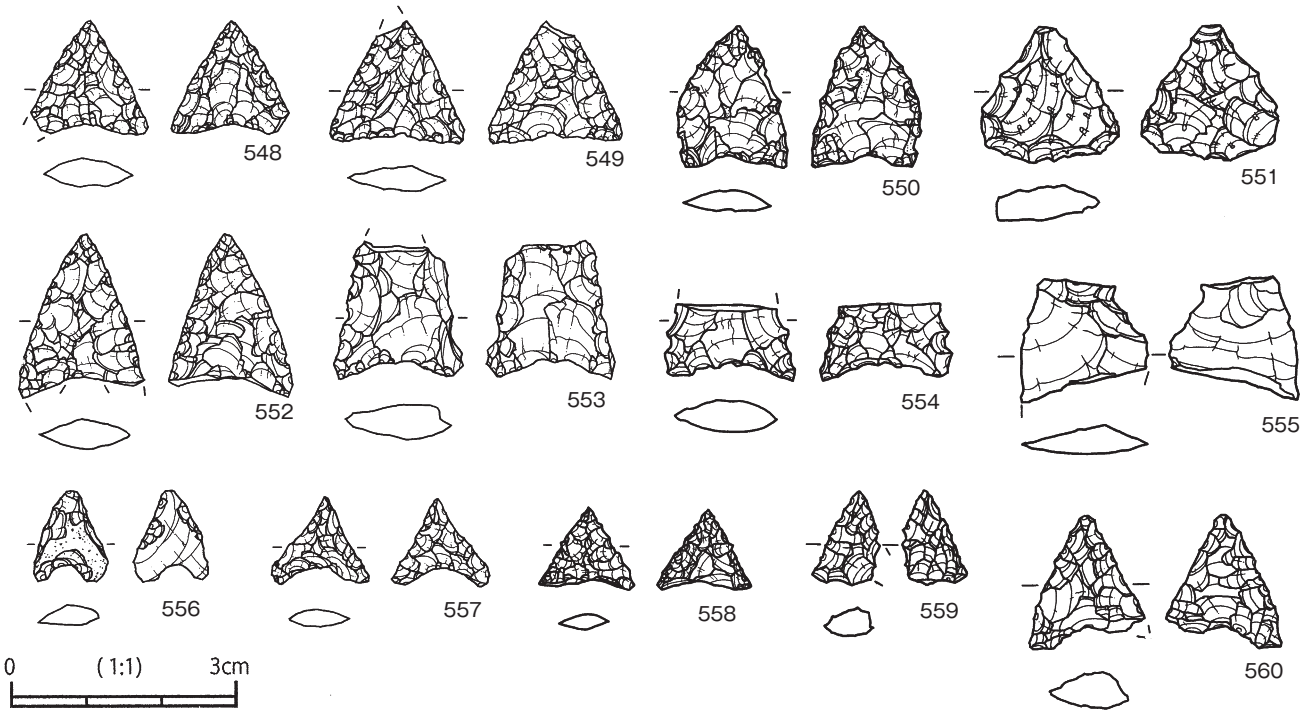
第113図　縄文時代早期の剥片石器出土分布図

2　石器

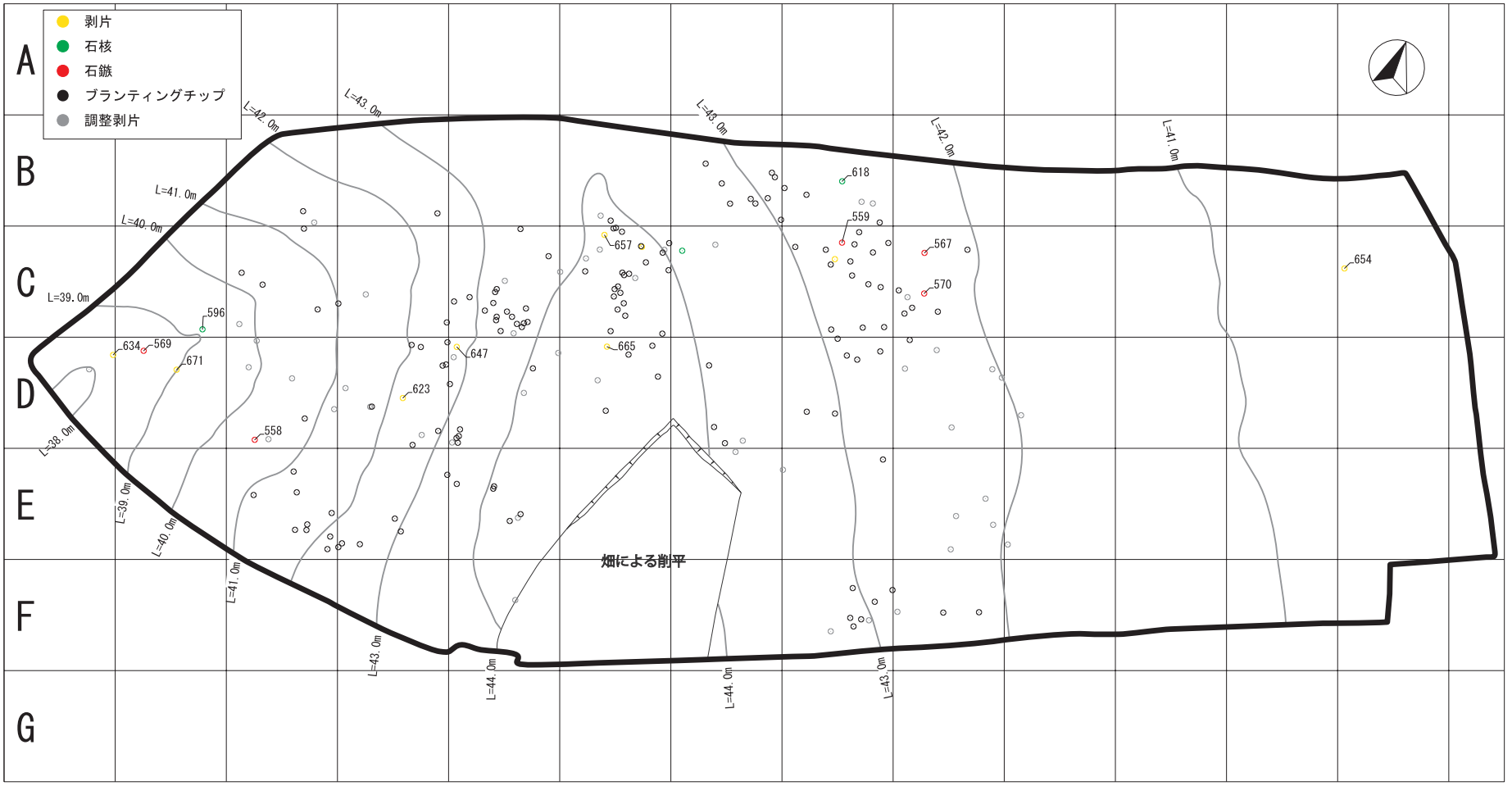
548～816 は縄文時代早期の包含層であるⅥ・Ⅶ層から出土した石器である。剥片石器は黒曜石・チャート・水晶などの素材が多く，玉髄や頁岩の素材は少量であった。打製石斧や礫石器は頁岩（ホルンフェルス）を素材としており，磨石・敲石などは安山岩・砂岩を中心に花崗岩を素材とするものも出土した。石器で取り上げ番号があるものは総数 1,924 点で，剥片石器は総数 1,046 点，その中で 149 点を掲載した。礫石器は総数 878 点，その中で 109 点を掲載した。

石鏃（第 114～121 図　548～587）

548・549 は正三角形を呈する石鏃である。素材はチャートで，基部は浅く三角形状に成形される。550 は左側縁が丸みを帯びるが，基部が浅く 548・549 と比較的近い形状である。551 は日東産黒曜石を素材としたものである。正三角形状で，側縁部の剥離や脚部の作出がみられない。石鏃未成品と考えられる。552 は二等辺三角形を呈している。両脚部が欠損しており，全体の形状は不明であるが，基部は 548 と類似している。553 はチャートを素材とするもので，先端部を欠損している。浅い抉りが施される。554 は腹部から上を欠損する。ハリ質安山岩を素材とし，基部は浅く，形状は 553 と類似している。555 はチャートを素材とした石鏃未成品である。上下は欠損し，両側縁の剥離痕がみられない。556 はチャートを素材とした小さい石鏃である。二等辺三角形状で脚部が短く形成される。剥離痕は少なく，裏面はほとんどみられない。頭部と脚部が作出されているが丸みを帯びる。557 は正三角形状で基部に抉りが施される。抉りの幅は広く，先端部は尖るように剥離されている。558 は 557 と同じ大きさだが，基部が浅い正三角形を呈する。両側縁部は密に剥離されている。南九州の縄文時代早期前半特有の小型三角形鏃と思われる。石材は桑ノ木津留産黒曜石を用いており，透明度の高い黒曜石が嗜好される傾向にも相応する。559 は桑ノ木津留産黒曜石を素材としたもので，二等辺三角形状を呈する。基部の抉りはなく，脚部付近の剥離が少ないため，石鏃未成品と考えられる。560 は正三角形状を呈し，浅く抉りが施される。連続的な剥離痕が一部みられる。561 は正三角形状で基部はやや深く抉っており，薄手に仕上げられている。素材はチャートである。562 の先端部は欠損するが，正三角形状で基部の抉りは深く，薄手に形成される。両側縁部には連続的な剥離痕が残り，基部の中央部にも細かく施される。563 は針尾産黒曜石を素材としており，両側縁部は丸く厚手である。基部の抉り中心と脚端部は丸く形成される。564 は先端部と右脚部を欠損している。やや厚みがあり，二次加工が密に施されている。脚端部は丁寧な剥離によって丸く作出される。腰岳産黒曜石を素材としている。565 も先端部が欠損しているが，全体形は寸胴な二等辺三角形を呈する。基部はやや広い抉りが作出される。側縁に鋸歯状の加工が施されている。素材はチャートである。566 は三船産黒曜石を素材としている。全体的に薄く，脚部の先端は丸みを帯びる。基部の抉り中心も丁寧に剥離されている。567 は桑ノ木津留産黒曜石を素材とするものである。先端部と側縁部を一部欠損するが，基部は深く抉り，Ｖ字状を呈する。568 は深い抉りが施され，やや長い脚部が作出され

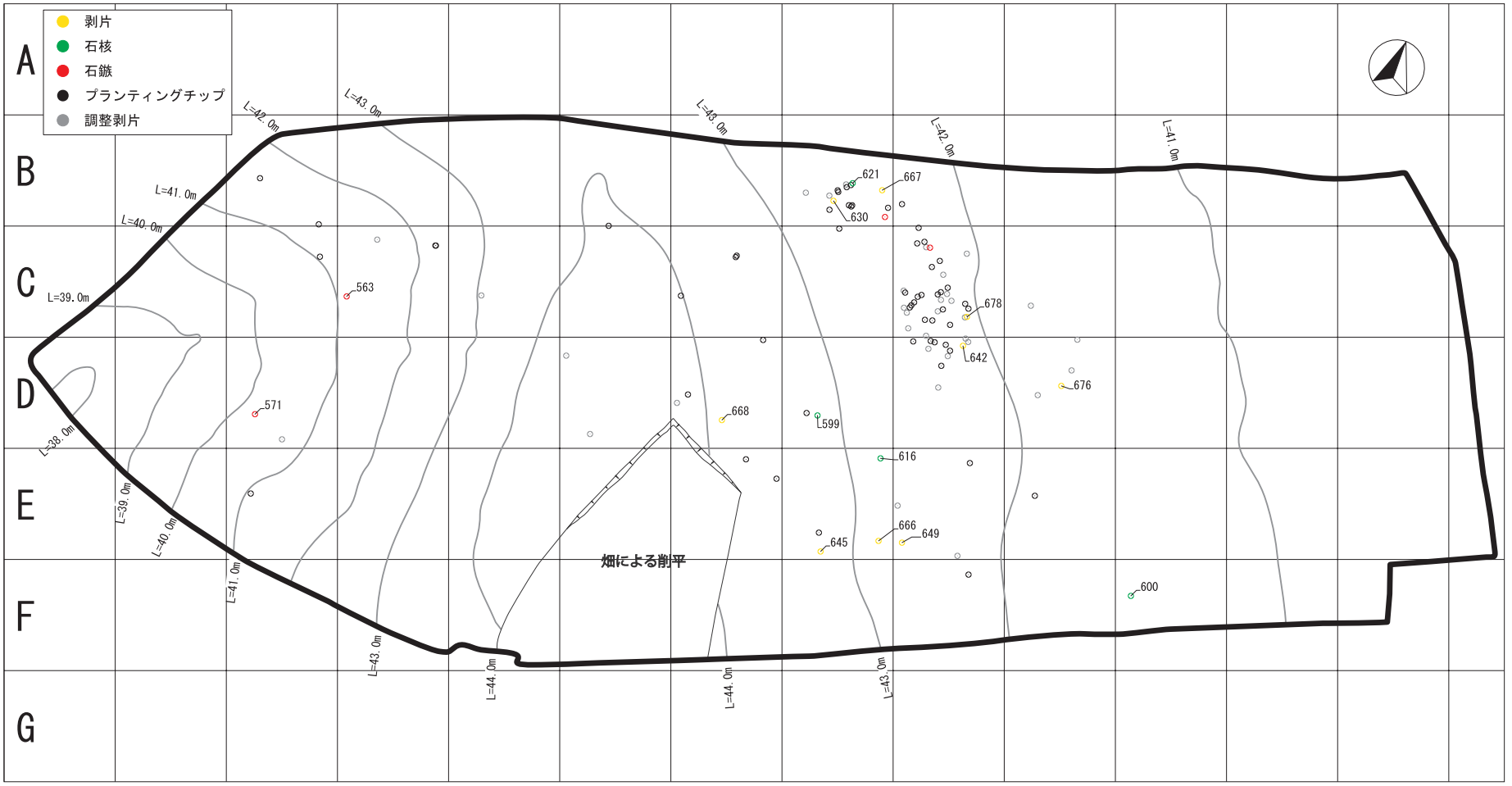


第 114 図　縄文時代の石器 1

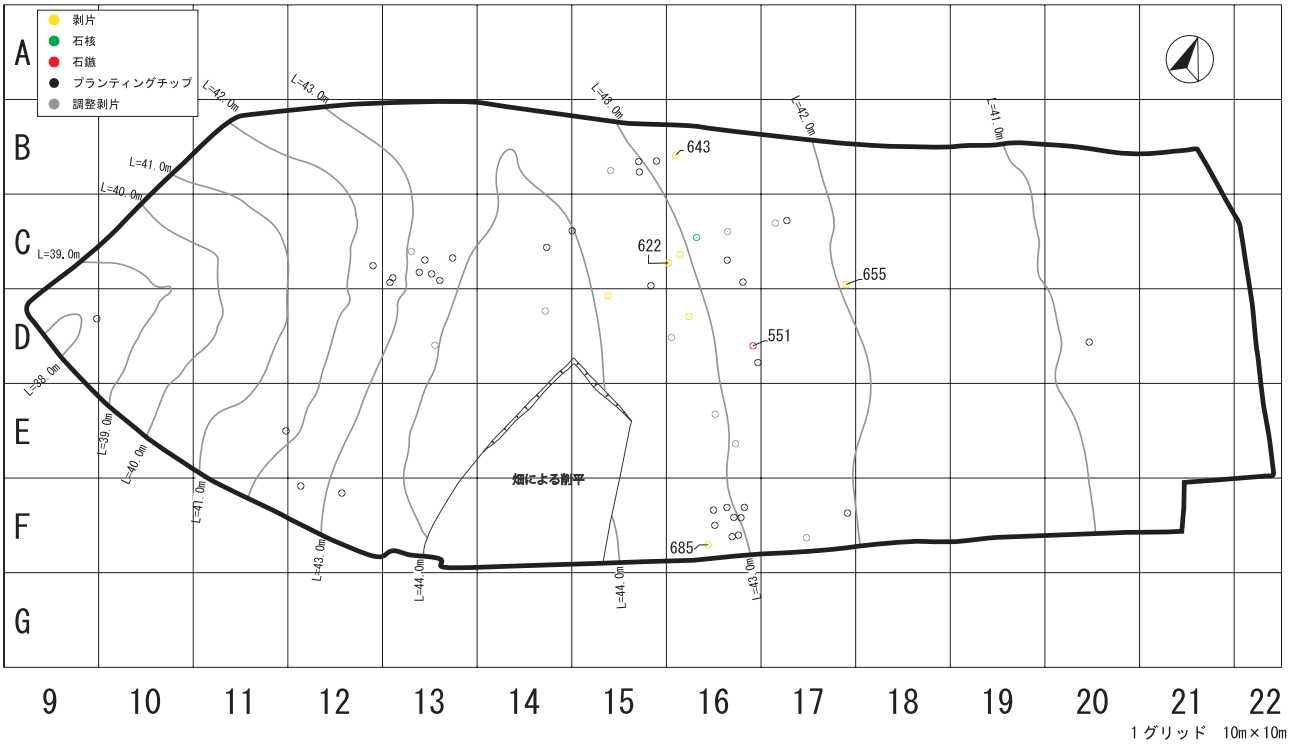


1グリッド　10m×10m

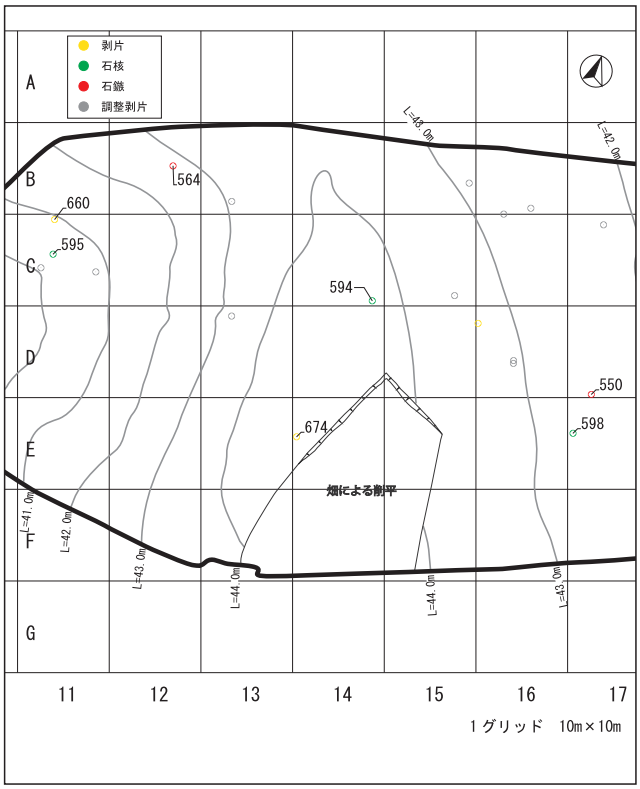
第115図　黒曜石（桑ノ木津留）出土分布図



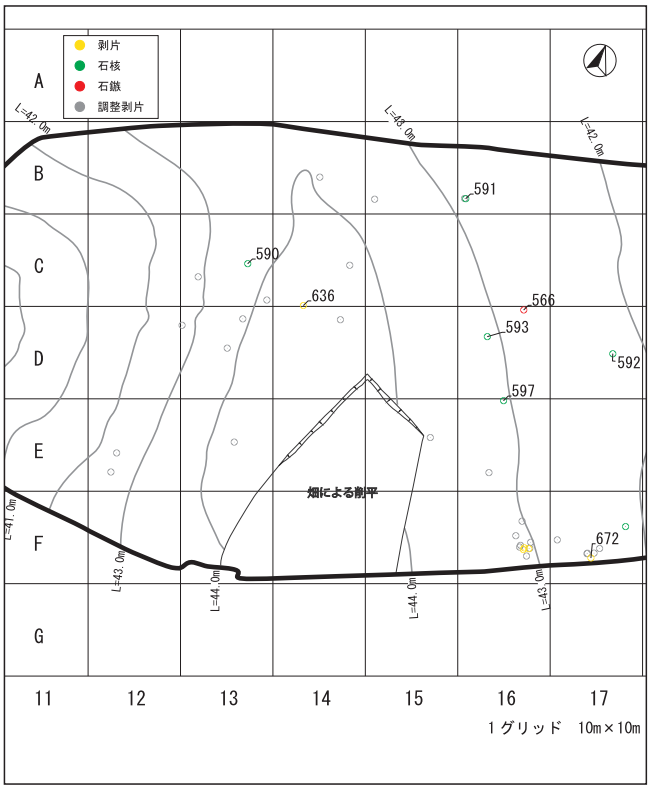
第116図　黒曜石（針尾）出土分布図



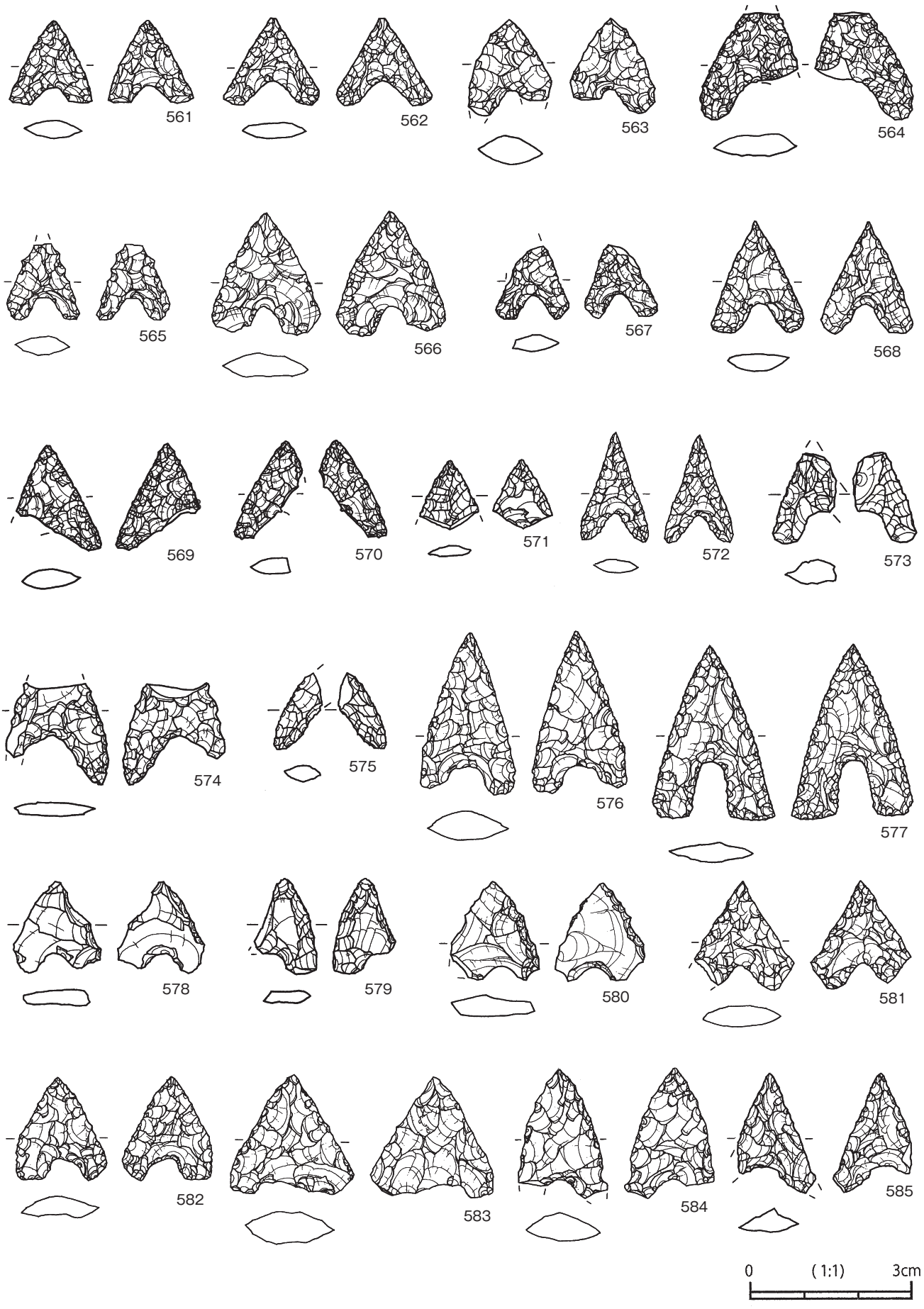
第 117 図　黒曜石（日東）出土分布図



第 118 図　黒曜石（腰岳）出土分布図



第 119 図　黒曜石（三船）出土分布図



第 120 図　縄文時代の石器２

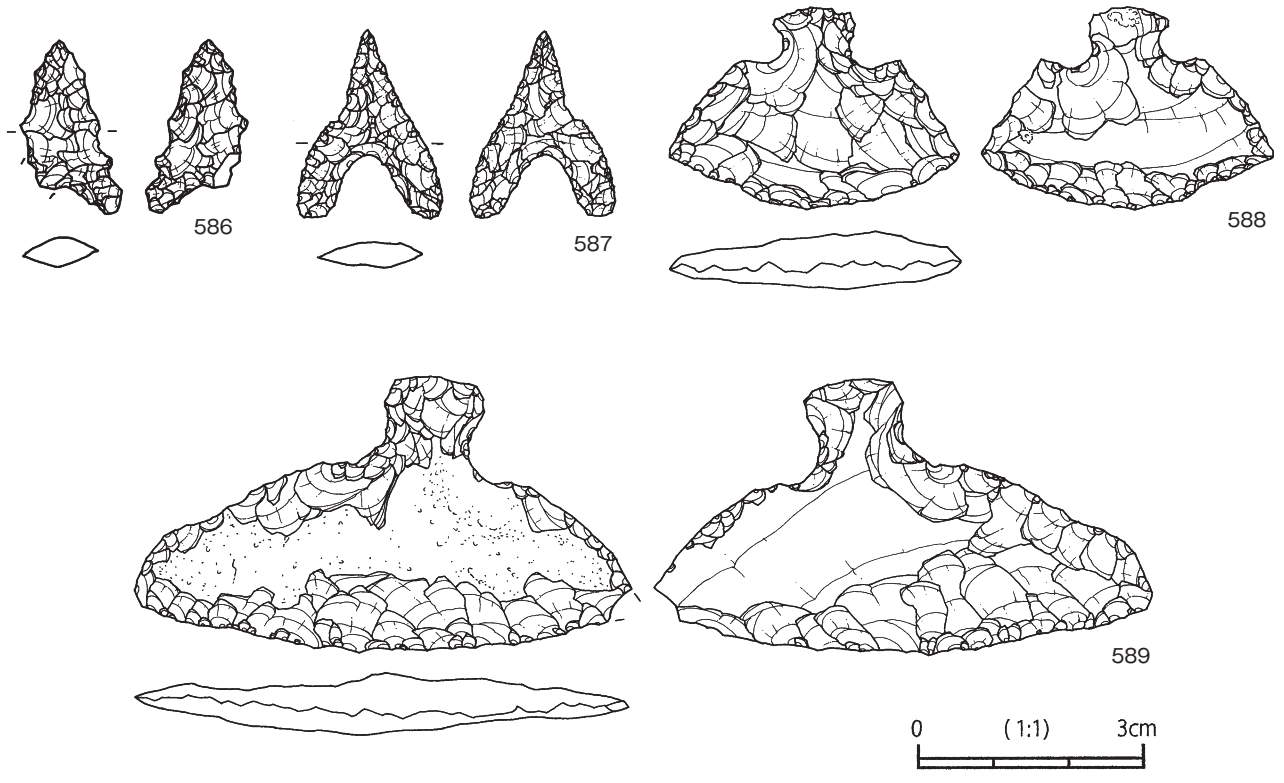
る。薄手で先端部は鋭く，両側縁部の剥離痕が明瞭で，丁寧に作成されている。569・570 は桑ノ木津留産黒曜石を素材とした石鏃である。どちらも片脚を欠損するが両側縁部の剥離痕は緻密に施されている。571 は先端部のみ残存している。腹部から下は欠損している。572 も 568 と同様の形状を呈するが，先端部が細く伸びる形状である。チャートを素材としている。573 は水晶を素材とした石鏃である。二等辺三角形状で，脚部先端が丸みを帯びる。574 はハリ質安山岩を素材としている。左脚部と先端部を欠損する。基部は深く抉り，Ｖ字状を呈する。575 は鉄石英の脚部である。この素材の製品は１点のみ出土している。側縁部に緻密な剥離痕が残っている。576 は腹部に厚みがあり，脚部が短く先端部は尖る形状である。丁寧な二次加工が施されている。577 はハリ質安山岩を素材としたものである。全体形は長身の二等辺三角形状で，基部にＵ字状の深い抉りが施される。脚端部は平らに整形される。これらは縄文時代早期前葉から縄文時代早期中葉にみられるものと思われる。578 はチャートを素材としている。基部の抉りはやや深く丸みを帯びる。579 はやや歪んだ形状である。脚部の先端は太く，片脚は欠損している。580 は五角形を呈する石鏃の未成品である。左脚部を欠損しており，右側縁に剥離痕が残る。581 も同様の形状で左脚部を欠損している。両側縁部と脚部には剥離痕が残る。582 は基部の中心に抉りが施され，比較的薄く整形されている。583 はハリ質安山岩製の石鏃である。全体形は正三角形を呈するが，脚部が短く整形される。やや厚みがあり，基部は左に偏っている。584 は両脚部を欠損している。全体形は両側縁の脚部の付け根付近から外側へ鋸歯状を呈しながら張り出すものと考えられる。これらの素材はすべてチャートである。585 も同様の素材である。二等辺三角形状で基部にはやや深い抉りが施されている。両脚部は欠損している。586 はチャートを素材としており，側縁部から脚部が鋸歯状に作出される。剥離痕は密ではなく，隙間が残る。これらは，縄文時代後期にみられるものと考えられる。587 の左側縁の一部はガジリにより欠損する。比較的大きい資料で基部に深い抉りが施され，腹部から脚部にかけて丸みを帯びた独特の形状である。

石匙（第 121 図　588・589）

588 はハリ質安山岩を素材とした石匙である。刃部の中央部に調整剥離が多く施される。つまみ部にも剥離痕が残る。縄文時代早期の平椿式土器と同時期に相当するものと思われる。589 はやや横長の製品で右脚の先端部を欠損している。周縁に二次加工がみられ，中央部には素材面を残している。縄文時代前期以降のものと考えられる。

石核（第 122～124 図　590～621）

590～592 は三船産黒曜石の石核である。比較的小さい形状である。591 は上端部と右側縁に剥離がみられる。592 は左下側縁に一部打点が残る。593 は三船産黒曜石の石核である。下側縁の打点から剥離が施される。594・595 は腰岳産黒曜石の石核である。594 は左下側縁

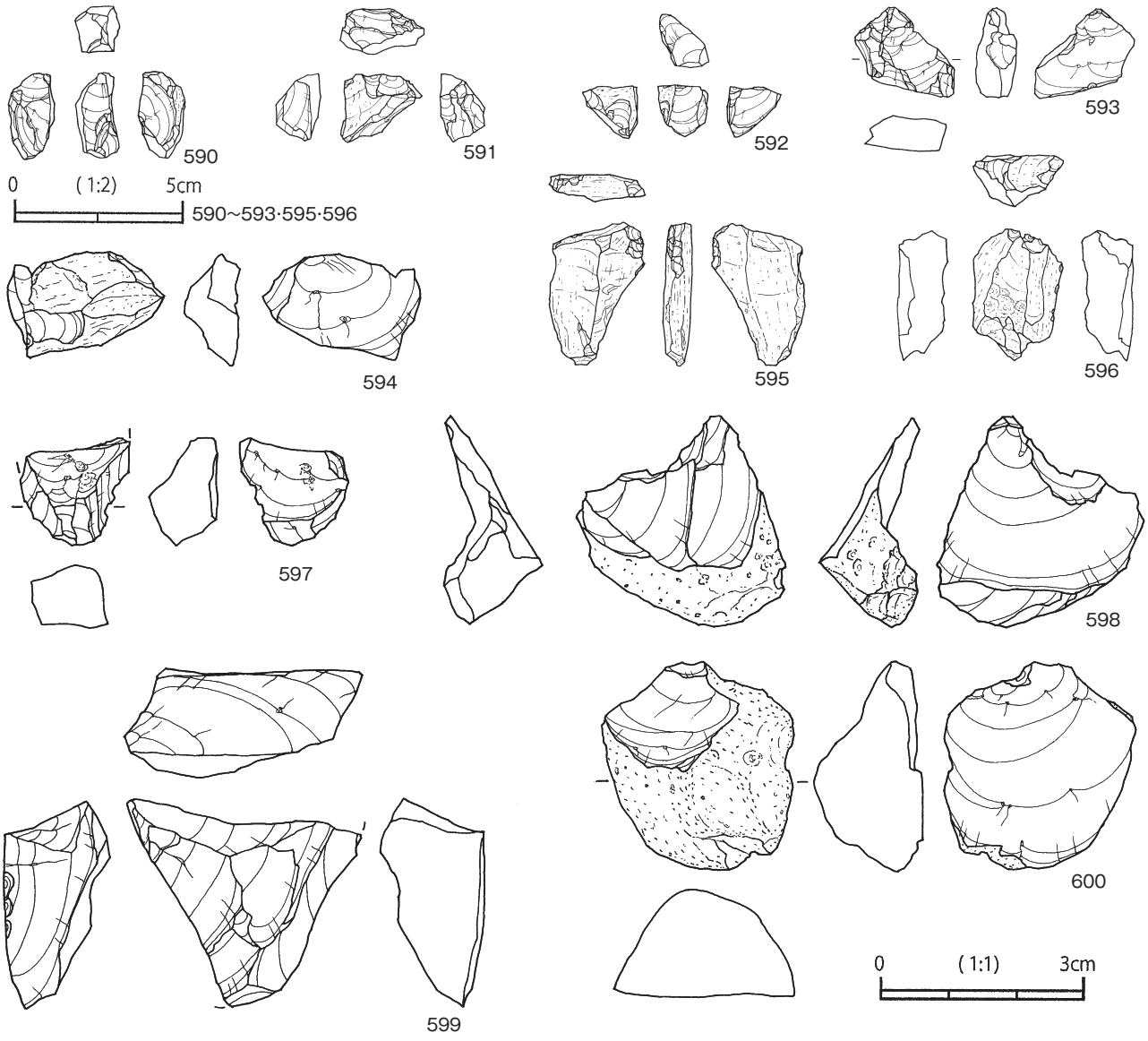


第 121 図　縄文時代の石器３

に打点が確認できる。595 は右側縁に連続的な剥離痕がみられる。596 は桑ノ木津留産黒曜石の素材である。上端部の打面から剥離痕がみられる。597 は三船産黒曜石を素材としており，上端部を欠損するが，剥離面で構成される。598 は腰岳産黒曜石で，比較的大きい素材である。599・600 は針尾産黒曜石を素材としている。599 は縦長剥片を上から剥離したものである。601・602 は頁岩製の石核である。601 は自然面を残して剥離面が形成されている。602 の右側縁には両方向からの剥離痕が認められる。603 はハリ質安山岩の素材で，上下に打点が認められ下側縁に剥離痕が残る。604～614 は水晶の石核で，剥離面で構成される。604 は上端部の打面による剥離面が残る。605 は亀甲状の形状で，様々な角度から剥離が施されている。606 は角礫状に剥離面が構成される。607・610 は四角形状を呈し，610 の下側面には連続的な剥離痕が残る。下端部に剥離痕の潰れがわずかに認められることから楔形石器の可能性が考えられる。608・611 は角礫状の形状で，腹部に二次加工が施されている。612 は断面三角形状で下端部は先細る形状である。腹部に二次加工が施されている。613 も類似した形状でやや大きく，裏面の下端部に剥離面が多く残る。614 は上側面が平坦で断面三角形状である。剥離面で構成される。615・620 は水晶の石核である。617 は上端部と下側縁に剥離痕が残る。下側縁は薄く尖るように作出される。616 は針尾産黒曜石を素材としたものである。自然面が残っており，表の左側縁には微細な剥離痕が残る。618 は表の腹面に剥離痕が残り，二次加工が施されている。619 はチャートの石核である。上側縁に剥離痕が多く，表面は二次加工が認められる。621 は腹面から左側縁にかけて二次加工が認められる。

剥片石器（第 125～133 図　622～696）

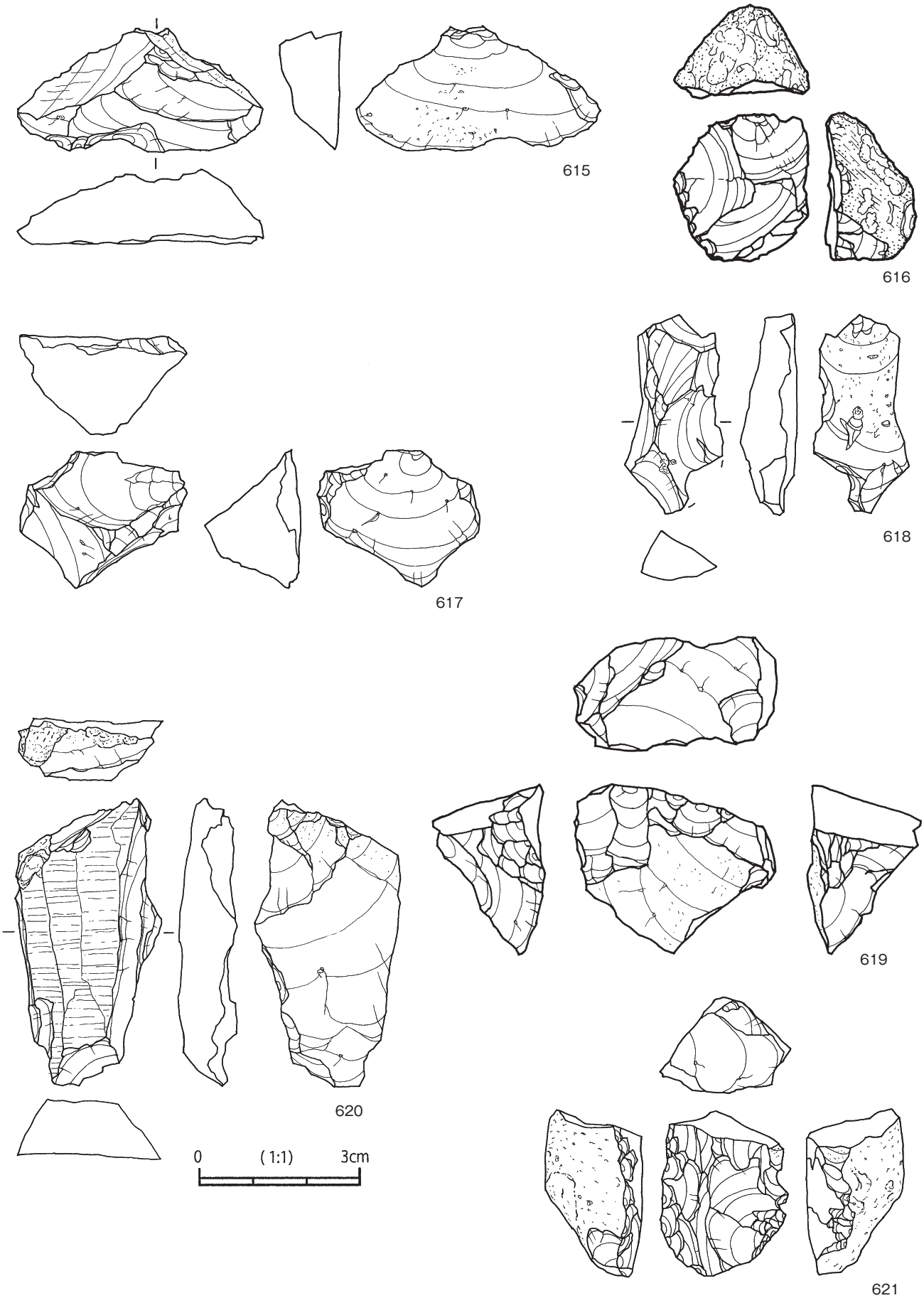
622・623 は石鏃を製作する際のブランティングチップである。622 は日東産黒曜石の剥片で，周縁に微細な剥離痕がみられる。623 は桑ノ木津留産黒曜石の剥片であ



第 122 図　縄文時代の石器 4



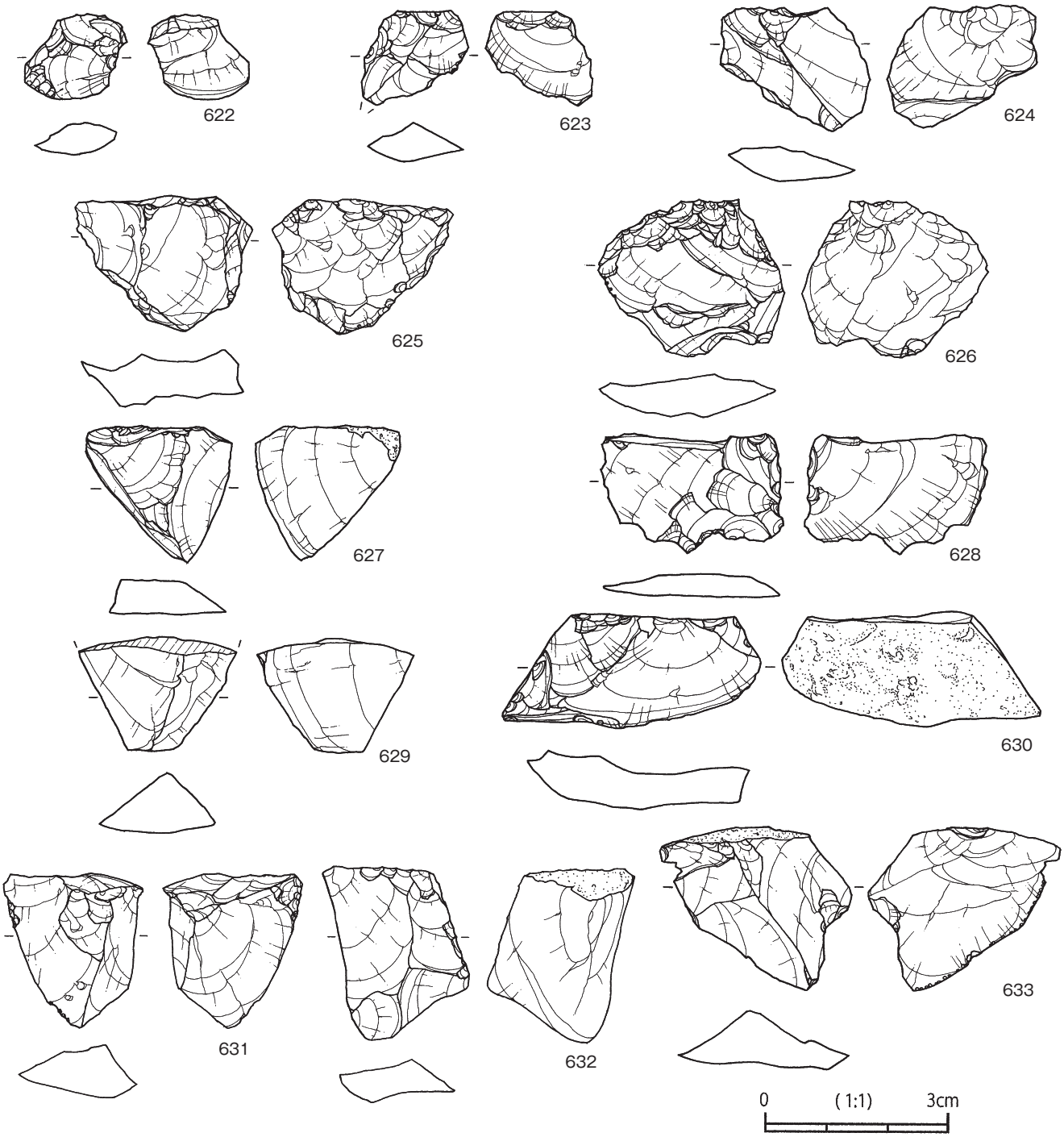
第 123 図　縄文時代の石器５



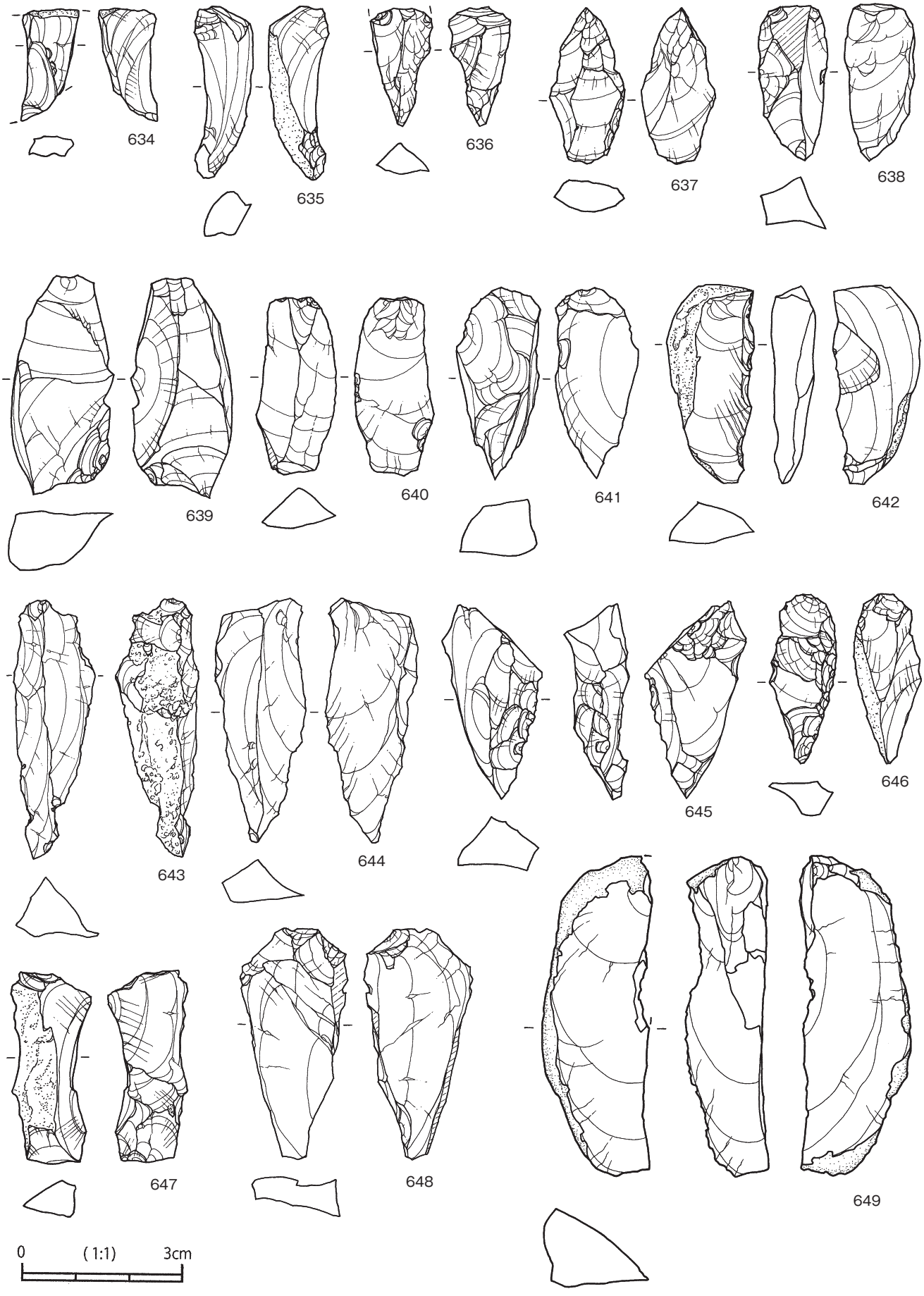
第 124 図　縄文時代の石器６

る。上側面に剥離痕が残る。624 はチャートの剥片を素材としており，剥離面で構成される。625 は水晶の剥片である。上側縁と左側縁にわずかな剥離痕がみられる。626 はチャートの剥片である。上側縁には二次加工が施され，細かい剥離痕が残る。627 は頁岩を素材とする剥片で，剥離痕は少ない。右側縁が鋭く尖る。628 は姫島産黒曜石の剥片である。薄く剥がれた剥片に二次加工が残る。629 はチャートの剥片で 627 と同様に三角形状を呈する。やや厚みがある。630 は針尾産黒曜石の剥片である。裏面は礫面が残り，上側縁と左側縁に剥離痕が残る。二次加工が施されている。631 はチャートの剥片である。上側縁に打点がみられ，裏の上側縁にはわずかな剥離痕が残る。632 はハリ質安山岩の剥片である。上側面は剥離痕がみられるが，礫面が残る。633 は上面に礫面を残し，右側縁は剥離痕が残る。

634 は桑ノ木津留産黒曜石を素材とした薄い剥片を利用し，調整剥離はほとんどみられない。635 は水晶を素材としており，鉛直方向からの加撃により剥離面が形成される。素材面は残され，先端部に微細剥離がみられる。636 は三船産黒曜石を素材とした剥片尖頭器である。上



第 125 図　縄文時代の石器 7

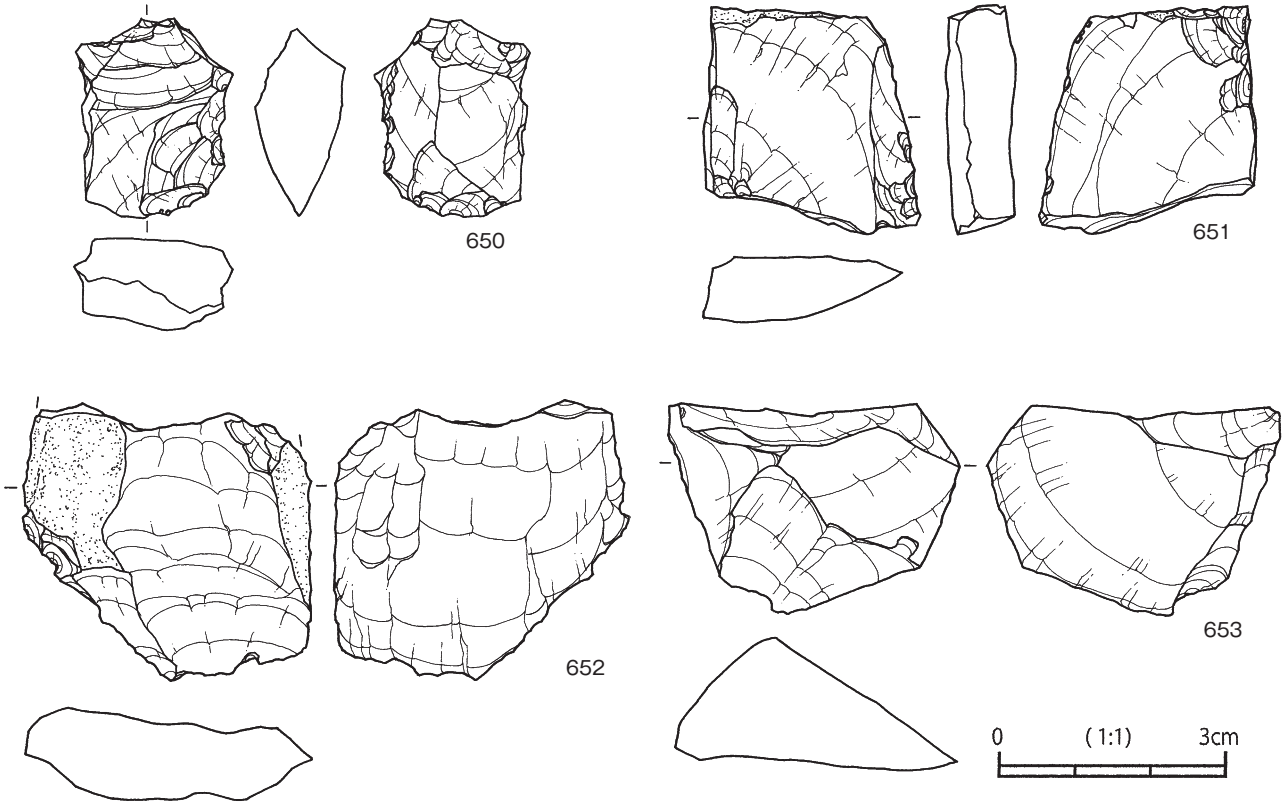


第 126 図　縄文時代の石器 8

端部を欠損するが，先端部に一部剥離痕が残る。637 は水晶の剥片である。下端部は薄く剥がれ，やや厚みがある上端部は尖るように剥がれている。638 は左側縁に剥離痕が残る。639 はやや大きめのチャートの剥片である。下端部からの剥離が施される。640 はチャートを素材としたもので剥離痕はあまりみられない。641 はチャートを素材としたやや大きめのものである。横長の剥片を利用したもので，先端は鋭く尖る。642 は針尾産黒曜石の横長剥片が上側縁からの剥離によって剥がれている。また，右側縁からも剥離が施されている。一部礫面が残る。643 は日東産黒曜石を素材としており，縦に長く細めの剥片で形成される。上端部周辺に剥離が施され，先端は尖るように剥離面がみられる。644 はやや大きめの形状で先端部が鋭く尖っている。649 は針尾産黒曜石の剥片である。645～647 は二次加工剥片である。646 は姫島産黒曜石を素材としている。右側縁は先端部まで微細剥離を施す。645 は針尾産黒曜石を素材とし，右側縁に剥離痕が残る。また，上端部と右側面に打点が確認できる。647 は桑ノ木津留産黒曜石の剥片である。横長の剥片にフィッシャーが多くみられる。裏面は下端部からの剥離と左側縁からの打点が確認できる。

650 は腹面からの二次加工が施される。651 はハリ質安山岩の剥片で，上側面に素材面を残し，両側縁に剥離痕がみられる。652 は水晶の剥片である。両側面は礫面が残り，上端部と左側縁にわずかに剥離痕がみられる。653 は厚みのある頁岩の剥片である。断面は三角形状を呈し，裏面の上端部からの剥離によって剥がれている。

654・660・663 は楔形石器，655・656 は石錐である。654 は桑ノ木津留産黒曜石を素材としており，上下端部に剥離を施している。655 は日東産黒曜石を素材としており，先端部は鋭く調整され，剥離痕が一部残る。また，先端部にはドリルとして使用された痕跡が確認できる。656 は角錐状の玉髄を素材とした石錐である。やや厚みがあり，基部の一部に剥離痕が残る。657 は裏面の左側縁に剥離痕が残る。658・659 はチャートを素材としている。剥離痕は上端部に認められる。660 は腰岳産黒曜石を素材としたものである。上下端部に微細な剥離痕がみられる。上下には明瞭な潰れが観察される。661 は上端部と側縁部に剥離が施される。662 はチャートを素材としたもので，右側縁部に腹面から二次加工が施される。663 はチャートを素材としており，周縁に剥離痕が残る。厚さ１㎝程の剥片に周囲から剥離が行われる。亀甲状の形状を呈する。積極的に刃部形成を行うような調整剥離はみられないが，部分的に微細剥離痕を含む細やかな剥離によって抉入部が形成される。664 は上端部に腹面から急角度の二次加工が密に施される。素材は水晶である。665 は断面三角形のものである。上端部と右側縁に剥離痕がみられる。666・667・668 は針尾産黒曜石を素

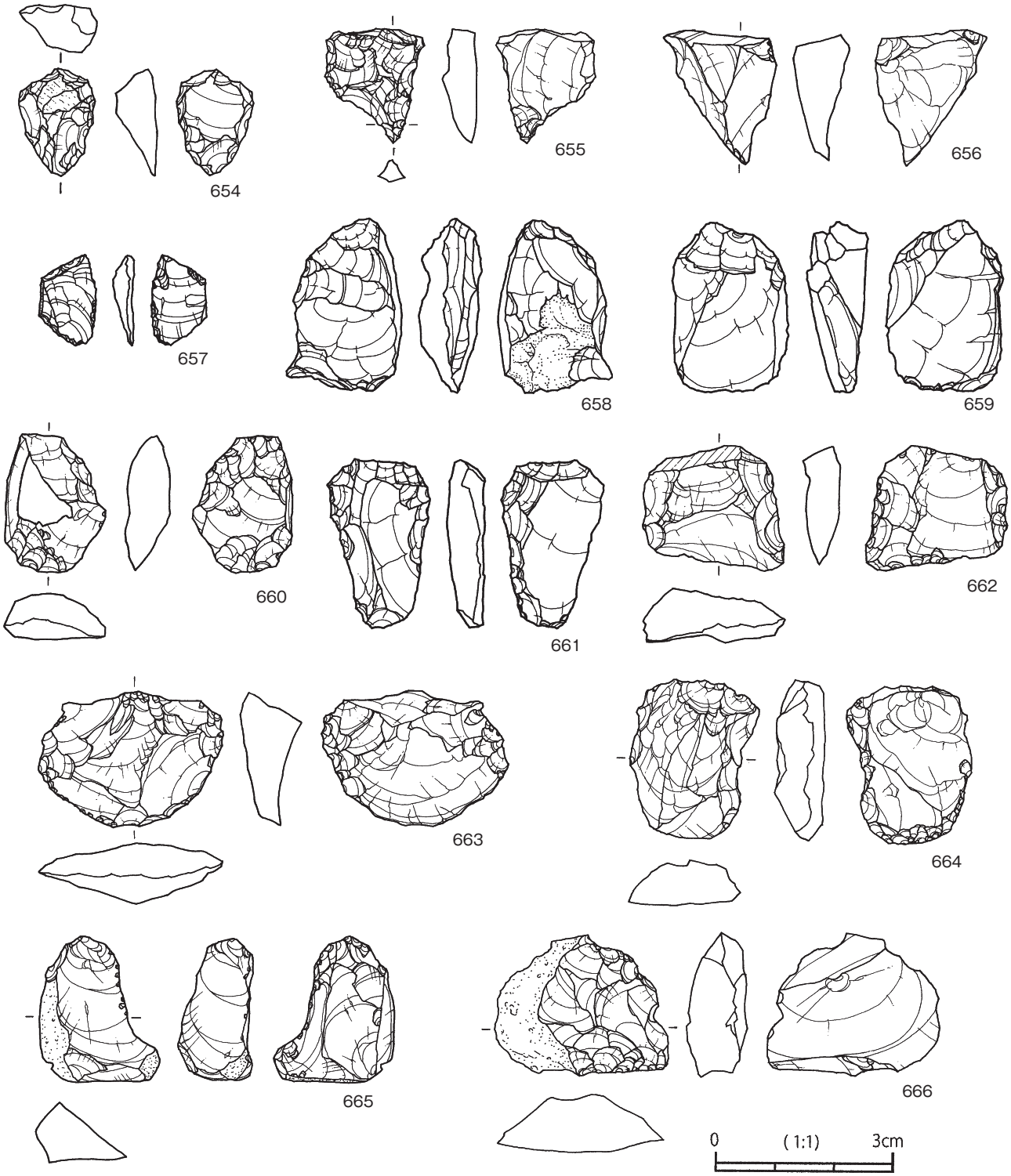


第 127 図　縄文時代の石器９

材としたものである。666 は一部素材面を残して，中心部から周縁にかけて二次加工が細かく施される。

667 は裏面の両側周縁に二次加工が多く施される。668 は両面に腹面からの二次加工が施され，裏面の左側縁に剥離痕が残る。669 はハリ質安山岩を素材としたものである。下側縁に連続的な剥離が緻密に施され，上側縁にも剥離痕が残る。これらは掻器として使用された可能性が考えられるものである。

670～686 は削器と考えられるものである。670 はハリ質安山岩を素材とし，上端部に剥離痕が残る。671 は桑ノ木津留産黒曜石を素材としている。左側縁は一部欠損している。672 は三船産黒曜石で，先端部は微細な剥離

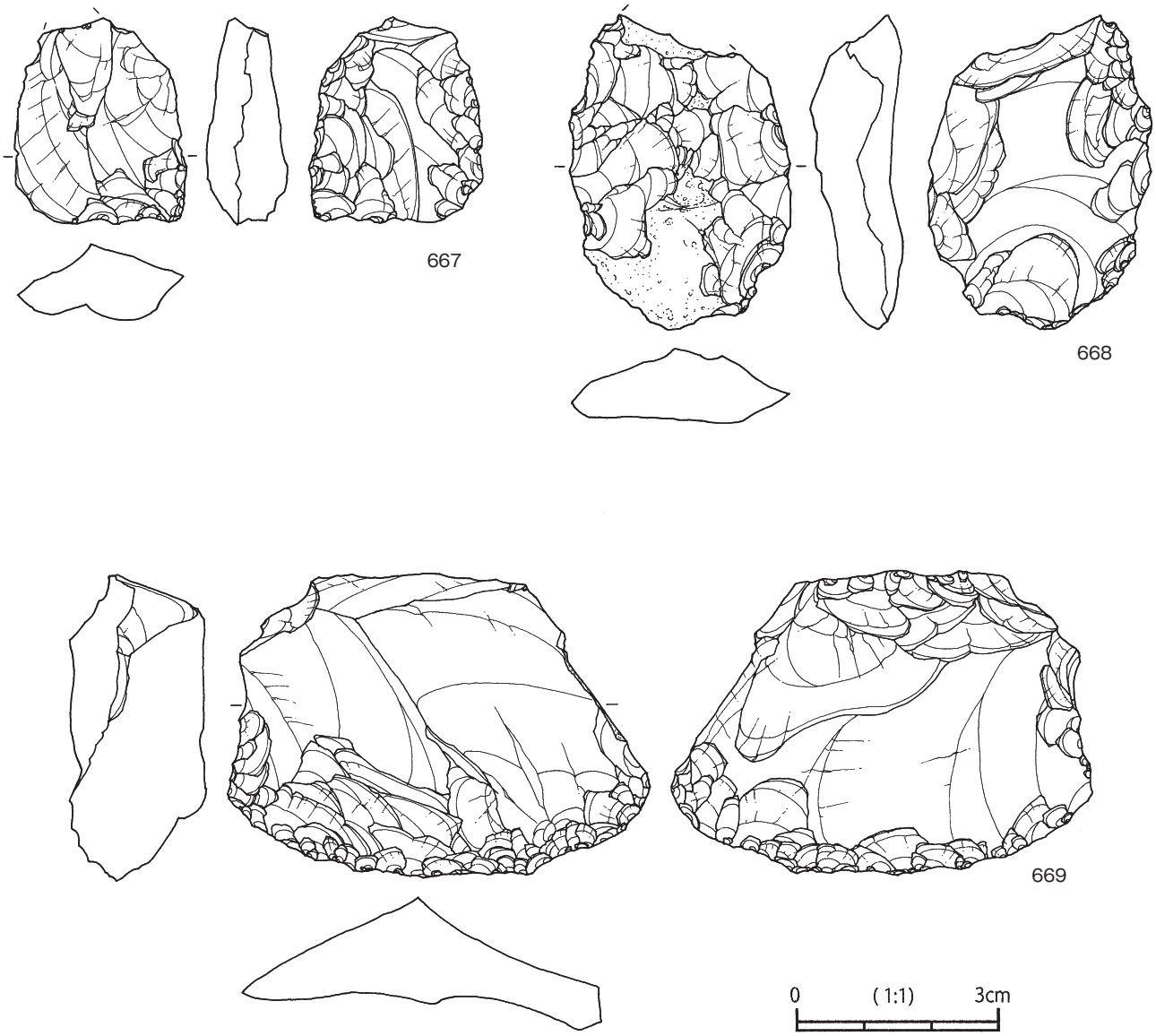


第 128 図　縄文時代の石器 10

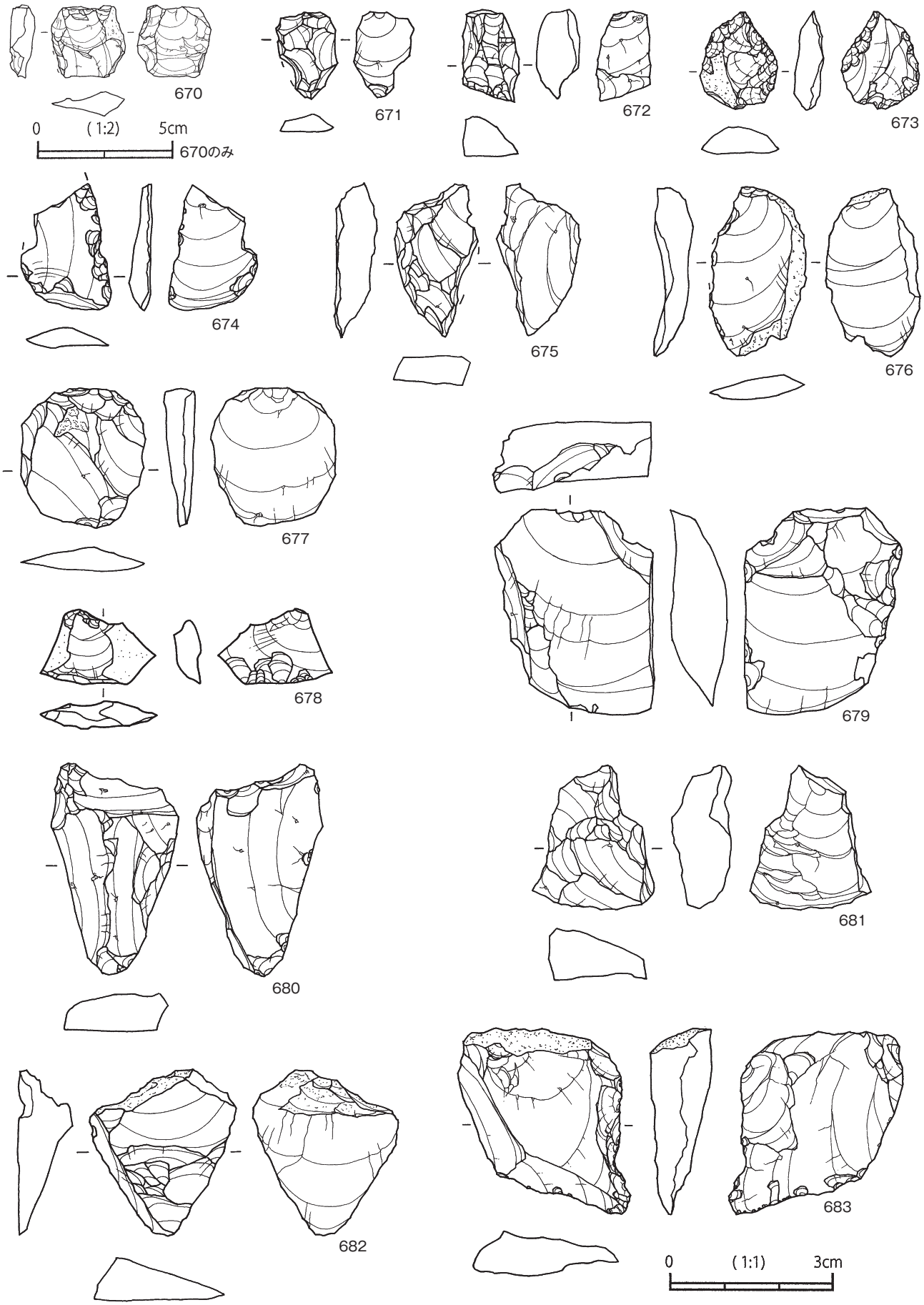
によって尖らせている。673 は水晶を素材としたもので，周縁に微細剥離痕が多く残る。一部に自然面を残す。674 は腰岳産黒曜石を素材とし，右側縁に剥離痕がみられる。上側面は欠損している。675 は左側縁に剥離痕が残る。676 は針尾産黒曜石で，側面に礫面を残すものである。断面は薄く剥がれている。677 はハリ質安山岩を素材とし，上端部に剥離痕がみられる。下側縁は鋭く刃部を形成している。678 はやや小さめの針尾産黒曜石の削器である。刃部に連続的な剥離痕が確認できる。679 はハリ質安山岩の削器である。断面形状は先端部が鋭く尖り，裏面の左側縁は打点が確認できる。680 は珪質頁岩を素材とする縦長剥片に腹面からの二次加工がみられる。681 は水晶を素材としており，剥離痕はほとんどみられなかった。683 は中形でやや厚めのものである。右側縁に剥離痕が確認できる。

682・684・686 はハリ質安山岩の削器である。上側面に打点と剥離痕が確認できる。685 は日東産黒曜石の削器で，右側縁に微細剥離痕が確認できる。686 は大きめの削器で表の周縁は剥離が多く施される。右側縁に集中して微細剥離痕が残る。剥離の凹凸がはっきりしているため，掻器としても使用された可能性がある。

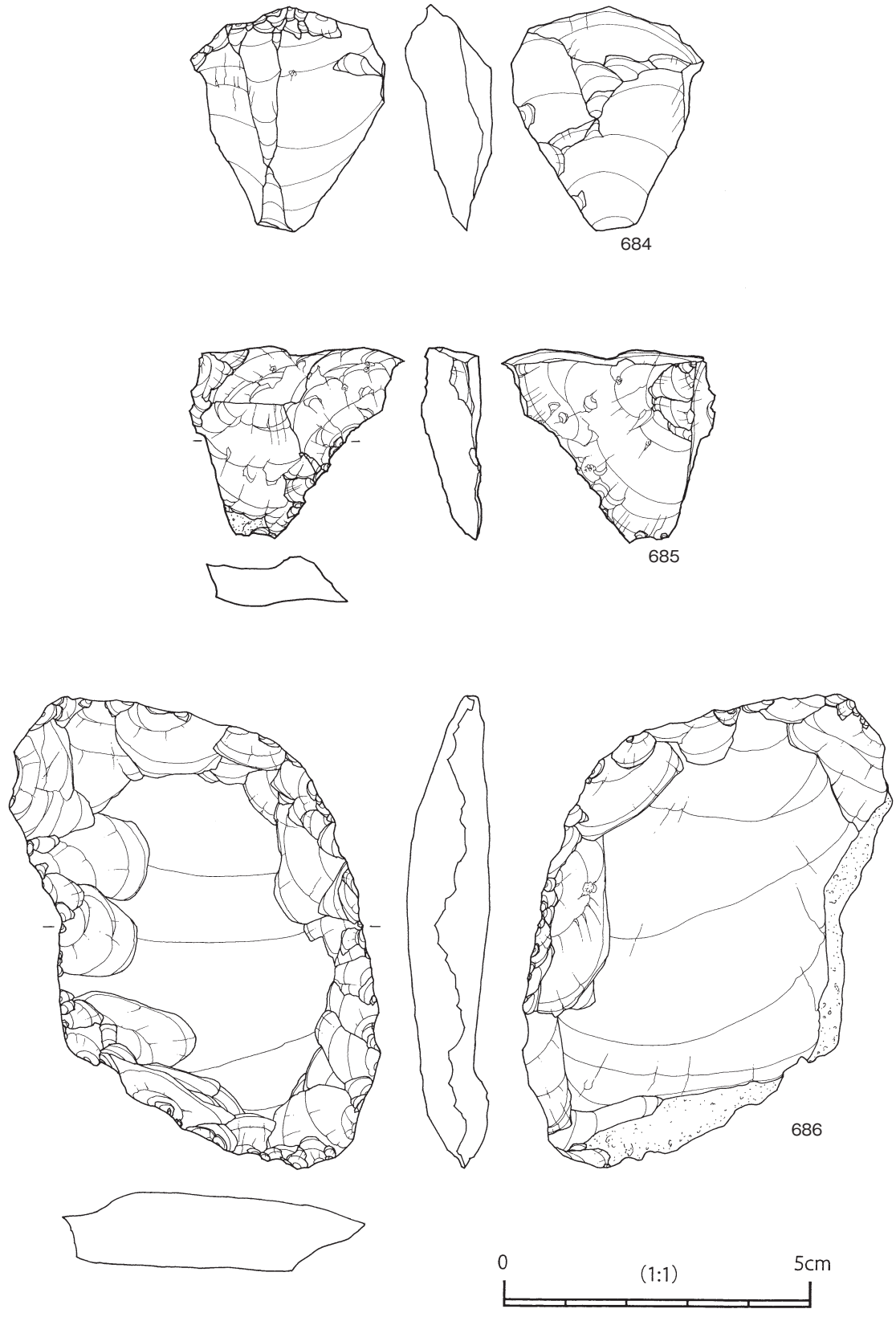
687 は表の右側縁から腹面にかけて二次加工が施される。688 は右側縁に表・裏から剥離痕が確認できる。薄い剥片を利用したものと思われる。689 は右側縁に刃部が形成される。細かく欠けているが，鋭い刃部となっている。削器として使用された可能性がある。690 はホルンフェルスを素材としたものである。縦長剥片を利用したもので，右側縁に剥離痕が残る。断面は薄く形成される。691 は右側縁と左側縁に剥離痕が一部残る。692 は下側面を欠損しているが，左側縁は尖るように剥離され



第 129 図　縄文時代の石器 11



第 130 図　縄文時代の石器 12

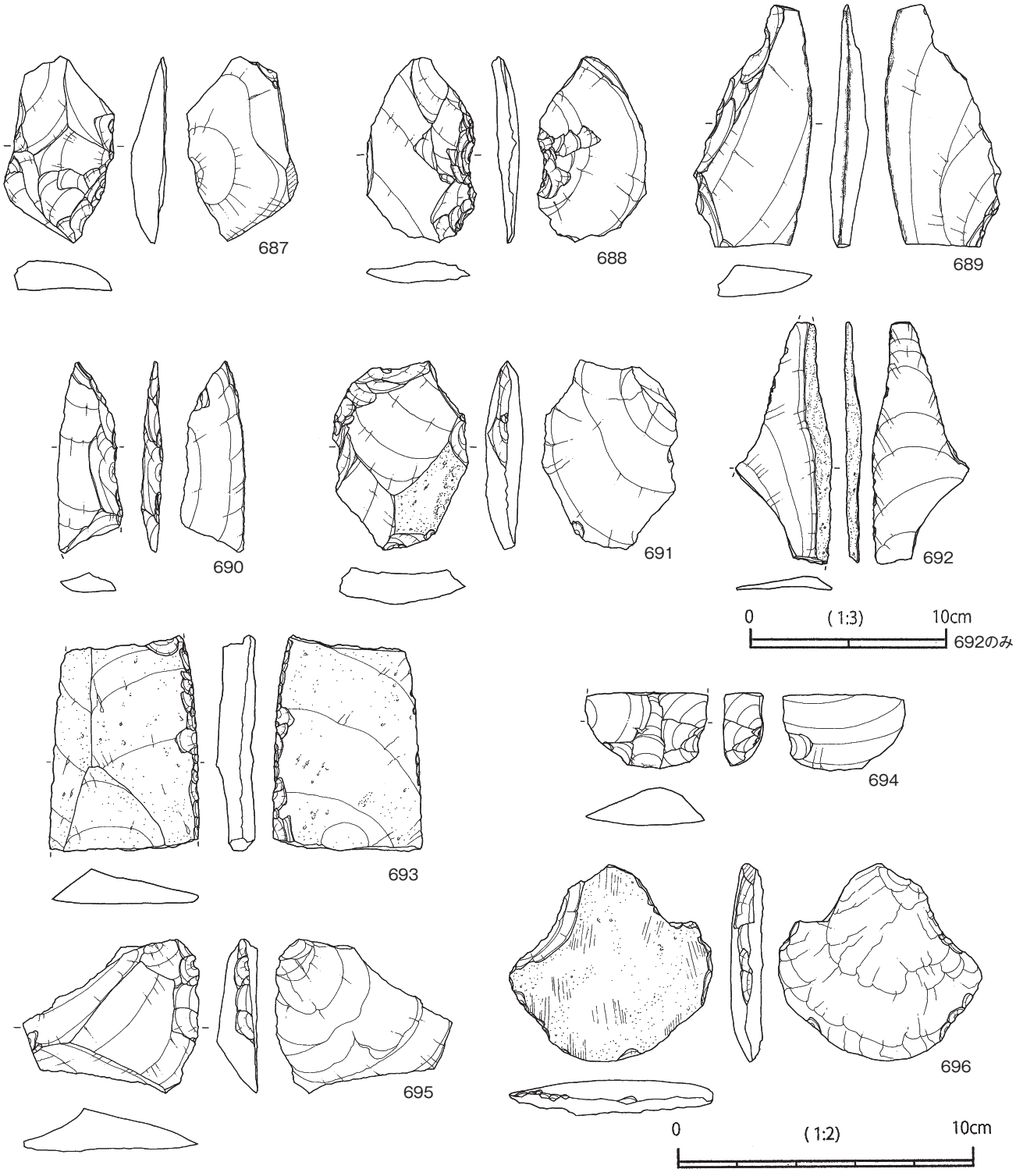


第 131 図　縄文時代の石器 13

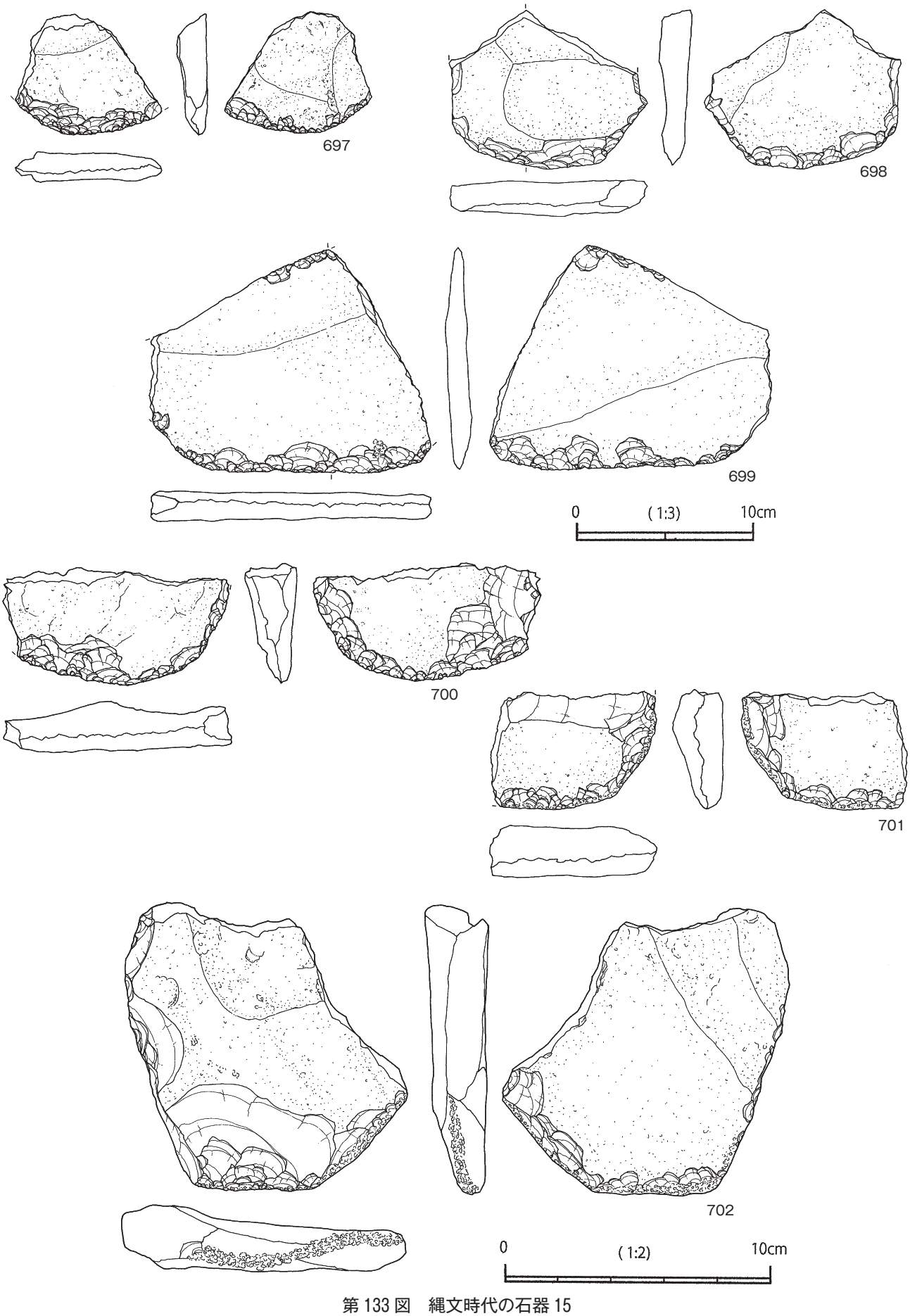
ており，削器として使用された可能性がある。693 は凝灰岩を素材としたものである。右側縁の表・裏に連続的な剥離痕が観察される。694・695 は断面に剥離痕が残り，下側面は刃部が形成されている。695 は右側縁に二次加工が施され，やや大きめの連続的な剥離痕が残る。掻器として使用された可能性がある。696 は薄く剥がれた礫を磨製石斧として転用したものである。括部と刃部にわずかに剥離痕が残り，表は擦痕が確認できる。

礫石器（第 133 図　697～702）

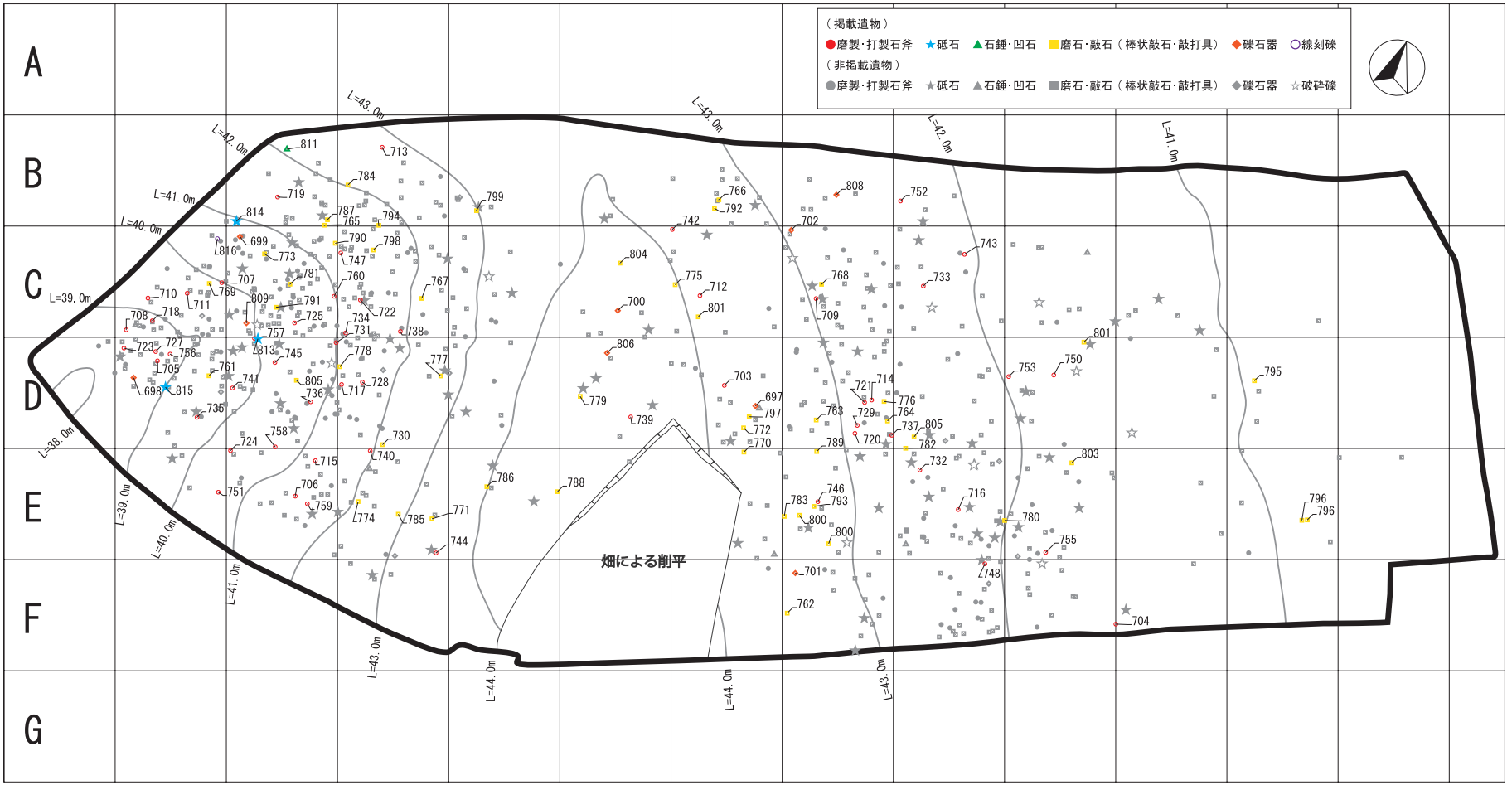
697～702 は素材面をそのままで，下側縁に調整剥離を施すものである。699 は断面が薄く，上側縁と下側面に剥離痕が確認できる。700 は表に二次加工が施されている。701・702 は剥離痕と敲打痕が残っており，両方に使用されたと思われる。安山岩製のもので，手のひらに収



第 132 図　縄文時代の石器 14



第 133 図　縄文時代の石器 15



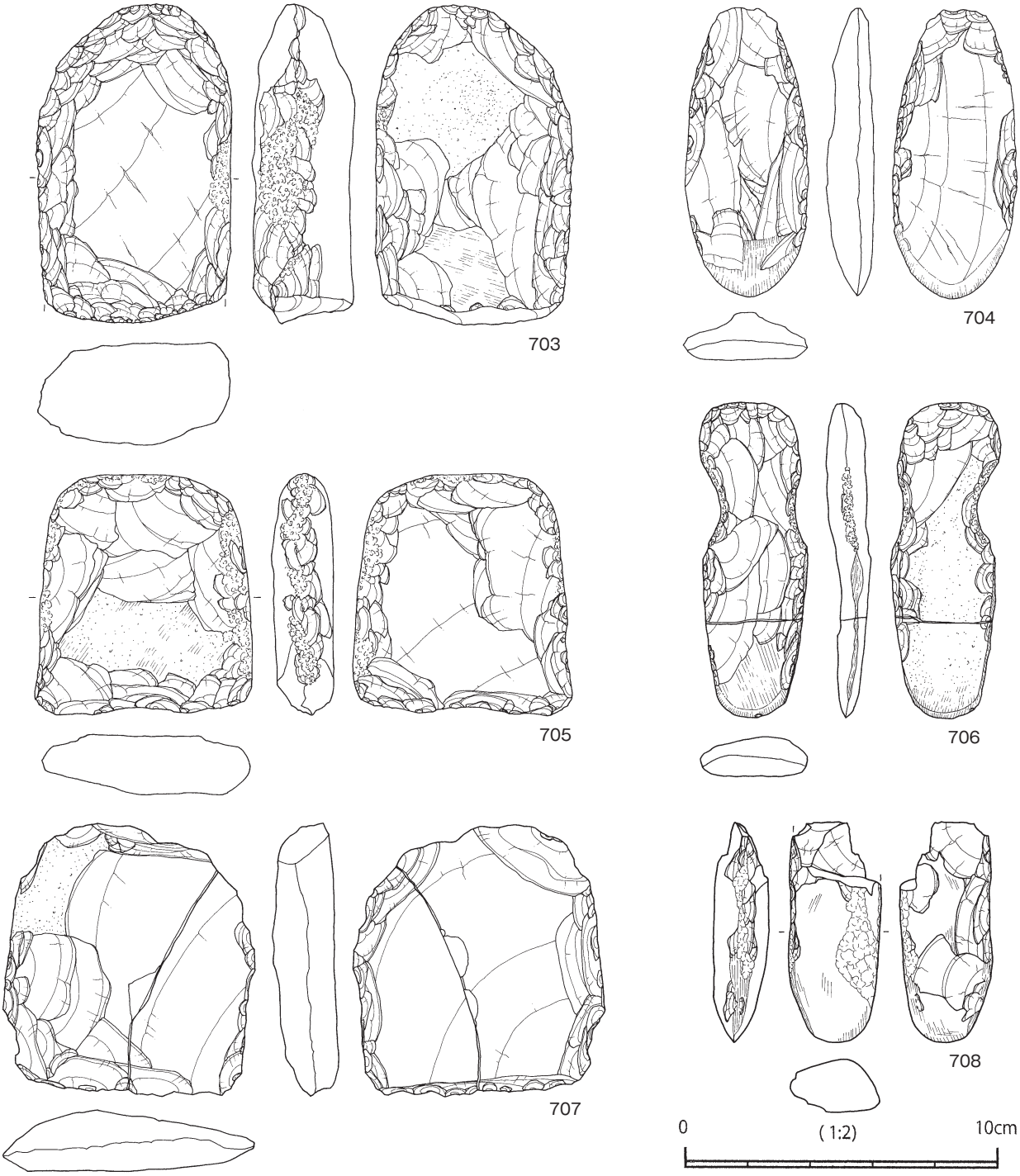
1グリッド　10m×10m

第134図　縄文時代早期の礫石器出土分布図

まる大きさである。下側縁の敲打痕が多く確認できた。

石斧（第 135～142 図　703～760）

703 の素材はホルンフェルスで，厚みのある打製石斧である。腹部から下は破断している。頭部は丸く整形され，二次加工が施されている。右側縁には敲打痕が残り，擦り減りにより平坦を成す。裏面は一部研磨が施されている。704 もホルンフェルスの素材で，大きさはやや小さく，横長剥片を利用したものである。刃部は研磨により鋭く尖っている。刃部のみ研磨を施す打製石斧である。頭部や周縁も剥離がみられる。表面は研磨された刃部に剥離が施されていることから，二次加工を行い再利用された可能性がある。705 は 703 と同様に厚みと幅がある。頭部は四角い形状で細かい加工により剥離面が多く角がない。また，頭部や周縁には敲打痕が多くみられる。706 の腹部上には，木の柄などに結びつけるための括部が作出される。頭部や周縁は細かい剥離痕や敲打痕が残る。刃部は研磨が施され，薄く形成される。707 も幅のある石斧で，腹部から下は破断しているが，二次加



第 135 図　縄文時代の石器 16



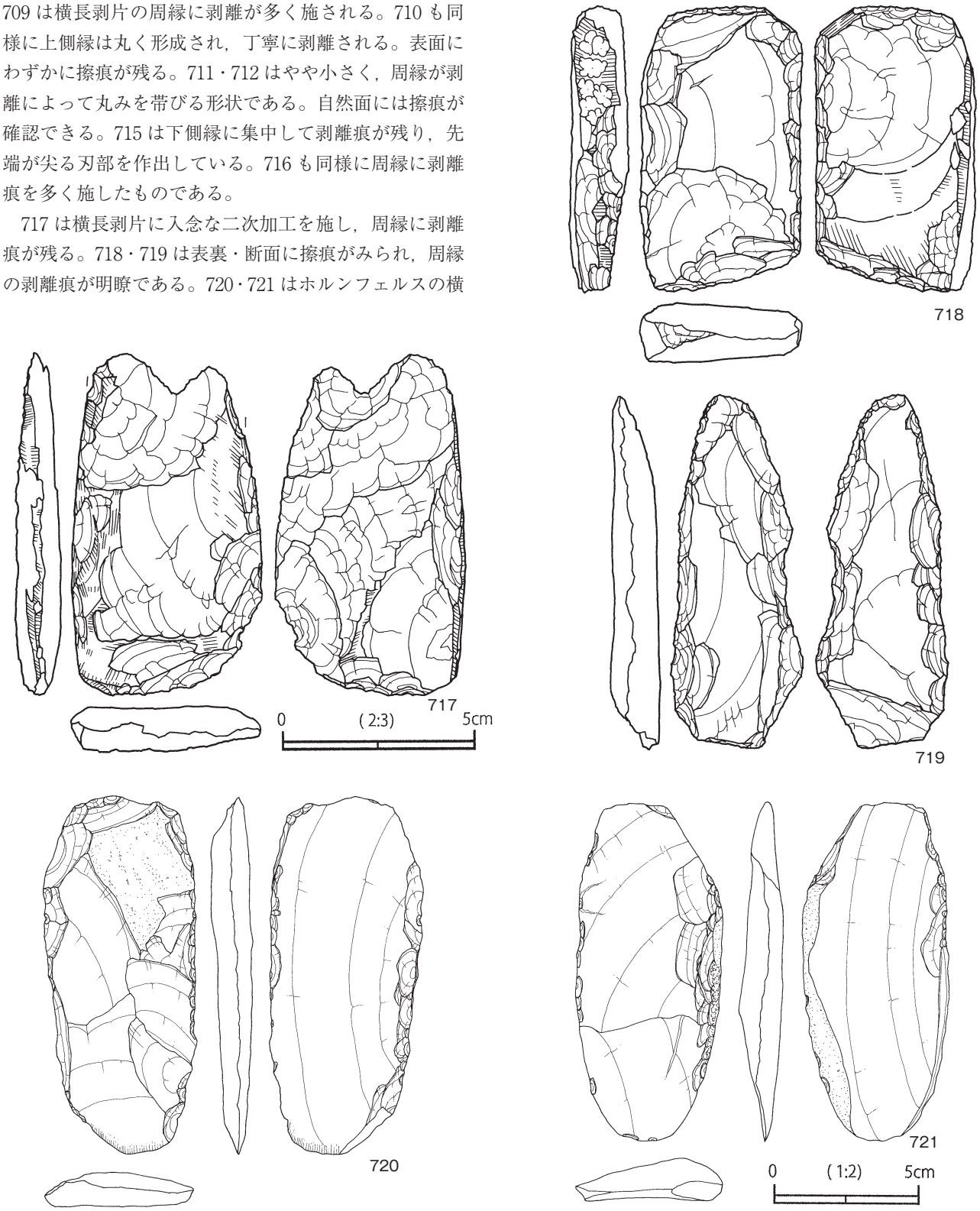
第 136 図　縄文時代の石器 17

工によって刃部が作出されている。頭部は一部欠損している。刃部や周縁の剥離痕が少なく，刃部の鋭さが甘いため加工途中の未成品の可能性がある。708 は 706 と大きさや形状が類似している。頭部が欠損しているが，両縁には敲打痕，腹部には擦痕が残る。

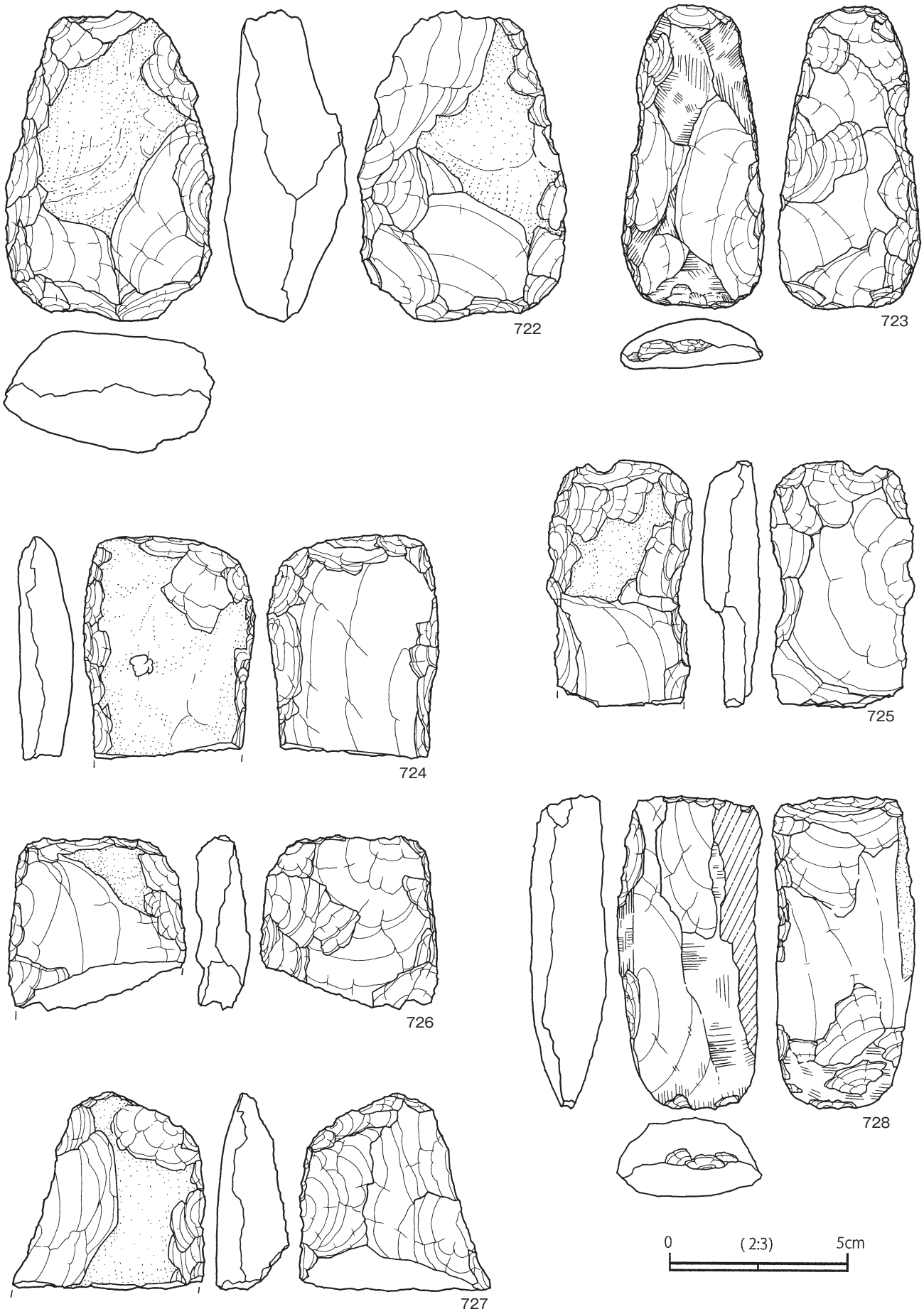
709～716 はホルンフェルスを素材としたものである。709 は横長剥片の周縁に剥離が多く施される。710 も同様に上側縁は丸く形成され，丁寧に剥離される。表面にわずかに擦痕が残る。711・712 はやや小さく，周縁が剥離によって丸みを帯びる形状である。自然面には擦痕が確認できる。715 は下側縁に集中して剥離痕が残り，先端が尖る刃部を作出している。716 も同様に周縁に剥離痕を多く施したものである。

717 は横長剥片に入念な二次加工を施し，周縁に剥離痕が残る。718・719 は表裏・断面に擦痕がみられ，周縁の剥離痕が明瞭である。720・721 はホルンフェルスの横長剥片を利用した打製石斧である。右側縁や頭部に剥離面が残り，左側縁に打点が多く残る。刃部の断面は薄く尖る形状である。

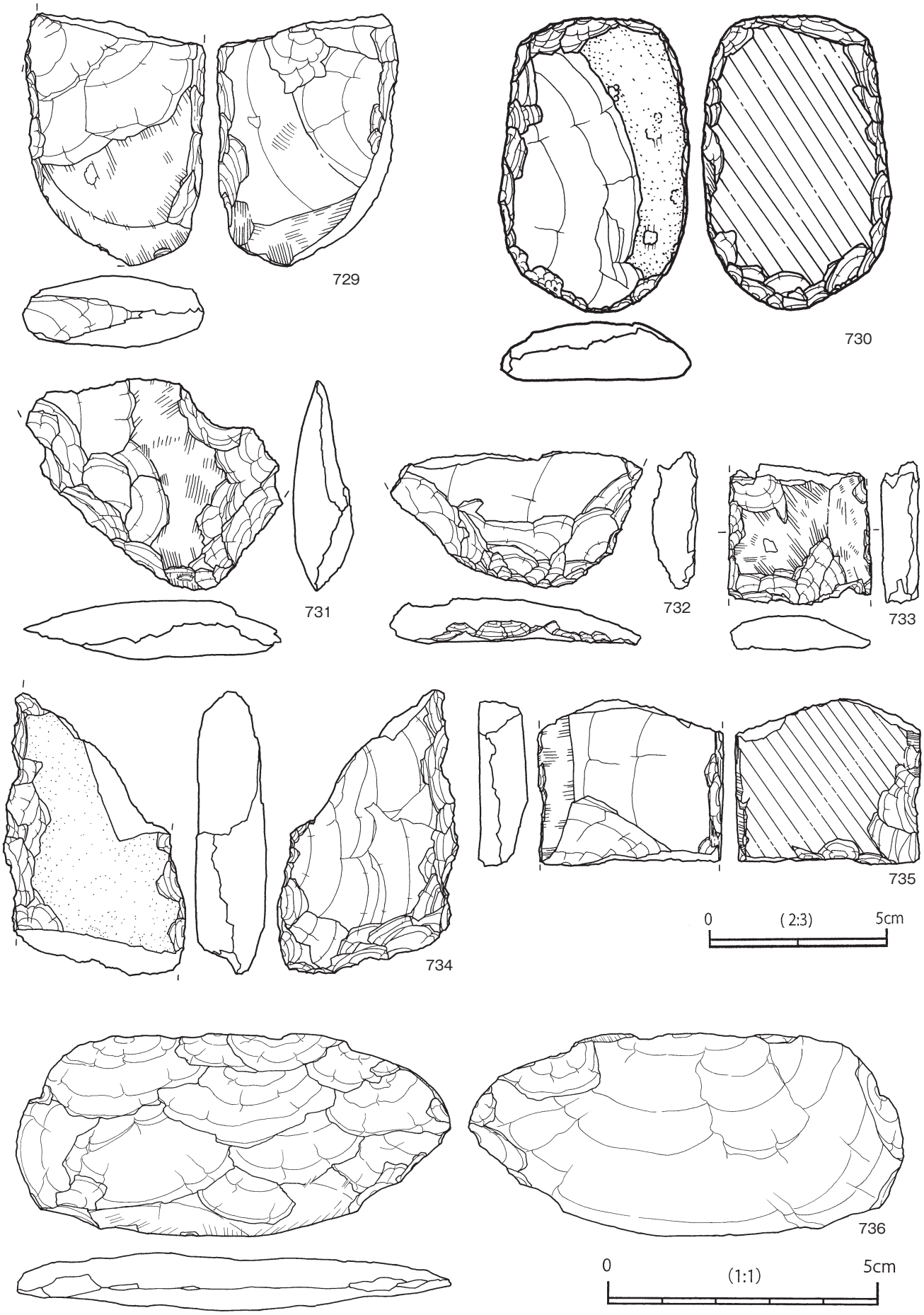
722 は表裏に自然面を残し，右側縁に細かい剥離が施される。断面に厚みがある。724 は表面に施された大き



第 137 図　縄文時代の石器 18



第 138 図　縄文時代の石器 19

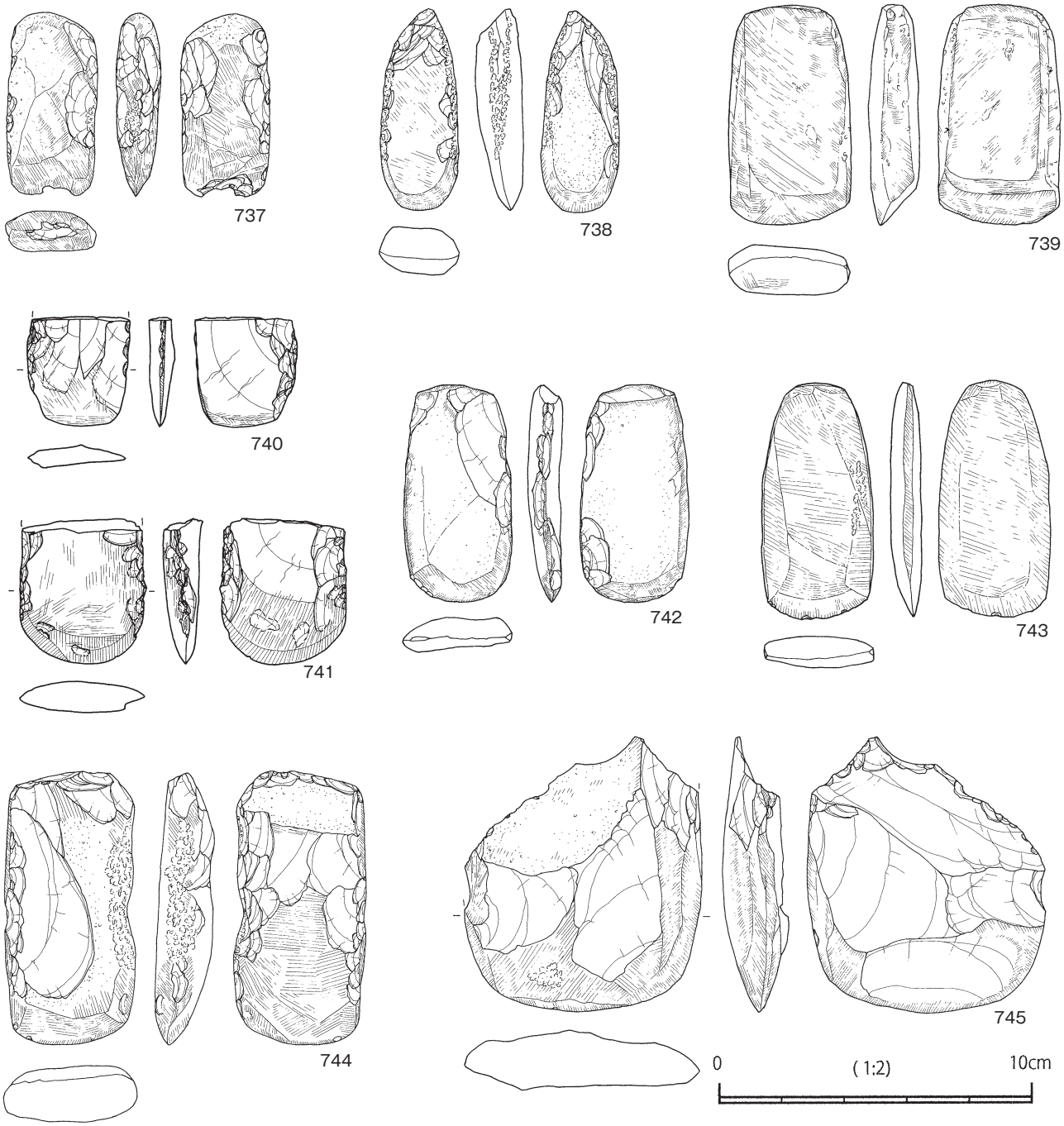


第 139 図　縄文時代の石器 20

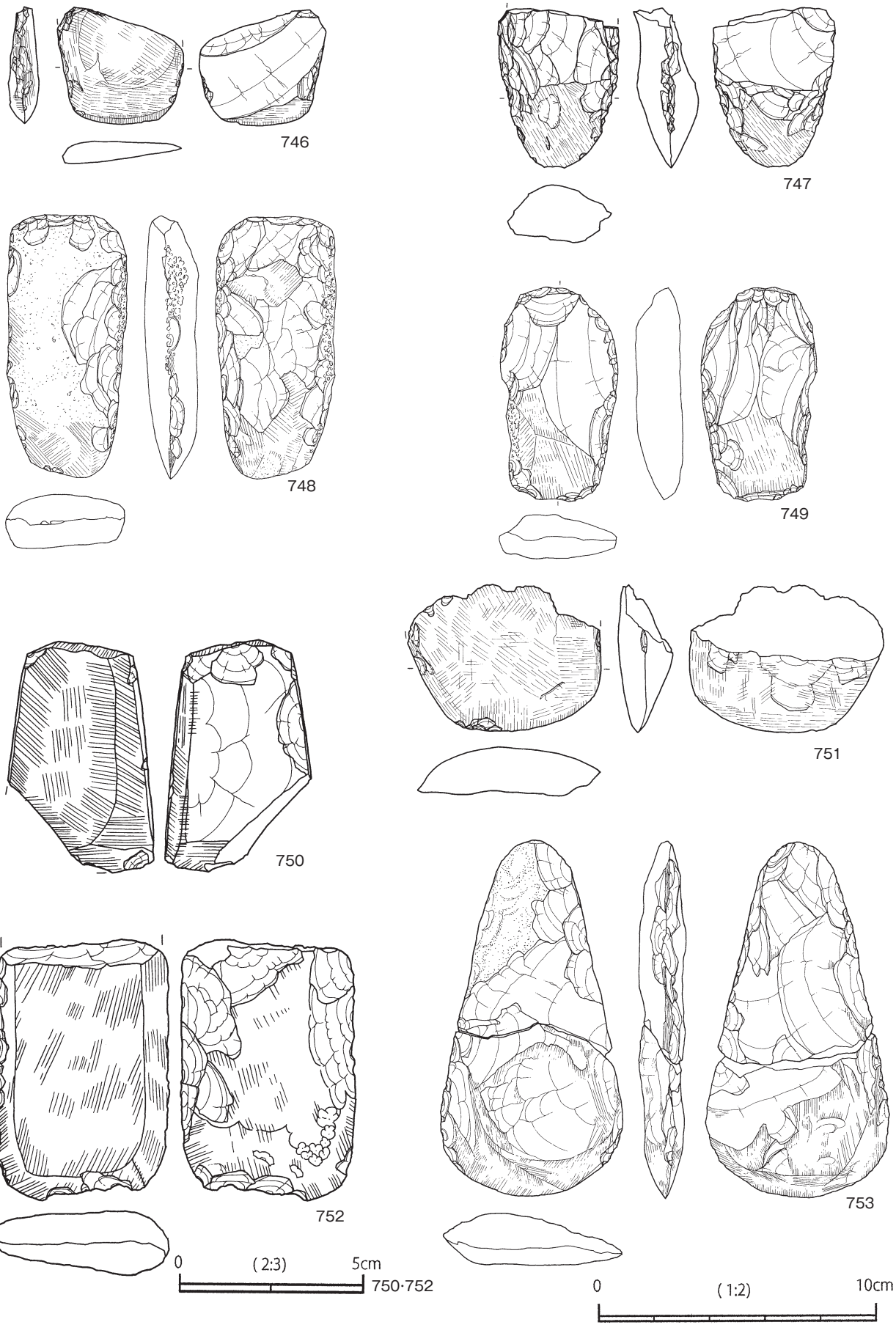
な剥離により断面が剥がれている。724～727 の周縁は丸みを帯びるように剥離が施される。

729～736 は磨製石斧・打製石斧に二次加工を施したものである。729 は石斧の刃部片である。表裏に擦痕が確認でき，側縁部に剥離痕が残る。730 は周縁に丁寧に剥離が施される。敲打具と思われる。731・732 は石斧の刃部に二次加工が施されたものである。

737 は刃部が欠けており，両側縁の剥離面は大きい。丸い頭部は素材面が残り，刃部は鋭く尖る。比較的小さい製品である。738 は小さく縦長の形状で，刃部と表面を研磨し，両側縁は敲打痕が残る。739 は表裏・両側縁ともに入念な研磨が施されている。刃部は鋭く断面は扁平な形状を呈する。両面と側面の境に明瞭な稜が観察できる。740・741 は頭部が欠損した刃部である。741 は左側縁に打点があり，刃部にかけては鋭く仕上げている。表裏に研磨が確認できる。742 は 743 と形状や大きさが類似している。刃部と左側縁に細かく研磨が残る。743 はハリ質安山岩を素材とする磨製石斧である。表裏及び両側縁は丁寧な研磨により加工されている。断面形状も薄く安定している。744 はホルンフェルスを素材としている。全体の形状は 739 に近く，表面に大きな剥離面が残り，右側縁に敲打痕がみられる。745 は表裏，両側縁



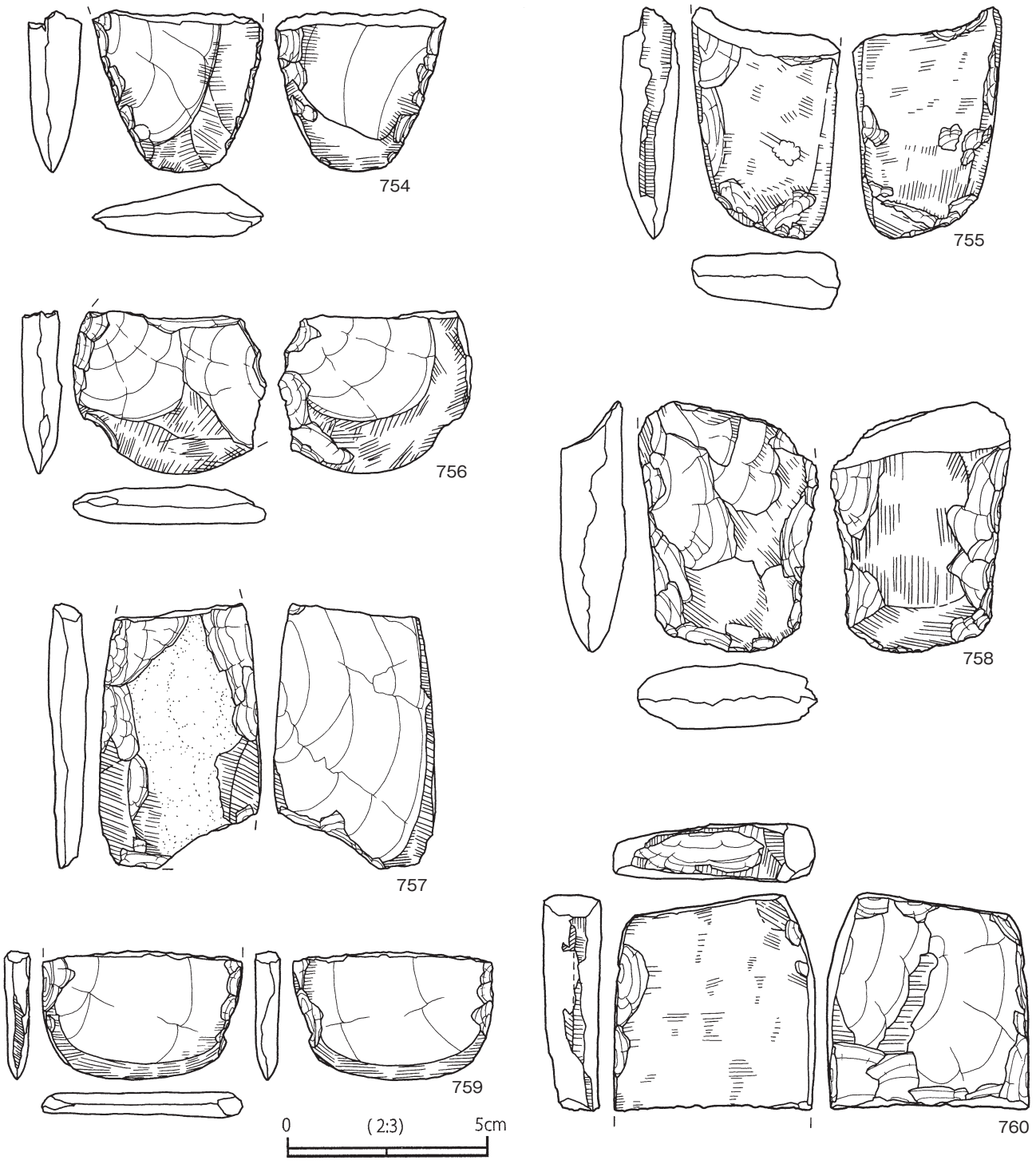
第 140 図　縄文時代の石器 21



第 141 図　縄文時代の石器 22

に研磨が施されているが，使用後の剥離面が多い。表に一部敲打痕がみられ，破断した裏面に剥離痕がみられることから二次加工して再利用されたものと考えられる。

746 は磨製石斧の刃部である。表面に研磨が施され，裏面は大きな剥離面が残る。747 はホルンフェルスを素材とするもので，両側縁に剥離痕が残る。748 はホルンフェルスを素材としたやや大きめのものである。敲打痕は両側縁にみられ，裏面はほとんど剥離面である。749 は頭部の一部に素材面を残し，表裏に研磨が確認できるが，刃部は欠損している。750 はやや大きめの形状で，表面と断面に擦痕が多くみられる。裏面に剥離痕が残る。751 は頁岩を素材とする刃部である。断面形状は 739 や 745 と類似しており，表裏に丁寧な研磨を施し，鋭い刃部を作出している。752 は左側縁に連続的な調整剥離がみられる。刃部はわずかに剥離痕が残る。753 は頁岩製の撥形の磨製石斧である。表裏ともに大きく剥離されている。側縁は大きい剥離痕が残り，刃部の形状は丸く，丁寧に研磨して作出されている。



第 142 図　縄文時代の石器 23

754～759 は刃部周縁に剥離痕が残る。表裏に擦痕が多く残り，局部磨製石斧に再加工を施したものと思われる。757 は表に自然面を残し，周縁に剥離が施される。760 は上部と刃部を欠損しており，表・上側面・左側縁に擦痕が残る。

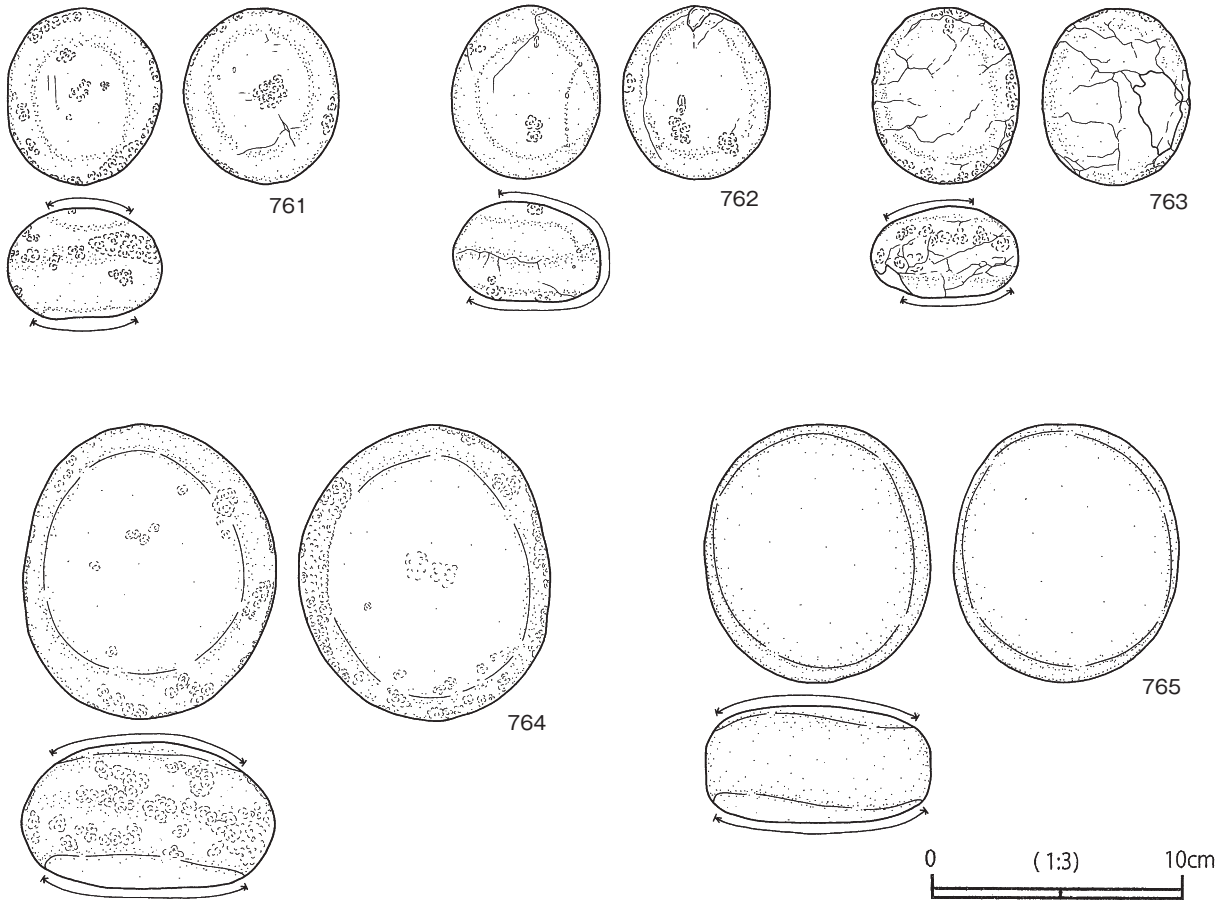
磨石・敲石（第 143～148 図　761～805）

761～763 は砂岩を素材とした長径 6.9㎝の小さな円形の磨石である。表裏に磨面が観察される。わずかに敲打痕も残る。764･765 は砂岩を素材としたもので長径 11㎝程である。764 は右側面と下側面に敲打痕が多いが，765 は敲打痕がなく表裏に平坦な磨面が形成されている。

766・767 は小さな楕円形で，下側面に敲打痕が残る。768 は砂岩を素材としており，下側面から右側面にかけて敲打痕が残っている。769 は凝灰岩を素材とする磨石で，断面は丸くボールのような形状である。770 は敲打痕がなく，磨面が残っている。771 はやや大きめのもので，わずかに敲打痕が残る。772 は表の中心部と裏面に平滑面が形成される。これらは砂岩を素材としている。773 は裏面に平滑面が形成されている。774 は花崗岩を素材とする磨・敲石で，比較的平坦な磨面が形成されている。側面には敲打痕が顕著に観察できる。775･776 は敲石で，775 は表裏面の中心部と側縁部に敲打痕が残っている。776 は不定形で表裏面と周側縁にやや大きめの敲打痕が明瞭に残る。

777 は安山岩を素材としたものである。下側面に敲打痕が集中する楕円形を呈する。裏面に磨面がみられる。778 は花崗岩を素材とするものである。下側面に敲打痕が確認でき，表裏に平滑面が形成されている。779 は砂岩の磨石である。表裏･側面の敲打痕はみられなかった。780 は花崗岩を素材とした磨・敲石である。頭部から左側面は敲打痕がわずかにみられる。781 は砂岩を素材としており，上側面と下側面の一部が欠損しているが，裏面に平滑面がみられる。782 は表裏・両側面に擦痕があり，磨面は光沢がみられる。783 は中心部に大きな敲打痕が確認できる。784 は断面に厚みがあるが，幅は狭く，縦に伸びる形状である。785・786 は砂岩を素材とした磨・敲石で，大きさや形状が類似したものである。786 は完形で，中心部や下側面に敲打痕が残る。785 はやや厚みがあるが，表裏の平滑面がはっきりしている。787 は安山岩を素材とした磨石である。表裏全面に擦痕がみられ，磨面は光沢を保っている。

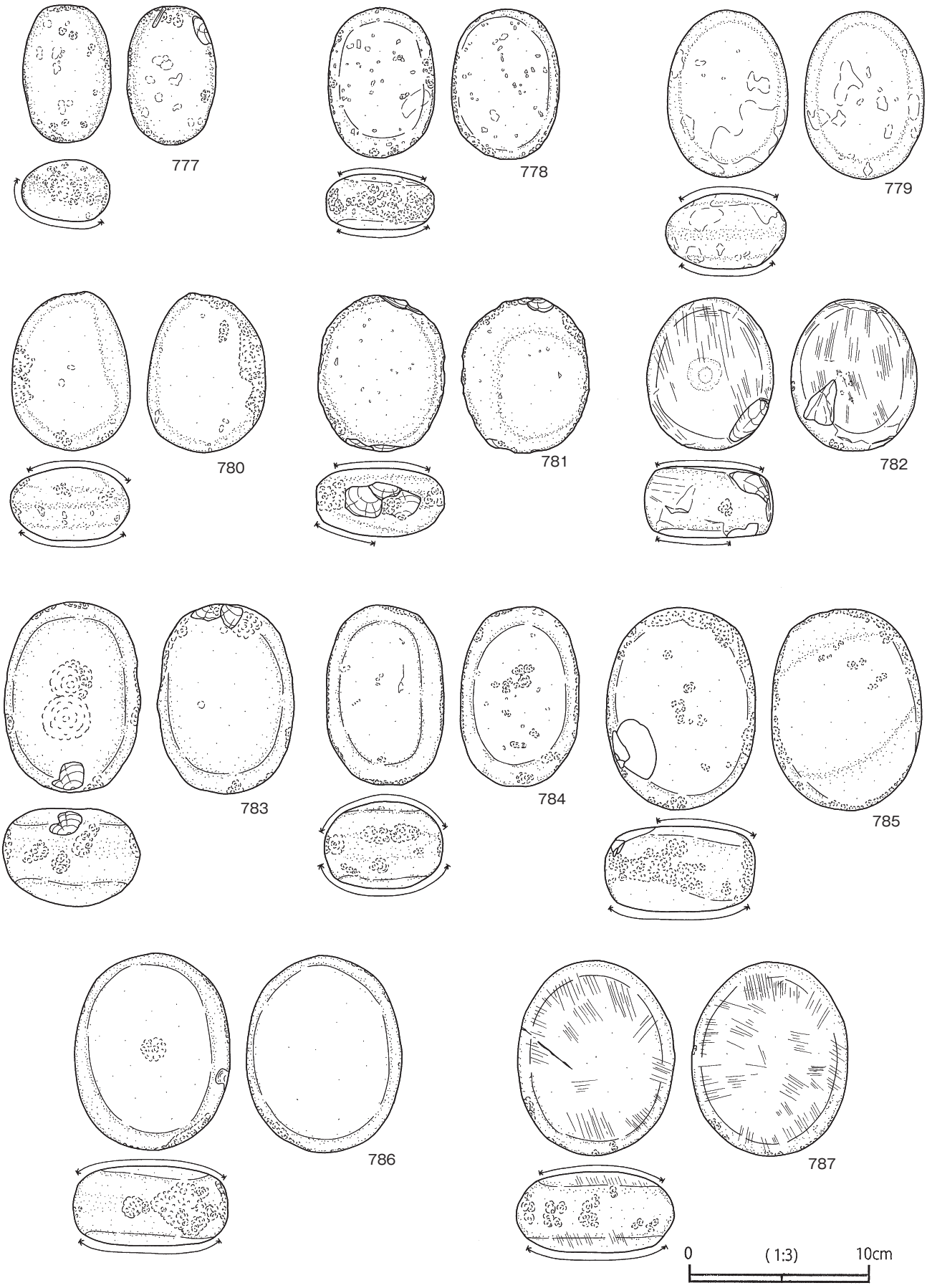
788 は花崗岩を素材としたもので，磨面は平滑面を成しており，上下側面に敲打痕が残る。789 は凝灰岩を素材とする磨石で，厚みがあり重い。表裏の中心部は敲打による擦り減りが確認できる。上下側面・左側面は敲打痕が集中しており平坦面を成している。790 は縦に伸び



第 143 図　縄文時代の石器 24



第 144 図　縄文時代の石器 25



第 145 図　縄文時代の石器 26

る楕円形を呈し，表裏面にまばらな敲打痕がみられる。下側面にも敲打痕が残っている。791 は安山岩を素材とした磨･敲石である。表裏に擦痕がみられ敲打痕も残る。792・795 は花崗岩を素材とするもので，下側面に敲打痕が多く残る。793 は砂岩を素材とする磨石である。裏面を欠損するが，両面とも磨面が残る。上下側面は敲打痕がみられ，中心部は擦り減りによって凹んでいる。794 は表裏を磨面として下側面に敲打痕が集中している。

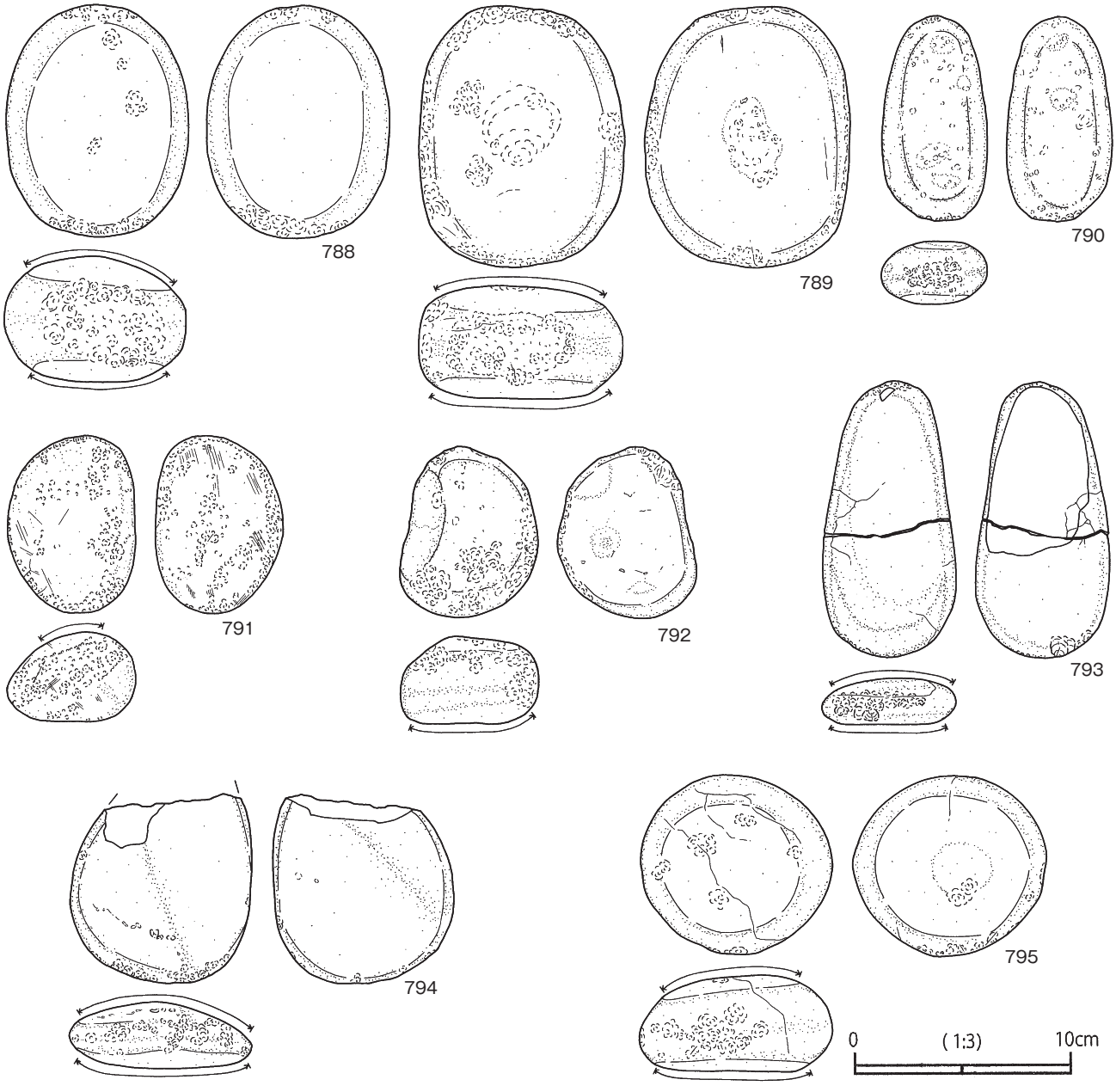
796 は右側面と下側面に敲打痕が残る。797 は花崗岩を素材とした磨・敲石である。上下が欠損しており，右側面にわずかに敲打痕が残る。798 は右側面から下側面，左側面にかけて敲打痕が集中している。799 は右側面に敲打痕が集中しており，左側面にはみられないため右側面を主に使用していたと思われる。800･801 は敲打痕がない。表面に擦痕があり，磨面に光沢がみられる。802 は砂岩を素材とした磨・敲石である。長径 19.6cm程で縦に伸びる形状である。上下側面に敲打痕が残る。

803・804 は中心から下を欠損しているが，上側面に敲打痕が多く残る。805 は砂岩を素材とした磨・敲石で，表面は擦痕が多く光沢がある。左側面に敲打痕が残る。

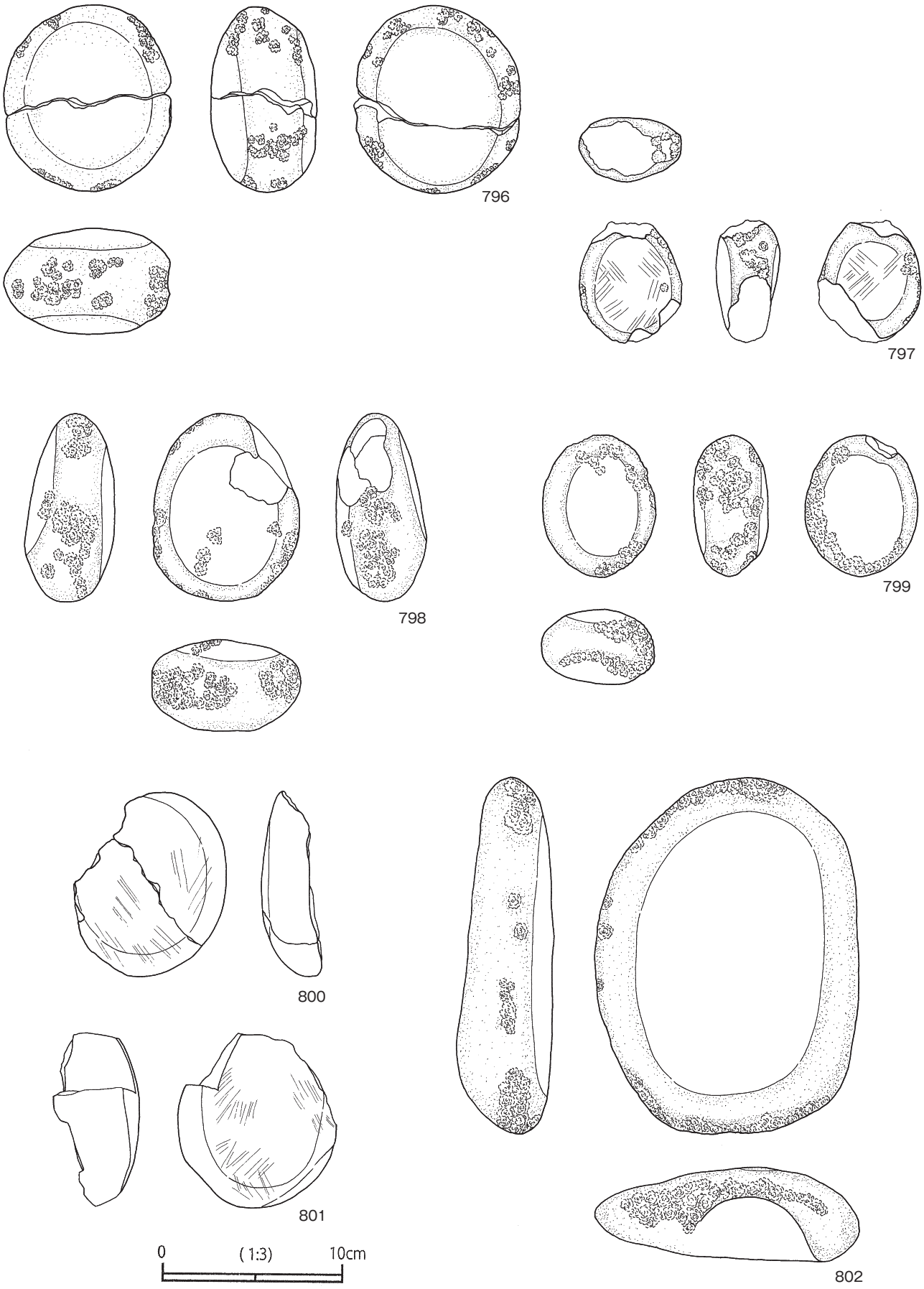
礫器（第 148・149 図　806～809）

806～809 は磨石や敲石等に使用される礫が加工されたものである。806 は安山岩を素材としたもので，素材面の一部に剥離が施される。807 は砂岩製で，連続的な剥離痕が一部みられる。808 は表面に擦痕が確認でき，右側面から下側面に敲打痕が確認できる。磨・敲石を加工したものと思われ，裏面にもわずかに剥離痕が残る。

809 は砂岩製の礫石器である。表面は擦痕の擦面がみ



第 146 図　縄文時代の石器 27



第 147 図　縄文時代の石器 28

られ，下側面に剥離痕と敲打痕が確認できる。

石錘（第 149 図　810～812）

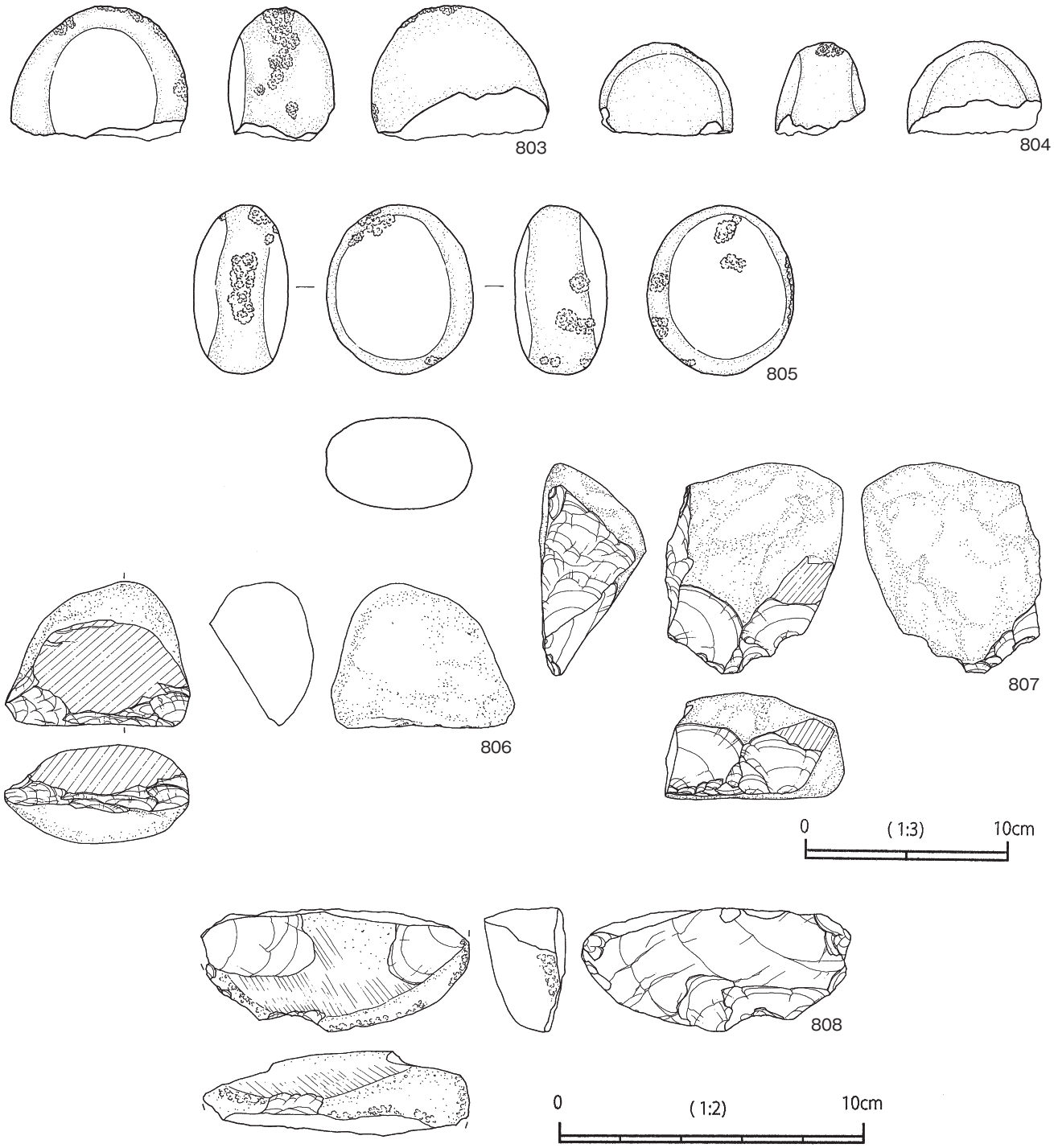
810～812 は安山岩を素材とした石錘である。811・812 は楕円形状を呈し，両側面に紐掛部として使用された凹みがあり，表裏ともに磨面がみられる。810 はやや小さめで，断面に厚みがある。両側面の凹みは少ない。

砥石（第 149 図　813～815）

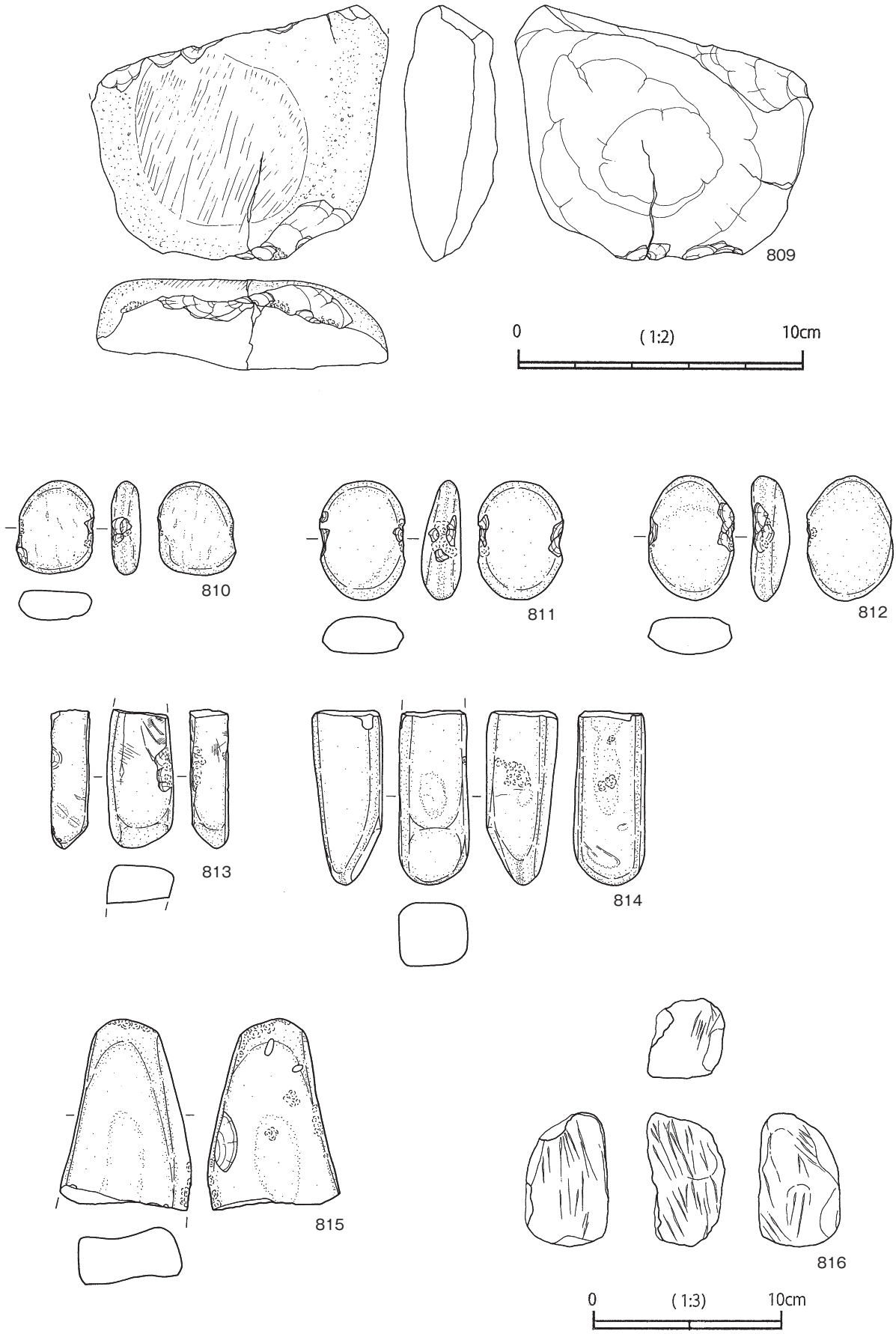
813～815 は砂岩を素材とした砥石である。813 は両側面ともに磨面があり，右側面の一部に敲打痕がみられる。814 は磨面の中心部が丸く凹んでいる。腹部で破断しており，表面の一部が被熱している。右側面と裏面に敲打痕が残っている。815 は被熱により石が焼けている。表裏・両側面に磨面が明瞭に確認できる。断面は磨面の擦り減りにより中心部が凹んでいる。上側面と右側面は敲打痕が残る。

線刻礫（第 149 図　816）

816 は安山岩を素材とした線刻礫である。礫の縦方向に細い工具で線刻されている。表と両側面と上側面にも一部みられる。



第 148 図　縄文時代の石器 29



第 149 図　縄文時代の石器 30

第 28 表　縄文時代の石器観察表 1

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	取上番号	備考
114	548	石鏃	チャート	C-14	Ⅵ	1.5	(1.5)	0.4	0.6	6501	
	549	石鏃	チャート	D-14	Ⅵ	(1.6)	1.8	0.3	0.7	6405	
	550	石鏃	ob 腰岳	D-17	Ⅶ	1.9	1.5	0.3	0.7	13307	
	551	石鏃未成品	ob 日東	D-16	Ⅶ	1.8	1.8	5.0	1.4	11858	
	552	石鏃	チャート	B-11	Ⅶ	(2.1)	(1.7)	0.4	1.0	10981	
	553	石鏃	チャート	E-11	Ⅵ	(1.8)	1.7	0.5	1.4	4523	
	554	石鏃	ハリ質安山岩	E-16	Ⅵ	(1.0)	1.7	0.4	0.7	7833	
	555	石鏃未成品	チャート	C-13	Ⅶ	(1.6)	(1.7)	0.4	1.0	1627	
	556	石鏃	チャート	D-16	Ⅶ	1.2	1.0	0.2	0.3	11879	
	557	石鏃	チャート	D-17	Ⅶ	1.3	1.2	0.2	0.2	3773	
	558	石鏃	ob 桑ノ木津留	D-11	Ⅵ	1.3	1.0	0.2	0.2	4682	
	559	石鏃未成品	ob 桑ノ木津留	C-16	Ⅶ	1.2	(0.9)	0.3	0.3	7634	
	560	石鏃	ob 腰岳	D-15・16	Ⅶ	1.7	(1.5)	5.0	0.8	一括	
120	561	石鏃	チャート	E-16	表土	1.5	1.5	0.3	0.6	一括	
	562	石鏃	チャート	C-17	Ⅶ	1.7	1.8	0.3	0.6	9496	
	563	石鏃	ob 針尾	C-12	Ⅶ	(1.8)	1.5	0.5	0.9	5933	
	564	石鏃	ob 腰岳	B-12	Ⅵ	(2.0)	(1.8)	0.4	1.1	13052	
	565	石鏃	チャート	F-17	Ⅵ	(1.4)	1.4	0.3	0.5	4389	
	566	石鏃	ob 三船	D-16	Ⅶ	2.0	2.3	0.5	1.4	13359	
	567	石鏃	ob 桑ノ木津留	C-17	Ⅶ	(1.3)	1.4	0.3	0.4	3485	
	568	石鏃	チャート	B-14	Ⅶ	2.0	1.7	0.3	0.7	一括	
	569	石鏃	ob 桑ノ木津留	D-10	Ⅶ	1.9	(1.6)	0.3	0.6	9669	
	570	石鏃	ob 桑ノ木津留	C-17	Ⅶ	(1.8)	(1.3)	0.3	0.4	3600	
	571	石鏃未成品	ob 針尾	D-11	Ⅵ	(1.3)	(1.1)	0.2	0.2	4657	
	572	石鏃	チャート	E-19	Ⅶ	2.0	1.3	0.2	0.6	12062	
	573	石鏃	水晶	D-16	Ⅶ	(1.6)	(1.2)	0.4	0.6	11525	
	574	石鏃	ハリ質安山岩	D-18	Ⅶ	(1.8)	1.9	0.3	0.8	9521	
	575	石鏃	鉄石英	B-11	Ⅶ	(1.4)	(0.9)	0.3	0.3	12890	
	576	石鏃	ハリ質安山岩	C-14	Ⅵ	3.0	1.7	0.5	2.0	8540	
	577	石鏃	ハリ質安山岩	C-19	Ⅶ	3.2	2.3	0.4	1.8	11682	
	578	石鏃未成品	チャート	D-14	Ⅵ	1.7	1.6	0.3	0.8	6454	
	579	石鏃未成品	水晶	C-17	Ⅶ	1.7	(1.2)	0.2	0.5	12026	
	580	石鏃未成品	チャート	D-14	Ⅵ	1.8	(1.7)	0.4	1.1	7095	
	581	石鏃	チャート	E-12	Ⅶ	2.0	(1.9)	0.4	1.3	6153	
	582	石鏃	チャート	C-16	Ⅶ	1.9	1.7	0.4	0.9	7625	
	583	石鏃	ハリ質安山岩	D-13	Ⅶ	2.2	2.3	0.6	2.3	6188	
	584	石鏃	チャート	D-20	Ⅶ	2.4	(1.7)	0.5	1.7	12105	
	585	石鏃	チャート	B-13	Ⅶ	(2.2)	(1.4)	0.4	0.9	1761	
121	586	石鏃	チャート	B-12	Ⅵ	2.3	(1.3)	0.4	0.7	13053	
	587	石鏃	チャート	C-11	Ⅵ	2.5	1.9	0.3	1.0	2268	
	588	石匙	ハリ質安山岩	F-16	Ⅶ	2.6	3.8	0.7	6.4	11893	
	589	石匙	珪質頁岩	E-19	Ⅶ	3.6	(6.6)	0.8	12.4	11312	
122	590	石核	ob 三船	C-13	Ⅶ	2.5	1.4	1.4	4.1	5143	
	591	石核	ob 三船	B-16	Ⅶ	2.0	2.5	1.3	4.6	13418	
	592	石核	ob 三船	D-17	Ⅷ	1.5	1.6	1.5	2.6	9493	
	593	石核	ob 三船	D-16	Ⅵ	2.6	2.9	1.2	7.3	10585	
	594	石核	ob 腰岳	C-14	Ⅵ	1.5	2.3	0.8	2.4	7144	
	595	石核	ob 腰岳	C-11	Ⅶ	4.2	2.8	0.9	9.0	12841	
	596	石核	ob 桑ノ木津留	C-10	Ⅵ	3.9	2.6	1.5	13.0	10465	
	597	石核	ob 三船	E-16	Ⅵ	(1.6)	1.6	0.9	1.8	4144	
	598	石核	ob 腰岳	E-17	Ⅵ	3.1	3.1	1.5	7.6	4146	
	599	石核	ob 針尾	D-16	Ⅶ	(3.1)	(3.5)	1.6	11.0	12485	
	600	石核	ob 針尾	F-19	Ⅶ	3.0	2.9	1.6	10.5	14219	
123	601	石核	珪質頁岩	C-12	Ⅶ	4.5	4.1	2.4	48.8	1337	
	602	石核	珪質頁岩	B-13	Ⅵ	3.4	3.9	1.5	13.1	7050	
	603	石核	ハリ質安山岩	B-13	Ⅵ	8.3	5.3	1.9	63.0	7051	
	604	石核	水晶	E-16	Ⅵ	3.6	3.2	2.3	21.1	4094	
	605	石核	水晶	D-13	Ⅶ	5.6	4.9	2.9	58.1	一括	
	606	石核	水晶	D-16	Ⅵ	3.3	2.9	1.8	17.2	10590	
	607	石核	水晶	D-12	−	3.7	4.4	2.9	53.3	14521	
	608	石核	水晶	D-14	Ⅵ	3.3	2.0	1.7	11.3	6426	
	609	石核	水晶	D-13	Ⅶ	2.8	1.9	1.3	4.6	7072	
	610	石核	水晶	C-13	Ⅵ	1.6	1.8	1.3	3.4	5150	
	611	石核	水晶	D-14	Ⅵ	3.6	2.4	1.7	14.1	7105	
	612	石核	水晶	C-17	Ⅶ	2.6	2.9	1.8	9.4	11186	
	613	石核	水晶	C-16	Ⅶ	5.3	3.4	2.0	32.4	3249	
	614	石核	水晶	E-13	Ⅶ	6.5	5.1	4.1	77.2	5052	

第 29 表　縄文時代の石器観察表２

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
124	615	石核	水晶	D-11	Ⅶ	2.3	4.6	1.3	10.5	8223	
	616	石核	ob 針尾	E-16	Ⅶ	2.7	2.5	1.7	9.3	4140	
	617	石核	チャート	D-11	Ⅵ	2.5	3.1	1.8	8.2	5795	
	618	石核	ob 桑ノ木津留	B-16	Ⅵ	3.7	(1.8)	1.1	4.3	13394	
	619	石核	チャート	D-16	Ⅶ	3.1	3.8	2.1	18.4	10546	
	620	石核	水晶	B-16	Ⅶ	5.3	2.7	1.1	16.2	13693	
	621	石核	ob 針尾	B-16	Ⅵ	3.0	2.3	1.8	10.6	13393	
125	622	剥片石器	ob 日東	C-16	Ⅶ	1.4	1.7	0.5	1.2	3265	二次加工剥片
	623	剥片石器	ob 桑ノ木津留	D-12	Ⅶ	(1.5)	1.7	0.6	1.2	722	二次加工剥片
	624	剥片石器	チャート	C-16	Ⅶ	2.0	2.4	0.5	2.5	13372	二次加工剥片
	625	剥片石器	水晶	B-16	Ⅶ	2.2	2.9	0.9	5.7	13421	二次加工剥片
	626	剥片石器	チャート	B-16	Ⅶ	2.6	3.0	0.7	5.3	13400	二次加工剥片
	627	剥片石器	頁岩	C-17	Ⅶ	2.2	2.4	0.6	2.8	11197	二次加工剥片
	628	剥片石器	ob 姫島	F-16	Ⅶ	2.0	3.0	0.4	2.2	4414	二次加工剥片
	629	剥片石器	チャート	C-14	Ⅵ	(1.8)	(2.6)	1.0	1.0	6487	二次加工剥片
	630	剥片石器	ob 針尾	B-16	Ⅶ	1.8	4.2	1.0	7.6	13397	二次加工剥片
	631	剥片石器	チャート	D-14	Ⅵ	2.5	2.3	0.8	4.5	7148	二次加工剥片
	632	剥片石器	ハリ質安山岩	D-10	Ⅵ	2.8	2.4	0.7	4.2	9022	二次加工剥片
	633	剥片石器	チャート	D-15	Ⅶ	2.6	3.1	1.0	5.6	13658	二次加工剥片
126	634	剥片石器	ob 桑ノ木津留	D-9	Ⅵ	(2.1)	(1.1)	0.4	0.8	5036	
	635	剥片石器	水晶	C-17	Ⅶ	3.2	1.1	0.8	2.6	9513	
	636	剥片石器	ob 三船	C-14	Ⅵ	(2.2)	(1.2)	0.6	1.1	6466	
	637	剥片石器	水晶	E-18	Ⅶ	2.9	1.4	0.6	2.8	13318	
	638	剥片石器	チャート	D-14	Ⅵ	2.9	1.3	1.0	3.7	6417	
	639	剥片石器	チャート	D-10	Ⅵ	4.1	1.9	1.1	8.6	5784	
	640	剥片石器	チャート	C-14	Ⅵ	3.3	1.5	0.7	3.3	8517	
	641	剥片石器	チャート	D-13	Ⅶ	3.6	1.5	1.0	6.3	1536	
	642	剥片石器	ob 針尾	D-17	Ⅶ	3.7	1.6	0.7	4.4	9494	
	643	剥片石器	ob 日東	B-16	Ⅶ	4.8	1.6	1.1	6.1	13430	
	644	剥片石器	チャート	B-16	Ⅶ	4.6	1.7	0.8	7.9	13426	
	645	剥片石器	ob 針尾	E-16	Ⅵ	3.7	1.9	1.0	5.2	4119	二次加工剥片
	646	剥片石器	ob 姫島	C-16	Ⅶ	3.2	1.2	0.6	1.9	12604	二次加工剥片
	647	剥片石器	ob 桑ノ木津留	D-13	Ⅶ	3.6	1.5	0.7	3.5	11333	二次加工剥片
	648	剥片石器	チャート	C-13	Ⅶ	4.3	2.0	0.7	6.7	1651	
	649	剥片石器	ob 針尾	E-17	Ⅶ	6.0	(2.0)	1.5	17.5	12313	
127	650	剥片石器	チャート	D-14	Ⅵ	2.6	2.1	1.2	7.1	8496	二次加工剥片
	651	剥片石器	ハリ質安山岩	B-15	Ⅶ	3.0	2.9	0.9	10.4	13998	
	652	剥片石器	水晶	B-17	Ⅶ	(3.7)	3.8	1.2	16.3	3493	
	653	剥片石器	頁岩	C-12	Ⅶ	2.8	3.8	1.7	13.2	1858	
128	654	剥片石器	ob 桑ノ木津留	C-21	Ⅶ	1.8	1.3	0.8	1.3	14197	楔形石器
	655	剥片石器	ob 日東	C-17	Ⅶ	1.9	1.7	0.6	2.0	11196	石錐
	656	剥片石器	玉髄	D-13	Ⅶ	2.3	1.9	0.9	3.6	−	石錐
	657	剥片石器	ob 桑ノ木津留	C-14	Ⅵ	1.5	0.9	0.3	0.3	6527	二次加工剥片
	658	剥片石器	チャート	D-11	Ⅵ	2.9	1.9	1.0	5.6	5811	楔形石器
	659	剥片石器	チャート	C-16	Ⅶ	2.9	1.9	1.0	5.7	3364	楔形石器
	660	剥片石器	ob 腰岳	C-11	Ⅶ	2.3	1.7	0.8	2.9	12854	楔形石器
	661	剥片石器	チャート	D-12	−	2.8	1.7	0.6	3.0	14523	使用痕剥片
	662	剥片石器	チャート	D-14	Ⅵ	2.1	2.4	0.9	4.4	8482	掻器
	663	剥片石器	チャート	D-13	Ⅶ	2.2	3.1	1.0	5.9	5425	楔形石器
	664	剥片石器	水晶	E-15	Ⅶ	2.6	2.1	0.8	5.2	4049	掻器
	665	剥片石器	ob 桑ノ木津留	D-14	Ⅶ	2.4	2.0	1.2	4.1	10472	掻器
	666	剥片石器	ob 針尾	E-16	Ⅶ	2.4	2.9	1.0	6.4	5359	掻器
129	667	剥片石器	ob 針尾	B-16	Ⅶ	(3.0)	2.5	1.2	7.6	13809	掻器
	668	剥片石器	ob 針尾	D-15	Ⅶ	(4.6)	3.3	1.3	17.5	10525	掻器
	669	剥片石器	ハリ質安山岩	D-14	Ⅵ	4.4	6.2	2.0	40.4	6371	掻器
130	670	剥片石器	ハリ質安山岩	B-16	Ⅶ	2.7	2.7	0.9	5.9	13811	削器
	671	剥片石器	ob 桑ノ木津留	D-10	Ⅵ	1.6	1.2	0.3	0.4	4918	削器
	672	剥片石器	ob 三船	F-17	Ⅶ	1.7	1.0	0.7	1.3	14300	削器
	673	剥片石器	水晶	C-16	Ⅶ	1.8	1.4	0.5	1.4	11154	削器
	674	剥片石器	ob 腰岳	E-14	Ⅵ	(2.3)	1.7	0.4	1.2	7079	削器
	675	剥片石器	水晶	E-18	Ⅶ	2.8	(1.5)	0.8	2.7	12372	削器
	676	剥片石器	ob 針尾	D-18	Ⅶ	3.1	(1.7)	0.7	2.6	7826	削器
	677	剥片石器	ハリ質安山岩	D-14	Ⅵ	2.5	2.3	0.6	2.4	6380	削器
	678	剥片石器	ob 針尾	C-17	Ⅶ	1.4	2.1	0.5	0.9	9515	削器
	679	剥片石器	ハリ質安山岩	E-14	Ⅵ	3.8	2.9	1.3	15.3	7081	削器
	680	剥片石器	珪質頁岩	C-17	Ⅶ	3.9	2.3	0.7	6.6	12023	削器
	681	剥片石器	水晶	C-13	Ⅶ	2.6	2.2	1.1	4.8	10510	削器

第 30 表　縄文時代の石器観察表３

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
130	682	剥片石器	ハリ質安山岩	F-16	Ⅶ	3.0	2.7	1.0	4.3	10831	削器
	683	剥片石器	チャート	D-11	Ⅵ	3.4	3.2	1.1	11.1	4680	削器
131	684	剥片石器	ハリ質安山岩	E-14	Ⅵ	3.7	3.2	1.4	9.9	6361	削器
	685	剥片石器	ob 日東	F-16	Ⅵ	3.2	3.5	1.0	7.8	4430	削器
	686	剥片石器	ハリ質安山岩	D-10	Ⅵ	7.8	6.1	1.3	62.4	5467	削器
132	687	剥片石器	ホルンフェルス	D-11	Ⅵ	6.3	3.7	1.0	23.5	6736	
	688	剥片石器	ホルンフェルス	E-10	Ⅵ	6.3	3.7	0.7	17.0	5007	
	689	剥片石器	ホルンフェルス	C-13	Ⅵ	8.2	4.0	1.1	31.0	5134	削器
	690	剥片石器	ホルンフェルス	E-12	Ⅶ	6.5	2.2	0.6	8.0	440	
	691	剥片石器	ホルンフェルス	C-11	－	6.4	4.6	1.2	42.0	14380	
	692	剥片石器	ホルンフェルス	D-16	Ⅶ	(12.2)	(4.8)	0.7	31.5	－	削器
	693	剥片石器	凝灰岩	D-16	Ⅵ	7.3	5.0	1.2	51.0	3157	
	694	剥片石器	ホルンフェルス	B-16	Ⅵ	(2.6)	4.1	1.3	16.0	14082	
	695	剥片石器	安山岩	B-16	Ⅶ	5.3	6.0	1.5	32.5	13419	掻器
	696	剥片石器	砂岩	C-12	Ⅶ	6.7	6.9	1.2	46.5	1093	
133	697	礫石器	凝灰岩	D-15	Ⅶ	(6.8)	(8.2)	1.7	83.0	3966	
	698	礫石器	安山岩	D-10	Ⅶ	(8.9)	(10.9)	2.0	205.0	8347	
	699	礫石器	凝灰岩	C-11	Ⅵ	(12.4)	(15.9)	1.7	310.5	12959	
	700	礫石器	安山岩	C-14	Ⅵ	(4.5)	(8.5)	1.9	60.0	8507	
	701	礫石器	安山岩	F-16	Ⅵ	(4.4)	(6.3)	1.9	60.5	4435	
	702	礫石器	安山岩	C-16	Ⅶ	(10.8)	(10.7)	2.4	245.0	3422	
135	703	打製石斧	ホルンフェルス	D-15	Ⅶ	(10.1)	6.3	3.3	342.5	4037	
	704	打製石斧	ホルンフェルス	F-19	Ⅶ	9.1	3.9	1.5	59.5	14223	
	705	打製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅶ	7.6	7.0	2.0	177.5	9672	
	706	打製石斧	ホルンフェルス	E-11	Ⅶ	10.0	3.4	1.3	52.0	7311	
	707	打製石斧	ホルンフェルス	C-10	Ⅵ	8.7	8.0	2.1	185.0	13584	
	708	打製石斧	ホルンフェルス	C-10	Ⅶ	(7.1)	2.9	1.8	44.6	6801	
136	709	打製石斧	ホルンフェルス	C-16	Ⅶ	(8.1)	4.3	1.6	77.5	11127	
	710	打製石斧	ホルンフェルス	C-10	Ⅵ	8.2	3.7	1.8	60.2	13600	
	711	磨製石斧	ホルンフェルス	C-10	Ⅶ	5.8	3.5	1.1	28.1	12714	
	712	打製石斧	ホルンフェルス	C-15	Ⅶ	(6.8)	3.6	2.0	67.0	3008	
	713	磨製石斧	ホルンフェルス	B-12	Ⅵ	7.1	2.8	1.7	26.1	13046	
	714	打製石斧	ホルンフェルス	D-16	Ⅶ	(5.7)	4.8	1.9	75.7	10567	
	715	打製石斧	ホルンフェルス	E-11	Ⅵ	(8.3)	3.7	2.1	68.8	8823	
	716	打製石斧	ホルンフェルス	E-17	Ⅶ	8.1	3.4	1.8	61.5	10130	
137	717	打製石斧	ホルンフェルス	D-12	Ⅶ	(8.8)	4.9	1.2	53.5	782	
	718	打製石斧	ホルンフェルス	C-10	Ⅶ	7.3	4.1	1.5	75.6	7537	
	719	打製石斧	ホルンフェルス	B-11	Ⅶ	9.2	3.4	1.3	46.5	12884	
	720	打製石斧	ホルンフェルス	D-16	Ⅶ	12.3	5.3	1.4	98.0	3842	
	721	打製石斧	ホルンフェルス	D-16	Ⅶ	11.6	5.0	1.5	85.5	11522	
138	722	打製石斧	ホルンフェルス	C-12	Ⅶ	8.6	5.8	3.4	179.5	1393	
	723	磨製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅵ	8.4	3.9	1.4	53.4	9584	
	724	打製石斧	ホルンフェルス	E-11	Ⅶ	(6.2)	4.7	1.5	62.5	10323	
	725	打製石斧	ホルンフェルス	C-11	Ⅶ	(6.8)	4.0	1.6	53.5	9878	
	726	打製石斧	ホルンフェルス	C-12	－	(4.8)	4.9	1.5	41.0	14403	
	727	打製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅵ	(5.5)	5.3	2.0	59.0	10402	
	728	打製石斧	ホルンフェルス	D-12	Ⅶ	8.7	4.0	2.1	62.5	6823	
139	729	磨製石斧	ホルンフェルス	D-16	Ⅶ	(7.0)	(5.0)	2.0	93.5	3838	
	730	敲打具	ホルンフェルス	D-12	Ⅶ	8.1	5.2	1.6	102.5	573	
	731	打製石斧	ホルンフェルス	D-11	Ⅶ	(5.9)	(7.2)	1.6	57.0	9333	
	732	打製石斧	ホルンフェルス	E-17	Ⅵ	(3.8)	(7.0)	1.2	32.0	12294	
	733	打製石斧	ホルンフェルス	C-17	Ⅶ	(3.9)	3.9	1.0	23.5	7668	
	734	打製石斧	ホルンフェルス	C-12	Ⅶ	(7.9)	5.0	2.0	87.5	5971	
	735	打製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅶ	(4.6)	5.1	1.4	48.4	8124	
	736	打製石斧	ホルンフェルス	D-11	Ⅶ	3.8	8.1	1.1	37.5	9356	
140	737	磨製石斧	ハリ質安山岩	D-16	Ⅶ	5.8	2.8	1.3	37.0	12528	
	738	磨製石斧	ホルンフェルス	C-12	Ⅶ	6.4	2.5	1.5	31.5	2732	
	739	磨製石斧	ハリ質安山岩	D-14	Ⅵ	7.0	3.8	1.6	74.5	8466	
	740	磨製石斧	ホルンフェルス	E-12	Ⅶ	(3.5)	3.3	0.8	10.7	7190	
	741	磨製石斧	ホルンフェルス	D-11	Ⅶ	(4.6)	4.0	1.2	29.0	8259	
	742	磨製石斧	ホルンフェルス	C-15	Ⅶ	6.9	3.5	1.1	38.5	13081	
	743	磨製石斧	ハリ質安山岩	C-17	Ⅶ	7.5	3.5	1.0	41.0	3500	
	744	磨製石斧	ホルンフェルス	E-12	Ⅶ	8.6	4.2	1.8	90.5	78	
	745	磨製石斧	ホルンフェルス	D-11	Ⅵ	(8.7)	7.6	2.1	139.0	8205	
141	746	磨製石斧	ホルンフェルス	E-16	Ⅶ	(4.2)	4.3	1.1	20.3	10855	
	747	磨製石斧	ホルンフェルス	C-12	Ⅶ	(5.7)	4.3	2.3	53.9	6937	
	748	磨製石斧	ホルンフェルス	F-17	Ⅶ	9.4	4.3	1.9	118.0	11350	
	749	磨製石斧	ホルンフェルス	C-11	－	7.6	4.3	1.8	73.0	14382	
	750	磨製石斧	ホルンフェルス	D-18	Ⅶ	(6.2)	(4.0)	0.7	26.1	10075	

第 31 表　縄文時代の石器観察表 4

※（　　）は推定

挿図番号	掲載番号	器種	石材	出土区	層位	長さ	幅	厚さ	重さ	取上番号	備考
						(cm)	(cm)	(cm)	(g)		
141	751	磨製石斧	頁岩	E-10	Ⅵ	(5.3)	(6.9)	2.0	64.7	4971	
	752	磨製石斧	ホルンフェルス	B-17	Ⅶ	(7.0)	4.8	1.7	81.4	12569	
	753	磨製石斧	頁岩	D-18	Ⅶ	12.8	6.6	1.7	142.0	11281	
142	754	磨製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅶ	(5.0)	(4.3)	1.3	23.5	14446	
	755	磨製石斧	ホルンフェルス	E-18	Ⅶ	(5.7)	3.7	1.4	37.4	13155	
	756	磨製石斧	ホルンフェルス	D-10	Ⅵ	(4.0)	(4.8)	1.0	24.9	6696	
	757	磨製石斧	ホルンフェルス	D-11	Ⅵ	(6.5)	(4.0)	0.9	31.8	9774	
	758	磨製石斧	ホルンフェルス	E-11	Ⅶ	(6.2)	4.4	1.6	57.0	8085	
	759	磨製石斧	ハリ質安山岩	E-11	Ⅶ	(3.2)	5.0	0.6	15.8	6345	
	760	磨製石斧	ホルンフェルス	C-11	Ⅶ	(5.3)	5.0	1.4	65.9	6262	
143	761	磨・敲石	砂岩	D-10	Ⅵ	6.9	6.1	4.3	244.5	9735	
	762	磨・敲石	砂岩	F-16	Ⅶ	6.8	5.8	3.9	192.0	10788	
	763	磨・敲石	砂岩	D-16	Ⅶ	6.9	5.8	3.5	176.0	11515	
	764	磨・敲石	砂岩	D-16	Ⅶ	11.6	10.0	5.7	893.5	3793	
	765	磨石	砂岩	B-11	Ⅵ	10.1	8.9	4.6	709.0	7029	
144	766	磨・敲石	砂岩	B-15	Ⅶ	6.7	5.4	3.2	172.2	13473	
	767	磨・敲石	砂岩	C-12	Ⅶ	6.8	5.3	5.6	288.0	1118	
	768	磨・敲石	砂岩	C-16	Ⅶ	7.8	6.7	3.6	244.5	11808	
	769	磨石	凝灰岩	C-10	Ⅶ	7.4	6.8	5.6	386.5	13946	
	770	磨石	砂岩	E-15	Ⅶ	7.6	6.7	4.3	299.0	12326	
	771	磨・敲石	砂岩	E-12	Ⅶ	8.3	8.5	4.8	452.5	294	
	772	磨石	砂岩	D-15	Ⅶ	8.3	7.2	4.3	366.5	7777	
	773	磨・敲石	砂岩	C-11	Ⅵ	9.1	7.8	5.1	467.0	13751	
	774	磨・敲石	花崗岩	E-12	Ⅶ	8.2	7.2	3.3	291.5	6146	
	775	敲石	砂岩	C-15	Ⅵ	9.9	9.0	4.0	544.5	8567	
	776	敲石	花崗岩	D-16	Ⅶ	13.9	10.5	5.8	1047.5	3803	
145	777	磨石	安山岩	D-12	Ⅶ	7.6	4.9	3.4	189.5	2490	
	778	磨・敲石	花崗岩	D-12	Ⅶ	8.2	5.9	3.0	215.5	7997	
	779	磨石	砂岩	D-14	Ⅵ	9.1	6.6	4.1	354.5	8471	
	780	磨・敲石	花崗岩	E-18	Ⅶ	8.7	6.5	4.0	329.0	13316	
	781	磨・敲石	砂岩	C-11	Ⅶ	8.5	7.0	3.6	310.0	13551	
	782	磨石	砂岩	D-17	Ⅶ	8.3	7.0	3.9	313.5	12423	
	783	磨・敲石	凝灰岩	E-16	Ⅶ	10.4	7.5	5.3	587.0	10835	
	784	磨・敲石	砂岩	B-12	Ⅶ	9.8	6.5	4.2	448.0	13725	
	785	磨・敲石	砂岩	E-12	Ⅶ	11.0	8.2	4.7	650.0	8020	
	786	磨・敲石	砂岩	E-13	Ⅶ	10.7	8.5	4.4	628.0	5391	
	787	磨・敲石	安山岩	B-11	Ⅵ	10.6	8.6	4.4	637.5	2152	
146	788	磨・敲石	花崗岩	E-13	Ⅵ	10.6	8.3	5.7	753.5	7078	
	789	磨・敲石	凝灰岩	E-16	Ⅶ	11.9	9.4	5.1	908.0	12444	
	790	磨・敲石	砂岩	C-11	Ⅶ	9.3	4.8	2.9	161.7	7239	
	791	磨・敲石	安山岩	C-11	Ⅶ	8.0	5.8	4.1	265.5	10265	
	792	磨・敲石	花崗岩	B-15	Ⅵ	7.7	6.3	4.0	261.0	13471	
	793	磨・敲石	砂岩	E-16	Ⅶ	12.6	6.1	2.1	217.5	10852	
	794	磨・敲石	砂岩	B-12	Ⅶ	(8.6)	8.3	3.0	305.5	11594	
	795	磨・敲石	花崗岩	D-20	Ⅶ	8.8	8.2	4.4	449.0	12103	
147	796	磨・敲石	凝灰岩	E-20	Ⅶ	10.3	9.1	5.8	650.5	13105・13106	
	797	磨・敲石	花崗岩	D-15	Ⅶ	(6.7)	(5.6)	3.5	150.0	11848	
	798	磨・敲石	砂岩	C-12	Ⅶ	10.3	8.2	5.0	523.0	5890	
	799	磨・敲石	凝灰岩	B-13	Ⅶ	7.7	6.2	4.1	265.5	1752	
	800	磨石	砂岩	E-16	Ⅶ	10.1	(8.4)	3.3	208.5	9400・10836	
	801	磨石	砂岩	C-15・D-18	Ⅵ・Ⅶ	(9.5)	8.8	4.7	419.5	3011・13351	
	802	磨・敲石	砂岩	C-14	Ⅶ	19.6	14.5	5.3	1760.4	一括	
148	803	磨・敲石	砂岩	E-18	Ⅶ	(6.6)	8.7	5.2	344.0	13339	
	804	磨・敲石	砂岩	C-14	Ⅵ	(4.5)	6.5	4.4	129.0	7135	
	805	磨・敲石	砂岩	D-11・D-17	Ⅶ	8.3	7.2	4.5	381.0	8173・9433	
	806	礫器	安山岩	D-14	Ⅵ	7.0	9.0	4.8	312.5	7106	
	807	礫器	砂岩	C-14	－	10.3	8.7	5.2	476.5	14412	
	808	礫器	砂岩	B-16	Ⅶ	(4.1)	(8.8)	2.7	111.0	14103	
149	809	礫器	砂岩	C-11	Ⅵ	(9.0)	(10.5)	3.2	341.5	9918	
	810	石錘	安山岩	C-11	－	4.9	4.1	1.5	45.2	14341	
	811	石錘	安山岩	B-11	Ⅶ	6.2	4.5	2.1	78.0	13804	
	812	石錘	安山岩	E-11	－	6.6	4.6	2.0	85.3	14602	
	813	砥石	砂岩	D-11	Ⅵ	(7.3)	3.5	2.0	90.5	9074	
	814	砥石	砂岩	B-11	Ⅶ	(9.2)	3.7	3.7	207.0	12870	
	815	砥石	砂岩	D-10	Ⅵ	(10.0)	6.9	3.0	246.0	9683	
	816	線刻礫	安山岩	C-10	Ⅶ	7.1	4.3	4.1	144.5	12763	

第Ⅴ章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の概要

平良上Ｃ遺跡の自然科学分析は，平成 27 年 10 月にテフラ分析５点をパリノ・サーヴェイ株式会社へ，11 月に放射性炭素年代測定 10 点，及び種実同定 13 点を（株）加速器分析研究所に依頼した。それぞれの分析結果の詳細は以下に述べる。

第２節　放射性炭素年代

１　測定対象試料

平良上Ｃ遺跡は，鹿児島県曽於郡大崎町井俣 2521 番地ほかに所在し，シラス台地を南北に開析する田原川左岸の台地上に立地する。測定対象試料は，竪穴住居跡や連穴土坑等から出土した炭化物 10 点である（第 32 表）。なお，年代測定試料と同じ遺構を含む遺構出土試料の種実同定が実施され，炭化鱗茎等が検出されている（第Ⅴ章第３節参照）。

試料が出土した遺構はⅦ層，Ⅷ層から検出されている。Ⅷ層が薩摩火山灰，上位のＶａ層がアカホヤ火山灰で，Ⅵ層，Ⅶ層が縄文時代早期の遺物包含層とされる。

２　化学処理工程

（1）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（2）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常１ mol/ℓ（１Ｍ）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001 Ｍから１Ｍまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が１Ｍに達した時には「AAA」，１Ｍ未満の場合は「AaA」と第 32 表に記載する。

（3）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（4）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（5）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（6）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し，14C の計数，13C 濃度（13C/12C），14C 濃度（14C/12C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（1）δ 13C は，試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（第 32 表）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（2）14C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中 14C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950 年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568 年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。14C 年代はδ 13C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を第 32 表に，補正していない値を参考値として第 33・34 表に示した。14C 年代と誤差は，下１桁を丸めて 10 年単位で表示される。また，14C 年代の誤差（±1σ）は，試料の 14C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2% であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の 14C 濃度の割合である。pMC が小さい（14C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が 100 以上（14C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値もδ 13C によって補正する必要があるため，補正した値を第 32 表に，補正していない値を参考値として第 33・34 表に示した。

（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の 14C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の 14C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，14C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（１σ = 68.2%）あるいは２標準偏差（２σ = 95.4%）で表示される。グラフの縦軸が 14C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ 13C 補正を行い，下一桁を丸めない 14C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13 データベース（Reimeretal. 2013）を用い，OxCalv4.2 較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参

考値として第33・34表に示した。暦年較正年代は，14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

5　測定結果

試料の測定結果を第32～34表に示す。

計10点のうち，試料9を除く9点の試料の14C年代は，8950 ± 40yrBP（試料2）から8810 ± 30yrBP（試料5）の狭い範囲にまとまる。暦年較正年代（1 σ）は，最も古い試料2が8250～7999cal BCの間に4つの範囲，最も新しい試料5が7958～7796cal BCの範囲で示される。

試料9の14C年代は8280 ± 30yrBP，暦年較正年代（1 σ）は7452～7198cal BCの間に3つの範囲で示される。

これら10点の試料は，おおむね縄文時代早期前半頃に相当する年代値となっている（小林編 2008）。火山灰層との上下関係に整合的な結果である。

試料の炭素含有率はいずれも60%を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer, P. J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

Stuiver M. and Polach H. A. 1977 Discussion : Reporting of 14C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

第32表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

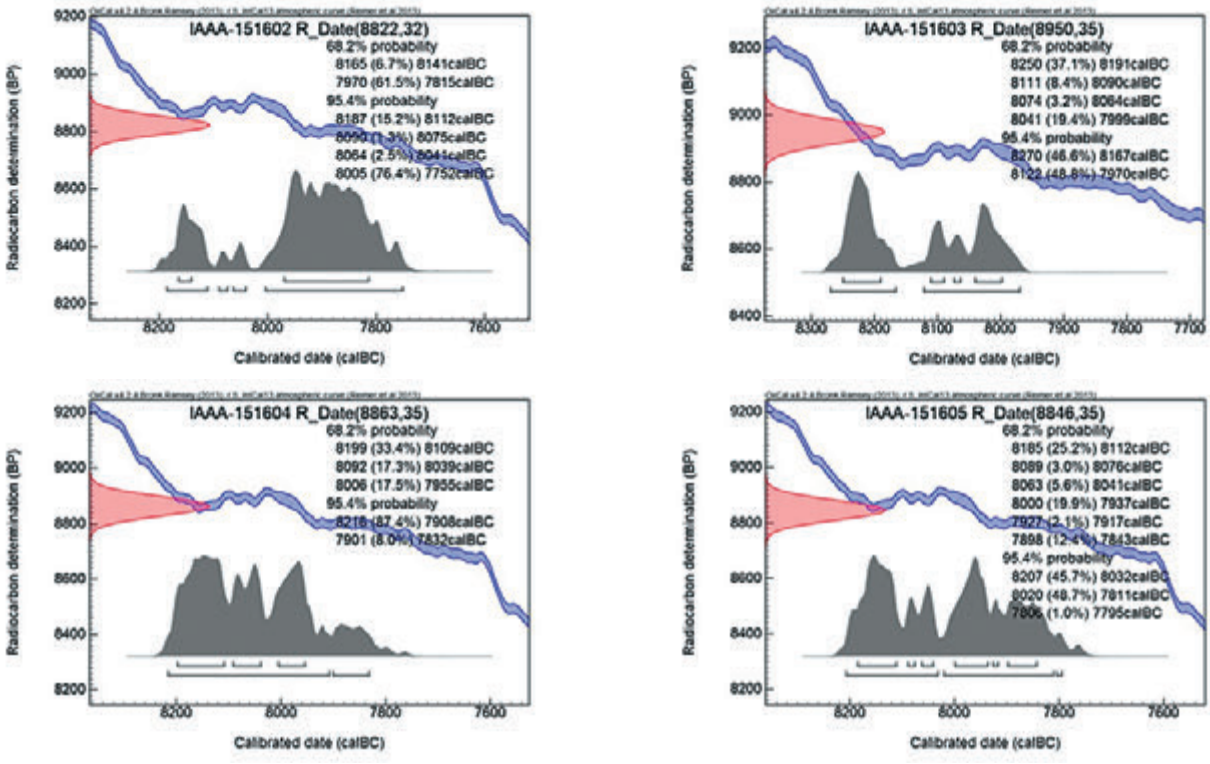
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-151602	1	竪穴遺構1号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AaA	-24.25　± 0.25	8,820　± 30	33.34　± 0.13
IAAA-151603	2	竪穴遺構2号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AAA	-27.52　± 0.23	8,950　± 40	32.82　± 0.14
IAAA-151604	3	竪穴住居跡1号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AaA	-25.73　± 0.30	8,860　± 40	33.18　± 0.15
IAAA-151605	4	竪穴住居跡2号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AaA	-26.90　± 0.23	8,850　± 40	33.25　± 0.15
IAAA-151606	5	竪穴住居跡3号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AAA	-27.40　± 0.29	8,810　± 30	33.40　± 0.15
IAAA-151607	6	連穴土坑1号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AAA	-27.13　± 0.28	8,920　± 40	32.94　± 0.15
IAAA-151608	7	連穴土坑2号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AaA	-26.22　± 0.25	8,850　± 40	33.24　± 0.15
IAAA-151609	8	連穴土坑3号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AaA	-23.77　± 0.30	8,890　± 30	33.06　± 0.14
IAAA-151610	9	集石32号　Ⅶ層（検出面）	炭化物	AAA	-27.89　± 0.24	8,280　± 30	35.67　± 0.15
IAAA-151611	10	土坑3号　Ⅷ層（検出面）	炭化物	AAA	-26.31　± 0.24	8,840　± 40	33.29　± 0.15

第33表　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値，暦年較正用^{14}C年代，較正年代）（1）

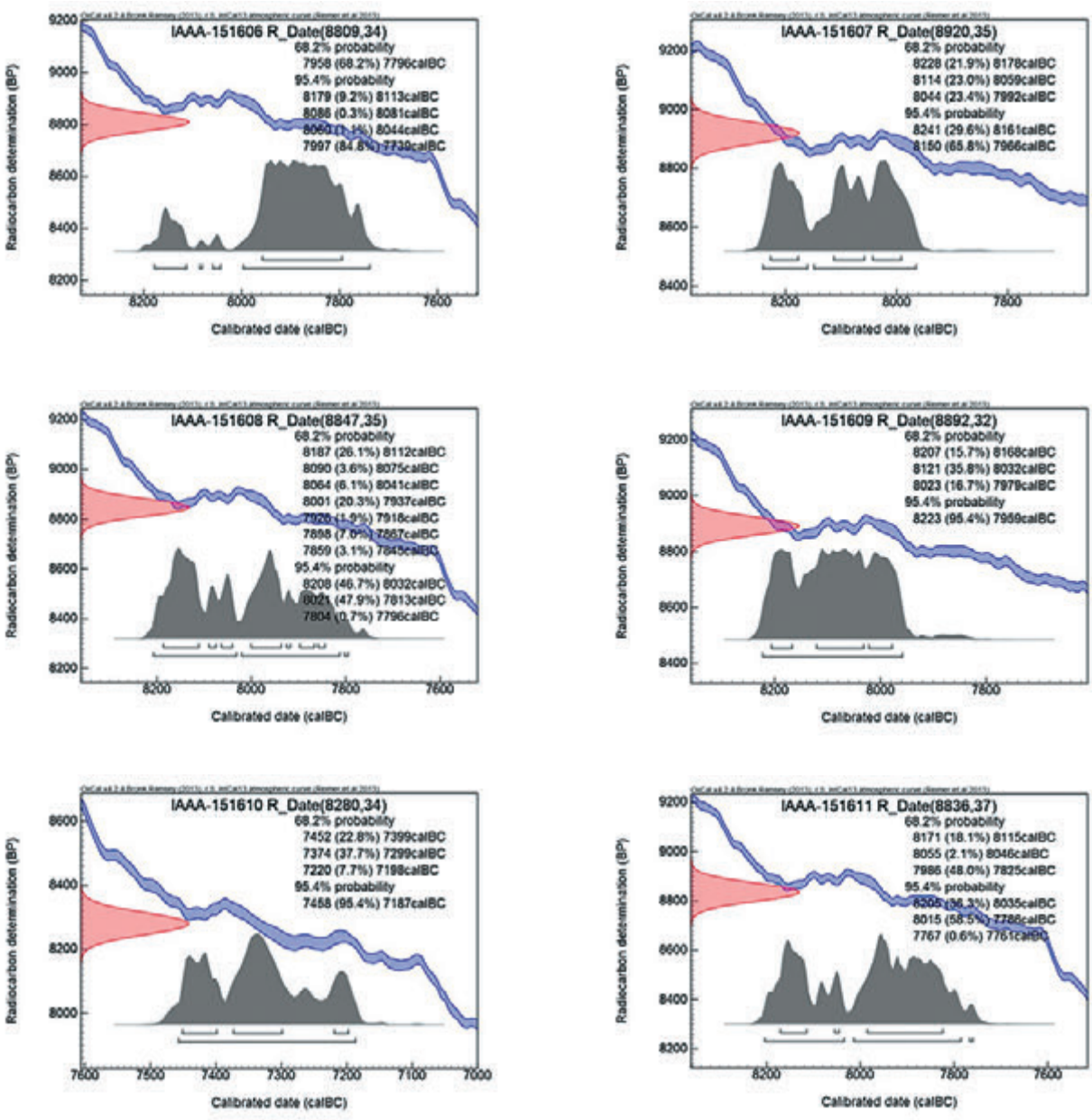
測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-151602	8,810 ± 30	33.40 ± 0.13	8,822 ± 32	8165calBC - 8141calBC（ 6.7%） 7970calBC - 7815calBC（61.5%）	8187calBC - 8112calBC（15.2%） 8090calBC - 8075calBC（ 1.3%） 8064calBC - 8041calBC（ 2.5%） 8005calBC - 7752calBC（76.4%）
IAAA-151603	8,990 ± 30	32.65 ± 0.14	8,950 ± 35	8250calBC - 8191calBC（37.1%） 8111calBC - 8090calBC（ 8.4%） 8074calBC - 8064calBC（ 3.2%） 8041calBC - 7999calBC（19.4%）	8270calBC - 8167calBC（46.6%） 8122calBC - 7970calBC（48.8%）
IAAA-151604	8,870 ± 40	33.13 ± 0.15	8,863 ± 35	8199calBC - 8109calBC（33.4%） 8092calBC - 8039calBC（17.3%） 8006calBC - 7955calBC（17.5%）	8216calBC - 7908calBC（87.4%） 7901calBC - 7832calBC（ 8.0%）

第 34 表　放射性炭素年代測定結果（$\delta^{13}C$ 未補正値，暦年較正用^{14}C 年代，較正年代）（2）

測定番号	$\delta^{13}C$ 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-151605	8,880 ± 40	33.12 ± 0.15	8,846 ± 35	8185calBC – 8112calBC（25.2%） 8089calBC – 8076calBC（ 3.0%） 8063calBC – 8041calBC（ 5.6%） 8000calBC – 7937calBC（19.9%） 7927calBC – 7917calBC（ 2.1%） 7898calBC – 7843calBC（12.4%）	8207calBC – 8032calBC（45.7%） 8020calBC – 7811calBC（48.7%） 7806calBC – 7795calBC（ 1.0%）
IAAA-151606	8,850 ± 30	33.23 ± 0.14	8,809 ± 34	7958calBC – 7796calBC（68.2%）	8179calBC – 8113calBC（ 9.2%） 8086calBC – 8081calBC（ 0.3%） 8060calBC – 8044calBC（ 1.1%） 7997calBC – 7739calBC（84.8%）
IAAA-151607	8,960 ± 40	32.80 ± 0.14	8,920 ± 35	8228calBC – 8178calBC（21.9%） 8114calBC – 8059calBC（23.0%） 8044calBC – 7992calBC（23.4%）	8241calBC – 8161calBC（29.6%） 8150calBC – 7966calBC（65.8%）
IAAA-151608	8,870 ± 30	33.16 ± 0.14	8,847 ± 35	8187calBC – 8112calBC（26.1%） 8090calBC – 8075calBC（ 3.6%） 8064calBC – 8041calBC（ 6.1%） 8001calBC – 7937calBC（20.3%） 7926calBC – 7918calBC（ 1.9%） 7898calBC – 7867calBC（ 7.0%） 7859calBC – 7845calBC（ 3.1%）	8208calBC – 8032calBC（46.7%） 8021calBC – 7813calBC（47.9%） 7804calBC – 7796calBC（ 0.7%）
IAAA-151609	8,870 ± 30	33.14 ± 0.13	8,892 ± 32	8207calBC – 8168calBC（15.7%） 8121calBC – 8032calBC（35.8%） 8023calBC – 7979calBC（16.7%）	8223calBC – 7959calBC（95.4%）
IAAA-151610	8,330 ± 30	35.46 ± 0.15	8,280 ± 34	7452calBC – 7399calBC（22.8%） 7374calBC – 7299calBC（37.7%） 7220calBC – 7198calBC（ 7.7%）	7458calBC – 7187calBC（95.4%）
IAAA-151611	8,860 ± 40	33.20 ± 0.15	8,836 ± 37	8171calBC – 8115calBC（18.1%） 8055calBC – 8046calBC（ 2.1%） 7986calBC – 7825calBC（48.0%）	8205calBC – 8035calBC（36.3%） 8015calBC – 7786calBC（58.5%） 7767calBC – 7761calBC（ 0.6%）



暦年較正年代グラフ 1（参考）



暦年較正年代グラフ２（参考）

第３節　種実同定

はじめに

本分析調査では，平良上Ｃ遺跡（鹿児島県曽於郡大崎町井俣 2521 番地ほか所在）より出土した炭化種実の同定を実施し，当時の植生や植物利用に関する資料を作成する。

１　試料

試料は，集石や竪穴住居等より出土した炭化種実とされる 13 点（試料番号 11～23）26 個である（第 35 表）。試料は全て乾燥しており，表面に泥が付着した状態である。

試料が出土した遺構はⅥ層，Ⅶ層，Ⅷ層から検出されている。Ⅷ層が薩摩火山灰，上位のＶａ層がアカホヤ火山灰で，Ⅵ層，Ⅶ層が縄文時代早期の遺物包含層とされる。

なお，種実同定試料と同じ遺構を含む遺構出土試料の放射性炭素年代測定が実施され，火山灰層との上下関係に整合的な結果が得られている（第Ⅴ章第２節参照）。

２　分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し，同定が可能な炭化種実等をピンセットで抽出する。炭化種実等の同定は，現生標本や文献等を参考に実施し，結果を一覧表で示す。

3　結果

結果を第35表に示す。全13試料を通じて，同定が可能な炭化種実が確認されなかった。種実以外では，炭化鱗茎，炭化材，土粒，安山岩片などが確認された。炭化鱗茎は，試料番号11より破片が３個，試料番号14より完形未満が１個，破片が２個，試料番号17より完形未満が１個，試料番号19より完形未満が１個，破片が１個，試料番号20より破片が３個の計12個が確認された。

鱗茎は炭化しており黒色，径３～５㎜程度の広卵～球体を呈す。上下面観より，鱗茎を構成する薄い葉が中軸から層状に巻いて重なる構造が確認される（第150図-4a）。基部は切形で根が伸びる状況は不明瞭である。鱗片葉の表面には，微細な横長の粒状網目模様が縦列する状況が確認された（第150図-5）。

Rauh, Werner（1950）によれば，「鱗茎植物は，ほとんど全部といってもよいほど単子葉植物，ことにユリ科に集中しており，ユリ型とネギ型とがある」とされる。ユリ科ユリ属やウバユリ属などにみられるような，鱗茎を構成する葉は鱗片状に成長し，細い葉柄で茎に接着して屋根瓦のように重なりあう「ユリ型」と，ユリ科ネギ属やヒガンバナ科スイセン属，ヒガンバナ属などにみられるような，葉柄が鞘状に閉じた筒になり，横断面では重なり合った葉が同心円を描く「ネギ型」のうち，今回確認された炭化鱗茎は後者の「ネギ型」と考えられる。

佐竹ほか（1982）によれば，本地域に分布するネギ属はノビル，ヤマラッキョウ，ヒガンバナ属はショウキズイセン，ヒガンバナ，キツネノカミソリがある。このうち，ノビルとヒガンバナは鱗茎が食用される有用植物で，古い時代に渡来した説もある。スイセン属にはスイセンがあるが，渡来種で有毒のため，今回の同定候補からは外している。これらの鱗茎の形状は，ヤマラッキョウが狭卵体で，ノビルが球形，ショウキズイセンが卵球形，ヒガンバナとキツネノカミソリが広卵形と記載されている（佐竹ほか，1982）が，現生標本には変異がある。出土鱗茎は広卵～球体を呈し，ノビルの形状に似るが，現生標本との比較検討が不十分である。

近年では，走査型電子顕微鏡を使用して炭化した鱗茎の葉の組織を観察し，同定する試みも実施されているが（佐々木ほか，2014など），試料を破壊する必要があるため，本分析では，非破壊条件下で可能な限りの記録に努め，ネギ型の可能性を指摘するにとどめる（第150図）。鱗茎類はデンプン質に富むため，古くから採取され，食用に利用されてきた有用植物である（山本，2002など）。今回確認されたネギ型と考えられる炭化鱗茎は，植物質食料として利用され，火を受けた可能性が考えられる。今後の分析精度の向上による分類群の特定と資料蓄積を踏まえた本遺跡周辺域における鱗茎の利用状況の検討が望まれる。

文献

Rauh, Werner, 1950, Morphologieder Nutzpflanzen. 2. Aufl]．（中村信一・戸部博（訳），2009，植物形態の事典（新装版），朝倉書店，340p）．

佐々木由香・米田恭子・小林和貴，2014，遺跡出土炭化鱗茎同定のための識別方法．第29回日本植生史学会退会講演要旨集，43.

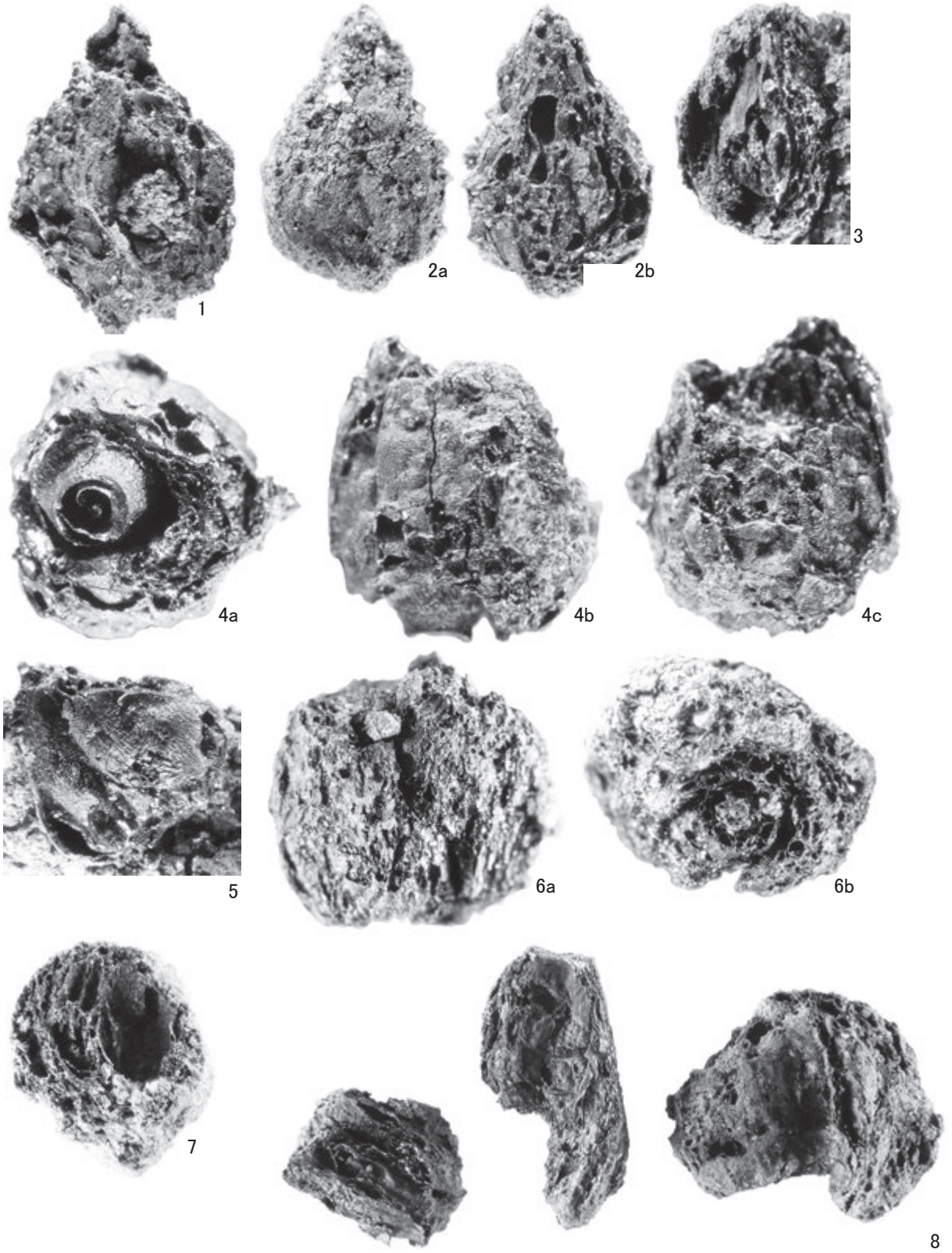
佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・冨成忠夫，1982，日本の野生植物　草本Ⅰ　単子葉類．平凡社，305p.

山本直人，2002，縄文時代の植物採集活動―野生根茎類食料化の民俗考古学的研究―．渓水社，250p.

※）本分析は，パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

第35表　炭化種実同定結果

試料番号	遺構	層位	点数	炭化種実の分類群･部位	炭化種実以外(点数)
11	集石29号	Ⅶ	3	未検出	炭化鱗茎（破片３）
12	集石１号	Ⅶ	4	未検出	炭化材（４），土粒（１）
13	集石２号	Ⅷ	4	未検出	炭化材（４）
14	集石14号	Ⅶ	3	未検出	炭化鱗茎（完形未満１，破片２），土粒（１）
15	竪穴住居２号ベルト埋土⑤	Ⅷ	1	未検出	炭化材（１）
16	竪穴住居２号ベルト埋土⑦	Ⅷ	1	未検出	炭化材（１）
17	竪穴住居３号ベルト埋土西側	Ⅷ	1	未検出	炭化鱗茎（完形未満１）
18	連穴土坑２・３号	Ⅷ	1	未検出	炭化材（１）
19	№2924	Ⅶ	2	未検出	炭化鱗茎（完形未満１，破片１）
20	№13291	Ⅵ	3	未検出	炭化鱗茎（破片３）
21	№13491	Ⅶ	1	未検出	炭化材（２）
22	№13924	Ⅶ	1	未検出	安山岩片（１）
23	№14077	Ⅶ	1	未検出	炭化材（１）



1．番号11
2．番号11
3．番号11
4．番号14(a:同心円状構造)
5．番号14(横長の細胞が配列)
6．番号19
7．番号17
8．番号20

第 150 図　炭化鱗茎

第４節　テフラ分析

はじめに

曽於郡大崎町に所在する平良上Ｃ遺跡は，非溶結の流紋岩質角礫含有軽石凝灰岩いわゆるシラス（鹿児島県地質図編集委員会，1990）からなる台地上に位置する。台地は，南北方向に流下する田原川の左岸側に広がり，東方を流れる菱田川により区切られている。台地上面の標高は約 40 mとされ，小高い丘を境に東側は緩やかに下る平坦面，西側は田原川の沖積低地に向かう急斜面となっている。発掘調査では，縄文時代早期とされる土器や集石などが確認されているが，約 7,300 年前に起こった鬼界カルデラの噴火時に発生した地震による噴砂とされる土層も確認されている。

本報告では，噴砂とされる層位も含めて，分層された各層位におけるテフラの産状を明らかにし，各層の年代観を検証する。

１　試料

試料は，調査区内の土層断面より採取された火山灰土５点である。調査区内の基本層序は，発掘調査所見により表土のⅠ層から基盤のシラスのＸ層まで分層されている。これらのうち，Ⅵ層とⅦ層は縄文時代早期の遺物包含層とされ，Ⅷ層は 12,800 年前に桜島より噴出した桜島薩摩テフラ（Sz-S：小林 ,1986；町田・新井，2003）層とされている。遺物包含層の上位の火山灰土層であるＶ層は，上位よりＶa，Ｖb-a，Ｖb-b，Ｖb-c，Ｖc の各層に細分されている。Ｖａ層は約 7,300 年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤテフラ（K-Ah：町田・新井，1978；2003）の火山灰層であり，Ｖb-a 層は，K-Ah 噴出時の地震により発生した液状化に伴い堆積したシラスと K-Ah の火山灰の混在する土層，Ｖb-b 層は噴砂により堆積したシラスの層，Ｖb-c 層は白色の軽石をわずかに含む淡黄褐色土層，Ｖc 層は K-Ah の噴火において最初に噴出した幸屋軽石（町田・新井，2003）とされる軽石が堆積する黄褐色土層である。

試料は，Ｖb-b，Ｖb-c，Ｖc，Ⅵ，Ⅶの各層より１点ずつ採取され，順に試料番号１～５が付されている。分析時の観察では，試料番号１は径１～２㎜の白色軽石が微量含まれ，細粒の火山ガラスが多量に含まれる砂質の褐色土，試料番号２は最大径 20㎜，多くは径２～３㎜の橙色軽石が散在する黄褐色土，試料番号３は最大径 15㎜，多くは径２～５㎜の橙色軽石が多量に散在する黄褐色土，試料番号４は径１～1.5㎜の黄色軽石が微量点在する暗褐色土，試料番号５は径２～３㎜の黄色軽石が極めて微量含まれる黒褐色土である。いずれの試料の軽石も風化して脆弱であり，指で容易につぶせる状態である。（第 36 表）

第 36 表　テフラ組成分析試料一覧

試料番号	採取層位	採取位置	発掘調査所見	
			色調など	特徴
1	Ｖb-b	E-21 区南壁	乳茶褐色砂質土	噴砂により堆積したシラス
2	Ｖb-c	E-21 区南壁	淡黄褐色土	白色パミスをわずかに含む
3	Ｖc	E-21 区南壁	黄褐色土	アカホヤ火山灰の軽石
4	Ⅵ	E-21 区南壁	暗茶褐色土	縄文時代早期の遺物包含層
5	Ⅶ	E-21 区南壁	黒褐色土	縄文時代早期の遺物包含層 細かい黄白色パミスを含む

２　分析方法

試料より適量を採取し，水を加え，超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し，250 メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が 1/16㎜より小さい粒子を除去する。乾燥させた後，篩別して，得られた粒径 1/4㎜-1/8㎜の砂分を，ポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離し，得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。同定の際，不透明な粒については，斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

一方，重液分離により得られた軽鉱物分については，火山ガラスとそれ以外の粒子を，偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで計数し，火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは，その形態によりバブル型，中間型，軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は，バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの，中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの，軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は，処理後に得られた軽鉱物分から摘出した火山ガラスと重鉱物分から摘出した斜方輝石とを対象として，古澤（1995）の MAIOT を使用した温度変化法を用いる。

３　結果

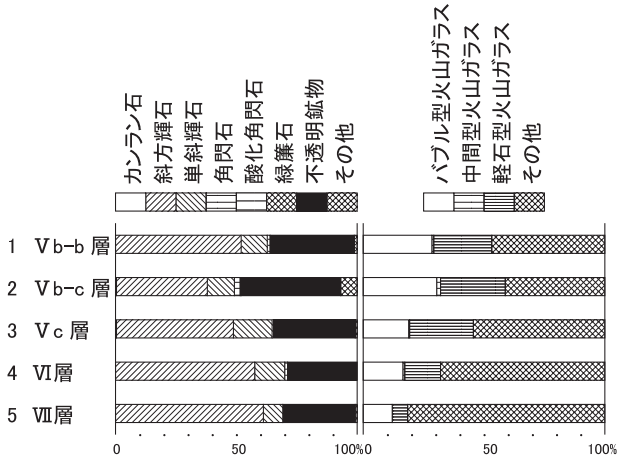
(1) テフラ組成分析

分析結果を第 37 表，第 151 図に示す。重鉱物組成は，５点ともに斜方輝石と不透明鉱物を主体とし，少量の単斜輝石と微量～極めて微量の角閃石を含むという組成である。詳細にみれば，Ｖ層の試料である試料番号１～３では斜方輝石と不透明鉱物とが同量程度であり，Ⅵ層とⅦ層の試料である試料番号４と５では斜方輝石の方が有意に多い。

火山ガラス比では，５点の試料ともにバブル型と軽石型が同量程度に混在する組成であるが，火山ガラス全体の量比は，Ⅶ層の試料番号５からVb-c 層の試料番号２にかけて上位ほど多くなる傾向を示す。

(2) 屈折率測定

各試料の測定結果を第 152～154 図に示す。以下に火山ガラスと斜方輝石に分けて述べる。



第 151 図　重鉱物組成および火山ガラス比

第 37 表　テフラ組成分析結果

試料番号	層位	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	緑簾石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
1	Vb-b 層	0	130	27	3	0	0	87	3	250	71	2	60	117	250
2	Vb-c 層	1	94	28	6	0	1	103	17	250	76	4	67	103	250
3	Vc 層	1	121	40	0	0	0	86	2	250	47	1	66	136	250
4	Ⅵ層	0	144	31	3	0	0	72	0	250	41	2	37	170	250
5	Ⅶ層	0	153	20	0	0	0	75	2	250	30	0	16	204	250

1）火山ガラス

Vc 層の試料番号３以外の４点の試料は，いずれも下限は n1.498 または 1.497，上限は 1.499 または 1.500 でモードは n1.499 という狭いレンジに集中する火山ガラスが主体を占める。これらのうち，試料番号１と２では，n1.510 から 1.513 まで範囲を示す高屈折率の火山ガラスが微量混在し，試料番号５では n1.506 から 1.513 までの範囲を示す高屈折率の火山ガラスが微量混在する。

Vc 層の試料番号３では，n1.499-1.500 の火山ガラスと n1.510-1.512 の火山ガラスが同量程度で混在している。

2）斜方輝石

Ｖ層の試料である試料番号１～３の３点では，下限がγ 1.707 または 1.708，上限がγ 1.712～1.714，モードがγ 1.710 または 1.711 という特性の斜方輝石と，γ 1.730 前後からγ 1.735 前後の範囲を示す高屈折率の斜方輝石とが混在する。両者の量比は，Vc 層の試料番号３では，前者が圧倒的に多く，Vb-c 層の試料番号２では前者の方がやや多く，Vb-b 層の試料番号１では両者同量程度となる。また，試料番号１にはγ 1.720 前後を示す斜方輝石も微量含まれる。

Ⅵ層の試料番号４では，γ 1.706-1.712 の斜方輝石とγ 1.724-1.734 の高屈折率の斜方輝石とが混在し，Ⅶ層の試料番号５では，γ 1.704-1.712 の斜方輝石とγ 1.732-1.734 の斜方輝石とが混在する。

4　考察

Vb-b 層の試料番号１およびVb-c 層の試料番号２で検出された火山ガラスは，バブル型と軽石型が同量程度に混在する形態組成と n1.499 前後の非常に狭いレンジに集中するという屈折率の特徴とから，町田･新井(1976)のいう姶良 Tn 火山灰（AT）に由来すると考えられる。AT はシラス台地を構成している姶良入戸火砕流から舞い上がった細粒物であるから，Vb-b 層およびVb-c 層には多量のシラスに由来する砕屑物が含まれていることが確認される。なお，両試料の斜方輝石における高屈折率の方の値も AT に一致するものであり，すなわち高屈折率の斜方輝石もシラス由来の砕屑物である。これらの結果は，Vb-b 層が噴砂により堆積したシラスとする発掘調査所見を支持すると言える。なお，Vb-b 層とVb-c 層の低屈折率の斜方輝石は，後述するVc 層の主体を占める斜方輝石の屈折率とほぼ同様のレンジとモードであることから，下位の幸屋軽石中の砕屑物に由来する可能性が高い。ただし，Vb-b 層中にはγ 1.720 前後のものも微量含まれているが，これらについては現時点ではその由来は不明である。また，Vb-b 層の下位のVb-c 層も，火山ガラスと斜方輝石の屈折率の状況から，その母材となっている砕屑物の多くは，シラス由来の砕屑物からなることが推定される。

Vc 層では上述したシラス由来の火山ガラスと同量程度の高屈折率の火山ガラスが混在する。この高屈折率のレンジは K-Ah の火山ガラスのレンジとほぼ一致することから，高屈折率の火山ガラスは，幸屋軽石由来の砕屑物である可能性が高い。また，斜方輝石の屈折率において主体を占めるレンジも K-Ah のそれにほぼ一致する。このこともVc 層中には幸屋軽石由来の砕屑物が多量に含まれていることを示している。

Ⅵ層およびⅦ層では，火山ガラスの屈折率の状況から，その土壌の母材となっている砕屑物にはシラス由来の砕

屑物が多量に含まれていることが推定される。ただし，火山ガラスにおいてはシラス由来の火山ガラスよりも高屈折率のものが微量含まれ，斜方輝石においてはシラス由来の斜方輝石よりも低屈折率のものが同量程度含まれている。これらの火山ガラスと斜方輝石は，その屈折率の値と発掘調査所見による層位から，Ⅶ層よりも下位のⅧ層に堆積するSz-Sに由来する可能性が高いと考えられる。

なお，平良上C遺跡の地理的位置を考慮すれば，Sz-SとK-Ahの間には，桜島を給源とする桜島13（Sz-13），桜島12（Sz-12），桜島11（Sz-11）のいずれかのテフラ（小林，1986；町田・新井，2003）が降下堆積した可能性があると考えられる。しかし，火山ガラスや斜方輝石の屈折率も含めたこれらのテフラの特性はSz-Sと重複するところが大きいために，今回のような撹乱によるテフラの混在が起こっているなかでの検出状況では，各テフラとSz-Sとの識別は難しい。

引用文献

古澤　明，1995，火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別．地質学雑誌，101，123-133.

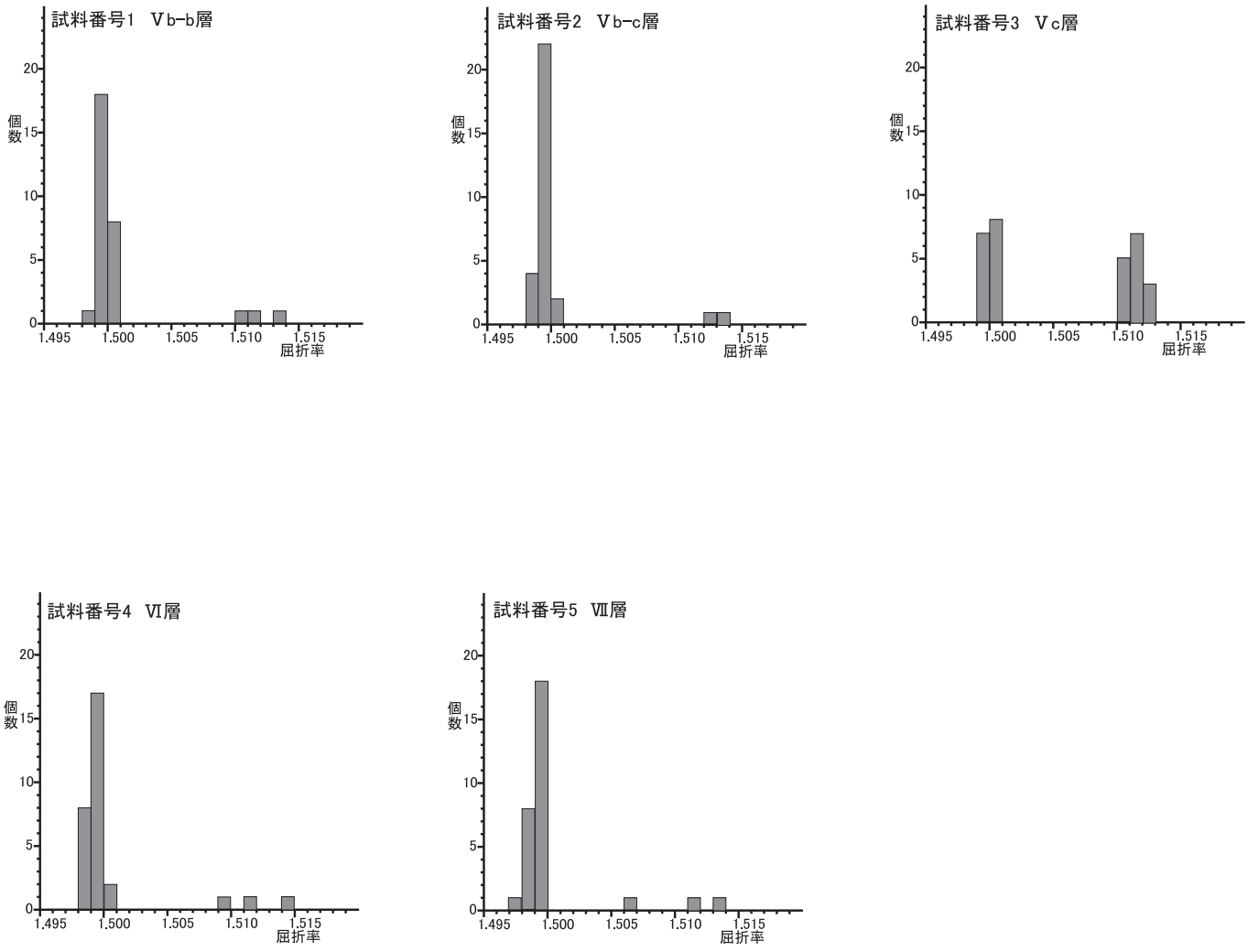
鹿児島県地質図編集委員会，1990，鹿児島県地質図　縮尺10万分の1．鹿児島県.

小林哲夫，1986，桜島火山の形成史と火砕流．文部省科学研究費自然災害特別研究，計画研究「火山噴火に伴う乾燥粉体流（火砕流等）の特質と災害」（代表者荒牧重雄）報告書，137-163.

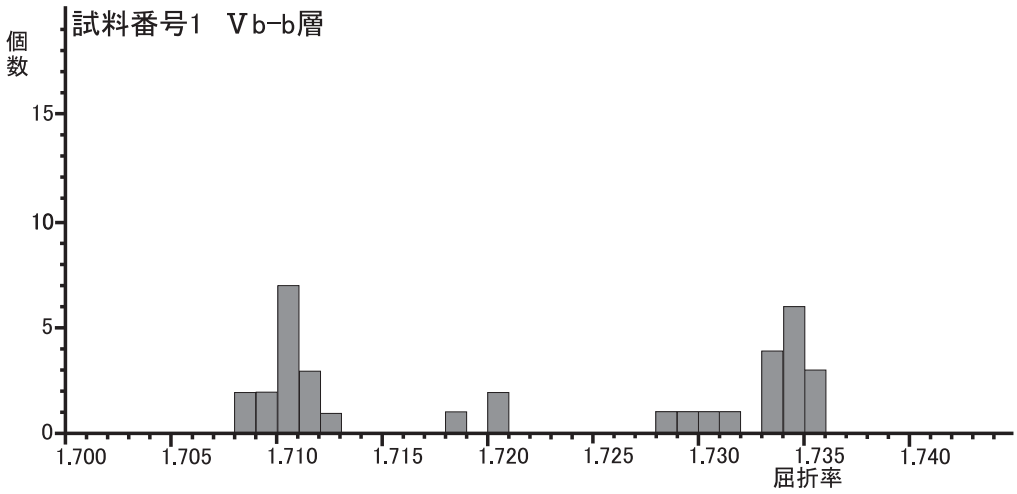
町田　洋・新井房夫，1976，広域に分布する火山灰―姶良Tn火山灰の発見とその意義―．科学，46，339-347.

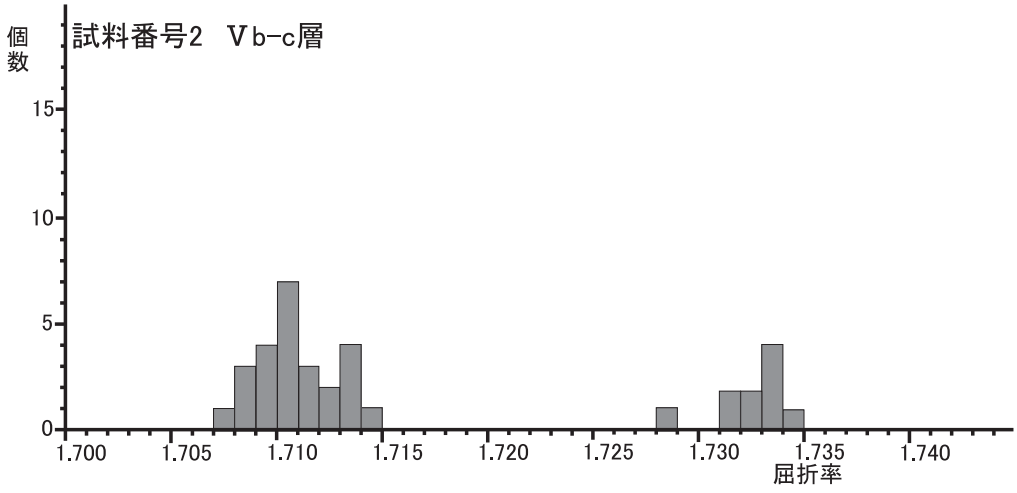
町田　洋・新井房夫，1978，南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ－アカホヤ火山灰．第四紀研究，17，143-163.

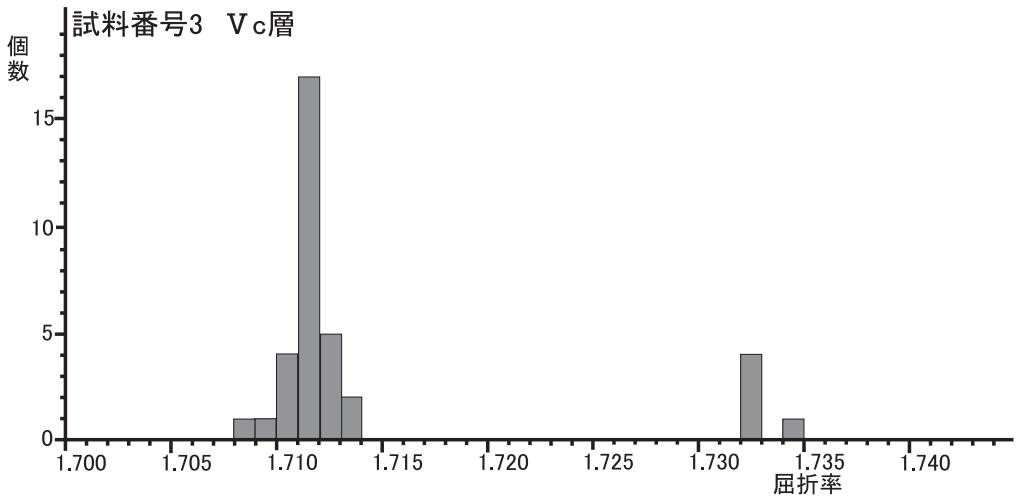
町田　洋・新井房夫，2003，新編　火山灰アトラス．東京大学出版会，336p.



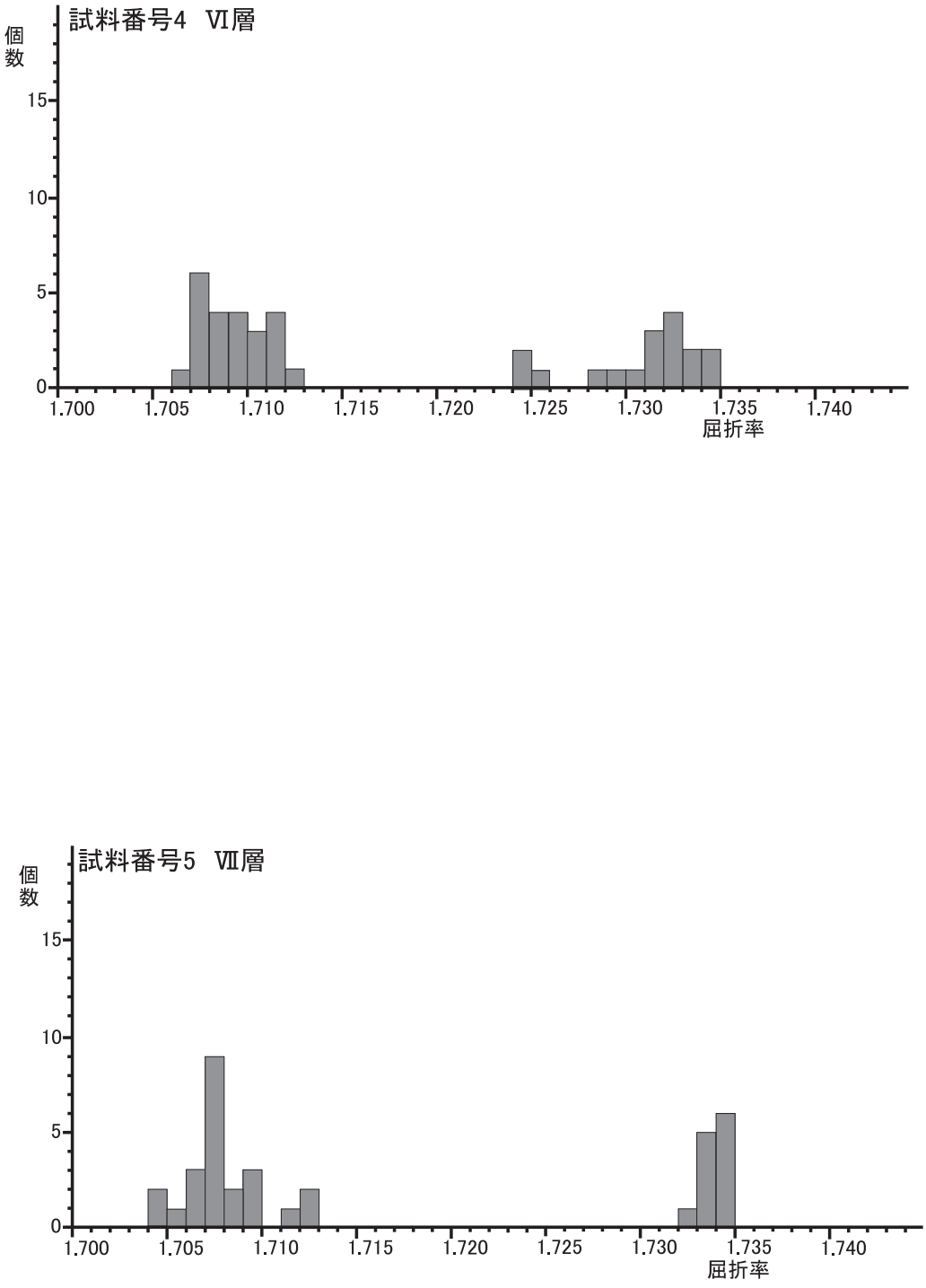
第152図　火山ガラスの屈折率



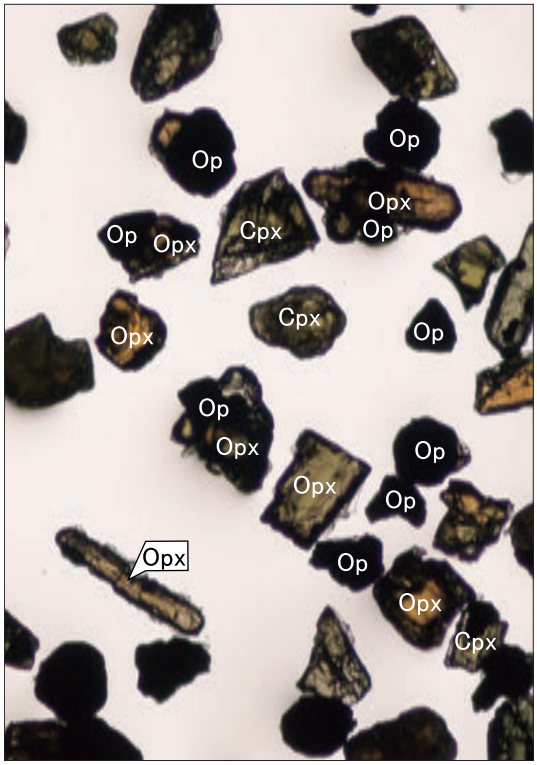




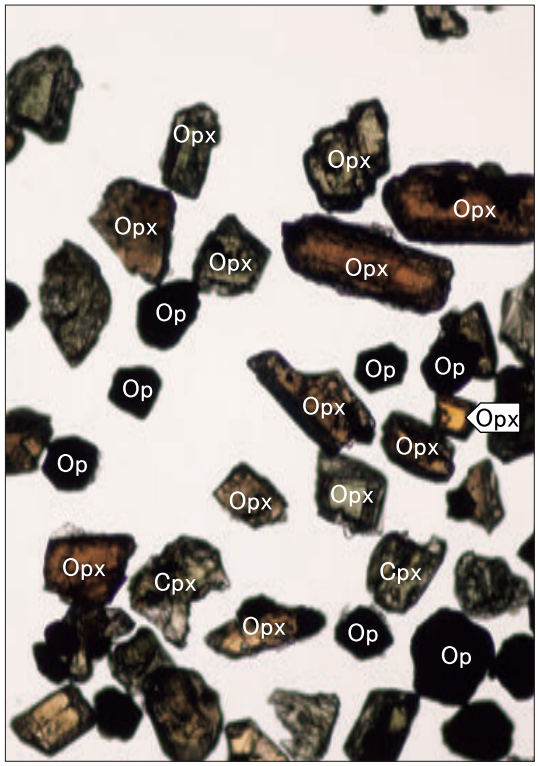
第 153 図　斜方輝石の屈折率 1



第 154 図　斜方輝石の屈折率２



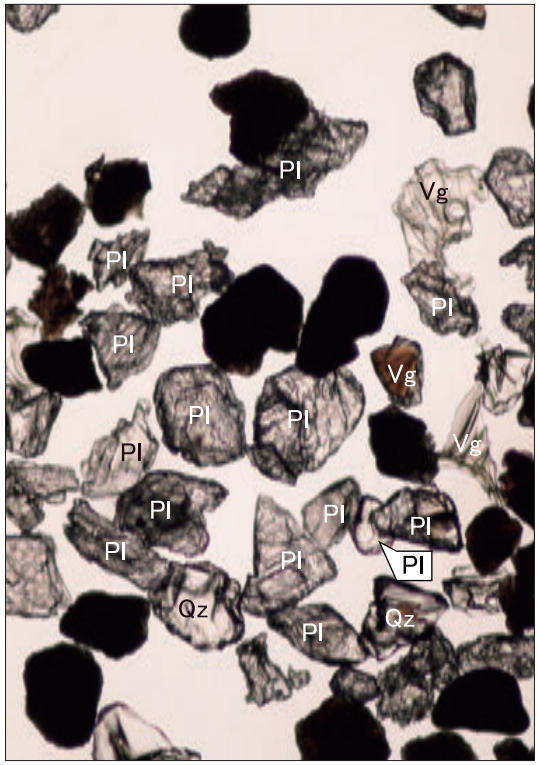
1.重鉱物(Ⅴb-c層;2)



2.重鉱物(Ⅶ層;5)



3.火山ガラス(Ⅴb-c層;2)



4.火山ガラス(Ⅶ層;5)

Opx:斜方輝石. Cpx:単斜輝石. Op:不透明鉱物. Vg:火山ガラス. Qz:石英. Pl:斜長石.

0.5mm

第 155 図　重鉱物・火山ガラス

第Ⅵ章　総括

第１節　遺構について

本遺跡からは，竪穴住居跡６軒，竪穴遺構２基，連穴土坑３基，土坑 15 基，集石 34 基が検出された。

１　遺構の配置

遺構の配置には，次のような特徴が見られる。

(1) 竪穴住居跡・竪穴遺構・連穴土坑は，調査区東側緩斜面の同じエリアから検出された。このエリア内には，土器の出土が少ない。

(2) 集石は 14 区の尾根部分の東側のエリアと調査区西側の斜面のエリアに大きく分かれる。また，西側斜面の集石は，谷筋状に多く位置する。集石の検出エリアは，全遺物の出土範囲と重なる。

(3) 土坑は竪穴住居跡を中心とするエリアと集石のエリアの両方に検出されるが，大半は集石エリアにある。

(4) 竪穴住居跡を中心とするエリアと集石エリアは明確に分かれる。

遺構の時期的な分別がなされていないが，これらの特徴から遺跡内においてエリアの使い分けが行われていたことが窺える。また，明確にエリアが分かれることから時期的な重複は少ないと思われる。さらに，遺構は 14 区の尾根を取り囲むように位置していることから，遺跡は調査区外の北西方向へ広がる可能性はある。

２　遺構の時代

いずれの遺構においても床面直上からの出土がないなど，遺構の時代を特定する資料はなかった。ここでは，遺構の検出状況，出土遺物等から遺構の時代に関して記述する。

６軒の竪穴住居跡が検出された。内５軒からⅥ類（下剥峯式土器）が，１軒からは貝殻刺突文を施した土器が埋土中から確認されている。３号竪穴住居跡と４号竪穴住居跡は切り合い関係にあり，後者が新しい。

また，土坑が 15 基検出されているが，その埋土内からⅥ類土器が出土したものが５基，遺物が確認されなかったものが５基で最も多かった。さらに，遺跡内で 34 基検出された集石のうち，遺物を確認できなかった集石が 10 基あった。他の型式の土器と共伴する集石もあるが，残りの 24 基中，Ⅱ類（加栗山式土器）・Ⅲ類（吉田式土器）・Ⅶ類（桑ノ丸式土器）・Ⅷ類土器がそれぞれ３基，Ⅳ類（石坂式土器）が６基，Ⅸ類（押型文土器）が１基，Ⅵ類土器が 13 基の集石から確認されている。Ⅵ類土器より新しいとされている土器を伴ったものは 27 号集石だけで，Ⅶ類土器であった。つまり，12 基の集石ではⅥ類土器から後の時代の遺物は確認されていない。集石の多くがⅥ類土器の時期に伴うものと思われる。

１～３号竪穴住居跡，１・２号竪穴遺構，1～３号連穴土坑，３号土坑から出土した炭化物の年代測定を行った。１～３号竪穴住居跡の埋土中から出土した炭化物の年代測定結果は 8860 ± 40yrBP～8,810 ± 30yrBP，残りの６点は 8800yrBP 代が４点，8900yrBP 代が２点という結果であった。遠部慎氏は年代学に基づいた円筒形貝殻文土器の大まかな編年的な位置づけを行い，「石坂式は概ね 8900BP 代にまとまり，桑ノ丸式は 8735 ± 35，8540 ± 45BP という測定値である。（遠部 2009）」と述べている。本遺跡の遺構出土の炭化物の年代測定結果は，概ね 8800yrBP 代にまとまり，下剥峯式土器の年代観と符合する。これらのことから本遺跡検出の遺構の多くは下剥峯式土器の時期である可能性が高い。また，本遺跡において，土器の出土量が多いのは下剥峯式土器であり，その圧倒的な量からして一定期間この付近に留まり，生活していたと推測できる。

３　竪穴遺構について

竪穴遺構が２基検出されているが，当初検出した平面プランは竪穴住居跡と同じであった。しかし，床面形状が凹凸であったことから竪穴遺構とした。埋土観察用に遺構内に残したベルトを観察しながら掘り下げたが，平坦な床面は確認できなかった。そのため，床の凹凸面は遺構構築時の掘削痕と推測し，床面を作らなければ構築物として役割を果たせないと思われることから，機能的には竪穴住居跡を想定しているが，詳細は不明である。

第２節　土器について

１　出土状況について

土器はⅠ類からⅩⅤ類に分類した。その中でもⅥ類（下剥峯式土器）の出土量は圧倒的に多かった。ここでは，類毎の出土量に違いがあるが，その特徴を述べる。

調査区を９～13 区付近の西側斜面，14 区付近の尾根部分，15～22 区の東側緩斜面に分けた場合，各類土器により，その出土密度に違いがある。土器の出土密度が高くなるのが西側斜面，次いで東側緩斜面，密度が明らかに低くなるのが尾根部分という特徴を示すのが，Ⅱ類（加栗山式土器）・Ⅲ類（吉田式土器）・Ⅳ類（石坂式土器）・Ⅵ類（下剥峯式土器）・Ⅶ類（桑ノ丸式土器）であった。Ⅸ類（押型文土器）は，斜面と尾根部分の出土密度が高く，緩斜面で低くなる。Ⅹ類（平栫式土器）は，緩斜面の出土密度が高く，尾根部分，斜面の順となる。竪穴住居跡等の時期が特定できないことから，遺構との関連性に言及できないが，時代によって生活の場としての機能

に違いがあると思われる。XI類（塞ノ神式土器）とXII類（苦浜式土器）は出土地点が限定され，個体数も少ないことから一定期間生活を営んだ状況ではない。人の営みの痕跡は岩本式土器に始まり，加栗山式土器の時期，Ⅳ類土器の時期を経てⅥ類土器の時期にピークを迎え，Ⅶ類土器・Ⅹ類土器の時期に減少し続け，XI類土器・XII類土器の時期には僅かなものとなり，前期以降は全くなくなる。生活の痕跡は，ほとんど縄文時代早期のみに限定されるという特徴のある遺跡である。

また，14区付近には馬の背状の尾根が南東から北西へ延びるが，この尾根を超えて調査区の東側と西側で接合する土器がある。本書に掲載した土器分だけであるが，Ⅱ類土器で１点，Ⅲ類土器で１点，Ⅳ類土器で７点，Ⅵ類土器で10点，Ⅶ類土器で２点，Ⅷ・XIII・XIV類土器でそれぞれ１点確認した。このうち，Ⅷ類土器は，Ⅵ類土器とⅦ類土器との関連性が考えられるものである。Ⅷ類は無文の土器，XIV類は型式不明であり，時代の特定は難しい。これらの状況については第156～159図に示し，Ⅵ類については断面図も添えた。調査区の東側緩斜面の土器が馬の背状の尾根を超えて西側の斜面へ流れ込むことは考えにくく，さらに，いくつかの類にわたって見られることから人為的な行為の結果であり，東側緩斜面と西側斜面の役割に違いがあったことが推察される。一つの可能性として，調査区東側の緩斜面は生活の場であって，そこで破損した，もしくは破損させた土器を調査区西側の斜面に移動させたことも考えられる。つまり，ほぼ純粋に人為的な行動の結果として西側斜面，東側緩斜面に土器が出土していると思われる。

２　円筒形以外の器形をもつ土器について

本遺跡から不自然な屈曲部など円筒形以外の器形を窺わせる土器が出土し，XIV類として掲載した。具体的には円筒形土器の胴部の場合，横方向へは一定の湾曲をもつが，途中でその度合いが異なるものがある。また，明確な角部をもつもの及び口唇部が湾曲しないで直線的に延びるものがある。その文様からⅥ類土器・Ⅶ類土器・Ⅷ類土器に分類できる。口縁部片の場合，波状口縁となり，波頂部外面から下方へ屈曲が続く。ただし，波状口縁の波頂部外面に薄く粘土を貼り付け，粘土を貼り付けた部分のみに屈曲部を作るものも出土していることから，波頂部付近の小片の場合は，判断できないこともあり得る。さらに，胴部片には横断面の形状が弧状に屈曲するものと明確な角部を持つものがある。弧状に屈曲する土器のその角度は，多くが120°～140°であった。明確な角部をもつ３点の土器は90°～100°で屈曲し，内面は弧状の湾曲となる。底部片に関しては，140°前後の角度となる。また，口唇部の上面観が直線的に延びるもの，もしくは僅かしか湾曲しないものも出土した。さらに，直線的な上面観に加えて扁平な胴部をもつ土器も出土している。

完形品の出土がないことから全体像は明確でないが，口縁部・胴部・底部片に屈曲をもつ土器片があること，上面観の直線的な口唇部，扁平な胴部片から円筒形以外の器形をもつ土器があると思われる。さらに，90度程度に屈曲する胴部片からは，角筒形土器も想定される。

この円筒形以外の器形をもつ一群は，前述のようにⅥ類土器，Ⅶ類土器，Ⅷ類土器に分類できる。そのほとんどがⅥ類で，Ⅶ類土器が１点，Ⅷ類土器が１点であった。Ⅶ類土器には，横長の瘤状突起を貼り付けるもの，全容は不明だが突帯を巡らすと思われるものがある。

３　Ⅵ類土器とⅦ類土器について

(1)　出土状況について

本遺跡における土器の出土量で圧倒的に多いのがⅥ類土器で，次いで多いのがⅣ類とⅦ類土器でほぼ同量である。ここでは，Ⅵ類土器とⅦ類土器の関係について，その出土状況やⅧ類土器等を手掛かりに述べる。

Ⅵ類土器とⅦ類土器の出土状況を平面的に示したものが第160図である。いずれも調査区の西側斜面にあたる９～12区と東側の緩斜面の15～18区に多く出土し，調査区の東端に向かっては出土量が少なくなり，尾根部分にあたる14区では出土量が少なくなる傾向にある。

次に，調査区の西側斜面と東側緩斜面での出土点数とその割合を示したのが，第38表である。この表では西側斜面と東側緩斜面での出土点数の区別を明確にするために14区から出土した土器は集計から省いてある。

第38表　土器出土割合

	西側斜面	（割合）	東側緩斜面	（割合）
Ⅱ類	523点	（83%）	107点	（17%）
Ⅳ類	680点	（78%）	188点	（22%）
Ⅵ類	2438点	（61%）	1554点	（39%）
Ⅶ類	424点	（62%）	257点	（38%）
Ⅹ類	36点	（14%）	226点	（86%）

第38表からは，Ⅵ類土器とⅦ類土器の出土量は異なるものの，西側斜面と東側緩斜面からの出土割合がほぼ同じであることと，Ⅱ類土器・Ⅳ類土器及びⅩ類土器の出土割合とは明らかに異なることがわかる。

前述のとおり，調査区の西側斜面と東側緩斜面に出土する土器片は流れ込みによる移動がないことを前提にすれば，Ⅵ類土器を使用していた集団とⅦ類土器を使用していた集団の行動パターンが同じか，同じ集団がⅥ類土器とⅦ類土器を使用していたことが考えられる。第38表の数値からすると同じ集団か，もしくは近い集団の可能性が高いと思われる。ただし，古い時期の土器など西側斜面から出土する割合が高い。このことから，それぞれの土器を使った集団がそれ以前の集団が遺跡内に放置

した土器片を処理した可能性は否定できない。しかし，Ⅵ類土器を使った集団が散乱したⅣ類土器を処理する一方で，自分達が使用し散乱した土器を処理しないまま生活することは考えづらい。

(2) Ⅷ類土器等について

Ⅷ類土器はⅥ類・Ⅶ類土器と強い関連性が窺えることから，ここではその特徴について述べる。

・分布状況

Ⅷ類土器の出土点数は少ないが，Ⅵ類土器及びⅦ類土器の分布状況と同じように 14 区の尾根部分には相対的に少なく，西側及び東側には多いという特徴がある。

・器形

本類の器形は，胴部から口縁部にかけて直線的に開くかやや内湾するものである。また，口縁部断面が方形となり，口唇部に平坦面を作るものが多い。さらに，平口縁及び波状口縁があり，いずれにも瘤状突起が貼付されるものもある。これらの特徴は，Ⅵ類・Ⅶ類土器と共通する。

・文様

本類の文様は，貝殻刺突文と条痕文や沈線で文様を構成する。貝殻刺突文を全面に施すⅥ類土器のモチーフと条痕文や沈線で文様を構成するⅦ類土器のモチーフを併せ持つものが，本類土器であると思われる。

さらに，Ⅵ類土器の刺突文を条痕文に，Ⅶ類土器の条痕文を刺突文に置き換えることで，Ⅷ類土器の文様構成となるものがいくつかある。例えば，Ⅶ類土器の 407～409（第 90・91 図）は，口縁部に条痕文を巡らせ，その下位に鋸歯状に条痕文を配して文様を構成する土器である。この口縁部に施される横位の条痕文を刺突文に置き換えるとⅧ類土器の 429・430（第 94 図）の文様構成となる。また，Ⅵ類土器の 341（第 84 図）は胴部に刺突文を横位に巡らせ区画し，その間を斜位の刺突文で充填し文様を構成する。この横位の刺突文を沈線に置き換えることでⅧ類土器の 442～448（第 95 図）の文様構成に極めて類似する。ただ，全ての文様構成が類似するわけではない。Ⅷ類土器の 437～439（第 94 図）のように，縦位の条痕文で胴部を区画し，その間に斜位の貝殻刺突文を施す文様構成は，Ⅵ類・Ⅶ類土器にはない。

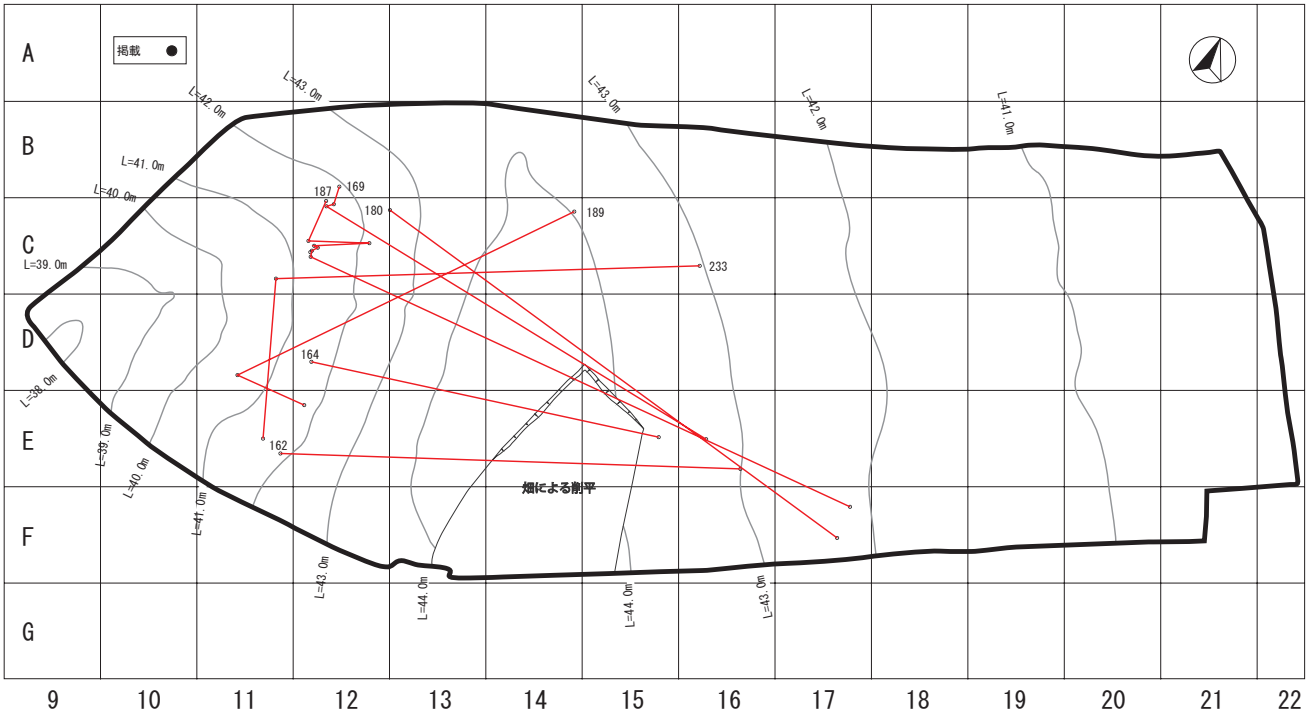
・その他

Ⅷ類土器には白色の砂粒を含むものが多い点は，Ⅵ類土器とⅦ類土器と共通する。

内面調整は，全般的に丁寧なナデ調整が行われ，なかには底部まで及ぶものもある。これは，Ⅵ類・Ⅶ類土器とも共通する。

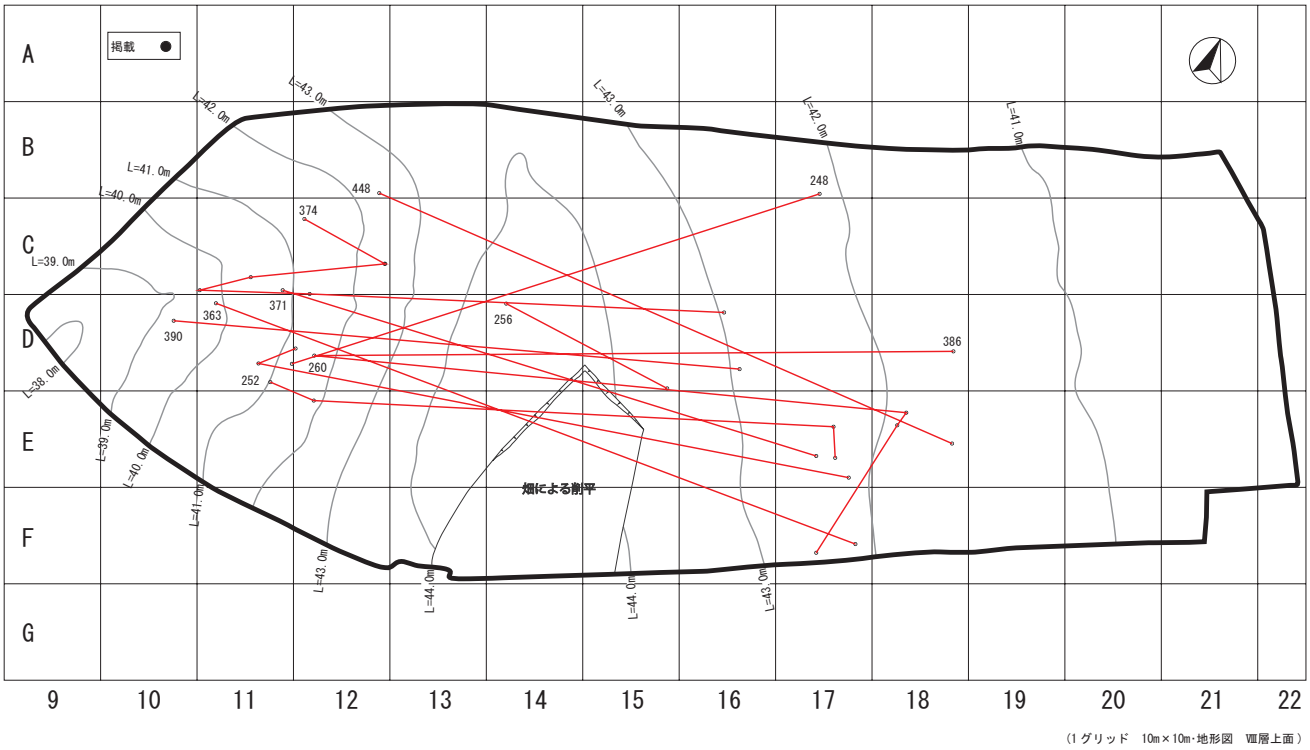
(3) 小結

Ⅷ類土器はⅥ類土器・Ⅶ類土器のもつ器形や文様等の特徴を備えていること，Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ類土器に円筒形以外の器形をもつものがあることから，Ⅷ類土器を介してⅥ類土器とⅦ類土器が近い関係にあると思われる。さらに，Ⅵ類土器とⅦ類土器の出土状況，それぞれの土器を使用した集団が同じか，非常に近い集団である可能性が指摘できることから，Ⅵ類土器とⅦ類土器の関係は，時

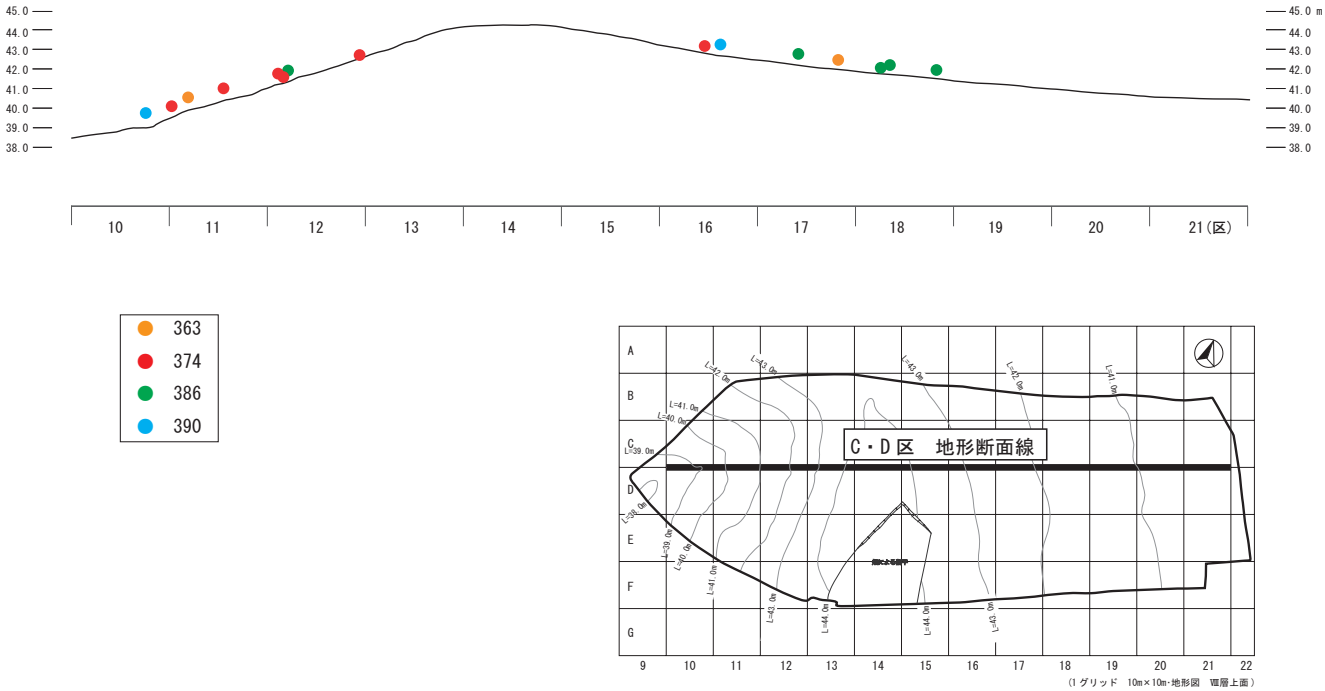


（1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

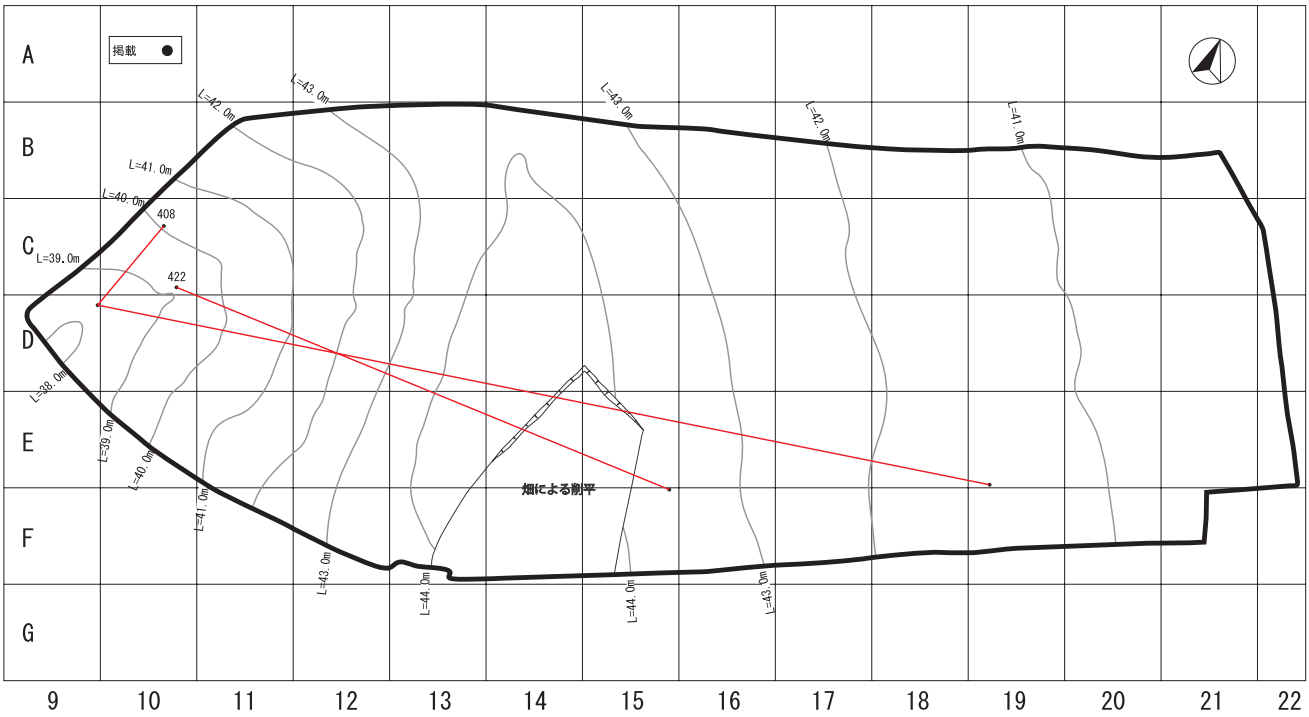
第 156 図　Ⅳ類土器接合状況図



第 157 図　Ⅵ類土器接合状況図

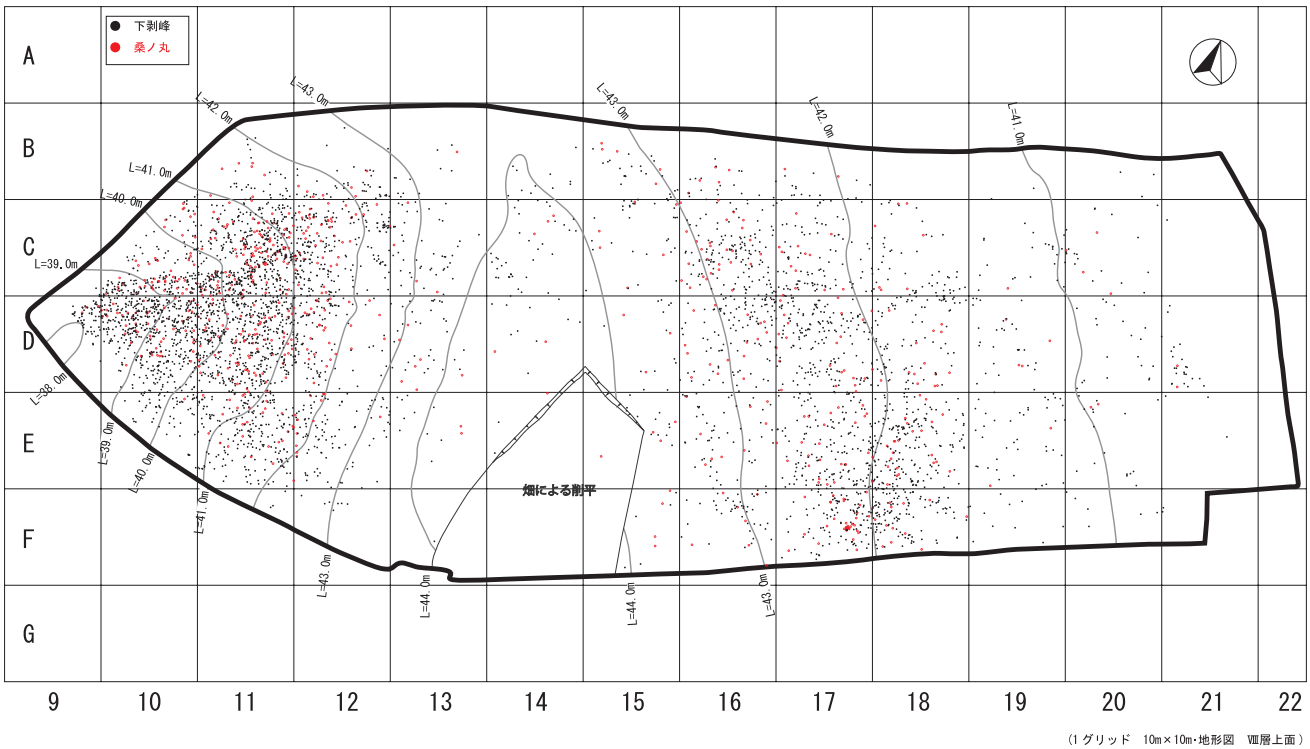


第 158 図　Ⅵ類土器接合状況図（断面）



（1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第 159 図　Ⅶ類土器接合状況図



（1 グリッド　10m×10m・地形図　Ⅷ層上面）

第 160 図　Ⅵ・Ⅶ類土器出土状況図

間的にも空間的にも非常に関係が深いと窺われる。Ⅷ類土器をⅥ類土器からⅦ類土器への変遷過程と捉えるより，さらに近い関係にあるⅥ類・Ⅶ類・Ⅷ類土器と思われる。

第３節　石器について

平良上Ｃ遺跡の縄文時代の石器は剥片石器，礫石器，磨石，敲石など多くの石器が出土した。これらは調査区内で製作・使用・廃棄されたものが多く，石材の素材は様々で総数は 1924 点であった。

剥片石器では石鏃や石核のほか，掻器・削器・楔形石器として利用されたものが出土した。素材は黒曜石・チャート･水晶が多く，珪質頁岩や玉髄などは少量であった。桑ノ木津留産黒曜石が最も多く分布し，C・D-14 区や C-16・17 区で製品とともに調整剥片が多く出土している。特に石鏃を製作する際のブランティングチップが多くみられ，それぞれに一定の集中域がみられることから，その場での製作行為が考えられる。次に針尾産黒曜石が多く B-16 区，C-17 区に集中して分布し，桑ノ木津留産黒曜石の分布と比較的類似している。このことから，これらの素材を積極的に利用していたと考えられる。また，日東産黒曜石と三船産黒曜石は F-16 区に分布しており，こちらも比較的近い場所に散布している。日東産黒曜石は，石鏃とともに調整剥片が確認できる。三船産・腰岳産・姫島産黒曜石は調整剥片がほとんどなく，石鏃や削器などの製品のみが出土する傾向であった。そのため，これらの石材は剥片や製品として持ち込まれた可能性が考えられる。石鏃は基部が浅く正三角形のものから，基部に抉りが施された二等辺三角形のもの等が出土した。石鏃の調整剥片は，打面部分に先行する剥離面を残すものや貝殻状の不定形な剥片が出土している。竪穴住居跡，連穴土坑，集石の空間とは異なるところで石器の調整剥片や製品のまとまりがみられた。そのことから，石器を製作する空間と居住空間が分けられていたとも想定できる。礫石器ではホルンフェルスを用いた打製石斧や部分磨製石斧の破損品，調整剥片が多く出土している。石斧のほとんどが扁平で，破損品では頭部と刃部（刃先部分）が多く残されている状況であった。その他，線刻礫が出土しているがその意図を理解できるような表現はみられなかった。

第４節　噴砂について

本遺跡では，鬼界カルデラの噴火時の地震による液状化現象で生じた噴砂がみられた。遺跡内で噴出口は確認されなかったが，アカホヤ火山灰層の間に，明瞭な砂層が堆積していたことから，噴砂が生じたことが推定される。

噴砂は標高の高い尾根部以外の全域でみられ，特に谷部では厚く，軽石の量も多くなっている。幸屋降下軽石が旧地形に沿って堆積しており，噴砂も同様に堆積している。そして噴砂が堆積した直後にアカホヤ火山灰に覆われたため，傾斜した状況で保存されたと推定される。

噴砂層のＶｂ層は，色調や軽石の特徴から３つに細分した。Ｖｂ－ａ層は主に谷部でみられ，厚さは約 10cm で，軽石を主体とし，軽石は最大径が 10cm大，多くは３cm大からなる。成尾英仁氏から，軽石の特徴から入戸火砕流堆積物本体もしくは二次堆積物に由来すると所見を得た。軽石主体となった理由については，液状化で噴出した水に浮遊した軽石が，最終的に沈降して砂層の上位に堆積したものと推定される。また，これと同時にアカホヤ火山灰が降下したため，アカホヤ火山灰と軽石とが混在する特異な堆積構造を形成したと考えられる。Ｖｂ－ｂ層は尾根部以外の全域でみられ，厚さは約 20cmで，１～２㎜大の白色軽石を微量含む砂質土である。Ｖｂ－ｃ層は尾根部の東側のみでみられ，厚さは約２cmで，最大径は２cm大，多くは２～３㎜大の橙色軽石を含む砂質土である。自然科学分析（テフラ分析）により，Ｖｂ－ｂ層及びＶｂ－ｃ層もシラスに由来するという結果を得ている（第Ⅴ章第３節参照）。

近年の東九州自動車道建設に伴う発掘調査によって，液状化現象（噴砂）が確認された事例が増加している。大崎町永吉の永吉天神段遺跡，大崎町仮宿の荒園遺跡などでは，いずれも縦横にのびる砂脈がみられた。本遺跡では噴砂の噴出口は確認されず，平面での堆積のみであった。これについて成尾氏は「本遺跡の地下に液状化発生層が存在しなかったためか，あっても液状化が起こらなかった，すなわち遺跡外で液状化が起こり，噴出した砂が遺跡内に流れこんできたと推定される。本遺跡は南西へ強く傾斜する地形であることが，液状化に影響した可能性がある。」とした。

－引用参考文献－

遠部　　慎　2009「円筒形貝殻文土器群の炭素 14 年代測定」『南九州縄文通信』

新東　晃一　2008「早期南九州貝殻文系土器」『縄文総覧』

八木澤一郎　2008「平栫式・塞ノ神式土器」『縄文総覧』

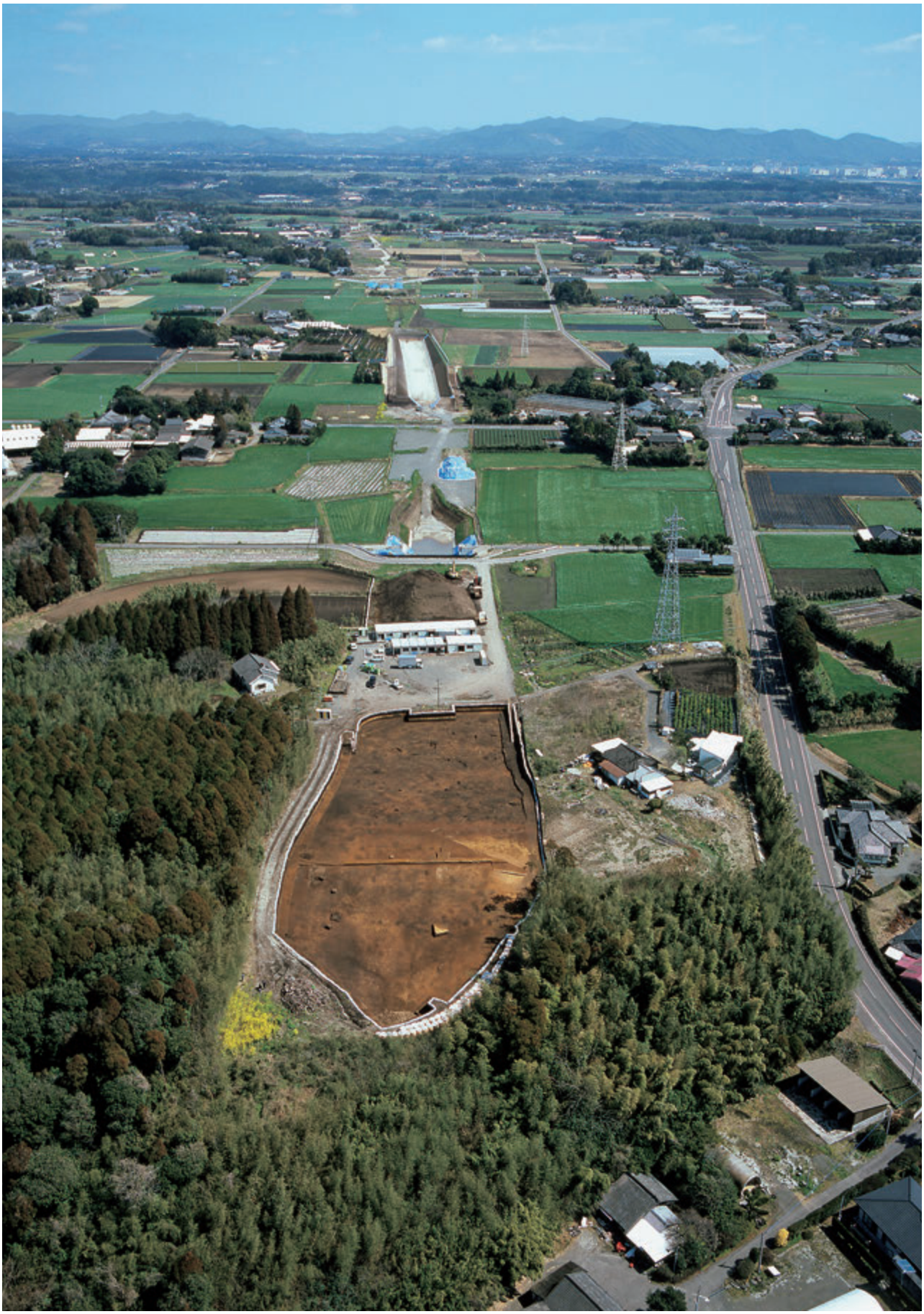
黒川　忠広　2002「南九州貝殻文系土器１」『南九州縄文研究会』

「永吉天神段遺跡　第１地点」2016　埋文調査センター発掘調査報告書（８）

「上野原遺跡（第 10 地点）」2001　県埋文センター発掘調査報告書（28）

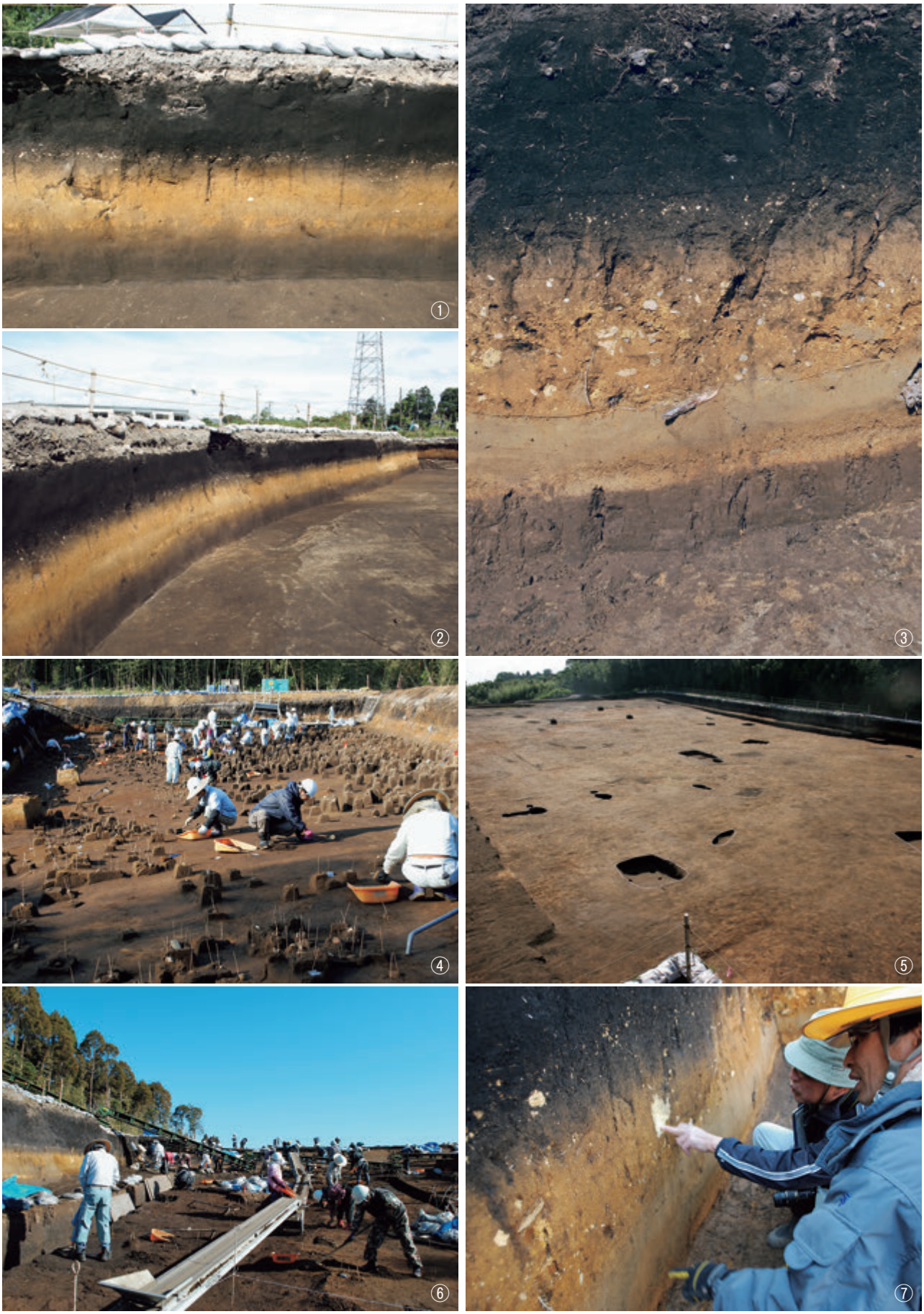
写真図版

図版 1

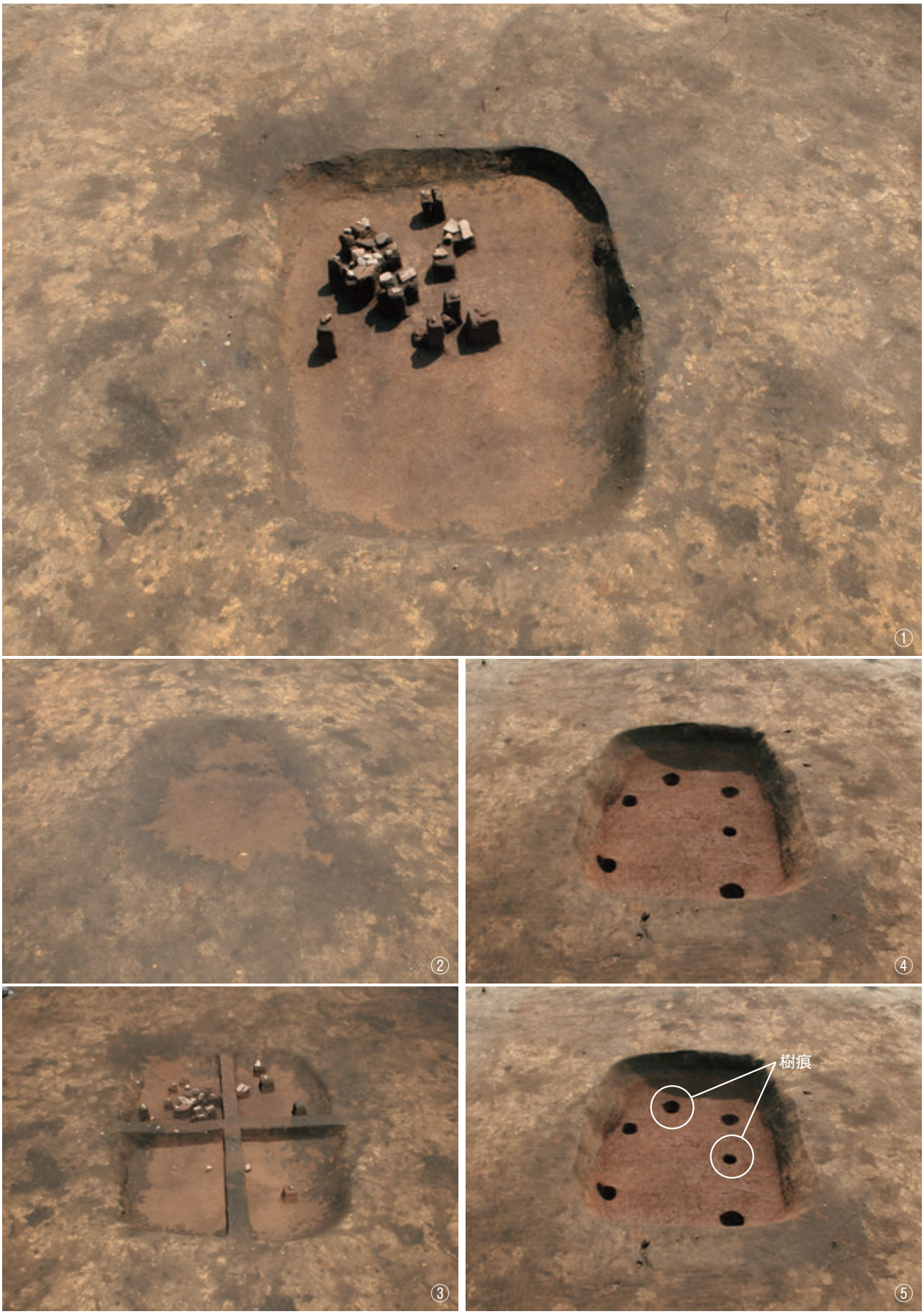


遺跡遠景（志布志方面を望む）

図版２



土層断面ほか
①～③土層断面　④遺物出土状況　⑤遺構検出状況　⑥作業風景　⑦現地指導



竪穴住居跡１号
①遺物出土状況　②検出状況　③埋土状況　④⑤完掘状況

図版４



竪穴住居跡２号
①検出状況　②埋土状況（全体）　③作業風景　④埋土状況　⑤完掘状況　⑥遺跡遠景



竪穴住居跡３号・４号
①検出状況　②埋土状況　③３号遺物出土状況　④４号遺物出土状況　⑤完掘状況

図版６



竪穴住居跡５号・６号
①５号検出状況　②５号埋土状況　③５号完掘状況　④６号検出状況　⑤６号埋土状況　⑥６号完掘状況



竪穴遺構１号・２号
①１号・２号検出状況　②１号検出状況　③１号埋土状況　④１号完掘状況
⑤２号検出状況　⑥⑦２号埋土状況　⑧２号完掘状況

図版８



連穴土坑１号
①検出状況　②埋土状況　③④完掘状況



連穴土坑２号・３号
①２号・３号検出状況　②２号・３号埋土状況　③２号・３号完掘状況
④１～３号（手前２号・３号，奥１号）

図版 10



土坑検出状況
①１号土坑埋土状況　②２号土坑検出状況　③④３号土坑埋土・完掘状況
⑤⑥８号土坑埋土・完掘状況　⑦⑧ 13 号土坑埋土・完掘状況











集石（1）
①②集石２号検出状況　③集石２号埋土状況　④集石２号完掘状況　⑤集石１号検出状況

図版 12



集石（2）
①集石３号　②集石４号　③集石５号　④集石６号　⑤⑥⑦集石９号検出・埋土状況　⑧集石 11 号



集石（3）
①②集石 14 号　③集石 15 号　④集石 16 号　⑤集石 17 号　⑥集石 18 号

図版 14



集石（4）

①集石 19 号　②集石 20 号　③集石 21 号　④集石 22 号　⑤集石 23 号　⑥集石 24 号　⑦集石 25 号　⑧集石 26 号



集石（5）

①集石 27 号　②集石 28 号　③集石 29 号　④集石 30 号　⑤集石 31 号　⑥集石 32 号　⑦集石 33 号　⑧集石 34 号

図版 16



遺構内出土遺物（1）









遺構内出土遺物（2）

図版 18







Ⅰ・Ⅱ類土器







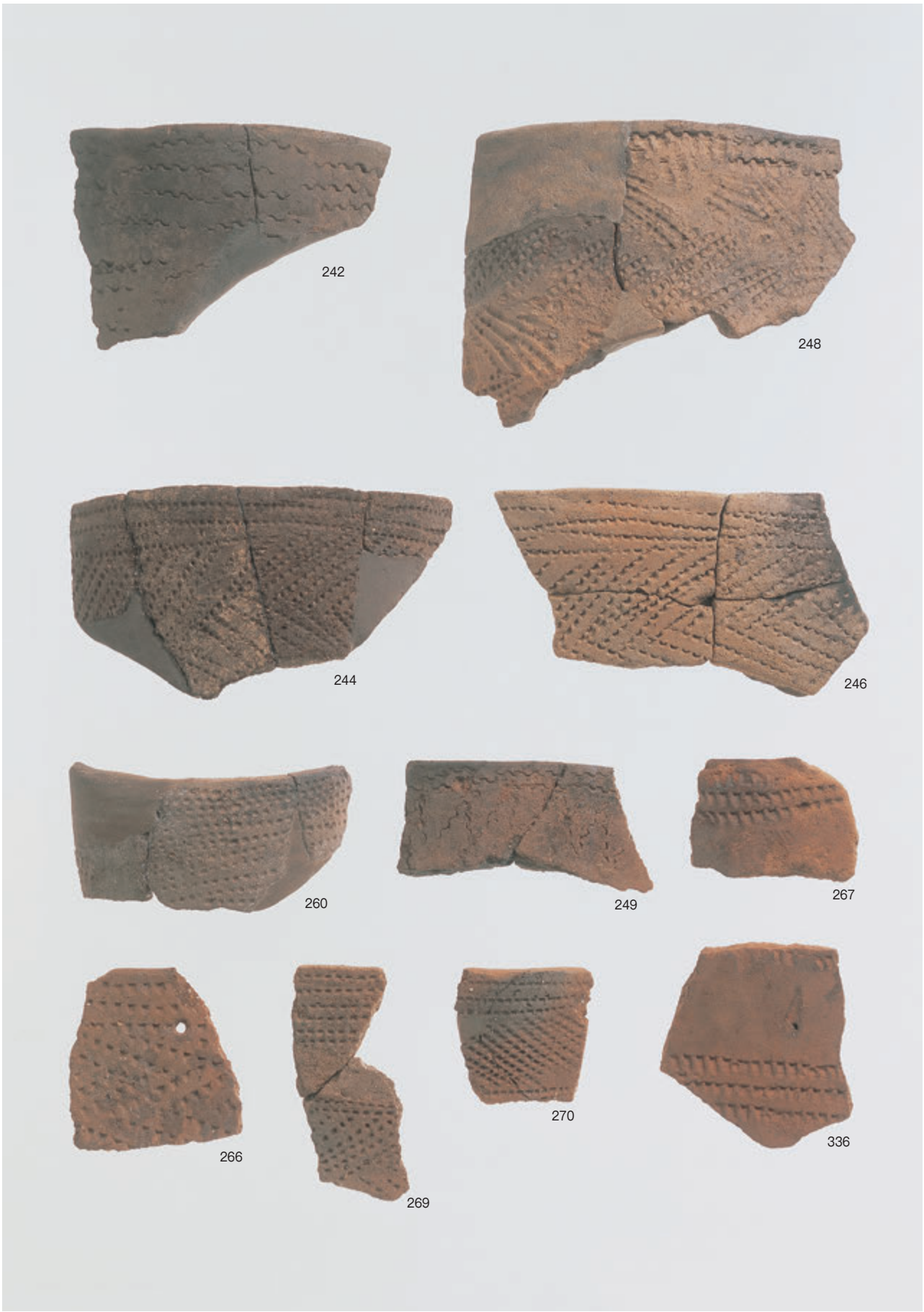


Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類土器

図版 20



Ⅳ類土器



Ⅵ類土器（１）

図版 22



Ⅵ類土器（２）


327


333


337


338

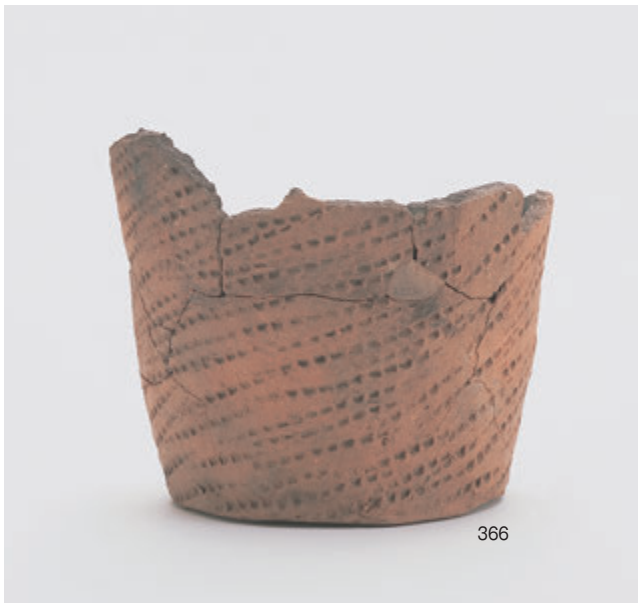

341


329

VI類土器（３）

図版 24


342


366


374


347


382


386

Ⅵ類土器（４）



Ⅵ類土器（５）

図版 26







Ⅶ類土器







Ⅷ・Ⅸ類土器

図版 28

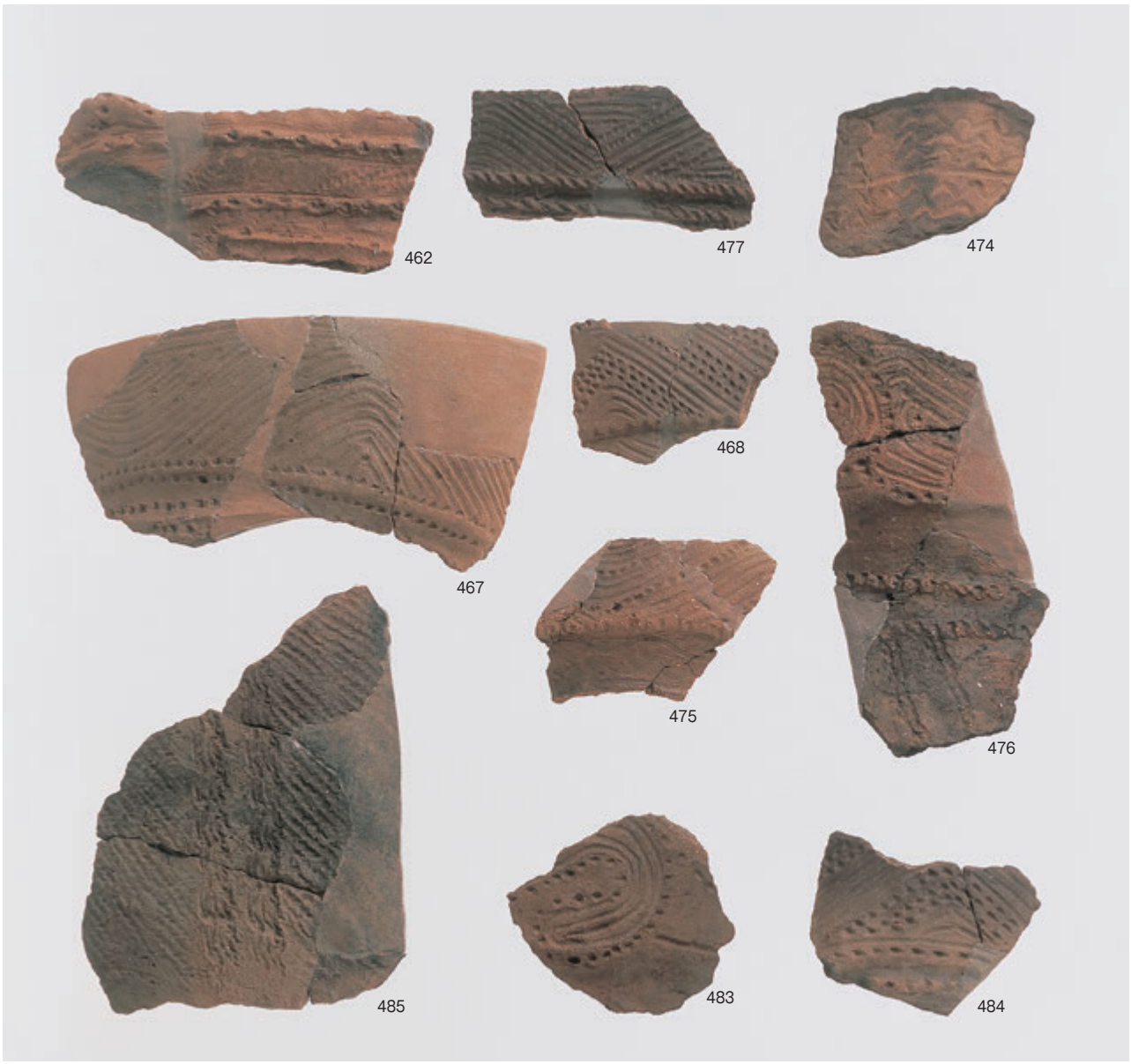

463


488


466


465

X類土器（1）







X類土器（2）

図版 30

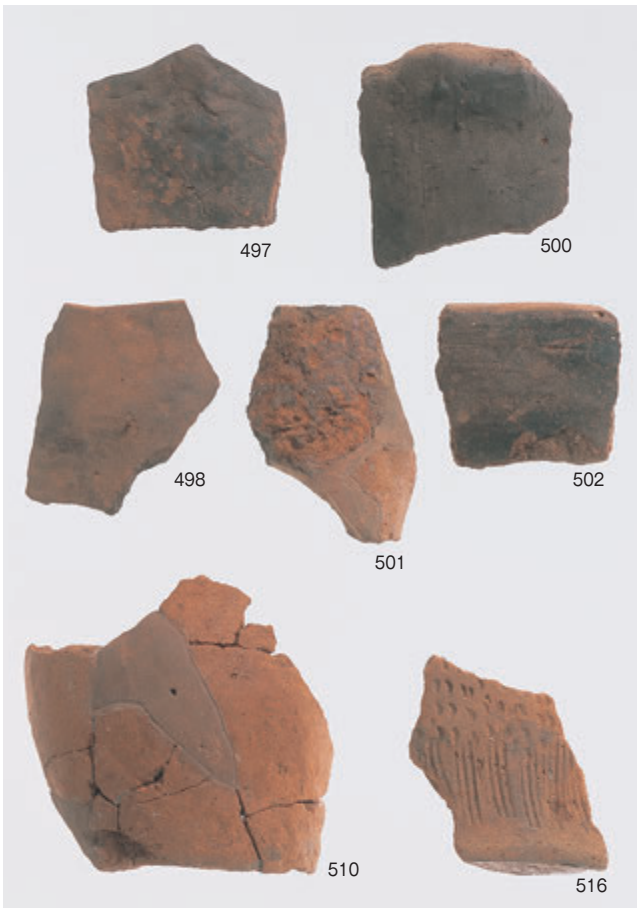


XI・XII類土器


506


507

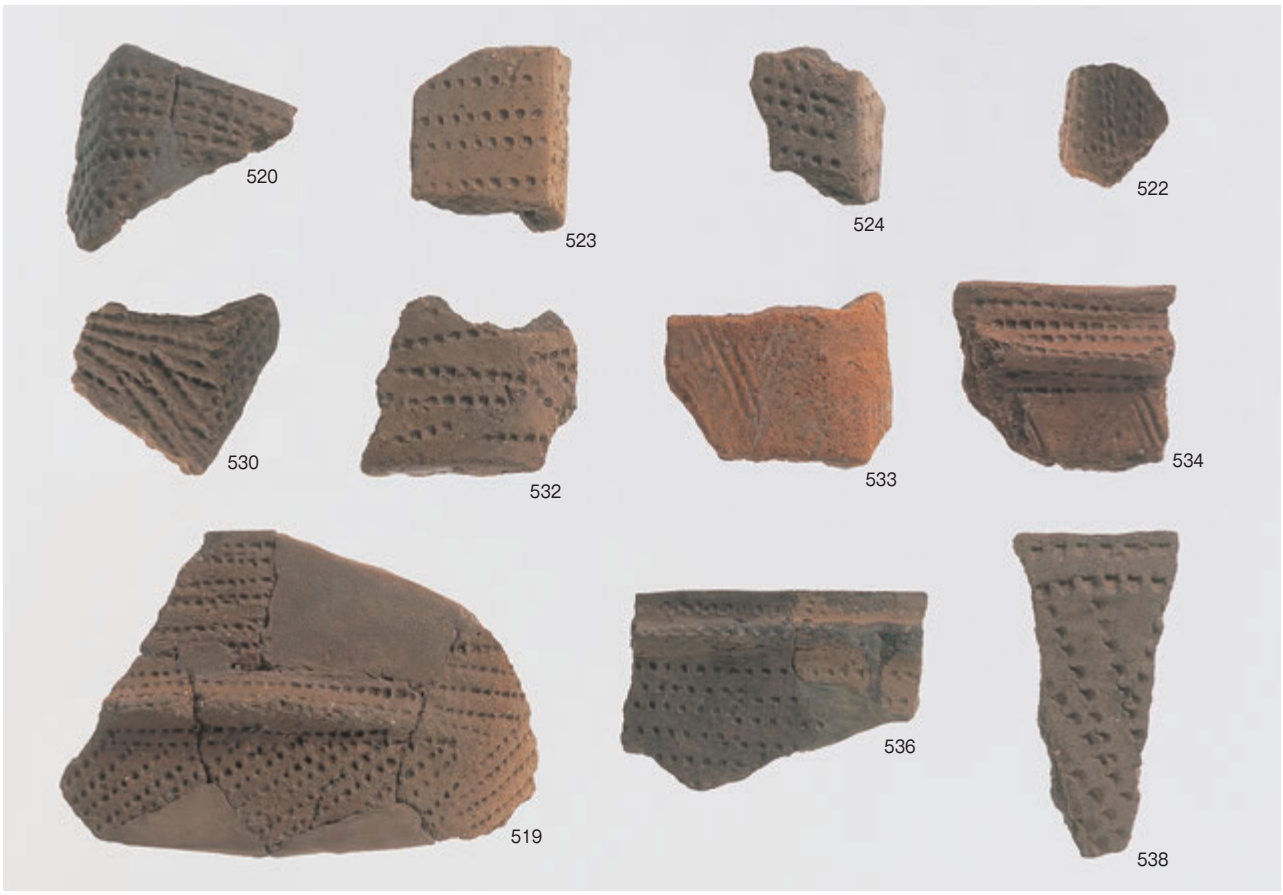

496


497
500
498
501
502
510
516

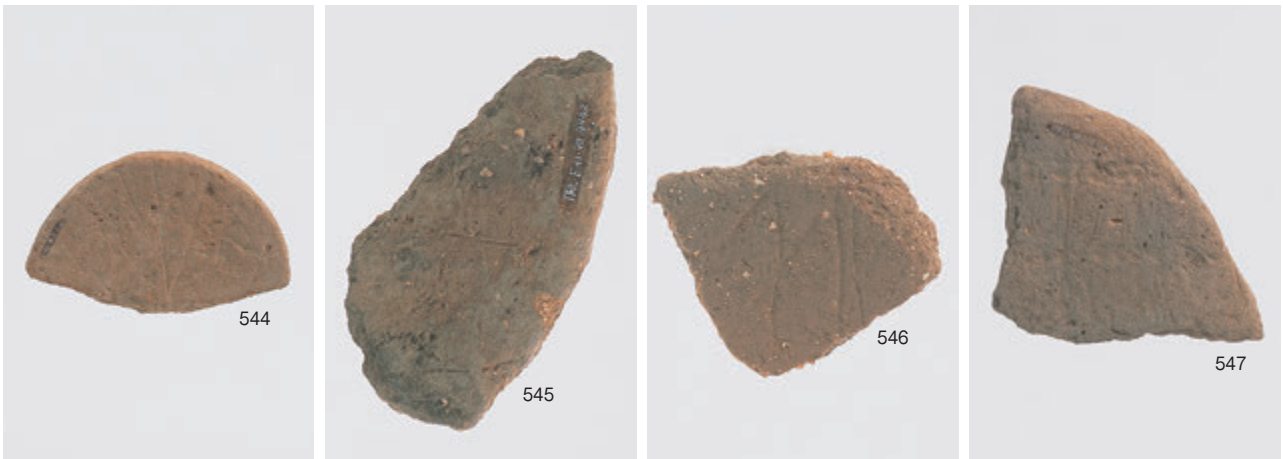

511

XIII・XIV類土器

図版 32


520
523
524
522
530
532
533
534
519
536
538


540
539
541


544
545
546
547

XV類土器


548
549
550
551
552
553
556
557
558
559
560
561
562
563
564
565
566
567
568
569
570
572
575
574
576
577
578
580
581
582
583
584
585
586
587
588
589

縄文時代の石器 1

図版 34

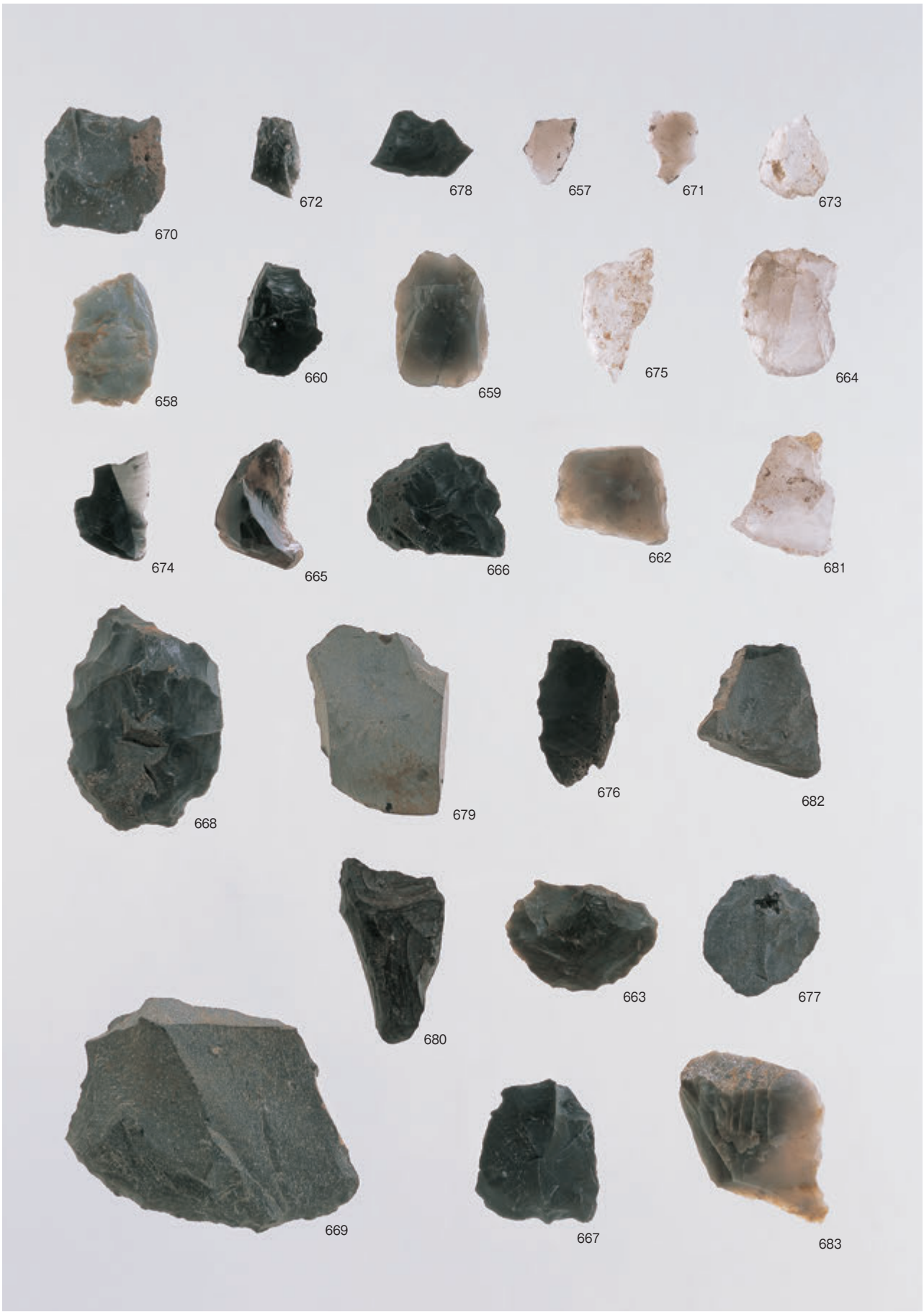


縄文時代の石器２


624
625
626
627
628
629
630
631
632
633
650
651
634
635
636
637
638
645
646
641
642
643
644
639
640
648
647
654
655
656

縄文時代の石器３

図版 36



縄文時代の石器 4





縄文時代の石器５

図版 38





縄文時代の石器６

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（11）
東九州自動車道建設（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平良上Ｃ遺跡

発　行　年　　２０１７年３月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576
印　　刷　　株式会社　トライ社
〒892-0834　鹿児島県鹿児島市南林寺町 12-6
TEL　099-226-0815　　FAX　099-225-7933